



鳥取県羽合町

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書

Ⅲ

寄贈

天神川流域下水道事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

(本文編)

1981

財団法人 鳥取県教育文化財団



本 文 編

	誤	正
P11 5行目	図版18・19	図版1・18・19
〃 14行目	図版9	図版1・19
P23 1行目	図版25・26	図版2・25・26
P25 1行目	図版26	図版2・26
P26 1行目	図版26・27	図版2・26・27
P62 1行目	図版40・41	図版8・40・41
P70 1行目	挿図106・107	挿図105~107
P79 7行目	長瀬Ⅰ	長瀬Ⅱ
P101 1行目	挿図168~170	挿図167~170
P133 挿図217		左の断面図の③と④を入れ替える
P133 1行目	図版19・66	図版17・66
P200 2行目	合口式円筒埴輪で、	合口式円筒埴輪棺で、
P271 1行目	SK01	SK02
P279 2行目	縄文土器片 (Po1) 出土している	縄文土器片 (Po1) と出土している
P282 挿図434		断面図②を1つ下の層位に下げる
P289 表3	野島案 (Ⅲ期) 野島案 (Ⅳ期)	野島案 (Ⅲ'期) 野島案 (Ⅳ'期)

序 文

昭和52年8月から開始された当財団の長瀬高浜遺跡発掘調査は、満五年を経過して新しい事実が次から次へとあらわれてきている。この10月にも全国的に珍しい小型銅鐸が出土し、県民はもとより全国の研究者の注目を浴びた。これらの事実はなるべく早く報告するのが望ましいにかかわらず、質・量の多さと発掘調査中という時間的制約のためにおくれていた。ようやくここに昭和54年度の発掘調査の結果をまとめ「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ」としておおくりできることになった。昭和54年度は、調査が工事によって追っかけられた年度であったが、同時に年間調査遺構数が最高の年度でもあり、長瀬高浜遺跡で初めて堅穴住居跡を掘り出した年度でもあった。様々な制約で、発掘調査で得た事項のみの報告になったが、これらが基礎資料として全国の研究者の方々のお役に立てれば、発掘調査を受託した鳥取県教育文化財団の望外の喜びである。

終りに、この調査を実施するにあたり、事業主体の鳥取県土木部下水道課をはじめとして、数多くの関係機関の多大な御協力・御指導をいただいたことに感謝の意を捧げるとともに、本書の製作にあたった中部埋蔵文化財調査事務所の皆さんの努力に敬意を払いたい。

昭和56年11月

財団法人鳥取県教育文化財団 常務理事 平木安市



例 言

本書は、天神川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の、昭和54年度調査地区の報告書である。

財団法人鳥取県教育文化財団が、県土木部下水道課の依頼を受けて発掘調査を実施したものである。発掘及び整理・報告書作成作業の実施にあたっては、鳥取県教育委員会文化課の指導と、各研究機関・大学等の考古・人類・自然科学等の専門家の助言・協力を得た。

本書の作成については、中部埋蔵文化財調査事務所で昭和56年度調査員が行い、下記の専門家の方々と昭和54年度調査関係者の方々の指導・助言を得た。記して感謝の意を表します。

調 査 指 導	鳥取県教育委員会文化課（課長・田中 幸治郎）
	県文化財保護審議会委員 山本 清・佐々木 謙・手嶋 義之
	京都大学 池田 次郎
	鳥取大学 豊島 吉則・赤木 三郎
	奈良国立文化財研究所 田中 琢・佐原 真・沢田 正昭
	町田 章
	東京国立博物館 本村 豪章
	同志社大学 森 浩一・石野 博信・堀田 啓一
	北九州市立歴史博物館 小田 富士雄・武末 純一
	県立博物館 山名 巖・清末 忠人・久保 穰二郎
	倉吉文化財協会 名越 勉・真田 広幸・森下 哲哉

本書に使用した方位は、すべて真北をさす。

長瀬高浜遺跡の報告書の刊行は次のとおりである。

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 I—北条バイパス調査地区	昭和55年 3 月刊行
〃	II—昭和53年度緊急調査地区 昭和56年 3 月刊行
〃	III—昭和54年度調査地区 昭和56年12月刊行
〃	IV—昭和55年度調査地区 昭和57年 3 月予定
〃	V—昭和53年・56年度調査地区 昭和57年 9 月予定
〃	VI—昭和57年度調査地区 昭和58年 3 月予定

目 次

序 文
例 言
目 次
挿図目次

第 I 章 長瀬高浜遺跡の調査経過	1
第 1 節 発掘調査までの経過	1
第 2 節 遺跡の発見	1
第 3 節 試掘調査（昭和52年次）	1
第 4 節 昭和53年度調査	2
第 5 節 昭和54年度調査	3
第 II 章 発掘調査の結果	11
第 1 節 竪穴住居跡	11
第 2 節 掘立柱建物跡	137
第 3 節 井戸跡	146
第 4 節 古墳・墳墓	167
第 5 節 中世墓	223
第 6 節 方形周溝状遺構	255
第 7 節 その他の遺構	258
第 III 章 長瀬高浜遺跡出土の土師器の編年	285
第 IV 章 ま と め	290
調査関係者名簿	291

挿 図 目 次

挿図	1	長瀬高浜遺跡と周 辺の遺跡 ……………4	挿図	18	S I 04遺物図その 1 ……………18
〃	2	長瀬高浜遺跡調査 位置図 ……………5	〃	19	S I 04遺物図その 2 ……………19
〃	3	長瀬高浜遺跡黒砂 分布図 ……………7	〃	20	S I 05遺物図その 1 ……………19
〃	4	長瀬高浜遺跡全体 遺構図 ……………9	〃	21	S I 05遺物図その 2 ……………20
〃	5	S I 01遺構図…………12	〃	22	S I 05遺物図その 3 ……………21
〃	6	S I 01遺物図その 1 ……………12	〃	23	S I 05遺物図その 4 ……………22
〃	7	S I 01遺物図その 2 ……………13	〃	24	S I 05遺構図…………22
〃	8	S I 01遺物図その 3 ……………13	〃	25	S I 06遺構図…………23
〃	9	S I 01遺物図その 4 ……………13	〃	26	S I 06遺物図その 1 ……………24
〃	10	S I 01遺物図その 5 ……………13	〃	27	S I 06遺物図その 2 ……………25
〃	11	S I 02遺構図…………13	〃	28	S I 07遺構図…………25
〃	12	S I 02遺物図その 1 ……………15	〃	29	S I 07遺物図…………26
〃	13	S I 02遺物図その 2 ……………16	〃	30	S I 08遺構図…………26
〃	14	S I 03遺構図…………16	〃	31	S I 08遺物図…………27
〃	15	S I 03遺物図その 1 ……………17	〃	32	S I 09遺構図…………27
〃	16	S I 03遺物図その 2 ……………17	〃	33	S I 09遺物図…………28
〃	17	S I 04遺構図…………18	〃	34	S I 10遺物図その 1 ……………28
			〃	35	S I 10遺物図その 2 ……………29
			〃	36	S I 10遺構図…………30
			〃	37	S I 11遺物図その 1 ……………30

挿図	38	S I 11遺物図その 2	31
〃	39	S I 11遺構図	32
〃	40	S I 12遺物図その 1	32
〃	41	S I 12遺物図その 2	33
〃	42	S I 12遺構図	34
〃	43	S I 13遺構図	35
〃	44	S I 13遺物図その 1	35
〃	45	S I 13遺物図その 2	35
〃	46	S I 14遺物図	36
〃	47	S I 14遺構図	36
〃	48	S I 15遺構図	37
〃	49	S I 16遺物図その 1	38
〃	50	S I 16遺物図その 2	38
〃	51	S I 16遺構図	38
〃	52	S I 17遺構・遺物図	39
〃	53	S I 18遺物図	40
〃	54	S I 18遺構図	40
〃	55	S I 19遺構図	41
〃	56	S I 19遺物図	41
〃	57	S I 20遺構図	42
〃	58	S I 20遺物図その 1	42
〃	59	S I 20遺物図その 2	43
〃	60	S I 21遺構図	43

挿図	61	S I 21遺物図その 1	44
〃	62	S I 21遺物図その 2	45
〃	63	S I 22遺構遺物図	45
〃	64	S I 23遺構図	46
〃	65	S I 23遺物図その 1	46
〃	66	S I 23遺物図その 2	47
〃	67	S I 24遺物図その 1	47
〃	68	S I 24遺物図その 2	47
〃	69	S I 24遺構図	48
〃	70	S I 25遺物図その 1	49
〃	71	S I 25遺物図その 2	50
〃	72	S I 25遺構図	50
〃	73	S I 25遺物図その 3	51
〃	74	S I 25遺物図その 4	51
〃	75	S I 26遺構図	52
〃	76	S I 27遺構図	53
〃	77	S I 27遺物図	53
〃	78	S I 28遺構図	54
〃	79	S I 28遺物図	54
〃	80	S I 29遺構図	55
〃	81	S I 29遺物図その 1	56

挿図	82	S I 29遺物図その 2 ……………56	挿図	101	S I 34遺物図その 4 ……………68
〃	83	S I 29遺物図その 3 ……………56	〃	102	S I 35遺物図その 1 ……………68
〃	84	S I 30遺構図……………57	〃	103	S I 35遺物図その 2 ……………69
〃	85	S I 30遺物図その 1 ……………57	〃	104	S I 35遺構図……………69
〃	86	S I 30遺物図その 2 ……………58	〃	105	S I 36遺構図……………70
〃	87	S I 31遺物図……………58	〃	106	S I 36遺物図その 1 ……………70
〃	88	S I 31遺構図……………59	〃	107	S I 36遺物図その 2 ……………71
〃	89	S I 32遺物図その 1 ……………60	〃	108	S I 37遺構図……………71
〃	90	S I 32遺物図その 2 ……………61	〃	109	S I 37遺物図その 1 ……………71
〃	91	S I 32遺物図その 3 ……………61	〃	110	S I 37遺物図その 2 ……………72
〃	92	S I 32遺構図……………62	〃	111	S I 38遺物図……………72
〃	93	S I 33遺構図……………63	〃	112	S I 38遺構図……………73
〃	94	S I 33遺物図その 1 ……………63	〃	113	S I 39遺構図……………74
〃	95	S I 33遺物図その 2 ……………64	〃	114	S I 39遺物図その 1 ……………74
〃	96	S I 33遺物図その 3 ……………65	〃	115	S I 39遺物図その 2 ……………75
〃	97	S I 34遺物図その 1 ……………65	〃	116	S I 40遺構図……………75
〃	98	S I 34遺構図……………66	〃	117	S I 40遺物図……………76
〃	99	S I 34遺物図その 2 ……………66	〃	118	S I 41遺構図……………77
〃	100	S I 34遺物図その 3 ……………67	〃	119	S I 41遺物図その 1 ……………77
			〃	120	S I 41遺物図その 2 ……………78
			〃	121	S I 41遺物図その 3 ……………78

挿図	122	S I 42遺構図……………79
〃	123	S I 42遺物図その 1……………79
〃	124	S I 42遺物図その 2……………80
〃	125	S I 42遺物図その 3……………80
〃	126	S I 42遺物図その 4……………80
〃	127	S I 43遺構図……………81
〃	128	S I 43遺物図その 1……………82
〃	129	S I 43遺物図その 2……………83
〃	130	S I 43遺物図その 3……………83
〃	131	S I 44遺構図……………83
〃	132	S I 44遺物図……………84
〃	133	S I 45遺構図……………84
〃	134	S I 45遺物図その 1……………85
〃	135	S I 45遺物図その 2……………85
〃	136	S I 46遺物図その 1……………85
〃	137	S I 46遺物図その 2……………85
〃	138	S I 46遺物図その 3……………86
〃	139	S I 46遺構図……………86
〃	140	S I 47遺物図その 1……………87

挿図	141	S I 47遺物図その 2……………88
〃	142	S I 47遺構図……………88
〃	143	S I 48遺構図……………89
〃	144	S I 48遺物図その 1……………89
〃	145	S I 48遺物図その 2……………90
〃	146	S I 49遺構図……………91
〃	147	S I 49遺物図その 1……………91
〃	148	S I 49遺物図その 2……………91
〃	149	S I 50遺構・遺物 図……………92
〃	150	S I 51遺物図その 1……………92
〃	151	S I 51遺物図その 2……………93
〃	152	S I 51遺構図……………93
〃	153	S I 52遺構・遺物 図……………94
〃	154	S I 53遺構図……………95
〃	155	S I 54遺物図その 1……………95
〃	156	S I 54遺構図……………96
〃	157	S I 54遺物図その 2……………96
〃	158	S I 54遺物図その 3……………97
〃	159	S I 54遺物図その 4……………97
〃	160	S I 55遺物図……………97

挿図	161	S I 55遺構図……………98
〃	162	S I 56遺物図その 1……………98
〃	163	S I 56遺構図……………99
〃	164	S I 56遺物図その 2……………99
〃	165	S I 57遺構図……………100
〃	166	S I 57遺物図……………101
〃	167	S I 58遺物図その 1……………101
〃	168	S I 58遺構図……………102
〃	169	S I 58遺物図その 2……………102
〃	170	S I 58遺物図その 3……………103
〃	171	S I 59遺構図……………103
〃	172	S I 59遺物図……………104
〃	173	S I 60遺構図……………105
〃	174	S I 60遺物図……………105
〃	175	S I 61遺構図……………106
〃	176	S I 61遺物図その 1……………106
〃	177	S I 61遺物図その 2……………107
〃	178	S I 61遺物図その 3……………107
〃	179	S I 62遺構図……………107
〃	180	S I 62遺物図……………108
〃	181	S I 63遺構図……………108
〃	182	S I 63遺物図……………109
〃	183	S I 64遺構図……………110
〃	184	S I 64遺物図……………110
〃	185	S I 65・67遺構図……………111

挿図	186	S I 65・67遺物図 その1……………111
〃	187	S I 65・67遺物図 その2……………112
〃	188	S I 66遺構図……………112
〃	189	S I 66遺物図……………113
〃	190	S I 68遺構図……………114
〃	191	S I 68遺物図……………114
〃	192	S I 69遺構図……………115
〃	193	S I 69遺物図その 1……………115
〃	194	S I 69遺物図その 2……………116
〃	195	S I 69遺物図その 3……………117
〃	196	S I 69遺物図その 4……………118
〃	197	S I 69遺物図その 5……………119
〃	198	S I 69遺物図その 6……………120
〃	199	S I 69遺物図その 7……………121
〃	200	S I 69遺物図その 8……………122
〃	201	S I 69遺物図その 9……………123
〃	202	S I 69遺物図その 10……………124
〃	203	S I 69遺物図その 11……………125
〃	204	S I 69遺物図その 12……………125

挿図	205	S I 70遺構図 ……126
〃	206	S I 70遺物図その 1 ……126
〃	207	S I 70遺物図その 2 ……127
〃	208	S I 70遺物図その 3 ……127
〃	209	S I 71遺構図 ……127
〃	210	S I 71遺物図その 1 ……128
〃	211	S I 71遺物図その 2 ……129
〃	212	S I 71遺物図その 3 ……130
〃	213	S I 72遺構図 ……131
〃	214	S I 72遺物図その 1 ……131
〃	215	S I 72遺物図その 2 ……132
〃	216	S I 73遺物図その 1 ……132
〃	217	S I 73遺構図 ……133
〃	218	S I 73遺物図その 2 ……133
〃	219	S I 74遺構図 ……134
〃	220	S I 74遺物図その 1 ……134
〃	221	S I 74遺物図その 2 ……135
〃	222	S I 74遺物図その 3 ……135
〃	223	S I 75遺構図 ……135

挿図	224	S I 75遺物図その 1 ……136
〃	225	S I 75遺物図その 2 ……136
〃	226	竪穴住居及び付近 出土の金属製品 ……136
〃	227	S I 63直上出土の 鏡 ……136
〃	228	S B 01遺構図 ……137
〃	229	S B 02遺構図 ……138
〃	230	S B 03遺構図 ……139
〃	231	S B 04遺構図 ……139
〃	232	S B 04遺物図 ……139
〃	233	S B 05遺構図 ……139
〃	234	S B 06遺構図 ……142
〃	235	S B 06・S B 07遺 物図 ……142
〃	236	S B 07遺構図 ……142
〃	237	S B 08遺物図その 1 ……143
〃	238	S B 08遺物図その 2 ……143
〃	239	S B 09遺物図 ……143
〃	240	S B 08遺構図 ……144
〃	241	S B 09遺構図 ……144
〃	242	S B 10遺構図 ……145
〃	243	S E 01遺構図 ……146
〃	244	S E 01遺物図 ……147
〃	245	14G S D 01・S D 02遺物図 ……148
〃	246	S E 02遺物図 ……149
〃	247	S E 02遺構図 ……149

挿図	248	S E 03遺物図その 1 ……………151	挿図	266	S X 03遺構図 ……………169
〃	249	S E 03遺構図 ……………151	〃	267	S X 03土器出土状 況図その1 ……………169
〃	250	S E 03遺物図その 2 ……………153	〃	268	S X 03土器出土状 況図その2 ……………169
〃	251	S E 03遺物図その 3 ……………154	〃	269	S X 03土器出土状 況図その3 ……………169
〃	252	S E 03遺物図その 4 ……………155	〃	270	S X 03土器出土状 況図その4 ……………169
〃	253	S E 03遺物図その 5 ……………156	〃	271	S X 03第1埋葬施 設遺構図 ……………171
〃	254	S E 03遺物図その 6 ……………157	〃	272	S X 03第2埋葬施 設遺構図 ……………172
〃	255	S E 03遺物図その 7 ……………158	〃	273	S X 03第3埋葬施 設遺構図 ……………173
〃	256	S E 03遺物図その 8 ……………159	〃	274	S X 03第4埋葬施 設遺構図 ……………174
〃	257	S E 03遺物図その 9 ……………160	〃	275	S X 03第5埋葬施 設遺構図 ……………174
〃	258	S E 03遺物図その 10 ……………161	〃	276	S X 03第6埋葬施 設遺構図 ……………175
〃	259	S E 03遺物図その 11 ……………162	〃	277	S X 03遺物図その 2 ……………176
〃	260	S E 03遺物図その 12 ……………163	〃	278	S X 03遺物図その 3 ……………177
〃	261	13G S D 01遺物図 その1 ……………163	〃	279	S X 03遺物図その 4 ……………178
〃	262	13G S D 01遺物図 その2 ……………164	〃	280	S X 04遺構図 ……………180
〃	263	S E 04遺構図 ……………165	〃	281	S X 04第1埋葬施 設遺構図 ……………181
〃	264	S E 04遺物図 ……………166	〃	282	S X 04第2埋葬施 設遺構図 ……………181
〃	265	S X 03遺物図その 1 ……………168			

挿図	283	S X 04第 3 埋葬施 設遺構図 ……………181	挿図	300	S X 10遺構図 ……………190
〃	284	S X 04第 1 埋葬施 設遺物図その 1 ……183	〃	301	S X 10土器出土状 況図 ……………190
〃	285	S X 04第 1 埋葬施 設遺物図その 2 ……183	〃	302	S X 10第 1 埋葬施 設遺構図 ……………191
〃	286	S X 04第 3 埋葬施 設遺物図 ……………183	〃	303	S X 10鉄器出土状 況図 ……………191
〃	287	S X 04第 4 埋葬施 設遺構図 ……………184	〃	304	S X 10遺物図その 1 ……………191
〃	288	S X 04第 4 埋葬施 設遺物図 ……………184	〃	305	S X 10遺物図その 2 ……………192
〃	289	S X 04第 5 埋葬施 設遺物図 ……………184	〃	306	S X 10遺物図その 3 ……………193
〃	290	S X 04遺物図その 1 ……………184	〃	307	S X 10第 2 埋葬施 設遺構図 ……………194
〃	291	S X 04第 5 埋葬施 設遺構図 ……………185	〃	308	S X 10第 3 埋葬施 設遺構図 ……………194
〃	292	S X 04遺物図その 2 ……………185	〃	309	S X 10第 2 埋葬施 設遺物図その 1 ……195
〃	293	S X 04遺物図その 3 ……………186	〃	310	S X 10第 2 埋葬施 設遺物図その 2 ……196
〃	294	S X 09遺構図 ……………187	〃	311	S X 10第 3 埋葬施 設遺物図 ……………197
〃	295	S X 09土器出土状 況図 ……………187	〃	312	S X 22遺構図 ……………198
〃	296	S X 09第 1 埋葬施 設遺物図 ……………187	〃	313	S X 22遺物図 ……………198
〃	297	S X 09遺物図その 1 ……………187	〃	314	S X 22第 1 埋葬施 設遺構図 ……………198
〃	298	S X 09第 1 埋葬施 設遺構図 ……………188	〃	315	S X 25遺構図 ……………200
〃	299	S X 09遺物図その 2 ……………188	〃	316	S X 25土器出土状 況図 ……………200
			〃	317	S X 25第 1 埋葬施 設遺構図 ……………201
			〃	318	S X 25遺物図 ……………201

挿図	319	S X 25第 2 埋葬施 設遺物図 ……………201
〃	320	S X 25第 2 埋葬施 設遺構図 ……………202
〃	321	S X 25第 3 埋葬施 設遺構図 ……………203
〃	322	S X 25第 3 埋葬施 設遺物図 ……………203
〃	323	S X 15遺構図 ……………204
〃	324	S X 16遺構図 ……………205
〃	325	S X 16遺物図 ……………205
〃	326	S X 18遺構図 ……………206
〃	327	S X 19遺構図 ……………207
〃	328	S X 20遺構図 ……………208
〃	329	S X 21遺構図 ……………209
〃	330	S X 23遺構図 ……………210
〃	331	S X 13遺構図 ……………211
〃	332	S X 14遺構図 ……………212
〃	333	S X 14遺物図 ……………212
〃	334	S X 17遺構図 ……………213
〃	335	S X A 01遺構図 ……214
〃	336	S X A 02遺構図 ……215
〃	337	S X A 03遺構図 ……216
〃	338	S X A 03遺物図 ……216
〃	339	S X A 04遺構図 ……217
〃	340	S X A 05遺構図 ……217
〃	341	S X A 06遺構図 ……218
〃	342	S X A 07遺構図 ……219
〃	343	S X A 07遺物図 ……219
〃	344	S X A 08遺構図 ……220
〃	345	S X A 08遺物図 ……220
〃	346	S X A 09遺構図 ……221
〃	347	S X A 09遺物図 ……221

挿図	348	中世墓遺構図 ……………223
〃	349	S F 51遺構図 ……………224
〃	350	S F 52遺構図 ……………225
〃	351	S F 53遺構図 ……………225
〃	352	S F 54遺構図 ……………226
〃	353	S F 55遺構図 ……………227
〃	354	S F 56遺構図 ……………228
〃	355	S F 57遺構図 ……………228
〃	356	S F 58遺構図 ……………229
〃	357	S F 59遺構図 ……………230
〃	358	S F 60遺構図 ……………231
〃	359	S F 61遺構図 ……………231
〃	360	S F 62遺構図 ……………232
〃	361	S F 63遺構図 ……………233
〃	362	S F 64遺構・遺物 図 ……………233
〃	363	S F 65遺構図 ……………234
〃	364	S F 66遺構図 ……………235
〃	365	S F 67・S F 68遺 構図 ……………236
〃	366	S F 69遺構図 ……………237
〃	367	S F 70遺構図 ……………238
〃	368	S X'01遺構図 ……………239
〃	369	S X'02遺構・遺物 図 ……………240
〃	370	S X'03遺構図 ……………241
〃	371	S X'04遺構図 ……………242
〃	372	S X'05遺構図 ……………243
〃	373	S X'06遺構図 ……………243
〃	374	S X'07遺構図 ……………244
〃	375	S X'08遺構図 ……………245
〃	376	S X'09遺構図 ……………246

挿図	377	S X'09じゅず玉出 土状況拡大図 ……247	挿図	399	13H S K05遺構・ 遺物図その2 ……263
〃	378	S X'09遺物図 ……247	〃	400	13H P 85遺構・遺 物図 ……263
〃	379	S X'10遺構図 ……248	〃	401	13 I S K03遺構・ 遺物図 ……264
〃	380	S X'10遺物図その 1 ……248	〃	402	13D S K01遺構図 ……264
〃	381	S X'10遺物図その 2 ……249	〃	403	13D S K01遺物図 ……265
〃	382	S X'10遺物図その 3 ……249	〃	404	13D S K06・P10 遺構・遺物図 ……266
〃	383	S X'10遺物図その 4 ……249	〃	405	13E S K02遺構図 ……266
〃	384	S X'11遺構・遺物 図 ……250	〃	406	12 I ・13 I S D 02遺物図その1 ……267
〃	385	S X'12遺構図 ……253	〃	407	12 I ・13 I S D 02遺物図その2 ……267
〃	386	S X'12遺物図 ……251	〃	408	12 I ・13 I S D 02遺構図 ……267
〃	387	S X'13遺構図 ……254	〃	409	12 I ・13 I S D 02遺物図その3 ……267
〃	388	S Z 01遺構図 ……255	〃	410	13E S K02遺物図 ……269
〃	389	S Z 01・02遺物図 ……256	〃	411	12 I ・13 I S D 02遺物図その4 ……269
〃	390	S Z 02遺構図 ……257	〃	412	12 I S K01遺構図 ……270
〃	391	15 I S P01遺物図 その1 ……258	〃	413	12 I S K01遺物図 ……270
〃	392	15 I S P01遺構図 ……259	〃	414	12 I S K02遺物図 ……270
〃	393	15 I S P01遺物図 その2 ……259	〃	415	12 I S K02遺構図 ……271
〃	394	15 I S P01遺物図 その3 ……260	〃	416	12 F 弥生甕遺物図 ……271
〃	395	14 J 地区出土の壺 遺物図 ……261	〃	417	12 B S D03遺構図 ……272
〃	396	14H S K01遺構図 ……262	〃	418	南斜面遺物図その 1 ……272
〃	397	14H S K01遺物図 ……262	〃	419	南斜面遺物図その 2 ……273
〃	398	13H S K05遺物図 その1 ……263			

挿図	420	南斜面遺物図その 3 ……………273			その2 ……………280
〃	421	南斜面遺物図その 4 ……………274	挿図	431	11F P 23遺構図 ……280
〃	422	南斜面遺構図 ……275	〃	432	11E P 79遺構図 ……281
〃	423	南斜面遺物図その 5 ……………277	〃	433	11F P 23・11E P 79遺物図 ……………281
〃	424	南斜面遺物図その 6 ……………278	〃	434	11C P 17遺構図 ……282
〃	425	12B S D 01遺物図 ……278	〃	435	11C P 17遺物図 ……282
〃	426	11 I 出土須恵器遺 物図 ……………278	〃	436	五輪塔石その1 ……283
〃	427	11 I 出土須恵器遺 構図 ……………279	〃	437	五輪塔石その2 ……284
〃	428	11F S K 01遺物図 その1 ……………279	表	1	五輪塔石計測表 ……284
〃	429	11F S K 01遺構図 ……280	表	2	長瀬高浜遺跡出土 古式土師器編年表 ……287
〃	430	11F S K 01遺物図	表	3	鳥取県古式土師器 編年案表 ……………289
			表	4	長瀬高浜遺跡出土 古式土師器編年表 使用土器出土遺構 名 ……………289

第 I 章 長瀬高浜遺跡の調査経過

第 1 節 発掘調査までの経過

昭和47年	天神川流域別下水道整備総合計画策定。
48年	天神川流域下水道整備総合計画申請。
49年	都市計画地方審議会諮問。
49年	計画決定告示。
49年	事業認可。
49年 5 月	長瀬高浜遺跡（長瀬遺跡）の発見。
49年 7 月	天神川流域下水道関係部課長会議。
50年	用地買収。
52年 6 月	県土木部下水道課と県教委文化課埋蔵文化財についての協議。
52年 7 月	県教委，下水道課長へ開発事業計画と文化財保護について通知。
52年 8 月	県知事埋蔵文化財発掘について通知（法第57条の3）。
52年 8 月	教育文化財団理事長，埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
53年 5 月	教育文化財団理事長，埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
53年 8 月	日本下水道事業団へ工事発注。

第 2 節 遺跡の発見

昭和49年 5 月 7 日県教育委員会文化課が一般国道 9 号線改築工事（北条バイパス）建設計画に伴い，現地踏査を実施したところ北条砂丘の東端部，鳥取県東伯郡羽合町長瀬字高浜・浜根荒神他，通称「高浜」一帯の砂丘畑地に弥生土器，土師器等が濃密に散布していたのでこの遺跡発見のきっかけとなった。踏査時，北条バイパス建設予定地の南に接して天神川流域下水道処理場建設計画のあることを知り，その一帯にも広く遺跡散布地が及ぶことがわかった。

第 3 節 試掘調査（昭和52年次）

遺跡発見以降，再三にわたり県教育委員会文化課と県土木部下水道課の協議が始まった。その結果，昭和52年 8 月から遺跡の性格の追及とその範囲を把握し，工事との調整を図るため，遺跡散布地を試掘することにより砂丘遺跡の確認調査を実施することになった。

調査は，財団法人鳥取県教育文化財団（理事長知事）が行ない，経費は県土木部の委託費によった。調査対象地は，施設用地10haのうち第 1 期工事予定地で工事により埋蔵文化財に直接影響を及ぼすと考えられる約 5 haとした。調査方法は，グリッド方法により，

5 m × 5 m ・ 5 m × 10 m ・ 10 m × 10 m とし計32か所約3,000m²の試掘を行なった。その結果、この砂丘遺跡でも遺物包含層は砂丘活動の停滞期によって形成された黒砂層（黒褐色腐植砂層）と密接な関連があることをつきとめた。黒砂層は、浅いところで現地表面から10数cm、深いところは数mのところであり、少量の黒砂面でも必ず土器片を含んでいた。砂丘地

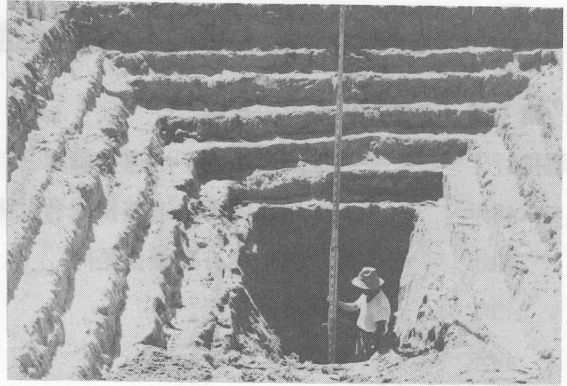


写真1 試掘調査

であるため、試掘表面は100m²でも7mも掘り下げれば底面積は1m²程度となってしまった。試掘には、検土杖・ハンドオーガボーリングも使用した。地下深く掘り下げた場合には重機（ユンボ）の併用も行った。

試掘（約3,000m²）及び一部拡幅調査（約1,500m²）の調査を行った。その結果、砂丘下に円墳1基、箱式石棺6基、中世火葬墓25基を検出した。また、出土遺物は、多量の弥生土器・土師器で、壺・甕・高杯が主であったが、石斧・石鏃・砥石・土錘・紡錘車などの生活用具も含まれ、遺跡との関連を暗示した。

（昭和52年度試掘調査費委託料 11,830,000円）

第4節 昭和53年度調査

試掘調査結果に基づき関係部局と協議の結果、下水処理場建設計画、施設配置計画の変更は不可能という結論のため、調査員を増強して全面発掘調査を教育文化財団が実施することとなった。そして、調査は次の4点を主に行うこととした。

(1) 黒砂分布範囲を明確にし、上層の灰白色砂を除去すること

調査の一環として事業課に50,000m²の砂除去を依頼し、そのあと起伏する黒砂面を露出するため、灰白色砂の排除を始めた。その結果18,000m²の黒砂面を検出した。大きく起伏する黒砂面をよく観察すると、わずかな起伏に気づきこれも古墳と考えるに至り、11基の追加となった。黒砂面は、今後増々拡大して行くものと推定される。

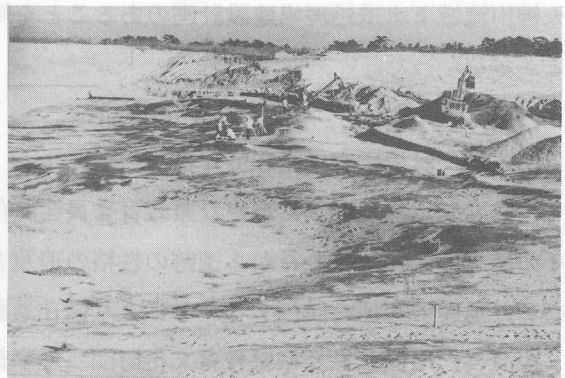


写真2 黒砂層検出中

(2) 1号墳とその周辺の発掘調査

砂丘に埋り姿を見ることができなかった1号墳が、径33m・高さ2mの円墳として確認された。まず、1号墳墳丘の全貌を出す上層部調査過程で中世火葬墓群48基、周溝部とその周辺調査で箱式石棺等14基、主体の箱式石棺より「つづらさわ巻き」の鉄刀を副葬した25才～40才頃の女性人骨が発見された。墳丘築成状況調査では竪穴住居状遺構の調査へと発展したため、調査地区の拡大も余儀なくされた。

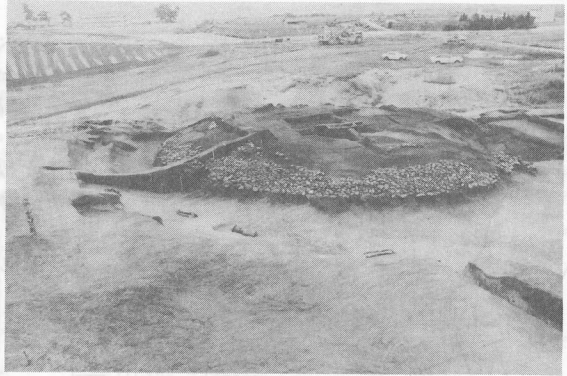


写真3 1号墳全景

(3) 東部黒砂地区の発掘調査

東部黒砂面において、竪穴住居状遺構2、火葬墓4、黒砂と灰白色砂の境界付近で合口土器棺墓1、灰白色砂中で屈葬人骨1を検出した。しかし、年度内に黒砂下層まで調査を進めることができず課題を残した。

(4) 中央管理棟建設工事中の発見に伴う発掘調査

昭和53年10月25日、中央管理棟建設工事掘削作業中、南の13A標高3m付近で黒砂が露出していることを発見、直ちに工事を中断し緊急調査に入った。五輪塔群の出土により黒砂が傾斜して歴史時代まで続き、それ以降10数mの砂が被覆した等の知見も得られた。

(昭和53年度発掘調査費委託料 41,000,000円)

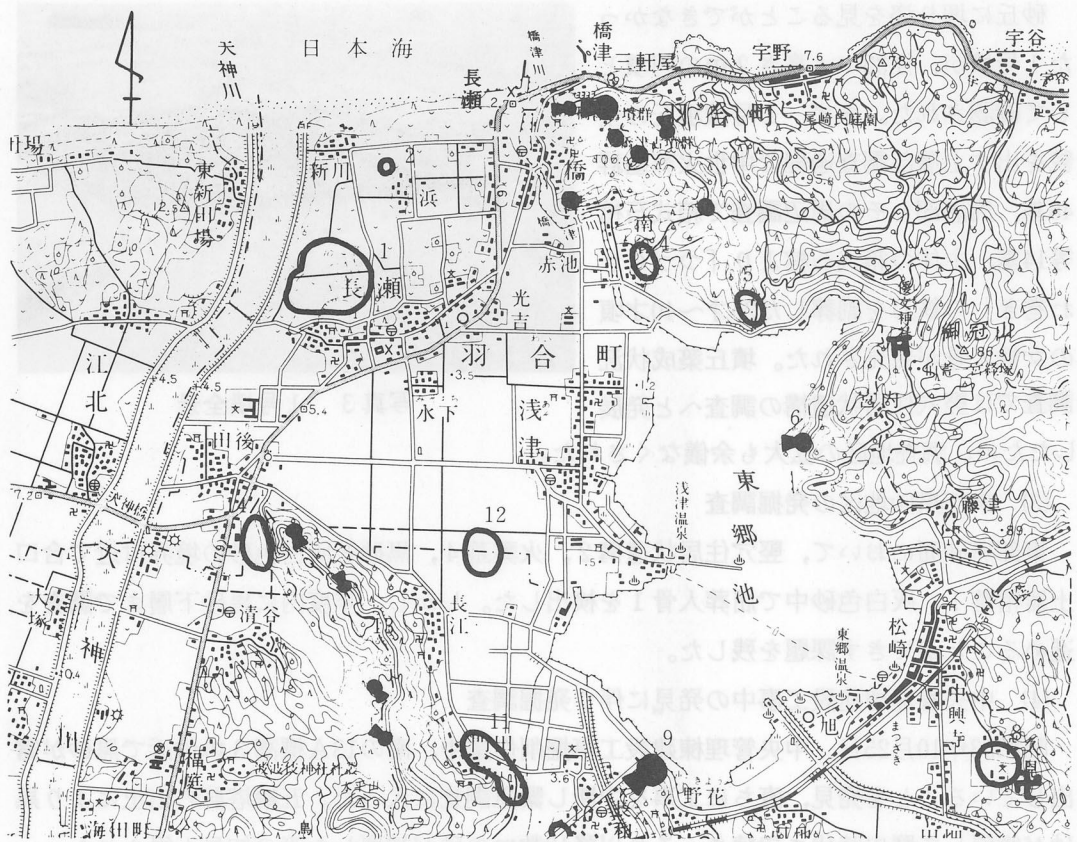
第5節 昭和54年度調査

54年度は工事の第1系列の南北200m、東西50mの区画内1万m²の黒砂面について全面発掘調査が行なわれ多数の住居跡と3・4・10号墳をはじめとする古墳・墳墓が確認された。地区の南端区域では水田面と考えられるグライ土壌も検出された。総計すると竪穴住居跡75棟、掘立柱建物跡10棟、古墳15基、土壙墓9基、石棺墓7基等が確認されている。



写真4 竪穴住居跡

遺物としては、鉄鏃・釣針・剣先型鉄製品・銅鏃・素文鏡・石製模造鏡・玉類（勾玉、管玉、切子玉、小玉など）・古銭が出土している。



挿図1 長瀬高浜遺跡と周辺の遺跡

1/50,000

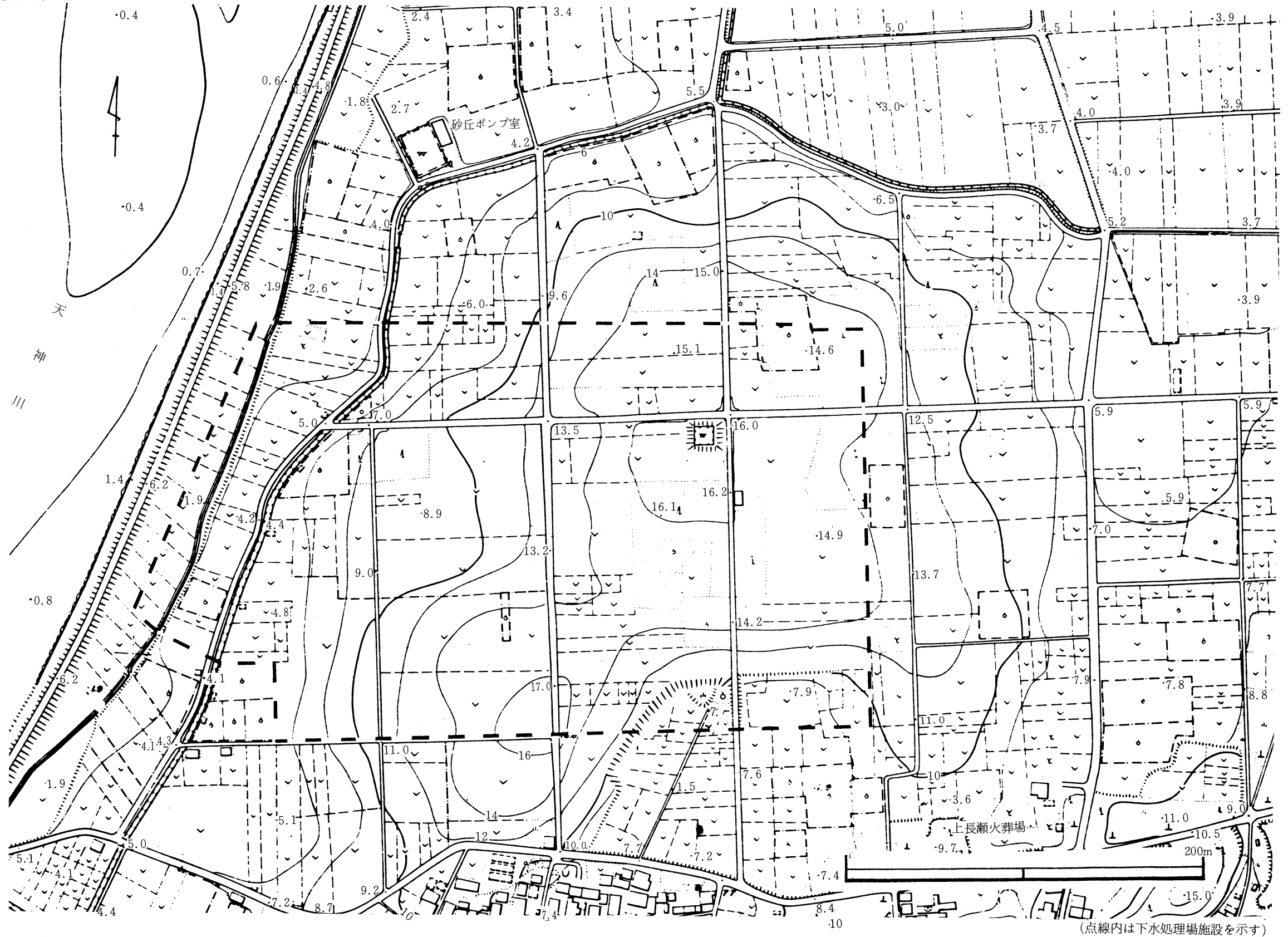
遺跡地名

1. 長瀬高浜遺跡
2. 和助北遺跡
3. 馬ノ山古墳群
4. 南谷遺跡
5. 乳母ヶ谷遺跡
6. 宮内狐塚古墳
7. 倭文神社 (伯耆一の宮経塚遺跡)
8. 久見廃寺
9. 北山1号墳
10. 長和田・津波遺跡
11. 門田遺跡
12. 隅ヶ坪遺跡
13. 大平山古墳群
14. 溝口遺跡



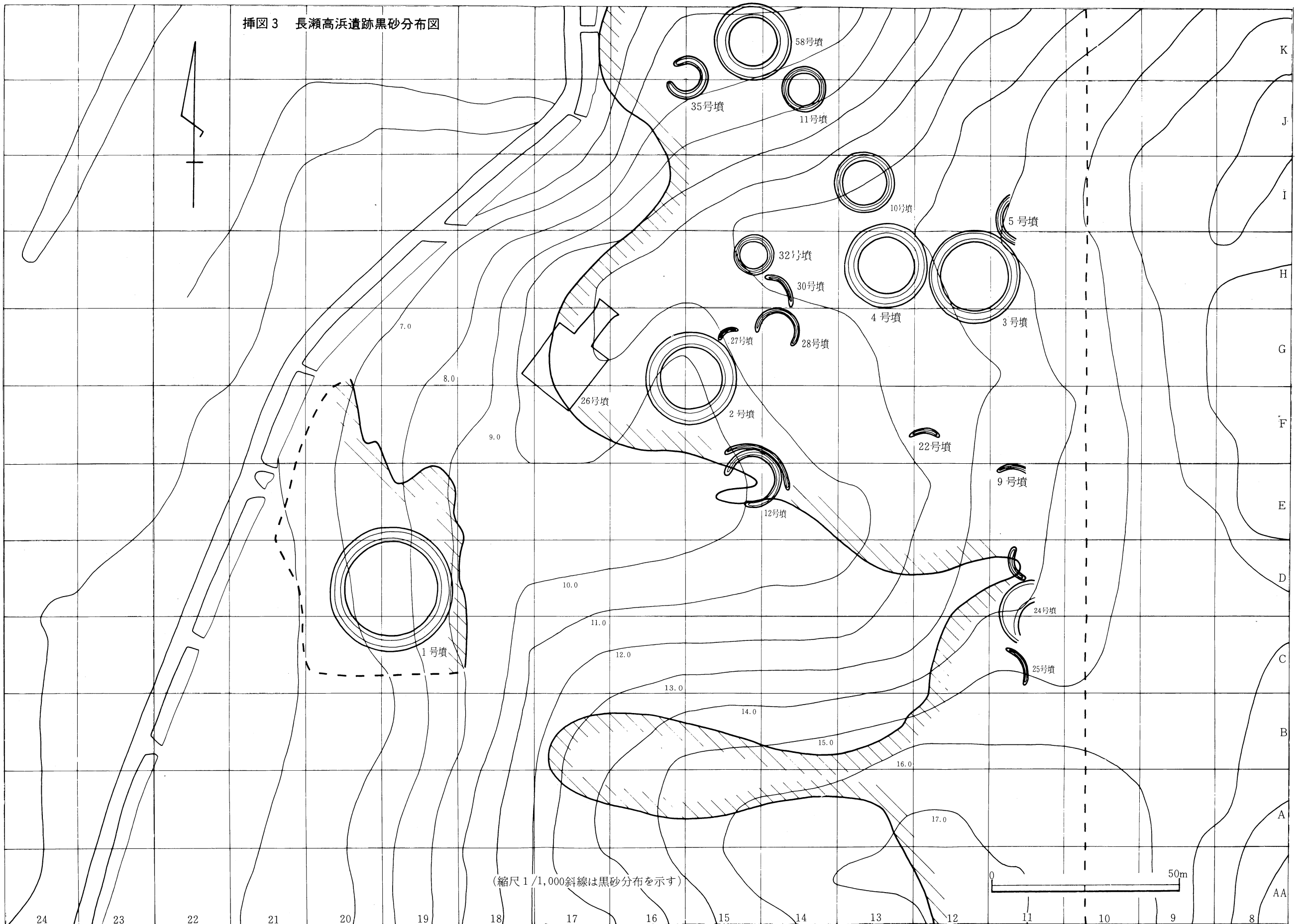
写真5 長瀬高浜遺跡航空写真

挿図2 長瀬高浜遺跡調査位置図



(点線内は下水処理場施設を示す)

挿図3 長瀬高浜遺跡黒砂分布図





- 遺構略号表
- SB 竪穴住居跡
 - SD 溝状遺構
 - SE 井戸跡
 - SF 火葬墓
 - SI 堅穴住居跡
 - SK 土壇
 - SX 古墳・墳墓・石棺墓
 - SX' 屈葬墓
 - SZ 方形周溝状遺構

第II章 発掘調査の結果

第1節 竪穴住居跡（S I）

54年度調査地区の竪穴住居跡は、東部地区で75棟を発見し調査した。内わけは、弥生時代前期（円形プラン）1棟、古墳時代前期後半～中期前半（方形プラン）が74棟である。

S I 01（挿図5～10，図版18・19）

12J地区北西区と13J地区北東区にまたがり10号墳の北東，S I 02の西に位置する。平面形は北側が未調査であるが方形になると思われる。床面の大きさは長辺5.3m（推定），短辺4.22mを測り，主軸はN-5°-Wである。床面積は約24m²前後になる。壁高は南西隅で最大値62cm，北東隅で最小値25cmを測る。壁は床面に対してゆるく立ち上がる。側溝は見られない。ピットは床面で3個を検出し，これらはすべて柱穴と考えられる。場所的にみて4本柱と考えられるが他の1個は検出できなかった。プランは，P 1から（43×43-30），（40×39-30），（39×39-33）cmを測る。柱穴間距離は，P 1-P 2間から2.30，2.50mを測る。時期は遺物から長瀬II期と考えられる。

S I 02（挿図11～13，図版19）

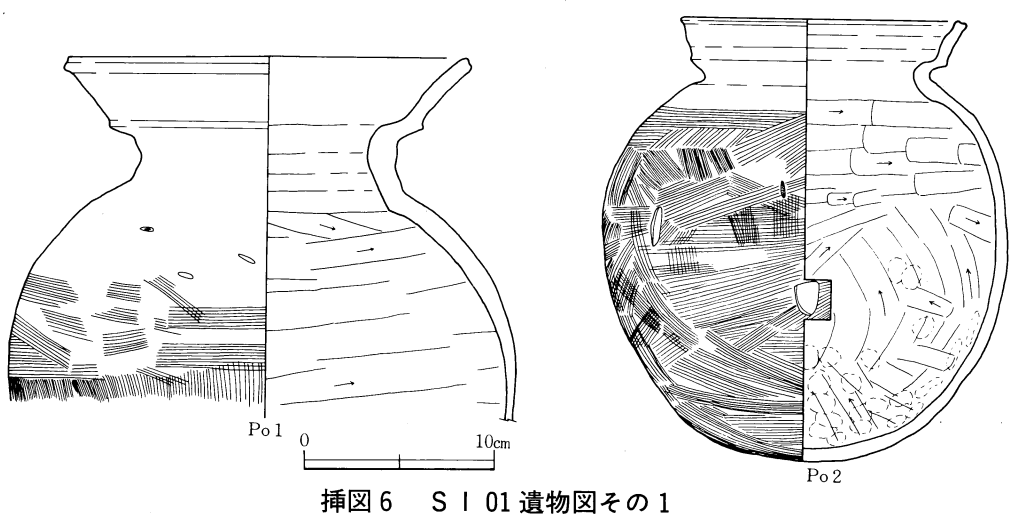
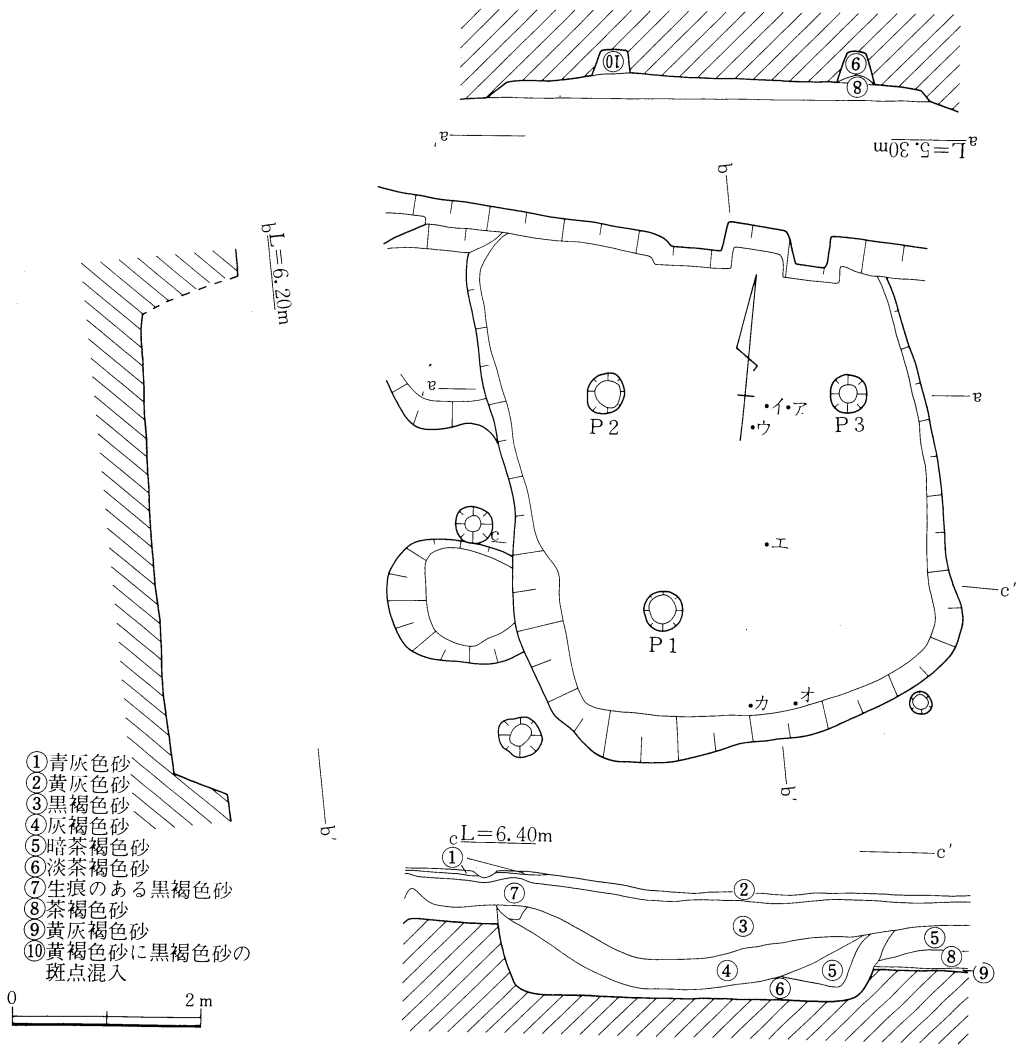
12J地区北東，北西区にまたがりS I 01とS I 03の間に位置する。平面形は北側が未調査であるが方形になると思われる。床面の大きさは，長辺8m（推定），短辺7.1mを測る。床面積は約43m²である。壁高は北西隅で最大値82cm，北東隅で最小値60cmを測る。壁は床面に対して急に立ち上がる。側溝はみられない。ピットは床面で9個を検出したが，柱穴と考えられるものはP 1～P 4と考えられる。プランはP 1から（35×40-29），（45×43-29），（45×43-40），（42×40-56），（47×45-58）cmを測る。柱穴間距離は，P 1-P 2間から3.50，3.70，3.70，3.20mを測る。床面の中央にはP 5（47×40-39）cmを測る。他のピットの用途は不明である。時期は良好な遺物がなく不明である。

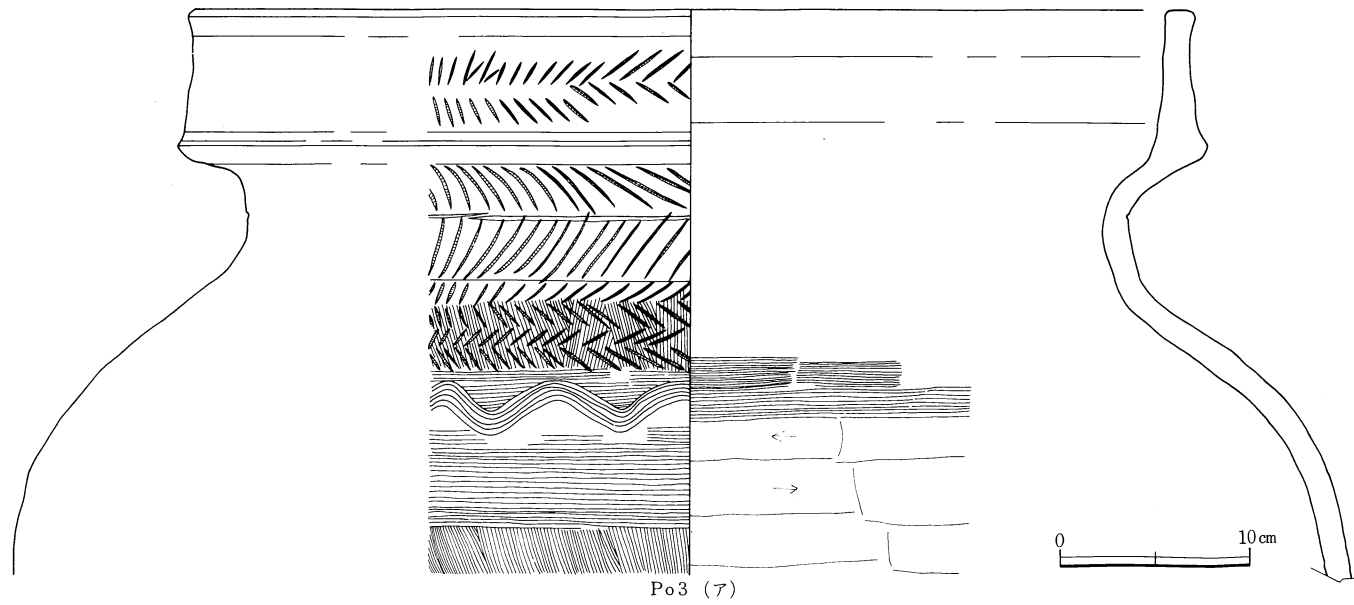
S I 03（挿図14～16，図版1・19・20）

12J地区I C区にありS I 02の東に位置する。北側は未調査であるが平面形は方形になると思われる。主軸はN-35°-Eである。床面の明確な規模は不明である。北西-南東方向で4.60mを測る。ピットは床面で現在5個を検出したが柱穴と考えられるものはP 1，P 2である。プランはP 1が（55×52-43），P 2が（62×55-45）cmを測る。柱穴間距離は1.5mを測る。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。

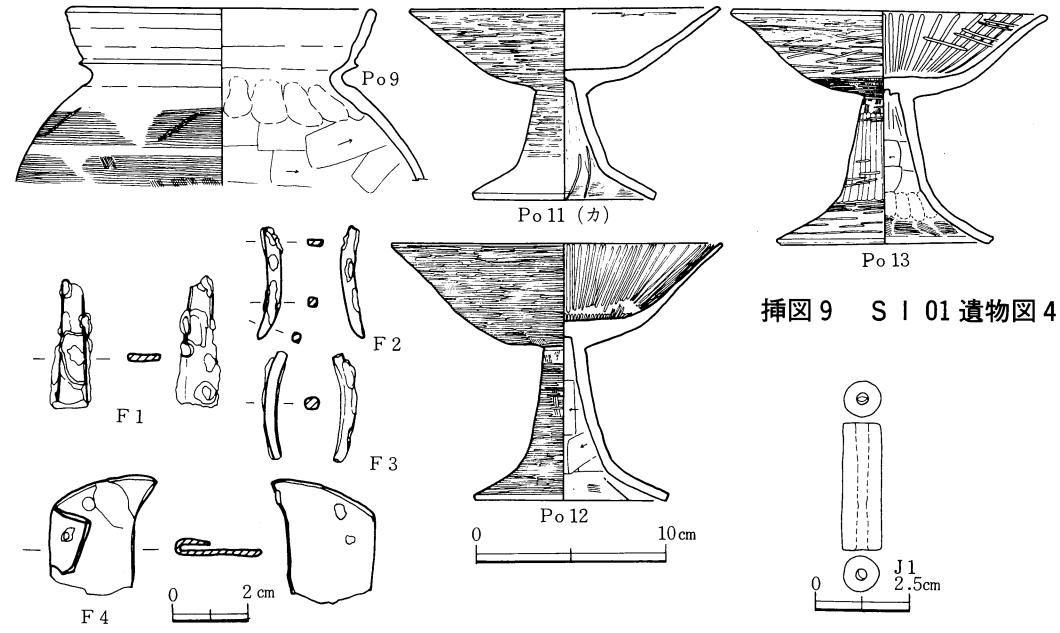
S I 04（挿図17～19，図版1・20・21）

12J地区II a，III a区にまたがり，S I 02の南に位置する。S I 05・06と切り合っている。新旧関係は，S I 06より古い。S I 05とは不明である。平面形は各隅でふくらみながら鈍角に開く多角形であるがS I 05と切り合っているため角数は不明である。床面の大き





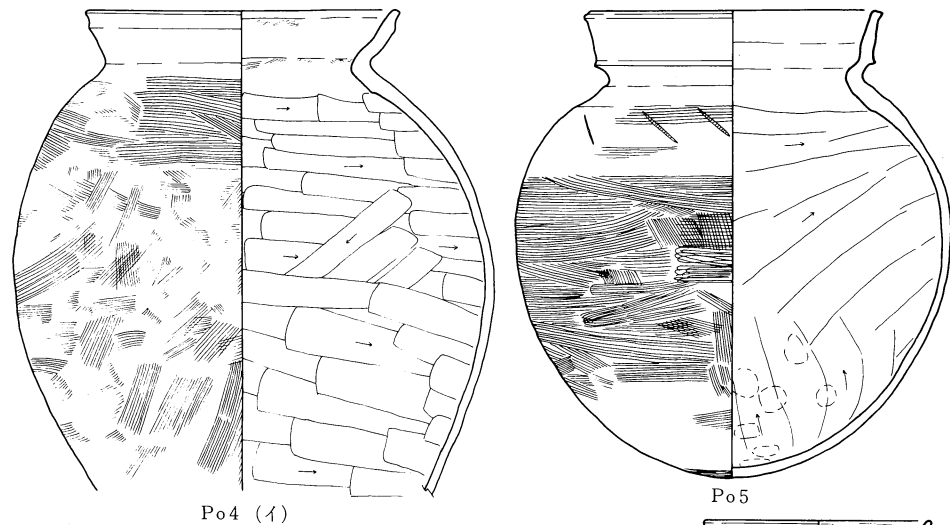
Po3 (ア)



挿図9 S I 01 遺物図4

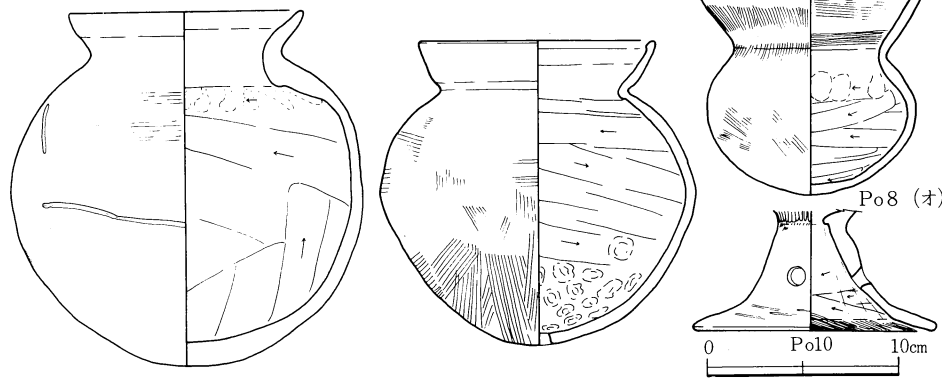
挿図8 S I 01 遺物図その3

挿図10 S I 01 遺物図5



Po4 (イ)

Po5



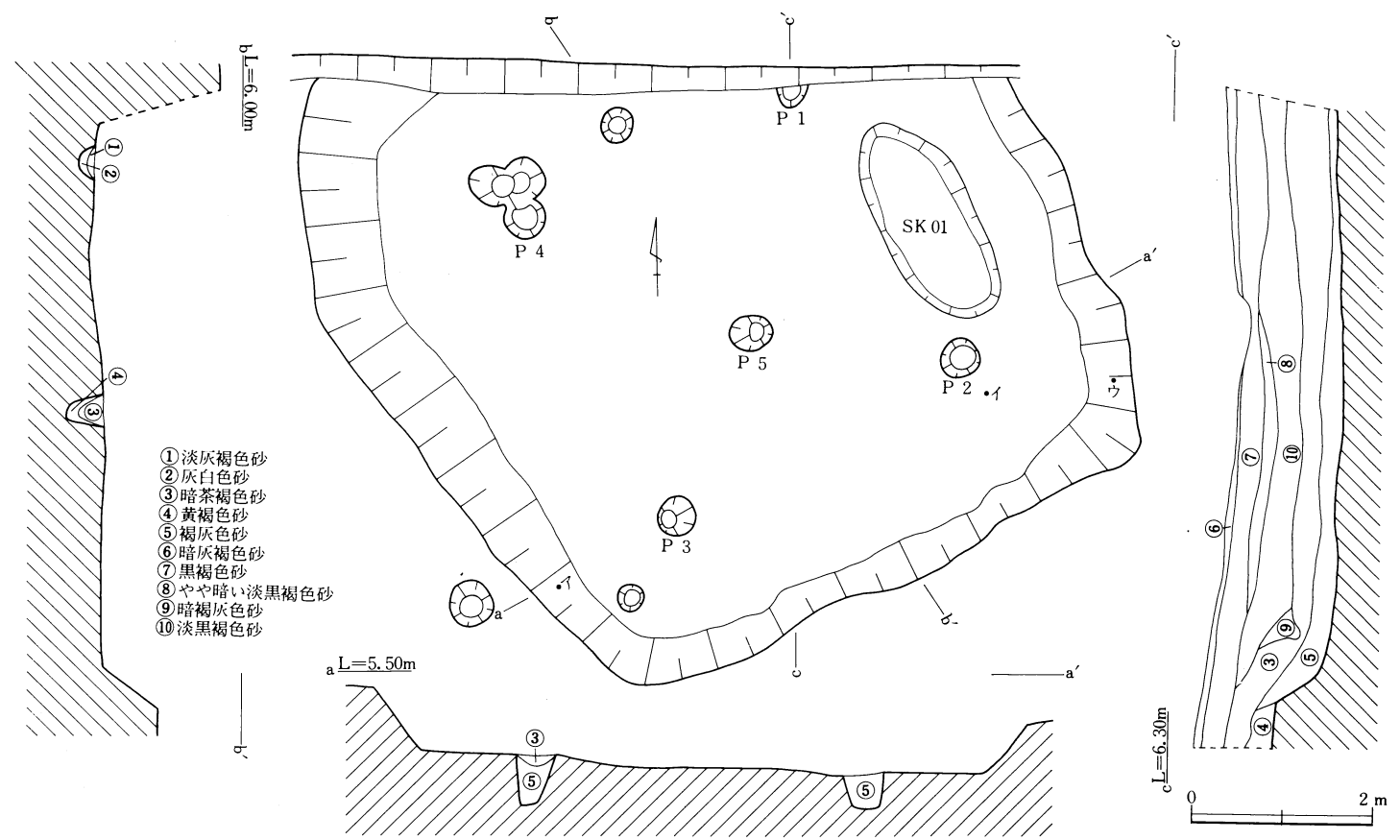
Po6 (ウ)

Po7 (エ)

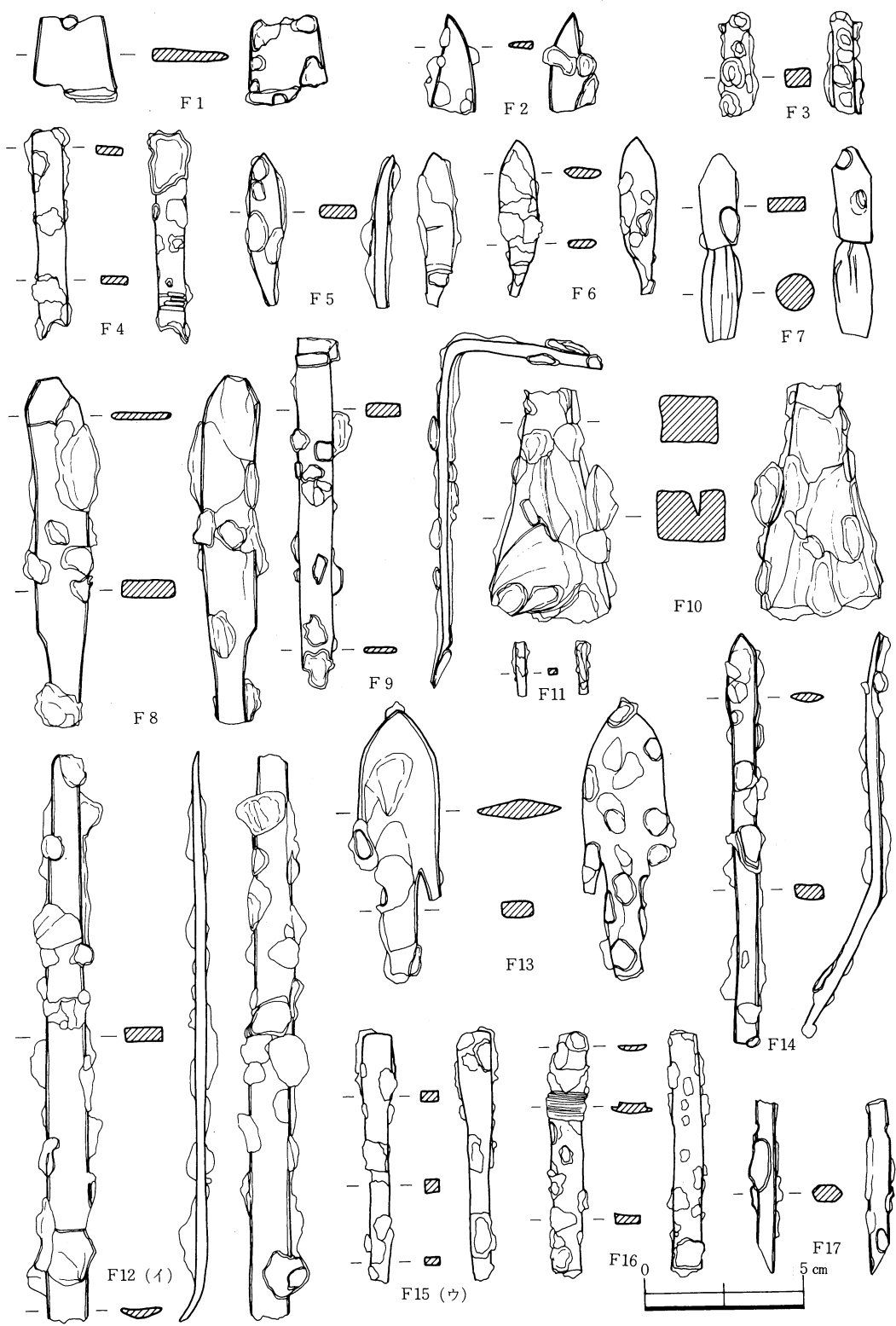
Po8 (オ)

Po10

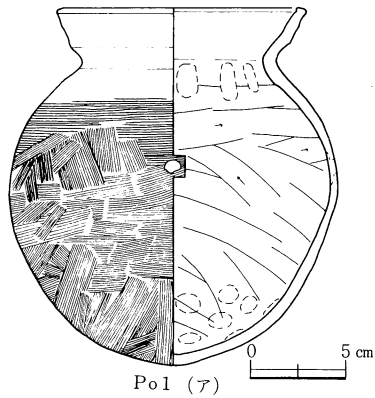
挿図7 S I 01 遺物図その2



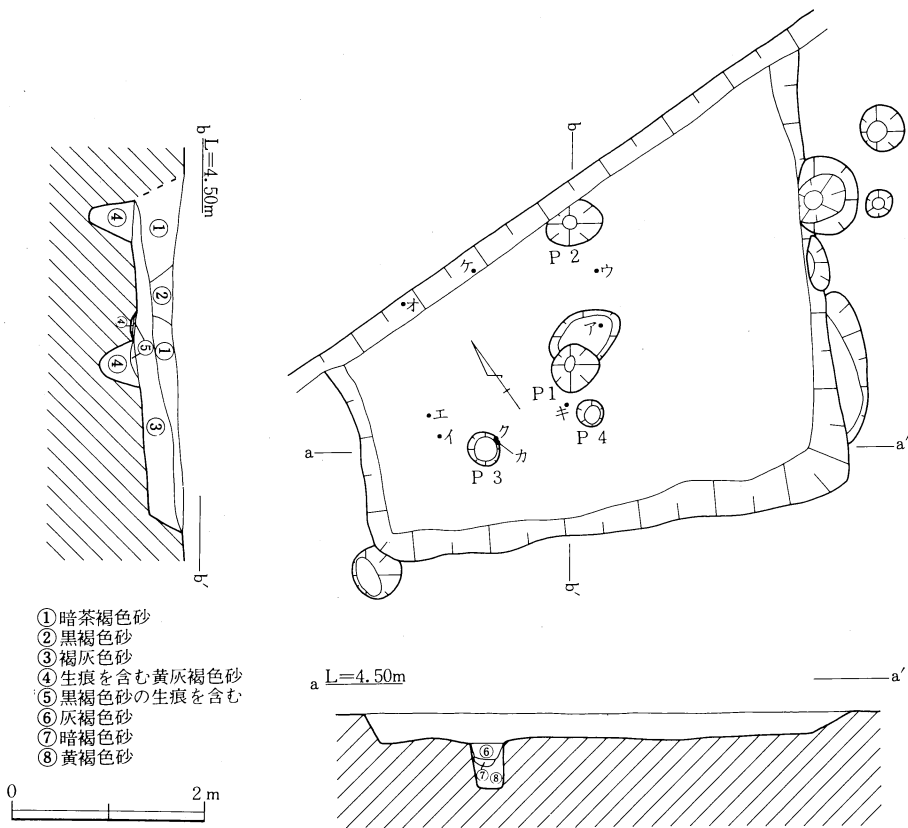
挿図11 S I 02 遺構図



挿図 12 S I 02 遺物図その 1

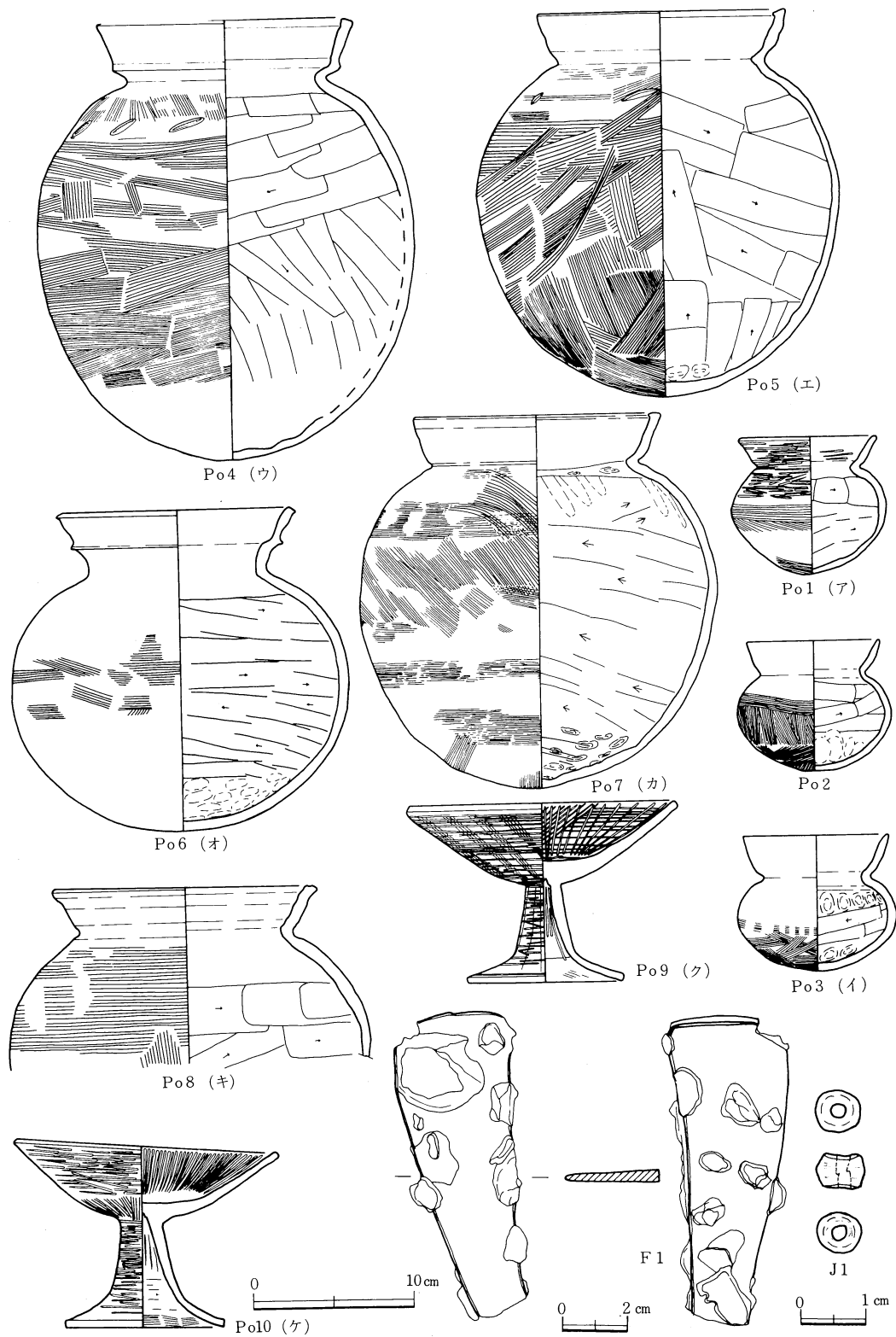


挿図13 S I 02 遺物図その2



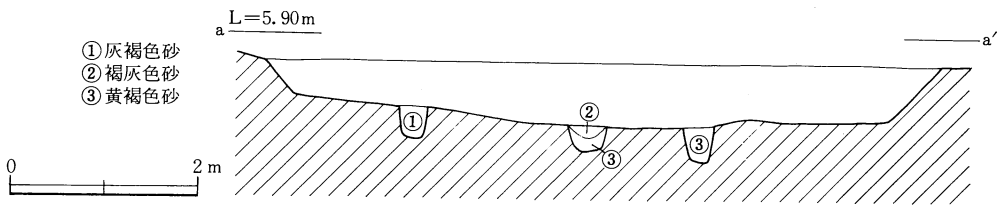
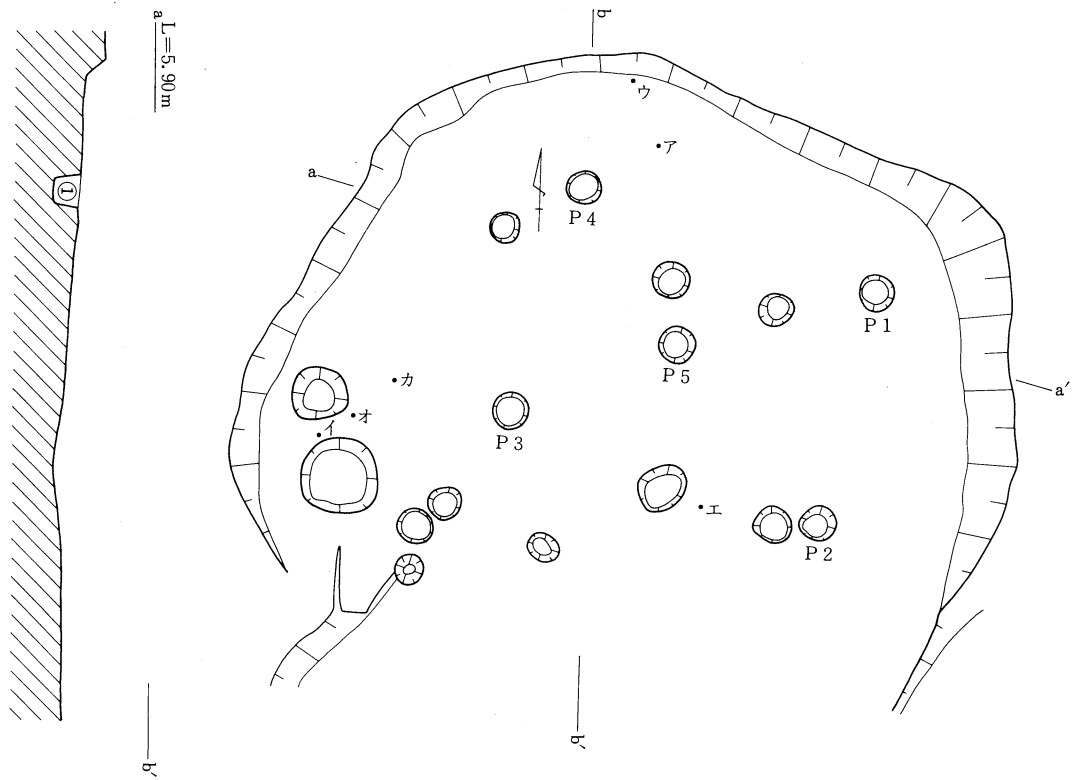
挿図14 S I 03 遺構図

さは、東西方向7.51mである。床面積は44.2m²以上になろう。壁高は北東側で最大値60.6 cm、北側で最小値18.1cmを測る。ピットは床面で14個検出したが柱穴と考えられるものは、P 1～P 4であろうと推測される。プランはP 1から(42×36-47), (40×35-30), (40×39-37), (38×35-30)cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間より7.55, 3.42, 2.52, 3.30 mを測る。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。

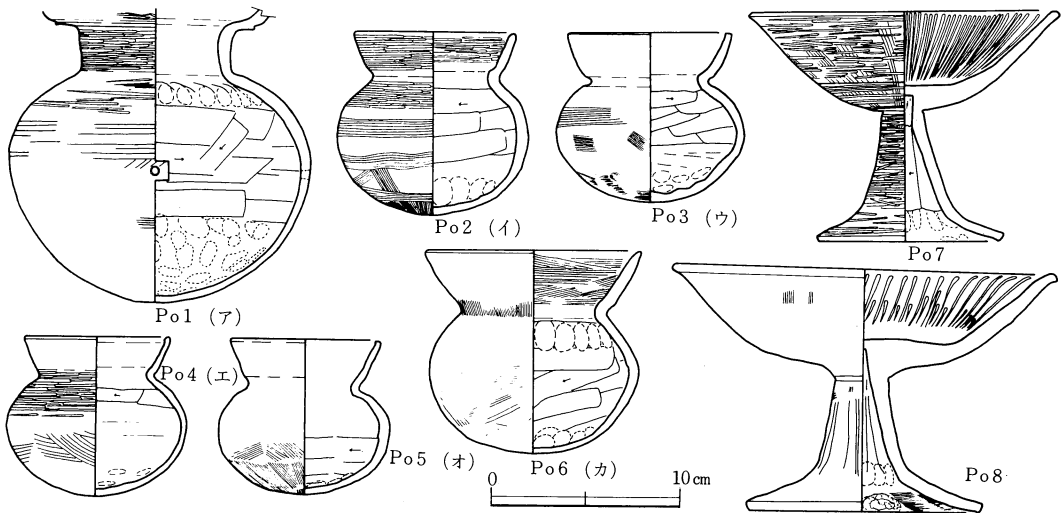


挿図15 S I 03 遺物図その1

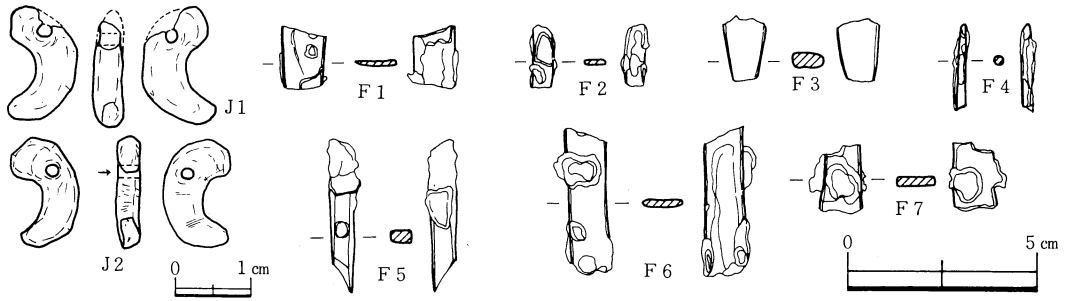
挿図16 S I 03 遺物図その2



挿図 17 S I 04 遺構図



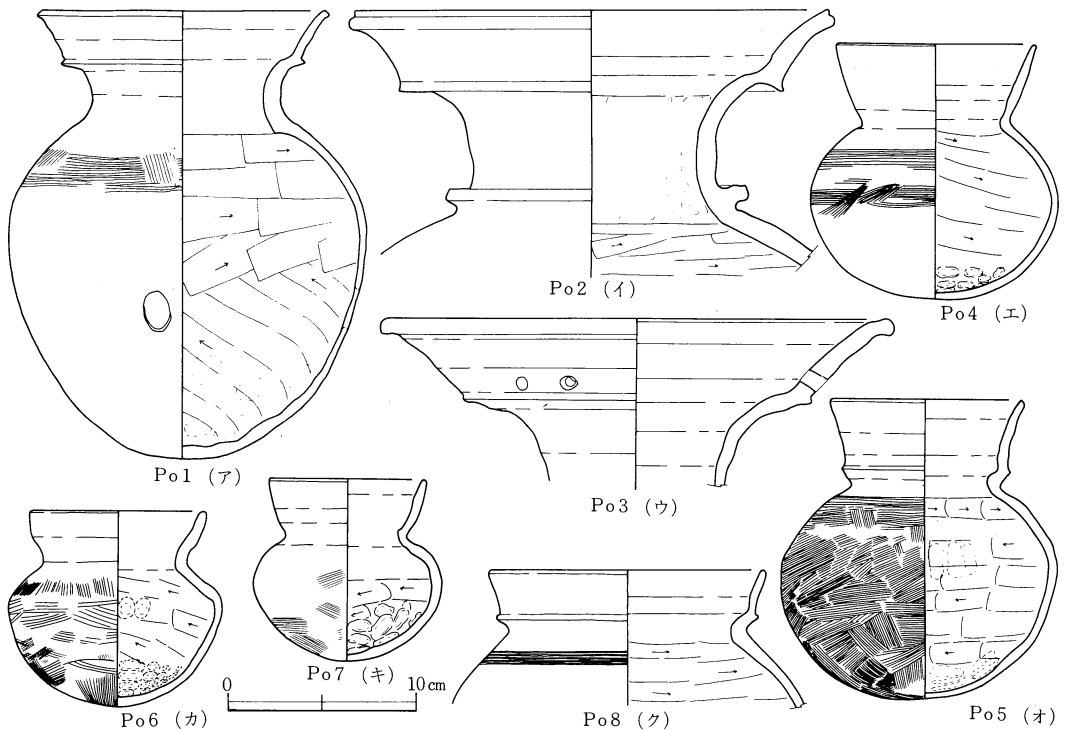
挿図 18 S I 04 遺物図その 1



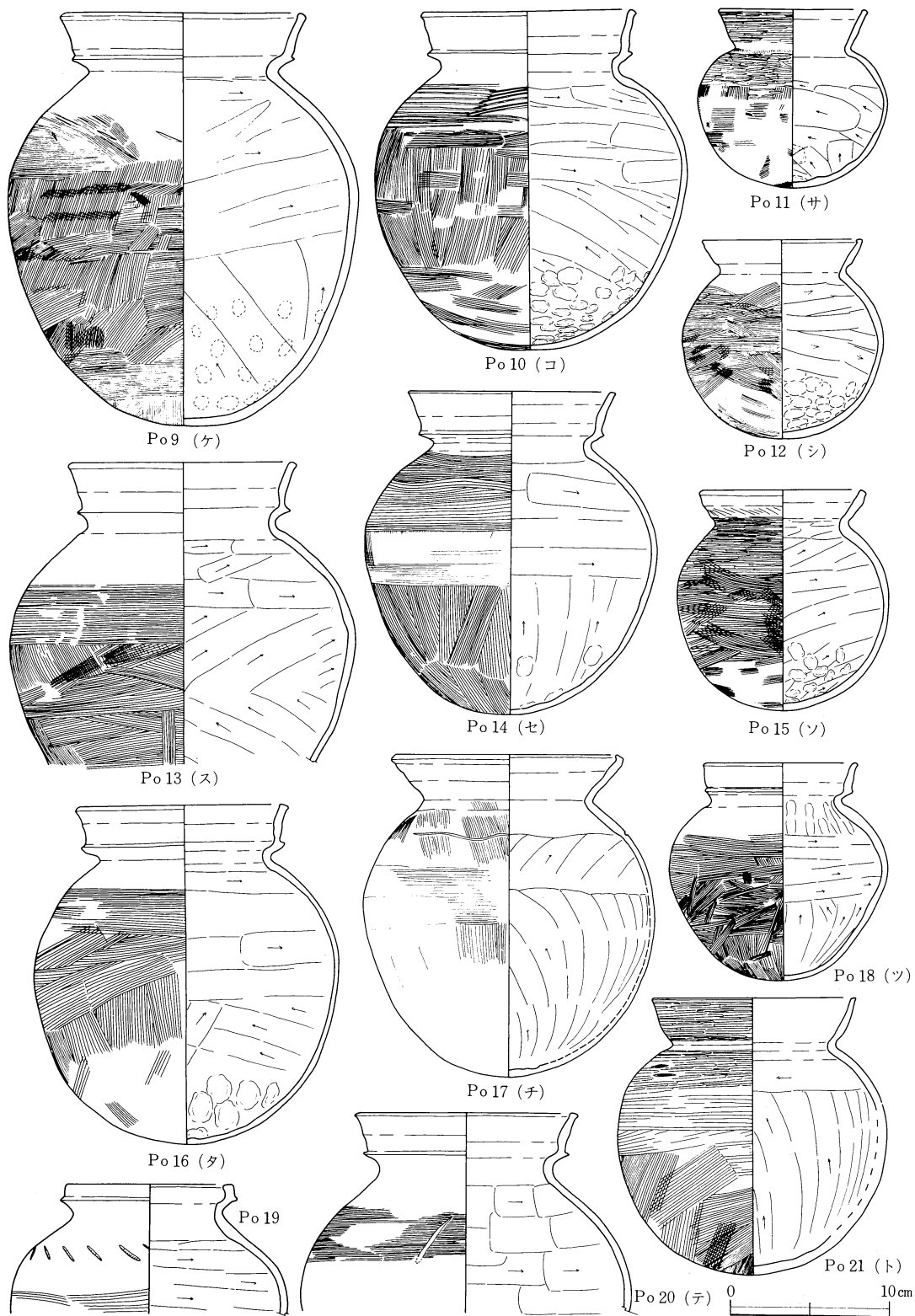
挿図 19 S I 04 遺物図その 2

S I 05 (挿図20~24, 図版 2・20~24)

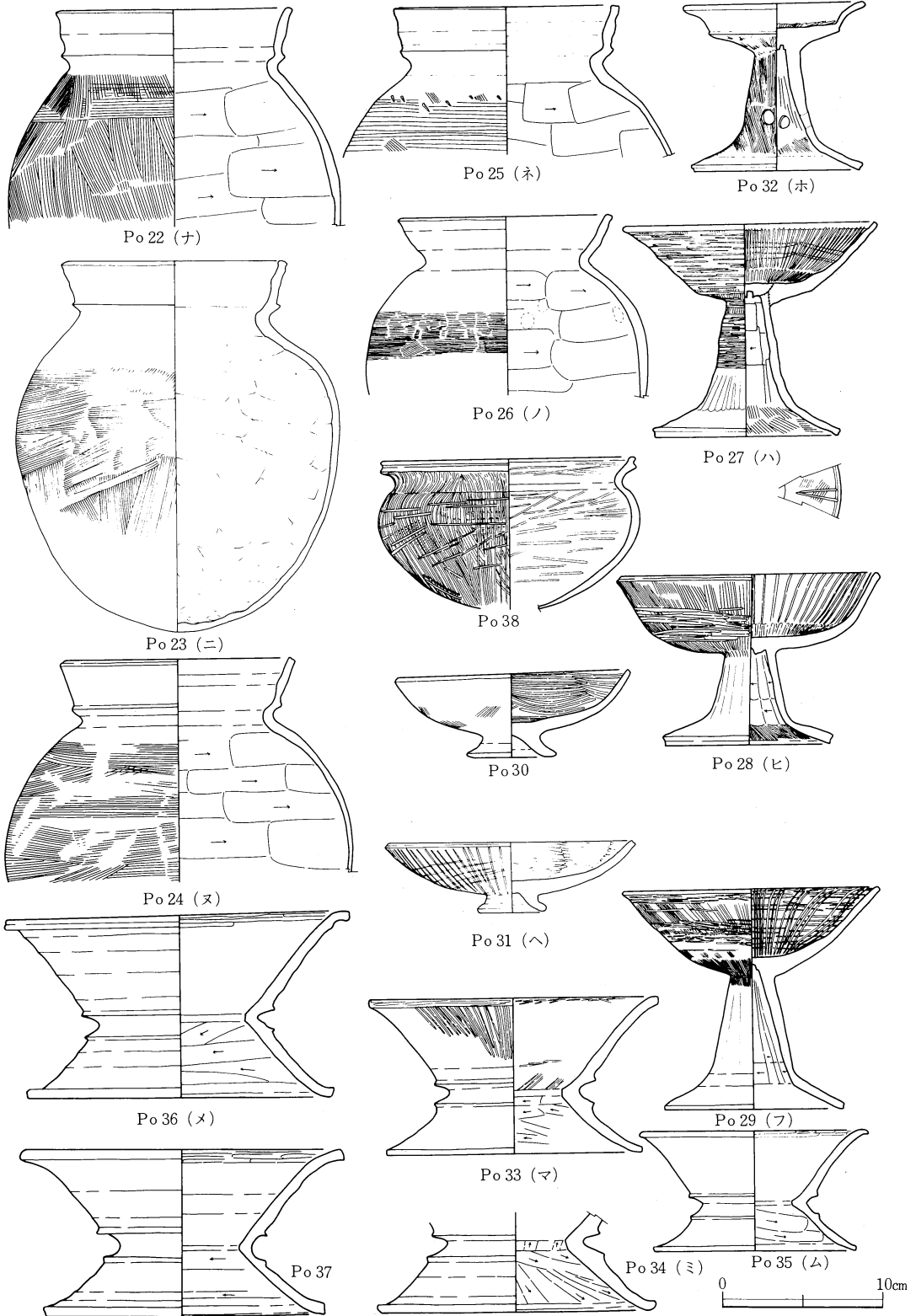
12 I 地区の北側で、12 J 地区の南に位置し S I 04 と切りあう。また東側は S I 06 と切り合っており、住居跡の明確な規模は判明しないが、床面積は最低42㎡はあると思われる。壁高は東壁で30cm、南壁で34.9cmを測る。ピットの総数は11個であるが、P 1 (60×61-58), P 2 (67×68-62), P 3 (55×45-68), P 4 (38×32-60) cmの4本が構造柱であったと推測される。側溝はみられないが、西と南側にテラス状の段が見られる。これの壁高は西側で最大値82.4cm、南側で最小値20.4cmを測る。S I 04 と S I 05 との切り合いは不明である。また、S I 05 より S I 06 のほうが新しいと考えられ、時期は遺物から長瀬 II 期と考えられる。



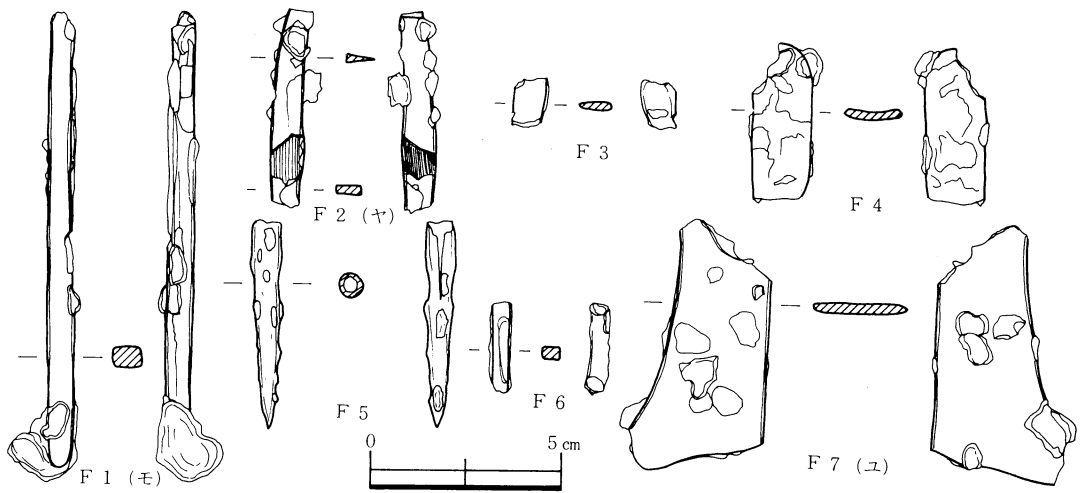
挿図 20 S I 05 遺物図その 1



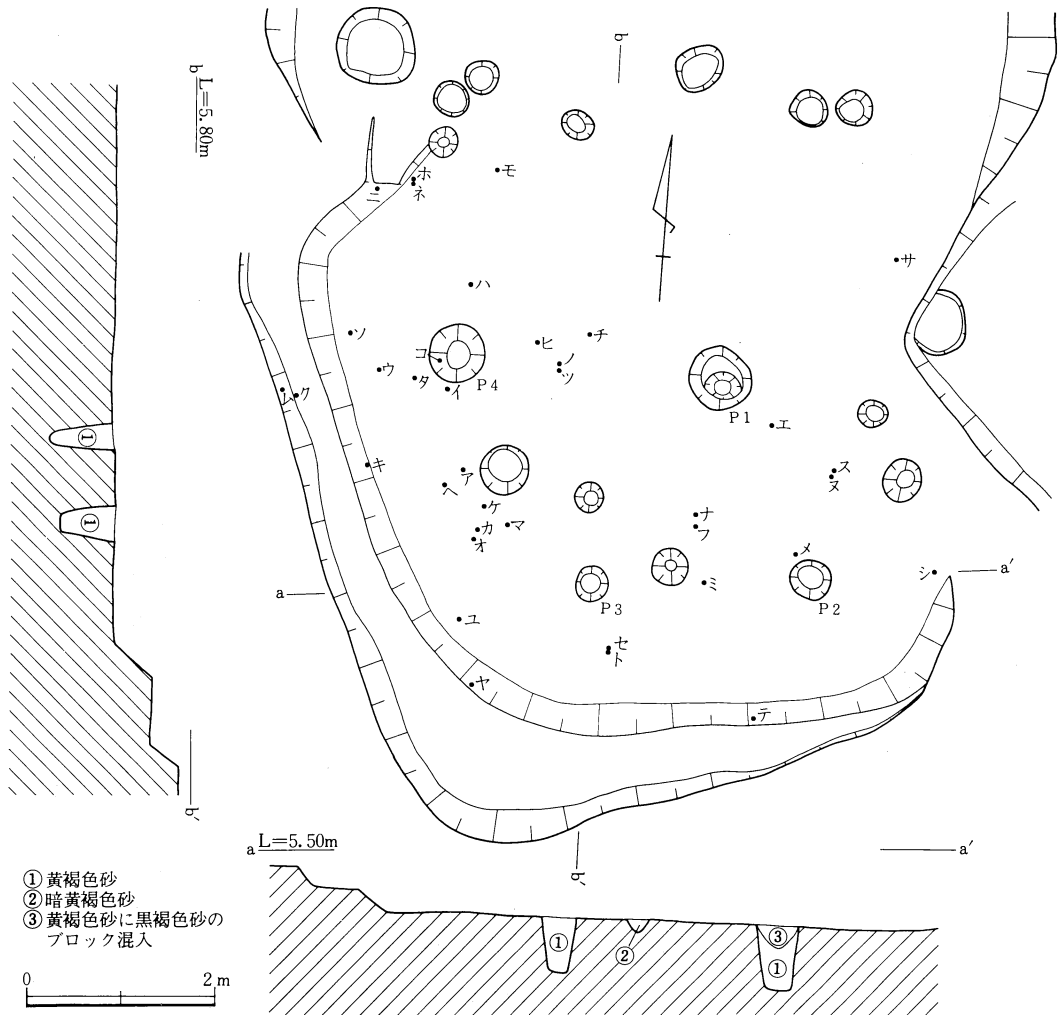
挿図 21 S I 05 遺物図その 2



挿図 22 S I 05 遺物図その 3



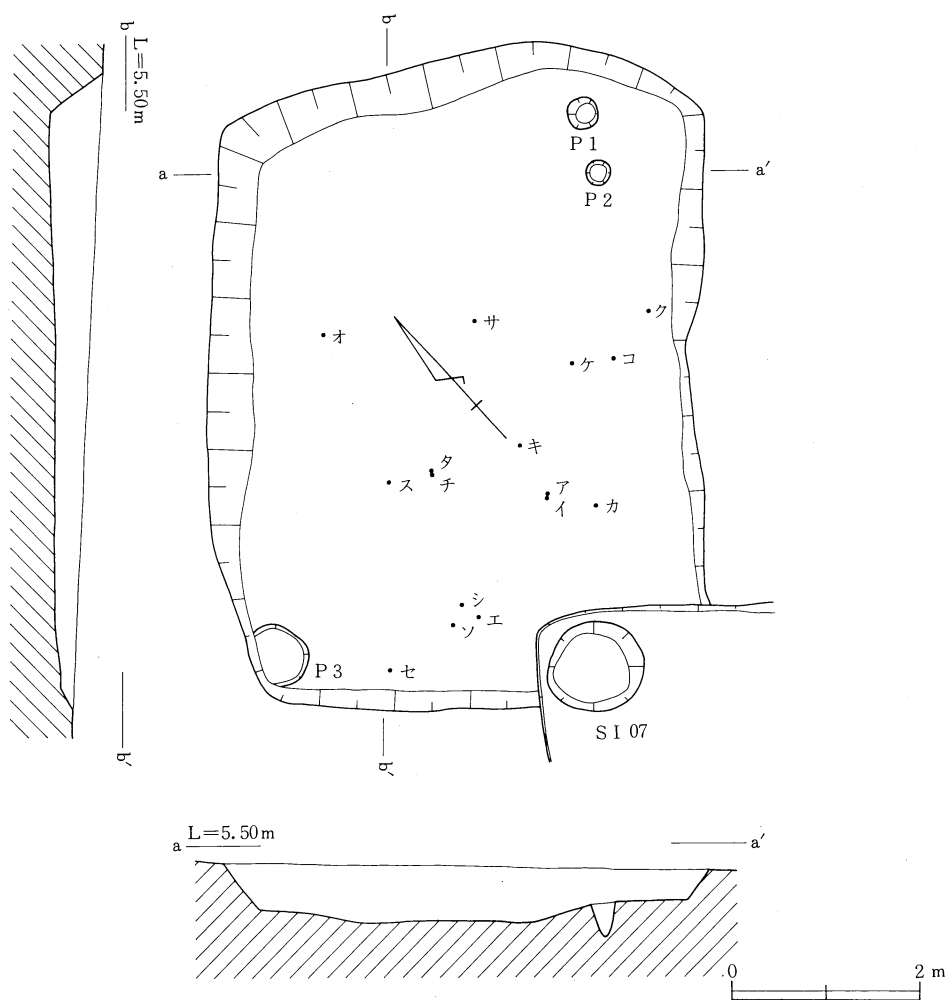
挿図 23 S I 05 遺物図その 4



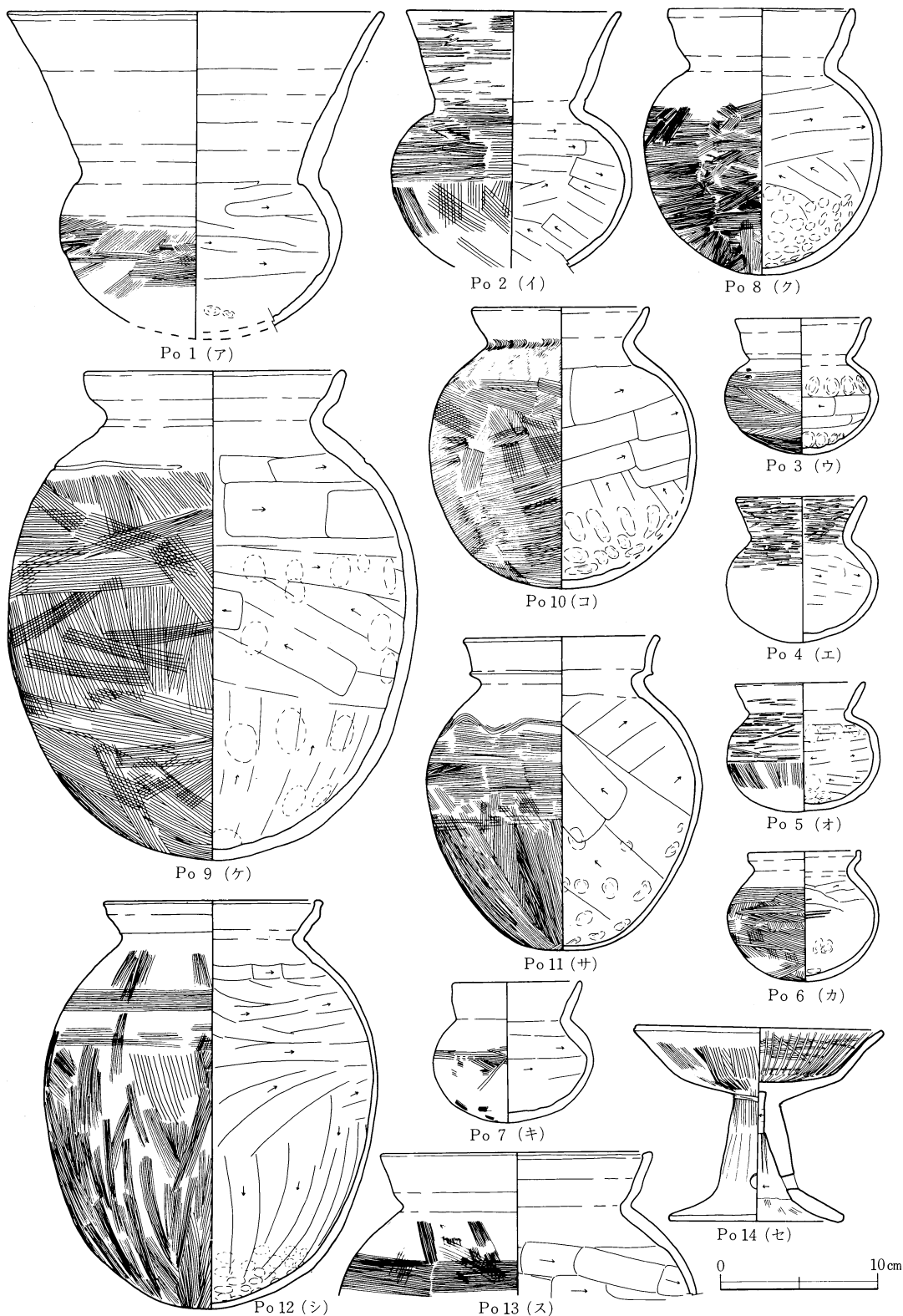
挿図 24 S I 05 遺構図

S I 06 (挿図25~27, 図版25・26)

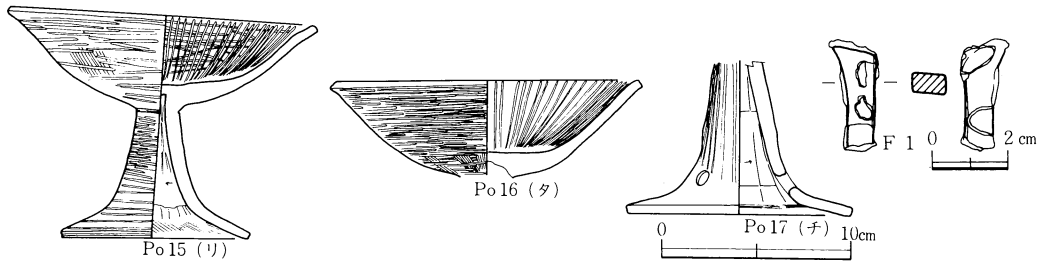
12J地区I a区, 12I地区I d区にまたがりS I 05の東に位置し, 南側でS I 07と切り合っている。新旧関係はS I 07よりS I 06の方が新しく, 平面形は方形である。床面の大きさは長辺6.50m, 短辺4.50mを測り主軸はN-45°-Eで, 床面積は29.3m²である。壁高は北側で最大値57.3cm, 南側で最小値12.6cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で3個検出したが柱穴と考えられるものは検出されなかった。P 1 (34×32-38), P 2 (30×28-36), P 3 (60×50-69) cmのピットの用途は不明である。遺物の出土は多く, 特に遺構上面ではあるが, 銅鏃が1本出土している。時期は遺物より長瀬III期になると考えられる。



挿図 25 S I 06 遺構図



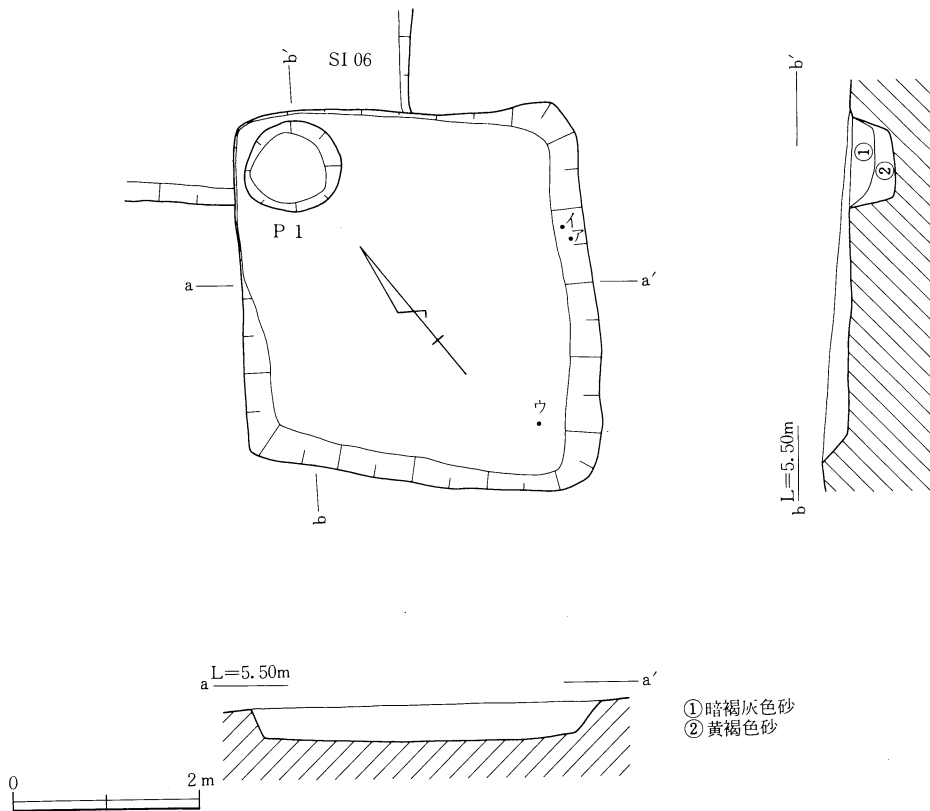
挿図 26 S I 06 遺物図その 1



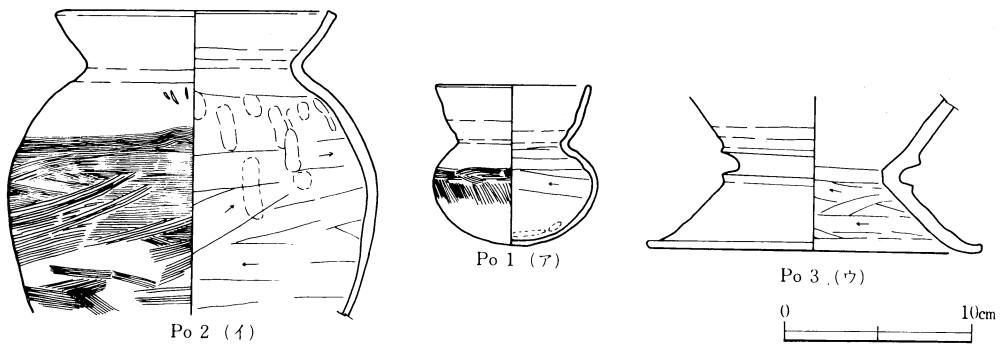
挿図 27 S I 06 遺物図その 2

S I 07 (挿図28・29, 図版26)

12 I 地区の北東区にあり、S I 08の北に位置する。S I 06と切り合っており、その新旧関係は平面からみてS I 07の方が古い。平面形は方形である。床面の大きさは長辺3.32m, 短辺3.28mを測り主軸はN-50°-Wである。床面積は10.9m²である。壁高は南側で最大値37.9cm, 北側で最小値1.3cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で1個検出したが柱穴とは思われない。P 1 (105×98-52) cmのピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期になると考えられる。



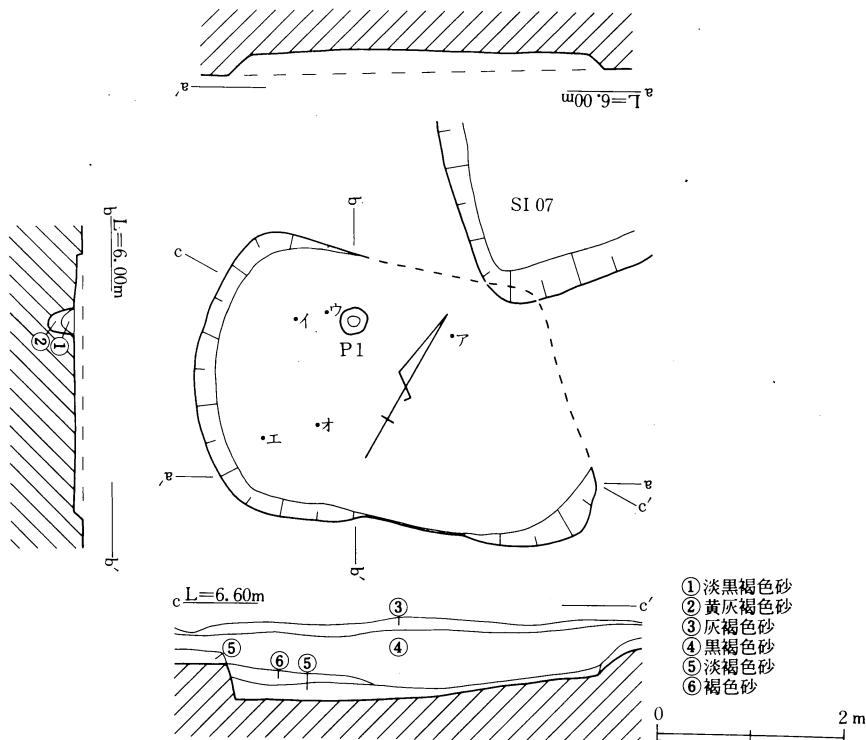
挿図 28 S I 07 遺構図



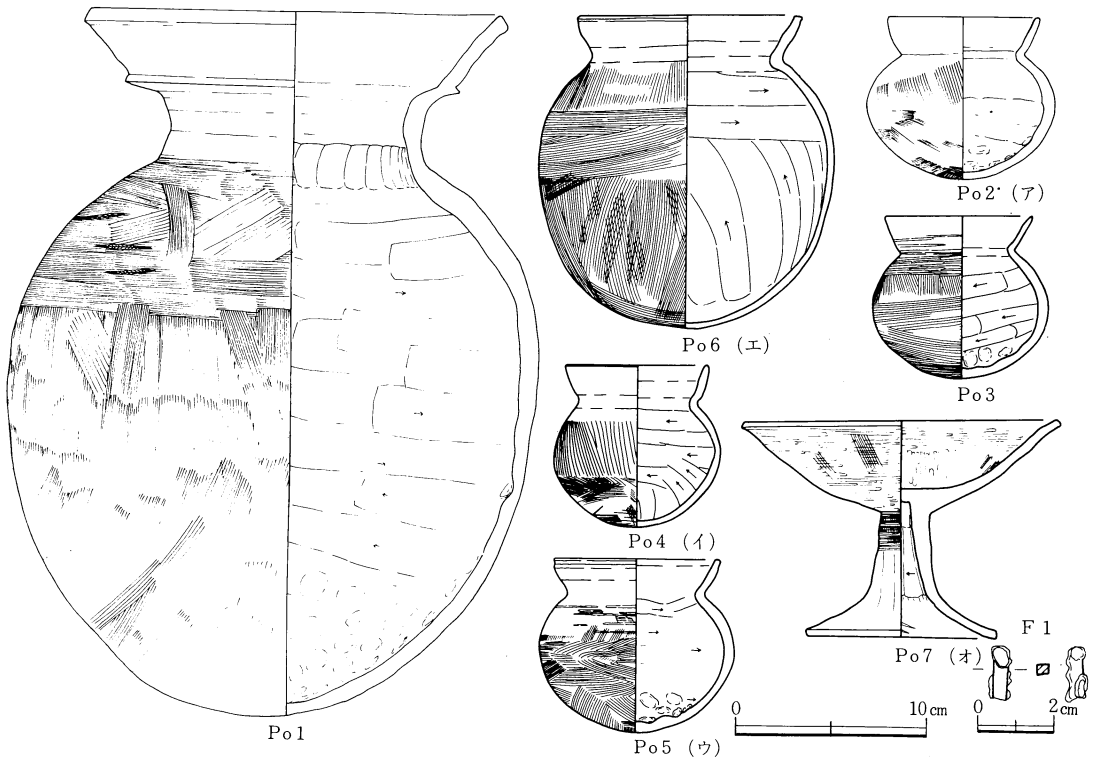
挿図 29 S I 07 遺物図

S I 08 (挿図30・31, 図版26・27)

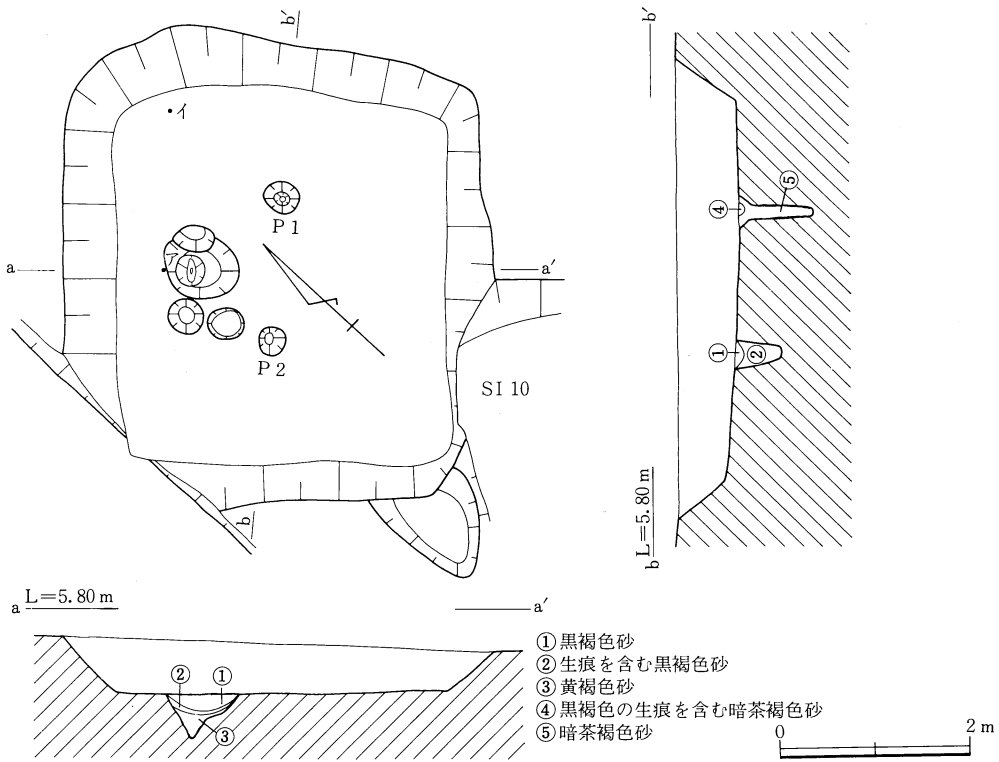
12 I 地区 I c, II c 区にまたがり S I 12の北東に位置し, S I 07と切り合っており新旧関係は不明である。平面形は隅丸の長方形である。床面の大きさは長辺4.00m, 短辺2.62 mを測り主軸はN-73°-Eである。床面積は約10.5m²で, 壁高は東側で最大値33.5cm, 南側で最小値1.7cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で1個を検出した。P 1 (30×30-25) cmは構造柱とみられるが他の柱穴は検出できなかった。時期は遺物より長瀬III期と考えられる。



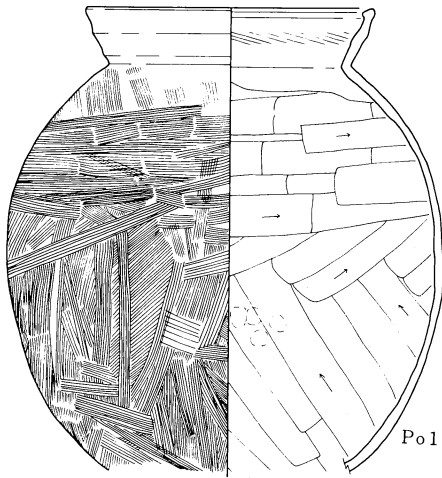
挿図 30 S I 08 遺構図



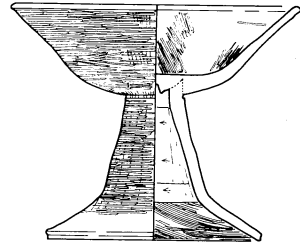
挿図 31 S I 08 遺物図



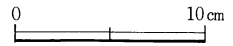
挿図 32 S I 09 遺構図



Po1 (ア)



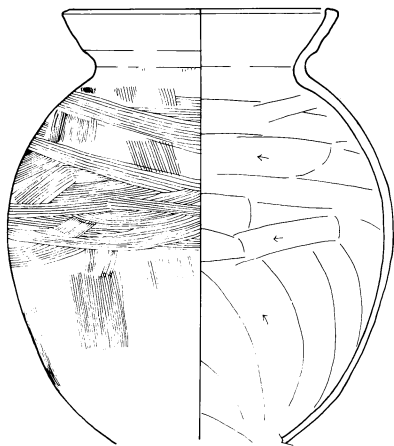
Po2 (イ)



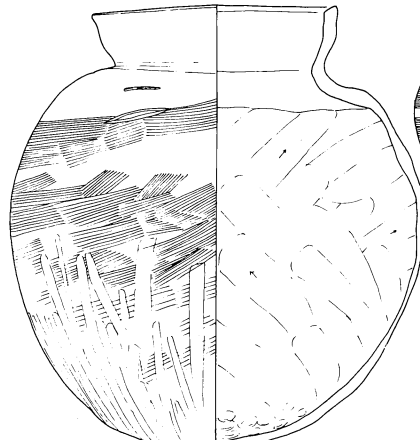
挿図 33 S I 09 遺物図

S I 09 (挿図32・33, 図版3・27)

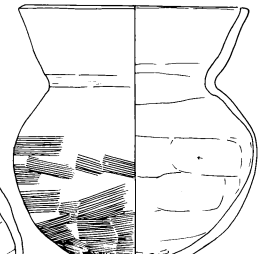
11 I 地区IV c, IV d 区にまたがり S I 06の東に位置し, S I 10と切り合っている。その新旧関係は S I 09より10の方が新しく, 平面形は隅丸方形である。床面の大きさは長辺4.08 m, 短辺3.50mを測り主軸はN-52°-Eである。床面積は14.3m²である。壁高は東側で最大値58.3cm, 南側で最小値49.6cmを測る。側溝は検出されなかった。ピットは床面で6個を検出したが柱穴と考えられるものはP 1とP 2の2本柱である。プランはP 1が(38×34-77), P 2が(30×27-49) cmで柱穴間距離は1.50mを測る。他のピットの用途は不明である。時期は長瀬II期と考えられる。



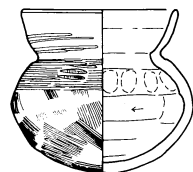
Po3



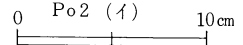
Po4 (ウ)



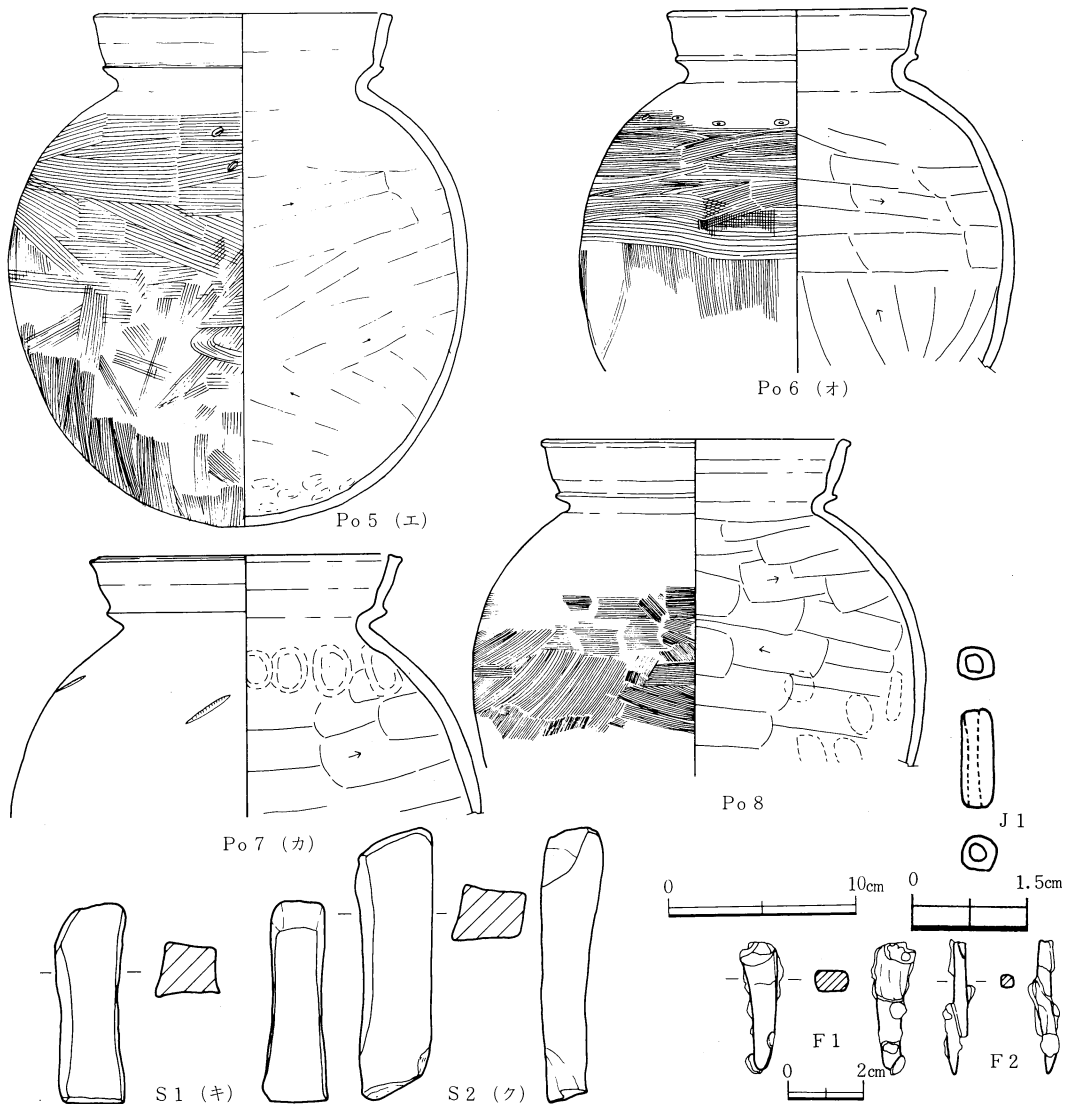
Po1 (ア)



Po2 (イ)



挿図 34 S I 10 遺物図その1



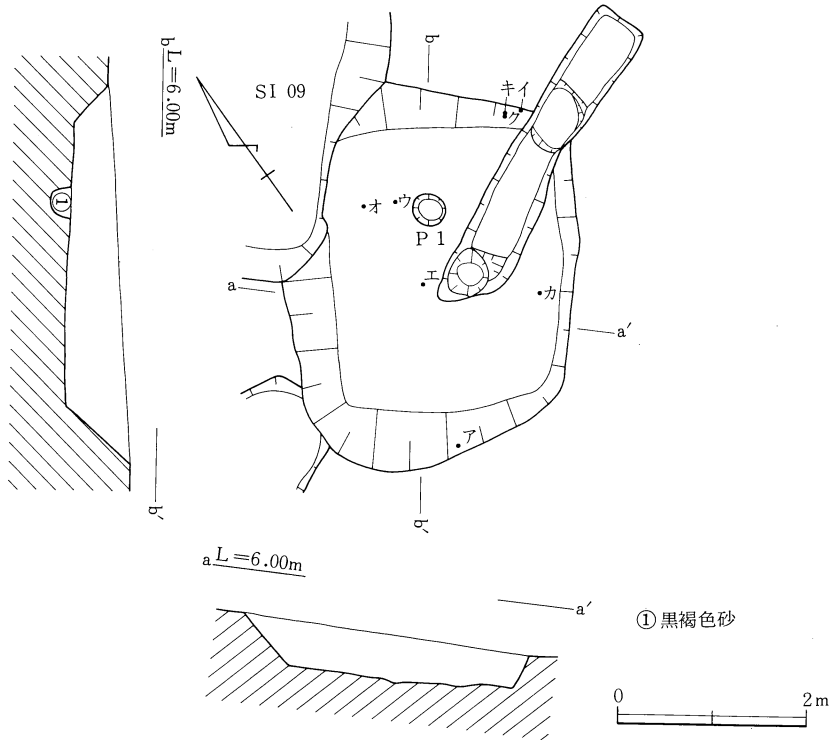
挿図 35 S I 10 遺物図その 2

S I 10 (挿図34~36, 図版 3・27・28)

11 I 地区IV c 区にあり, S I 07の東に位置する。S I 09と切り合っている。新旧関係は S I 10より S I 09の方が古く, 平面形は隅丸の長方形をしている。床面の大きさは, 長辺 3.00m, 短辺2.44mを測り主軸はN-35°-Eである。床面積は約7.32m²である。壁高は南側で最大値66.8cm, 北東側で最小値30.2cmを測る。側溝はみられなかった。床面には P 1 (36×36-22)cmを検出したが, 柱穴らしきものは検出されなかった。又後世 S D 01によって床面中央部から東を切られている。時期は遺物より長瀬III期と考えられる。

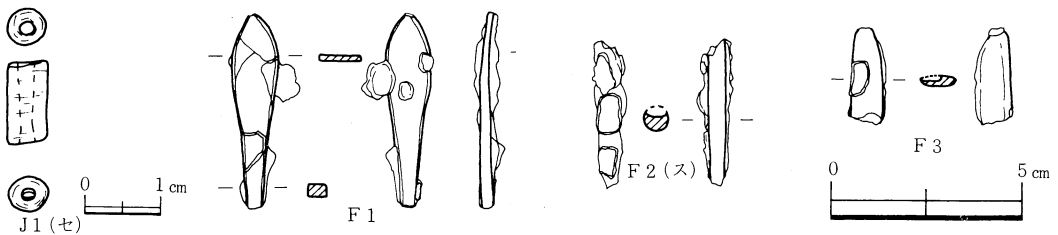
S I 11 (挿図37~39, 図版 3・28・29)

12 I 地区III c, IV c 区にまたがり S I 05の西, 3号墳の北に位置する。平面形は隅丸方



挿図 36 S I 10 遺構図

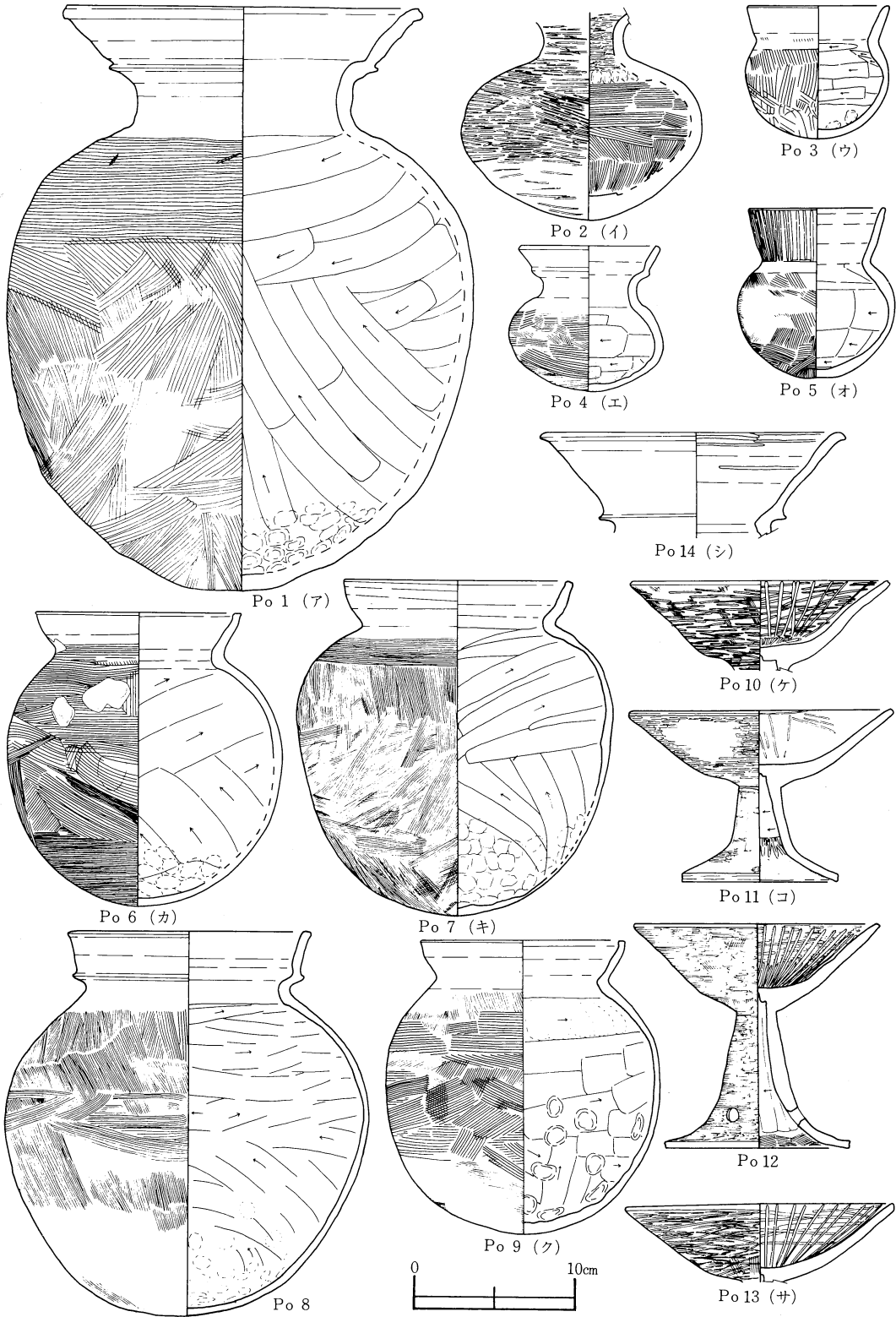
形である。床面の大きさは、長辺4.87m、短辺4.28mを測り、主軸はN-85°-Eである。床面積は20.4m²である。壁高は南側で最大値68cm、西側で最小値21cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で7個検出したが柱穴と考えられるものはP1~P4の4個である。プランはP1から(36×40-62), (36×34-64), (26×36-69), (40×42-75) cmを測る。柱穴間距離はP1-P2間から2.1, 2.3, 2.1, 2.2mを測る。床面中央にP5(54×47-76) cmがあり場所的に見て特殊ピットと考えられる。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



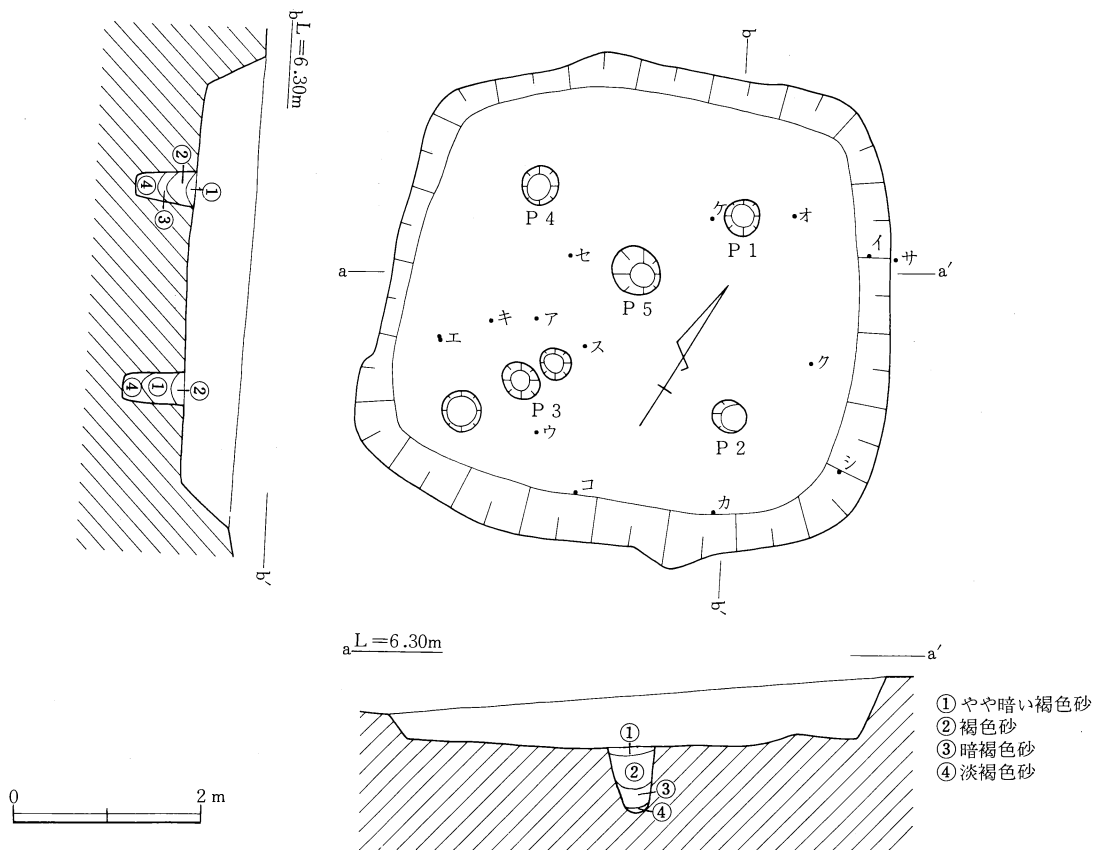
挿図 37 S I 11 遺物図その1

S I 12 (挿図40~42, 図版3・29・30)

12 I 地区II a b, III a b区にまたがり、S I 08の南西、S I 11の南東に位置する。平面形は隅丸方形である。床面の大きさは、長辺6.60m、短辺5.70mを測り主軸はN-67°-E

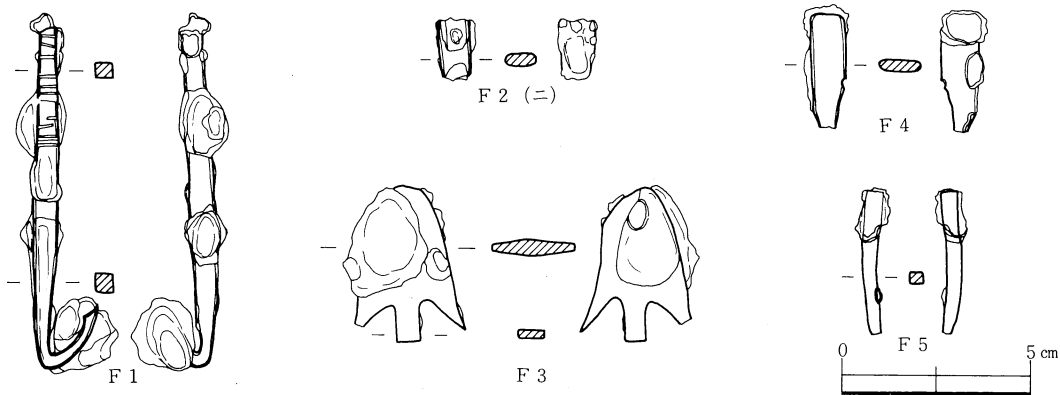


挿図 38 S I 11 遺物図その 2

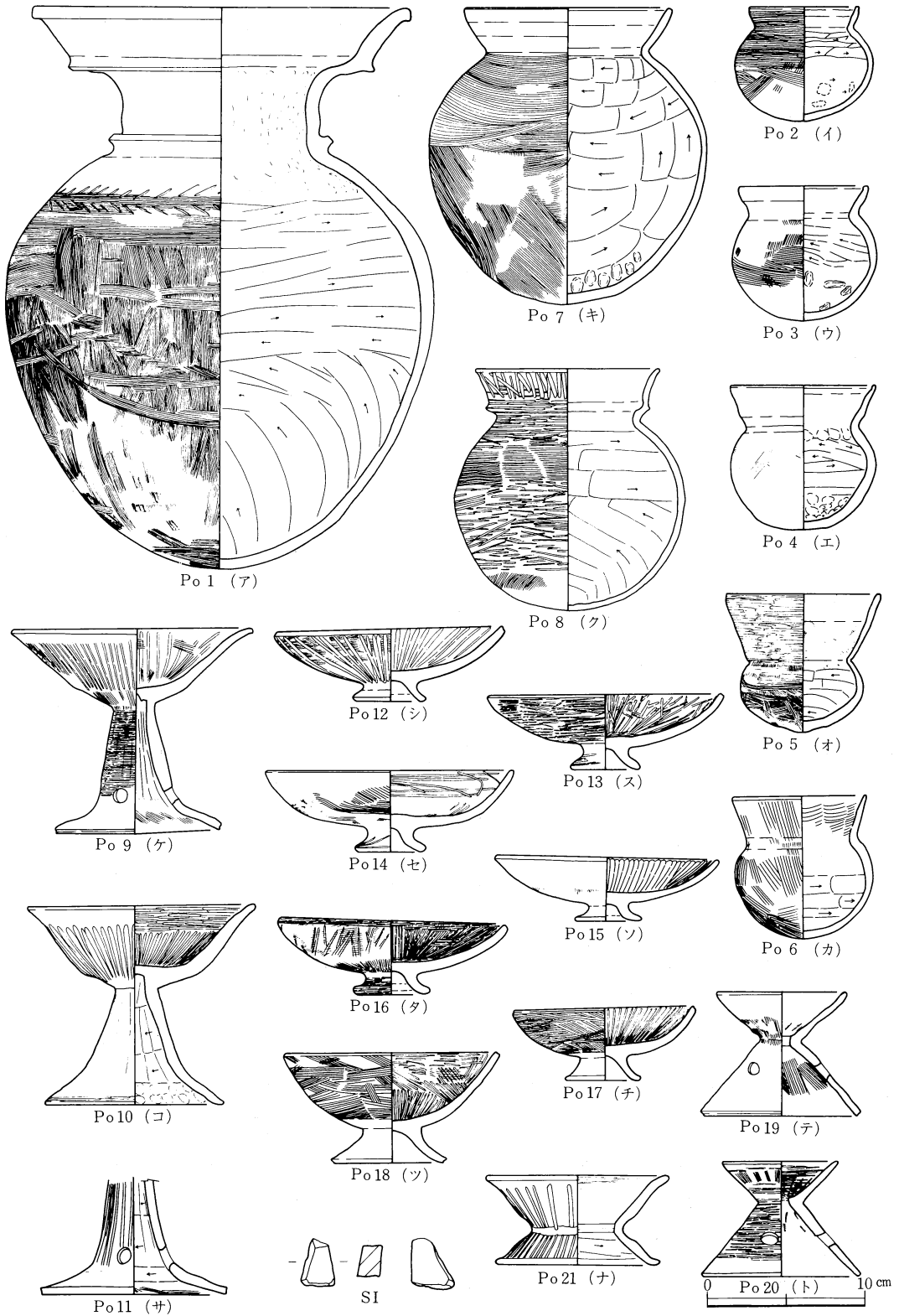


挿図 39 S I 11 遺構図

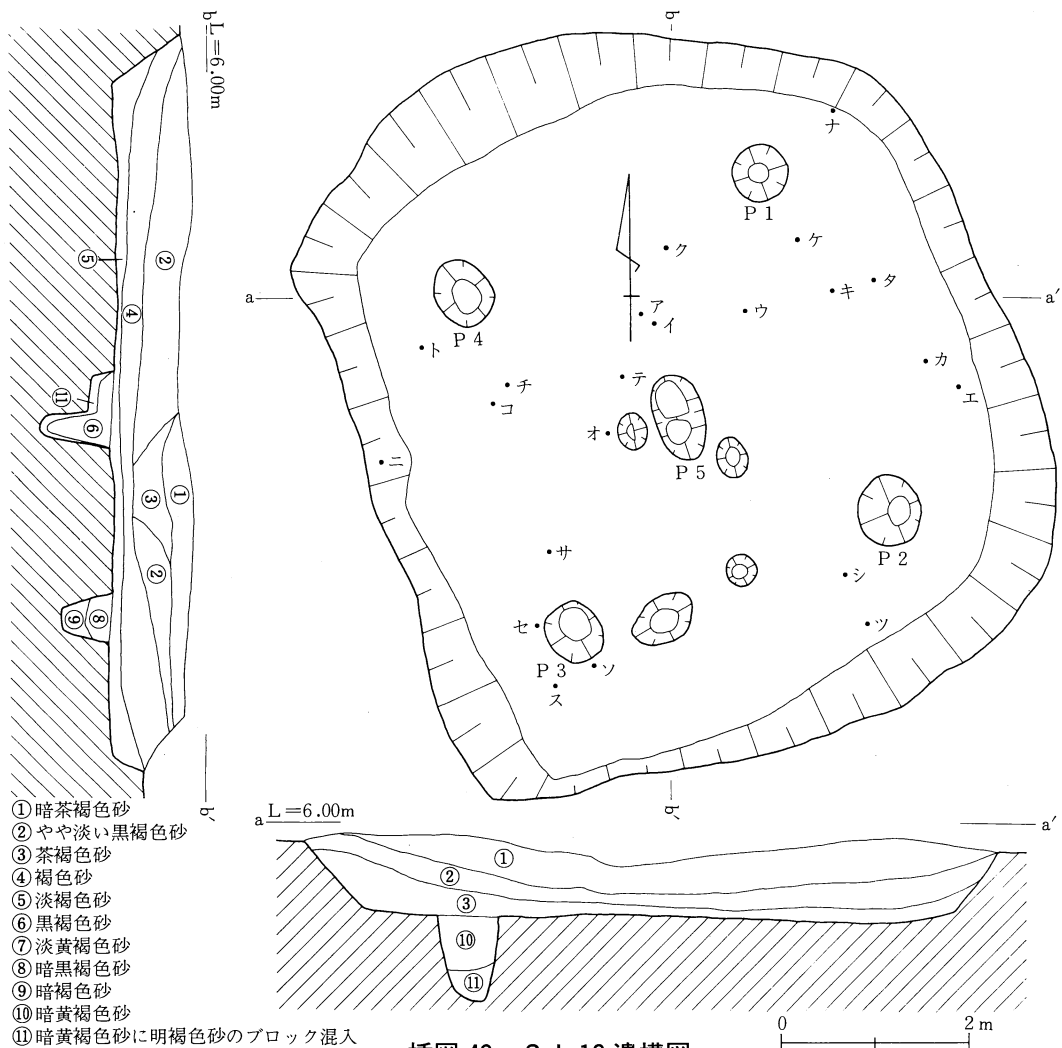
である。床面積は 37.6m^2 になる。壁高は北側で最大値 78.4cm ，南側で最小値 33.0cm を測る。側溝はみられない。ピットは床面で8個を検出したが構造柱とみられるものはP1～P4の4本である。プランはP1から $(60\times 60-80)$ ， $(75\times 68-83)$ ， $(61\times 58-82)$ ， $(72\times 58-90)$ cmで，柱穴間距離はP1-P2間から 3.88 ， 3.64 ， 3.62 ， 3.36m を測る。P5 ($92\times 53-79$) cmは、場所的にみて特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬II期と考えら



挿図 40 S I 12 遺物図その1



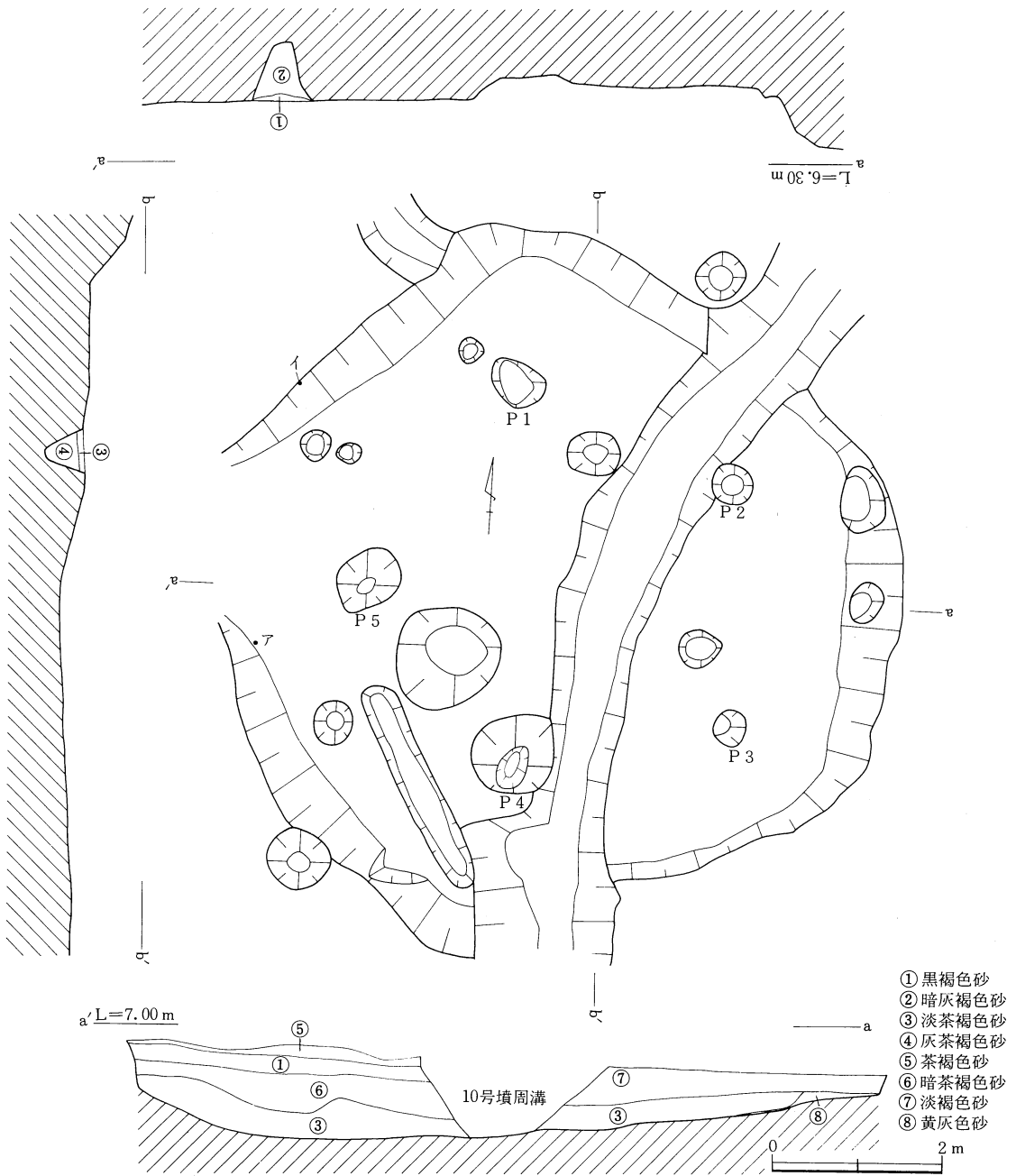
挿図 41 S I 12 遺物図その 2



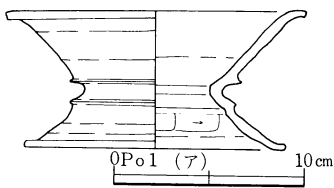
れる。

S I 13 (挿図43~45, 図版3・31)

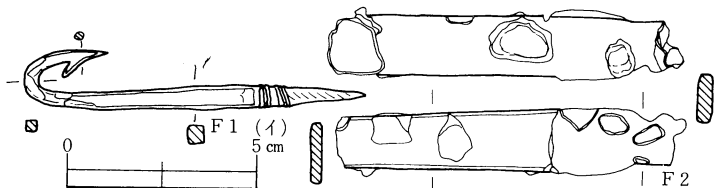
14 I 地区の北東部に位置し、S I 24の東、S I 26の北に存在する。中央部分を10号墳の周溝によって切られており、東側部分は墳丘下にあった。平面形は不明瞭ではあるが五角形と思われる。床面の大きさは北西-南東軸7.08m、東-西軸(推定)7.90mを測る。壁高は東側で最大値69cm、北側で最小値58cmを測る。床面積推定55.8 m^2 である。側溝はみられないが、南西側で長さ2.60m、幅0.40m、深さ0.30mの溝を検出した。ピットは床面で12個を検出したが構造柱の柱穴とみられるものはP 1~P 5の5本である。プランはP 1から順に(64 \times 50-51), (48 \times 46-43), (38 \times 43-50), (69 \times 99-79), (63 \times 80-69) cmで、柱穴間距離はP 1-P 2間から2.83, 2.80, 2.52, 2.68, 2.94mであり、他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



挿図 43 S I 13 遺構図



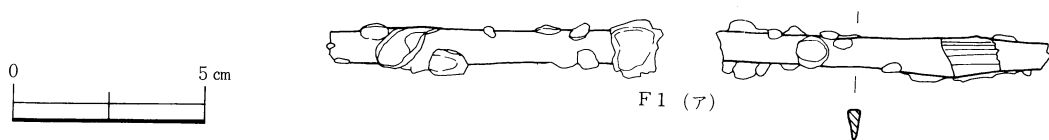
挿図 44 S I 13 遺物図その 1



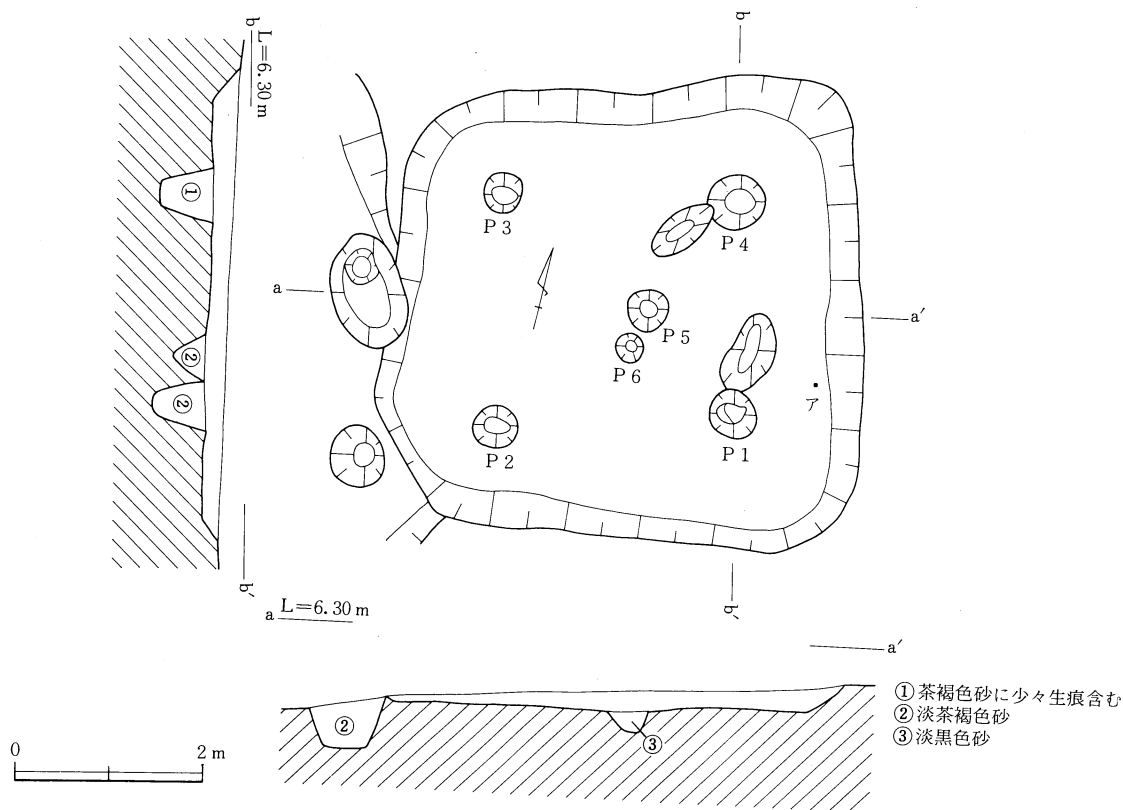
挿図 45 S I 13 遺物図その 2

S I 14 (挿図46・47, 図版4)

S I 14は10号墳と4号墳と13 I S D 01の間にあり, S I 15を切っている方形の住居跡である。東西の辺がやや長く, 主軸はN-80°-Eである。床面の大きさは, 長辺4.5m, 短辺3.9mを測り床面積は16m²である。壁高は北東側で最大値33cm, 南西側で最小値19cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で8個検出したが, 柱穴と考えられるものはP 1~P 4の4本である。プランはP 1から順に(53×48-64), (50×44-58), (43×40-50), (61×59-101)cmで, 柱穴間距離はP 1から2.5, 2.5, 2.6, 2.3mである。P 5, P 6は床のほぼ中央にあり, 埋砂が淡黒色で他とピットの異なり, 特殊ピットと考えられる。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。



挿図 46 S I 14 遺物図

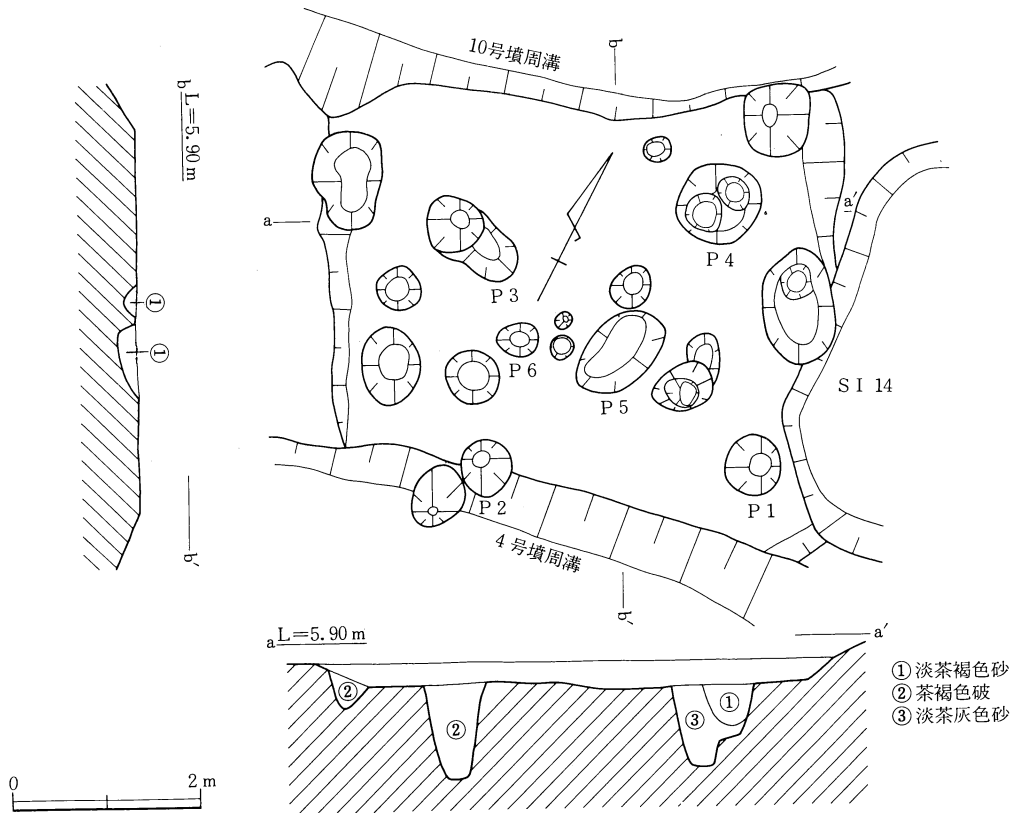


挿図 47 S I 14 遺構図

S I 15 (挿図48, 図版4)

S I 15は東のS I 14に南東隅を切られ, 10号墳と4号墳にそれぞれ北の辺と南の辺を切

られている。平面形は方形で床面は東西辺が4.8m、南北辺は残存部で4.2mを測る。主軸はN-24°-Wを振り、床面積は残存部で20m²である。壁高は最大値20cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で20個検出したが、柱穴と考えられるものはP1~P4の4本である。プランはP1から(66×60-90), (61×54-86), (112×61-100), (87×84-93)cmで柱穴間距離はP1から2.9, 2.5, 2.7, 2.8mである。他のピットは用途不明であるが、P5とP6については、中央にあることなどにより、特殊ピットの可能性がある。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。

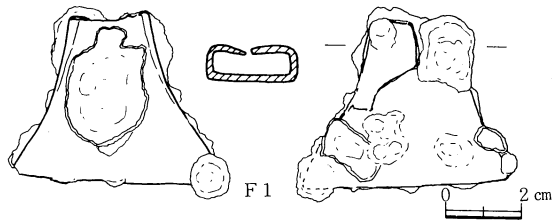
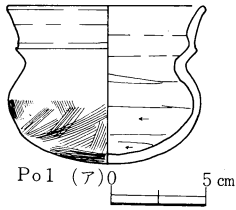


挿図 48 S I 15 遺構図

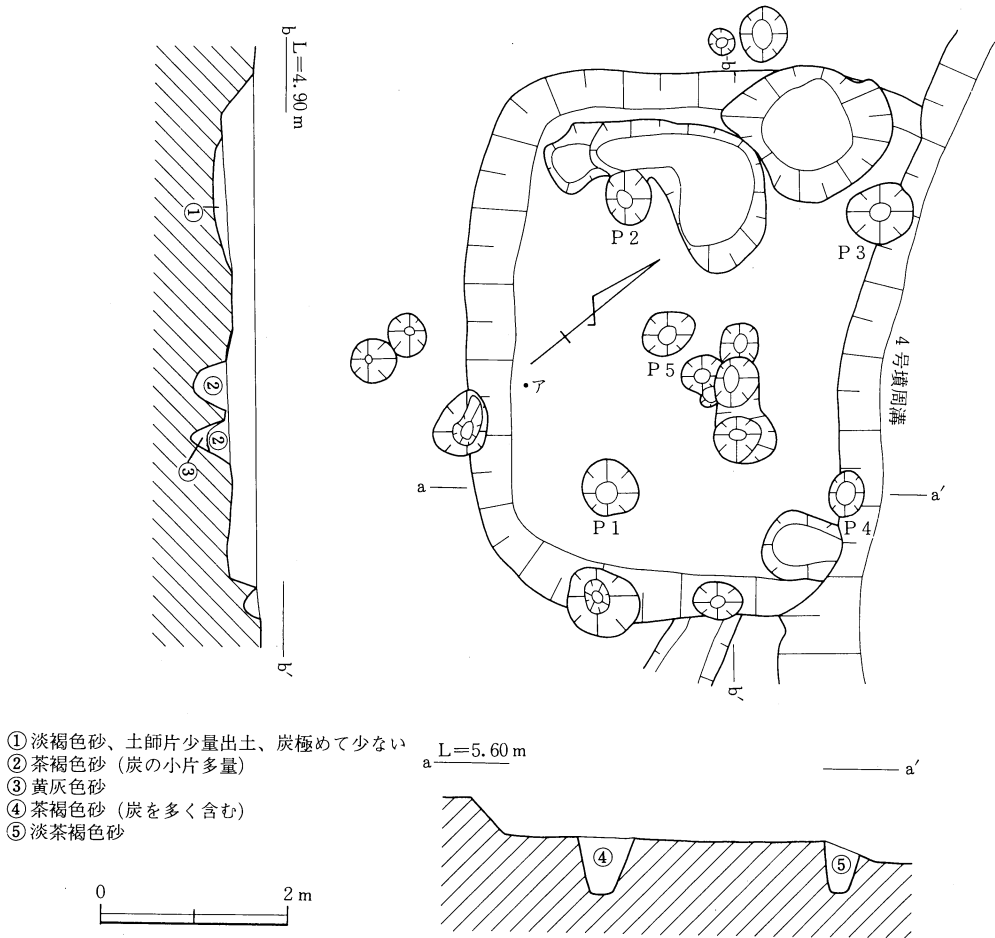
S I 16 (挿図49~51, 図版4・31)

13H地区にあり、S I 29の北西に位置しS I 29の南東隅を切り、4号墳周溝に北東側を切られている。平面形は隅丸方形で床面は長辺で5.0m、短辺4.8mを測り主軸はN-46°-Wである。床面積は24m²である。壁高は北側で最大値40cm、東側で最小値17cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で12個、壁で3個検出したが柱穴と考えられるものはP1~P4の4個である。プランはP1から(50×36-54), (63×57-58), (59×50-49), (70×60-46)cmで柱穴間距離はP1から2.5, 3.1, 2.75, 3.0mである。P5は埋砂が淡黒灰色を呈し、他の住居跡でみられる特殊ピットと同様のものと考えてよからう。他のピットの

用途は不明である。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。



挿図 49 S I 16 遺物図その 1 挿図 50 S I 16 遺物図その 2

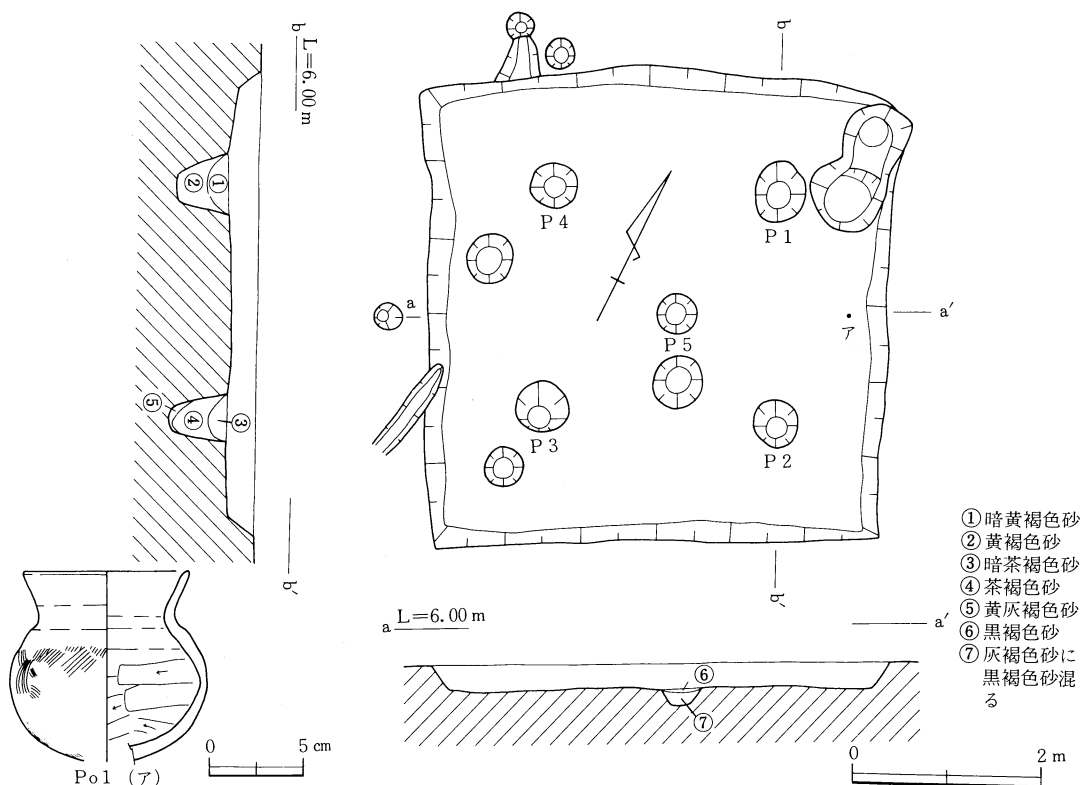


挿図 51 S I 16 遺構図

S I 17 (挿図52, 図版 4)

12H地区 I b 区にあり、S Z01の北東、3号墳下に位置する。平面形は正方形に近く、コーナーも直角に近い。床面の大きさは、長辺で4.90m、短辺で4.44mを測り主軸はN-65°-Eである。床面積は約20.4㎡になる。壁高は南東側で最大値29cm、北側で最小値25cm

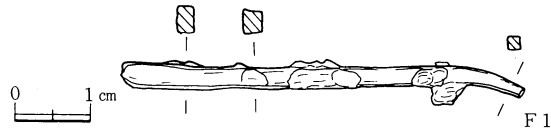
を測る。側溝はみられない。ピットは床面で10個検出したが柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4本である。プランはP 1から(67×54-57), (56×54-63), (57×52-70), (51×48-62) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間から3.3, 2.5, 2.4, 2.4mである。床面の中央にはP 5があり、プランは(43×43-18) cmを測る。場所的にみて特殊ピットと考えられる。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。



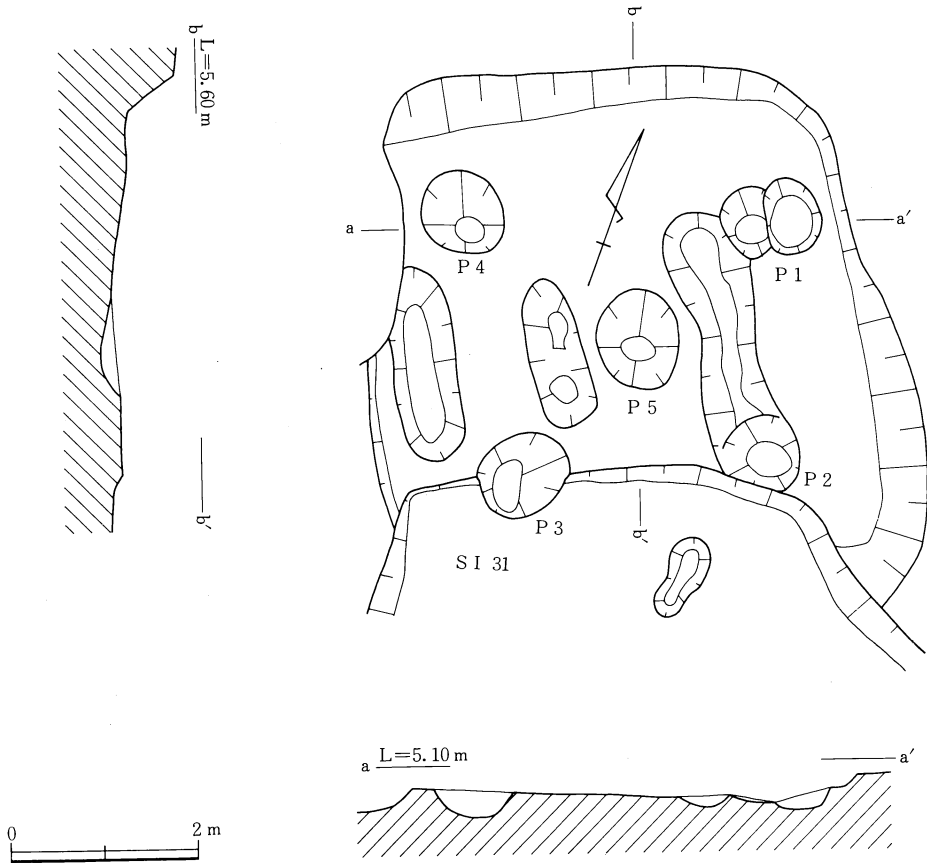
挿図 52 S I 17 遺構・遺物図

S I 18 (挿図53・54, 図版5・31)

13H地区にありS I 31に南側を切られ、4号墳の周溝で中央部北を切られている。平面形は方形で床面は残存部で長辺5.0m, 短辺4.9mを測り主軸はN-23°-Wを振る。床面積は約25㎡である。壁高は残存部北側で最大値48cmを測り、側溝はみられない。ピットは床面で6個検出し細長い土壌を3個検出している。柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4本である。プランはP 1から(82×59-23), (84×82-56), (106×86-56), (58×50-30) cmで柱穴間距離はP 1から2.5, 2.7, 2.7, 2.8mである。他のピット, 土壌は用途不明であるが, P 5については他のピット, 土壌に比べて埋砂の色が濃いので, 意識的なものとして特殊ピットと考えられる。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。



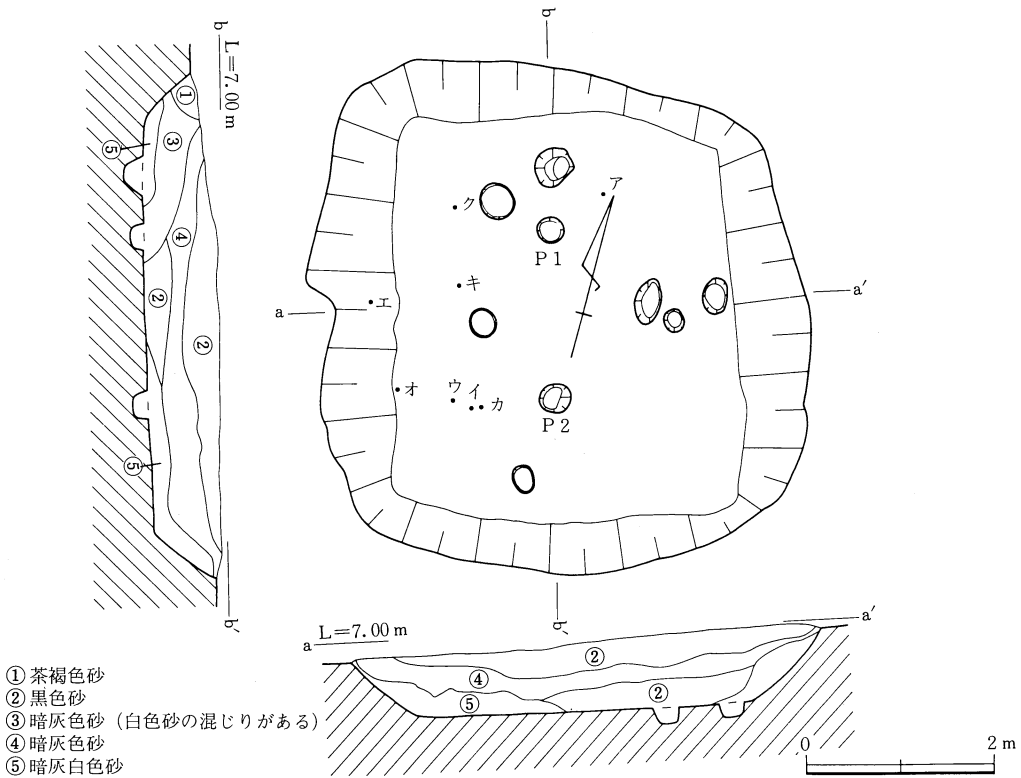
挿図 53 S I 18 遺物図



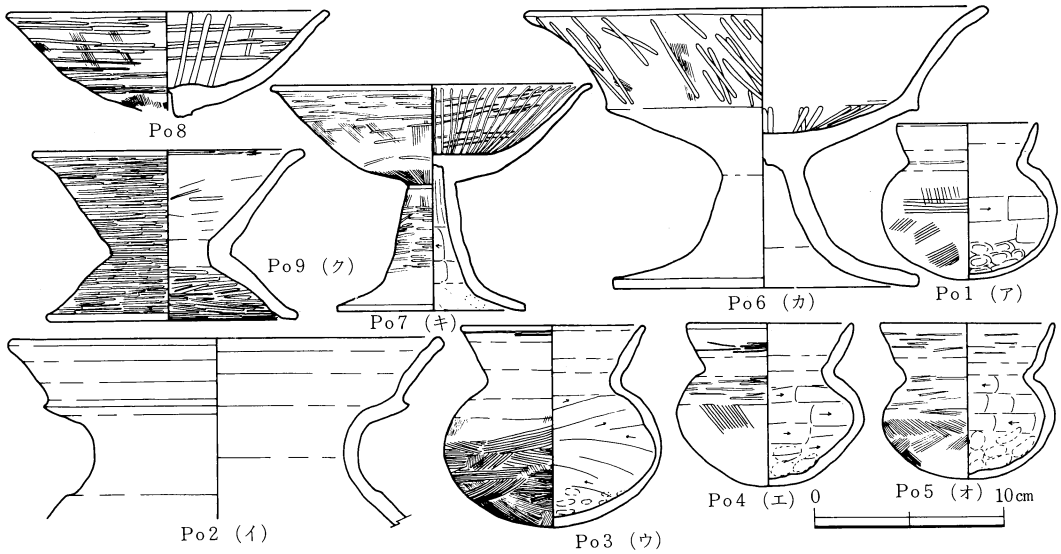
挿図 54 S I 18 遺構図

S I 19 (挿図55・56, 図版5・31)

54年度調査地区の進入路部分にあたり、11号墳の南西、S I 20の東に位置する。第3回県埋文発掘技術者講習会参加者の手で調査された。平面形は方形だが、正方形でなくコーナーがいびつである。床面は長辺4.4m、短辺3.6mを測り主軸はN-72°-Eである。床面積は約15.6m²である。壁高は西側で最大値76cm、北側で最小値40cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で9個検出したが、柱穴と考えられるものはP 1、P 2の2つである。プランはP 1から(32×30-16)、(35×32-15)cmで柱穴間距離は1.8mである。他のピットは用途不明である。時期は遺物より長瀬III期と考えられる。



挿図 55 S I 19 遺構図

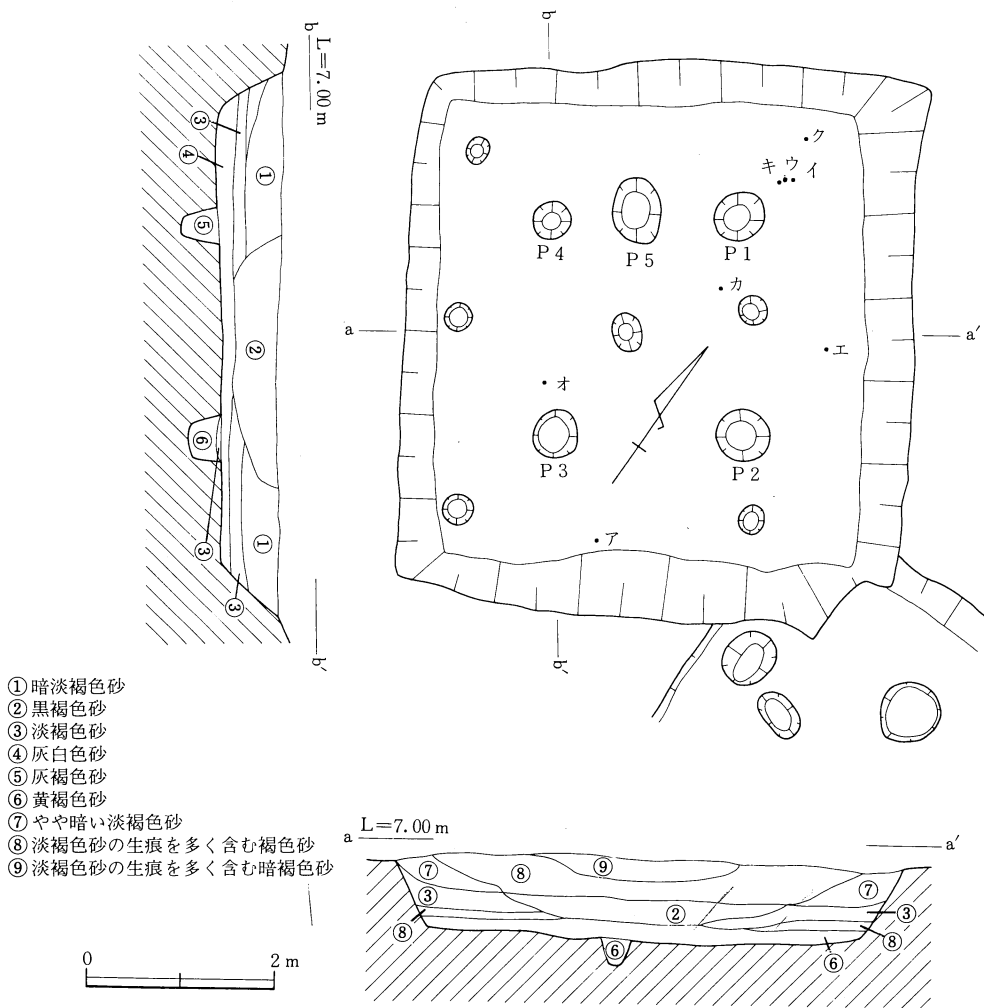


挿図 56 S I 19 遺物図

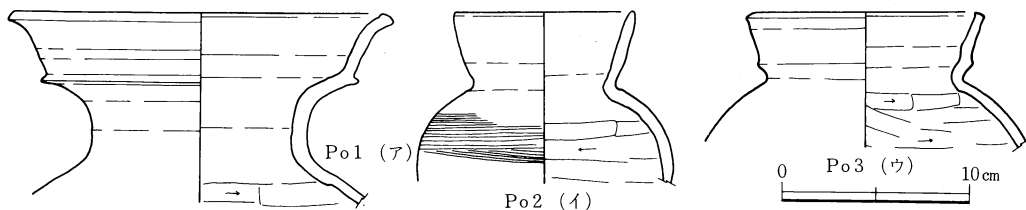
S I 20 (挿図57~59, 図版5・32)

進入路部分にあり S I 19の西, S X 14の北西に位置する。平面形は正方形に近く, コーナーも直角に近い。床面の大きさは長辺4.7m, 短辺4.5mを測り主軸はN-55°-Eである。床面積は21.2㎡になる。壁高は南側で最大値95cm, 北側で最小値66cmを測る。側溝は

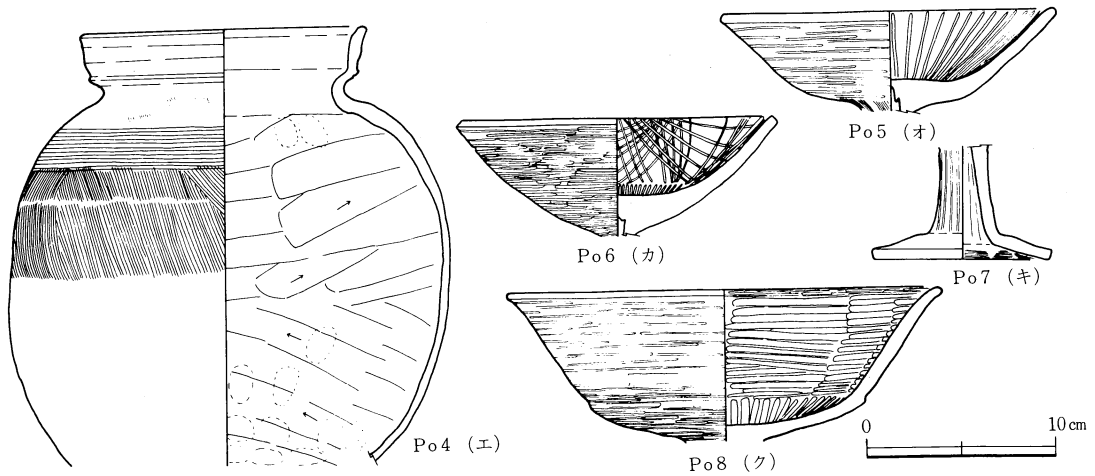
みられない。ピットは11個検出したが竪穴住居の構造柱の柱穴とみられるものはP1～P4の4本である。プランはP1から(55×50-38), (57×55-35), (50×47-32), (40×40-41) cmで柱穴間距離はP1-P2間から2.3, 2.0, 2.2, 2.0mである。P5は北西側に掘られた浅底の穴で、プランは(69×53-26) cmである。場所的にみて特殊ピットと考えられる。時期は長瀬II期と考えられる。



挿図 57 S I 20 遺構図



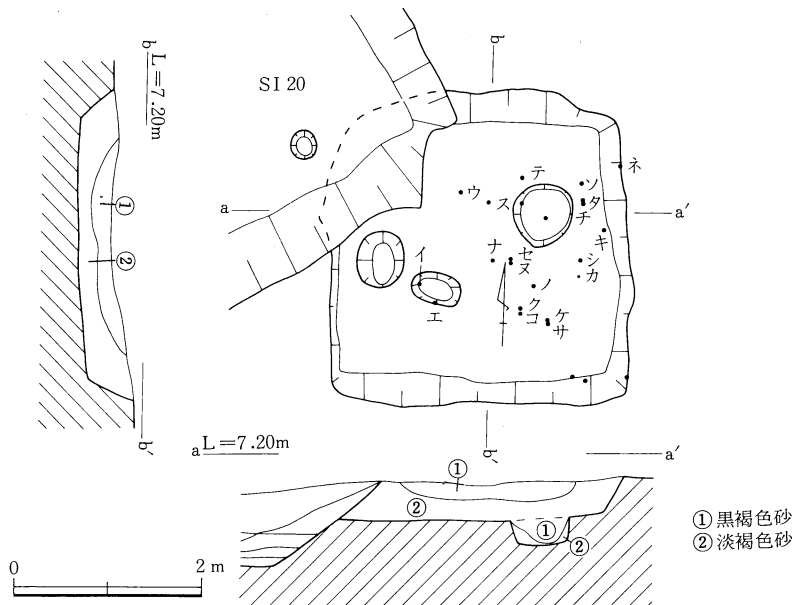
挿図 58 S I 20 遺物図その1



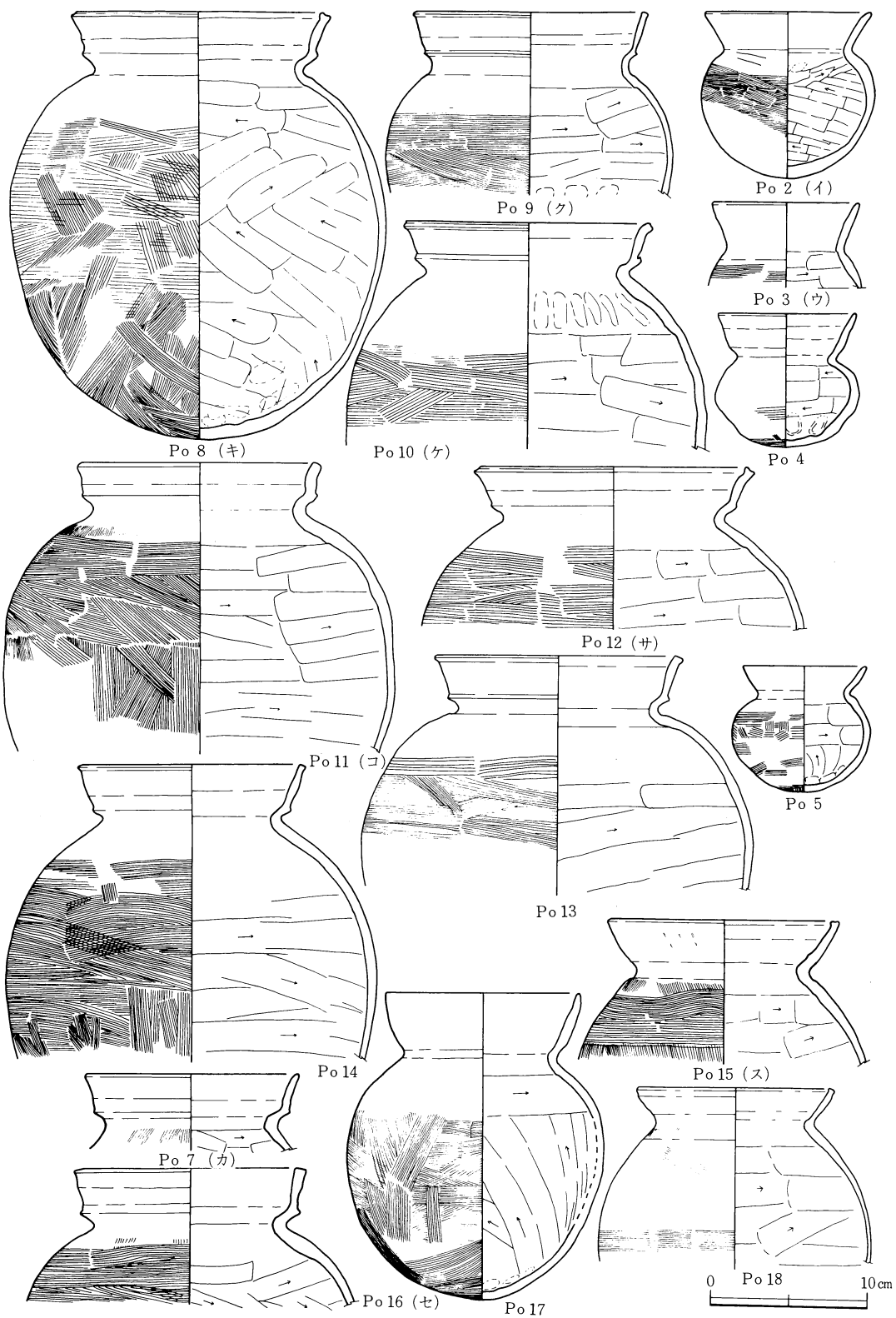
挿図 59 S I 20 遺物図その 2

S I 21 (挿図60~62, 図版 5・32)

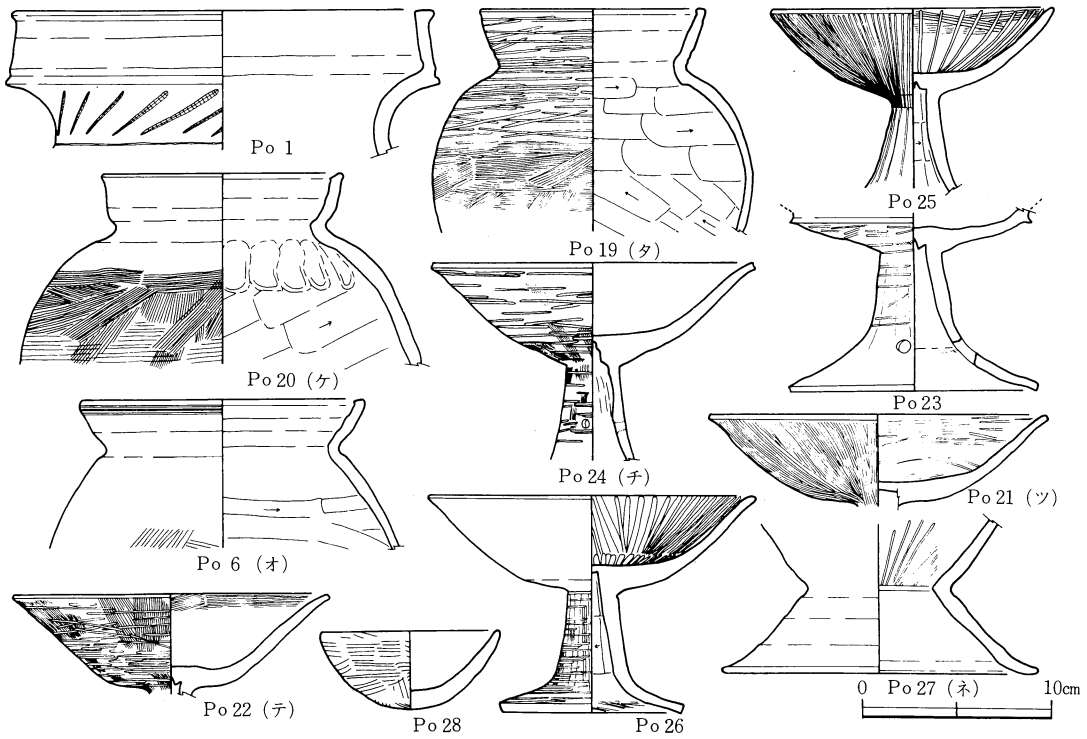
進入路部分にあり、S I 20の南東隅をかすめ、S I 19の南に位置する。平面形は正方形に近く、コーナーも直角に近い。床面の大きさは長辺2.9m、短辺2.7mを測り、主軸はほぼ真北をむく。床面積は7.8㎡である。壁高は南側で最大値49cm、西側で最小値26.4cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で3個検出したがすべて浅底で、柱穴となるものはない。S I 21の床のレベルは6.43m、S I 20の床が5.94mでその差が49cmあり、時期差なのか建物の構造差なのかは判断できない。時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。



挿図 60 S I 21 遺構図



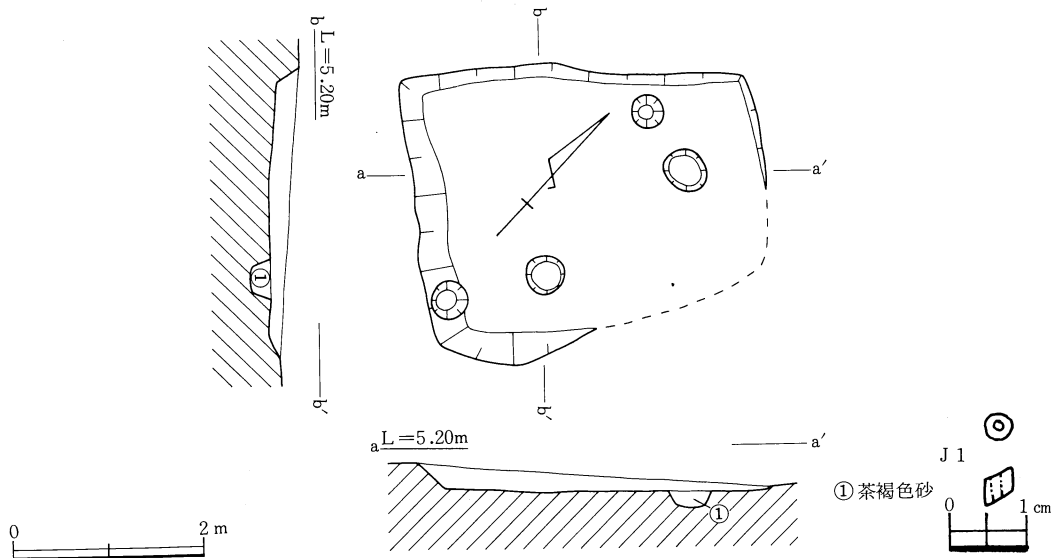
挿図 61 S | 21 遺物図その 1



挿図 62 S I 21 遺物図その 2

S I 22 (挿図63, 図版 6)

進入路部分にあり, 11号墳の南に位置する。平面形は長方形で, コーナーも直角に近い。床面の大きさは長辺3.4m, 短辺2.6mを測り, 主軸N-45-Eである。床面積は8.8m²である。壁高は西側で最大値33.4cm, 東側で最小値 0 cmを測る。側溝はみられない。ピットは

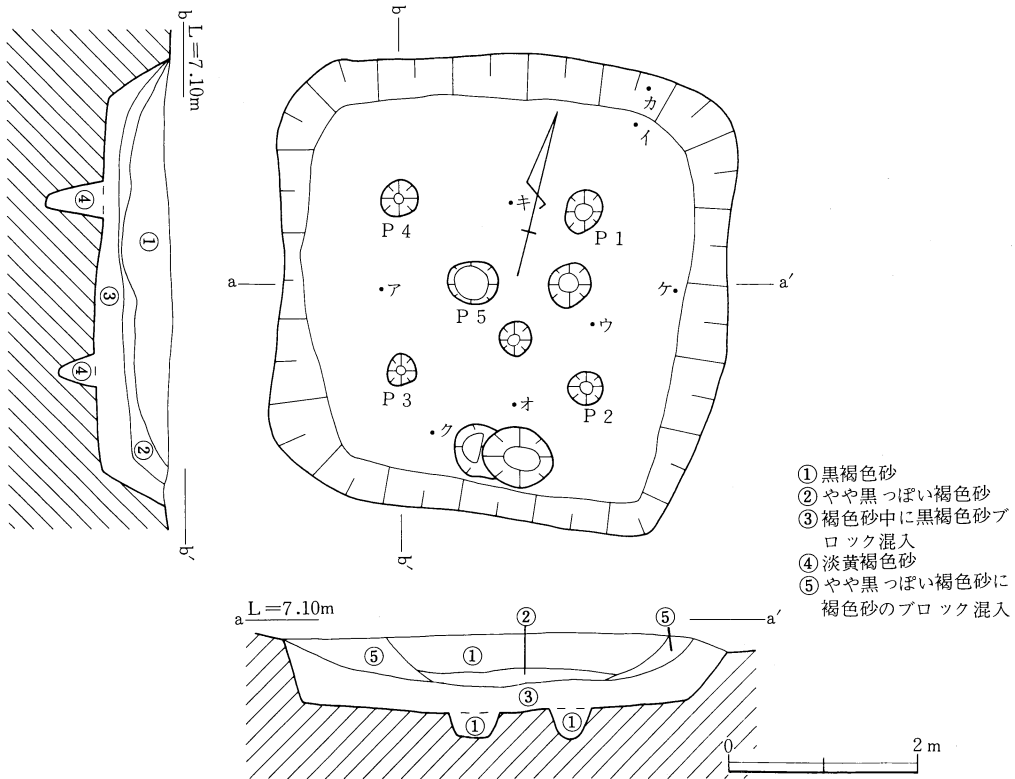


挿図 63 S I 22 遺構・遺物図

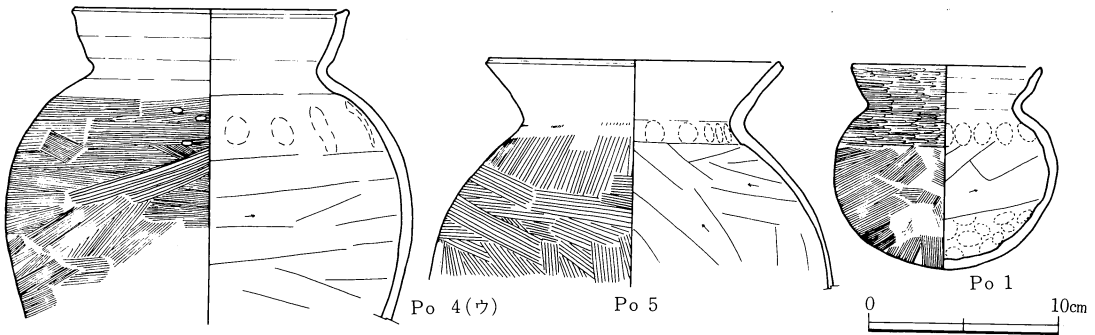
床面で4個検出したが、すべて浅底で柱穴となるものはない。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。

S I 23 (挿図64~66, 図版6・32・33)

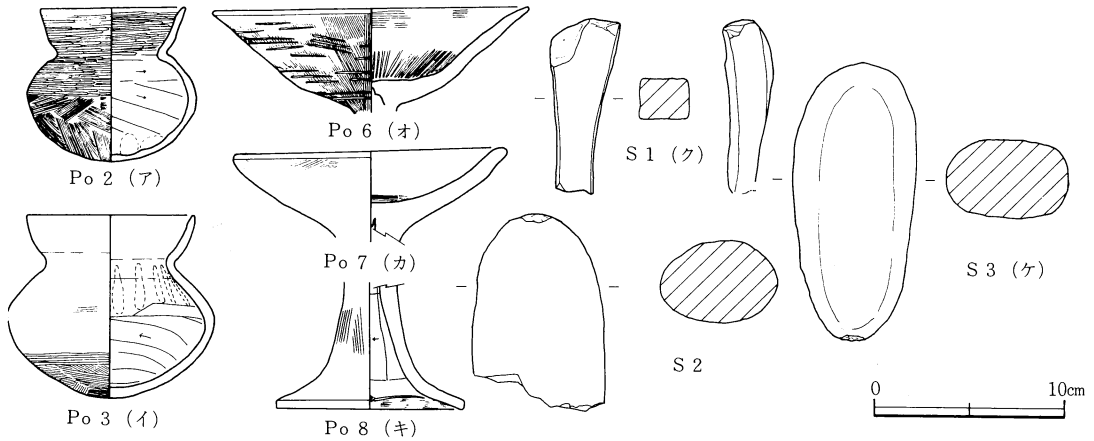
14 I 地区北西区, 15 I 北東区にまたがり, S X 15・16の西, S P 01の南に位置する。平面形は隅丸方形で、床面の大きさは長辺4.4m, 短辺4.1mを測り, 主軸はN-76°-Eである。床面積は16.1m²である。壁高は北東側で最大値49.1cm, 南西側で最小値37cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で9個検出したが、柱穴と考えられるものはP 1~P 4の4本である。このプランはP 1から(47×36-46.3), (37×37-53.8), (30×34-40),



挿図 64 S I 23 遺構図



挿図 65 S I 23 遺物図その 1

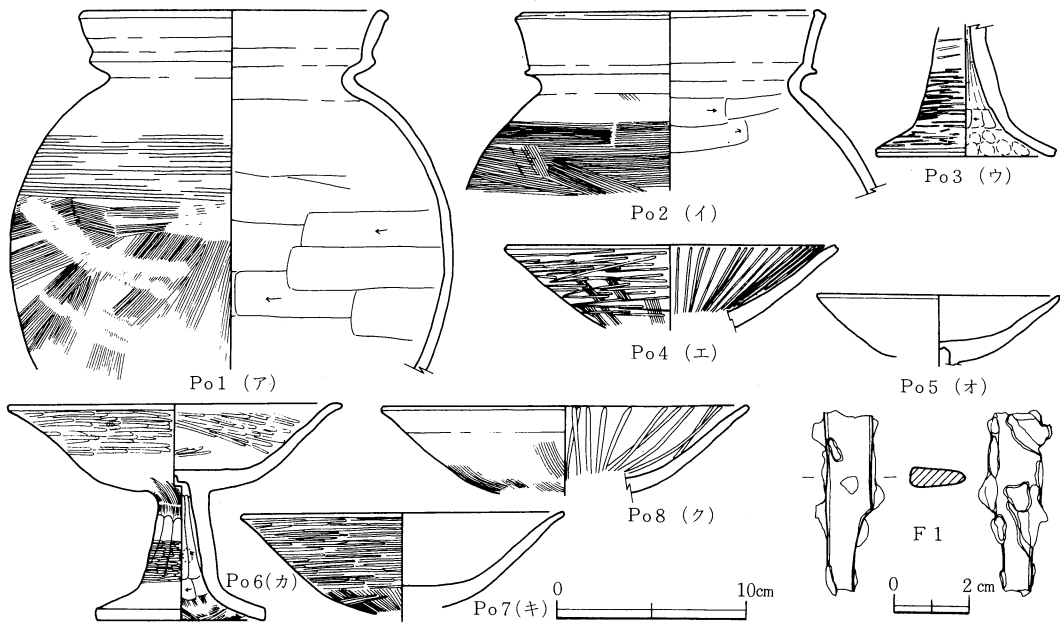


挿図 66 S I 23 遺物図その 2

(40×40-59.8) cmで、柱穴間距離はP 1-P 2間から1.55, 1.44, 1.59, 1.44mを測る。床面中央にはP 5 (55×46-26.2) cmがあり、場所的にみて特殊ピットと考えられる。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。

S I 24 (挿図67~69, 図版6・33)

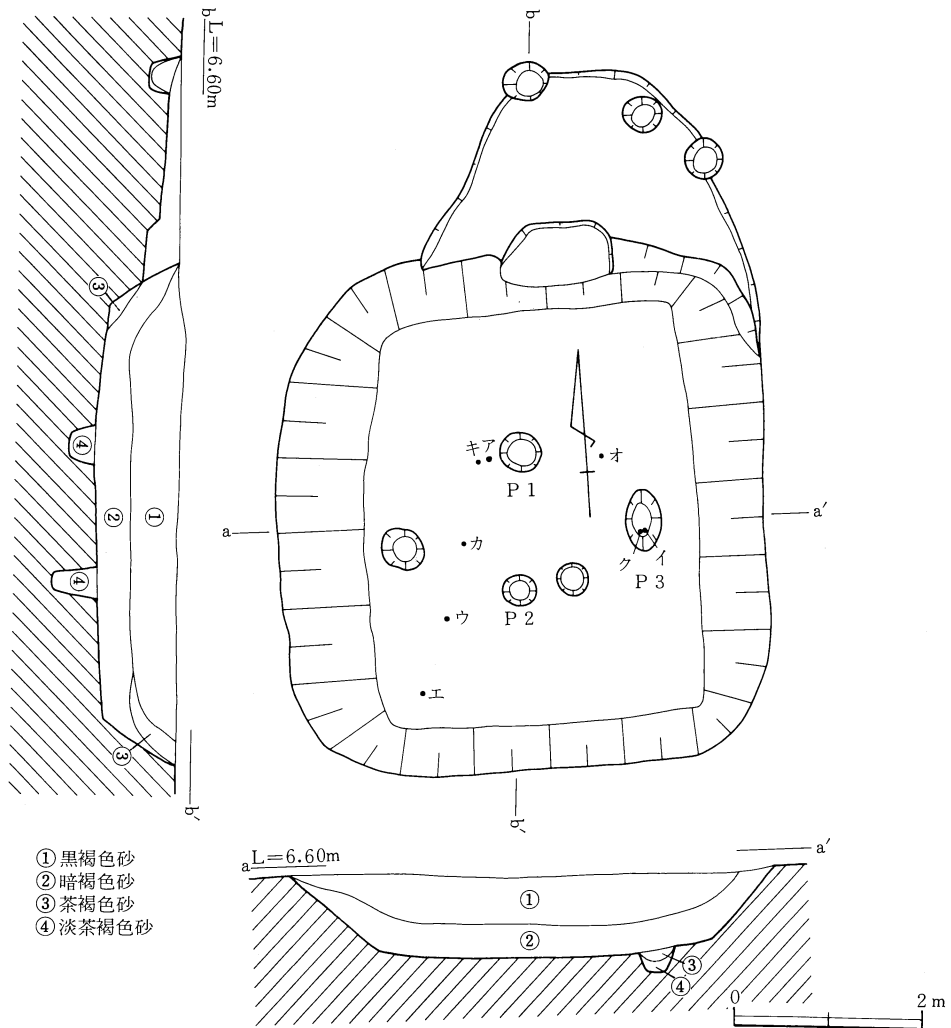
14 I 地区北西, 北東区にまたがり, S I 13の北西, S X15・16の東側に位置する。平面形は長方形をしている。床面は長辺4.3m, 短辺3.6mを測り, 主軸は南北にある。床面積は約15.5㎡である。壁高は東側で最大値88cm, 西側で最小値59cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で5個検出したが, 柱穴と考えられるものはP 1, P 2の2本である。このプランはP 1から(44×42-30), (36×33-49) cmを測る。柱穴間距離は1.44mであ



挿図 67 S I 24 遺物図その 1

挿図 68 S I 24 遺物図その 2

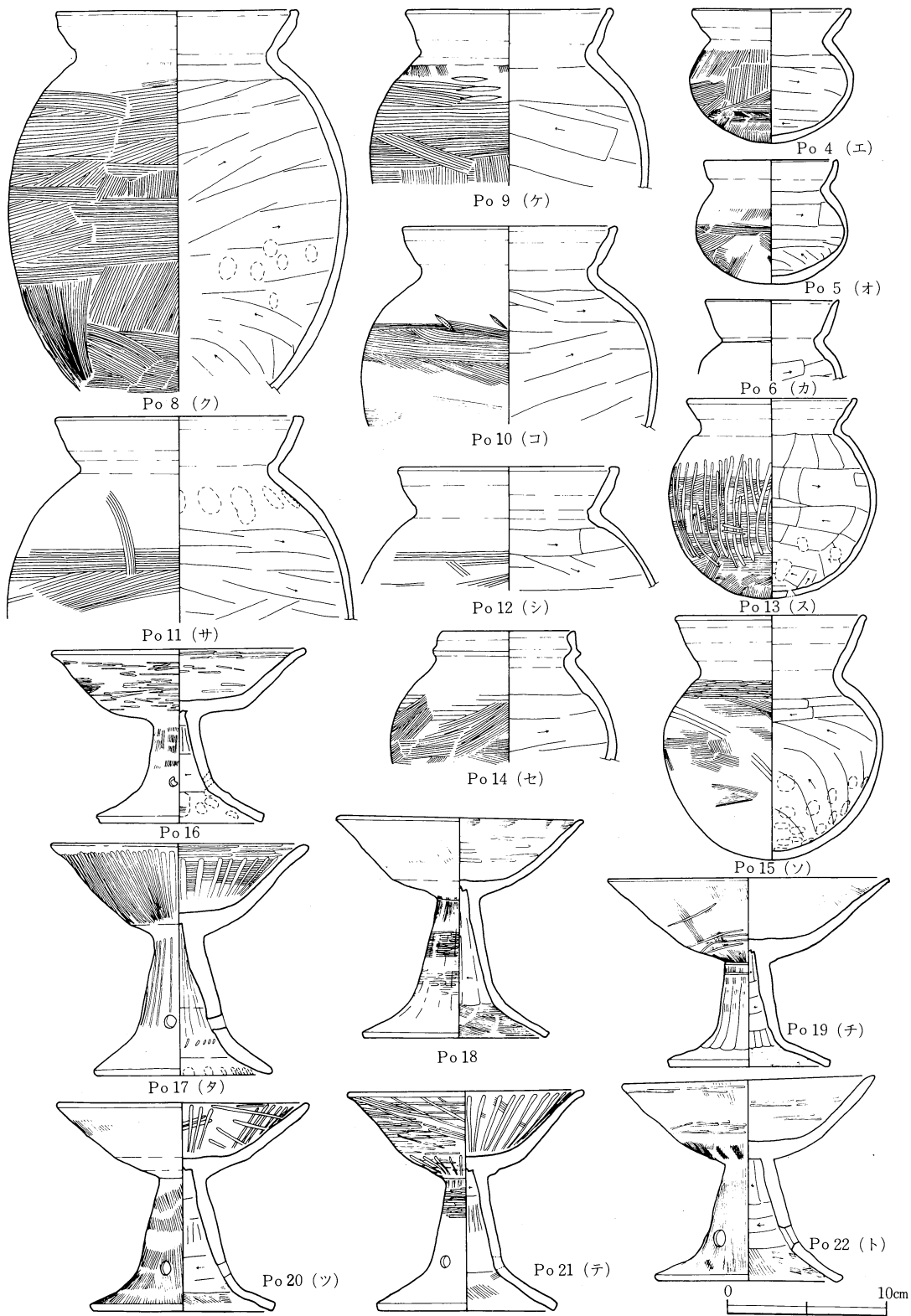
る。床面の東側にある P 3 は特殊ピットと考えられ、プランは (65×40-28) cm を測る。時期は出土遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。



挿図 69 S I 24 遺構図

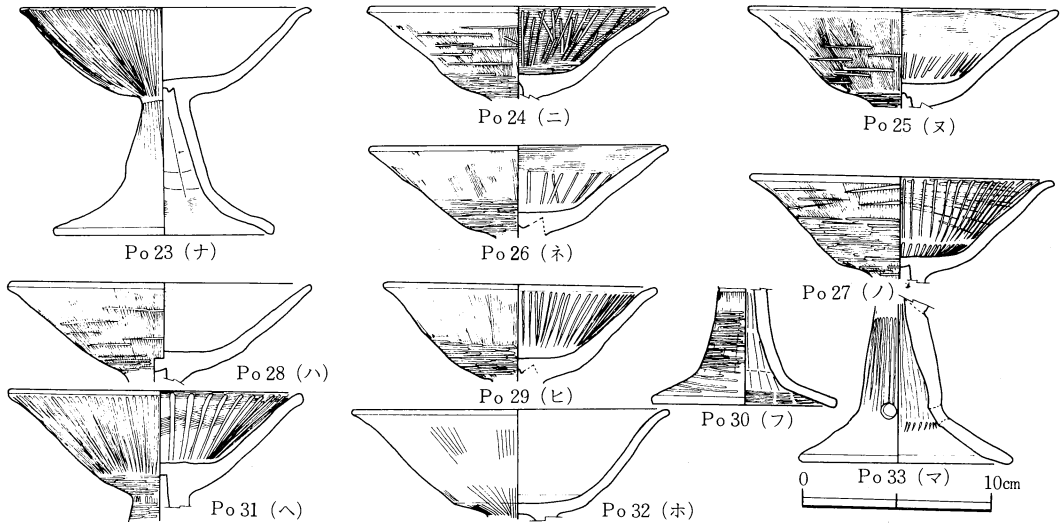
S I 25 (挿図70~74, 図版 6・33~35)

14 I 地区南西, 南東区にまたがり, S I 24の南, S I 27の北に位置し, S I 26と切り合っている。平面形は長方形である。床面の大きさは長辺7.28m, 短辺6.36mを測り, 主軸は N-70°-E である。床面積は約47.9m²になる。壁高は北側で最大値53.2cm, 東側で最小値43cmを測る。壁下より10~25cm内側に側溝がめぐる。側溝は最大幅46cm・深さ30cm, 最小幅30cm・深さ25.3cmのU字溝で四隅がやや深くなっている。ピットは床面で10個検出したが, 柱穴と考えられるものは P 1~P 3 の 3 個である。4 本柱と思われるが北東側のピットは検出できなかった。プランは P 1 から (32×30-41), (40×35-46), (31×31-35) cm を測る。柱穴間距離は P 1 - P 2 間が4.40m, P 2 - P 3 間が1.90mを測る。他のピット

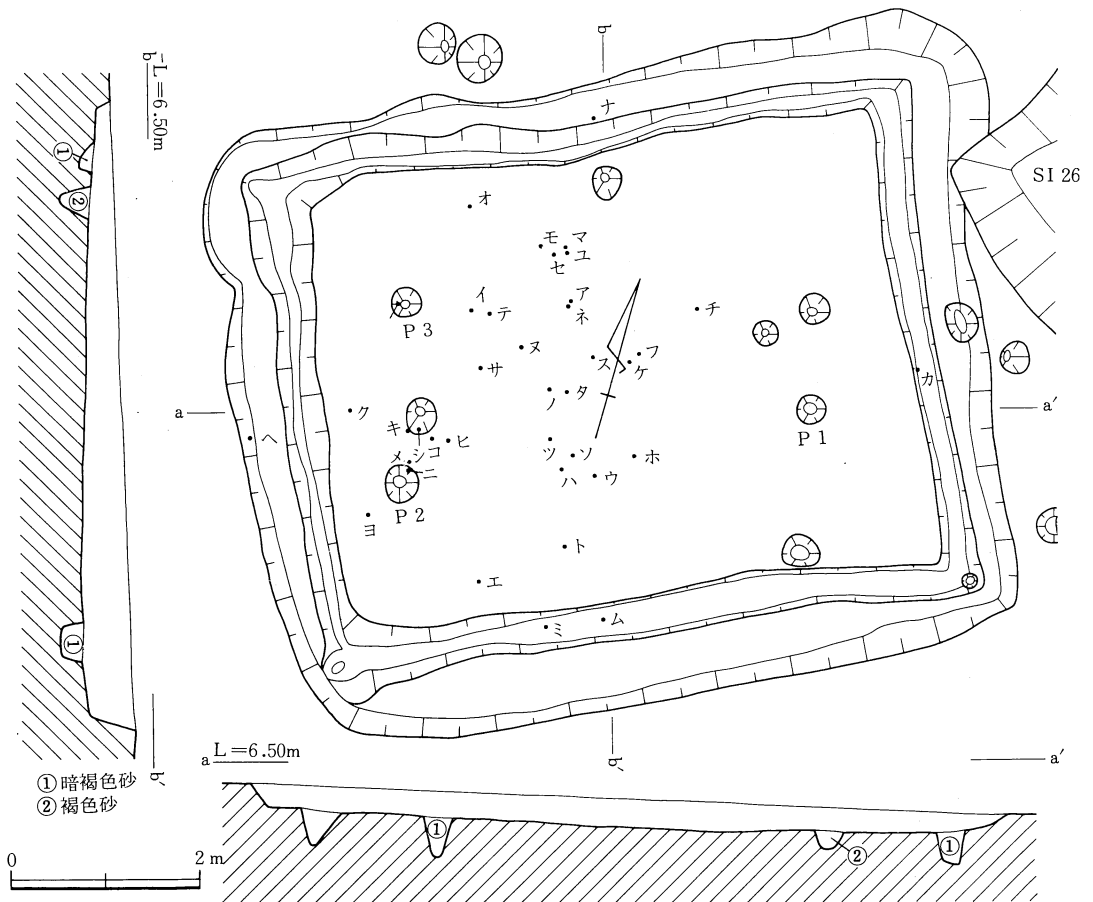


挿図 70 S I 25 遺物図その 1

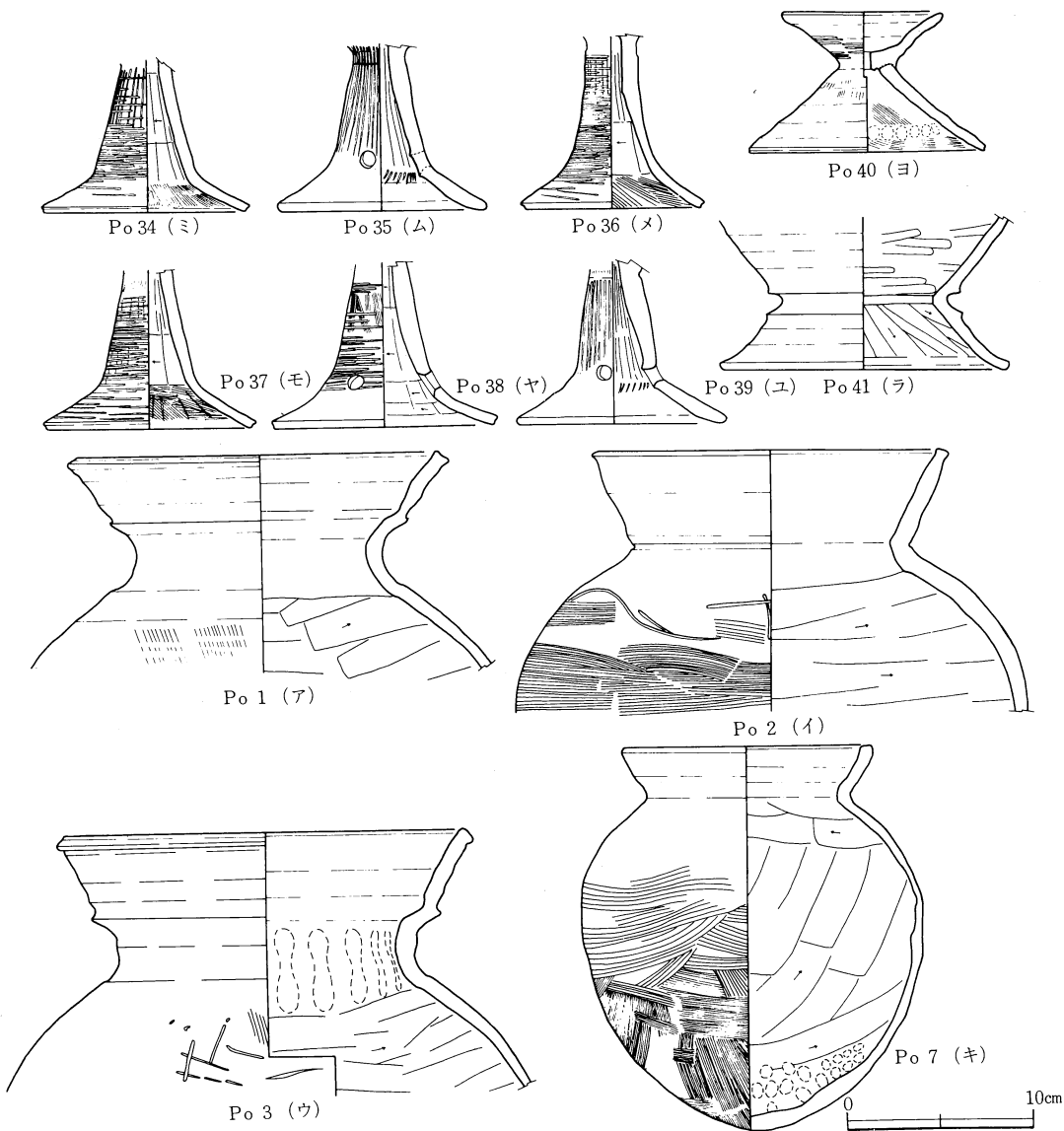
トの用途は不明である。時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。



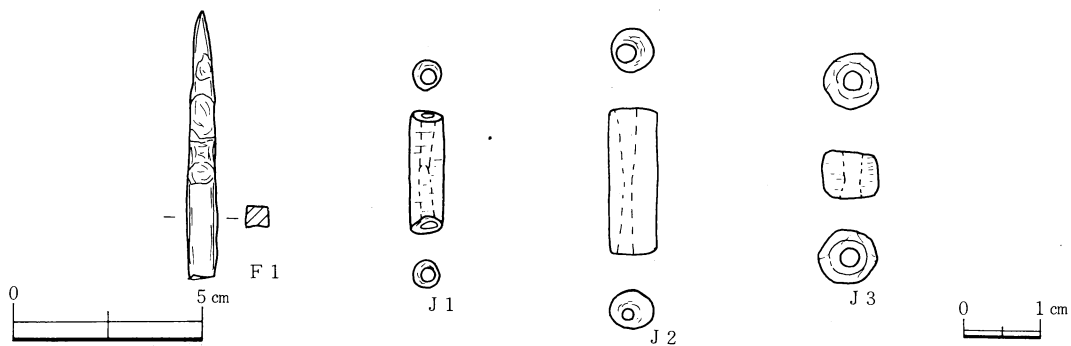
挿図 71 S I 25 遺物図その 2



挿図 72 S I 25 遺構図



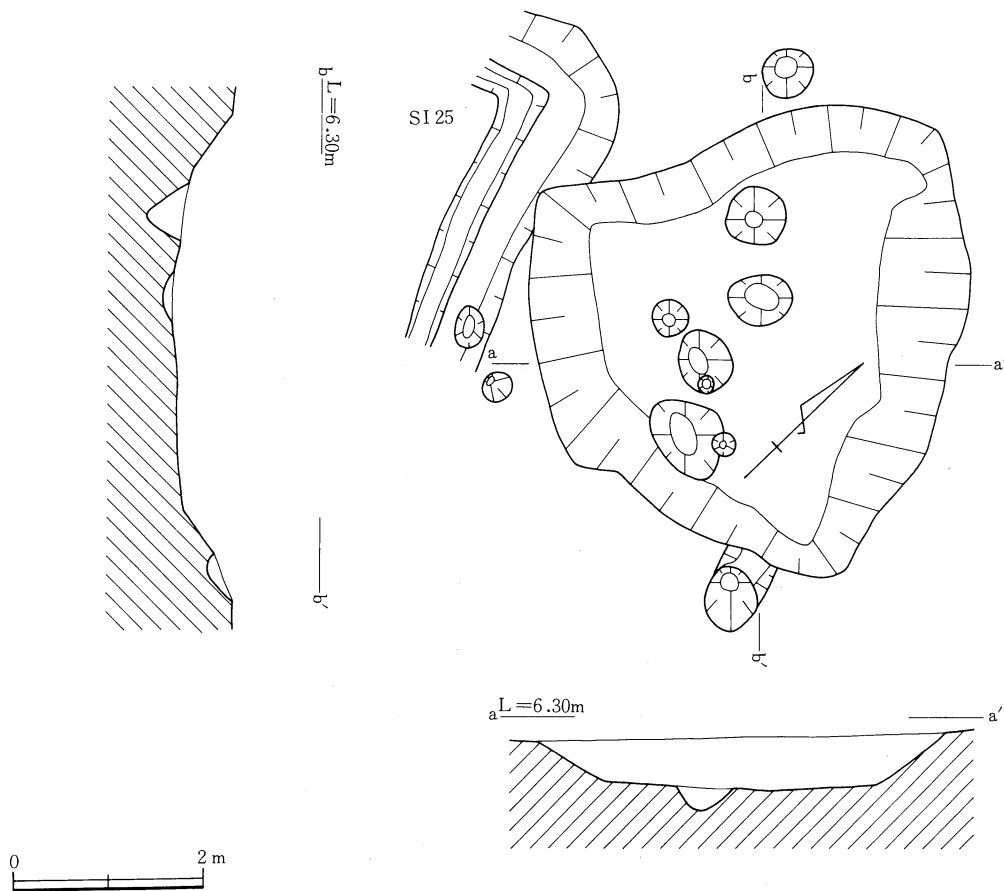
挿図 73 S I 25 遺物図その 3



挿図 74 S I 25 遺物図その 4

S I 26 (挿図75, 図版7)

14 I 地区南東区にあり, S I 13の南西, 10号墳の西に位置し, S I 25と切り合っている。平面形は不整形な三角形をなす。床面の大きさは長辺4 m, 短辺3 mを測る。床面積は約7.92m²である。壁はゆるやかで壁高は東側で最大値51.9cm, 北側で最小値40.3cmである。側溝はみられない。ピットは床面で7個検出したが柱穴と考えられるものは検出できなかった。ピットの用途は不明である。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。

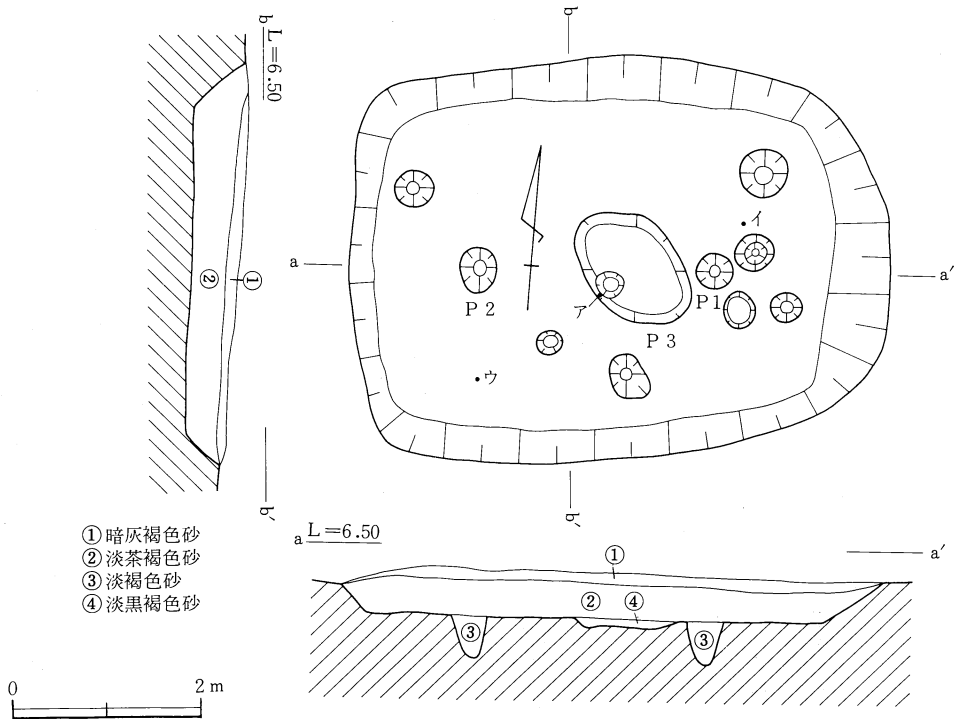


挿図 75 S I 26 遺構図

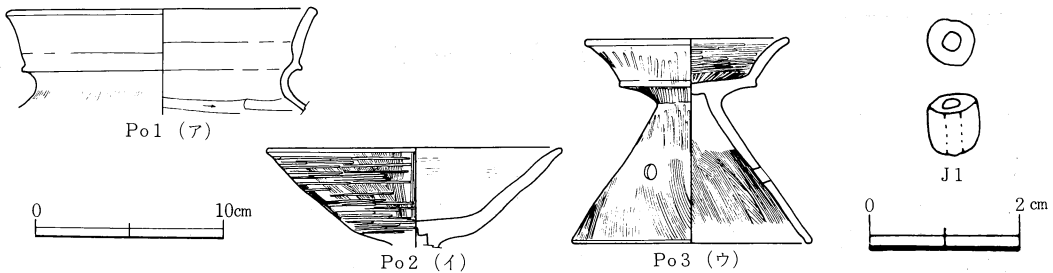
S I 27 (挿図76・77, 図版7・36)

14H地区北東区にあり, S I 25の南, 4号墳の西に位置する。平面形は隅丸の長方形である。床面の大きさは長辺4.86m, 短辺3.50mを測り, 主軸はN-86°-Eである。床面積は約17m²である。壁高は北側で最大値54.0cm, 西側で最小値30.6cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で9個検出したが, 柱穴と考えられるものはP 1とP 2である。このプランはP 1が(37×37-46) cm, P 2が(48×40-45) cmを測る。柱穴間距離P 1-P 2間で2.46mを測る。P 3(143×95-13) cmは場所的にみて特殊ピットと考えられる。他

のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬 I 期と考えられる。



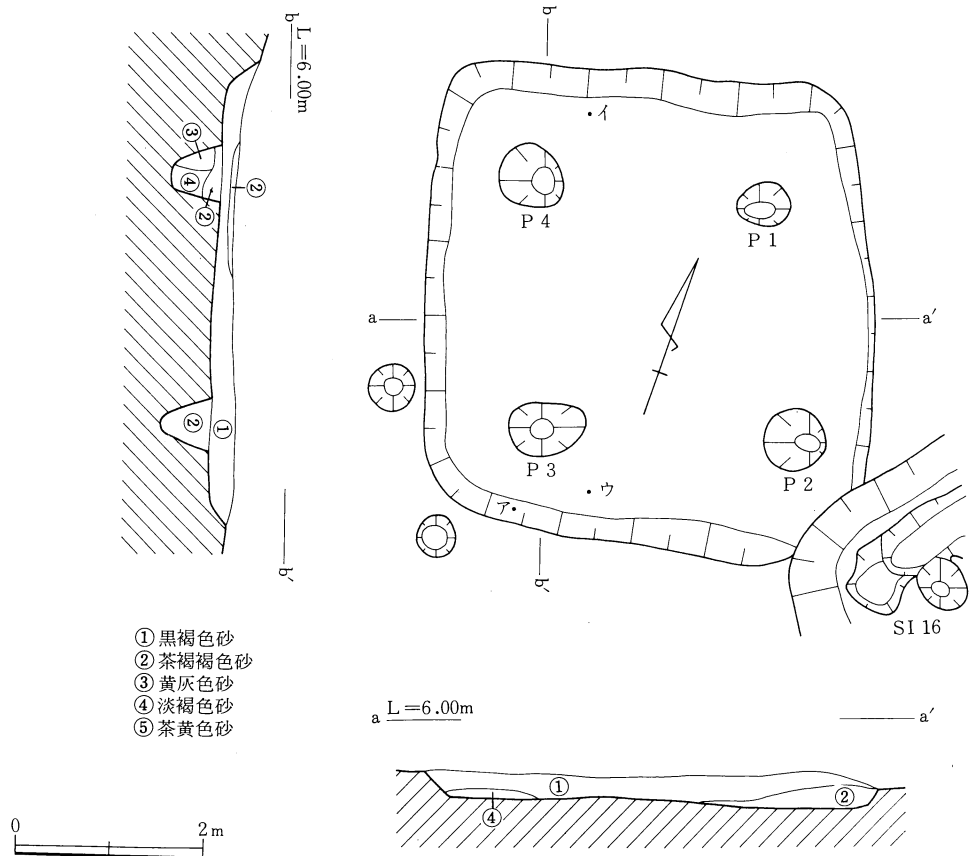
挿図 76 S I 27 遺構図



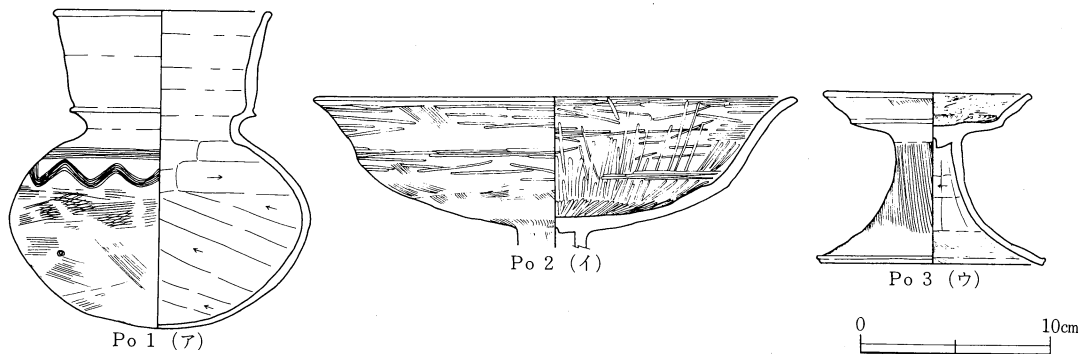
挿図 77 S I 27 遺物図

S I 28 (挿図78・79, 図版7・36)

14H地区の南東区にあり、S I 27の南東に位置する。S I 16と切り合っており、S I 28の方が古い。平面形は方形である。床面の大きさは長辺44.4m、短辺43.0mを測り、主軸はN-71°-Eである。床面積は24.0m²である。壁高は西側で最大値40.0cm、北側で最小値4.0cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面から4個検出した。P 1~P 4は構造柱の柱穴と考えられる。このプランはP 1より(57×47-37), (67×67-48), (83×58-57), (70×66-56) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2から1.95, 1.92, 1.96, 1.87mを測る。時期は遺物より長瀬 I 期と考えられる。



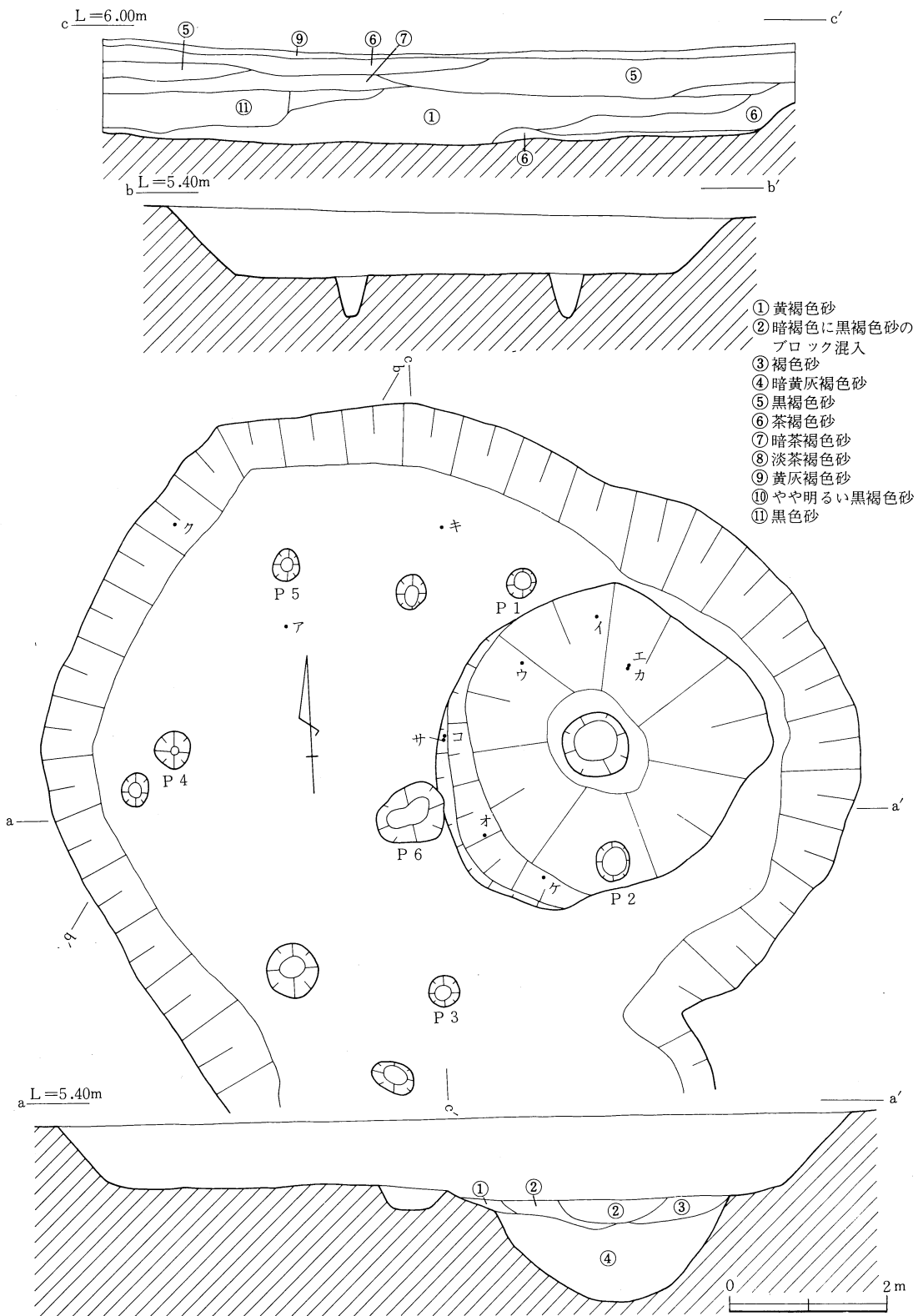
挿図 78 S I 28 遺構図



挿図 79 S I 28 遺物図

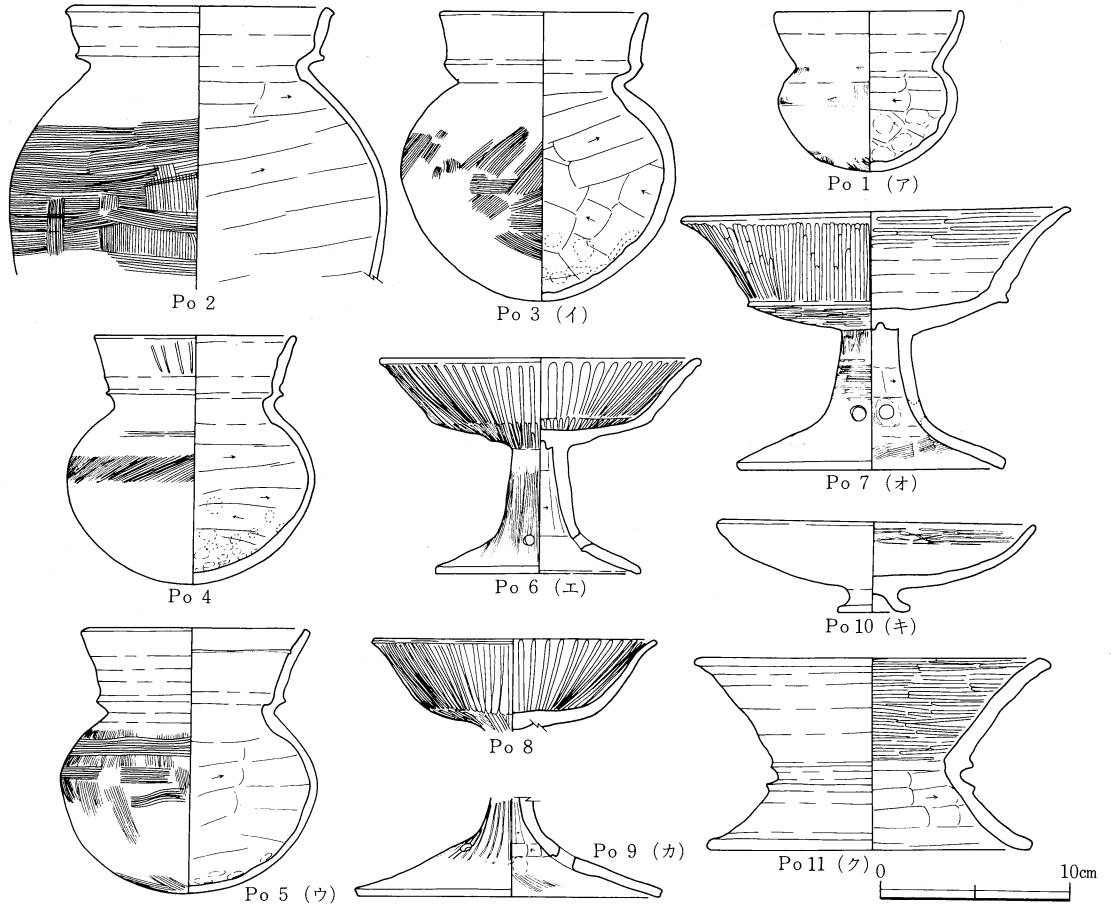
S I 29 (挿図80~83, 図版7・36・37)

13G地区の北西・北東区にまたがり、S I 31の西、S E 03の北に位置する。S E 01, S I 39と切り合っており、S I 29よりS E 01の方が古く、S I 39の方が新しい。平面形は不明であるが柱穴の在り方から五角形になるものと思われる。床面の大きさは南北で7.8m, 東西8.8mを測る。床面積は約57.6m²になろう。壁高は南東側最大値96.8cm, 西側で最小値

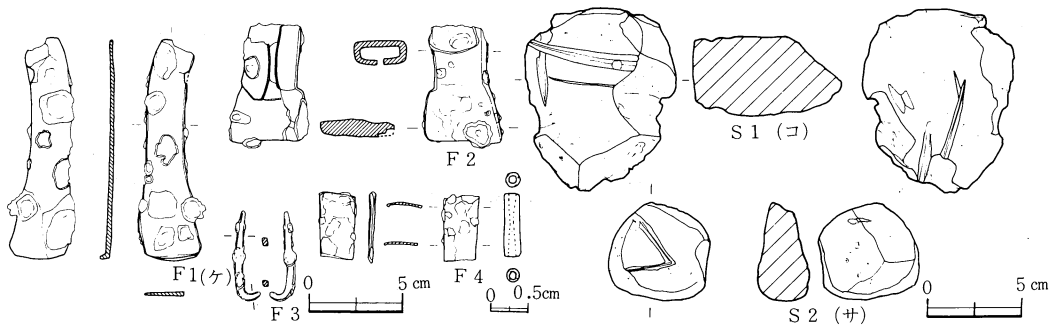


挿図 80 S I 29 遺構図

70.8cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で9個検出したが柱穴と考えられるものはP 1～P 5である。このプランはP 1から(38×37-34), (48×42-56), (39×39-30), (47×46-57), (40×35-54) cmである。柱穴間距離はP 1-P 2間からは3.68, 2.76, 4.60, 2.74, 3.04mを測る。床面のほぼ中央にP 6(92×72-30)cmがあり特殊ピットと考えられる。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



挿図 81 S I 29 遺物図その 1

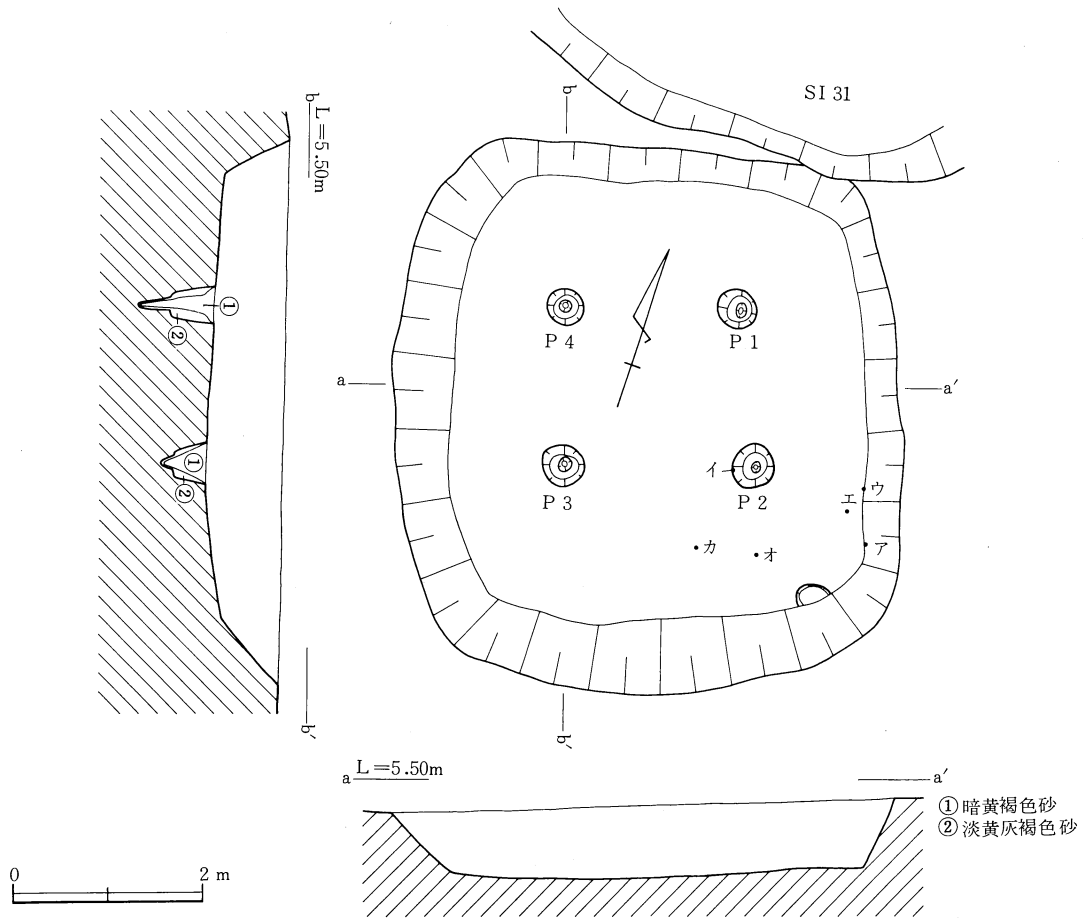


挿図 82 S I 29 遺物図その 2

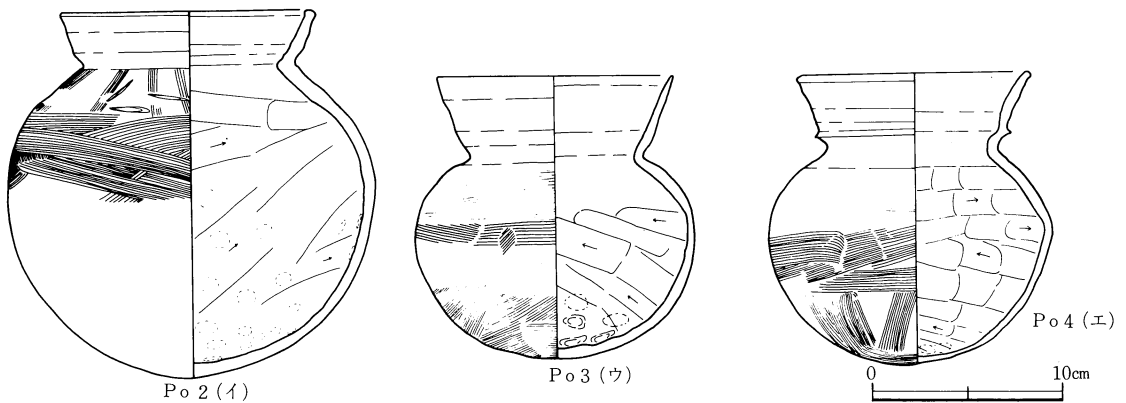
挿図 83 S I 29 遺物図その 3

S I 30 (挿図84~86, 図版 8・37・38)

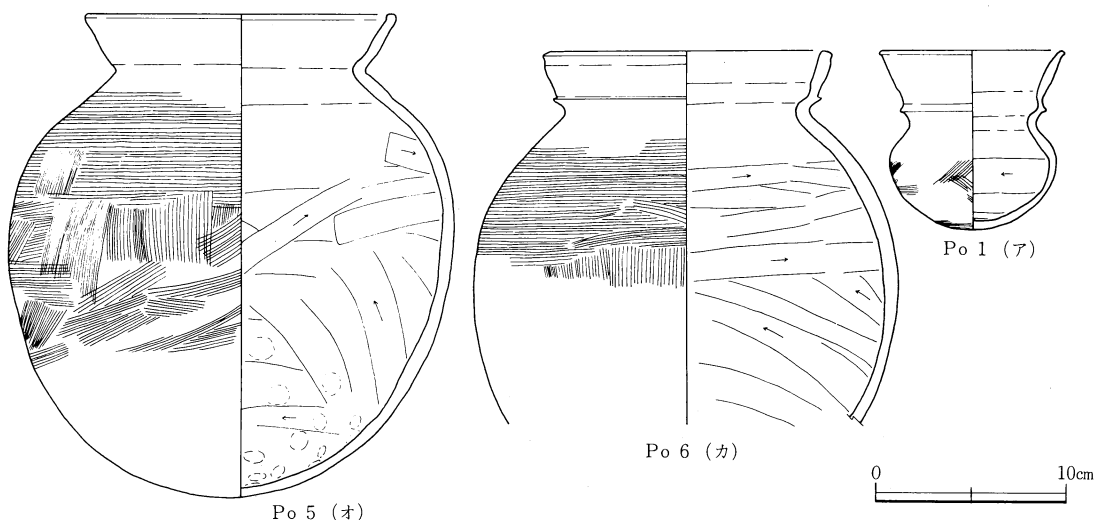
13G地区北東区にあり, S I 31の南, S Z 01の南東に位置する。平面形は方形をしてい



挿図 84 S I 30 遺構図



挿図 85 S I 30 遺物図その 1

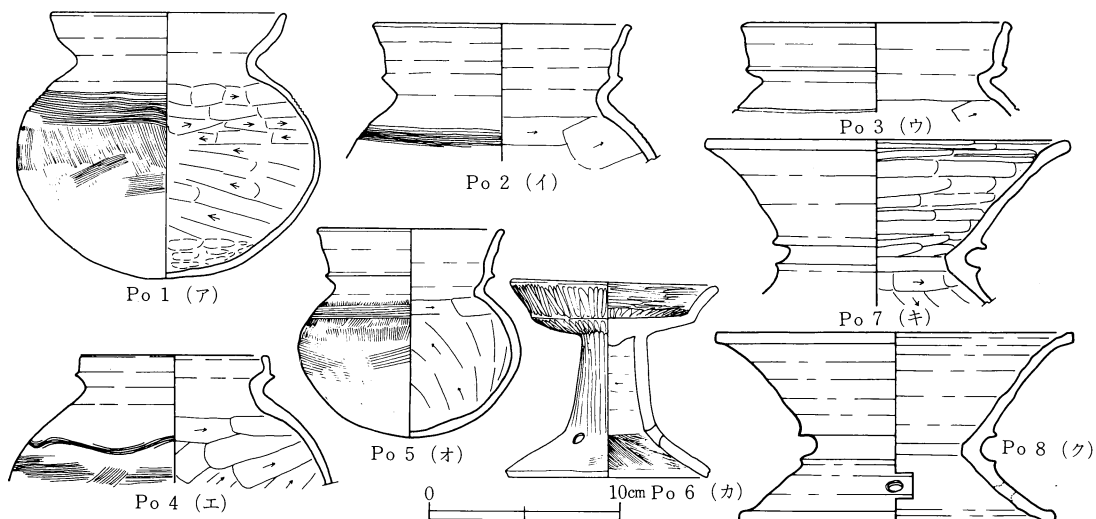


挿図 86 S I 30 遺物図その 2

る。床面の大きさは、長辺4.5m、短辺4.4mを測り、主軸はN-71°-E、床面積は19.8m²である。壁高は南側で最大値71cm、北側で最小値49cmを測る。側溝はみられない。床面から4個の柱穴を検出した。プランはP 1 から (43×42-45), (46×45-57), (45×45-50), (40×39-62) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2 間から1.66, 2.00, 1.66, 1.84mを測る。特殊ピットは検出できなかった。時期は遺物より長瀬 I 期と考えられる。

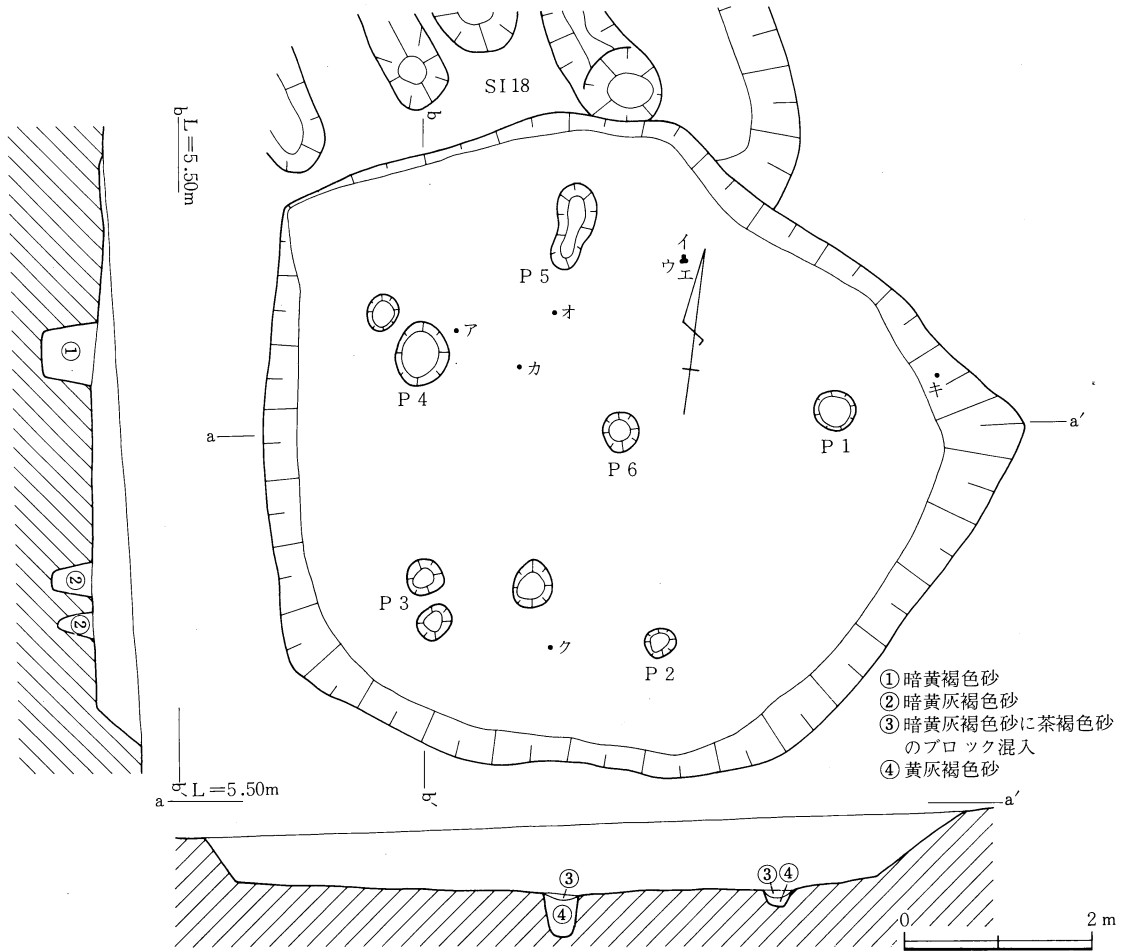
S I 31 (挿図87・88, 図版 8・38)

13G地区の北東区に位置し S I 30の北にある。S I 28と切り合っており、S I 28の方が古い。平面形は五角形である。床面の大きさは南北で約6.4m、東西で6.8mを測る。床面積は約43.5m²になる。壁高は東側で最大値66cm、北西側で最小値 4 cmを測る。側溝はみ



挿図 87 S I 31 遺物図

られない。ピットは床面から9個検出したが柱穴と考えられるものはP1～P5である。このプランはP1から順に(46×44-22), (34×30-22), (40×40-43), (60×68-51), (90×40-44)cmを測る。柱穴間距離はP1-P2間から3.1, 2.4, 2.8, 2.4, 3.4mを測る。P6は床面の中央にあり特殊ピットと思われる。このプランは(40×40-44)cmのものである。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。

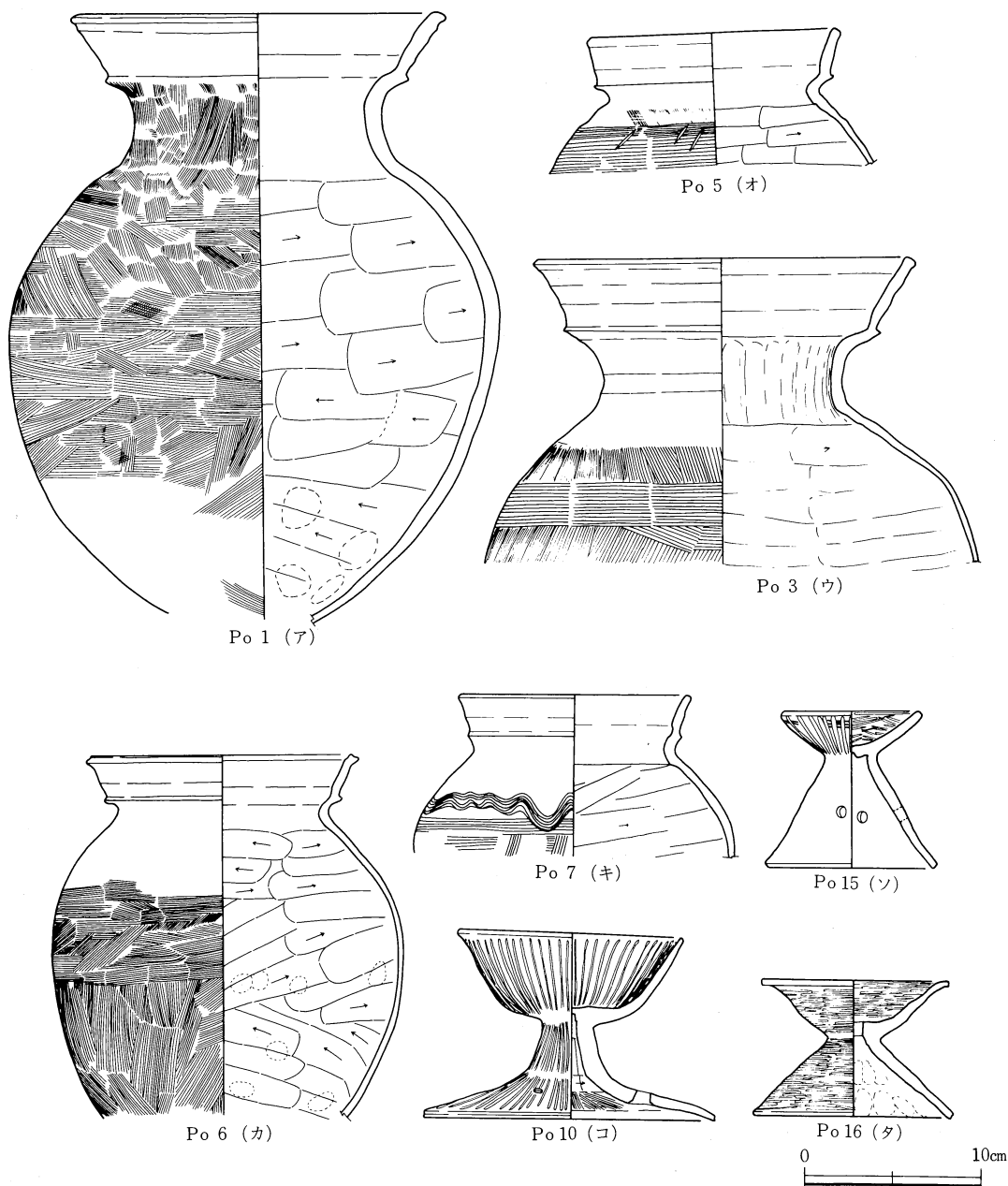


挿図 88 S I 31 遺構図

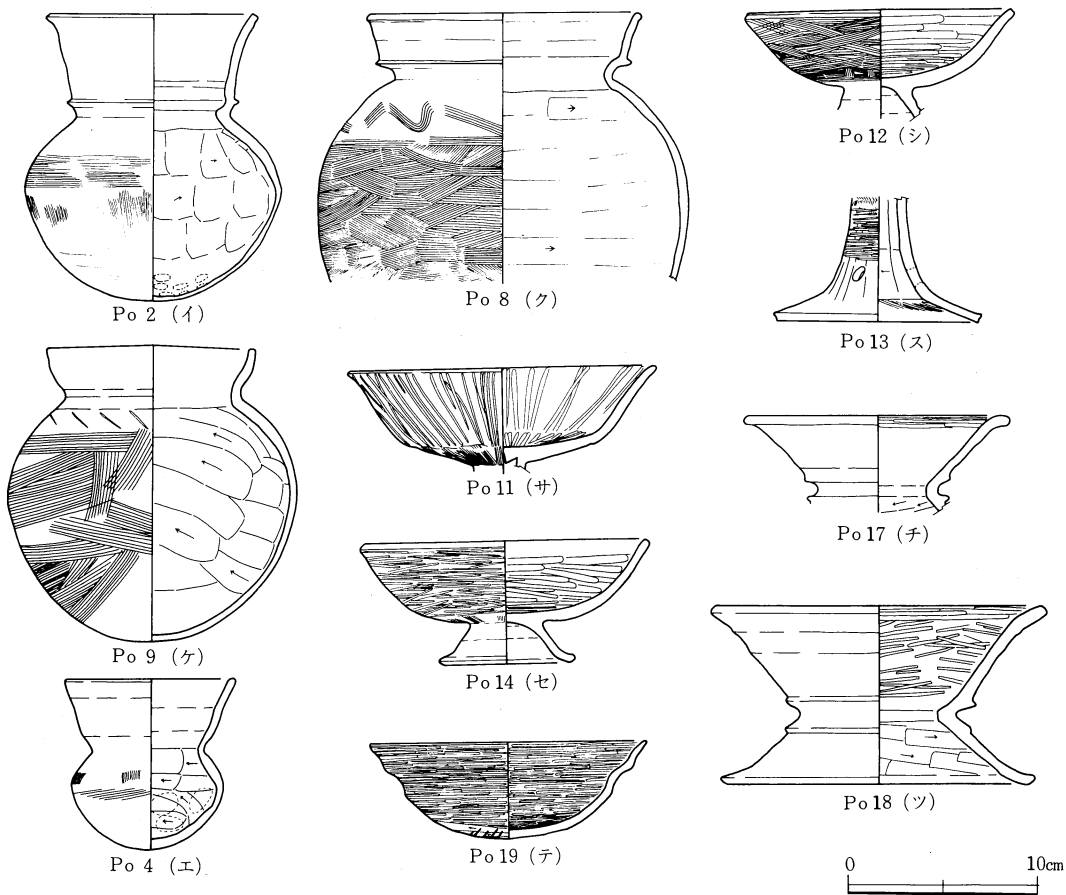
S I 32 (挿図89～92, 図版 8・38～40)

14H地区と14G地区にまたがり, S I 27の南, S E 02の北西に位置する。平面形は隅丸方形である。床面の大きさは1辺が5.26mを測り, 主軸はN-50°-Eである。床面積は約27.7㎡である。壁高の北側で最大値96.0cm, 南側で最小値50.0cmを測る。側溝は見られない。ピットは床面で6個検出したが柱穴と考えられるものはP1～P4である。このプランはP1から(65×65-56), (54×52-46), (71×61-46), (76×40-45)cmで柱穴間距離はP1-P2間から3.41, 2.70, 2.84, 2.88mを測る。P5は中央よりやや北側にずれ

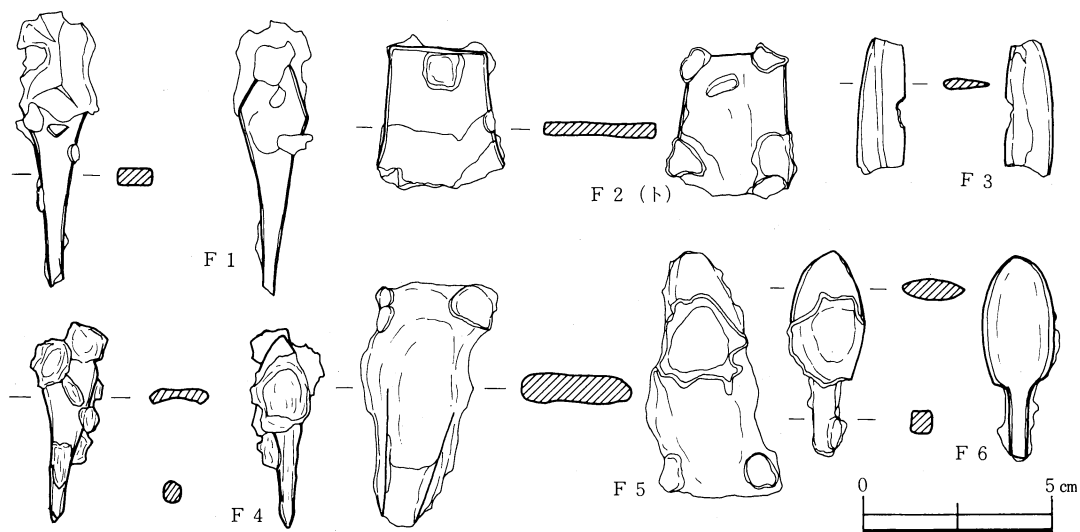
るが特殊ピットと考えられる。プランは(66×66-41)cmを測る。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



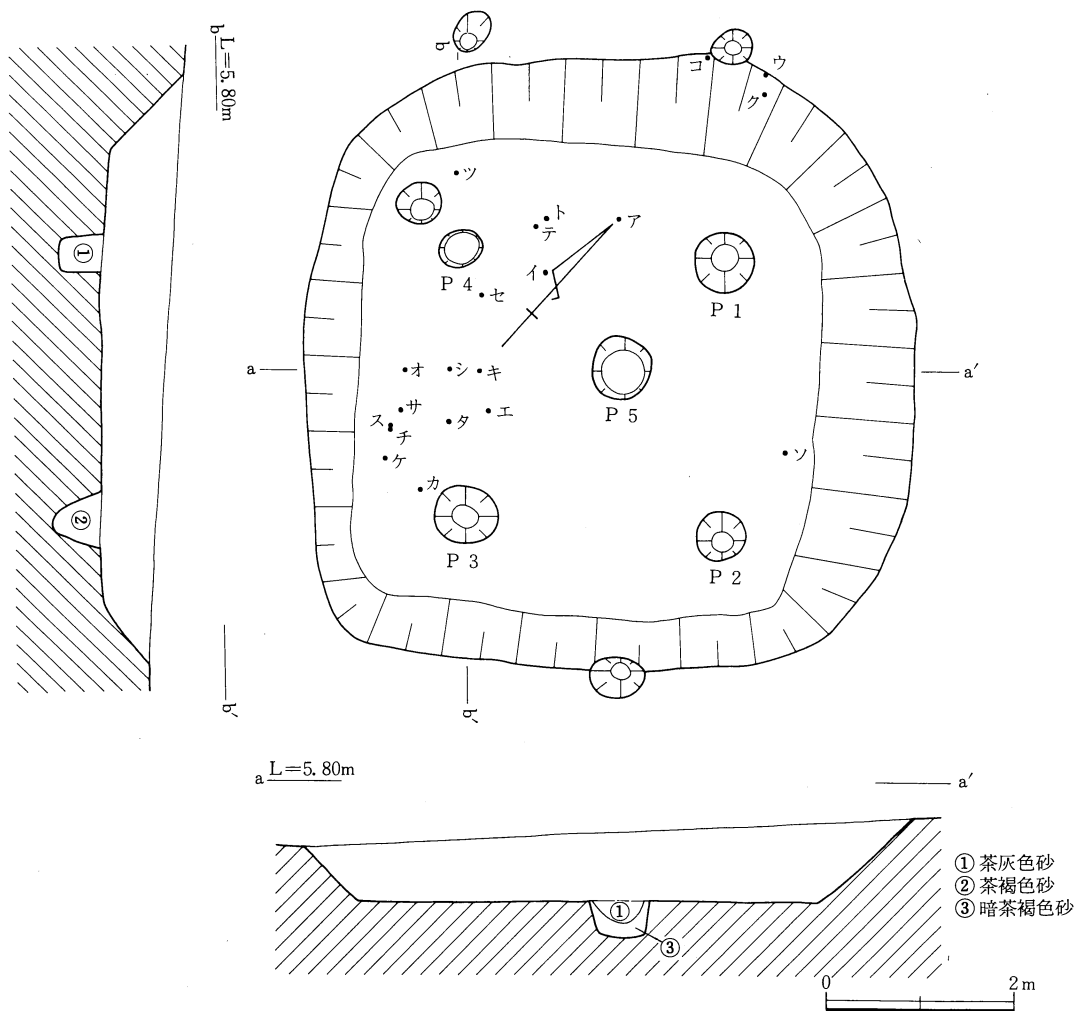
挿図 89 S I 32 遺物図その1



挿図 90 S I 32 遺物図その 2



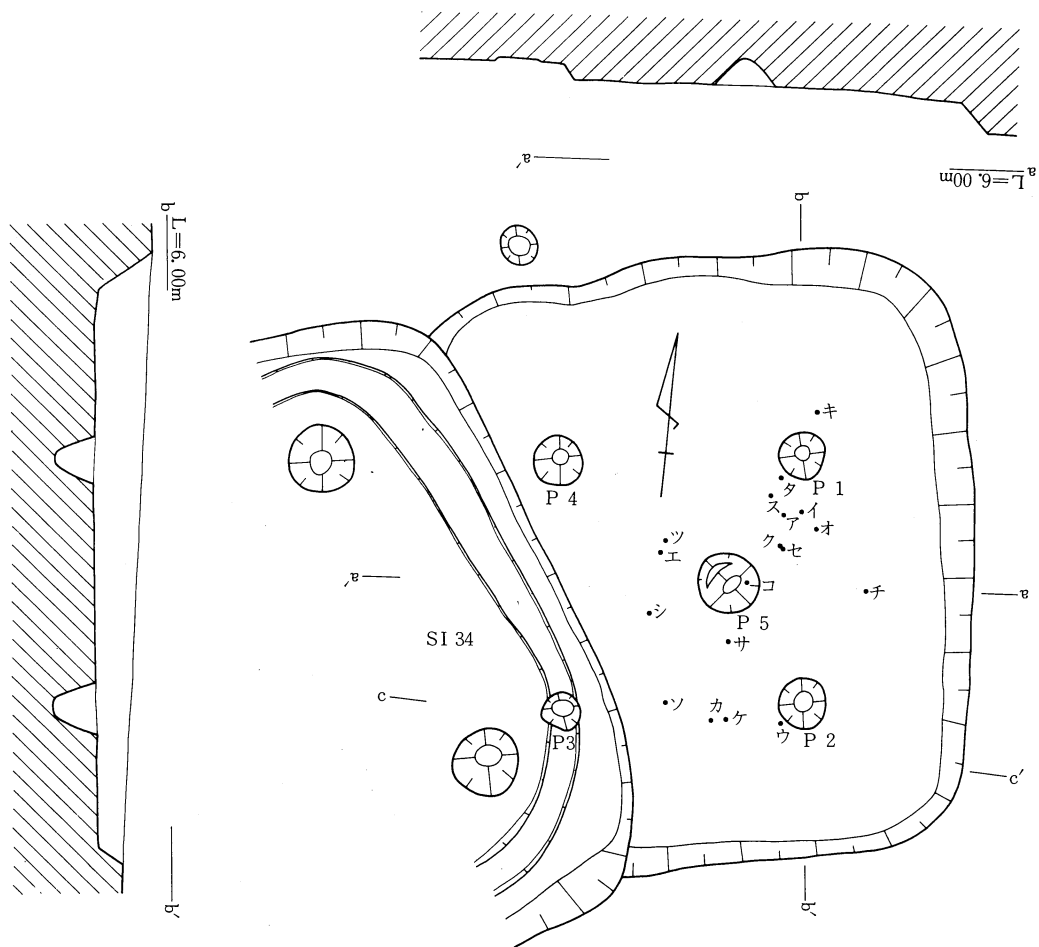
挿図 91 S I 32 遺物図その 3



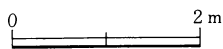
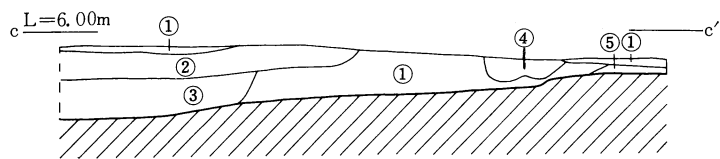
挿図 92 S I 32 遺構図

S I 33 (挿図93~96, 図版40・41)

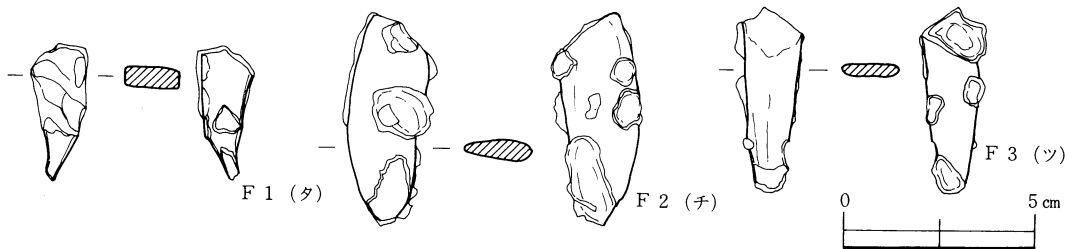
11G地区の南西区にあり、S I 55の北に位置する。S I 34とS B 01と切り合っている。新旧関係はS I 34よりS I 33が古い。またS B 01との関係は明らかにできなかった。平面形は方形になると思われる。床面の大きさは長辺5.86m, 短辺4.30m(推定)を測り、主軸はN-84°-Eである。床面積は推定31m²である。壁高は北側で最大値47cm, 東側で最小値22cmを測る。側溝は見られない。ピットは床面で5個検出したが柱穴と思われるものはP 1~P 4である。このプランはP 1から(52×49-46), (55×51-47), (44×39-31), (57×54-48) cmで柱穴間距離はP 1-P 2間から2.70, 2.60, 2.70, 2.60mを測る。床面中央にはP 5 (66×65-30) cmがあり、特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。



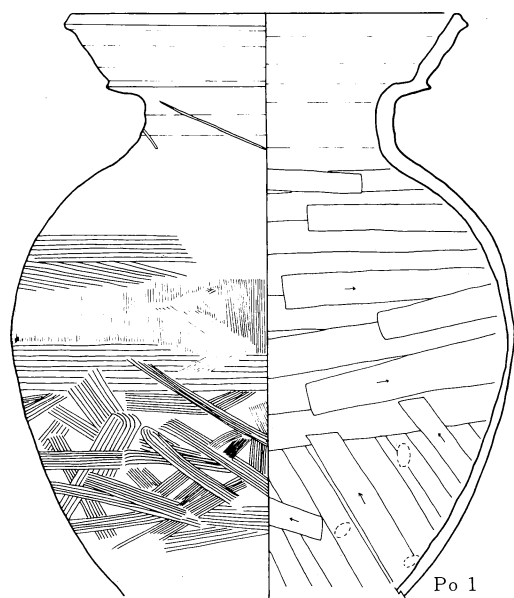
- ① 茶褐色砂
- ② 黒褐色砂
- ③ 暗褐色砂
- ④ 暗茶褐色砂
- ⑤ 淡茶褐色砂



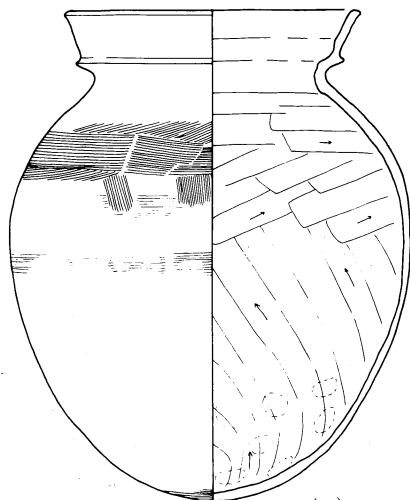
挿図 93 S I 33 遺構図



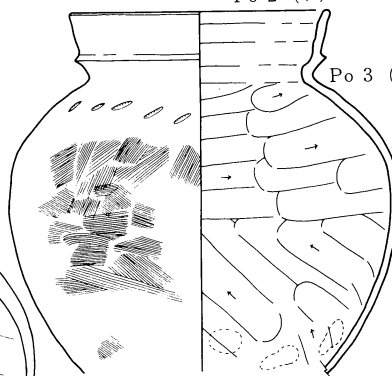
挿図 94 S I 33 遺物図その 1



Po 1



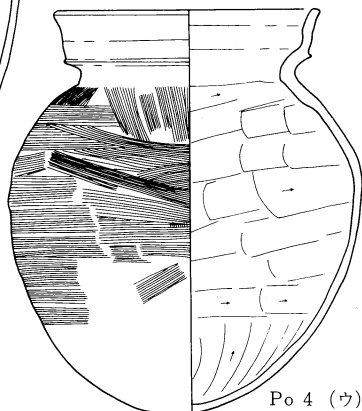
Po 2 (7)



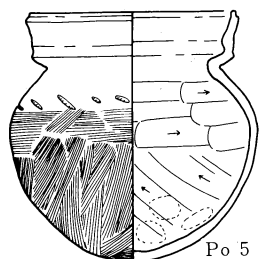
Po 3 (イ)



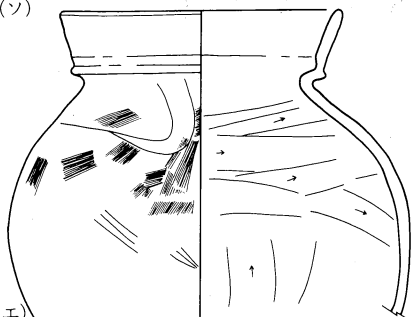
Po 18 (ツ)



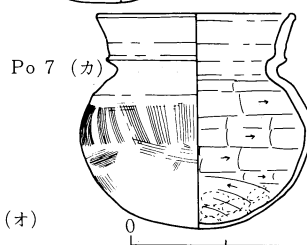
Po 4 (ウ)



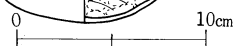
Po 5 (エ)



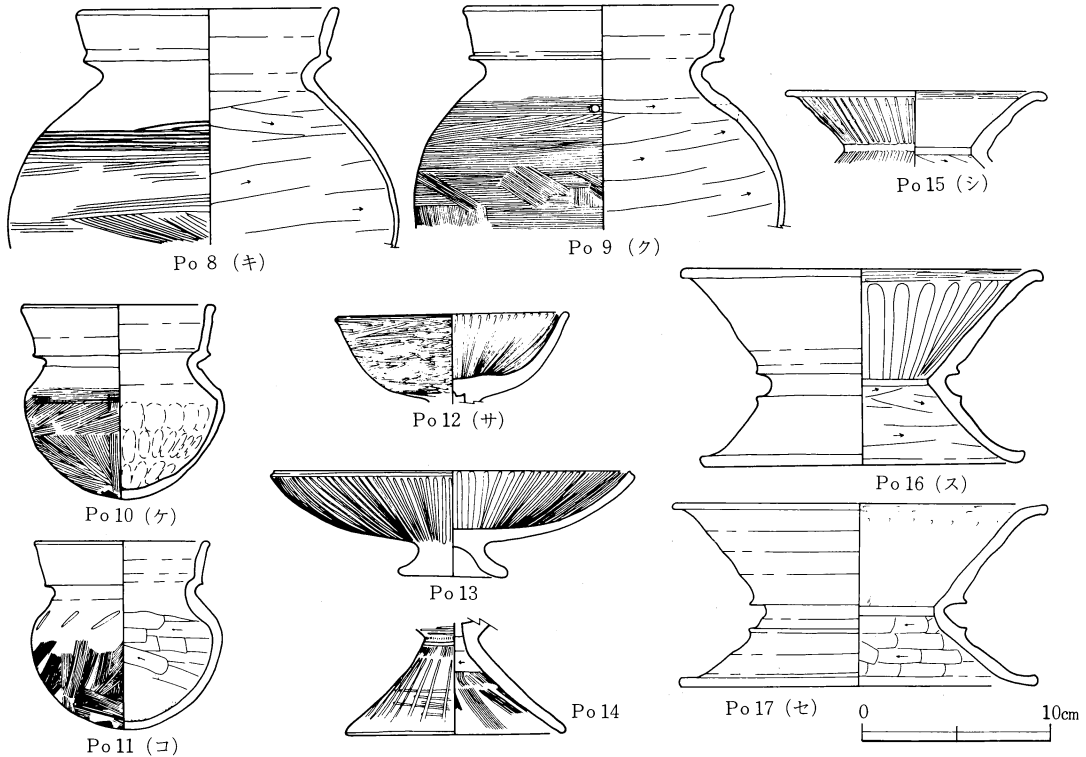
Po 6 (オ)



Po 7 (カ)



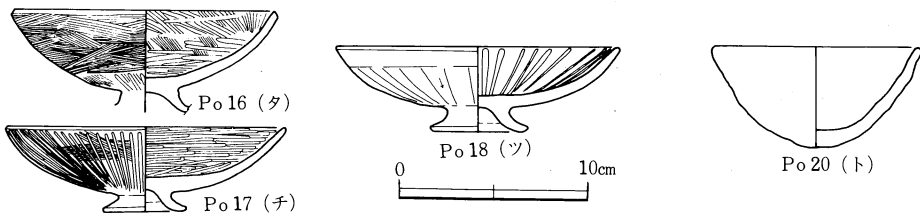
挿図 95 S I 33 遺物図その 2



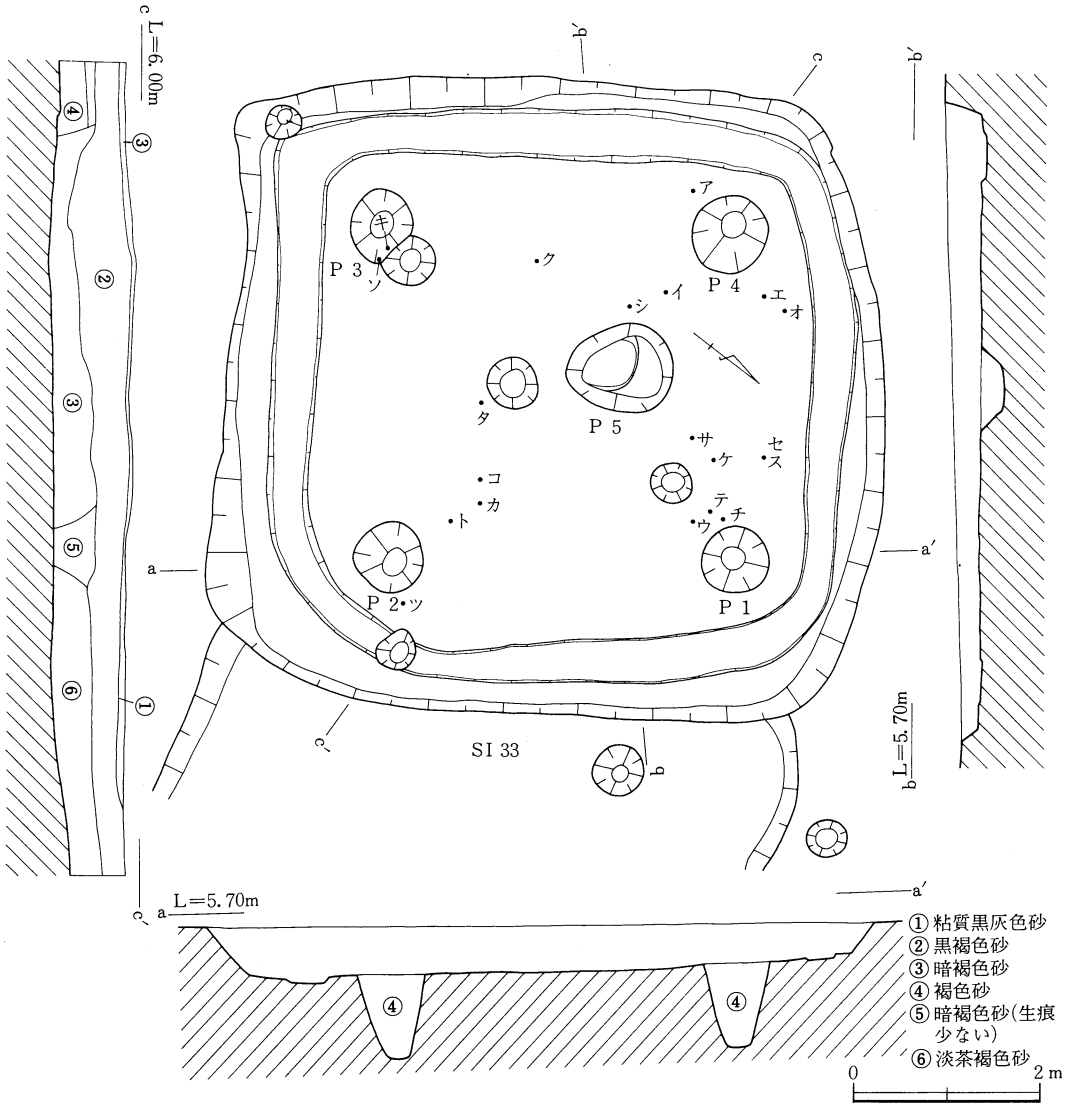
挿図 96 S I 33 遺物図その 3

S I 34 (挿図97~101, 図版9・41~43)

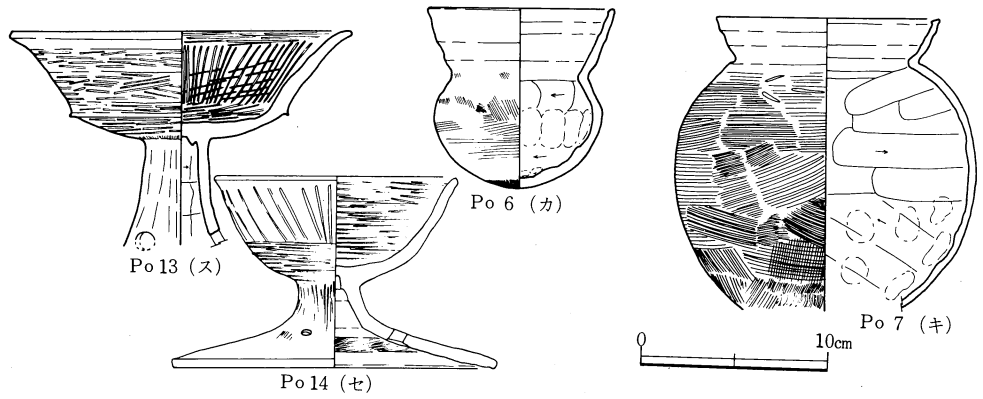
12F地区の北東区, 12G地区との境にあり, S I 55の西, S B04の北東に位置する。S I 33・35と切り合っており, S I 33・35より新しい。平面形は長方形である。床面の大きさは, 長辺6.26m, 短辺6.20mを測り, 主軸はN-52-Eである。床面積は約38.8㎡である。壁高は南西側で最大値37cm, 北東側で最小値11cmを測る。側溝は幅29~55cm, 深さ2~10cmでめぐる。ピットは床面で9個検出したが柱穴と考えられるものはP 1~P 4である。このプランはP 1から (72×72-90), (74×74-92), (77×67-86), (83×83-88) cmである。柱穴間距離はP 1-P 2から3.64, 3.52, 3.70, 3.50mを測る。床面中央北寄りにはP 5 (117×92-26) cmがあり特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬II期になると考えられる。



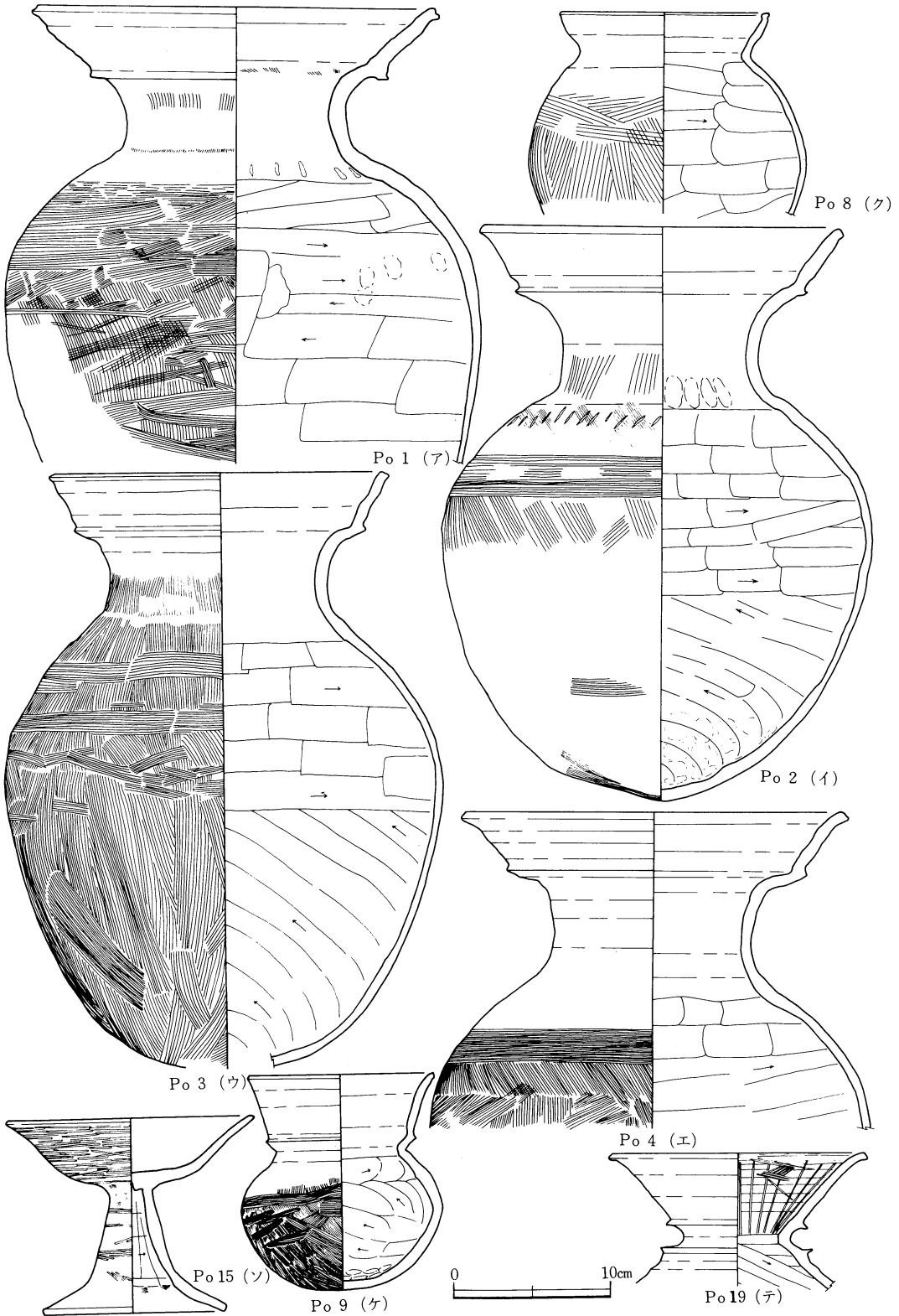
挿図 97 S I 34 遺物図その 1



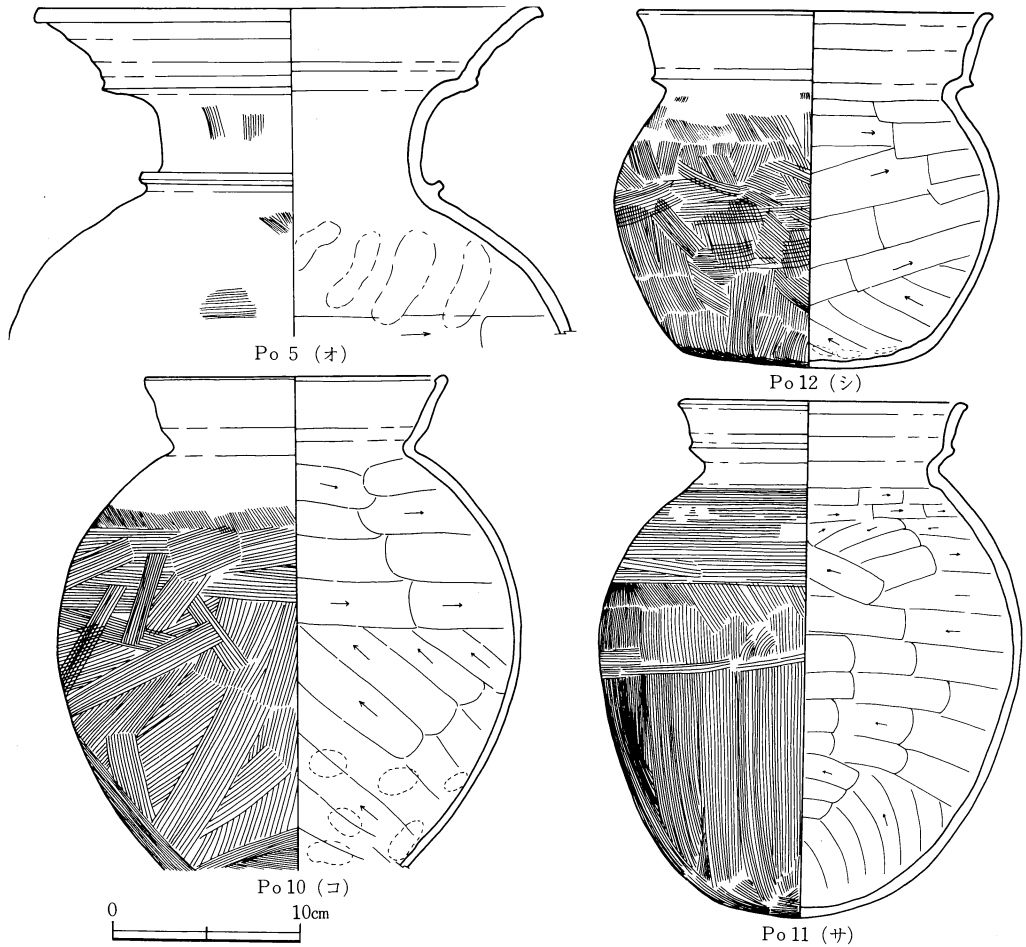
挿図 98 S I 34 遺構図



挿図 99 S I 34 遺物図その 2



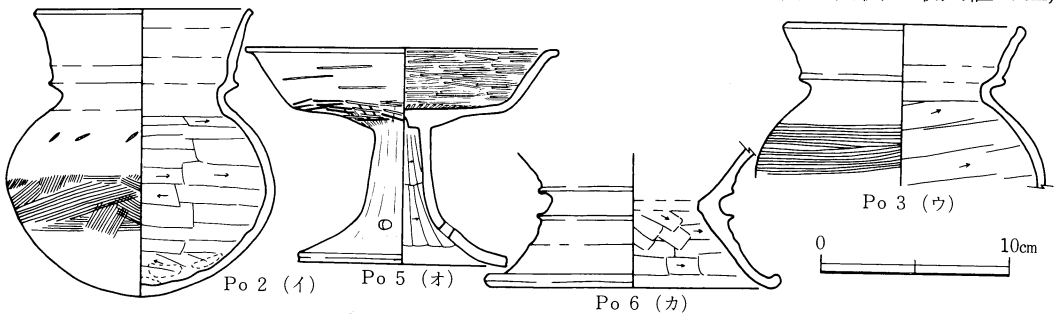
挿図 100 S I 34 遺物図その 3



挿図 101 S I 34 遺物図その 4

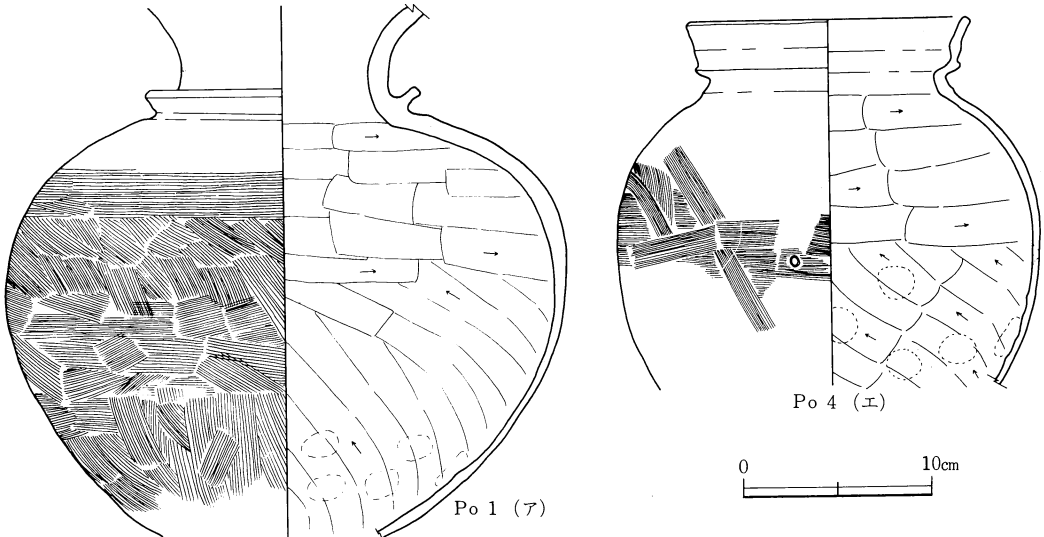
S I 35 (挿図102~104, 図版 9・43)

12G地区南東区にあり，S Z 01の南東，S I 56の北に位置する。東側でS I 34，西側でS I 36，南側でS B 04と切り合っている。新旧関係は，S I 35よりS I 34，36が新しい。S B 04とは不明である。平面形は方形である。床面の大きさは，長辺4.34m，短辺4.32mを測り，主軸はN-55°-Eである。床面積は約18.7㎡である。壁高は南側で最大値47cm，

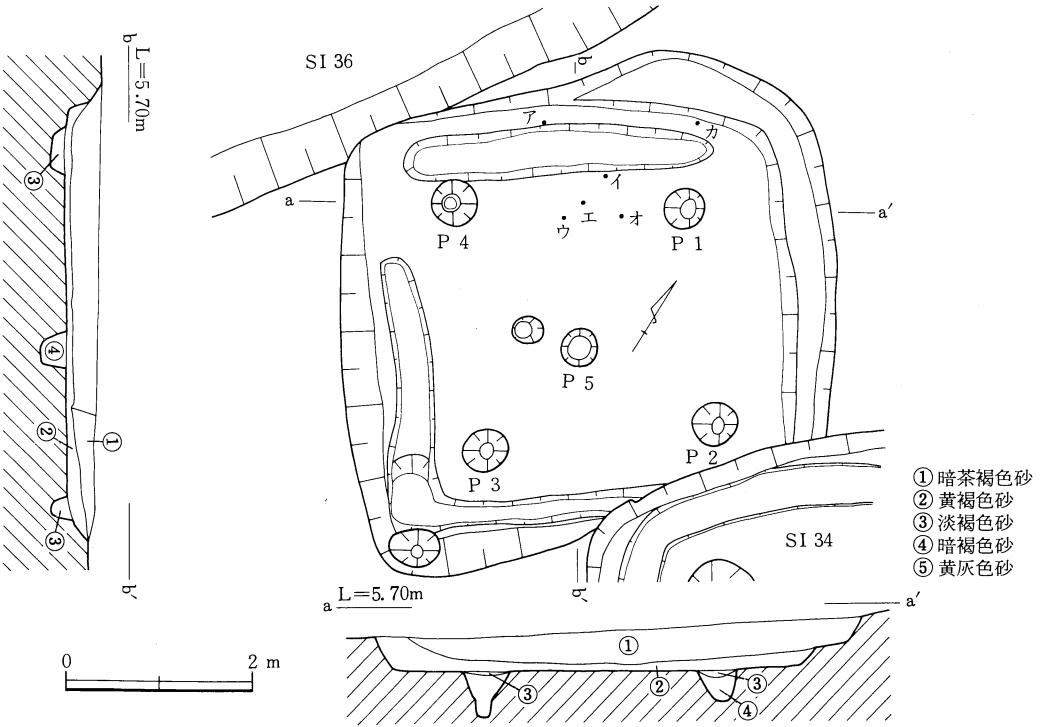


挿図 102 S I 35 遺物図その 1

北側で最小値13cmを測る。側溝は幅30~50cm, 深さ7~21cmで北西側と南西から南東にかけてめぐっている。北東側にはみられない。ピットは床面で7個検出したが柱穴はP1~P4の4本である。プランはP1から(43×48-35), (47×49-41), (44×51-39), (49×50-51)cmを測る。柱穴間距離はP1-P2間から2.3, 2.5, 2.7, 2.6mを測る。P5(41×40-28)cmは, 特殊ピットと思われる。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。



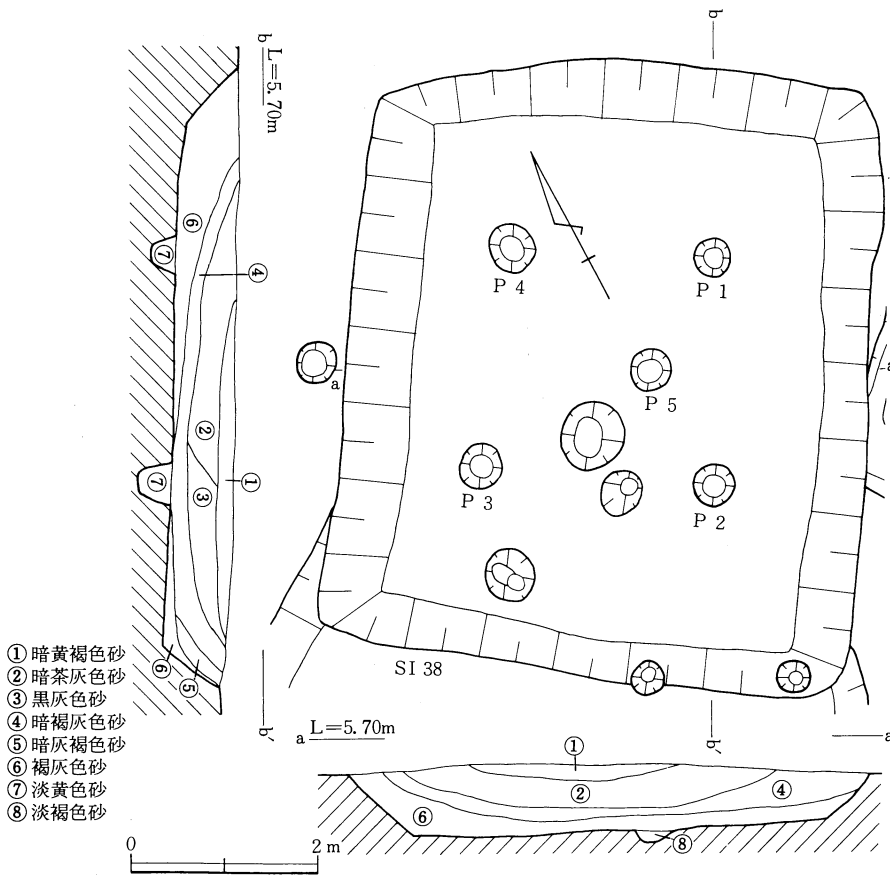
挿図 103 S I 35 遺物図その 2



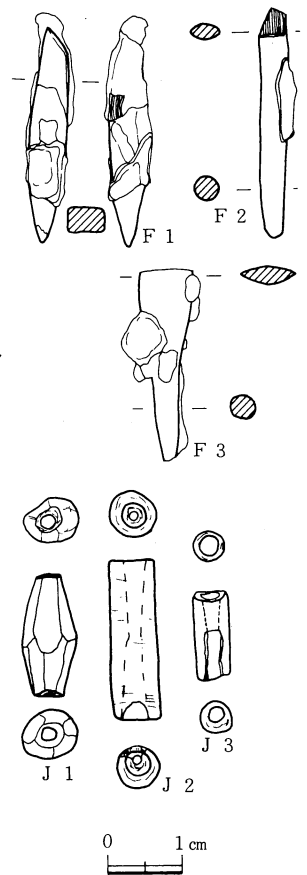
挿図 104 S I 35 遺構図

S I 36 (挿図106・107, 図版9・43)

12G地区の南西区にあり, S Z 01の南, S I 37の東に位置する。S I 35・38と切り合っており, 新旧関係はS I 35・38の方が古い。床面の大きさは長辺4.20m, 短辺3.44mを測り, 主軸はN-58°-Wである。床面積は約23.2m²である。壁高は北東隅で最大値58cm, 南西隅で最小値36cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で8個検出したが柱穴はP 1~P 4と考えられる。このプランはP 1から(43×46-28), (52×47-23), (42×38-26), (44×44-36) cmである。柱穴間距離はP 1-P 2間から2.44, 2.50, 2.30, 2.16mを測る。床面中央よりやや東寄りにP 5 (46×44-12) cmがあり, 特殊ピットと考えられる。時期は良好な遺物が出土しておらず不明である。



挿図 105 S I 36 遺構図

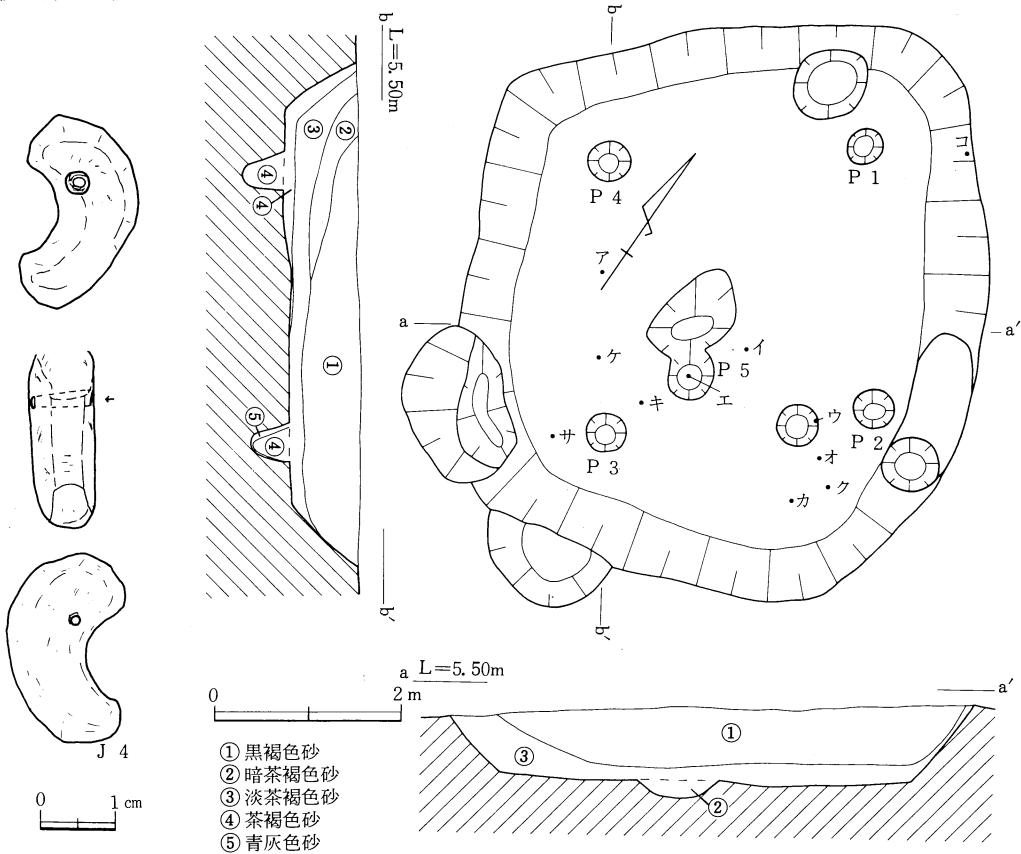


挿図 106 S I 36 遺物図その1

S I 37 (挿図108~110, 図版9・43・44)

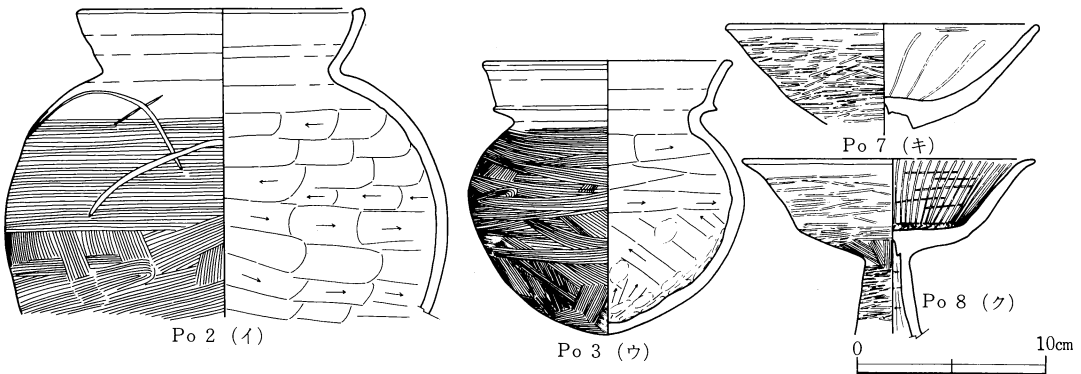
13G地区の南東にあり, S E 03の北東, S I 30のすぐ南に位置する。平面形は台形で南西の辺が他の3辺に比べて短い。床面は長辺で4.8m, 短辺で3.5mを測り, 主軸はN-55°-Eである。床面積は約19.7m²である。壁高は北東側で最大値82cm, 北西側で最小値

64cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で8個検出したが、柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4本である。プランはP 1から(43×36-63), (46×44-52), (43×42-43), (46×44-45) cmで、柱穴間距離はP 1から2.80, 2.90, 2.88, 2.72mである。P 5(102×70-23)cmは他のピットより埋砂の色が濃く、中央にあるのでいわゆる特殊ピットであろう。他の3個のピットと壁面の4個のピットは用途が不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。

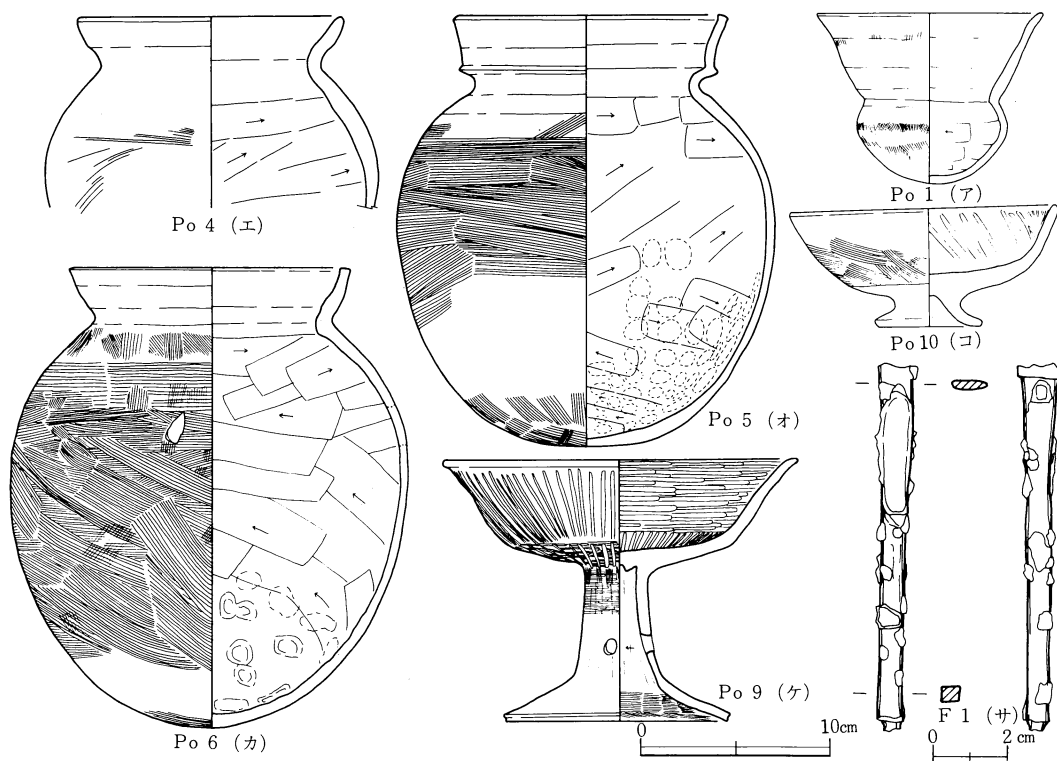


挿図 107 S I 36 遺物図その 2

挿図 108 S I 37 遺構図



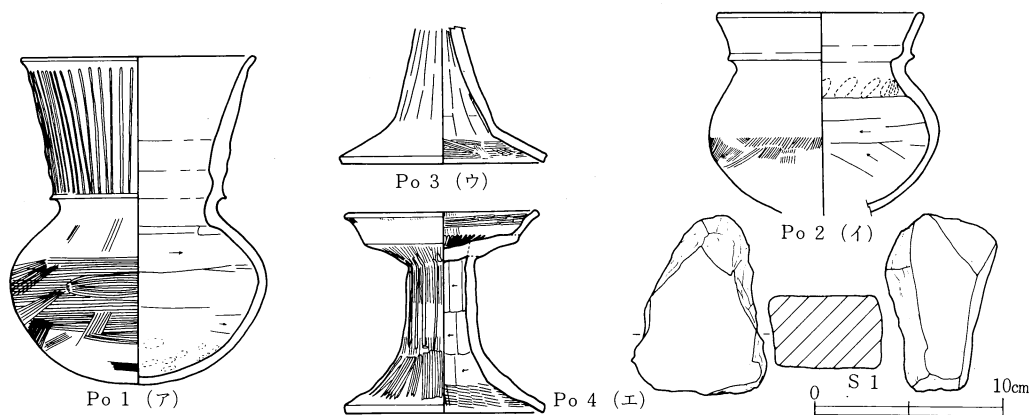
挿図 109 S I 37 遺物図その 1



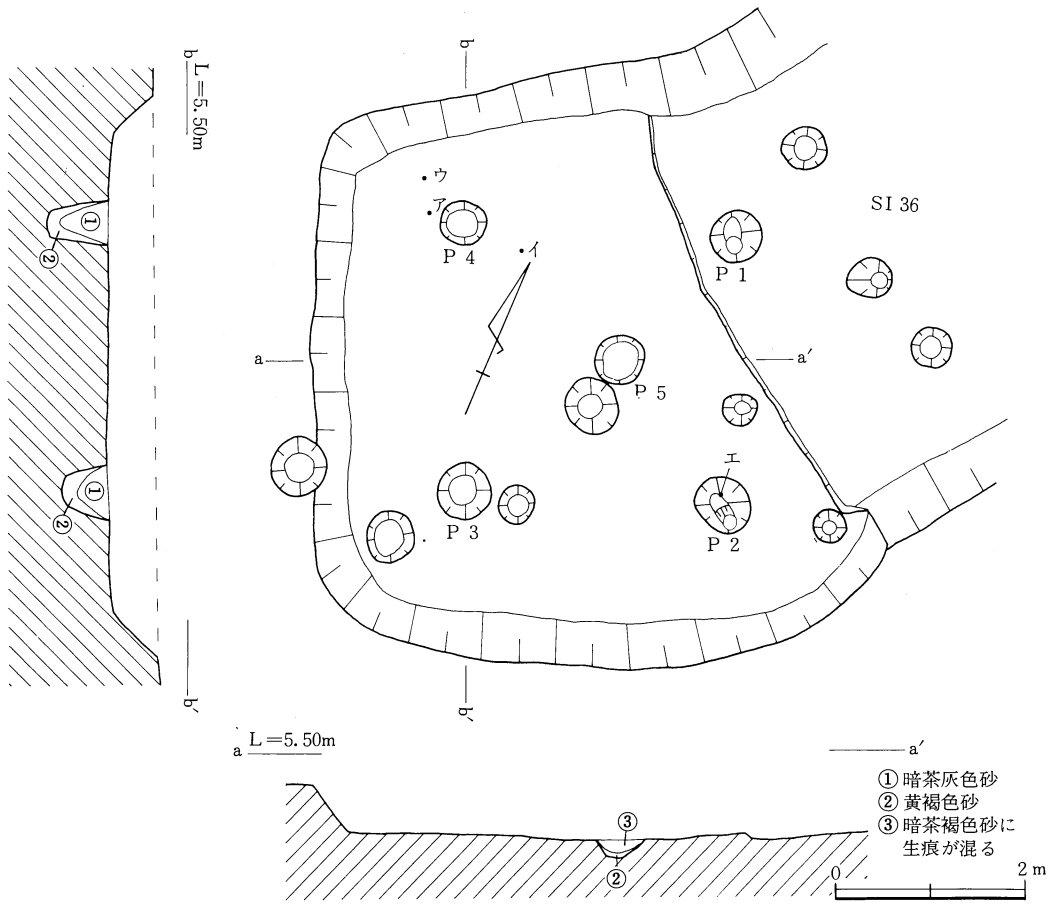
挿図 110 S I 37 遺物図その 2

S I 38 (挿図111・112, 図版 9・44)

12G地区の南西区と12Fの北西区にまたがり、S I 37の南東に位置する。S I 36と切り合っており、新旧関係はS I 36の方が新しく、床面の1/3ほど切られている。平面形はほぼ正方形になると思われる。一辺は約5.92mを測り、主軸はN-67-Eである。床面積は推定28m²である。壁高は北西側で最大値42cm、東側で最小値50cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で10個検出したが柱穴と考えられるものはP 1～P 4である。このプランは



挿図 111 S I 38 遺物図



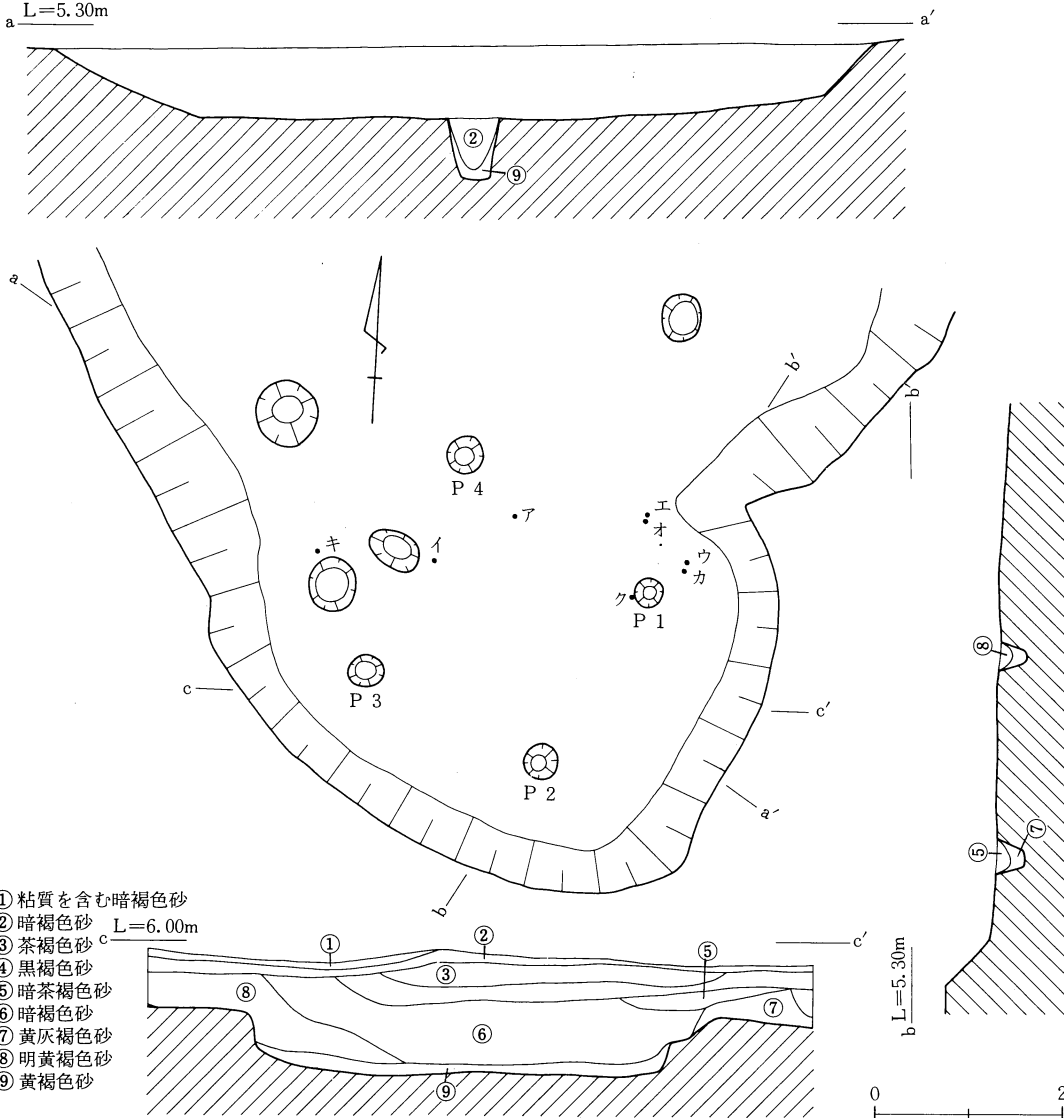
挿図 112 S I 38 遺構図

P 1 から (55×55-55), (63×54-68), (60×57-49), (47×50-68) cm を測る。柱穴間距離は P 1-P 2 から 2.9, 2.8, 2.8, 2.9m を測る。床面の中央より南西寄りに P 5 (55×51-18) cm があり、特殊ピットと考えられる。他のピットの用途は不明である。時期は遺物から長瀬 I 期と考えられる。

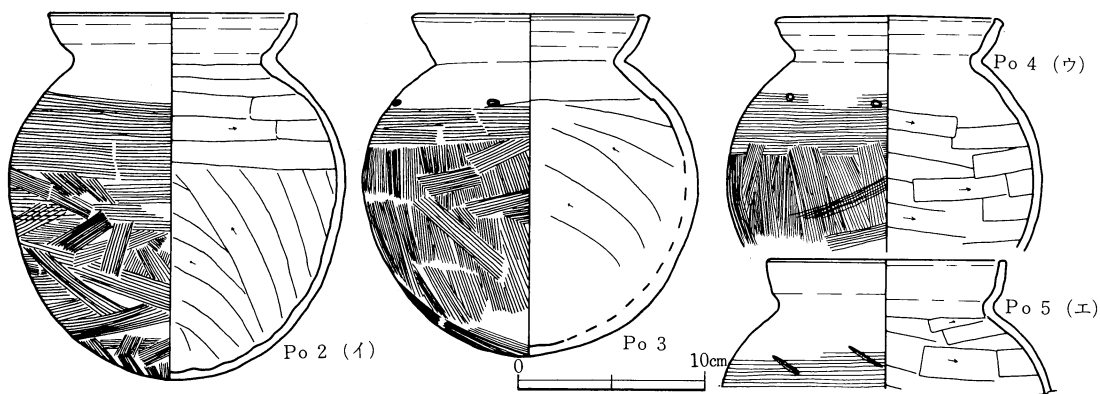
S I 39 (挿図113~115, 図版10・45)

13G 北西区にあり S I 30 の西, S E 03 の北に位置する。S I 29 と切り合っており、新旧関係は S I 39 より S I 29 の方が古い。平面形は S I 29 によって切られているが、ピットの在り方から長方形になる。床面の大きさは長辺 4.46m (推定), 短辺 3.70m を測り、主軸は N-55°-W になる。床面積は約 16.5m² である。壁高は西側で最大値 62.2cm, 北側で最小値 41.5cm を測る。側溝はみられない。ピットは床面で 6 個検出したが柱穴と考えられるものは P 1~P 4 の 4 本である。プランは P 1 から (32×30-29), (37×37-32), (39×39-32), (40×38-34) cm を測る。柱穴間距離は P 1-P 2 間から 2.16, 2.10, 1.40, 2.70m を測る。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬 II 期と考えられる。

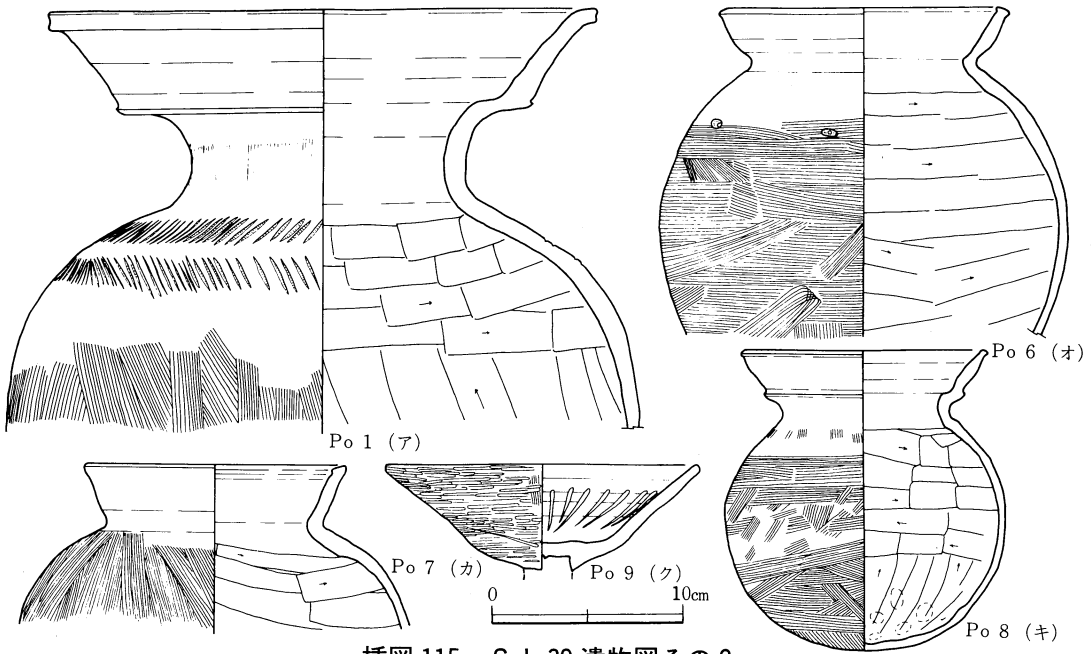
a L=5.30m



挿図 113 S I 39 遺構図



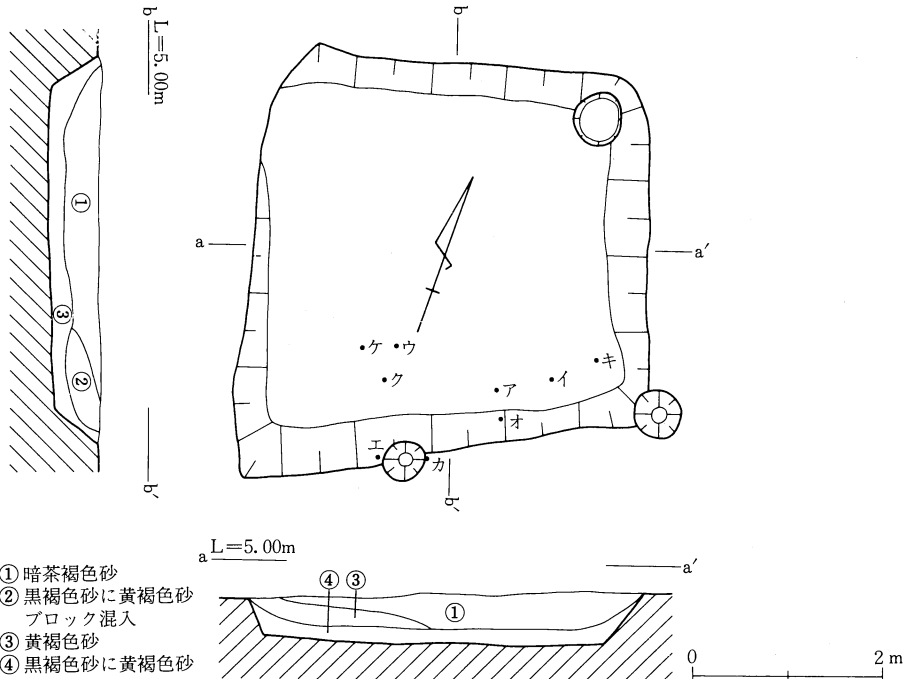
挿図 114 S I 39 遺物図その 1



挿図 115 S I 39 遺物図その 2

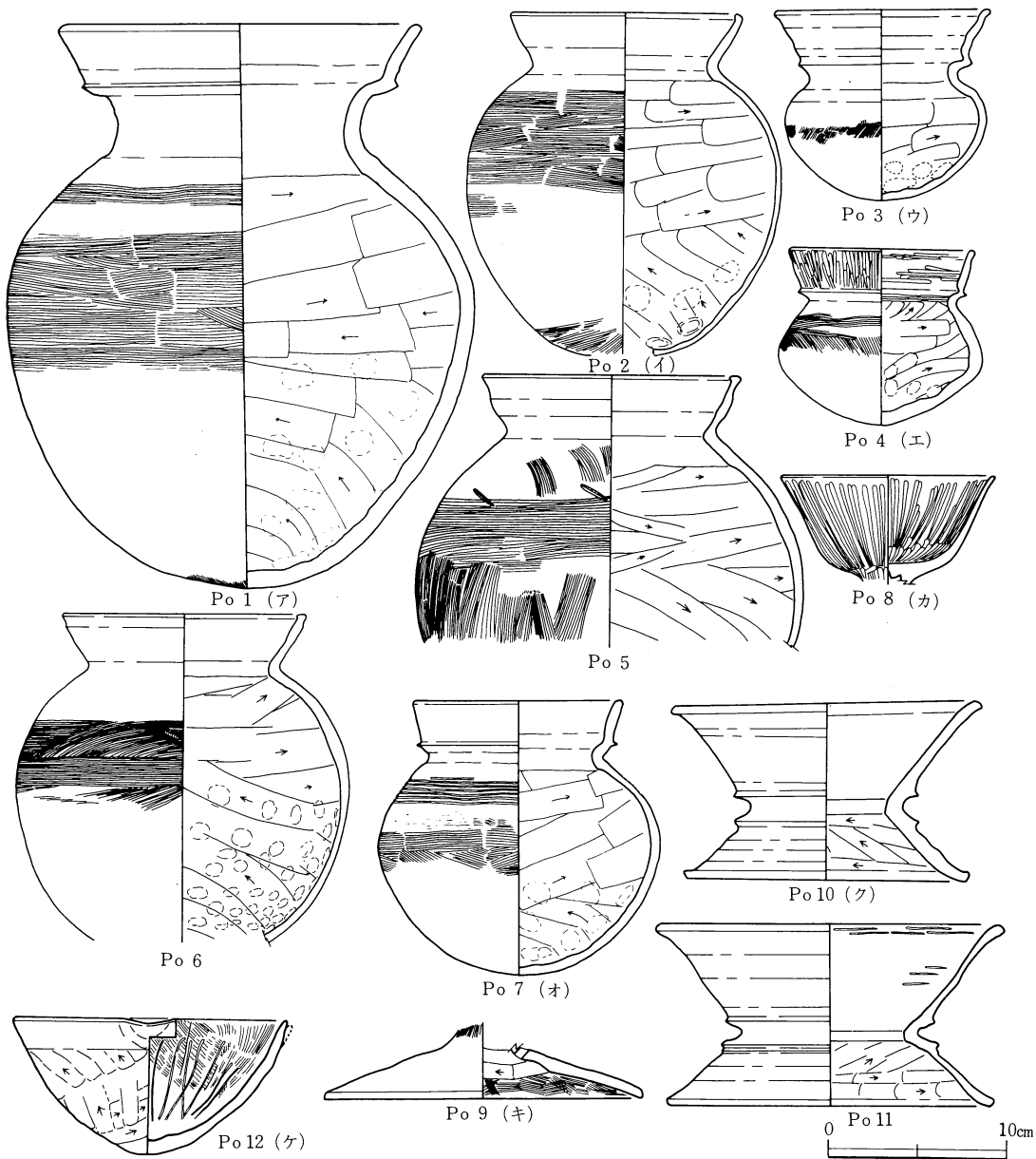
S I 40 (挿図116・117, 図版10・45・46)

13G地区南東区の北にあり, S I 39の西, S E 03の北西に位置し, 14G S D01と切り合っている。平面形は, 方形をしている。床面の大きさは, 長辺3.68m, 短辺3.26mを測り, 主軸はN-72°-Eである。床面積は約12m²である。壁高は東側で最大値59.5cm, 北側で最



挿図 116 S I 40 遺構図

小値0 cmを測る。側溝はみられない。床面にはピットが見られず肩及び壁に4個のピットを検出しただけである。用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。

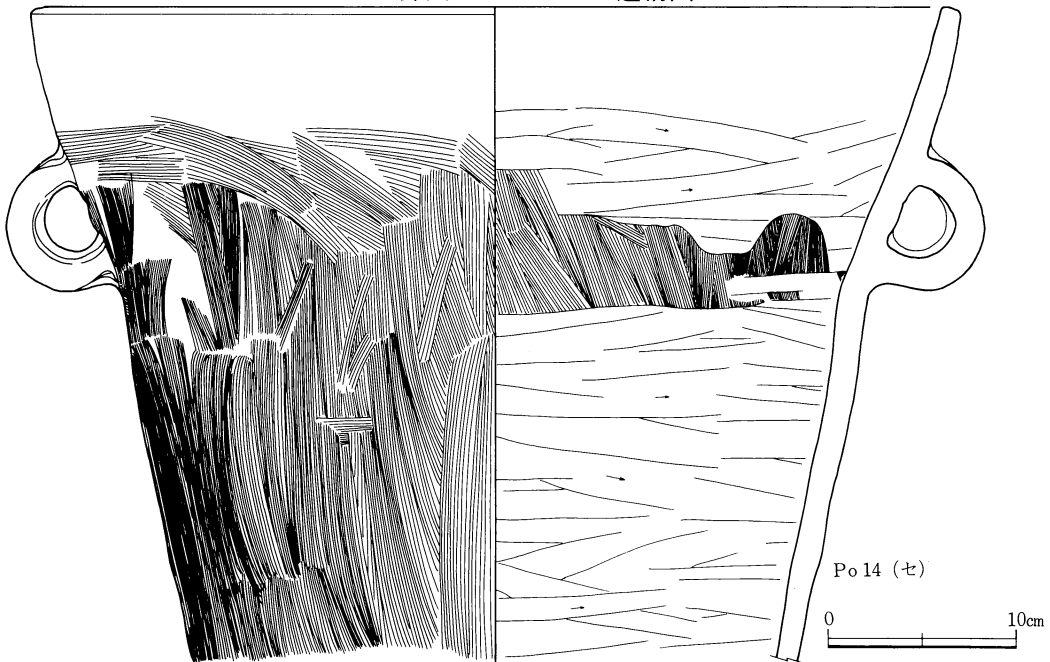
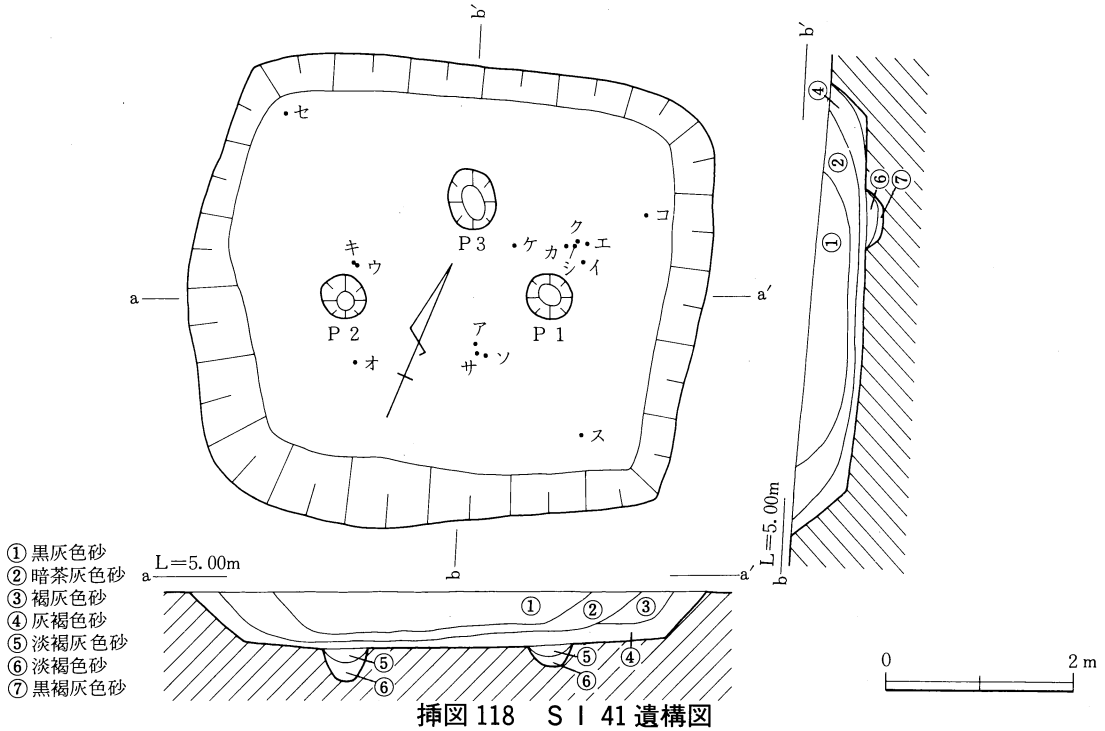


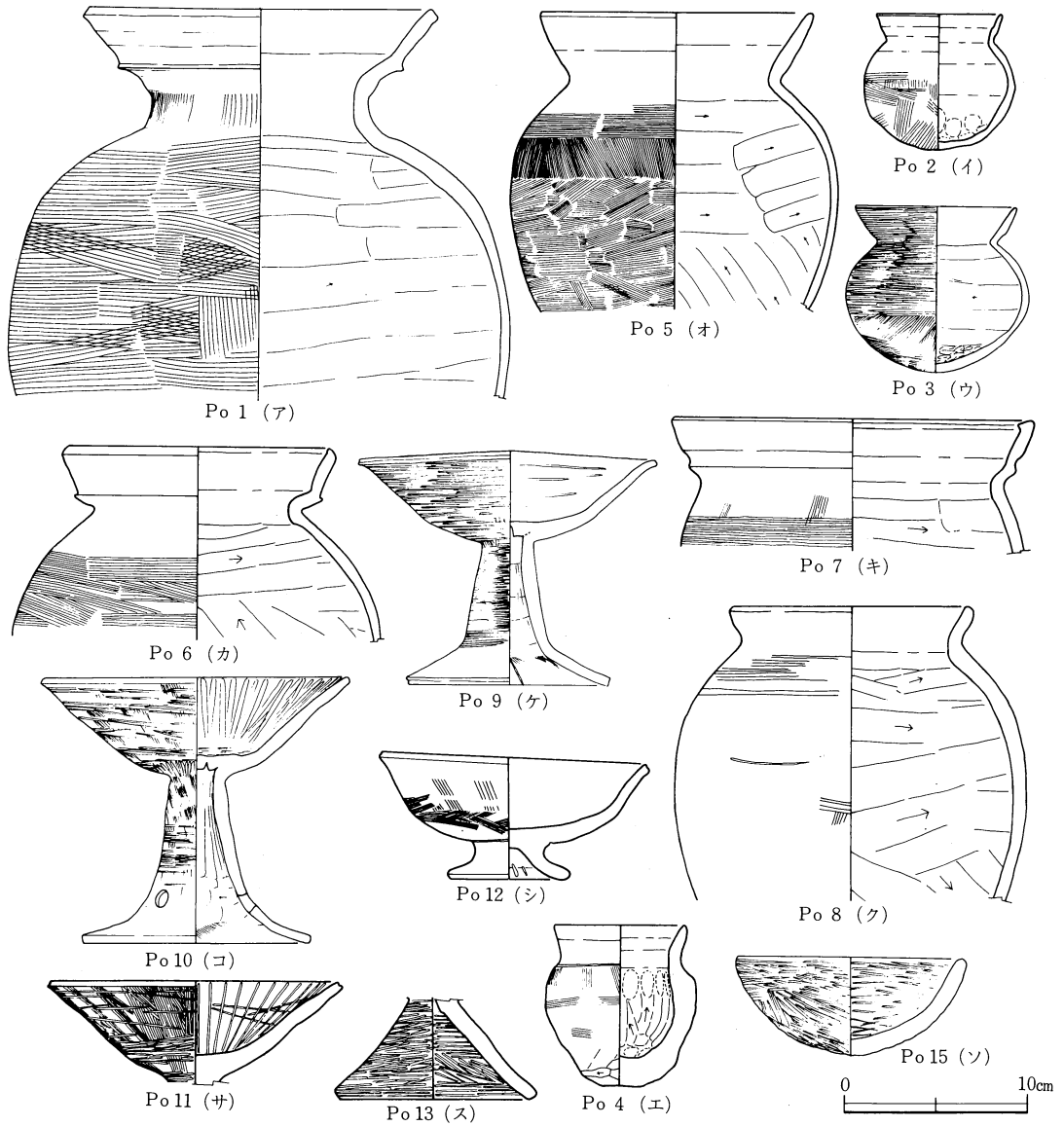
挿図 117 S I 40 遺物図

S I 41 (挿図118~121, 図版10・46)

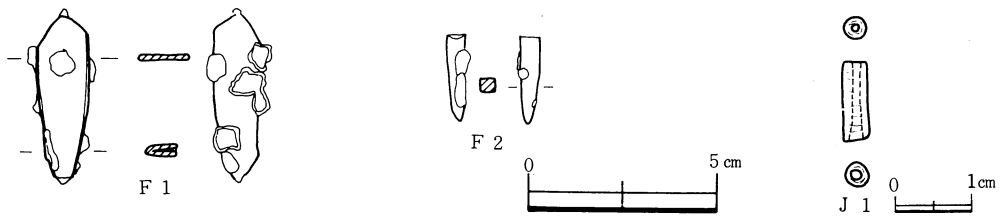
14G地区南西区と14F北西区にまたがり、S I 42の北西、S I 84の南に位置する。平面形は長方形である。床面の大きさは、長辺4.34m、短辺3.64mを測り、主軸はN-68°-Eである。床面は南東から北西方向にわずかに傾く。床面積は約15.8㎡である。壁高は南西隅で最大値62cm、北東隅で最小値41cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面から3個

検出したが柱穴と考えられるものはP1とP2のピットである。このプランはP1が(25×22-15)cm, P2が(25×28-18)cmを測る。柱穴間距離はP1-P2間で2.20mになる。床面中央北寄りにP3(30×25-10)cmがあり、特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。





挿図 120 S I 41 遺物図その 2

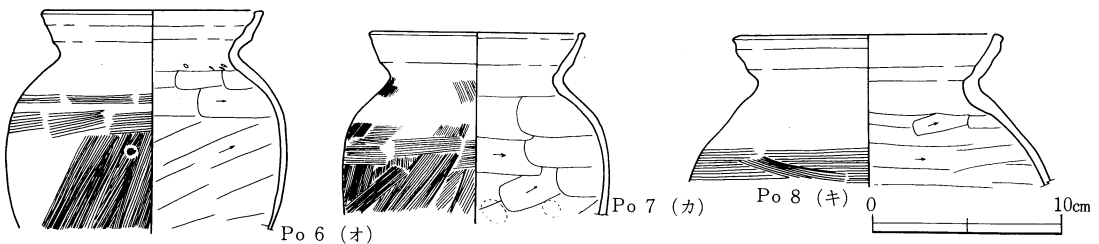
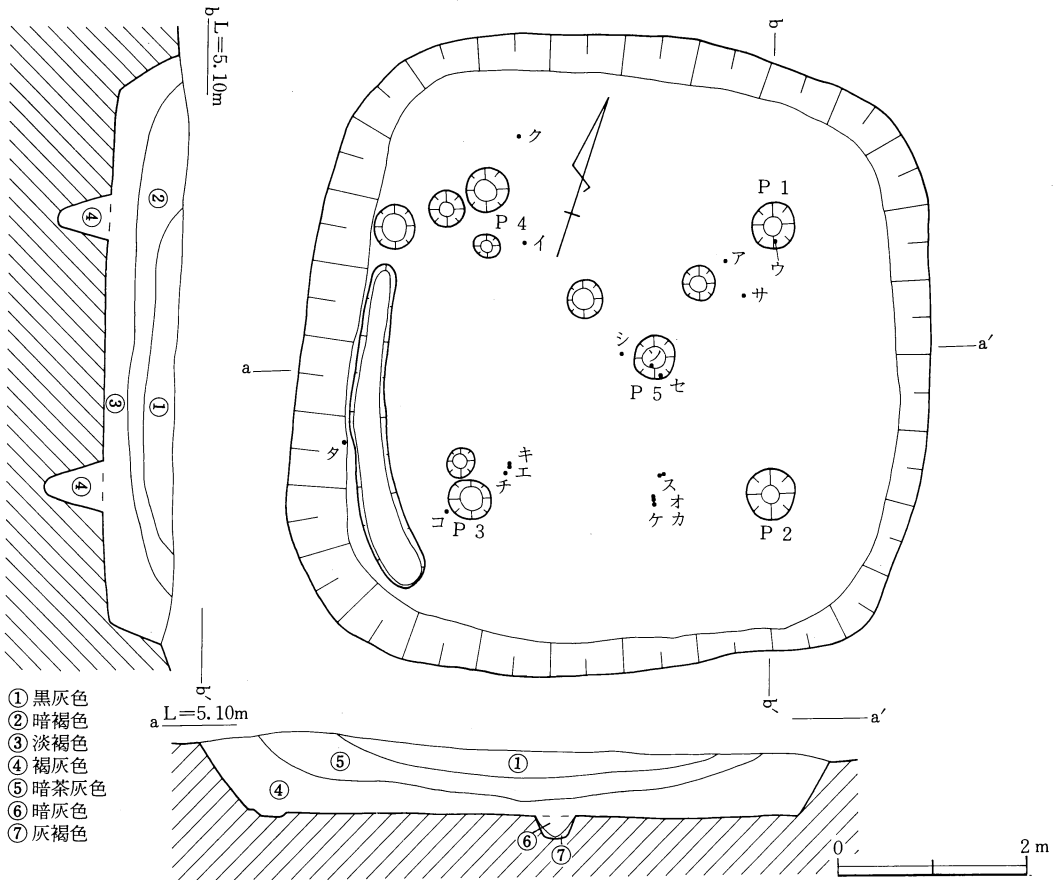


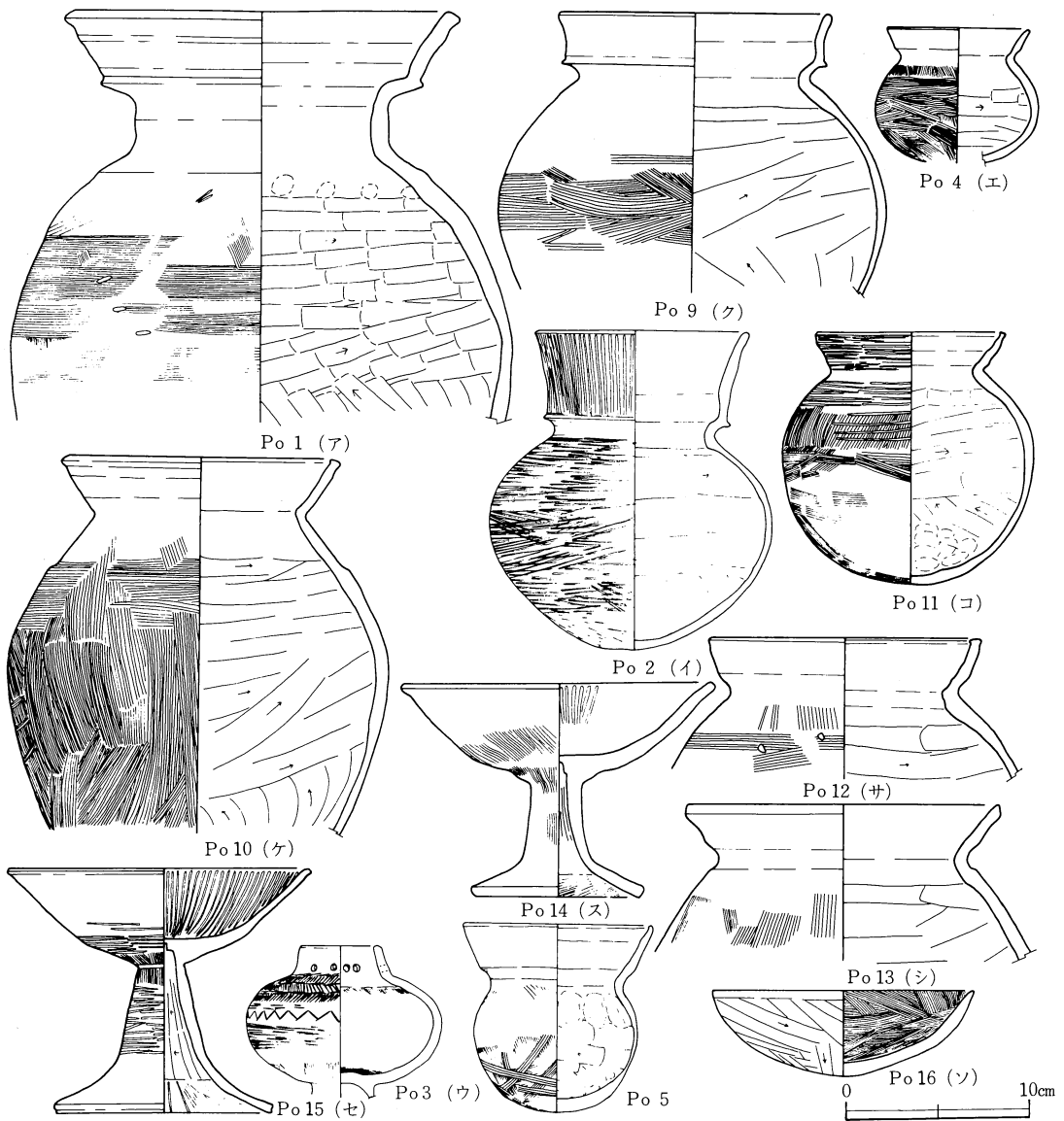
挿図 121 S I 41 遺物図その 3

S I 42 (挿図122~126, 図版10・46~48)

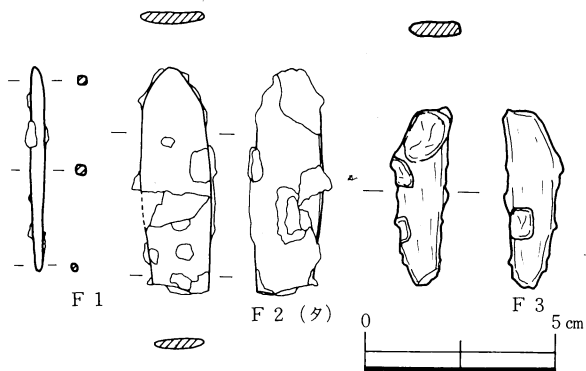
14F地区の北東区にあり, S I 43の北東, S Z 01の西に位置する。平面はほぼ正方形に

近い。床面の大きさは一辺5.3mを測り、主軸はN-79°-Eである。床面積は約3.11m²である。壁高は南西側で最大値83cm、東側で最小値48cmを測る。西側床面に幅30cm、深さ約4cm、長さ3.5mの側溝が見られる。ピットは床面から11個検出したが柱穴と考えられるものはP1~P4の4個のピットである。このプランはP1から(49×45-57), (55×52-64), (46×42-64), (48×47-64)cmを測る。柱穴間距離はP1-P2から2.84, 3.24, 3.28, 3.08mを測る。床面の中央部にはP5(47×42-27)cmがあり、場所的にみて特殊ピットと考えられる。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。

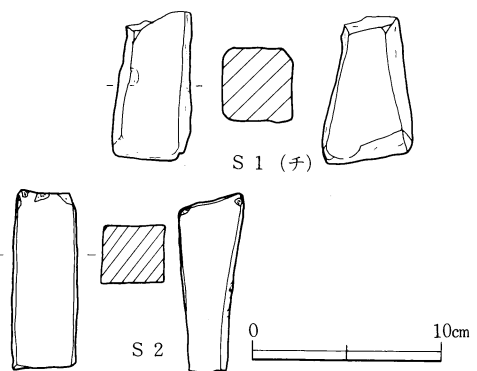




挿図 124 S I 42 遺物図その 2



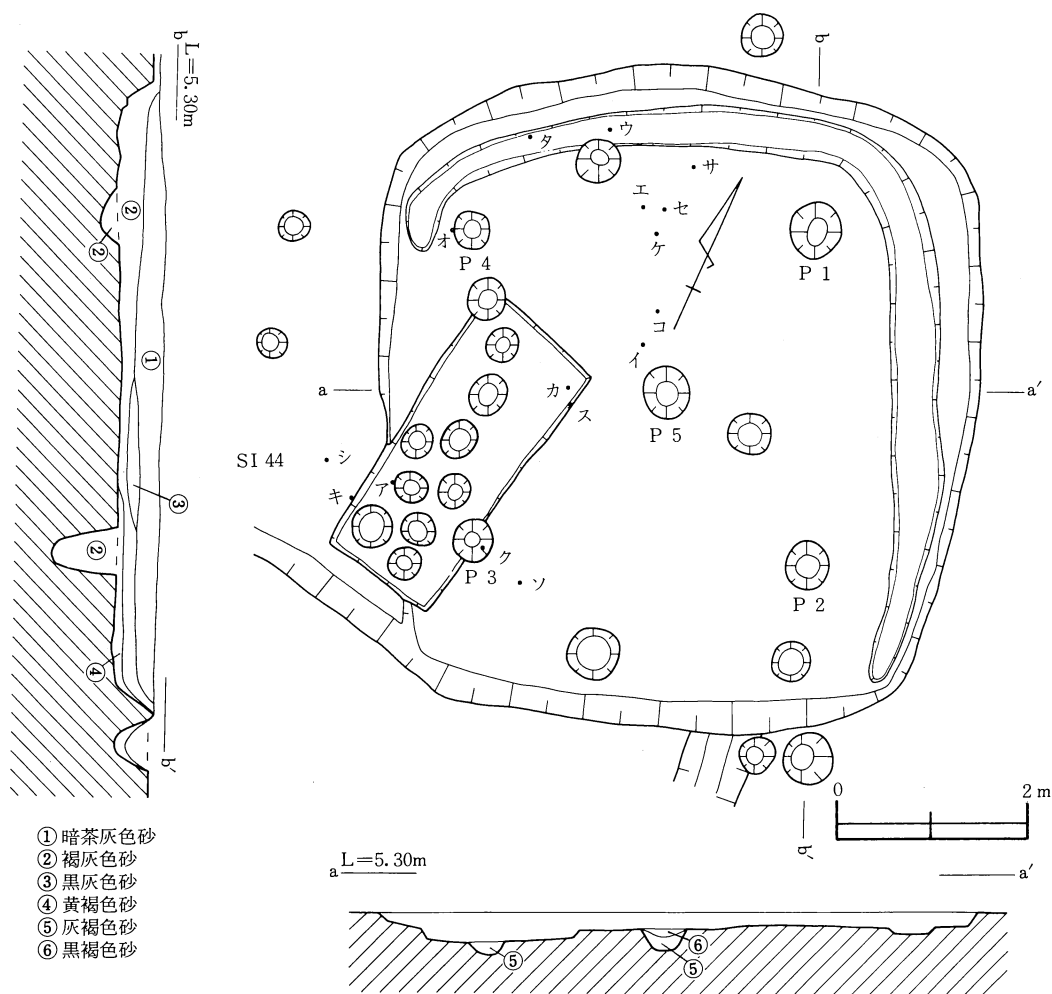
挿図 125 S I 42 遺物図その 3



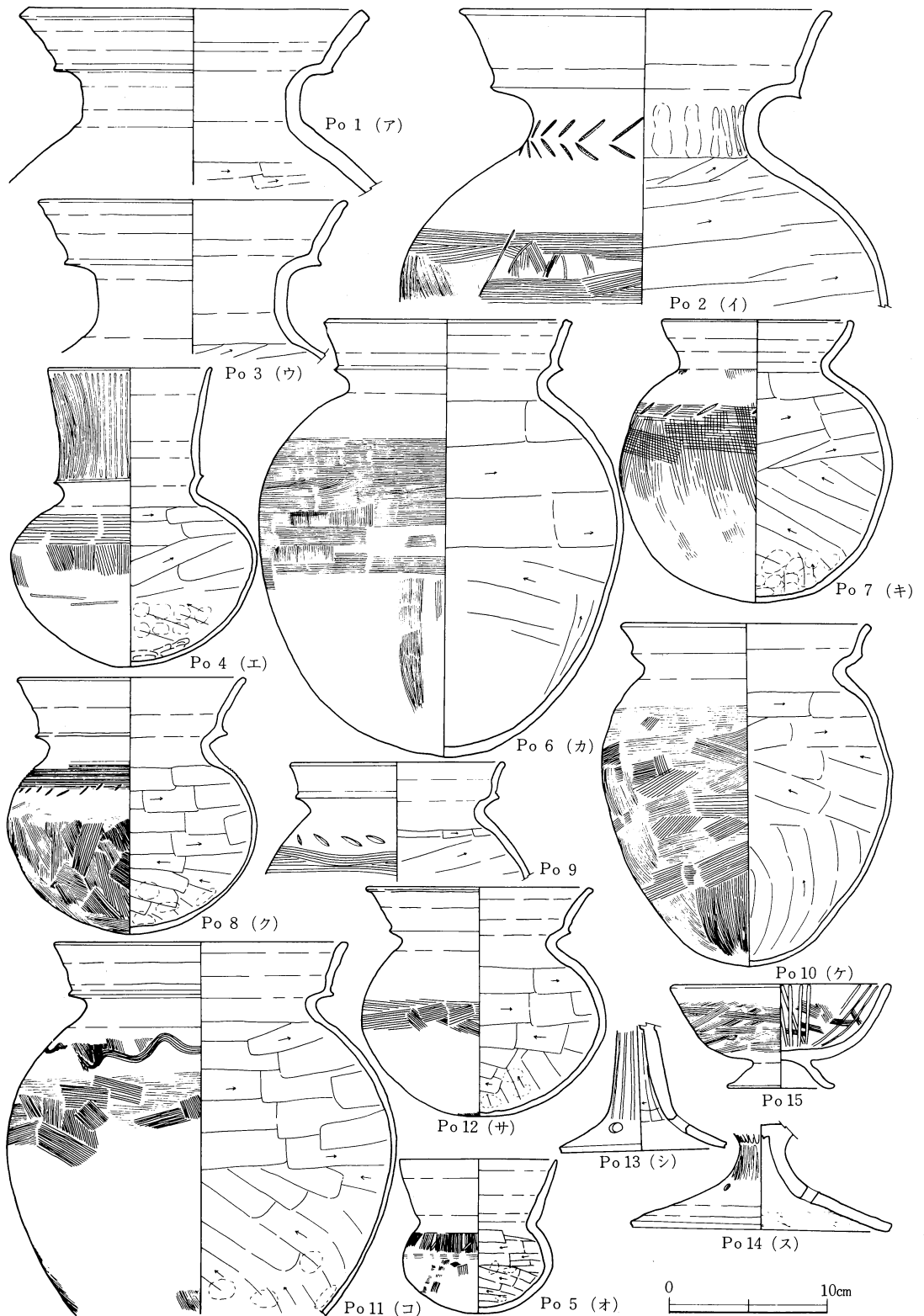
挿図 126 S I 42 遺物図その 4

S I 43 (挿図127~130, 図版11・48~50)

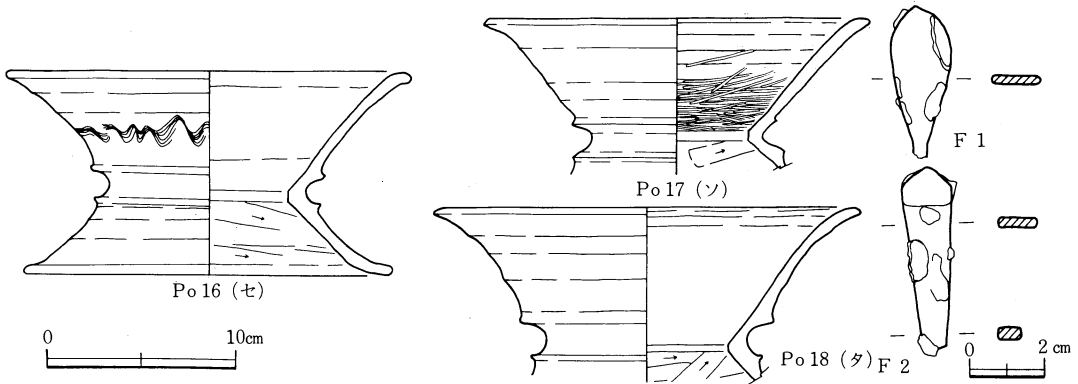
14F地区の北東区にあり, S I 42の南西, S I 41の南東に位置する。S I 44と切り合っている。新旧関係はSI 44の方が新しい。平面形は長方形をしている。床面の大きさは長辺6.42m, 短辺5.84mを測り, 主軸はN-67°-Eである。床面積は約37.5m²である。壁高は南西側で最大値48.6cm, 北東側で最小値14cmを測る。壁際の北西隅から南東隅にかけて東廻りに側溝が設けられている。側溝の幅は30~50cm, 深さは床面から約10cmである。ピットは床面から19個を数えるが柱穴はP 1~P 4である。このプランはP 1から(60×53-71), (52×47-72), (45×44-59), (39×39-53) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間から3.54, 3.60, 3.28, 3.68を測る。床面中央にP 5 (56×48-24) cmがあり, 特殊ピットと考えられる。他のピットの用途は不明である。時期は遺物から長瀬 I 期と考えられる。



挿図 127 S I 43 遺構図



挿図 128 S I 43 遺物図その 1

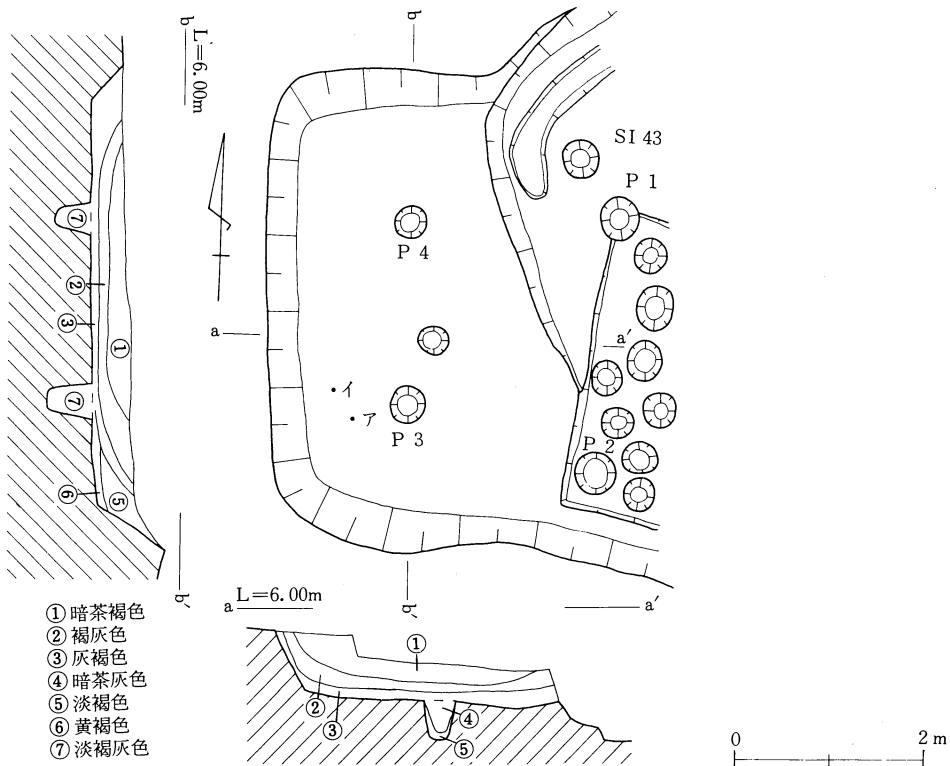


挿図 129 S I 43 遺物図その 2

挿図 130 S I 43 遺物図その 3

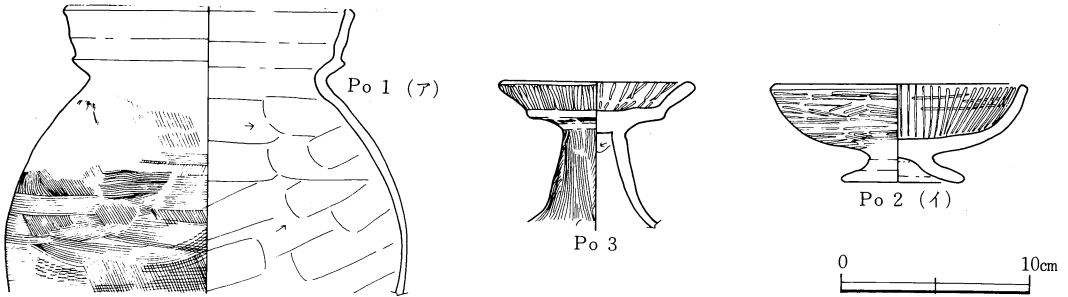
S I 44 (挿図131・132, 図版11)

14F地区南東区にあり、S X A 01の南、S I 50の北西に位置する。東半分はS I 43と切り合っており新旧関係はS I 43が古い。平面形は、柱穴の在り方から隅丸方形と考えられる。床面の大きさは、南北方向で4.24mを測り、主軸はほぼ南北である。壁高は南側で最大値81.8cm、北側で最小値30.2cmを測る。壁は床面に対してやや急に立ち上がる。ピットは床面で3個検出した。柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4本である。P 1とP 2はS I 43の床面上に存在する。プランはP 1から(48×42-28), (40×32-31), (40×38-



挿図 131 S I 44 遺構図

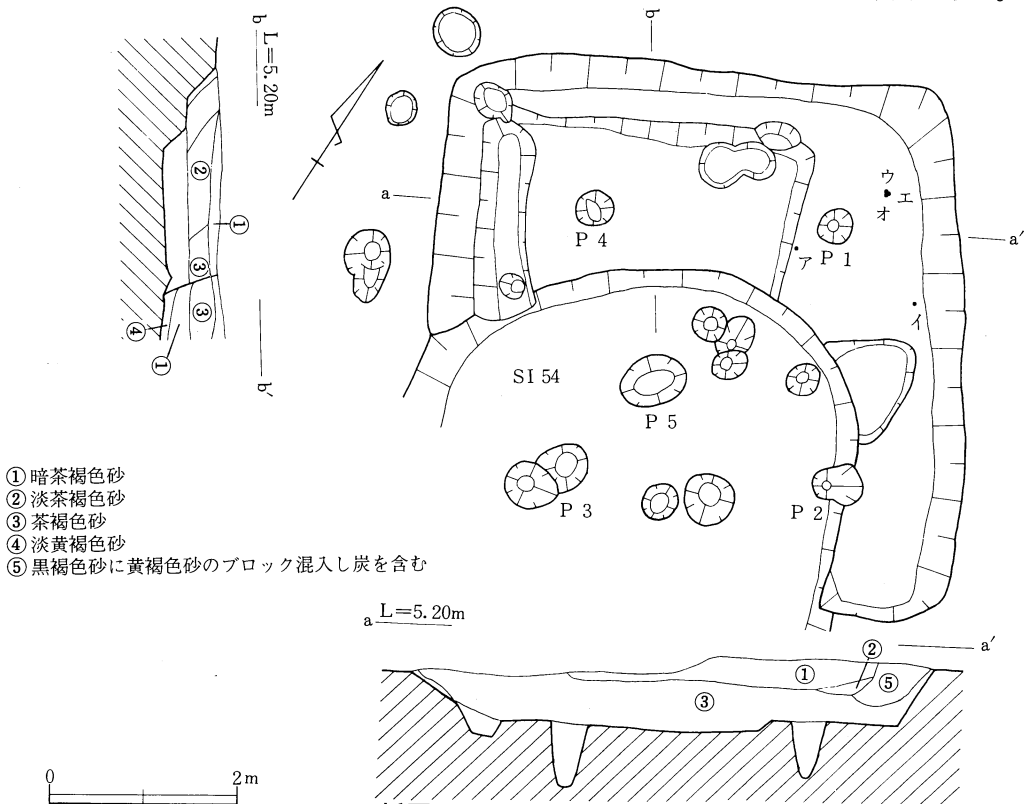
44), (36×34-40) cmを測る。柱穴間距離はP 1—P 2間から2.14, 2.28, 1.90, 2.28mになる。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



挿図 132 S I 44 遺物図

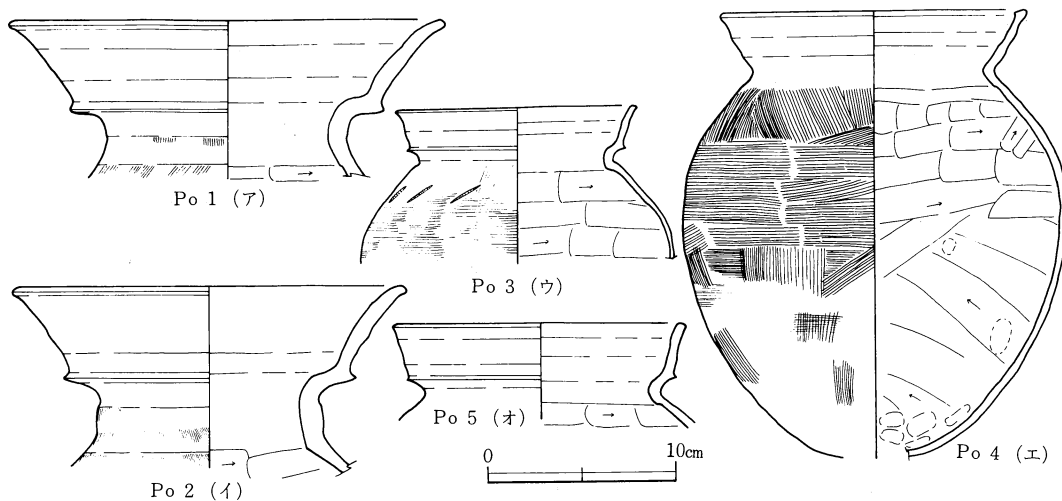
S I 45 (挿図133~135, 図版11・50)

13F地区北東区にあり, 22号墳の北, S Z 01の東に位置する。S I 46・54と切り合っている。新旧関係はS I 45よりS I 46・54の方が新しい。平面形は方形になる。床面の大きさは, 長辺5.16m, 短辺4.60mを測り, 主軸はN-60°-Eである。床面積は23.7㎡になる。壁高は東側で最大値50.9cm, 北側で最小値27.7cmを測る。西側に幅54cm, 深さ20cm, 長さ2.1mの側溝を持つ。床面は二段に掘り込まれている。ピットは床面で5個検出した。柱穴と考えられるものはP 1~P 4の4本である。P 2とP 3はS I 54の床面にある。プ

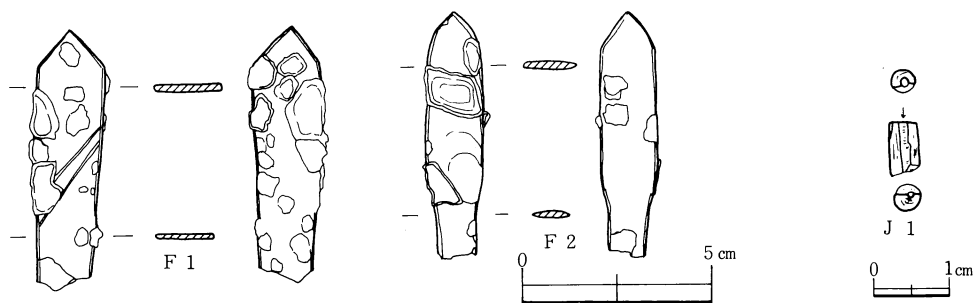


挿図 133 S I 45 遺構図

ランはP 1から(38×36-60), (55×33-54), (52×47-42), (40×37-67) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間から2.72, 2.76, 2.78, 2.54mを測る。P 5 (71×51-20) cmは特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。



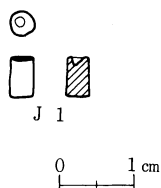
挿図 134 S I 45 遺物図その1



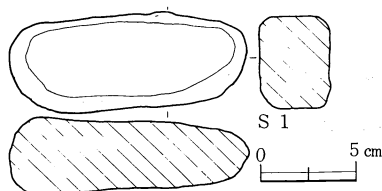
挿図 135 S I 45 遺物図その2

S I 46 (挿図136~139, 図版11・50)

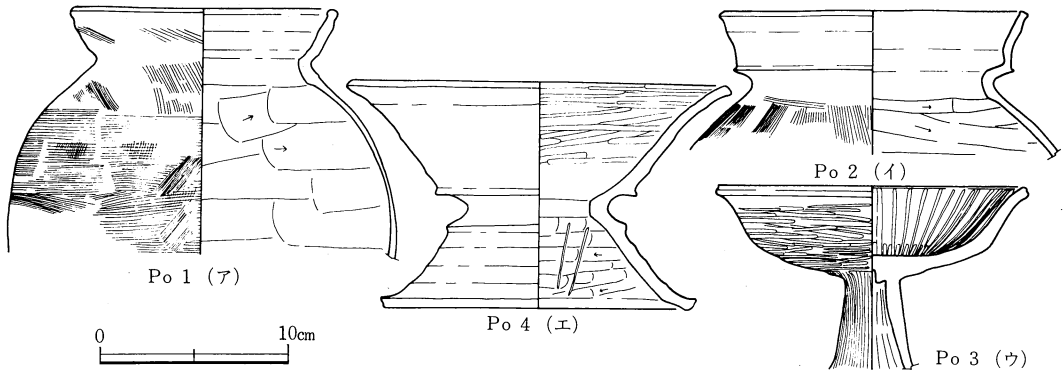
13F地区の北東区と12F地区の北西区にまたがりS I 51の東, 22号墳の北に位置する。S I 45・54と切り合っている。新旧関係はS I 46よりS I 45が古く, S I 54の方が新しい。平面形は方形と思われる。床面の大きさは, 長辺4.54m, 短辺3.48m (推定)を測り, 主軸はN-50°-Eである。床面積は約16m²になる。壁高は南側で最大値34.2cm, 北側で最小値4.0cmを測る。床面から側溝・ピットは検出できなかった。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。



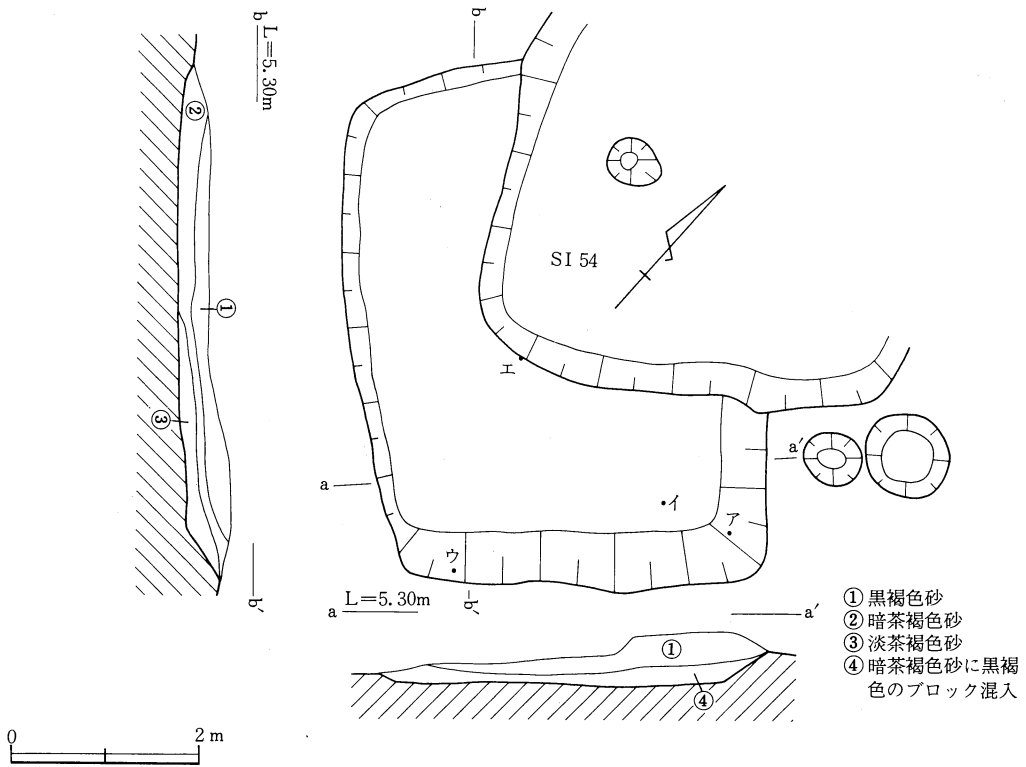
挿図 136 S I 46 遺物図その1



挿図 137 S I 46 遺物図その2



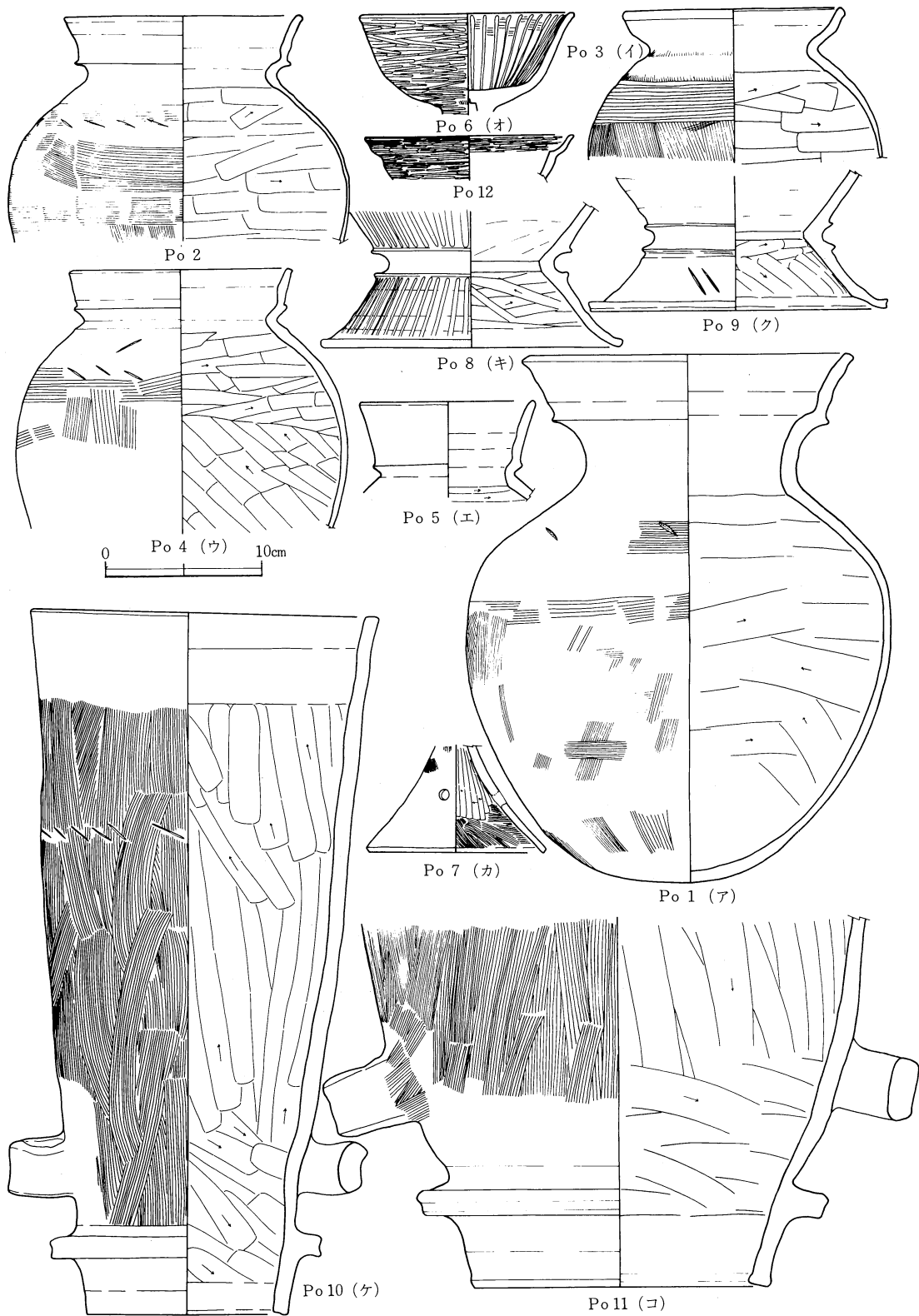
挿図 138 S I 46 遺物図その 3



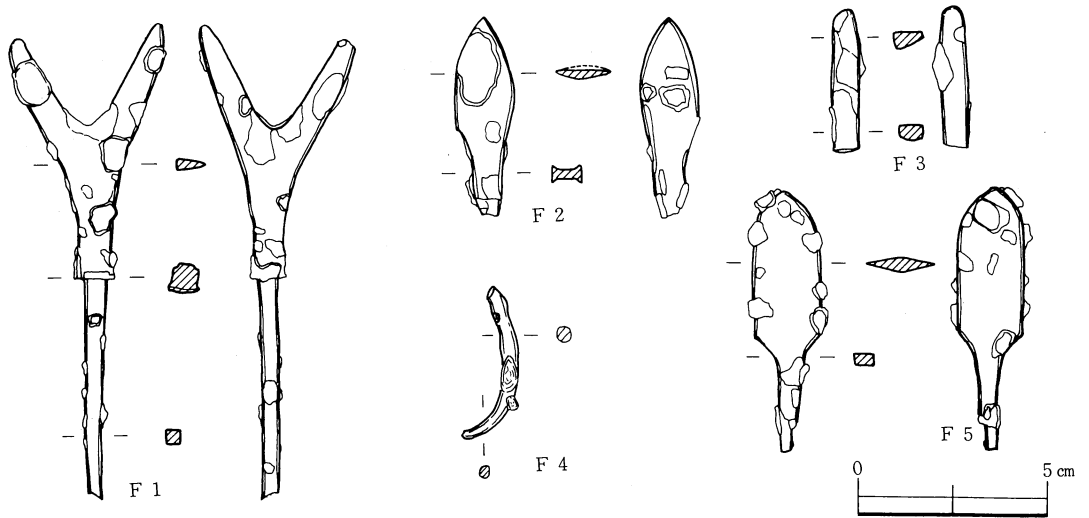
挿図 139 S I 46 遺構図

S I 47 (挿図140～142, 図版11・50・51)

13F地区の南西区にあり、S Z01の南、S I 59の北に位置する。S I 51・52・48と切り合っている。新旧関係はS I 47よりS I 51・52・48が新しい。平面形は隅丸方形である。床面の大きさは、長辺4.50m、短辺4.20mを測り、主軸はN-60°-Wである。床面積は約20.6㎡になる。壁高は北側で最大値49.0cm、東側で最小値23.4cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面に13個検出したが柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4本である。プランはP 1から(36×36-56), (36×50-50), (42×38-22), (53×50-47) cmを測る。

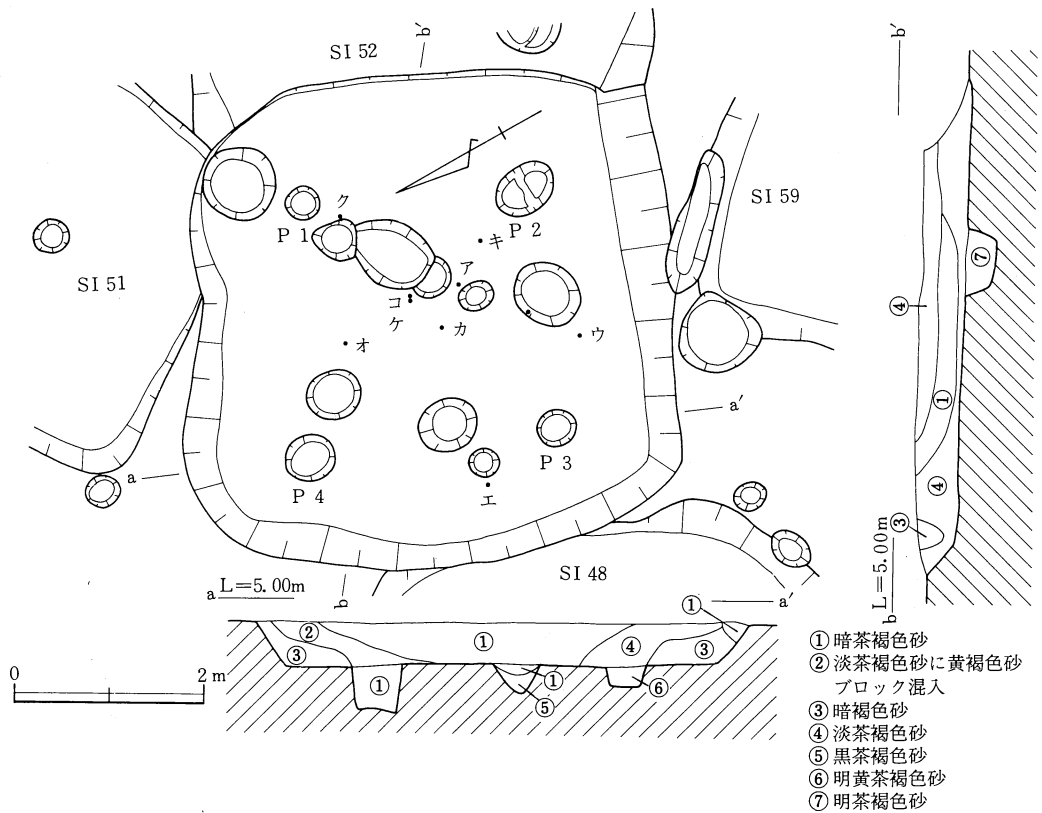


挿図 140 S I 47 遺物図その 1



挿図 141 S I 47 遺物図その 2

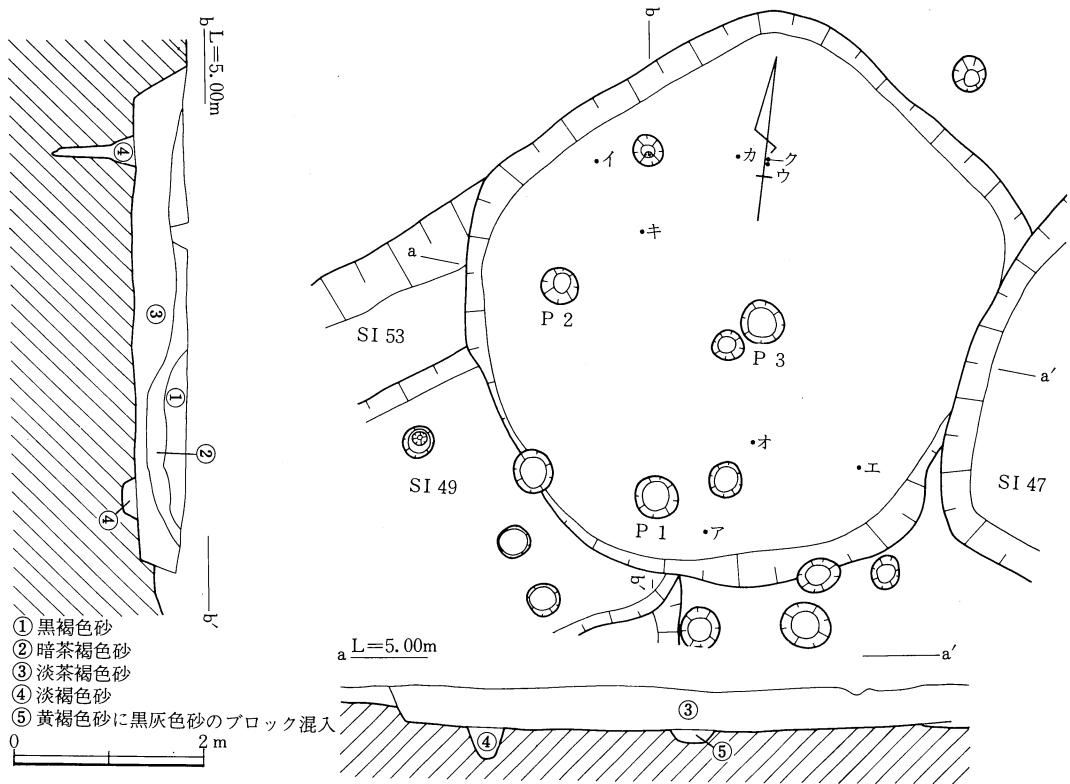
柱穴間距離 P 1 - P 2 間から 2.30, 2.50, 2.62, 2.70m を測る。他のピットの用途は不明である。時期は遺物より長瀬 II 期と考えられる。



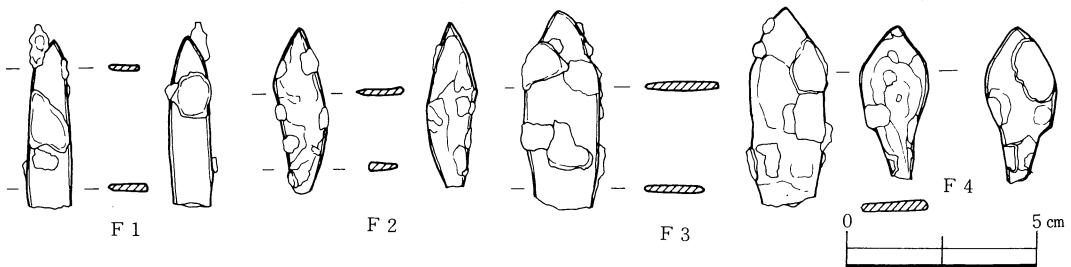
挿図 142 S I 47 遺構図

S I 48 (挿図143~145, 図版12・51・52)

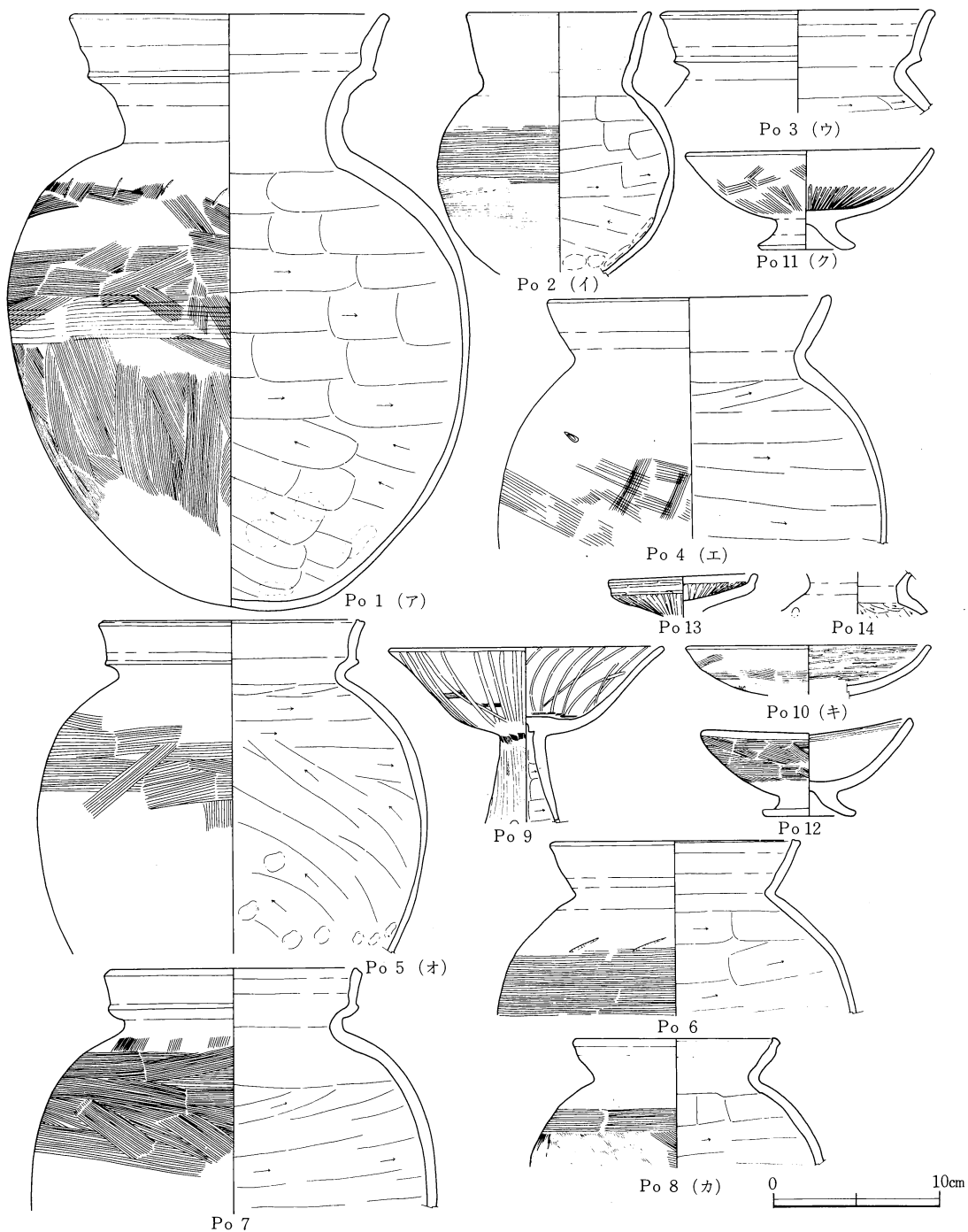
13F地区の南西区にあり, S I 42の南, S I 59の北西に位置する。S I 47・59と切り合っている。新旧関係はS I 48よりS I 47が古く, S I 49が新しい。平面形は五角形をなす。床面の大きさは, 南北方向で5.56m, 東西方向で5.50mを測り, 床面積は30.5m²である。壁高は北西側で最大値61.5cm, 北東側で最小値42.2cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で6個検出した。柱穴と思われるのはP 1とP 2である。五本柱と考えられるが北, 北東, 南東側の柱穴は検出できなかった。プランはP 1から(46×45-16), (40×38-34)cmを測る。P 3(48×47-14)cmは浅いピットであり, 場所的に見ても特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



挿図 143 S I 48 遺構図



挿図 144 S I 48 遺物図その1

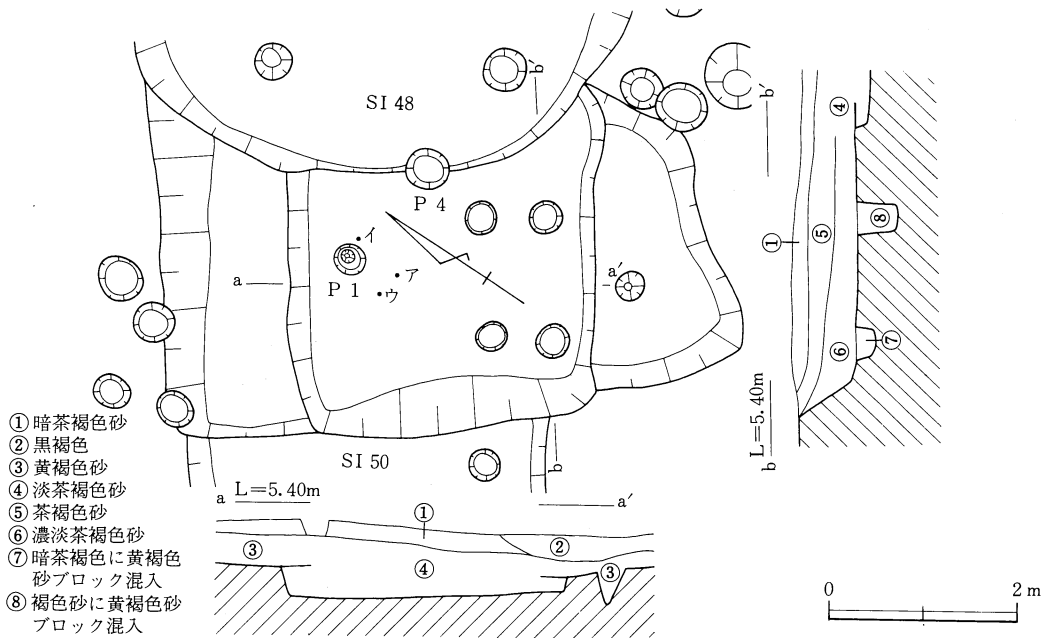


挿図 145 S I 48 遺物図その 2

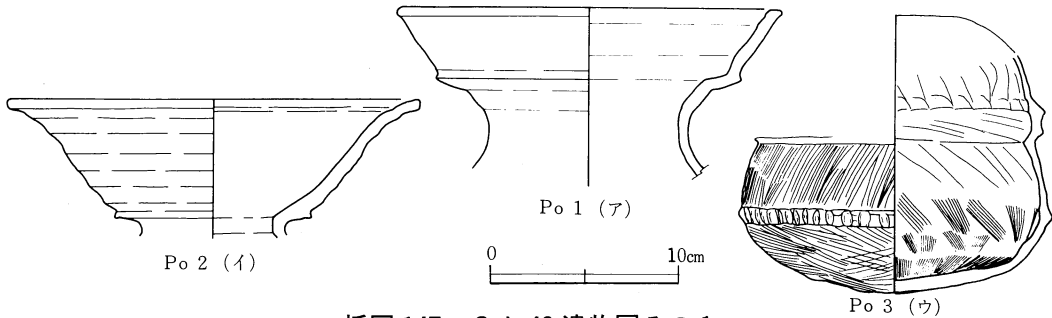
S I 49 (挿図146~148, 図版12・52)

13F地区の南西区にあり S I 43の南東, S I 59の北西に位置する。S I 48・50・53と切り合っている。新旧関係は S I 49より S I 48・50・53が新しい。平面形は方形である。床

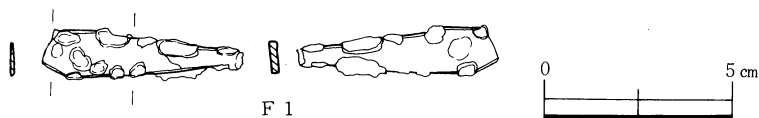
面の大きさは、長辺3m(推定)、短辺2.88mを測り、主軸はN-53°-Eである。床面積は約8㎡になると思われる。壁高は南西側で最大値68cm、南東側で最小値14cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で6個検出したが柱穴として対応するものはない。しかし、P1は2段掘りをしており柱穴の可能性もある。出土遺物の中には長瀬高浜遺跡で初めての手焙形土器がみられる。時期はS I 50とS I 48の間の時期になるが、長瀬II期とIII期の竪穴住居であるためS I 49はその中間期と考えられる。



挿図 146 S I 49 遺構図



挿図 147 S I 49 遺物図その1

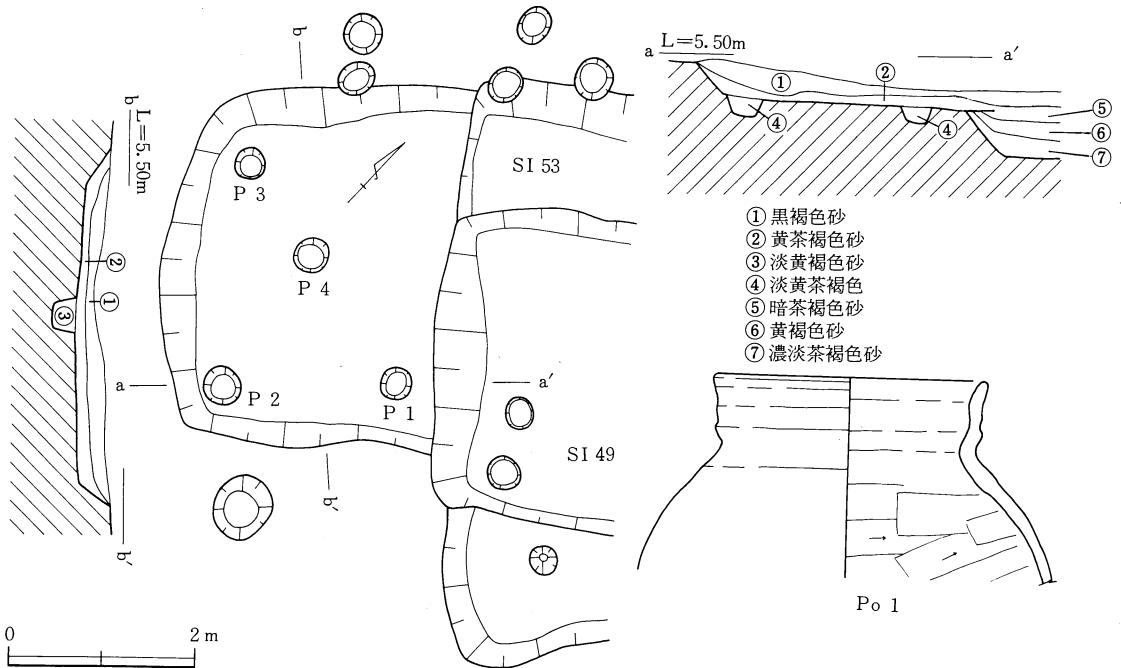


挿図 148 S I 49 遺物図その2

S I 50 (挿図149, 図版12・52)

14F地区の南東区にあり、S I 43の南東、S I 59の北西に位置する。北東側でS I 49と

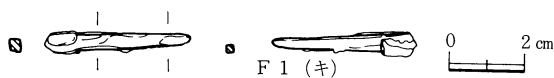
切り合っている。新旧関係はS I 50が新しい。平面形は方形である。床面の大きさは、長辺不明、短辺3.10mを測り、主軸はN-35°-Wである。床面積は8㎡以上になる。壁高は南西側で最大値33.0cm、北西側で最小値19.3cmを測る。ピットは床面で4個検出したが柱穴と考えられるものはP 1~P 3で、北側の柱穴は確認できなかった。このプランはP 1から(35×35-20), (40×38-26), (32×32-55) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間で1.86m, P 2-P 3間で2.30mを測る。床面中央にはP 4 (39×36-27) cmがあり、特殊ピットと考えられる。時期は遺物から長瀬III期と考えられる。



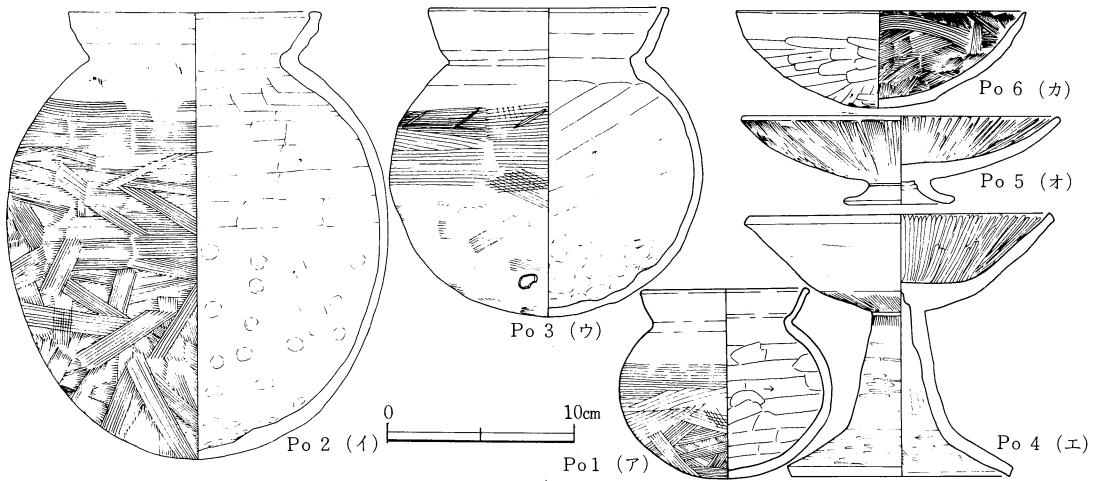
挿図 149 S I 50 遺構・遺物図

S I 51 (挿図150~152, 図版11・52)

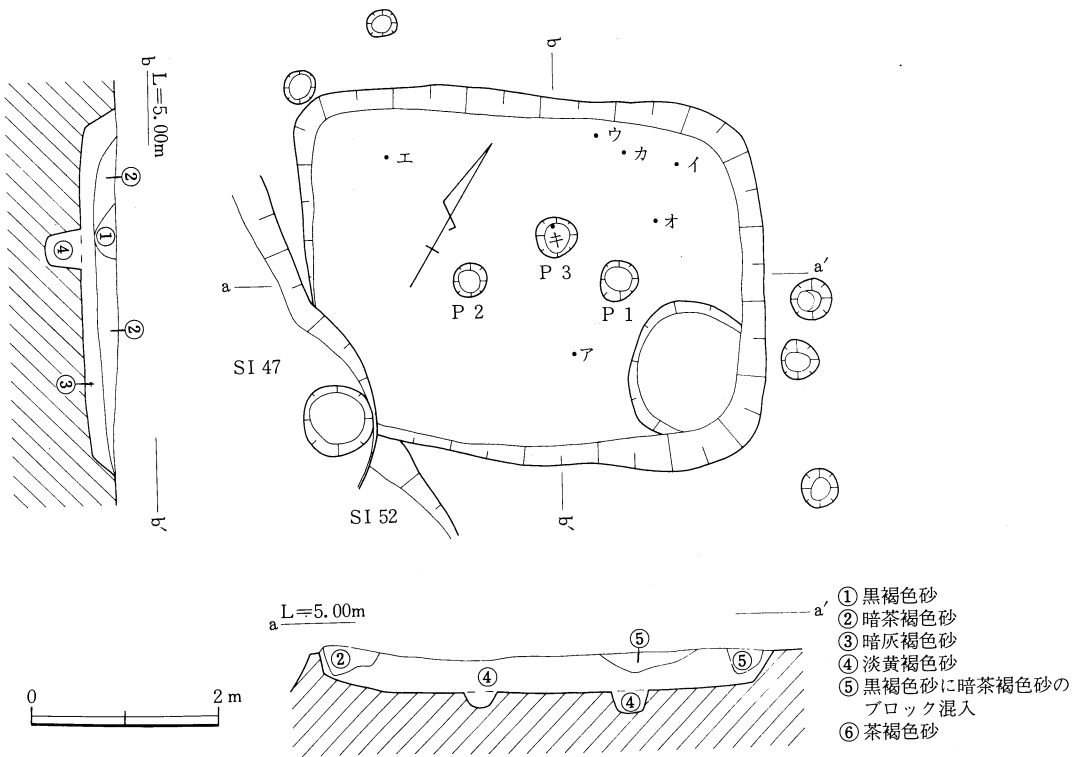
13F地区の中央部にあり、S Z 02の南東、S I 46の南西に位置する。南側でS I 47・52と切り合っている。新旧関係はS I 51よりS I 52が新しく、S I 47が古い。平面形は方形をしている。床面の大きさは長辺4.57m、短辺3.45mを測る。主軸はN-60°-Eである。壁高は北西側で最大値42cm、南西側で最小値12cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で4個検出したが柱穴と考えられるものはP 1とP 2である。このプランはP 1が(40×44-24) cm, P 2が(37×38-16) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間で1.62mを測る。床面中央よりやや北寄りにP 3 (44×48-38)cmがあり特殊ピットと考えられる。他のピットは用途が不明である。時期は遺物より長瀬III期と考えられる。



挿図 150 S I 51 遺物図その1



挿図 151 S I 51 遺物図その 2

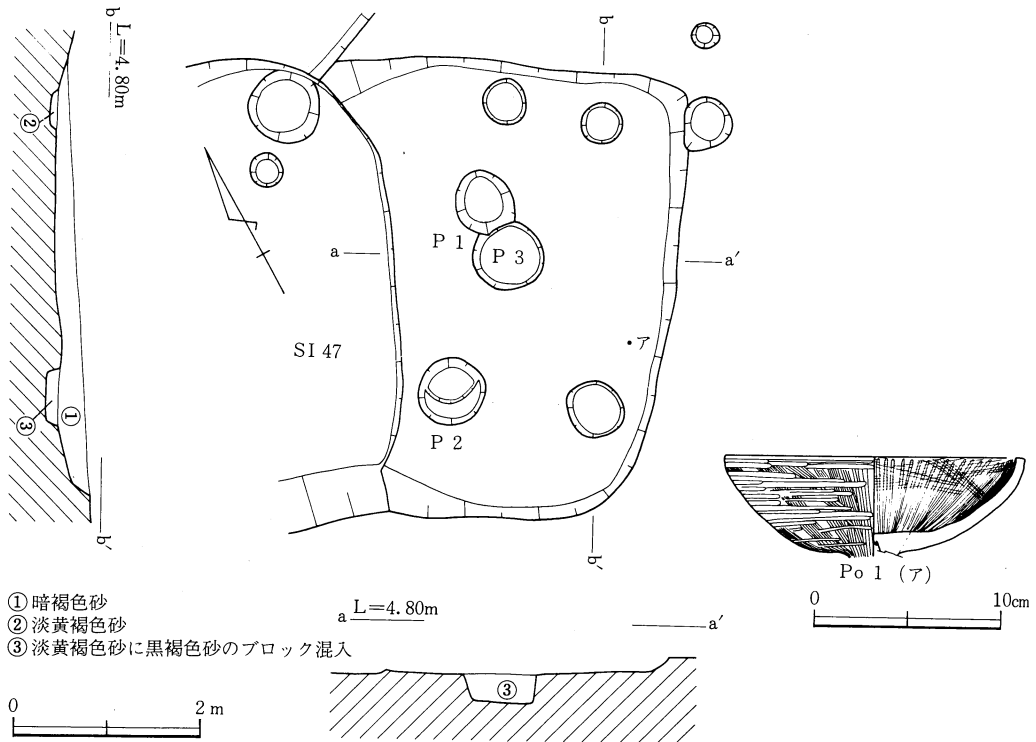


挿図 152 S I 51 遺構図

S I 52 (挿図153, 図版11)

13F地区の南側中央部にあり、S I 60の北側、S I 59の北東に位置する。S I 47, 51と切り合っている。新旧関係はS I 52よりS I 47・51の方が古い。平面形は方形になると思われる。床面の大きさは北東—南西方向で4.43mを測る。主軸はN—38°—Eである。床面積は16m² (推定) になる。壁高は南西側で最大値34cm, 北東側で最小値11cmを測る。側溝

はみられない。ピットは床面に6個検出したが、柱穴と考えられるものはP1とP2である。プランはP1(70×64-22), P2(72×72-46)cmで柱穴間距離は2.06mである。P1と切り合うP3(76×76-32)cmは埋砂の色などから特殊ピットと考えたい。この竪穴住居跡の時期は良好な遺物が出土していないが切り合い関係で長瀬Ⅲ期のものとする。



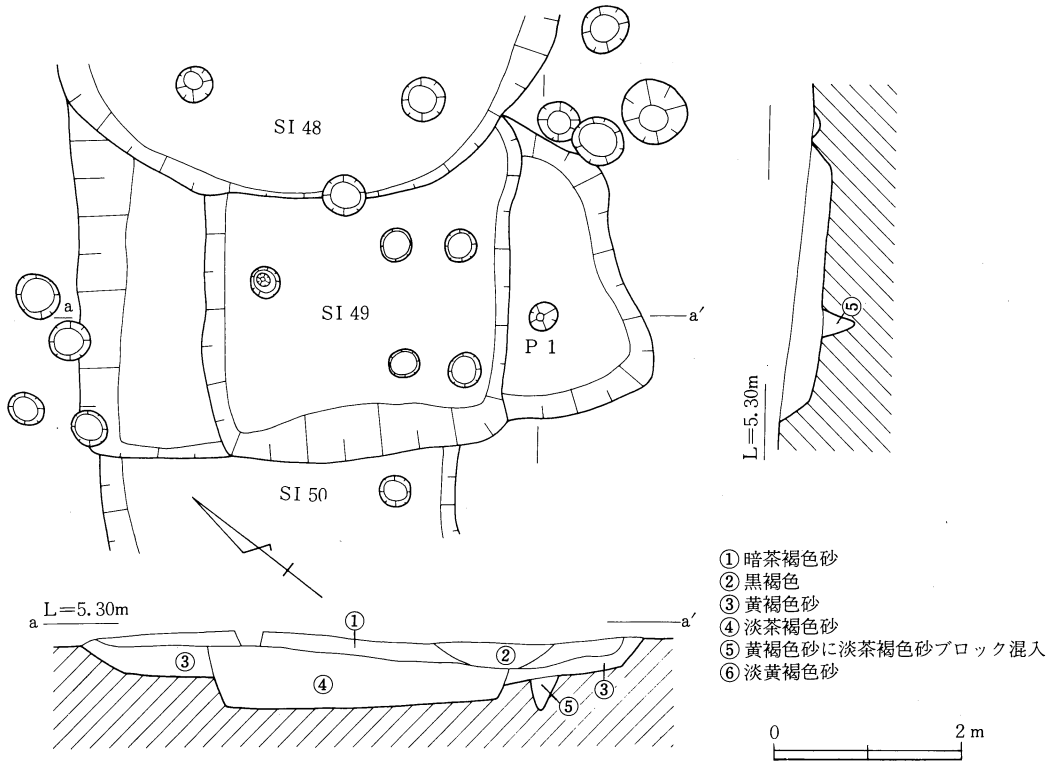
挿図 153 S I 52 遺構・遺物図

S I 53 (挿図154, 図版12)

13F地区の南西区にあり、12号墳の東、S I 59の北西に位置する。北側でS I 49と切り合っている。新旧関係はS I 49よりS I 53の方が新しい。平面形は方形をしていると考えられるが、S I 49によって大部分が削られているため不明である。床面の大きさは北東-南西方向で5.36mを測る。主軸はN-40°-Eである。壁高は北西側で最大値26cm, 北東側で最小値24cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で1個(P1)検出した。他に肩部にピットはあるが柱穴にはならず、P1(32×30-32)が柱穴の可能性はある。S I 53は図化できる遺物がないが、S I 49との切り合い関係などで長瀬Ⅲ期のものと推定する。

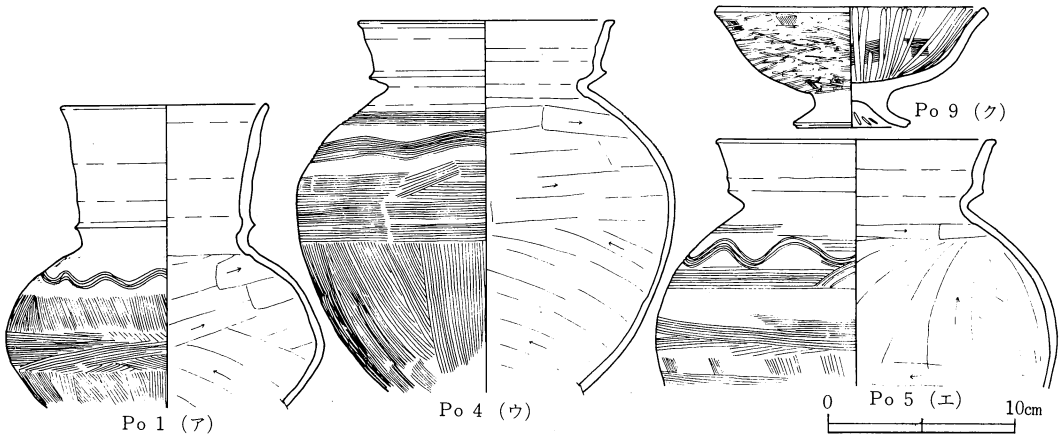
S I 54 (挿図155~159, 図版12・53)

13F地区の北東区にありS I 38の南西, S Z 02の東に位置する。S I 45・46と切り合っている。新旧関係は、S I 54よりS I 45・46の方が古い。平面形は北東側のコーナーが少し丸くなっているが方形になる。床面の大きさは長辺4.18m, 短辺3.92mを測り、主軸はN

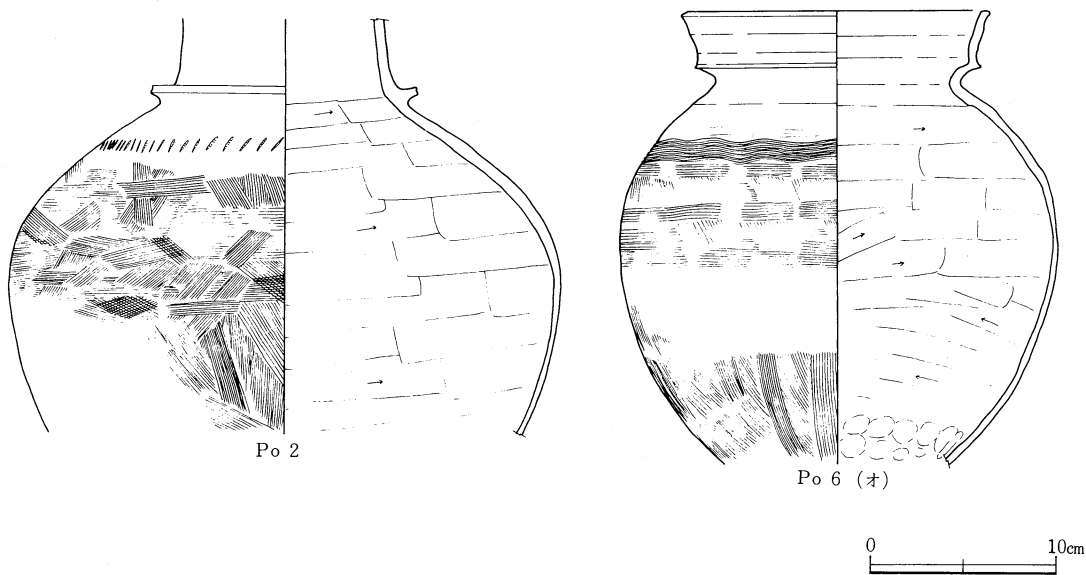
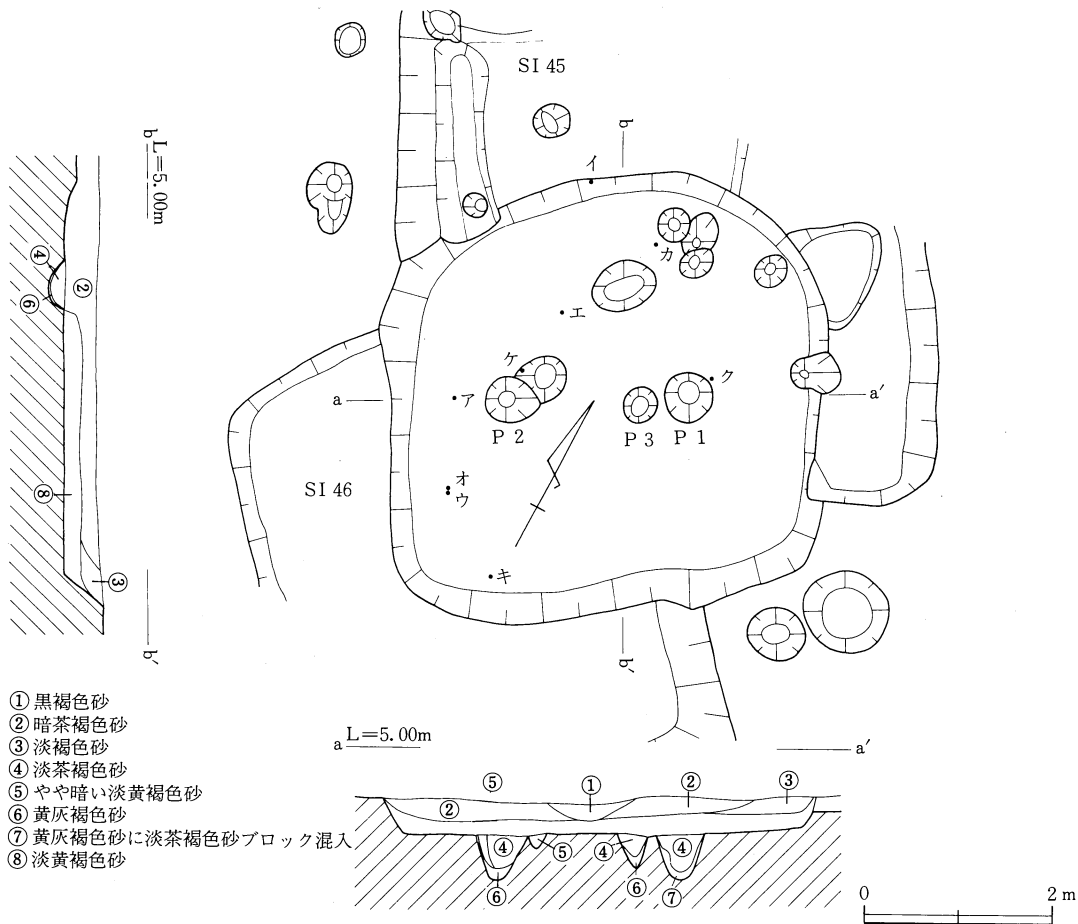


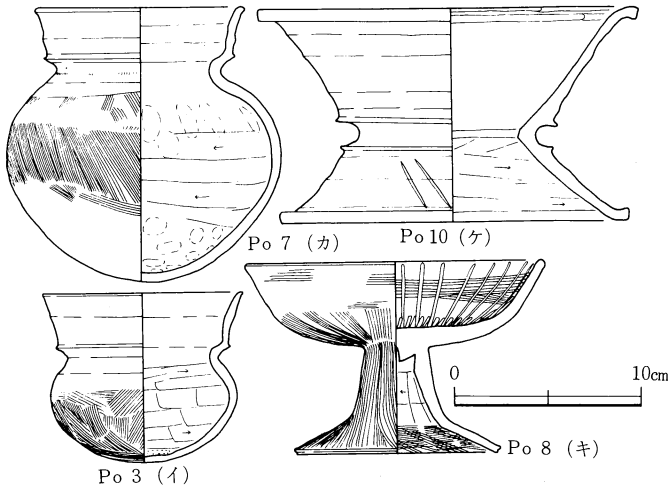
挿図 154 S I 53 遺構図

—62°—Eである。床面積は約16.39㎡になる。壁高は南側で最大値40cm、北側で最小値8cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面でS I 45のものと思われるP 4, P 5を含め9個を検出したがS I 54の柱穴と考えられるものはP 1とP 2である。このプランはP 1が(50×50—48), P 2が(60×48—48)cmを測る。柱穴間距離はP 1—P 2間で1.96mを測る。P 3(40×36—22)cmは特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。

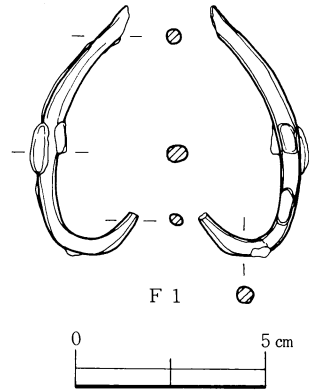


挿図 155 S I 54 遺物図その1





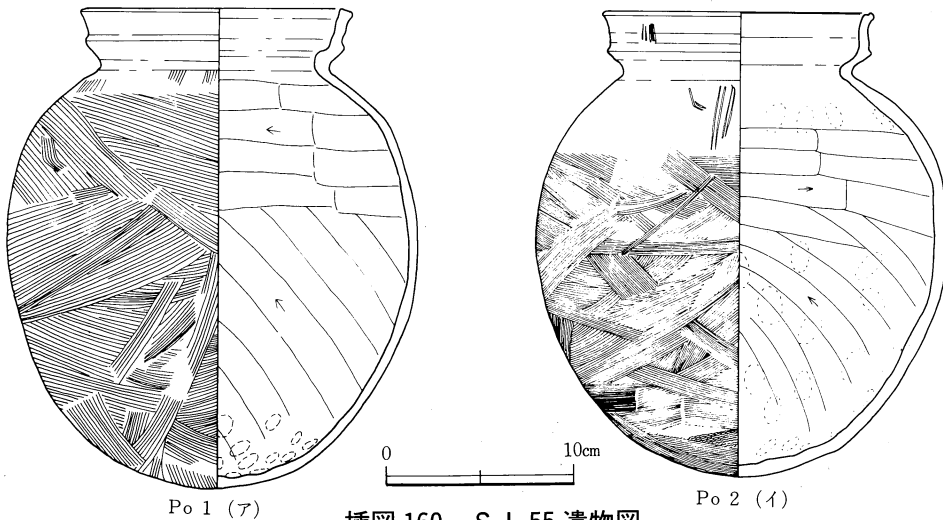
挿図 158 S I 54 遺物図その 3



挿図 159 S I 54 遺物図その 4

S I 55 (挿図160・161, 図版12・54)

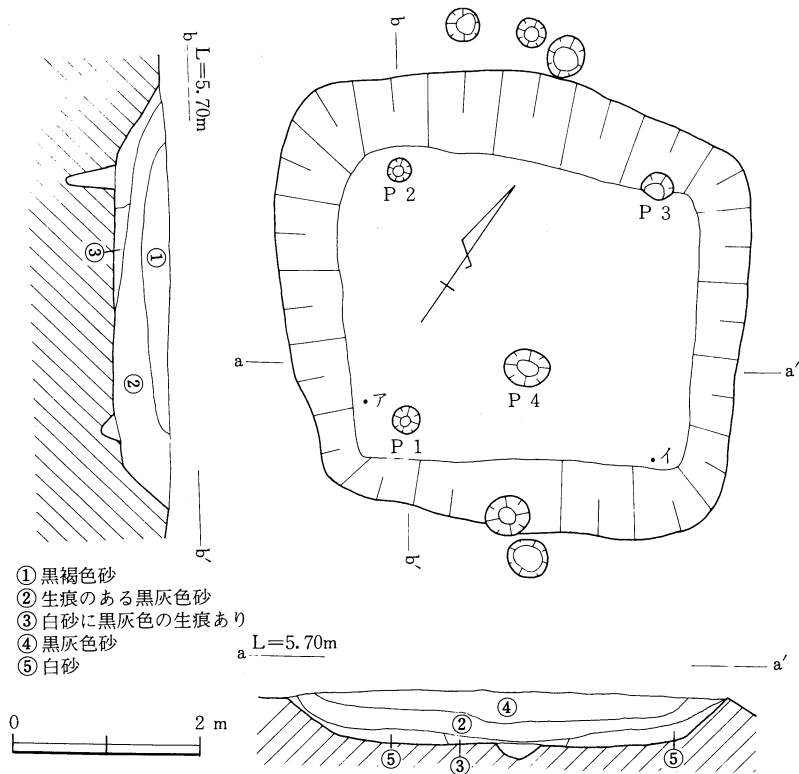
11F地区の北西区にありS B02の北, S B05の東に位置する。平面形は方形をしている。床面の大きさは長辺3.90m, 短辺2.92mを測り, 主軸はN-56°-Eである。床面積は約11.4 m²を測る。壁高は南側で最大値56cm, 南西側で最小値4 cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で4個検出したが柱穴は, P 1~P 3である。東側の柱穴を確認できなかった。プランはP 1から (32×32-24), (28×28-50), (36×30-36) cmを測る。柱穴間距離は, P 1-P 2間から2.66, 2.74mを測る。床面中央よりやや南寄りにP 4 (52×40-18) cmがあり, 特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬II期と考える。



挿図 160 S I 55 遺物図

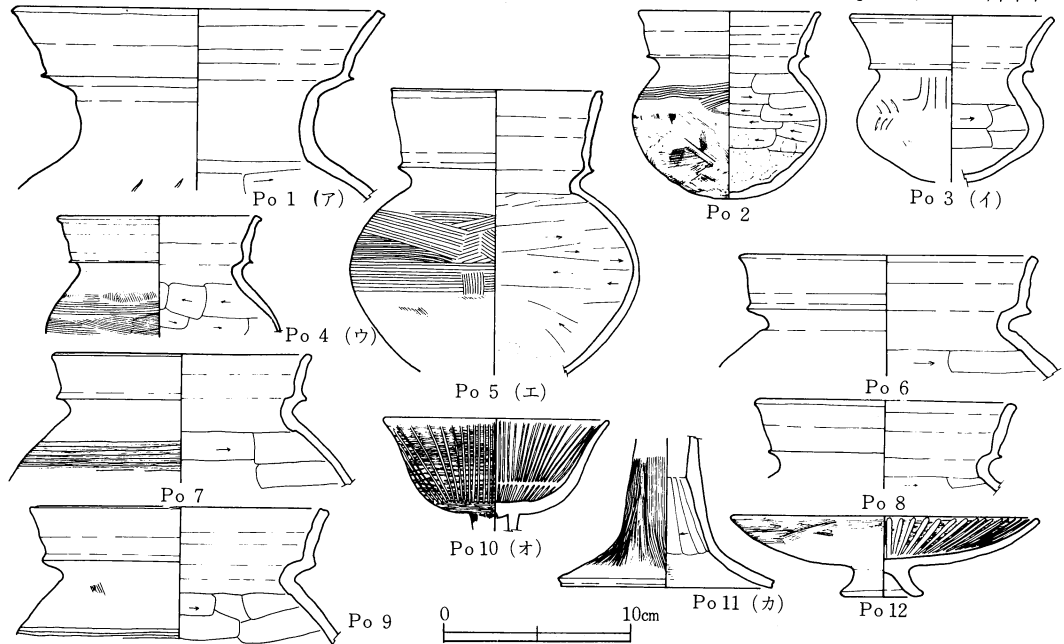
S I 56 (挿図162~164, 図版13・54・55)

12F地区の中央付近にあり, S I 58の北, S I 55の西に位置する。S B04・05と切り合っており, 新旧関係はS B04・05の方が古い。平面形は方形をしている。床面の大きさは長



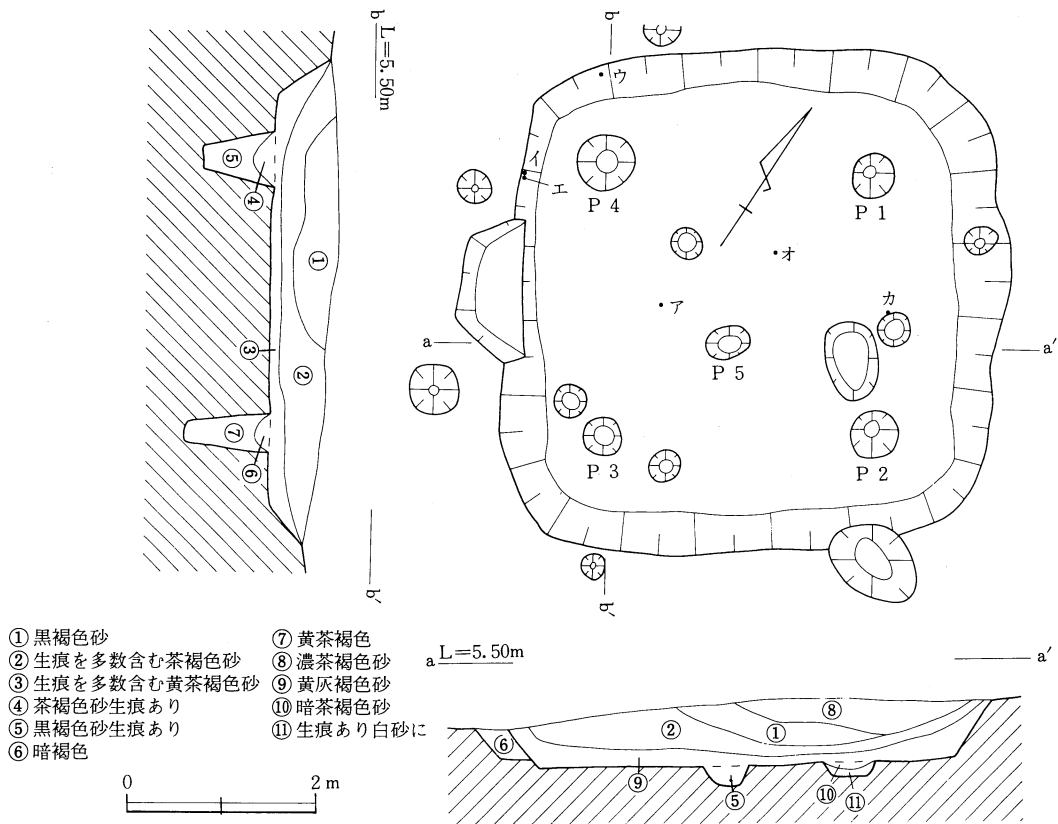
挿図 161 S I 55 遺構図

辺4.44m, 短辺4.34mを測り, 主軸はN-58°-Eである。床面積は, 19.3m²である。壁高は北側で最大値77.2cm, 南側で最小値38.2cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面か

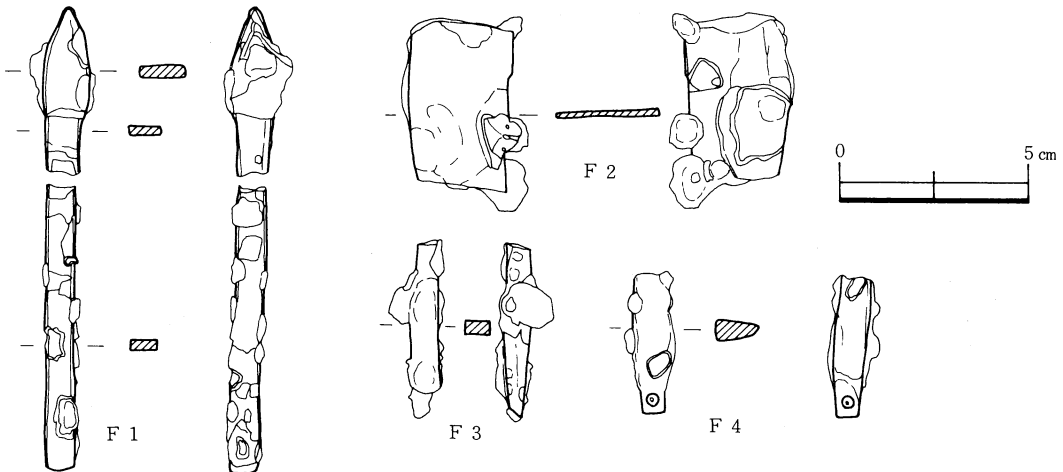


挿図 162 S I 56 遺物図その 1

ら10個検出したが柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4本である。プランはP 1から(44×50-39), (54×50-39), (40×38-91), (62×59-78) cmを測る。床面の中央部にはP 5 (48×34-22) cmがあり, 特殊ピットと考えられる。柱穴間距離はP 1-P 2間から2.68, 2.84, 2.90, 2.80mを測る。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



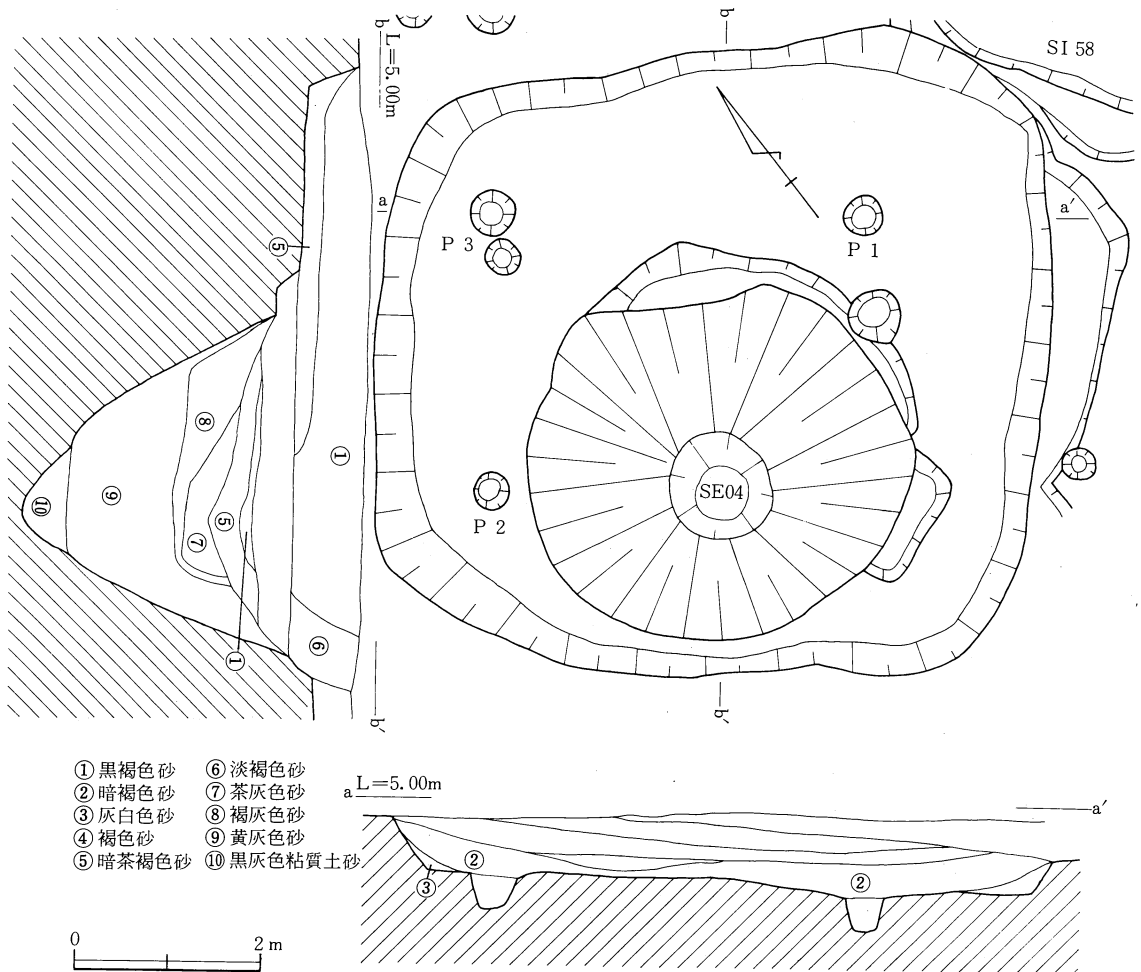
挿図 163 S I 56 遺構図



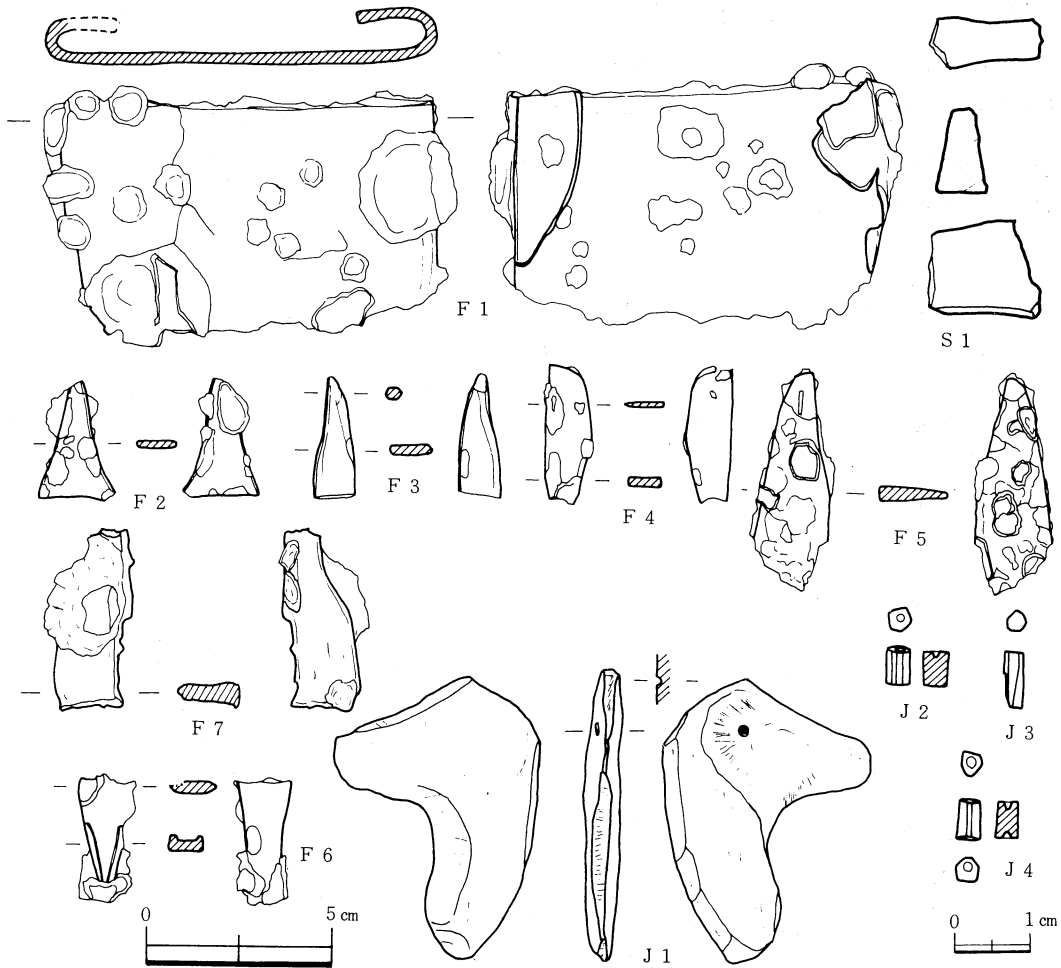
挿図 164 S I 56 遺物図その2

S I 57 (挿図165・166, 図版13・55)

12F地区の南西区にあり, S I 56の南西, 22号墳の東に位置する。SE04とS I 58と切り合っている。SE04はS I 57の床面で検出されていることからSE04の方が古いと考えられる。S I 58とは, S I 57の方が新しい。平面形は隅丸長方形で南東側のコーナーが少しびつである。床面の大きさは長辺6.48m, 短辺5.48cmを測り, 主軸はN-52°-Wである。床面積は約35.5㎡になる。壁高は東側で最大値64.6cm, 南側で最小値12.2cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で5個を検出したが柱穴と考えられるものはP1~P3であるが南側の柱穴は検出できなかった。プランはP1から(43×41-37), (40×38-30), (47×46-28)cmを測る。柱穴間距離はP2-P3間が2.90m, P3-P1間が3.96mを測る。他のピットの用途は不明である。時期は長瀬I~II期と考えられる。



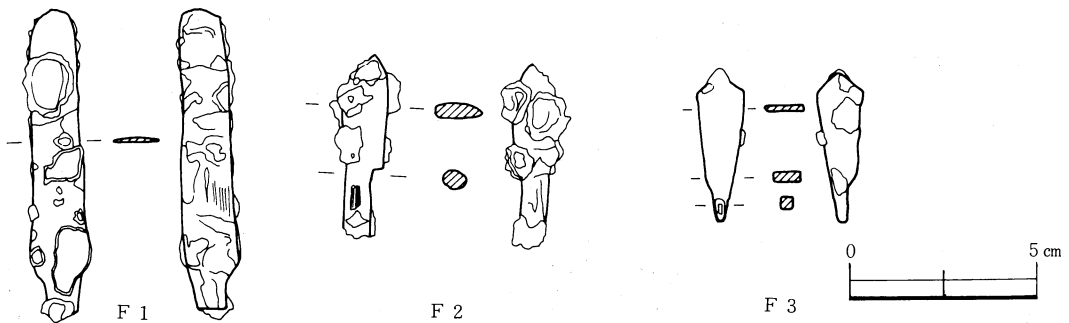
挿図 165 S I 57 遺構図



挿図 166 S I 57 遺物図

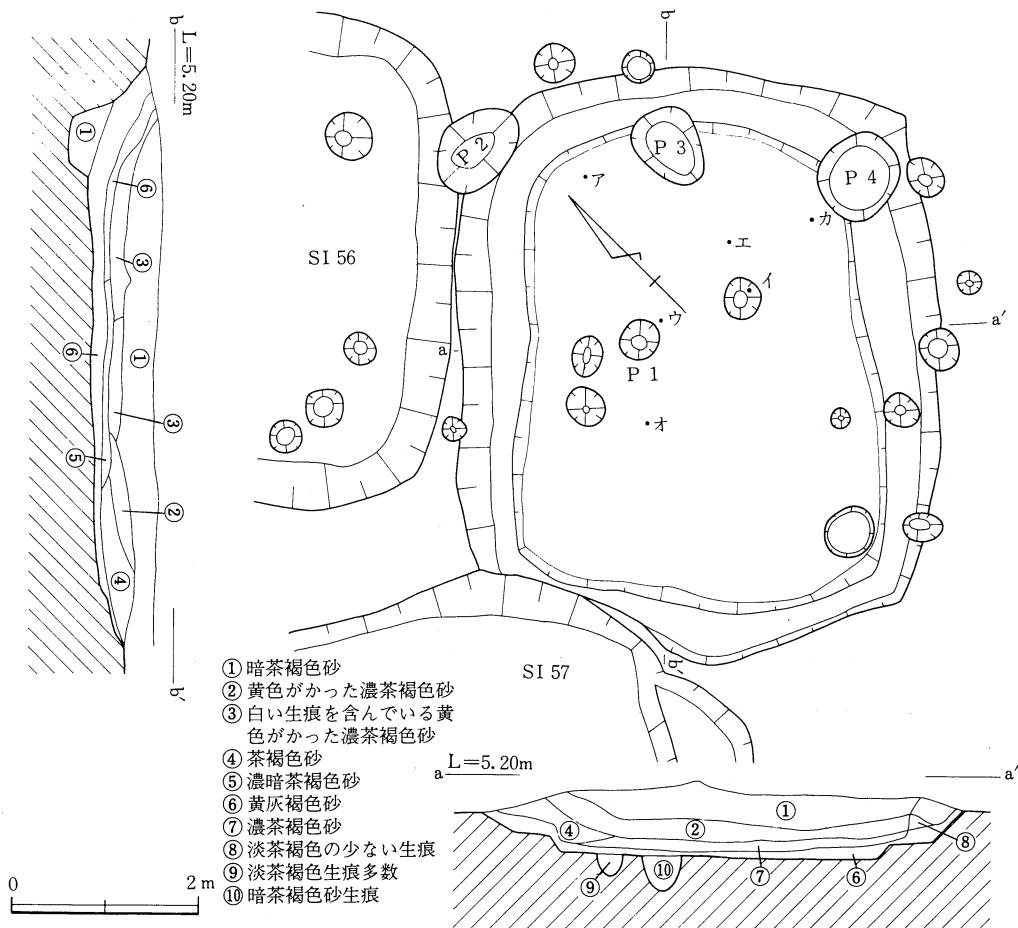
S I 58 (挿図168~170, 図版13・55)

12F地区の南東区にあり, S I 56の南, S I 55の南西に位置する。S B 05と切り合っている。新旧関係はS I 58よりS B 05の方が古い。平面形は方形である。2段に掘り込んでいる。床面の大きさは、長辺4.92m, 短辺3.36mを測り、主軸はN-49°-Eである。床面

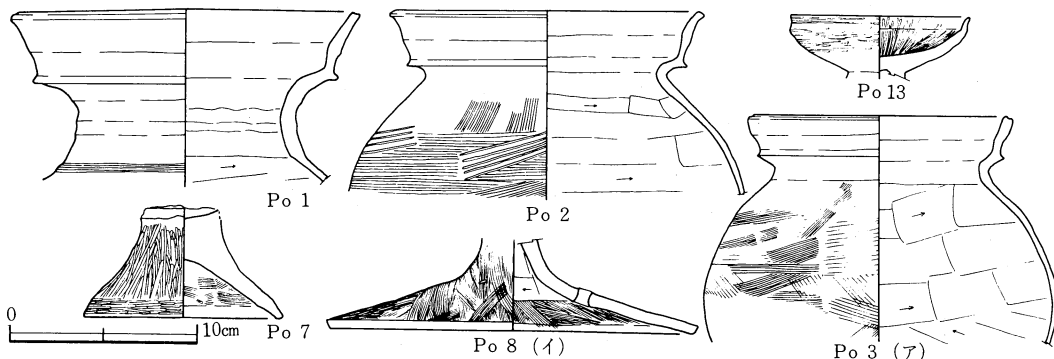


挿図 167 S I 58 遺物図その1

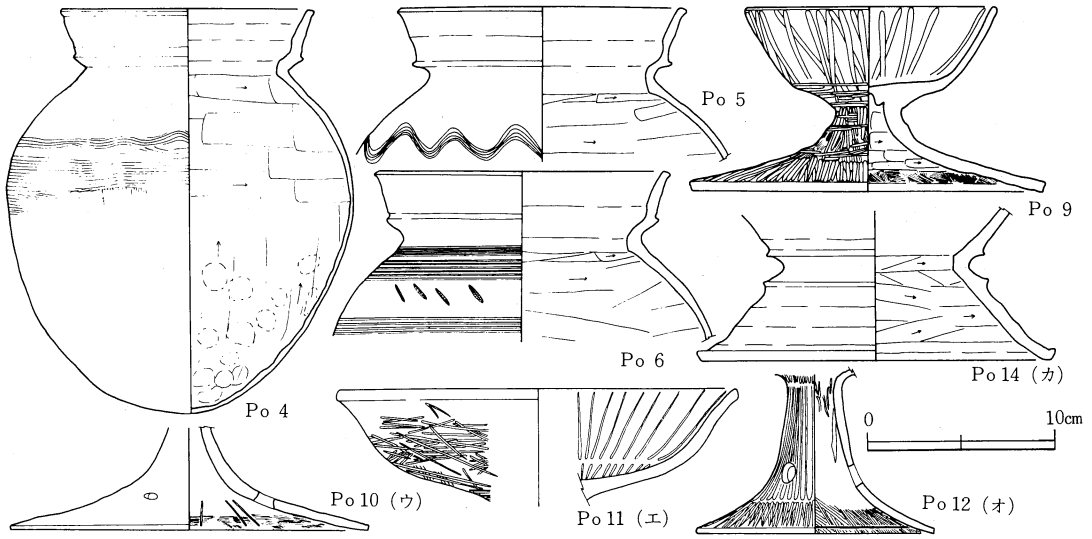
積は約16.5㎡になる。壁高は南側で最大値46cm、南西側で最小値20cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で6個検出したが柱穴と考えられるものは見あたらない。またSI 58は床面を一段掘り込み、四方に幅約40cmのテラスをもつ。テラスを含めた床の大きさは6.0×4.54mを測る。床面からテラスまでの高さは16cmある。P 2～P 3はSB05の柱穴である。出土遺物より長瀬I期の竪穴住居と考えられる。



挿図 168 S I 58 遺構図

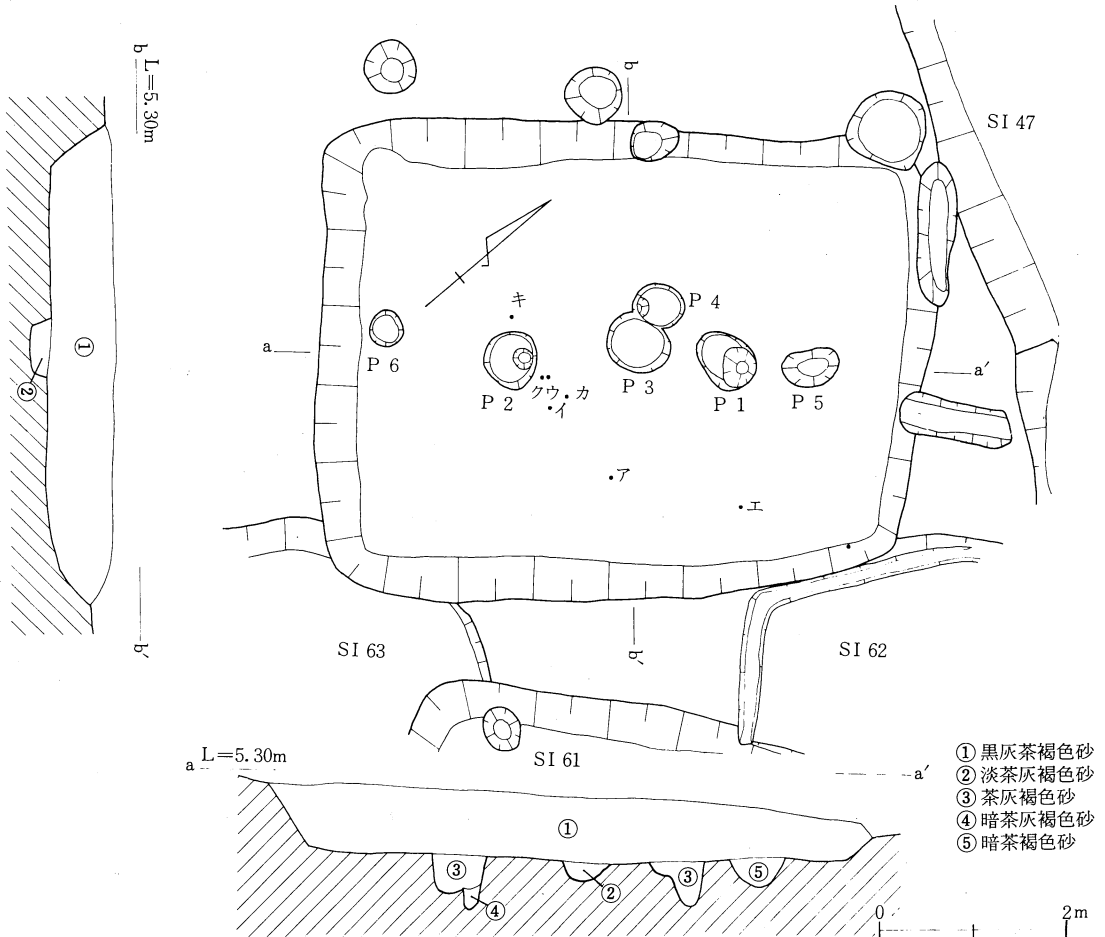


挿図 169 S I 58 遺物図その 2



挿図 170 S I 58 遺物図その 3

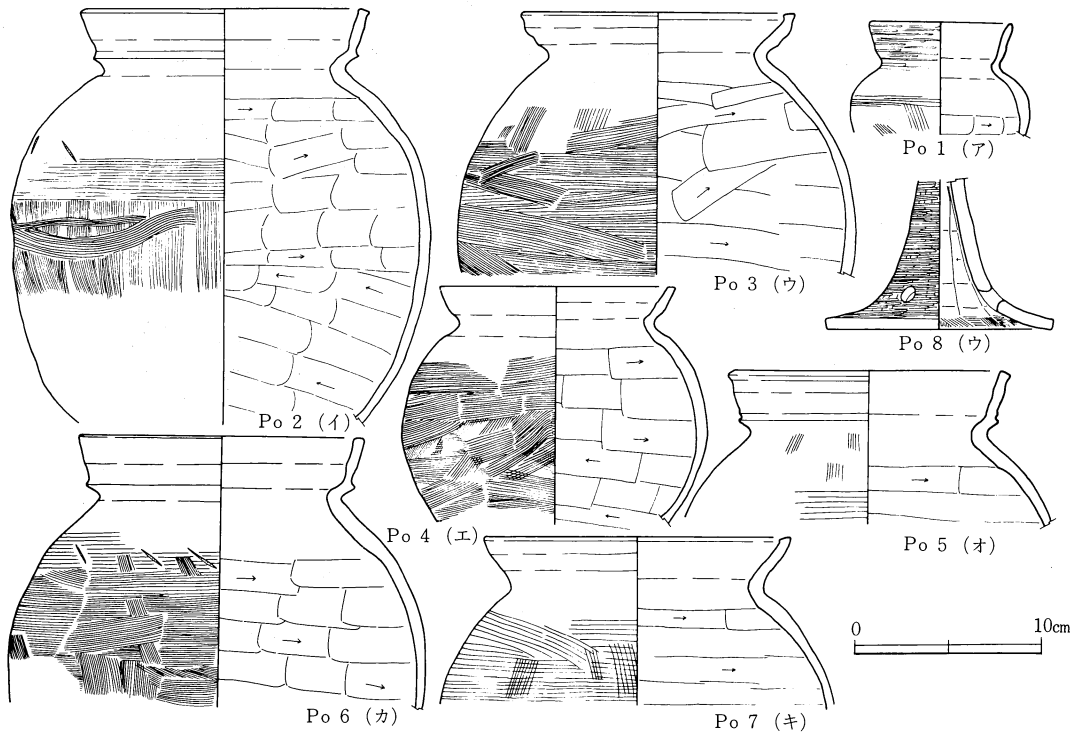
S I 59 (挿図171・172, 図版13・56)



- ① 黒灰茶褐色砂
- ② 淡茶灰褐色砂
- ③ 茶灰褐色砂
- ④ 暗茶灰褐色砂
- ⑤ 暗茶褐色砂

挿図 171 S I 59 遺構図

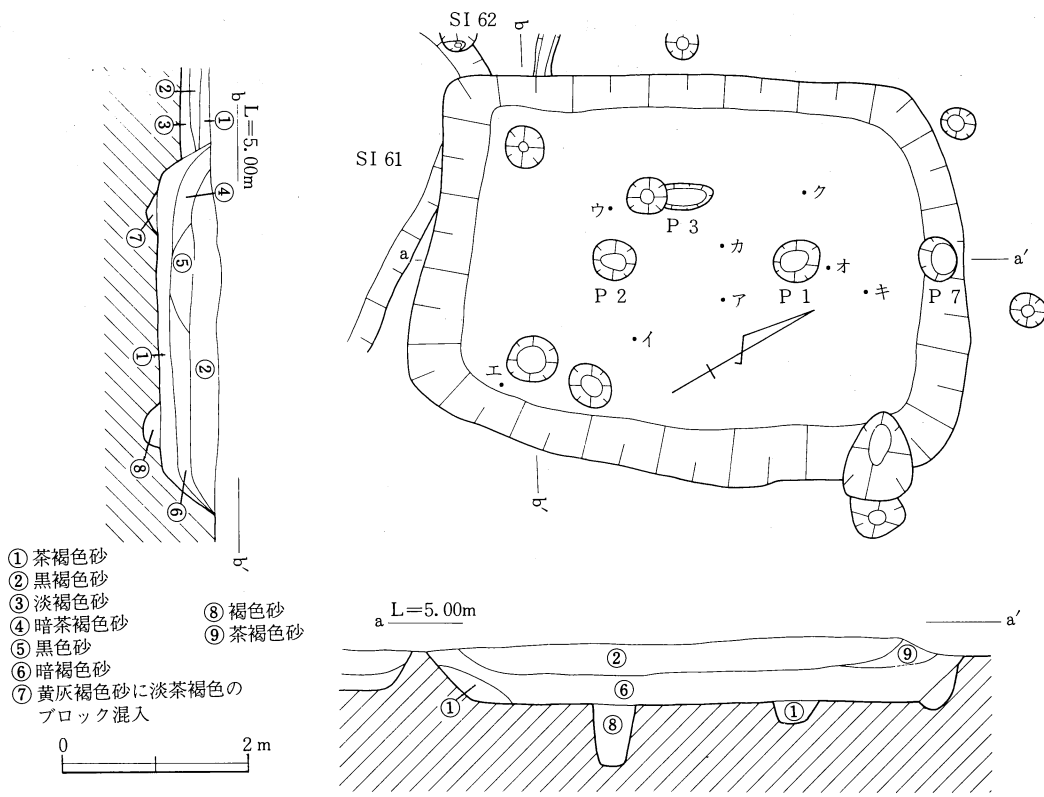
13E地区の北西区にあり、S I 48の南、S I 61の北西に位置する。S I 62・63と切り合っており、新旧関係はS I 59よりS I 62, 63の方が古い。平面形は方形である。床面の大きさは長辺5.80m, 短辺4.00mを測り、主軸はN-43°-Eである。床面積は約24.9㎡である。壁高は西側で最大値76.1cm, 北西側で最小値24.4cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で6個検出したが柱穴と考えられるものはP 1とP 2の2本である。プランはP 1が(68×51-49.5) cm, P 2が(63×57-44) cmを測る。柱穴間距離は2.30mを測る。P 3(70×59-19) cmは特殊ピットと思われる。時期は遺物より長瀬II~III期と考えられる。



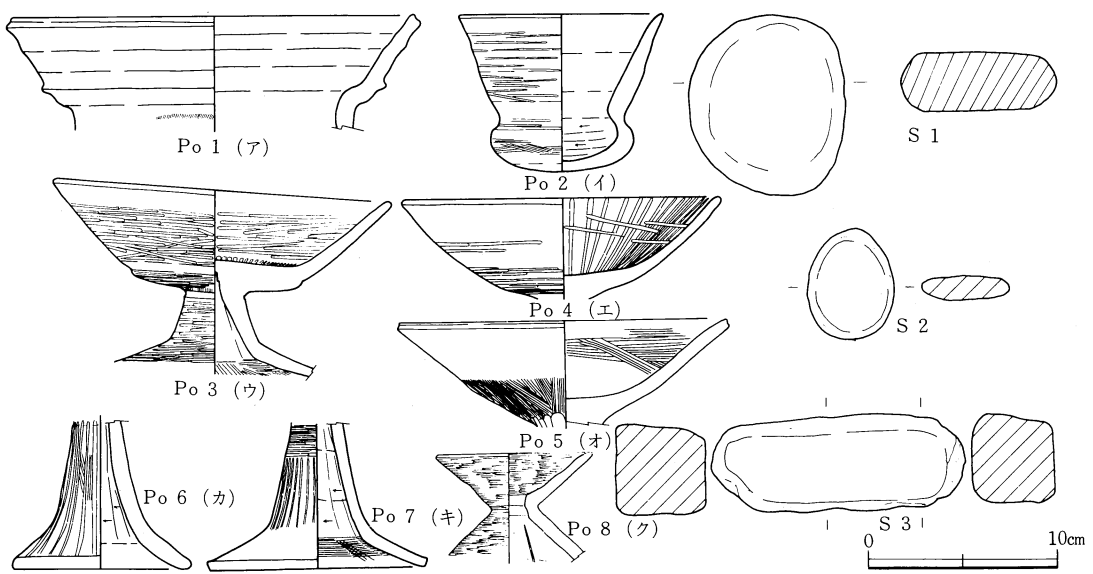
挿図 172 S I 59 遺物図

S I 60 (挿図173・174, 図版14・56)

13E地区北東区と13F地区南東区にまたがり、22号墳の南西、S I 64の北西に位置する。S I 61・62と切り合っており、新旧関係はS I 60よりS I 61・62が古い。平面形は方形をしている。床面の大きさは長辺4.80m, 短辺3.00mを測り、主軸はN-30°-Eである。床面積は14.4㎡になる。壁高は南側で最大値56.9cm, 北側で最小値31.3cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で7個検出したが柱穴と考えられるものはP 1とP 2である。プランはP 1が(53×45-27) cm, P 2が(46×43-66) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間で2.00mを測る。P 3(62×30-12) cmは特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬III期と考えられる。



挿図 173 S I 60 遺構図

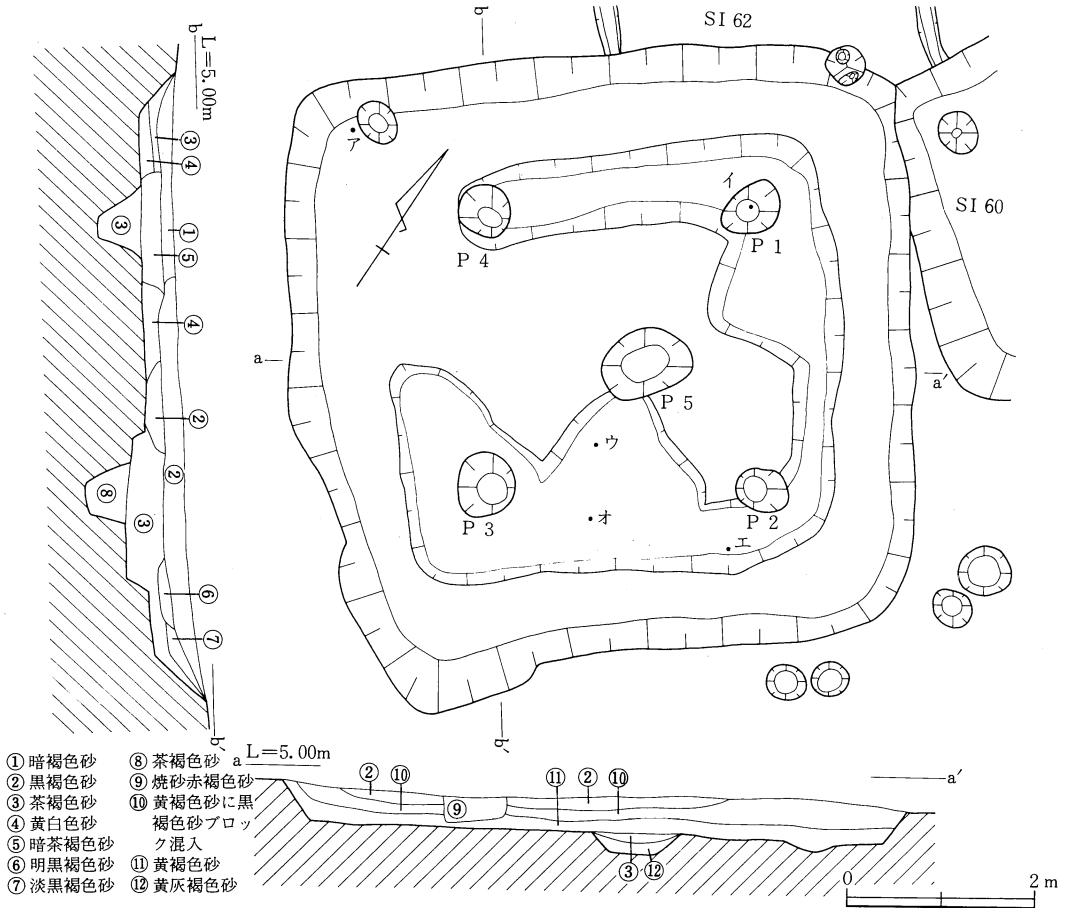


挿図 174 S I 60 遺物図

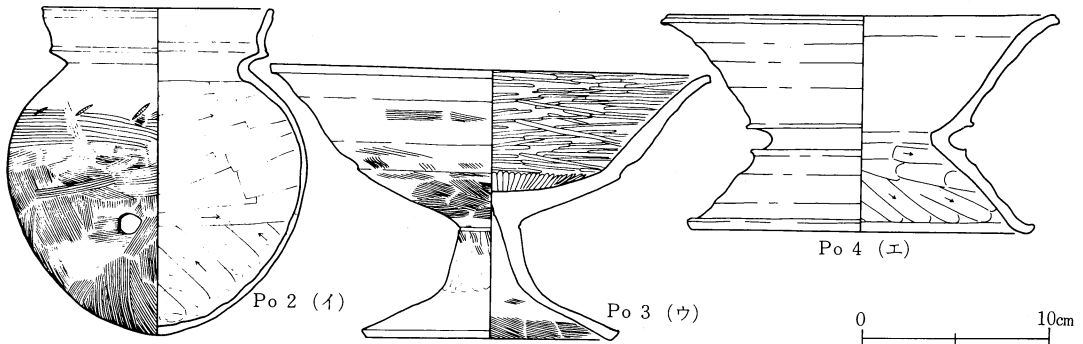
S I 61 (挿図175~178, 図版14・56・57)

13E地区南西区にあり S I 59の南東, S I 64の西に位置する。S I 60・62・63, S B06と切り合っている。新旧関係は S I 61より S I 60・62・63が新しい。平面形はほぼ正方形

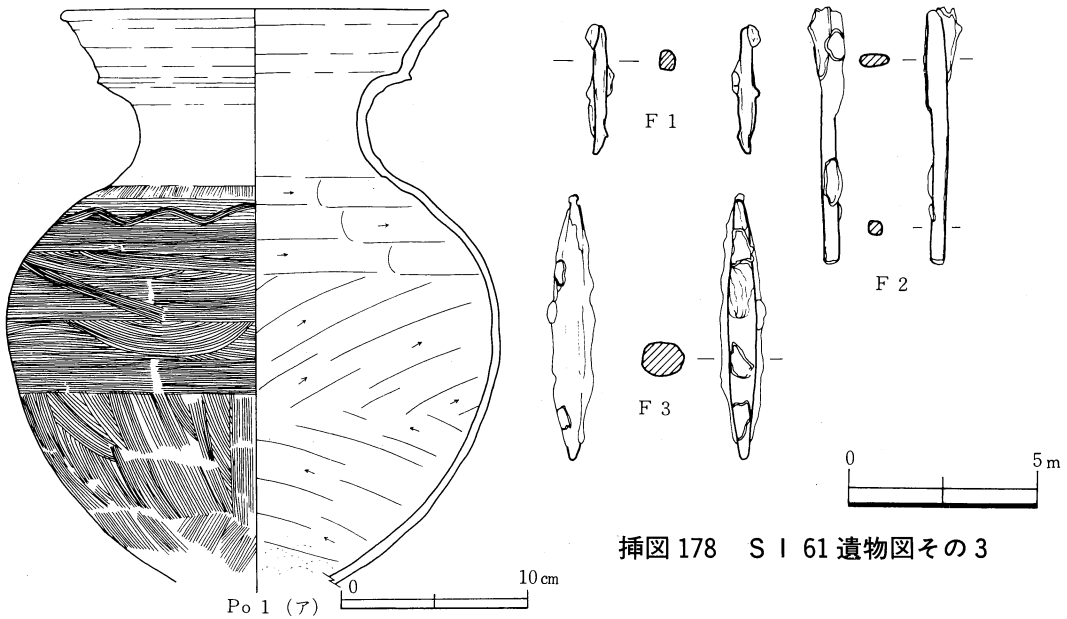
である。床面の大きさは1辺が約5.70mを測り、主軸はN-55°-Eである。床面積は約34.2m²である。壁高は南側で最大値53.5cm、北側で最小値28cmを測る。床面に溝状の遺構があるが側溝とは考えられない。用途は不明である。ピットは6個検出したが柱穴と考えられるものはP1~P4の4本である。プランはP1から(68×52-67), (60×45-77), (68×63-57), (58×56-44) cmを測る。柱穴間距離はP1-P2間から2.98, 2.86,



挿図 175 S I 61 遺構図



挿図 176 S I 61 遺物図その1



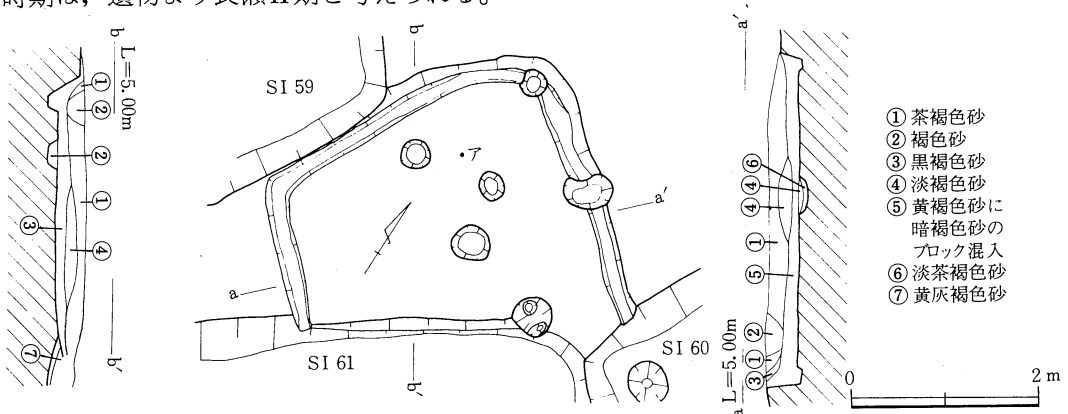
挿図 178 S I 61 遺物図その 3

挿図 177 S I 61 遺物図その 2

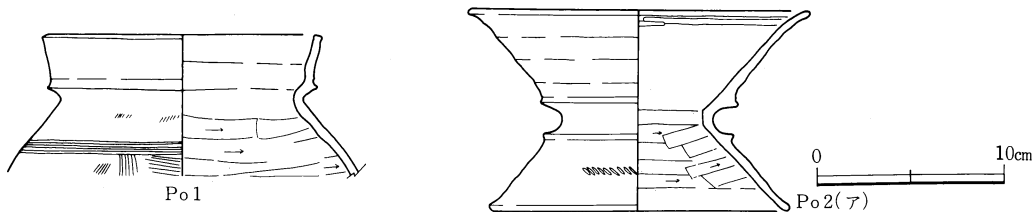
2.86, 2.70mを測る。床面中央にはP 5 (120×70-24) cmがあり、特殊ピットと考えられる。時期は遺物より長瀬 I 期と考えられる。

S I 62 (挿図179・180, 図版14)

13E地区の北東区にあり22号墳の南西, S I 52の南に位置する。S I 59・60・61と切り合っている。新旧関係は、S I 62よりS I 59・60の方が新しく、S I 61が古い。平面形は方形であるがS I 61によって削られている。床面の大きさは、北東-南西方向で3.30mを測る。主軸はN-32°-Eである。床面積は不明である。壁高は西側で最大値30cm, 東側で最小値17.1cmを測る。測溝は長さ7.20m, 幅0.14m, 深さ0.1mが壁下をめぐる。ピットは床面で6個検出したが柱穴と思われるものは確認できなかった。用途は不明である。時期は、遺物より長瀬II期と考えられる。



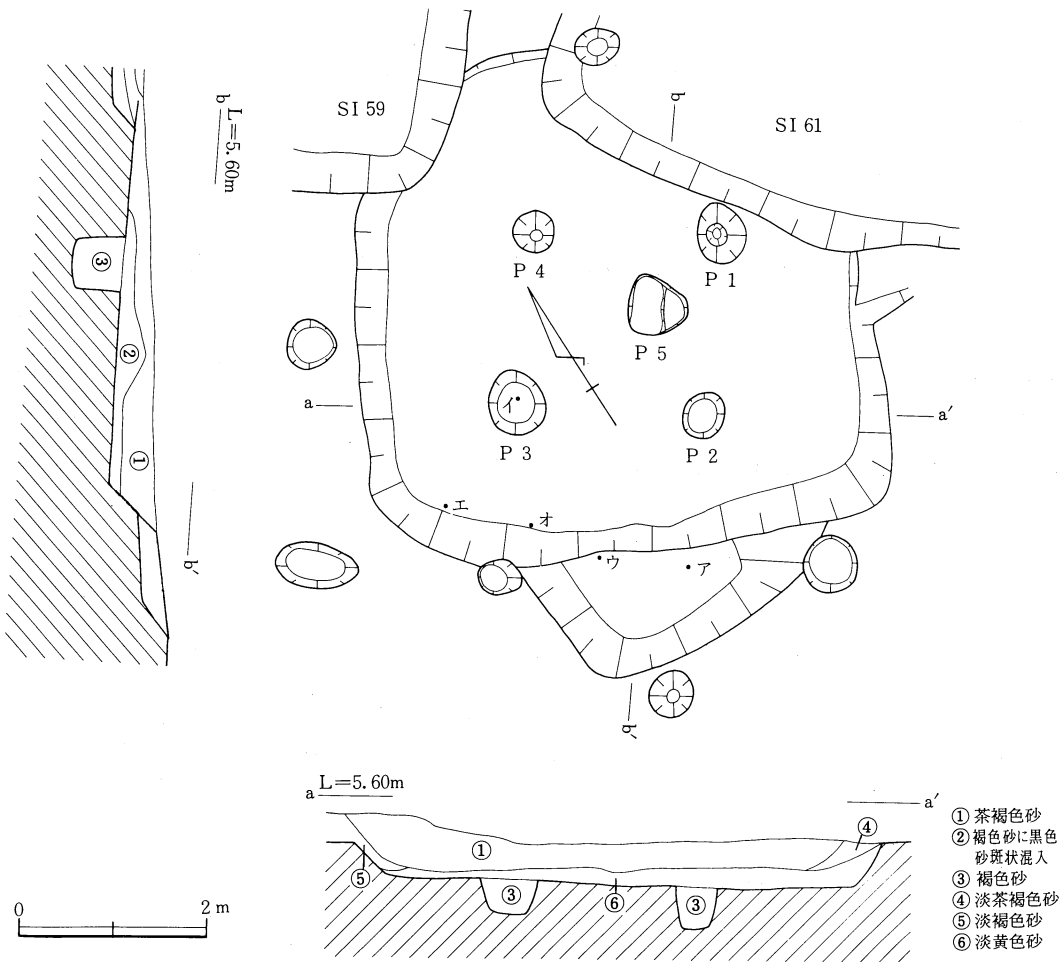
挿図 179 S I 62 遺構図



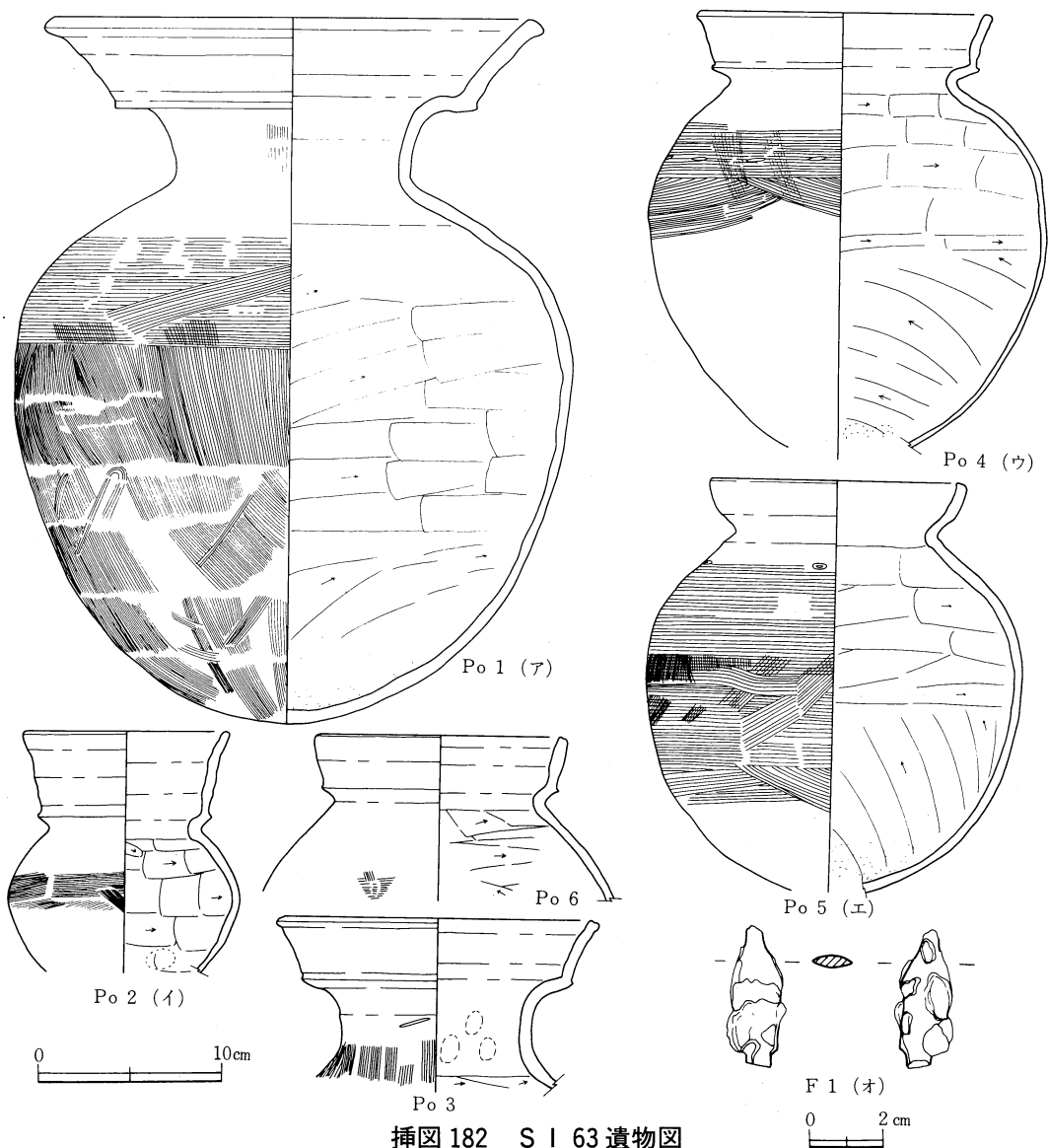
挿図 180 S I 62 遺物図

S I 63 (挿図181・182, 図版14)

13E地区の中央西寄りにあり, 13E SK02の北東, S X A03の北に位置する。北側でS I 59, 北東側でS I 61, 南西側で13E SK01と切り合っている。新旧関係は13E SK01・S I 61より新しく, S I 59より古い。平面形は方形である。床面の大きさは長辺5.00m, 短辺4.94mを測り, 主軸はN-36°-Eである。床面積は約24.7m²(推定)である。壁高は南側で最大値66.0cm, 北側で最小値24.8cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で5



挿図 181 S I 63 遺構図



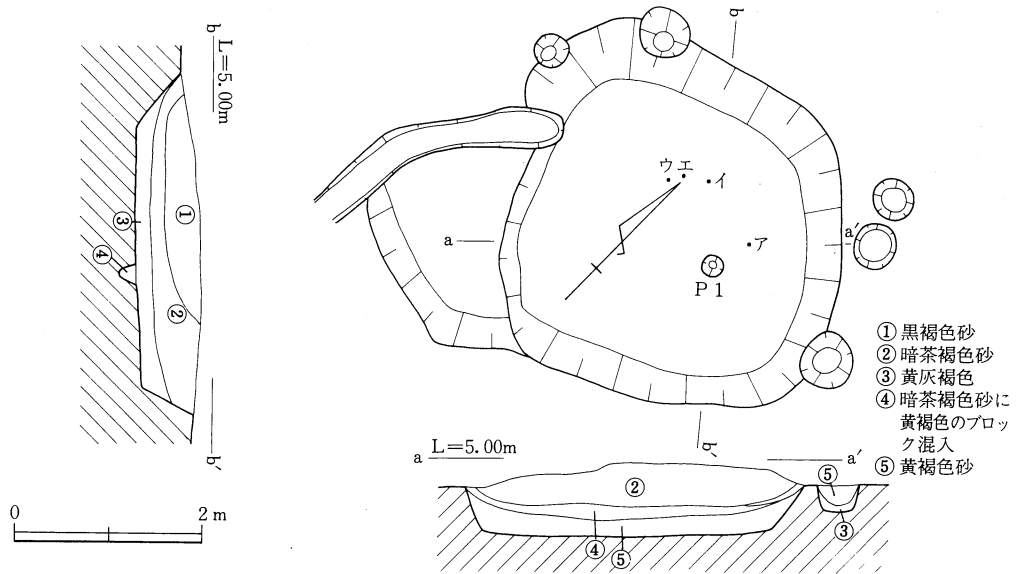
挿図 182 S I 63 遺物図

個検出したが柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4本である。プランはP 1から(66×52-69), (50×43-46), (68×60-38), (45×45-66) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間から1.90, 2.10, 1.80, 1.90mを測る。床面中央にはP 5(65×63-54)cmがあり特殊ピットと考えられる。時期は長瀬II期と考えられる。

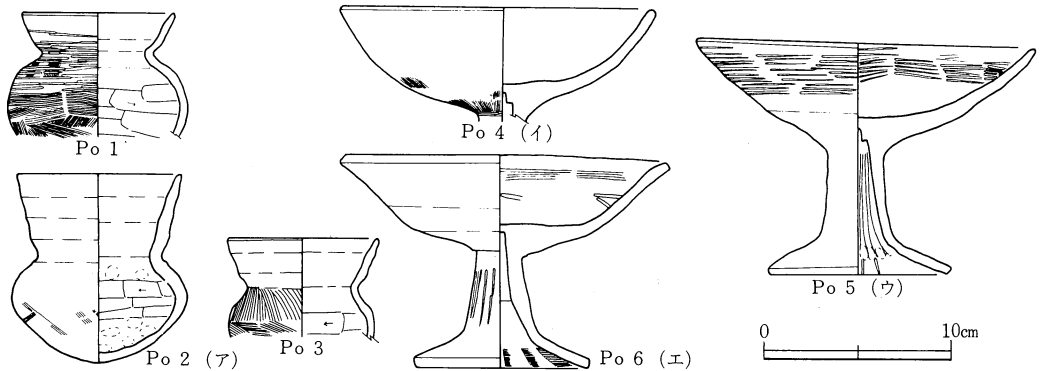
S I 64 (挿図183・184, 図版15・57)

13E地区北東区と12E地区北西区にまたがりS I 61・S B06の東に位置する。北側でS B07と切り合っている。新旧関係は、S I 64よりS B07の方が古い。平面形は隅丸方形である。床面長辺2.90m, 短辺2.74mを測る。主軸はN-68°-Eである。床面積は7.92㎡に

なる。壁高は南側で最大値52.0cm，北側で最小値44.0cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面でP 1 (24×22-19) cmを検出したが，柱穴とは考えられない。時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。



挿図 183 S I 64 遺構図



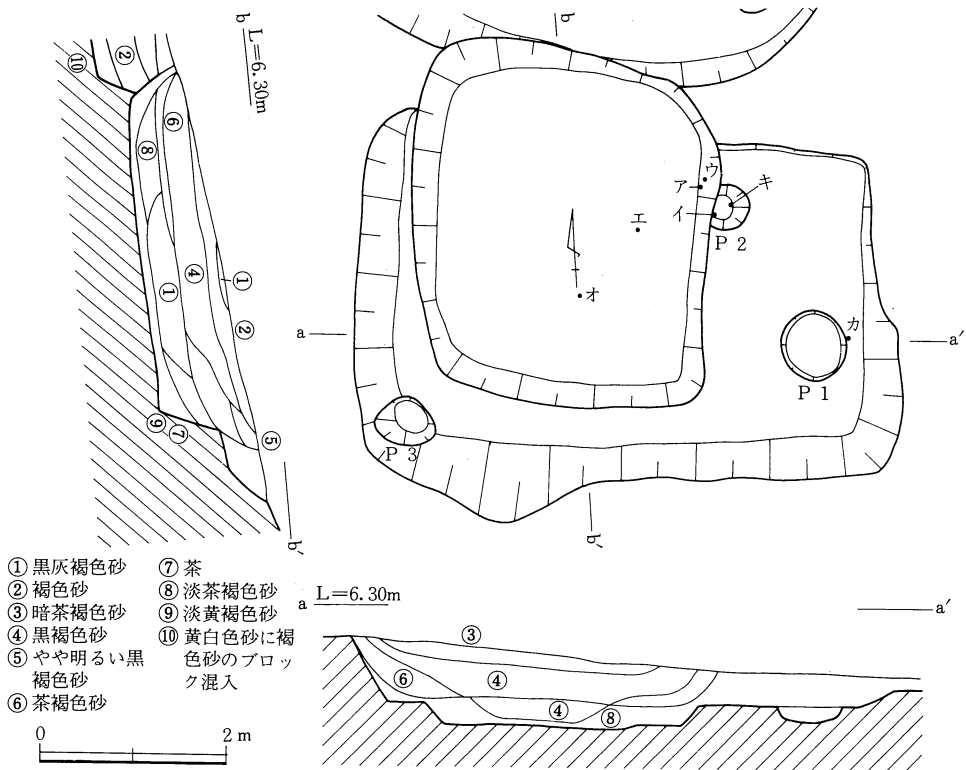
挿図 184 S I 64 遺物図

S I 65 (挿図185～187, 図版15・58)

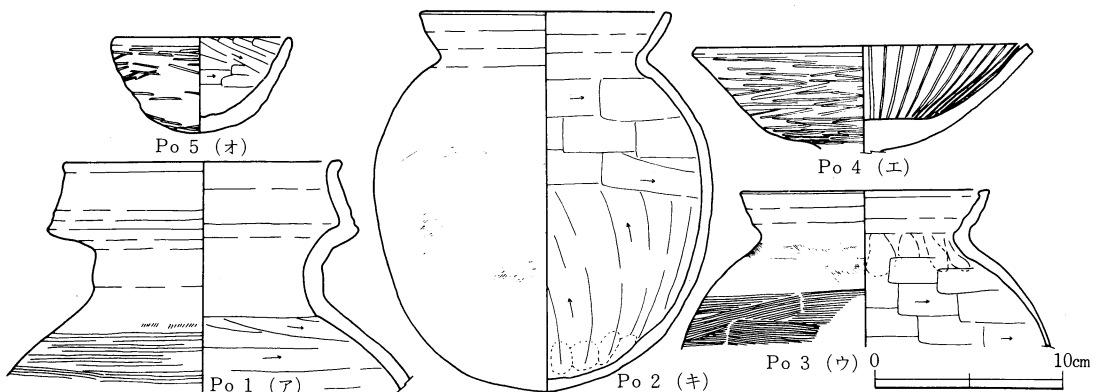
13E地区の南東隅にあり，Kラインから続く平坦な黒砂もこの住居跡から南へは急になくなり，10m程でなくなる。S I 66の南端を切り，S I 67の西側部分の上に作られた住居跡である。平面形はやや歪んだ方形で，床面は長辺で3.2m，短辺で2.7mを測り，床面積は8.6㎡，主軸はN-5°-Eを振る。壁高は南側で最大値40cm，北東側で最小値19cmを測る。側溝はみられない。柱穴はみられないが，本来はあったと思われる。時期は遺物より長瀬Ⅰ～Ⅱ期のものとする。

S I 67 (挿図185~187, 図版15・58)

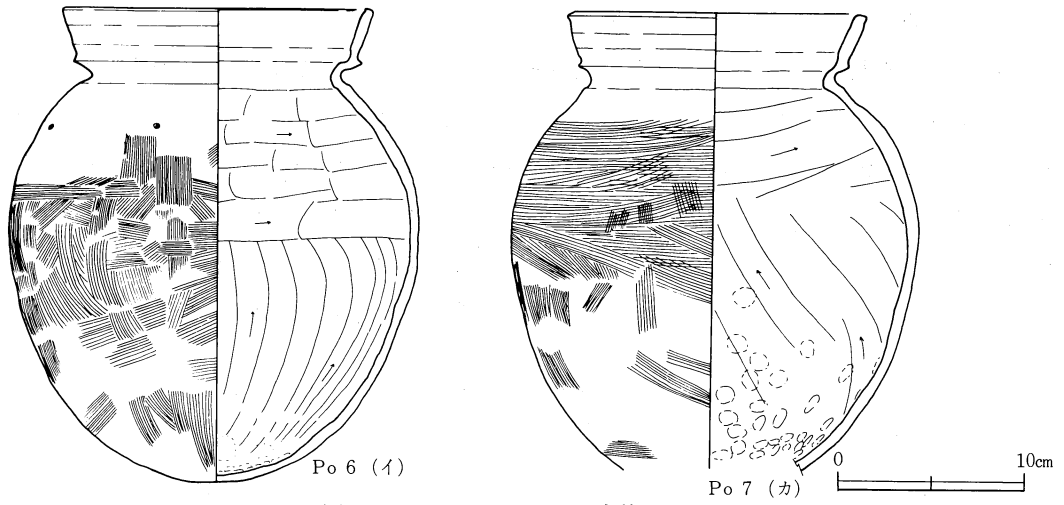
13E地区の南西隅にあり, S I 66とS B09の間に位置し, S I 65に西側を切られている。平面形は方形で, 床面は長辺5.0m, 短辺2.2m, 床面積11m²である。主軸はN-84°-Wを振る。壁高は南側で最大値73cm, 北側で最小値6cmを測る。側溝はみられない。ピットは3個検出しているが, 構造柱の柱穴はP 1から2本と考えられるが他の1個は検出できなかった。P 1のプランは(73×68-13.5)cmである。P 2内には甕が埋納されており, 住居を廃棄するときに置かれたものと思われる。時期は出土遺物より長瀬II期と考えられる。



挿図 185 S I 65・67 遺構図



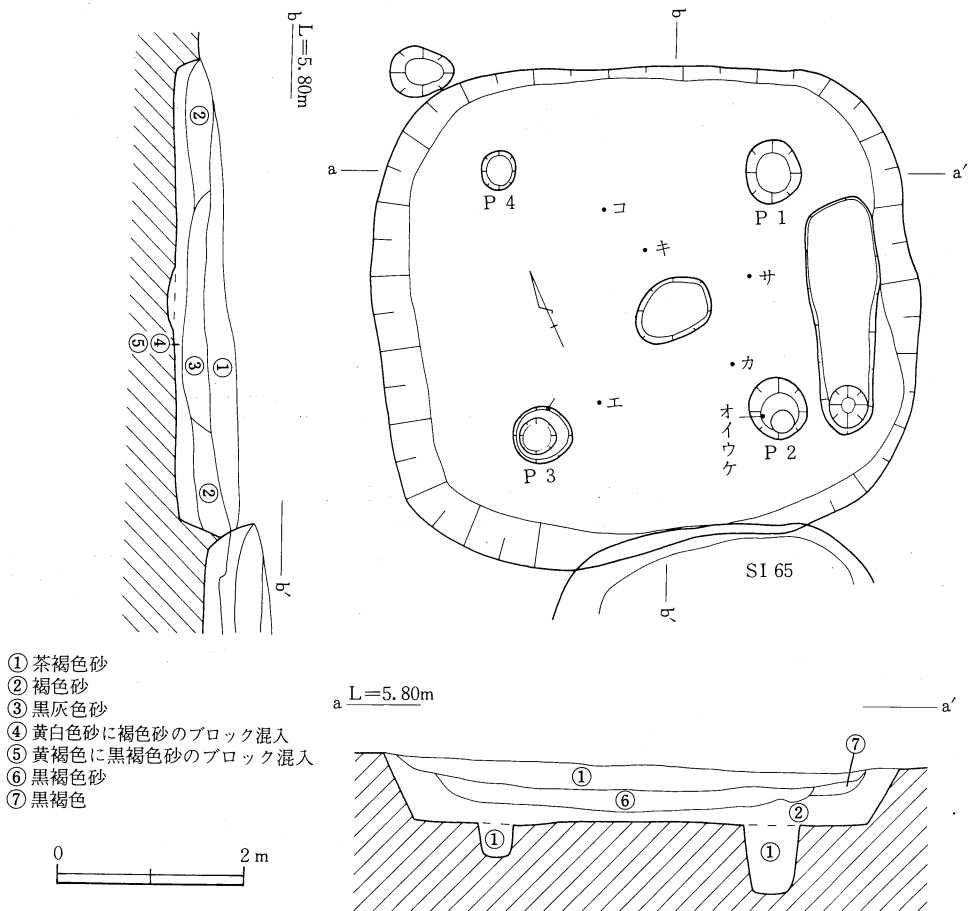
挿図 186 S I 65・67 遺物図その1



挿図 187 S I 65・67 遺物図その 2

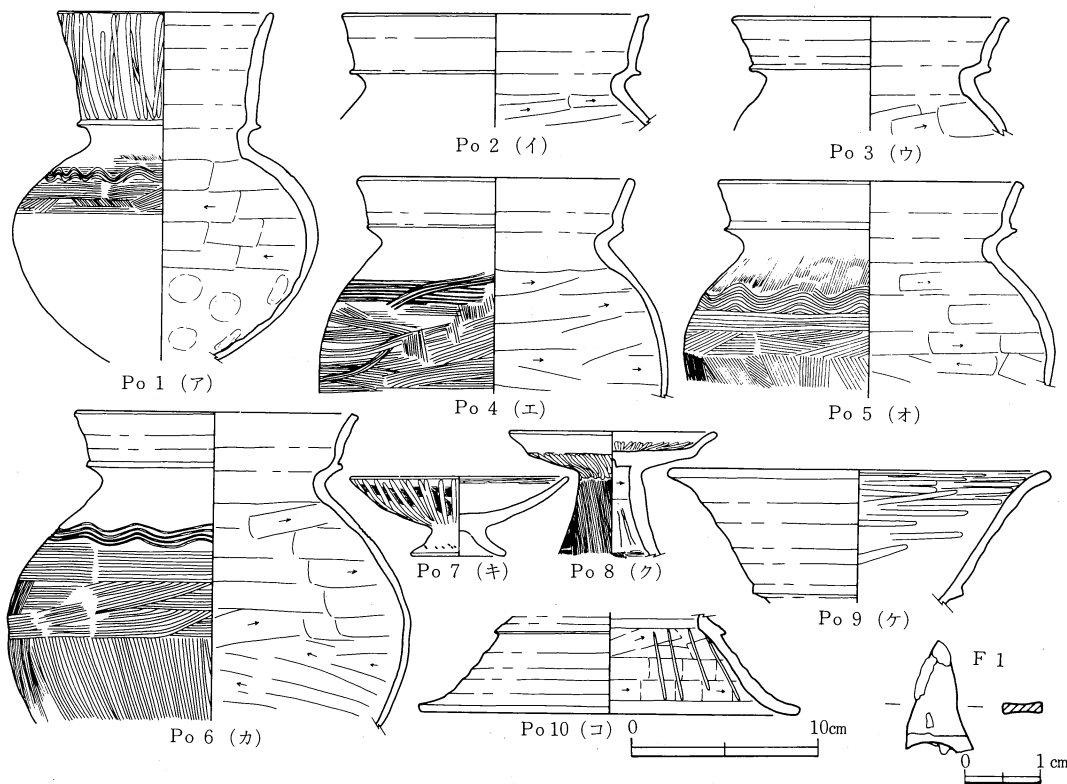
S I 66 (挿図188・189, 図版15)

13Eと12E地区にまたがり, S I 69の南西, S B09の西にあり, S I 67の北に位置する。



挿図 188 S I 66 遺構図

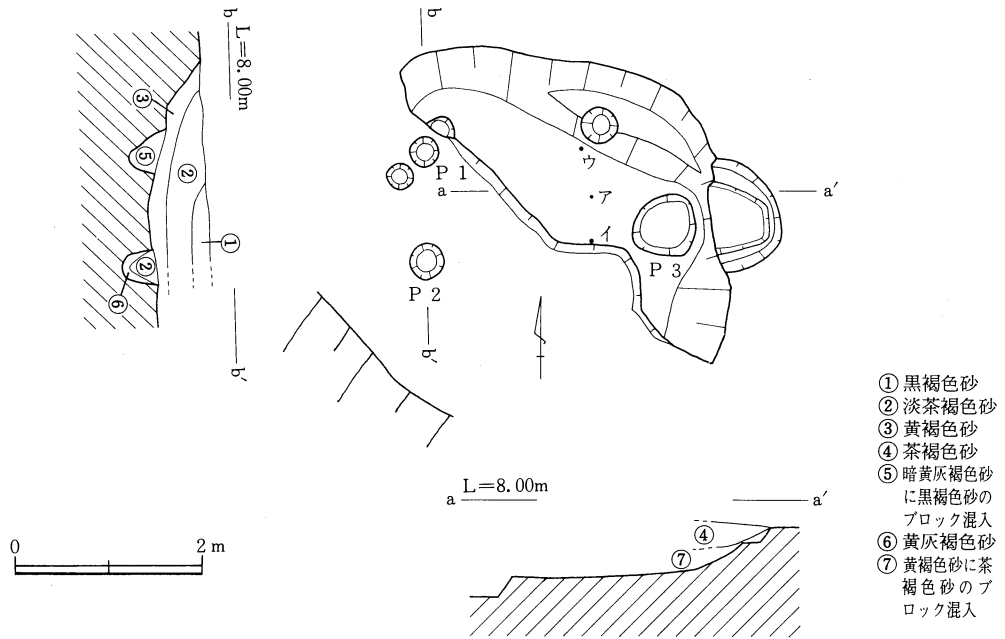
S I 65に南側をわずかに切られる。平面形は方形で、床面は長辺4.8m、短辺で4.6mを測り、主軸はN-17°-Eを測る。床面積は約22m²で、側溝はみられない。ピットは床面で6個検出した。柱穴はP 1～P 4の4本で、P 5は特殊ピットである。プランはP 1から(70×60-75)、(65×60-51)、(63×58-41)、(42×36-35)、(86×64-10) cmで、柱穴間距離は2.6、3.3、2.7、3.0mである。東側の細長い土壇は用途不明であるが、側溝の可能性がある。壁高は西側で最大値67cm、北側で最小値15cmを測る。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。



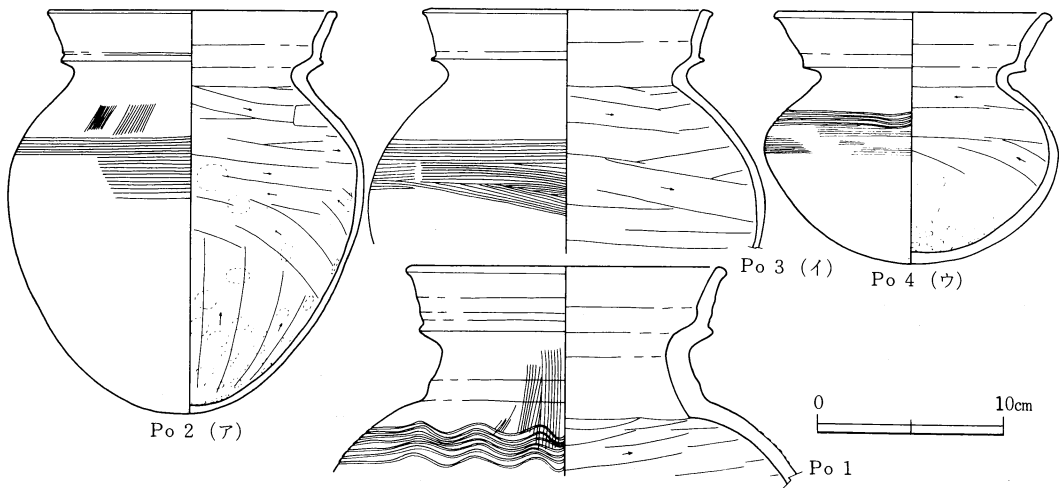
挿図 189 S I 66 遺物図

S I 68 (挿図190・191, 図版16・58)

13D北西区にありS X A 04の西, 13D S K 01の北西に位置する。S X A 05・06と切り合っており、いずれもS I 68より新しい。南半分は、削られている。床面の大きさは、北西-南東方向で3.34mを測り、主軸はN-25°-Wである。壁高は南東側で最大値50cm、北側で最小値40cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で5個検出したが、柱穴と考えられるものは、P 1・P 2と思われる。P 3は北東隅にあるが浅く柱穴とは考えにくい。プランは、P 1が(32×37-38) cm, P 2が(38×36-25) cmを測る。柱穴間距離は1.16mである。時期は遺物より長瀬I期と考えられる。



挿図 190 S I 68 遺構図

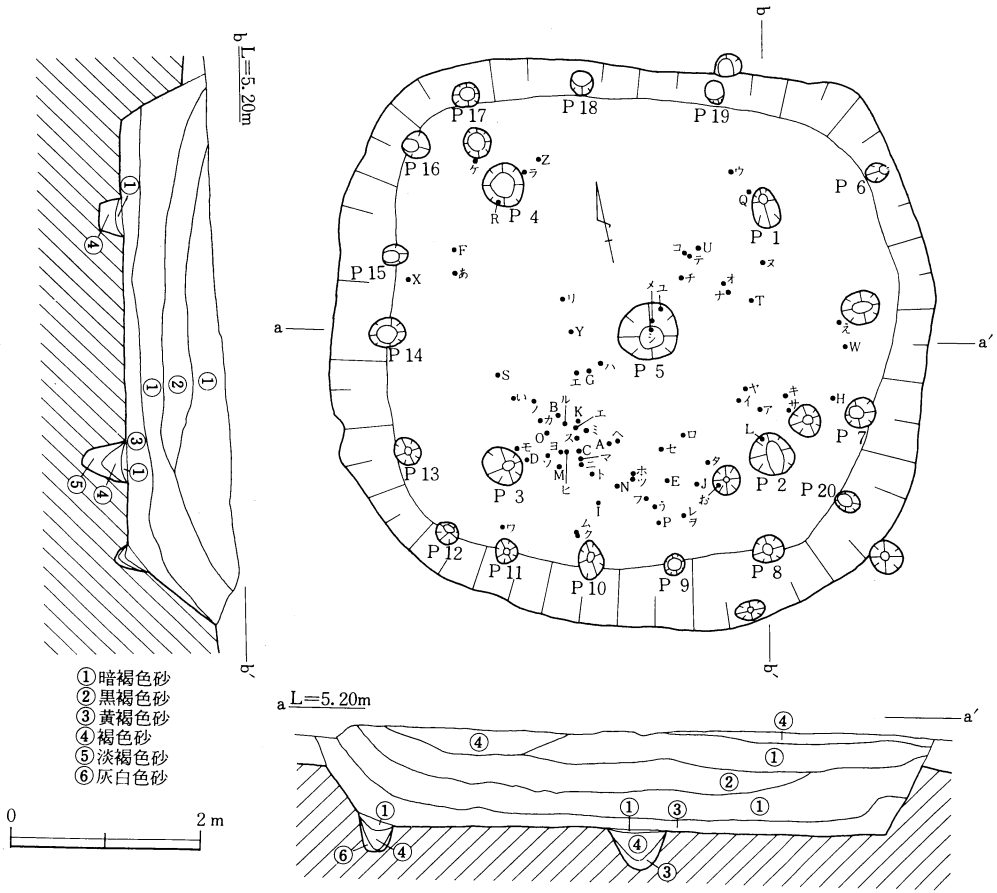


挿図 191 S I 68 遺物図

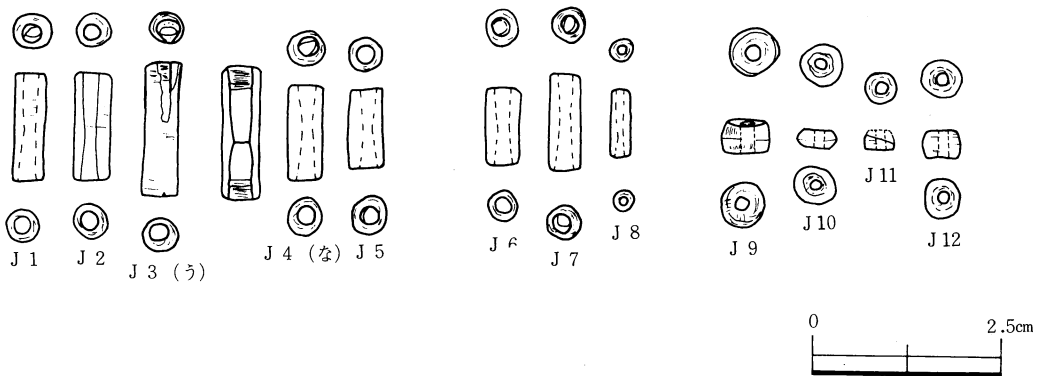
S I 69 (挿図192~204, 図版16・58~63)

12E地区の中央に位置し、南から傾斜する斜面の北裾部にあたる。平面形は隅丸方形で長辺5.25m、短辺4.6m、床面積24.1㎡である。主軸はN-75°-Wである。壁高は南側で最大値85.5cm、北側で最小値57.1cmを測る。床面に8個、壁際に16個のピットを検出した。その内P 1 (45×29-31), P 2 (49×45-49), P 3 (43×36-36), P 4 (46×43-37)cmが構造柱と考える。柱穴間距離はP 1より順に2.65, 2.84, 2.94, 2.80mである。壁際のピットは住居跡の各辺にそって4~5個ずつ並んでおり、壁に斜めに掘り込む形で作られているから構造柱を支える支柱と考えたい。この壁のピットの傾きから推定すると現床

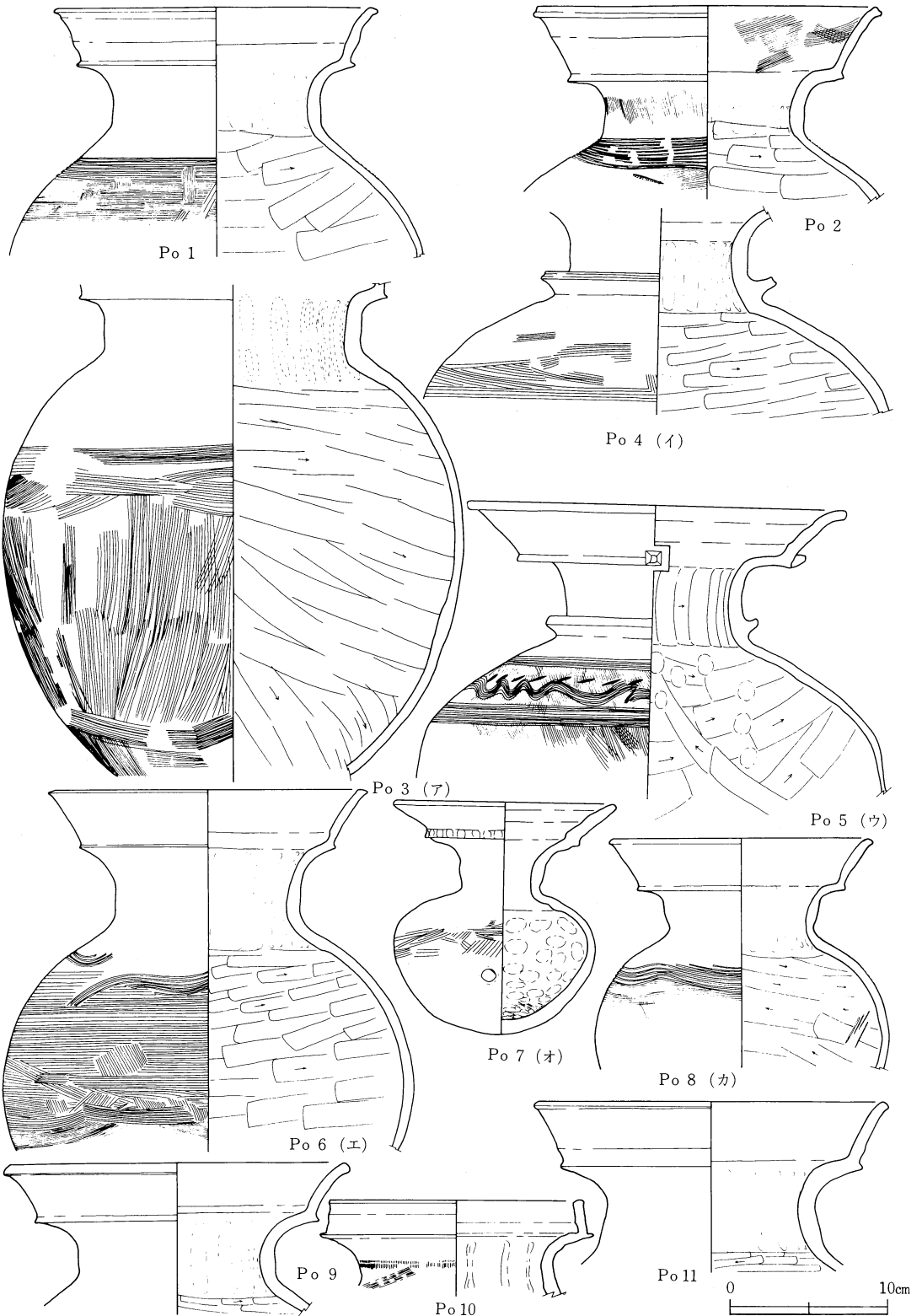
面からの屋根までの高さは約3mとなる。床面中央には円形の特異ピット・P 5 (62×60-50) cmをもつ。その北側からはダルマ形に広がる焼砂面を検出した。時期は遺物より長瀬I期と考える。



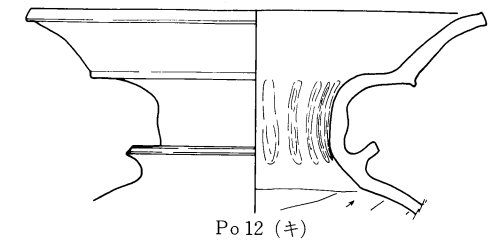
挿図 192 S I 69 遺構図



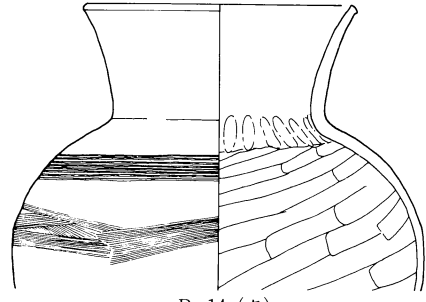
挿図 193 S I 69 遺物図その1



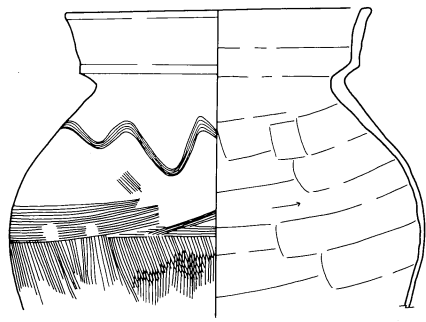
挿図 194 S I 69 遺物図その 2



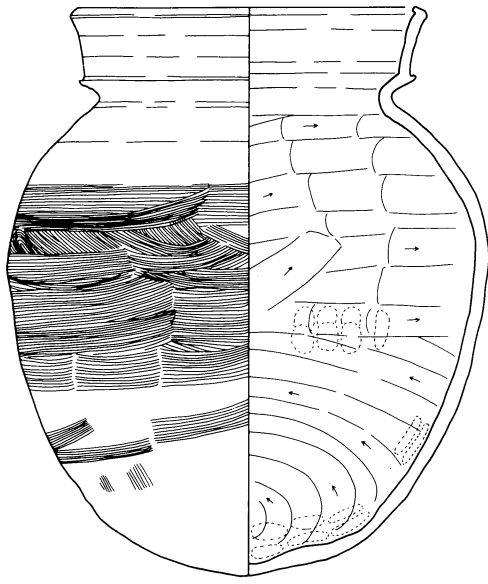
Po 12 (キ)



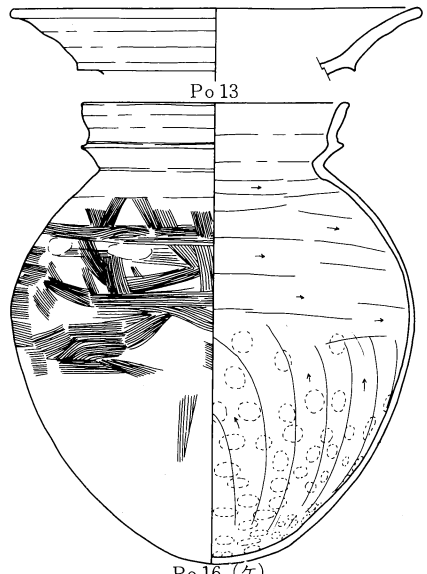
Po 14 (ク)



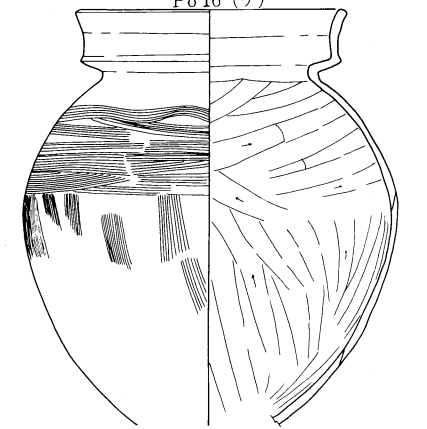
Po 17



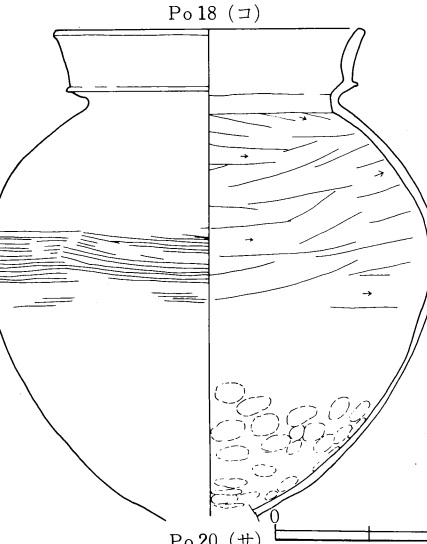
Po 19



Po 13



Po 16 (ケ)

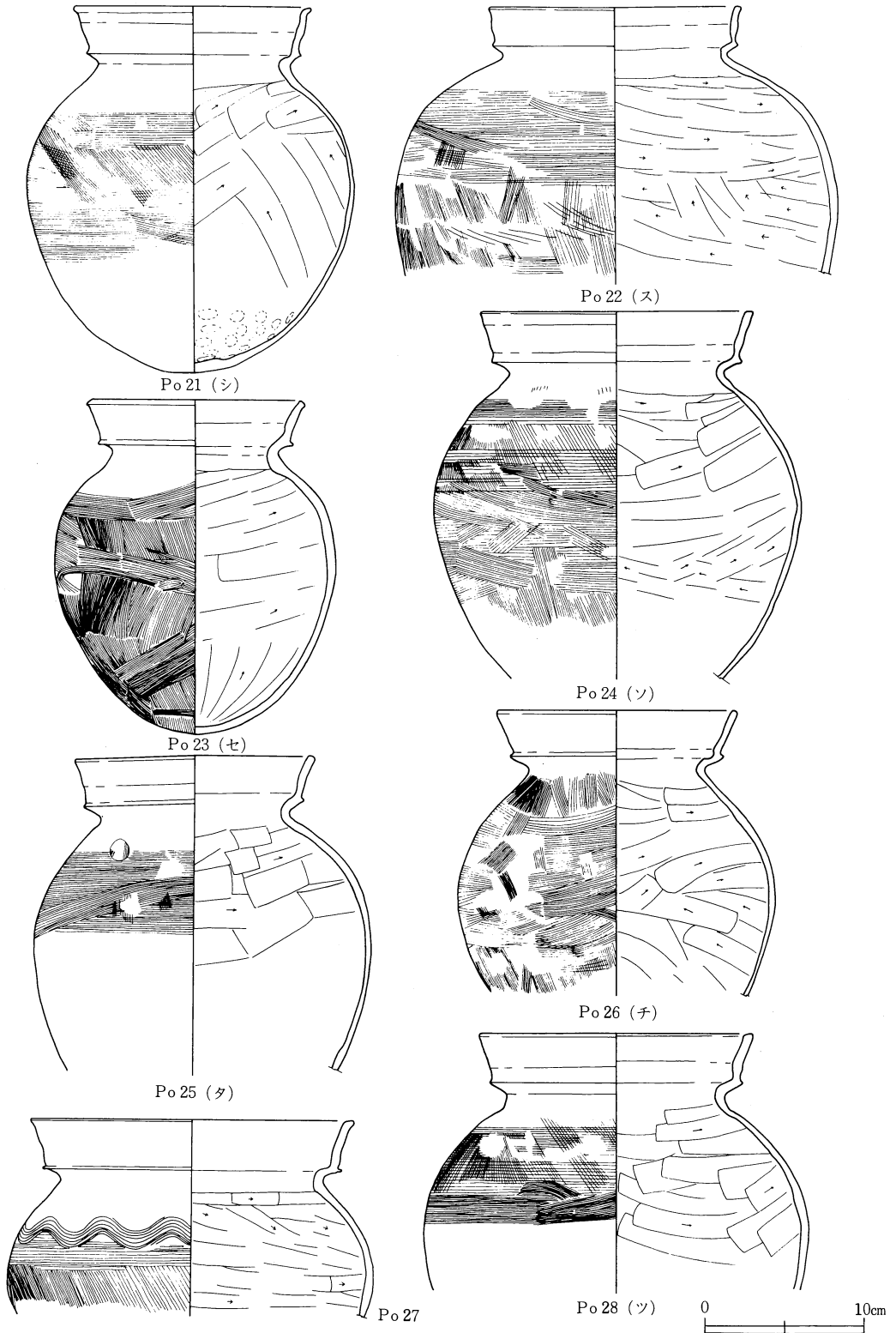


Po 18 (コ)

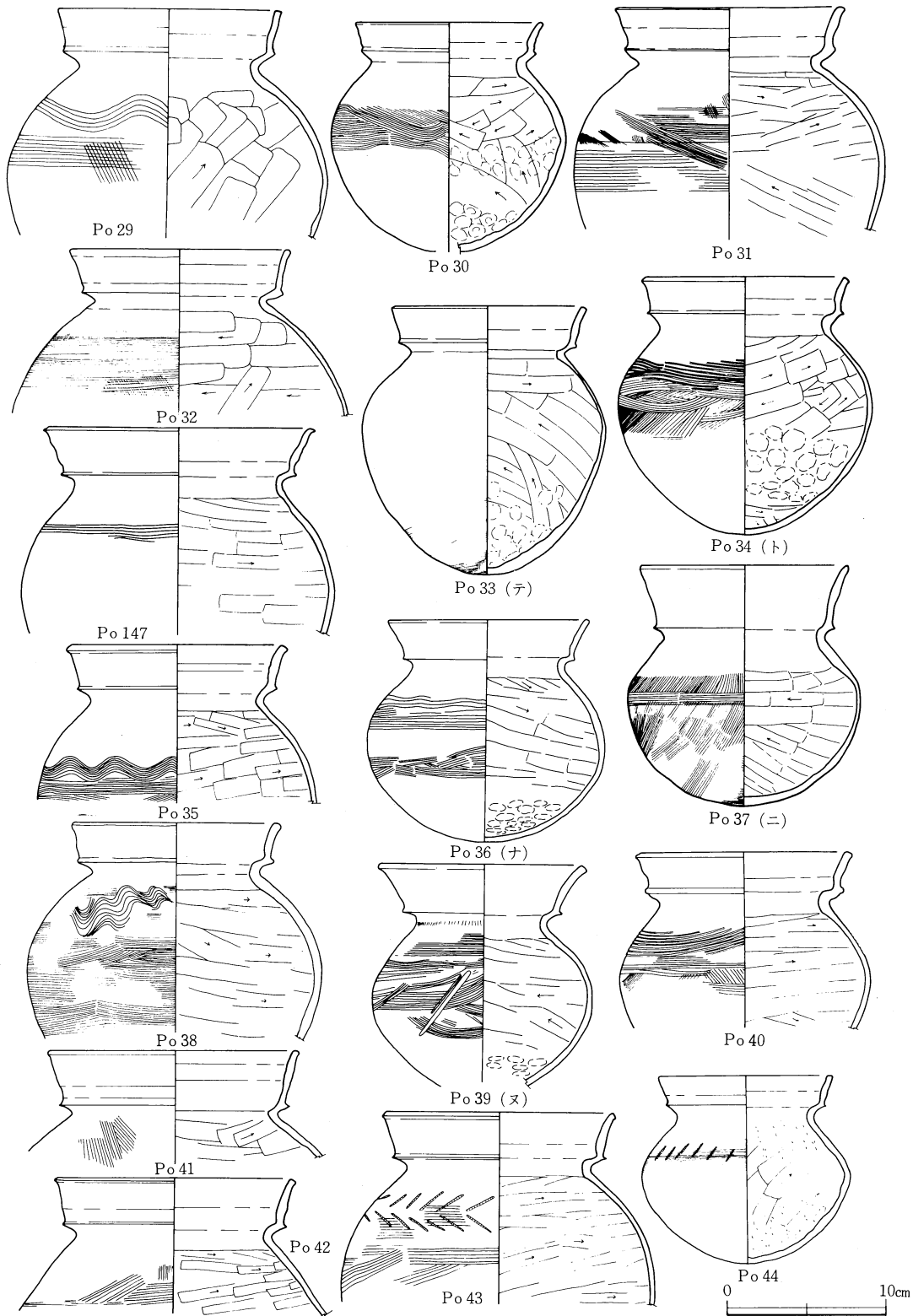
Po 20 (サ)

10cm

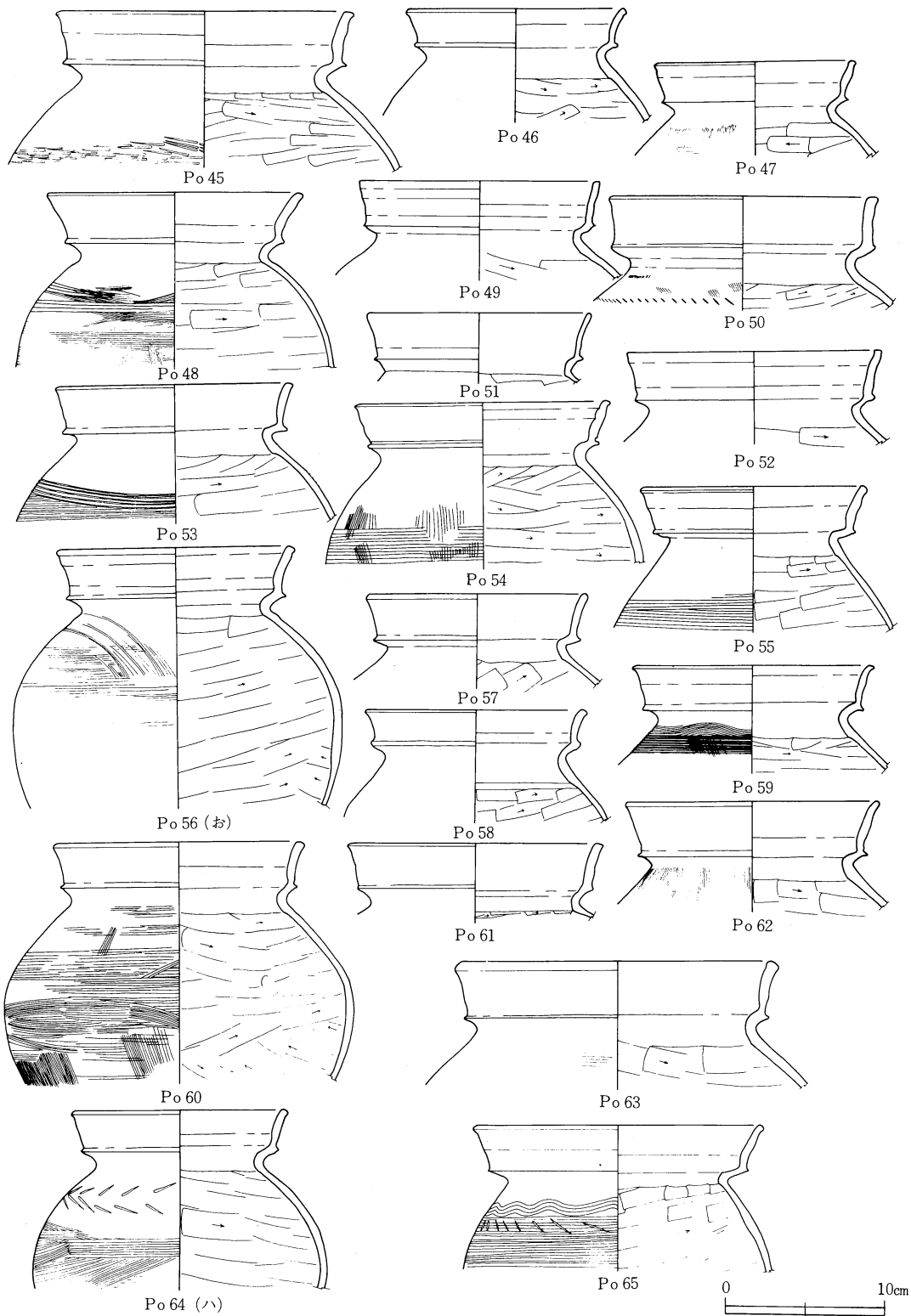
挿図 195 S I 69 遺物図その 3



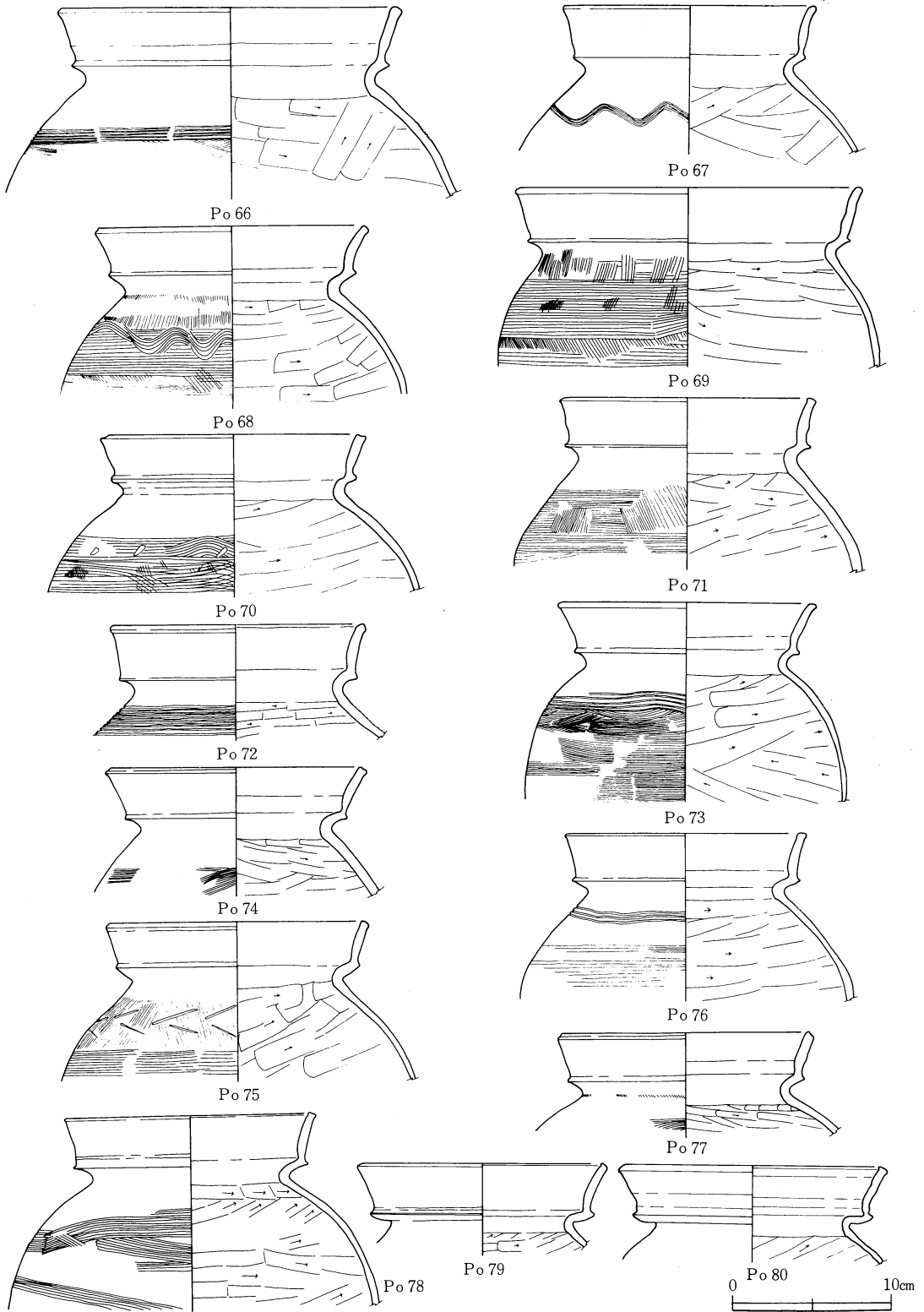
挿図 196 S I 69 遺物図その 4



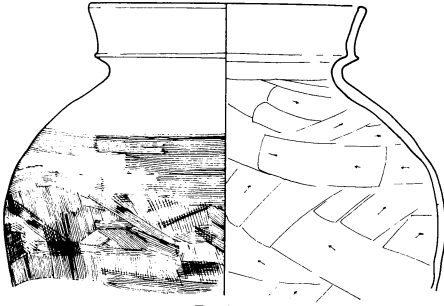
挿図 197 S I 69 遺物図その 5



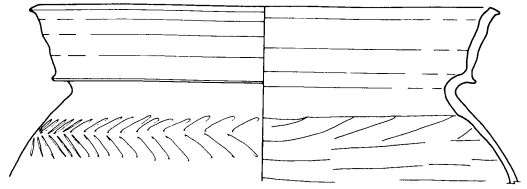
挿図 198 S I 69 遺物図その 6



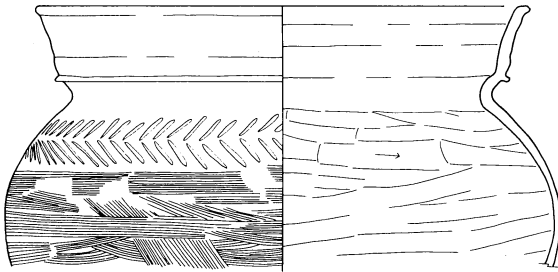
挿図 199 S I 69 遺物図その 7



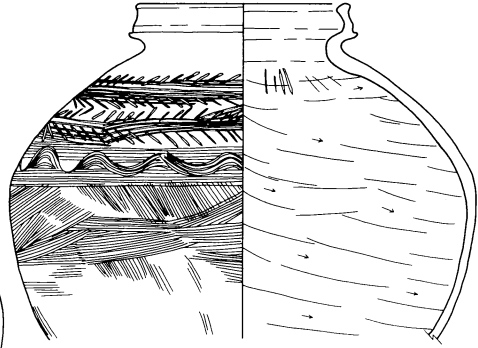
Po 81



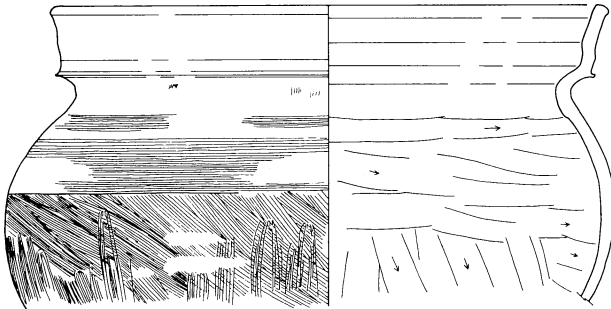
Po 82



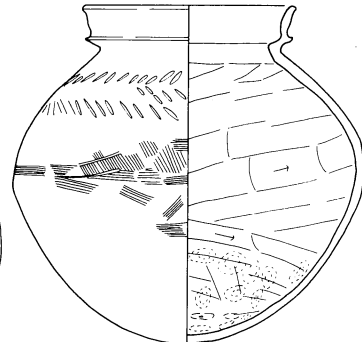
Po 91 (マ)



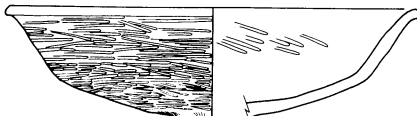
Po 83 (ヒ)



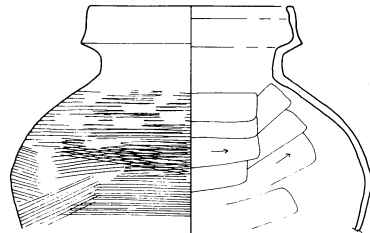
Po 92 (ミ)



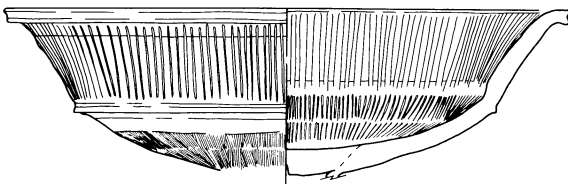
Po 84 (フ)



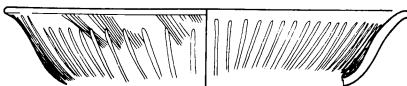
Po 93 (ル)



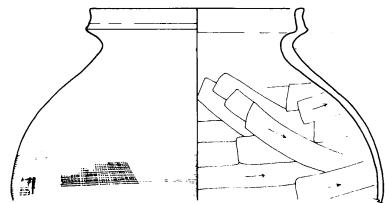
Po 85 (ヘ)



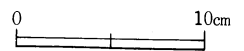
Po 94 (カ)



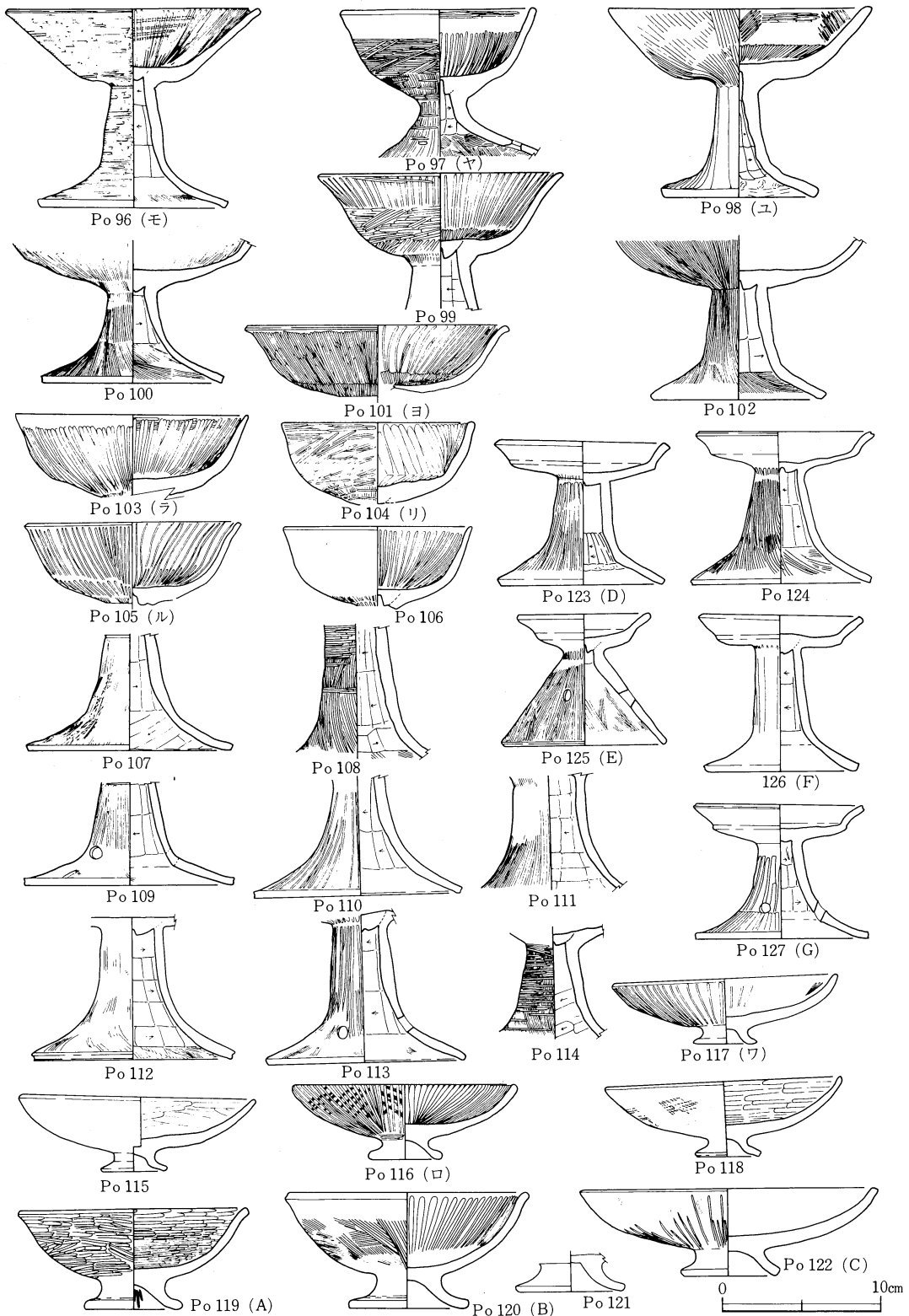
Po 95



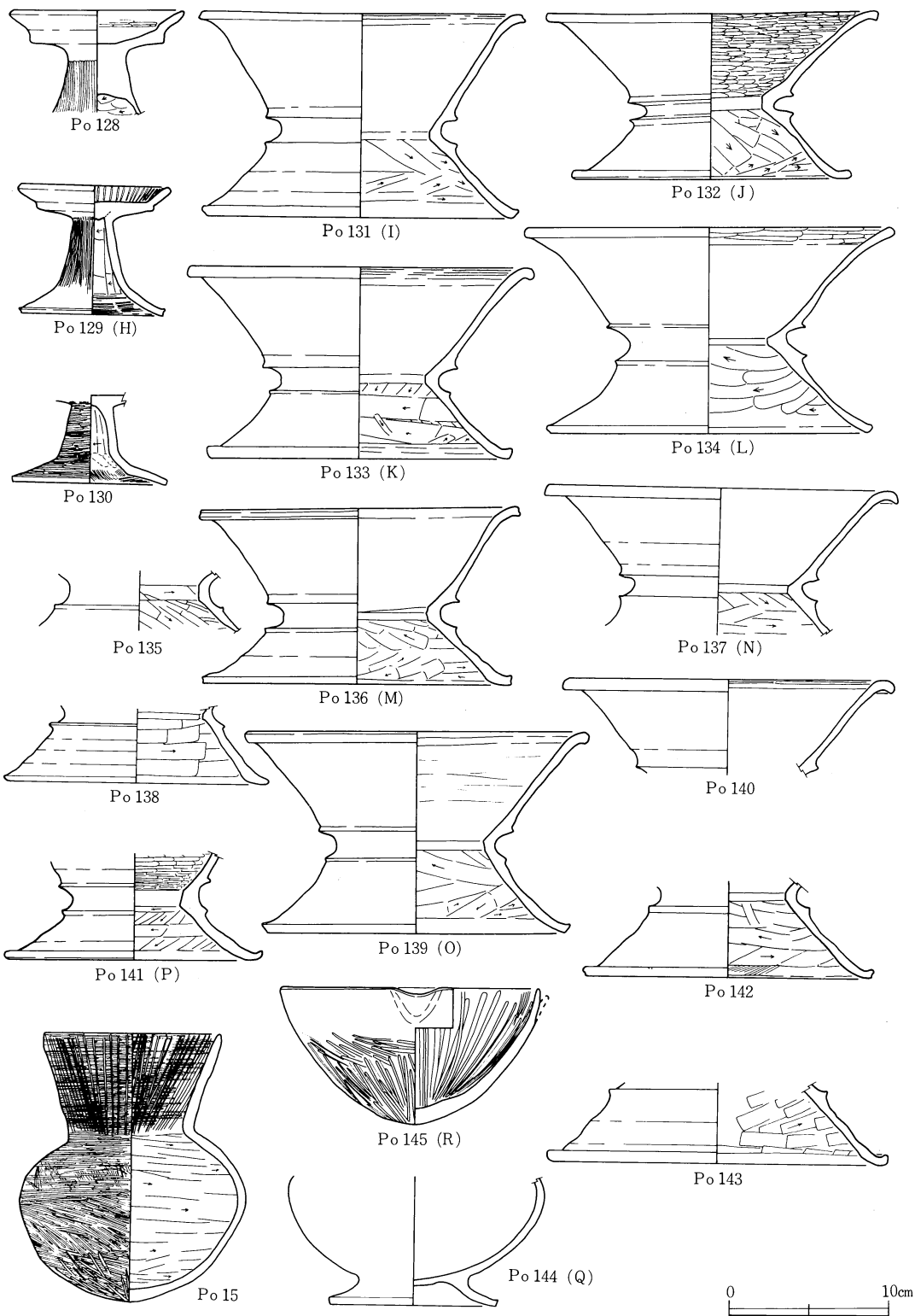
Po 86 (ホ)



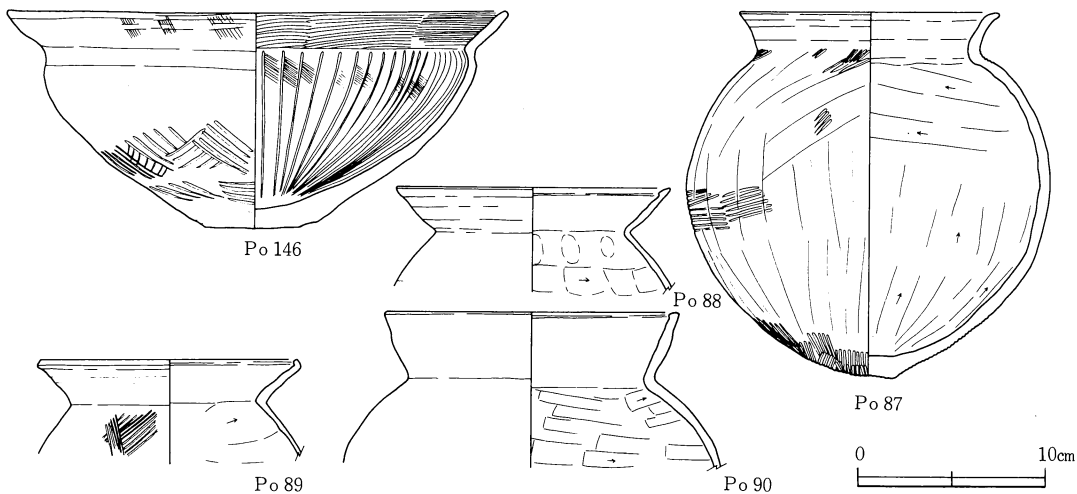
挿図 200 S I 69 遺物図その 8



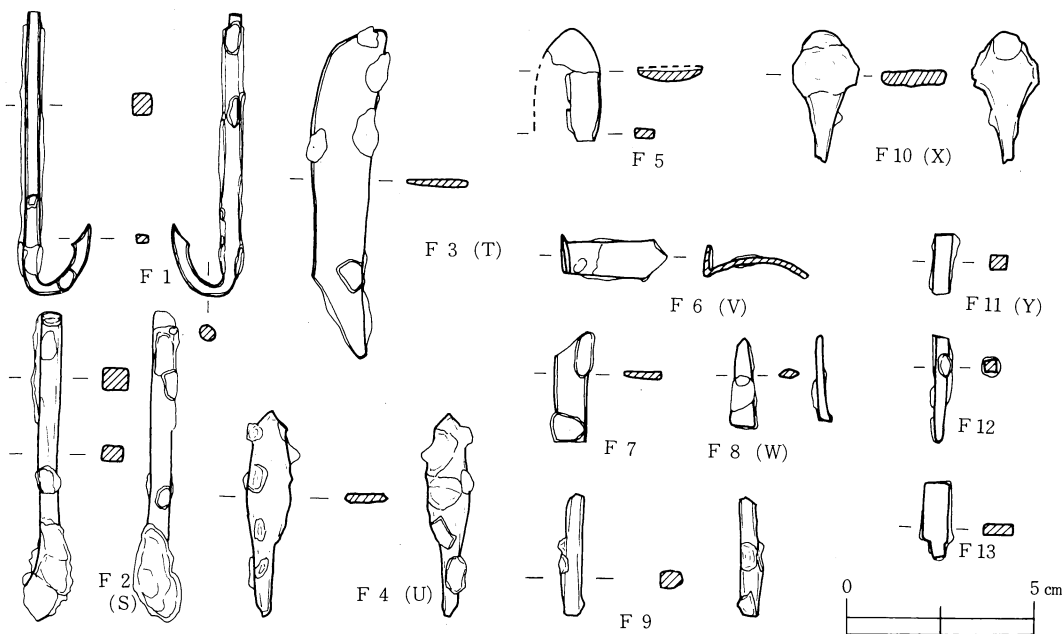
挿図 201 S I 69 遺物図その 9



挿図 202 S I 69 遺物図その 10



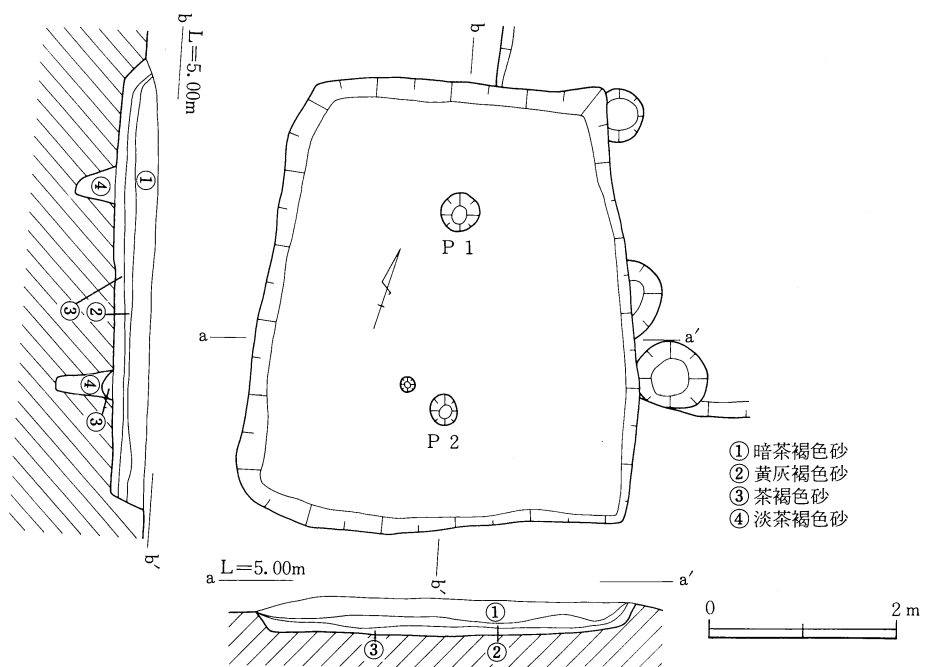
挿図 203 S I 69 遺物図その 11



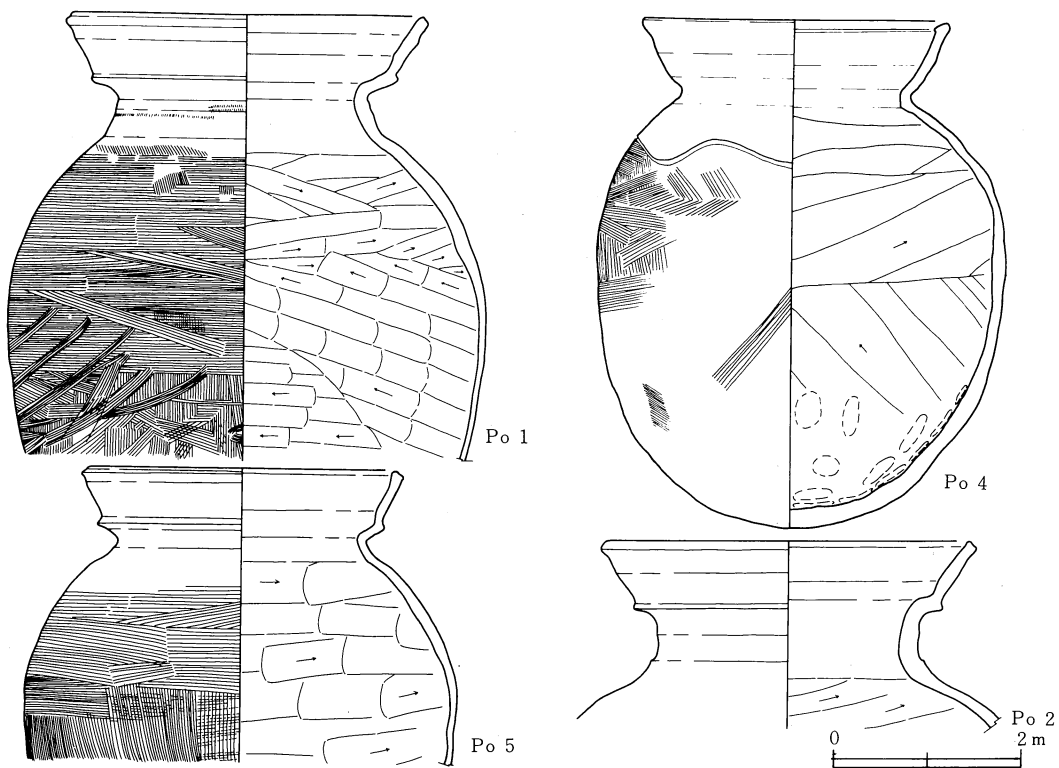
挿図 204 S I 69 遺物図その 12

S I 70 (挿図205~208, 図版16・63)

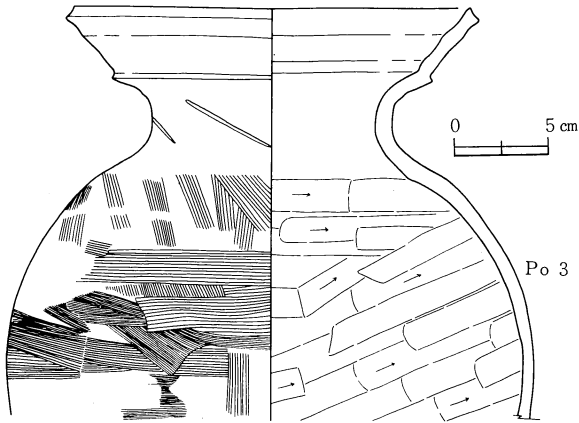
12E地区 S I 69, S B08の東側に位置し, S I 71と北東側で切り合う。新旧関係は S I 70より S I 71の方が古い。平面形は方形に近く, コーナーも直角に近い。床面の大きさは長辺4.4m, 短辺3.0mを測り, 主軸はN-15°-Eである。床面積は約15.8m²である。壁高は南側で最大値36cm, 西側で最小値24cmを測る。側溝は検出されなかった。ピットは床面で3個を検出した。このうち竪穴住居の構造柱とみられるものはP 1・P 2の2本である。各プランはP 1 (42×42-42) cm, P 2 (34×30-60) cmで, 柱穴間距離1.7mを測る。P 2は浅底で用途は不明である。時期は遺物より長瀬II期と考えられる。



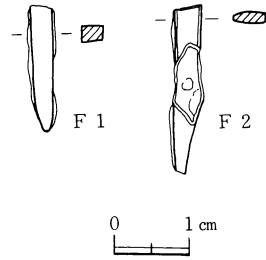
挿図 205 S I 70 遺構図



挿図 206 S I 70 遺物図その 1



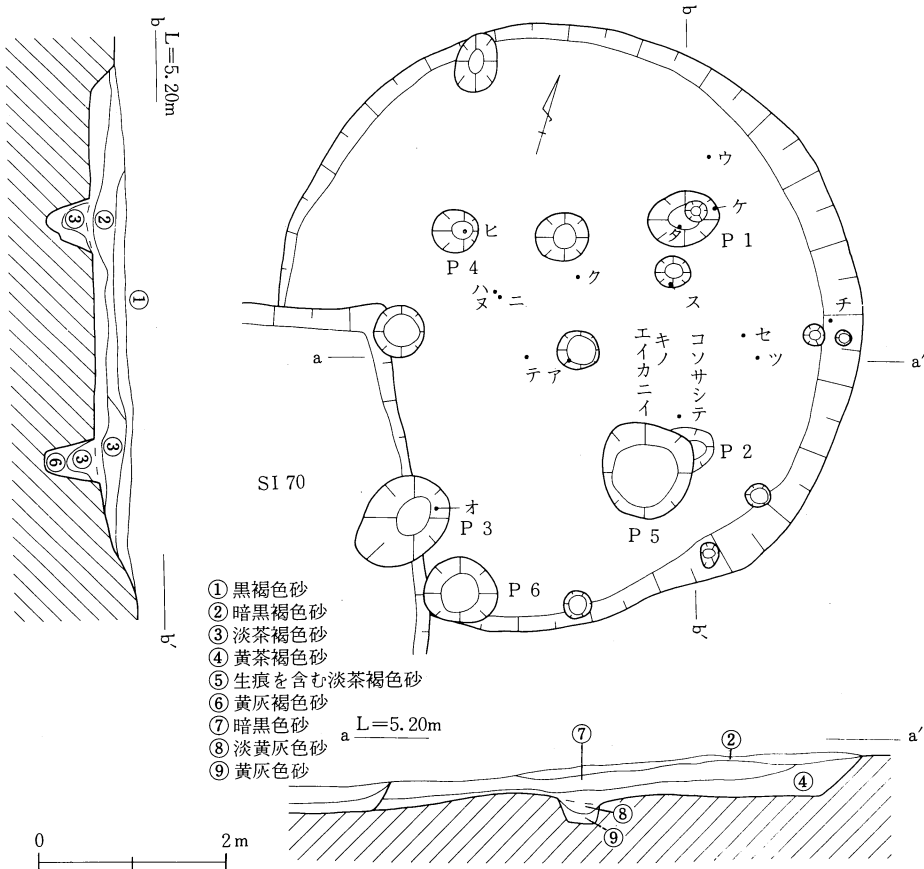
挿図 207 S I 70 遺物図その 2



挿図 208 S I 70 遺物図その 3

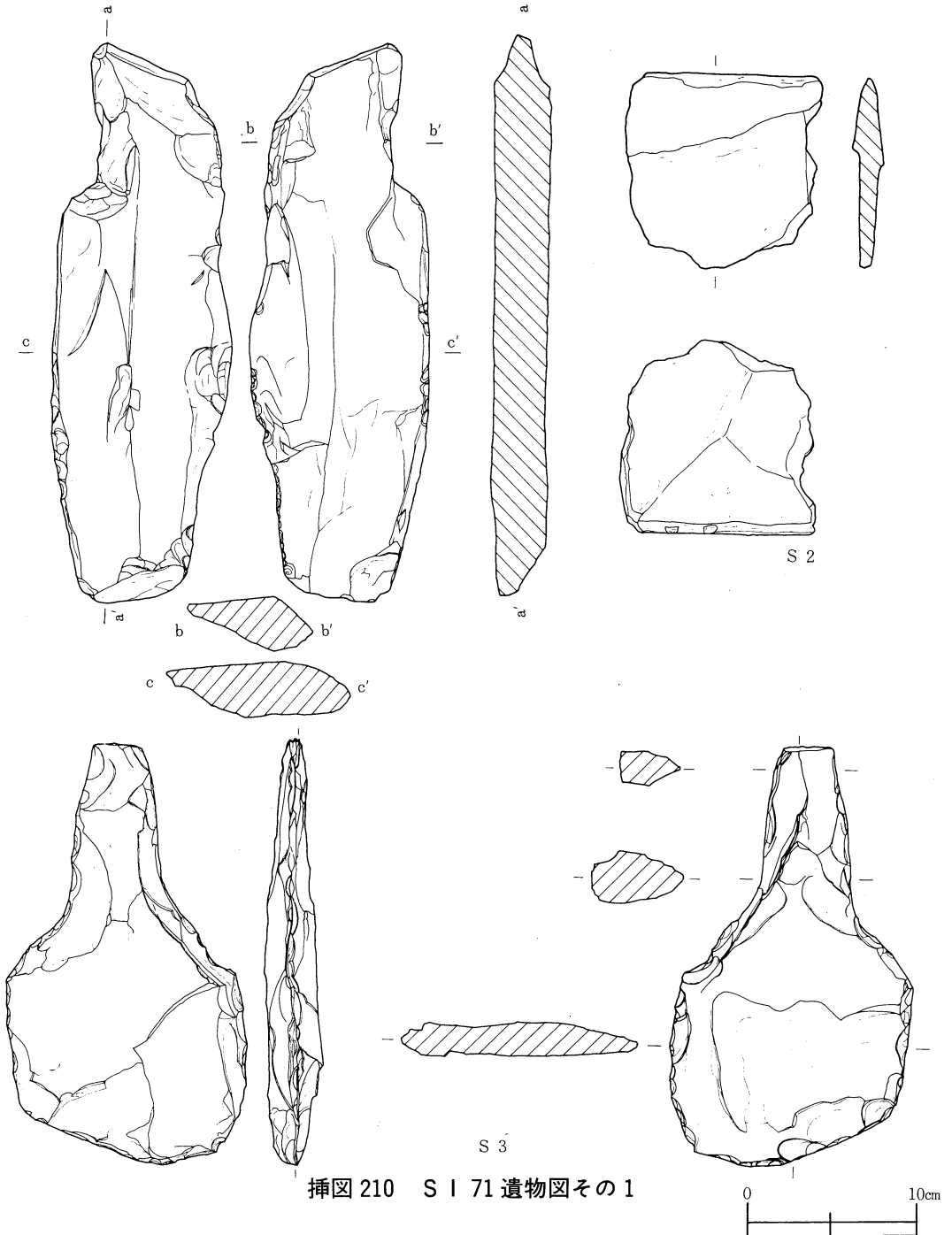
S I 71 (挿図209~212, 図版16・63~65)

11E地区の西に位置し、南西部をS I 70で切られている。平面形は円形である。床面の大きさは直径6.10mを測る。床面積は29.2㎡になる。壁高は東側で最大値43.3cm, 北東側で最小値14cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で14個検出したが柱穴と考えられ

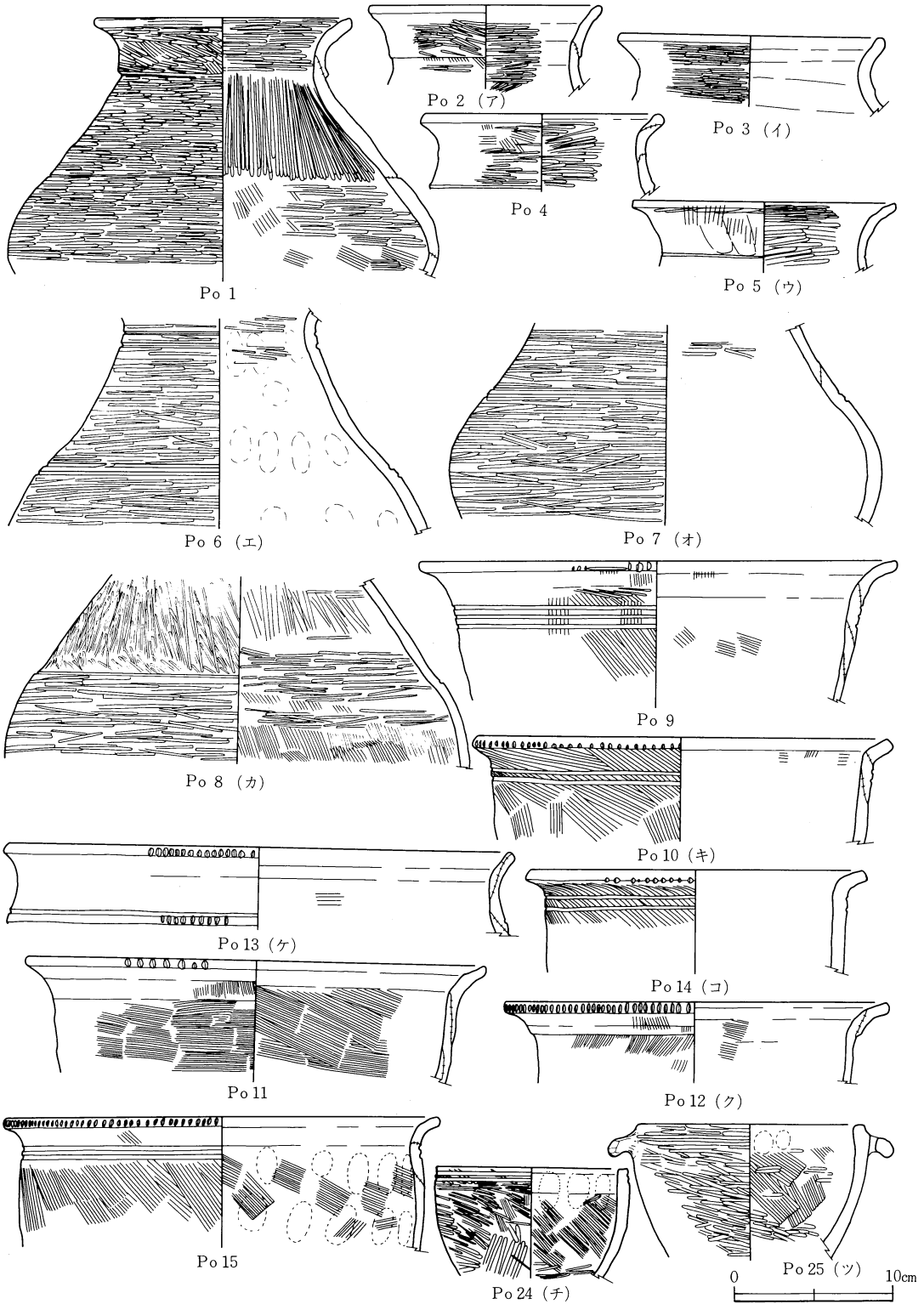


挿図 209 S I 71 遺構図

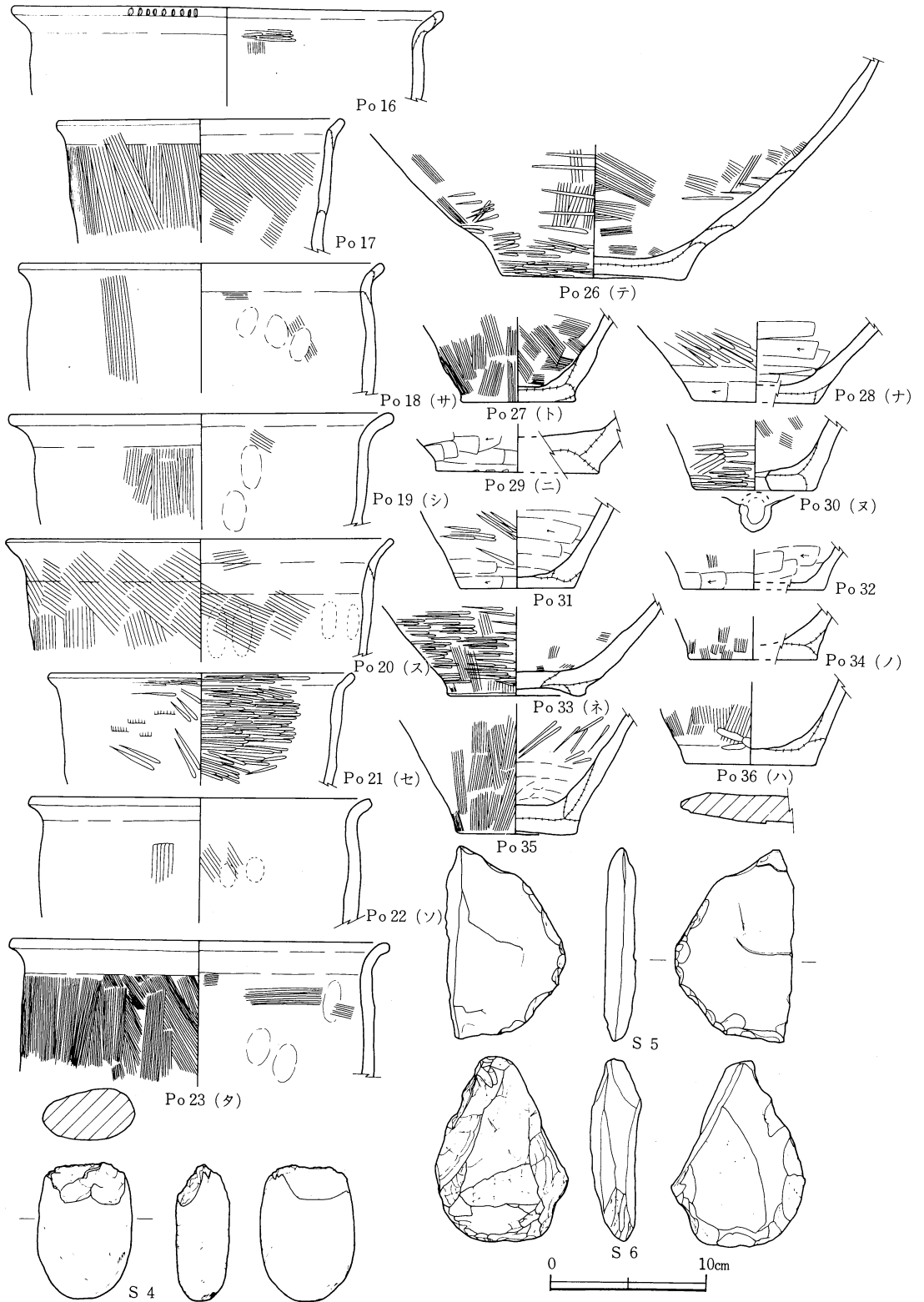
るものはP 1～P 4の4本である。プランはP 1から(74×58-51), (53×50-58), (110×83-84), (49×45-61)cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間から2.46, 3.08, 3.10, 2.40 mを測る。P 5, P 6は土師器が出土していることから古墳時代に掘られたものと思われる。住居跡内埋砂中より弥生時代前期の土器片多数と石器等が出土している。時期は遺物より弥生時代前期新と考える。



挿図 210 S 1 71 遺物図その 1



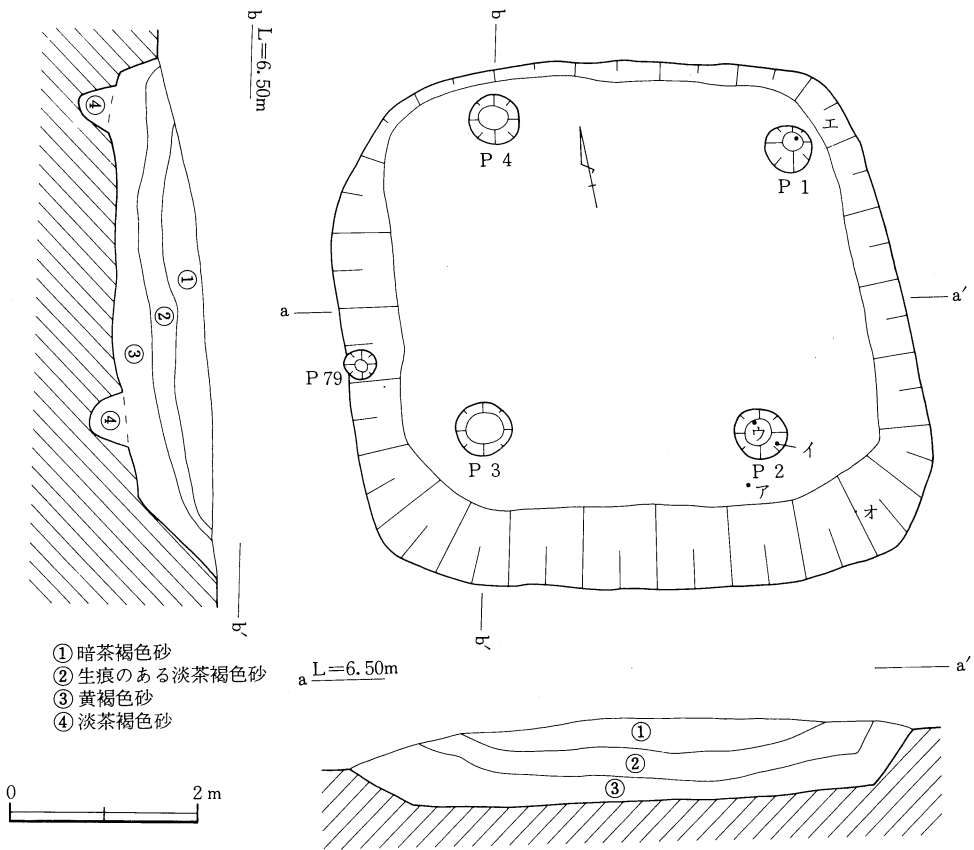
挿図 211 S 1 71 遺物図その 2



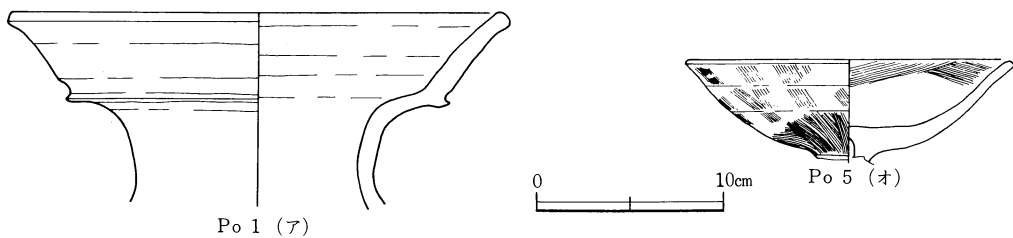
挿図 212 S I 71 遺物図その 3

S I 72 (挿図213~215, 図版17・65・66)

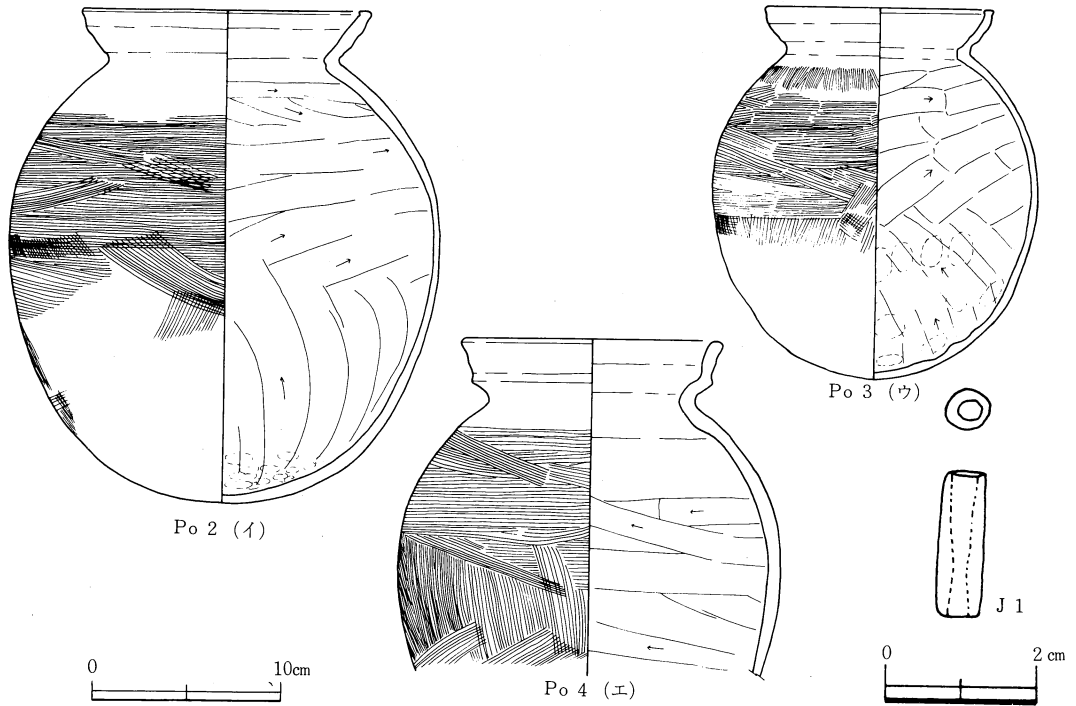
11E地区南西区と南東区にまたがり9号墳の南, S I 74の東に位置する。平面形は方形をしている。床面の大きさは, 長辺5.08m, 短辺4.50mを測り, 主軸はN-73°-Eである。床面積は22.9m²である。壁高は南側で最大値80cm, 北側で最小値48cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面と肩部に5個検出したが柱穴と考えられるものはP 1~P 4の4本である。プランはP 1から(50×52-42), (54×58-37), (58×60-40), (50×52-38) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間から3.10, 2.90, 3.28, 3.20mを測る。P 79は弥生の壺が出土している。特殊ピットは検出できなかった。時期は長瀬III期と考えられる。



挿図 213 S I 72 遺構図



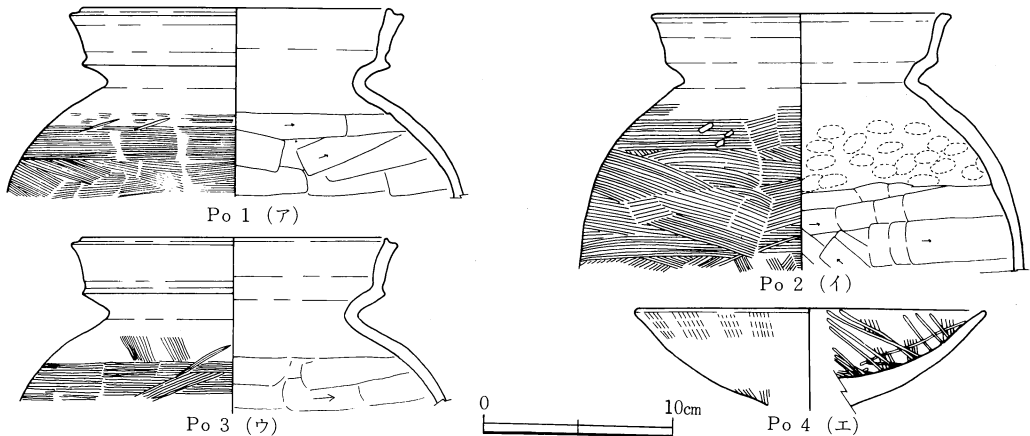
挿図 214 S I 72 遺物図その1



挿図 215 S I 72 遺物図その 2

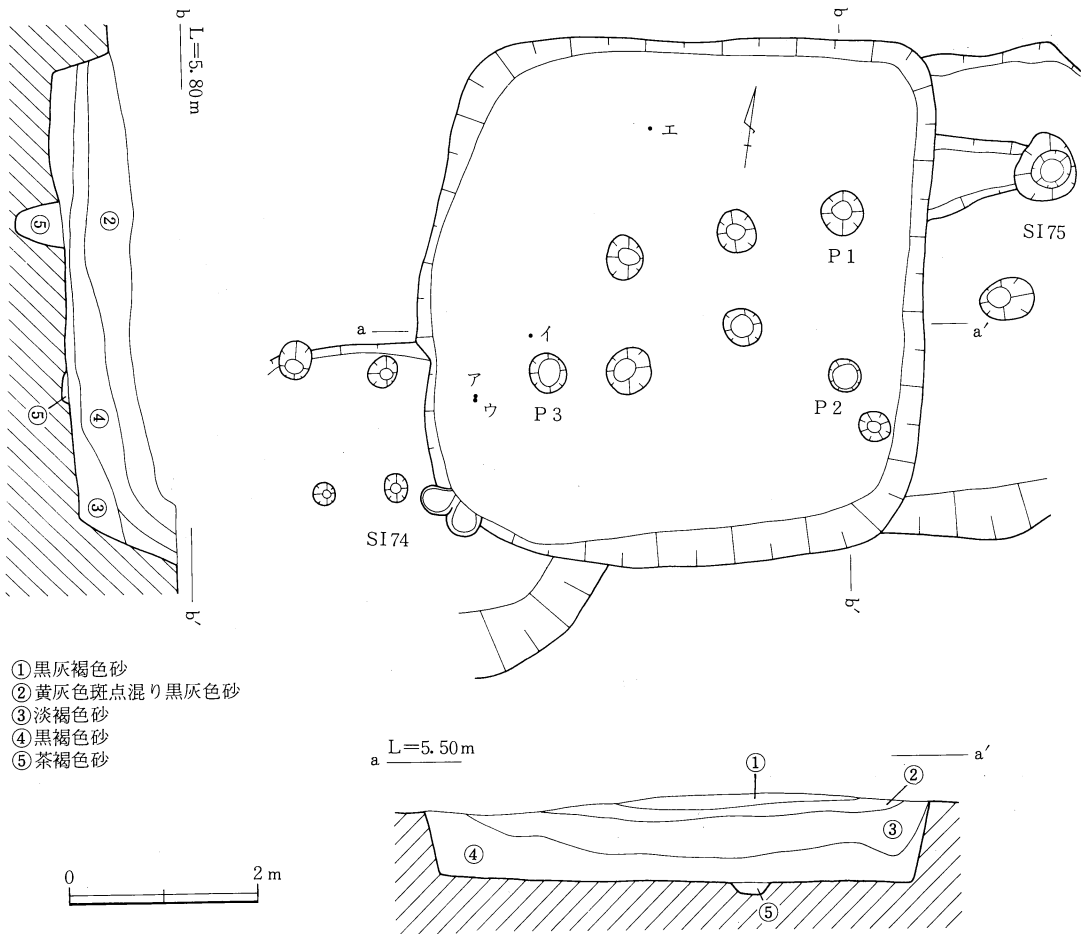
S I 73 (挿図216~218, 図版17・66)

12E地区南西区に位置し、南から北にむかって傾斜する微かな丘陵の麓にあって一部傾斜面を掘り込んでいる。西でS I 74, 東でS I 75, 北でSK05と重複している。平面形はほぼ方形で長辺5.20m, 短辺4.96mを測る。床面積は25.8㎡である。側壁は南側で最大値96cm, 北西側で最小値37cmの高さがあり、ほぼ垂直に作られている。側溝はみられない。床面でピット 8 個を検出したが、その内で柱穴と思われるのはP 1 (48×50-50), P 2 (37×35-11), P 3 (44×40-13)cmの 3 本である。柱穴間距離はP 1 より順に1.8, 3.15

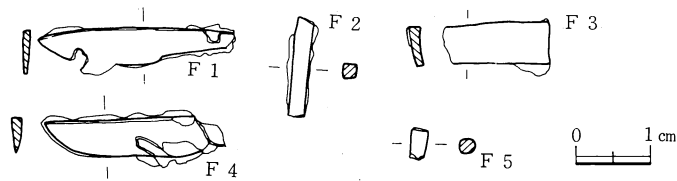


挿図 216 S I 73 遺物図その 1

mを測る。特殊ピット及び焼砂面は見られない。時期は不明である。



挿図 217 S I 73 遺構図

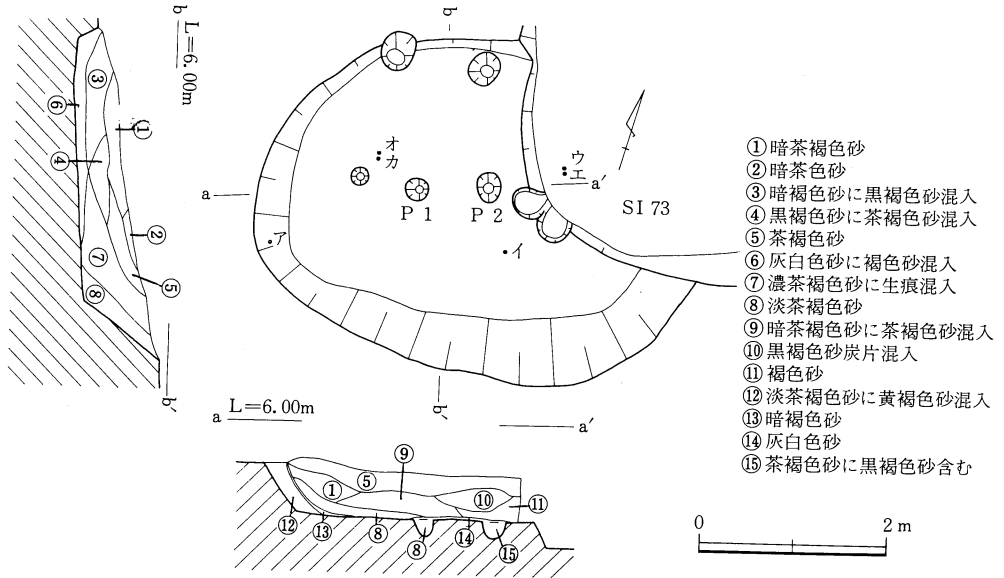


挿図 218 S I 73 遺物図その 2

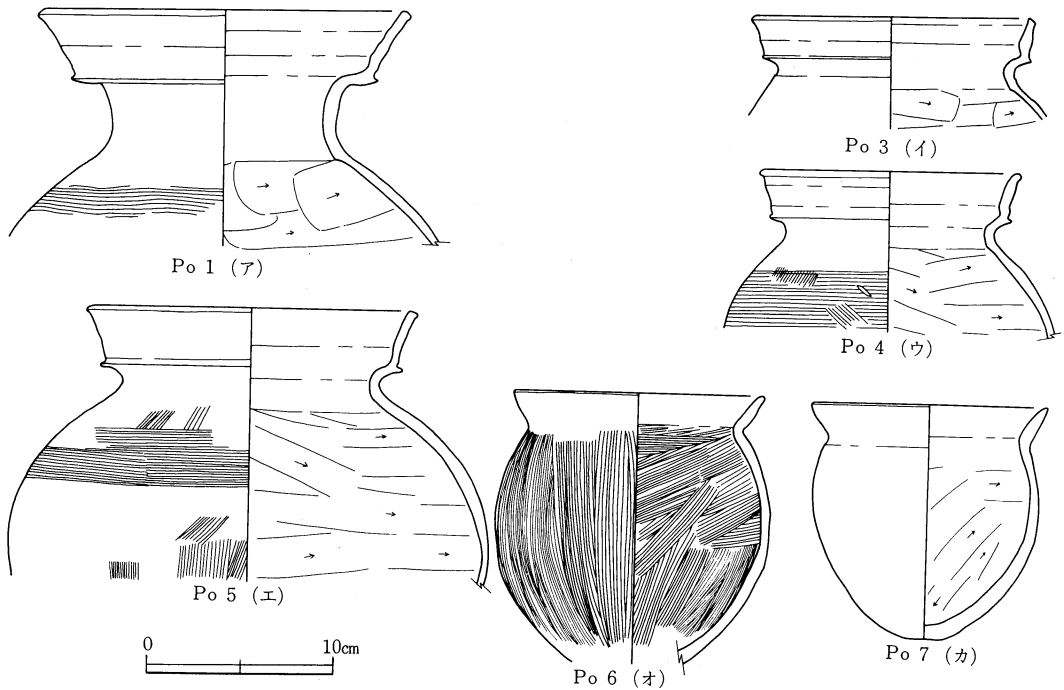
S I 74 (挿図219・222, 図版19・66)

12E地区南西区に位置し、南側の一部が南から傾斜している斜面をほりこむ。SB09の東に位置し、東でS I 73と重複する。平面形は隅丸長方形で、残存部の規模は長軸2.4m(推定3.7m)、短軸2.7m、推定床面積約10.5m²である。主軸はN-75°-Eである。側壁は北側で最大値84.4cm、西側で最小値17.6cmの高さをもつ。側溝はみられない。床面でピット7

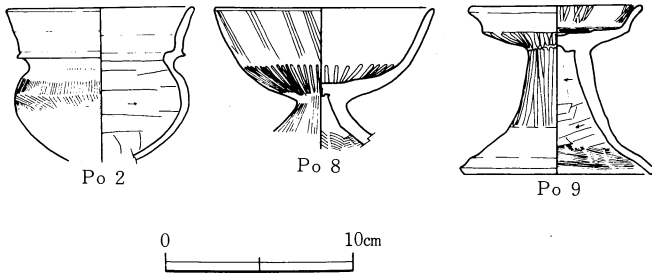
個を検出したが、そのうち柱穴は P 1 (25×23-19.9) cmであり、2本柱の建物と思われるが、東側は S I 73と重複しているため不明である。中央と思われるあたりに特殊ピット・P 2 (31×24-20.1) cmをもつ。時期は遺物より長瀬 I 期と考えられる。



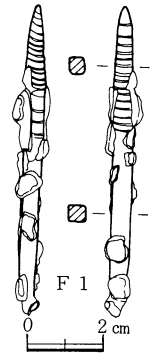
挿図 219 S I 74 遺構図



挿図 220 S I 74 遺物図その 1



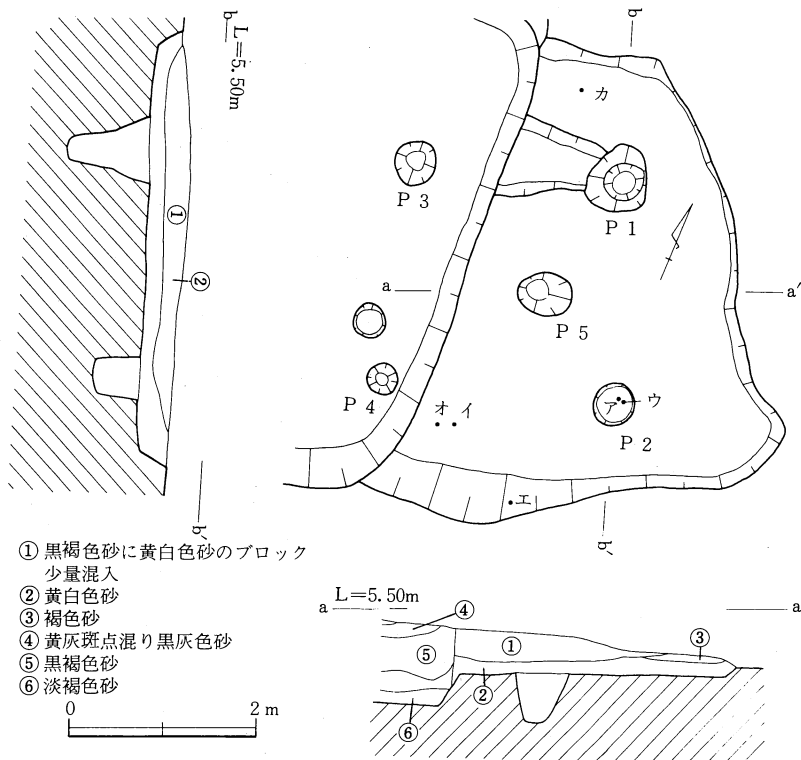
挿図 221 S I 74 遺物図その 2



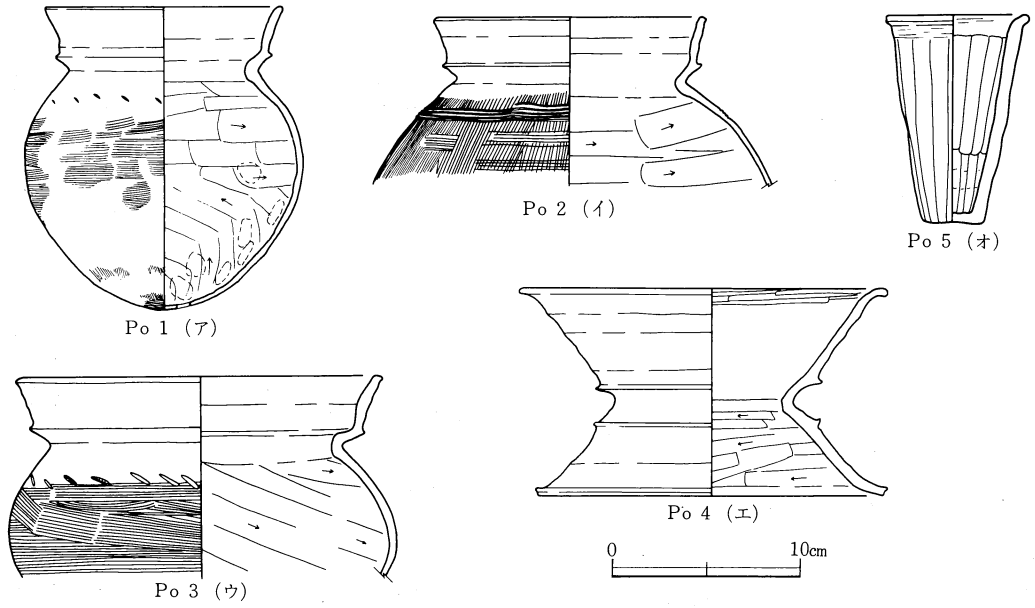
挿図 222 S I 74 遺物図その 3

S I 75 (挿図223~225, 図版17・66・67)

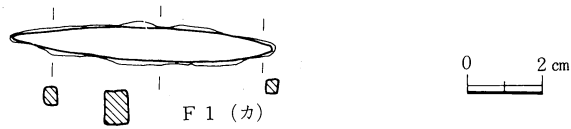
12E地区南東区に位置し、S I 73・74と同様に南斜面を一部掘りこんで作られている。西でS I 73と重複するが平面形は方形であろう。残存部の規模は長軸4.40m, 短軸3.70m, 床面積は16.28㎡である。側溝はみられない。柱穴はP 1 (72×62-91.4), P 2 (47×43-46.5), P 3 (36×30-32), P 4 (50×44-52) cmを測る。P 4はS I 73の柱穴と重複する。柱穴間距離はP 1から2.4, 2.52, 2.36, 2.26mを測る。中央よりやや東寄りに特殊ピットP 5 (57×46-54) cmがある。時期は長瀬I期と考える。



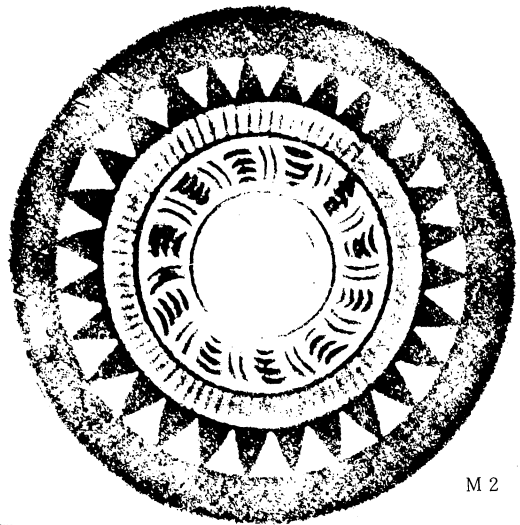
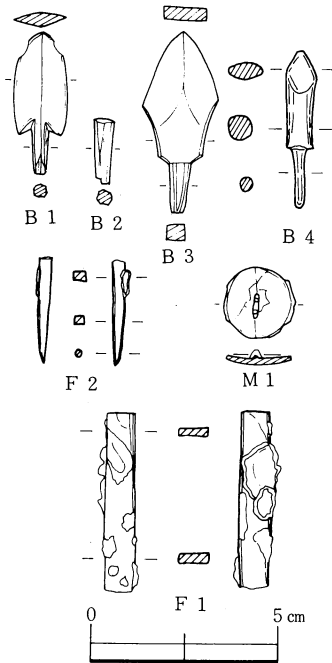
挿図 223 S I 75 遺構図



挿図 224 S I 75 遺物図その 1



挿図 225 S I 75 遺物図その 2



挿図 226 住居及び付近出土の金属製品

挿図 227 S I 63 直上出土の鏡

第2節 掘立柱建物跡（SB）

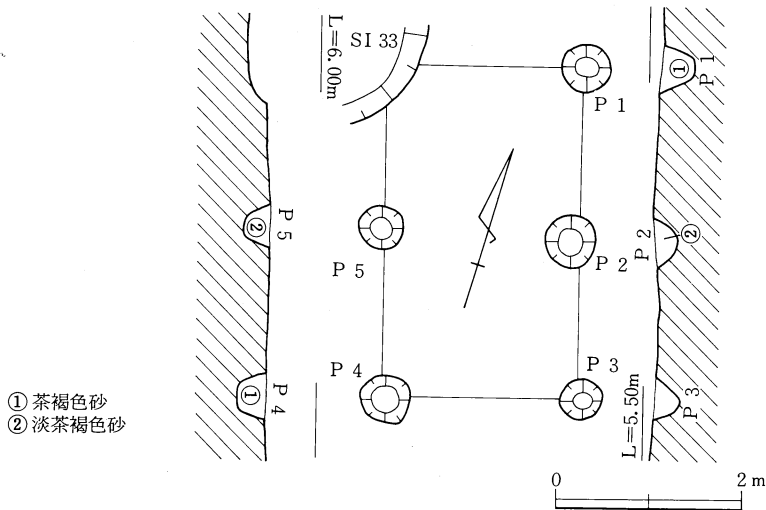
掘立柱建物跡は54年度調査地区で10棟検出された。内訳は1×2間7棟，1×3間2棟，1×4間1棟である。いずれもFラインより南に集中してみられる。

S B 01（挿図228，図版69）

11F地区の北西部に位置し，S I 55の北にある。主軸はN-16°-Wで，桁行2間，梁間1間の建物である。桁行長3.50m，妻通長2.09m，床面積7.32m²を測る。柱穴は5個で，北西隅のP 6をS I 33との切り合いで欠く。全て円形の単孔である。各柱穴間距離はP 1より1.84，1.66，2.09，1.78mを測る。各柱穴プランはP 1より(52×50-36)，(54×57-25)，(45×43-28)，(55×50-32)，(48×47-29) cmである。柱穴底の絶対高はP 1より5.01，5.15，5.10，5.14，5.19mで差は18cmしかない。

遺物は柱穴内より少量の土師器細片を検出したが図化できなかった。

周囲の遺構，他の掘立柱建物跡などから古墳時代前期～中期にかけての建物であろう。



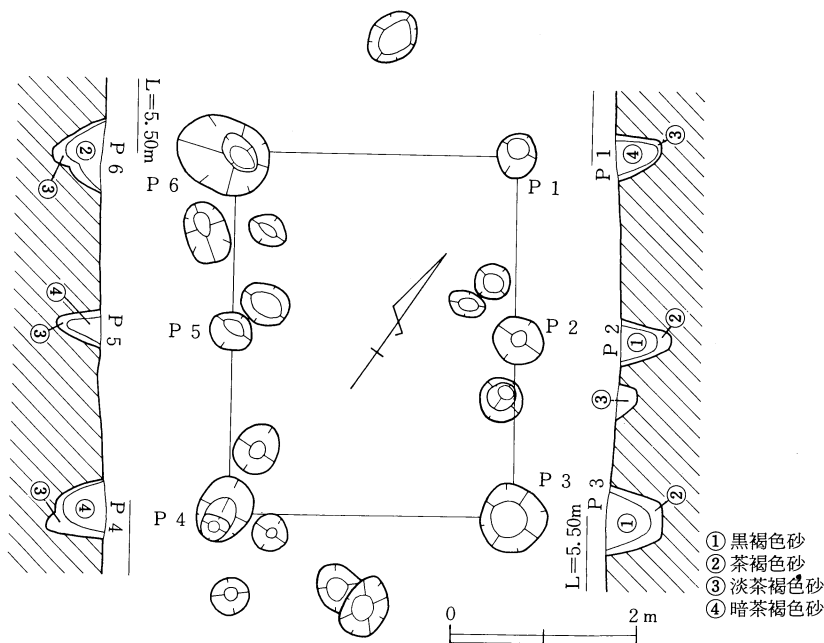
挿図 228 S B 01 遺構図

S B 02（挿図229，図版69・70）

11F地区の南西部に位置し，S I 55の南にある。P 6でS B 05のP 4と切り合うが，前後関係はわからなかった。主軸はN-35°-Wで桁行2間，梁間1間の建物である。桁行長3.95m，妻通長3.15mを測り，床面積は12.44m²である。柱穴は6個で，柱穴間距離はP 1より1.98，1.97，3.15，2.12，1.80，2.96mである。各柱穴プランはP 1より(43×47-50)，(53×51-56)，(68×70-65)，(53×70-58)，(47×41-49)，(102×78-56) cmである。柱穴底の絶対高はP 1から4.75，4.62，4.79，4.70，4.67，4.60mを測り，その差わずかに19cmしかない。

遺物は少量の土器を検出したが図化できなかった。S I 56・58と同軸であることから，

同時期（古墳時代前期～中期）と思われる。



挿図 229 S B 02 遺構図

S B 03 (挿図230, 図版70)

12F地区の北西部に位置し、東側にS B 04がある。主軸はN-23°-Wで桁行2間、梁間1間の建物である。桁行長3.1m、妻通長1.92m、床面積7.04m²を測る。柱穴は6個でP 2がS B 04のP 10と切り合うが前後関係は把握できなかった。柱穴間距離はP 1より順に1.55, 1.55, 1.90, 1.55, 1.55, 1.95, とほとんど差がない。各柱穴プランはP 1より(55×50-55), (209×115-59?), (74×55-55), (85×70-50), (75×57.5-55), (45×45-55) cmである。柱穴底の絶対高はP 1より4.70, 4.64, 4.61, 5.16, 5.03, 5.08mで、その差55cmである。

遺物は検出されなかったが、周辺の遺構より古墳時代前期～中期のものと思われる。

S B 04 (挿図231・232, 図版70)

12F地区の北側に位置し、近接してS B 03, S B 05がある。主軸はN-36°-Wで桁行4間、梁間1間の建物である。柱穴は8個で、北と南隅の2個の柱穴はS I 35, S I 56と切り合っており検出できなかったが、桁行長8.84m、妻通長5.36m、床面積47.38m²であろうと推定される。検出された掘立柱建物跡の中では最大のものである。またP 10はS B 03のP 2と切り合うが前後関係は把握できなかった。各柱穴間距離はP 2より2.7, 2.24, 2.4, —, —, 1.85, 2.2, 1.92, —mである。各柱穴プランはP 2より(180×152-125), (150×103-76.3), (124×104-56.3), (112×91-53.4), —, (132×124-46.2), (113×110-

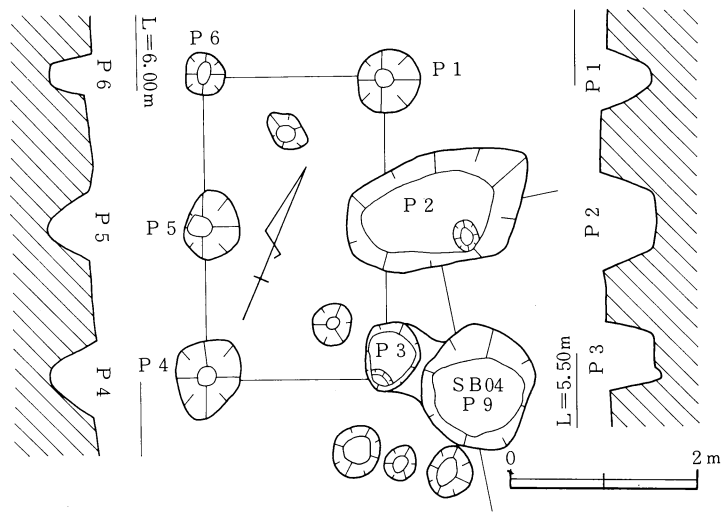
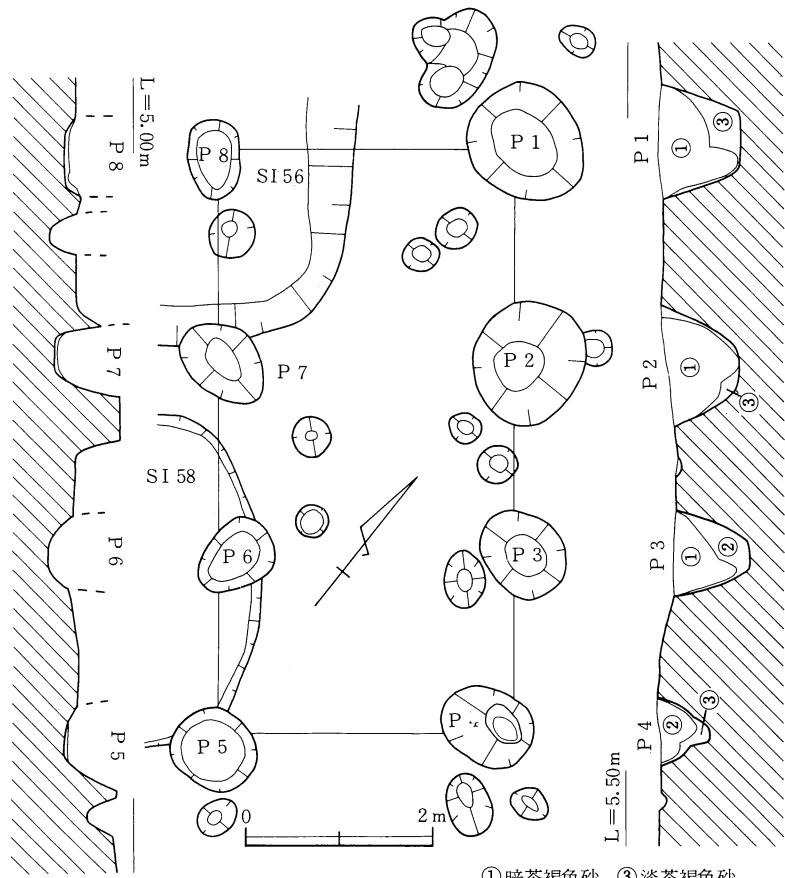
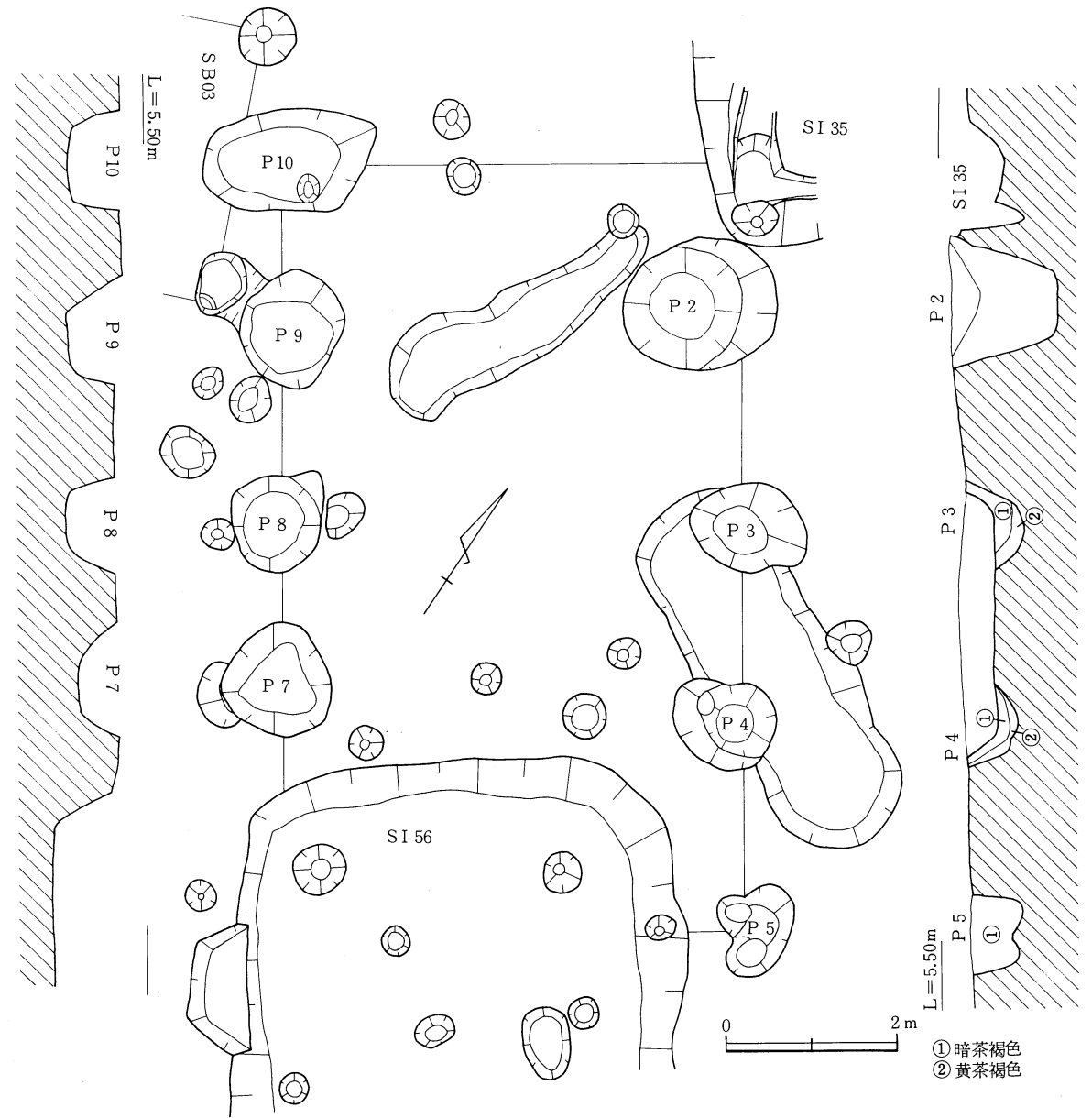
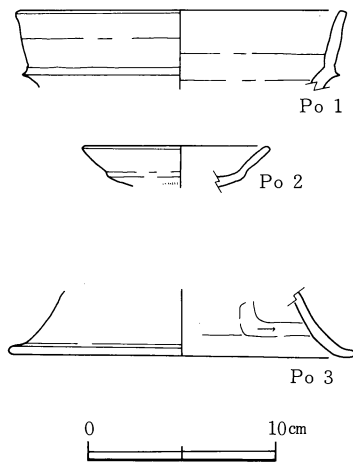


插图 230 SB 03 遺構図



① 暗茶褐色砂 ③ 淡茶褐色砂
② 茶褐色砂

插图 233 SB 05 遺構図



① 暗茶褐色
② 黄茶褐色

插图 231 SB 04 遺構図

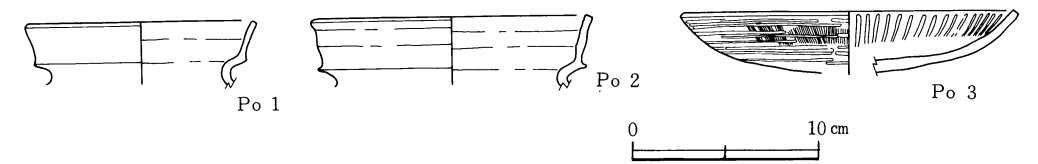


插图 232 SB 04 遺物図

47.2), (114×112-56.1), (209×115-59?) cmである。柱穴底の絶対高はP 2より4.11, 4.53, 4.62, 4.66, —, 4.72, 4.71, 4.60, 4.64mでその差は61cmである。

遺物は各柱穴から少量出土しているが、P 3の遺物より古墳時代前期(長瀬I期か?)と考える。

S B05 (挿図233, 図版70)

12F地区の東部に位置し、S I 56, 58と切り合う。主軸はN-39°-W, 桁行3間, 梁間1間の建物である。桁行長6.18m, 妻通長3.16m, 床面積19.53m²を測る。柱穴は8個で、P 4はS B02のP 6と重複するが前後関係は把握できなかった。柱穴間距離はP 1より2.35, 2.00, 1.84, 3.12, 2.05, 2.05, 2.14, 3.35mである。各柱穴プランはP 1より(132×118-60), (131×116-83), (100×83-83), (102×78-56), (91×82-38), (89×69-43), (104×75-58), (84×56-17) cmである。柱穴底の絶対高はP 1より4.58, 4.30, 4.18, 4.60, 4.26, 4.07, 4.17, 4.26mで差は43cmある。P 5~8とS I 56・58の埋砂とは識別するのが困難であって、検出面は低いが肩は実際には東側の柱穴と同じ位の高さであったと思われる。

遺物は少量であったがP 1, P 7より出土した遺物より古墳時代前期(長瀬II期)と思われる。

S B06 (挿図234・235, 図版70)

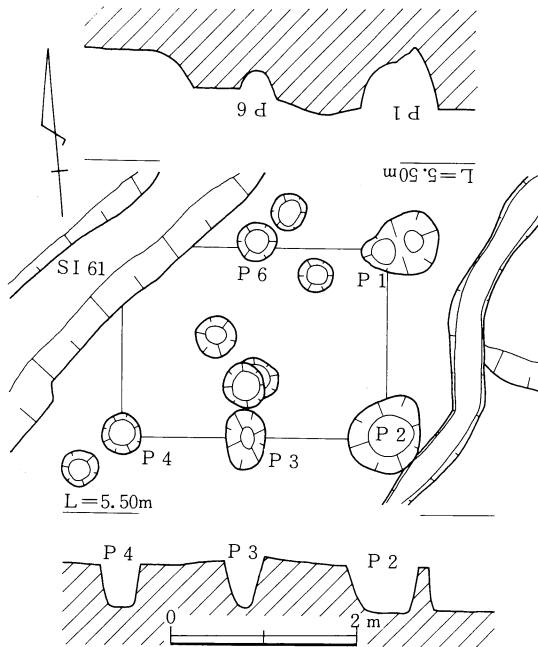
13E地区の東側中央部に位置し、S I 64の西, S I 66の北西にある。主軸はN-85°-Wで、桁行2間, 梁間1間の建物である。桁行長2.85m, 妻通長1.95m, 床面積5.70m²を測る。柱穴は5個検出したがP 5はS I 61との切り合いで欠き前後関係は不明である。各柱穴間距離はP 1より1.95, 1.50, 1.35, —, —, 1.41mを測る。各柱穴プランはP 1より(85×65-48), (77×82-51), (43×63-54), (43×45-46), (—), (44×41-25) cmである。柱穴底の絶対高はP 1から順に4.46, 4.46, 4.50, —, 4.55mで差はわずかに9cmである。

各柱穴ともにほとんど遺物が出土しなかったが、P 2より出土した土師器(P 01)などから古墳時代前~中期(長瀬II期か?)と思われる。

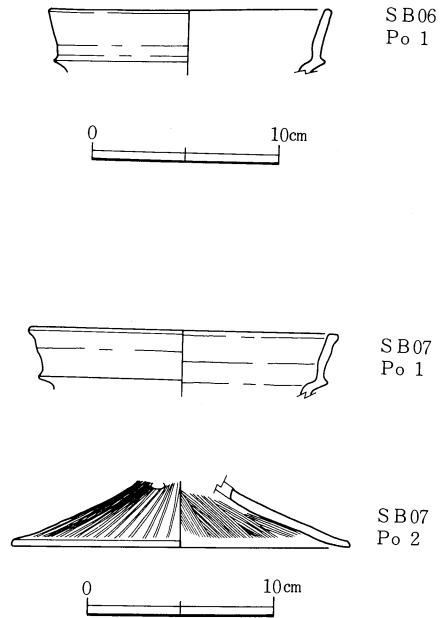
S B07 (挿図235・236, 図版71)

13E地区と12E地区にまたがり、S I 60の南西, S I 61の東に位置する。P 3がS I 64の肩を切っている。主軸がN-58°-Eの桁行2間, 梁間1間の建物である。桁行長4.06m, 妻通長2.04mで床面積8.28m²を測る。柱穴は6個を数え、各柱穴間距離はP 1から2.00, 2.06, 2.08, 2.13, 1.80, 2.04mである。各柱穴プランはP 1より(90×73-36), (52×52-47), (53×52-50), (68×70-72), (70×67-31), (94×87-50) cmである。

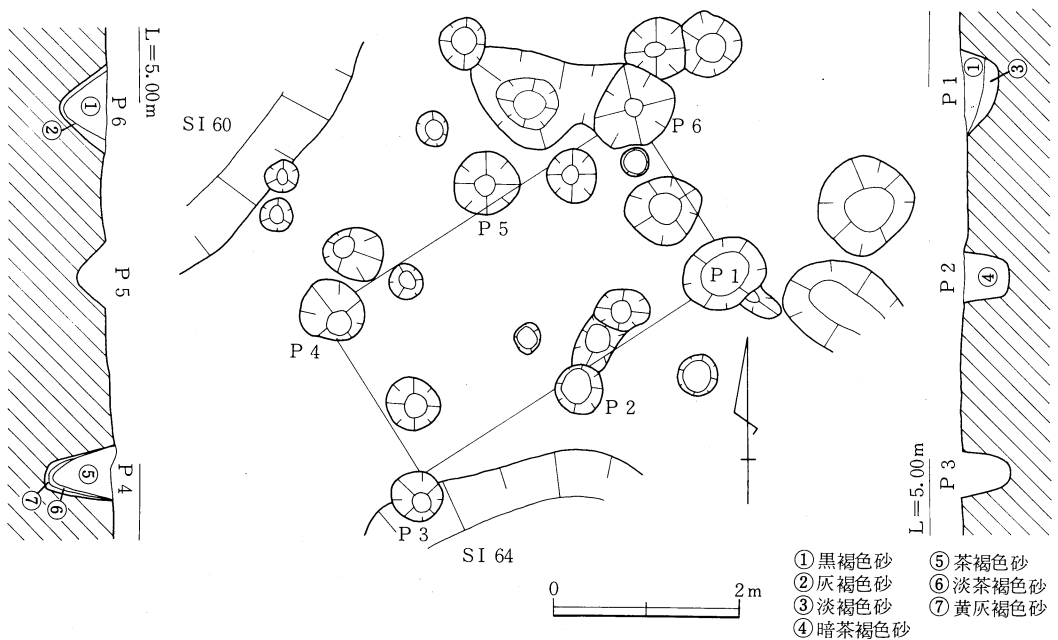
各柱穴底の絶対高はP 1より4.25, 4.14, 4.13, 4.00, 4.32, 4.15mで差は32cmある。各柱穴ともに少量の土器片しか出土しなかったが、それらの土器片とS I 64を切っていることなどから長瀬II期と考える。



挿図 234 S B 06 遺構図



挿図 235 S B 06・07 遺物図

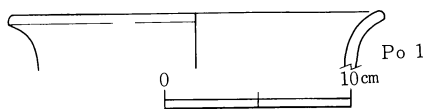


挿図 236 S B 07 遺構図

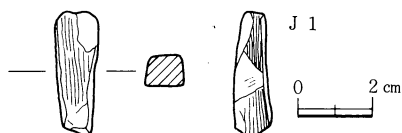
S B 08 (挿図237・238・240, 図版71)

12Eのほぼ中央に位置し、西にS I 69, 東にS I 70, 南にS I 73・74がある。主軸はN-86°-Eで桁行3間, 梁間1間(棟持柱を持つ)の建物である。桁行長3.52m, 妻通長4.24m, 床面積14.92m²を測る。柱穴は8個であるが両妻の外側には各柱穴底とほぼ同じ絶対高をもつ柱穴がある。平面的にもほぼ同じことから, 棟持柱と考えられる。棟持柱の柱穴を入れて柱穴は全部で10個である。各柱穴間距離はP 1より3.38, 1.35, 1.16, 1.29, 1.07, 2.28, 2.10, 1.30, 1.30, 1.30mである。各柱穴プランはP 1より(98×62-44), (98×56-67), (66×61-63), (57×52-53), (61×57-65), (61×57-61), (100×74-67), (87×60-53), (86×65-57), (84×62-60) cmである。各柱穴底の絶対高はP 1より4.28, 4.16, 4.17, 4.25, 4.14, 4.19, 4.03, 4.19, 4.15, 4.13mを測り, その差は25cmある。

各柱穴ともに少量の遺物が出土した。P 1より順に9, 5, -, 1, 5, -, 11, 1, 2, 5個の弥生時代前期と考えられる土器片が出土している。しかし, P 1・9よりそれぞれ1個の土師器少片が出土しているため, この掘立柱建物は周辺の遺構から考えて, 古墳時代前期のものと考えたい。またP 8より弥生時代前期の碧玉製の管玉未製品(J 1)が出土している。



挿図 237 S B 08 遺物図その 1



挿図 238 S B 08 遺物図その 2

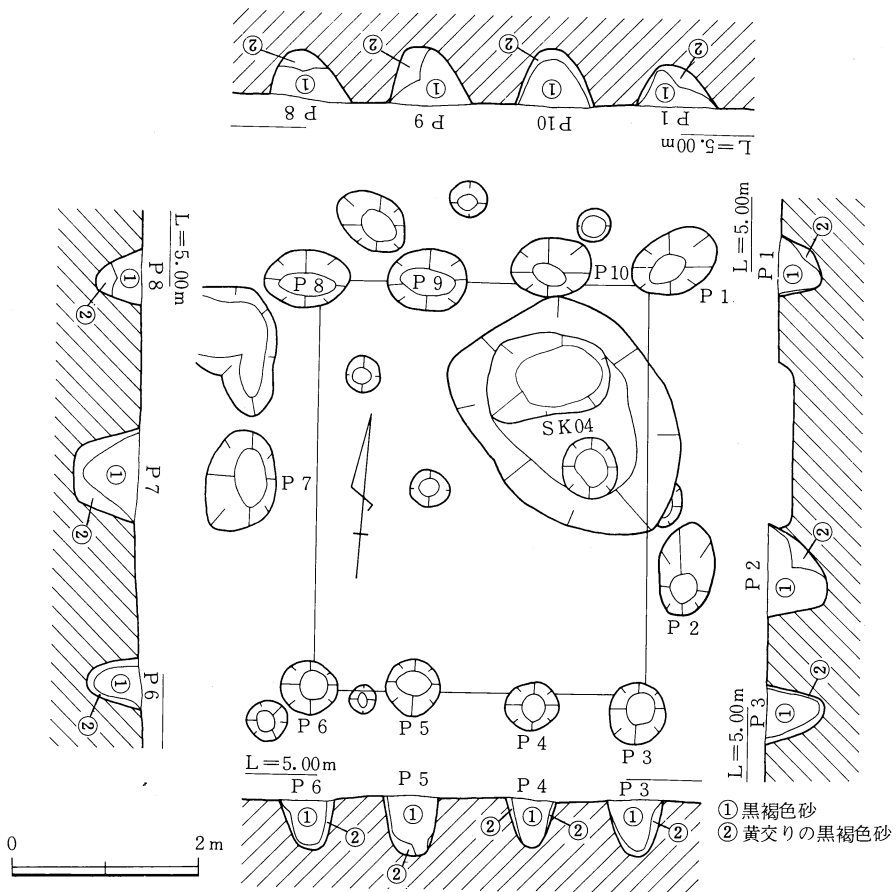
S B 09 (挿図239・241, 図版71)

南より下がる斜面が平坦地となる12E地区の南東に位置し, 西にS I 66, 北にS I 69, 東にS I 74・75がある。主軸はN-17°-Eで桁行2間, 梁間1間の建物である。桁行長3.26m, 妻通長2.70m, 床面積8.8m²を測る。柱穴は6個でP 3・4のプランが楕円形をなし他は円形をなす。各柱穴間距離はP 1より1.48, 1.76, 2.70, 1.60, 1.85, 2.70mである。各柱穴プランはP 1より(43×42-48), (53×52-42), (63×50-51), (76×52-55), (47×46-43), (46×44-20) cmである。柱穴底の絶対高はP 1より4.69, 4.94, 5.03, 4.95, 4.88, 4.80mで差は34cmある。

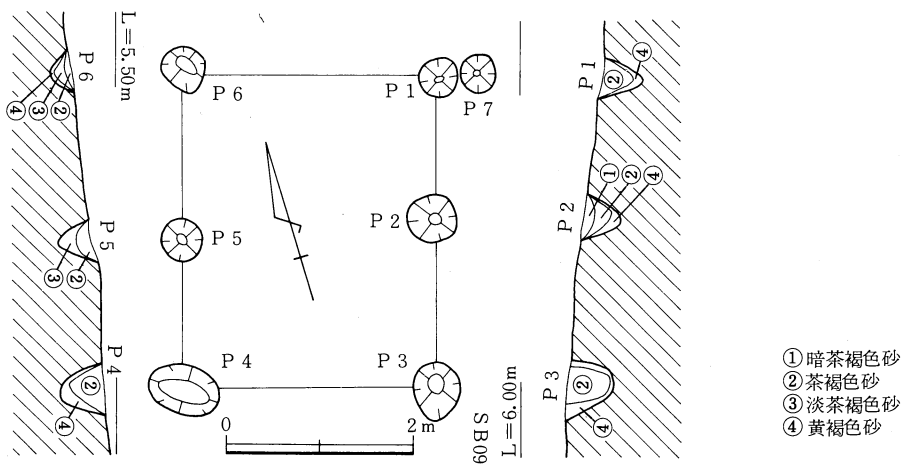
遺物は各柱穴より少量出している。土師器片(P o 3)より長瀬II期と考える。



挿図 239 S B 09 遺物図



挿図 240 S B 08 遺構図



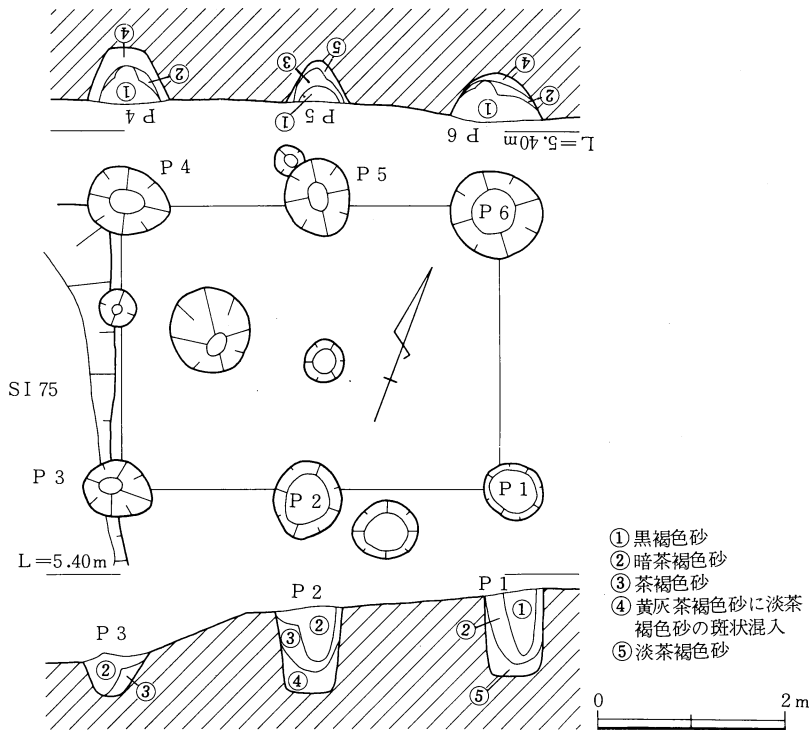
挿図 241 S B 09 遺構図

S B 10 (挿図242, 図版71)

11E地区の南西部に位置し、S I 72の西にある。S I 75とはP 4で切り合う。主軸はN

-70°-Eで、桁行2間、梁間1間の建物である。桁行長4.40m、妻通長3.02m、床面積は14.5㎡を測る。柱穴は6個で、各柱穴間距離はP1より2.22, 2.09, 3.02, 2.05, 1.88, 2.83mである。各柱穴プランはP1より、(66×59-93), (82×72-92), (75×61-48), (88×73-65), (84×70-48), (99×93-54) cmである。各柱穴底の絶対高はP1より4.72, 4.53, 4.50, 4.51, 4.65, 4.78mで差は27cmである。

各柱穴ともにほとんど遺物をもたなかった。周辺の遺構から考えて古墳時代中期と考えられる。



挿図 242 S B 10 遺構図

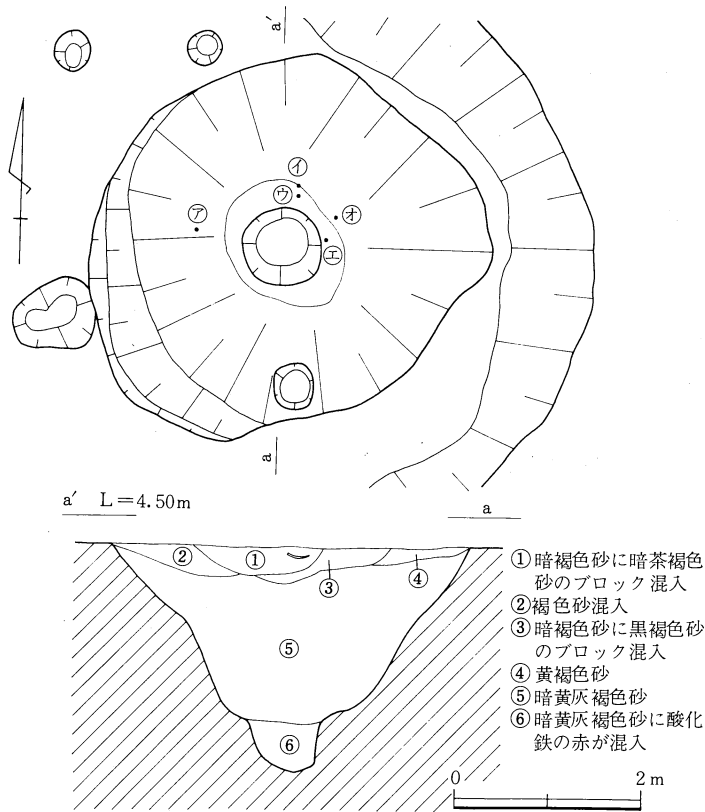
第3節 井戸跡 (SE)

54年度調査地区では4基の井戸跡を検出した。SE02・03は単独で溝を伴い、SE01・04は住居跡内から検出された。いずれもGラインからEラインの間にある。

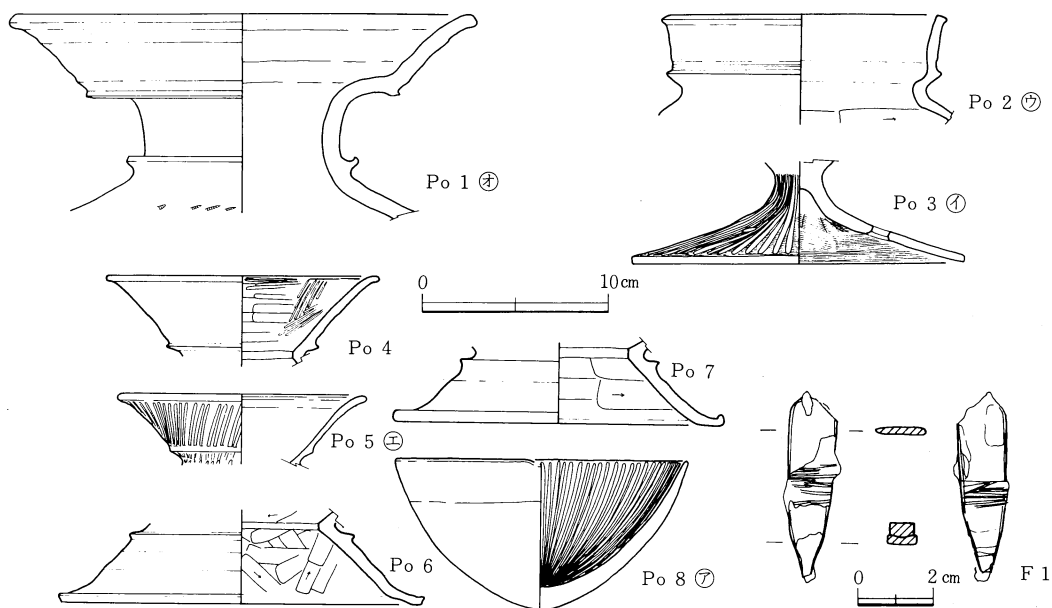
SE01 (挿図243・244, 図版72・74)

13G地区の北東にあり、SE03の北、SI31の西に位置し、SI29と重複している。平面形は円形に近い。約60°の角度ですり鉢状に掘り込まれ海拔2.5m付近で平坦面を作り、その中央のやや西にピットを掘り込んでいる。検出面での大きさは長軸4.32m, 短軸3.70m, 深さはピットを含め約2.36mを測る。中央のピットは(84×58-34)cmである。ピット底面には、他の井戸跡のように土器を敷きつめることはしていない。

SI29との関係は、平面より検出できなかったがSI29の方が新しいものと考えられる。遺物は埋砂の中に小片の土器が少量出土している。また剣先形鉄製品も出土している。出土遺物から長瀬I期のものであろう。



挿図 243 SE 01 遺構図



挿図 244 S E 01 遺物図

S E 02 (挿図246・247, 図版72~74)

14G地区に位置し、S I 32の南西にある。南西側で東西に走る溝・14G S D01と、南東側で南北に走る溝 S D02とが S E 02を切っている。やや歪な楕円形で長軸 7 m, 短軸 6 m, 深さ 2.7 m のすり鉢状をなし、埋砂からは多くの土師器片が出土した。海拔 3 m 以下で酸化鉄層をもち、海拔 1.8 m のあたりで一度平坦面を作り、この平坦面の中央やや東寄りに (50×50-60) cm のピットが掘られている。ピット内は灰褐色砂で黒褐色の粘土を多く含み、ピット上端から 20 cm 下付近で小石と甕の破片を二重・三重に敷きつめていた。甕の破片は総て内側を上にしてあり、意識的に置かれたものと考えられる。さらに 40 cm 下げて底に達し、水が湧き出た。

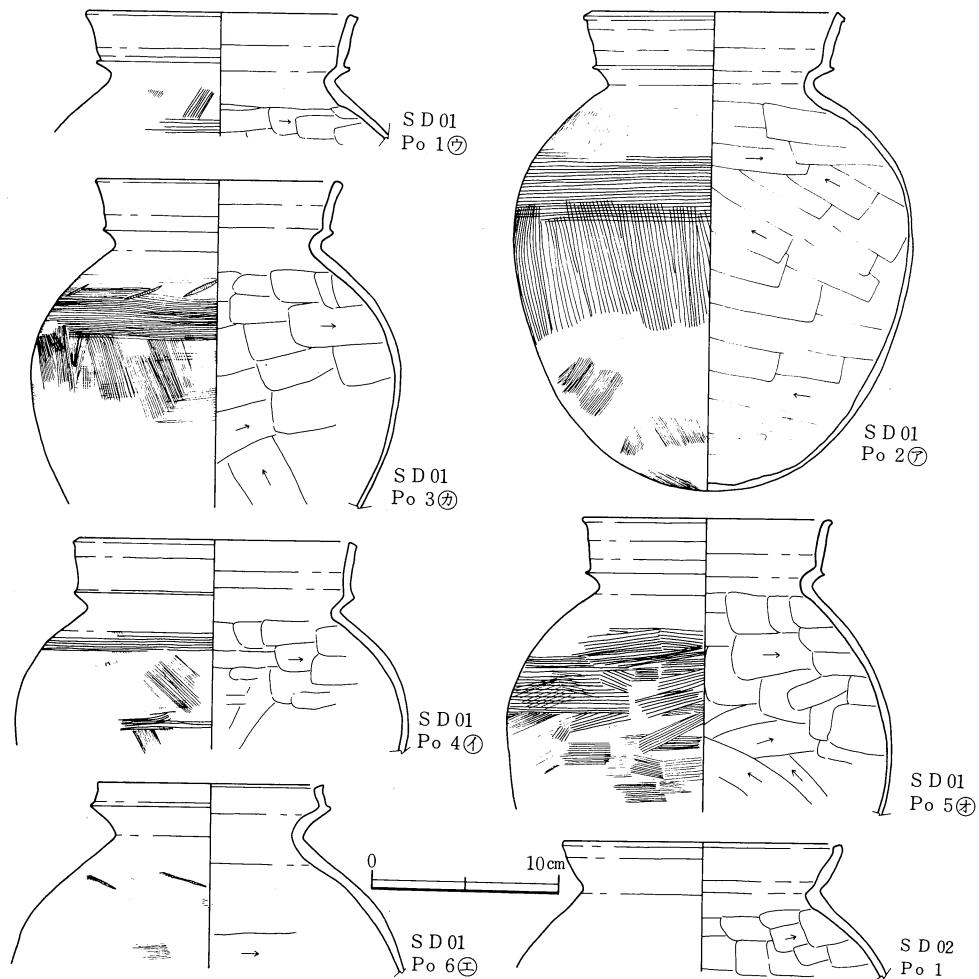
出土遺物から長瀬II期のものであろう。

14G S D01 (挿図245・247, 図版72・74・75)

S E 02の東西端から東西に走る溝で、西側は55年度調査区内に入る。54年度調査区内で長さ 5 m, 幅 1.9~2.6 m, 深さ約 60 cm を測る。遺物は甕などが完形のまま底面より少し浮いた状態で出土した。14G S D01は S E 02を切っており、S E 02に伴う遺構か、もしくは新しいものであろうが、II期の時期であろう。

14G S D02 (挿図245・247, 図版72・75)

S E 02の南東端から南北に走る溝で、全長 8.7 m, 幅約 2 m, 深さ 40~80 cm を測る。遺構の北部を中心に遺物出土し、甕・高杯・土錘などがみられる。平面では S E 02を切っているが、S D01と同じ時期であろう。

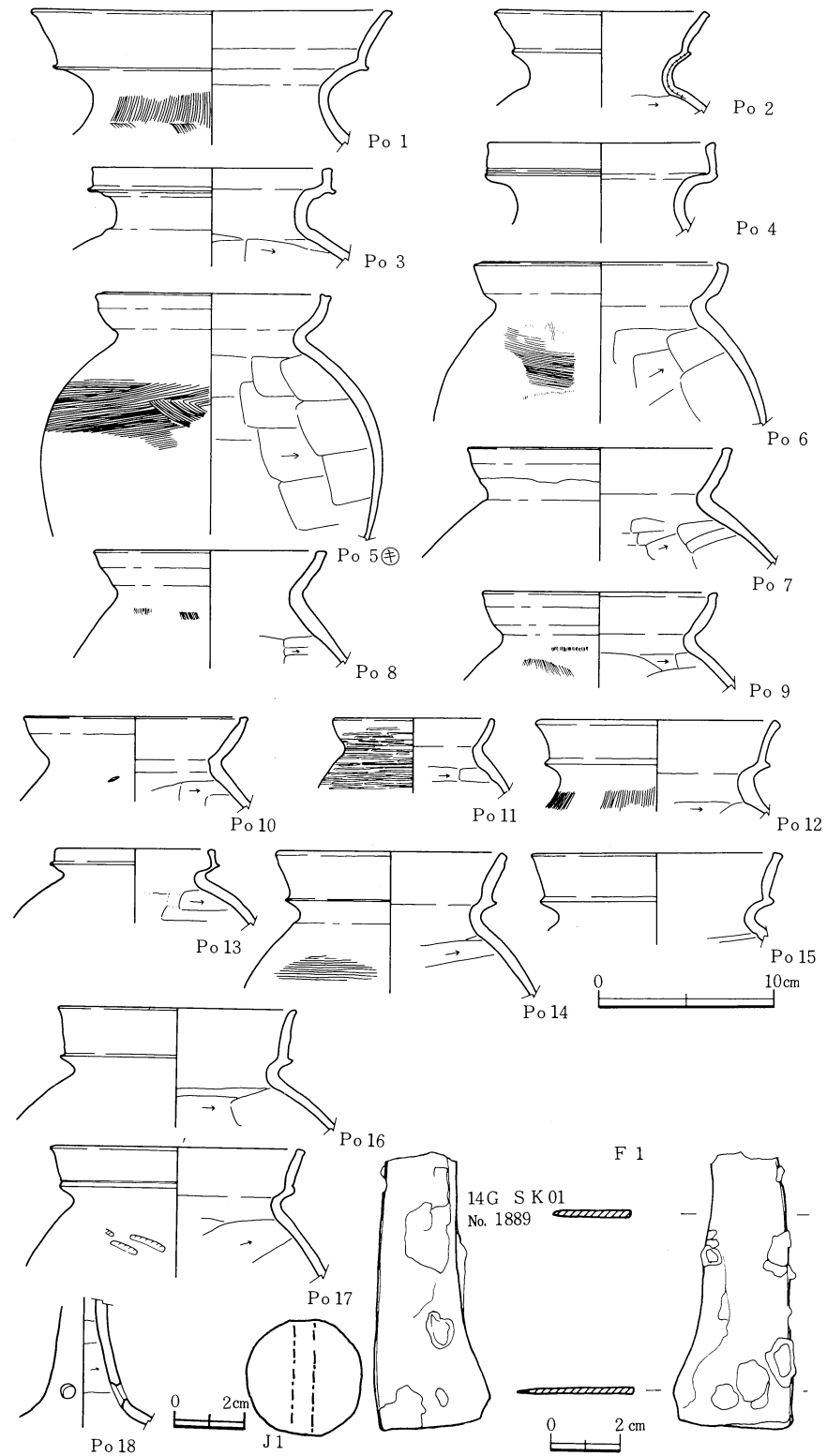


挿図 245 14 G S D 01・02 遺物図

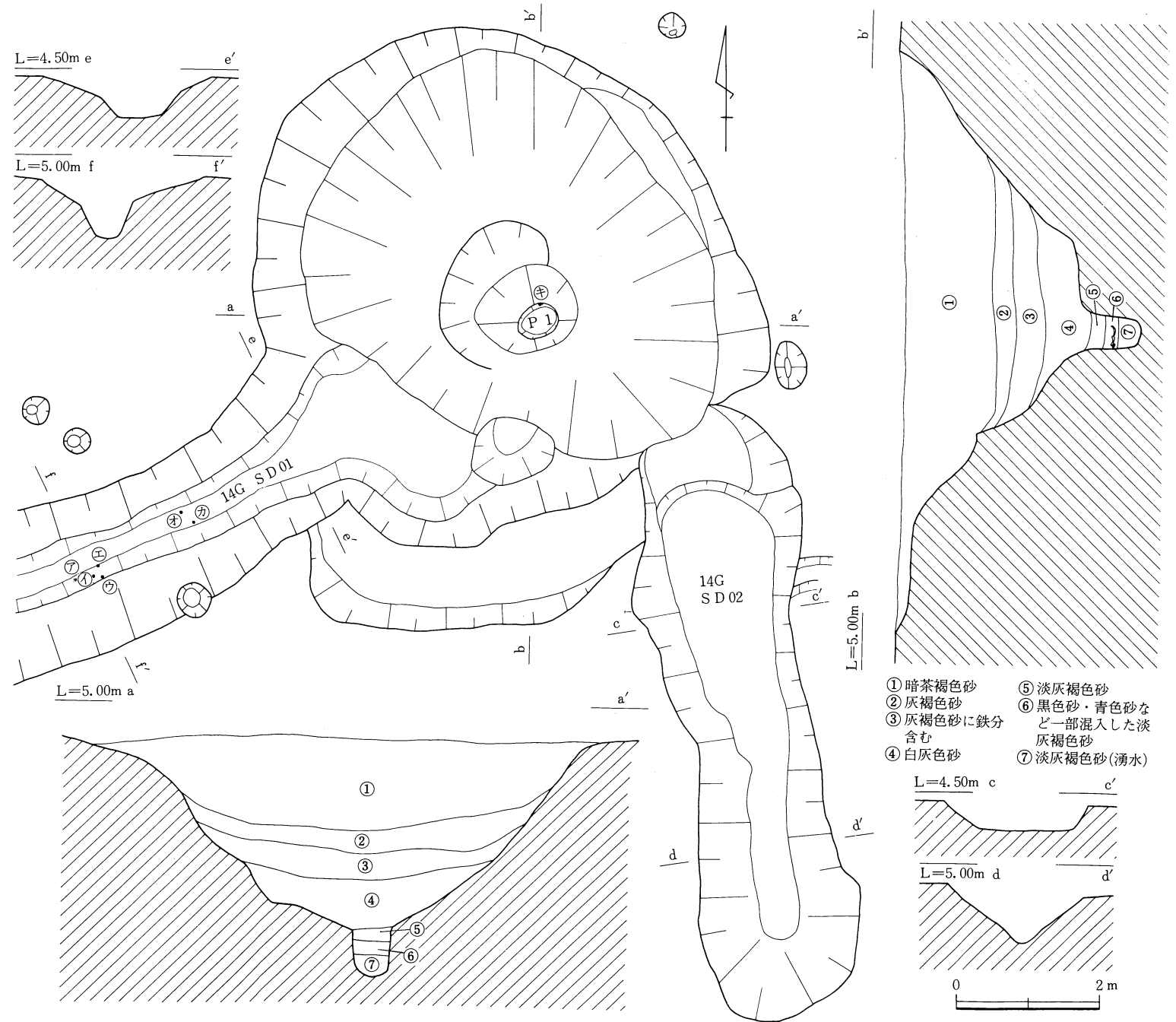
S E 03・13G S D 01 (挿図248～262, 図版73・75～86)

13F地区と13G地区にまたがる井戸跡で、S Z 02のすぐ北にあり、約20m北にはS E 01がある。井戸は上縁部長軸7.6m、短軸5.8mの楕円形を呈し、一部2段のすり鉢状をなし深さ3.3mを測る。遺構の上面近くに大量の土器群を検出した。床面には2つのピットがある。西のP 1は浅いが、東のP 2は深く、その底面は海拔1.7mで約20cm上面に甕の破片が敷きつめられたように出土した。(P 1:77×68-20cm, P 2:86×77-100cm)

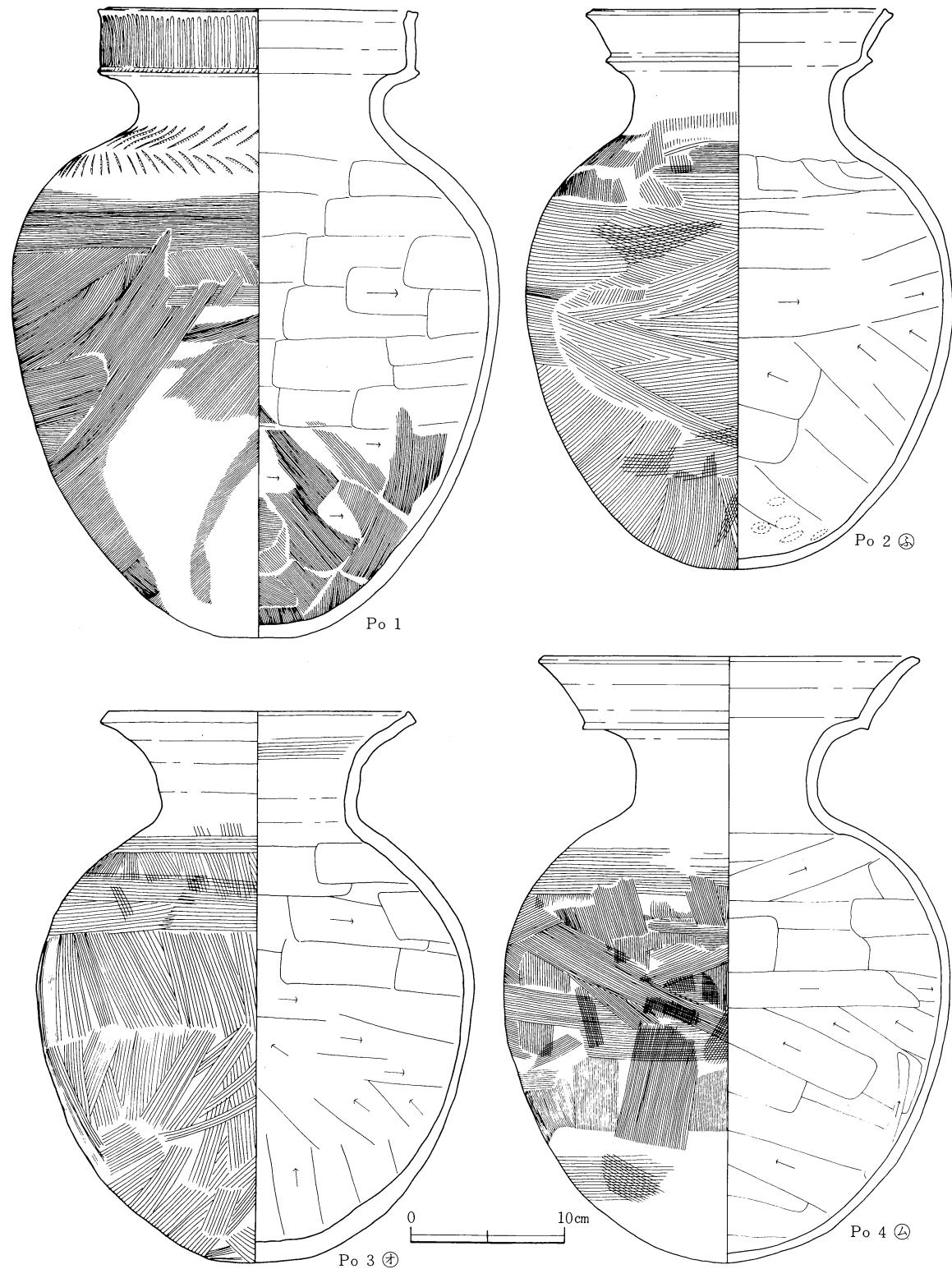
上面の土器群中には多数の完形品が出土した。多くは甕、壺、高杯などだが、他に器台、大型の壺、台付短頸壺、ブランデーグラス型の高杯なども出土している。これらの土器群は住居跡から出土する土器群と出土状況はよく似ているが、ピットなどが土器群の下にないことなどから井戸が埋るときのものとする。甕の大部分はススが付着し、かなり使用されたと想像できる。なかに穿孔のあるものが4個体ある。内2個体は体部に外から打撃



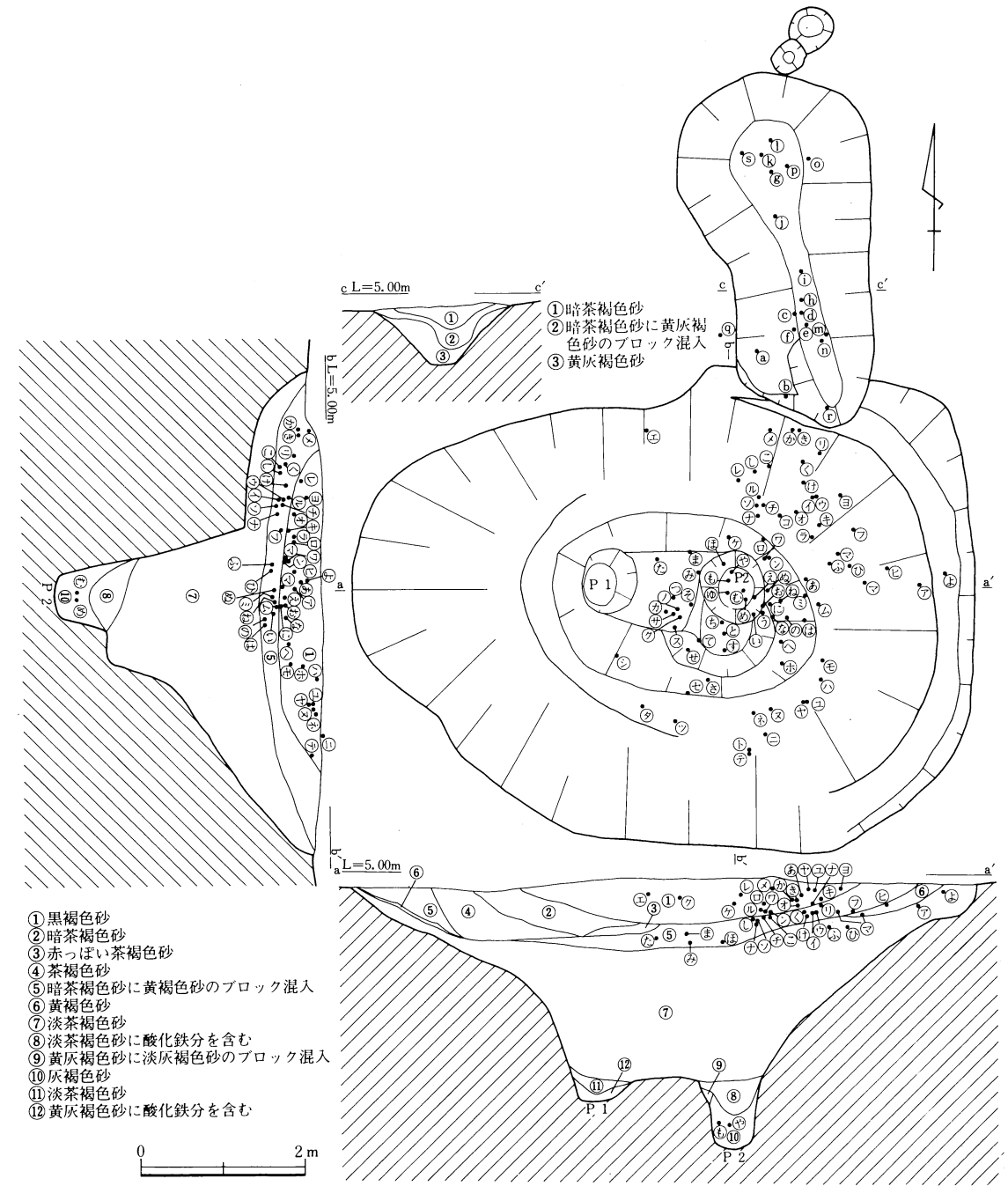
挿図 246 SE 02 遺物図



挿図 247 SE 02・14G SD 01・02 遺構図



挿図 248 S E 03 遺物図その 1

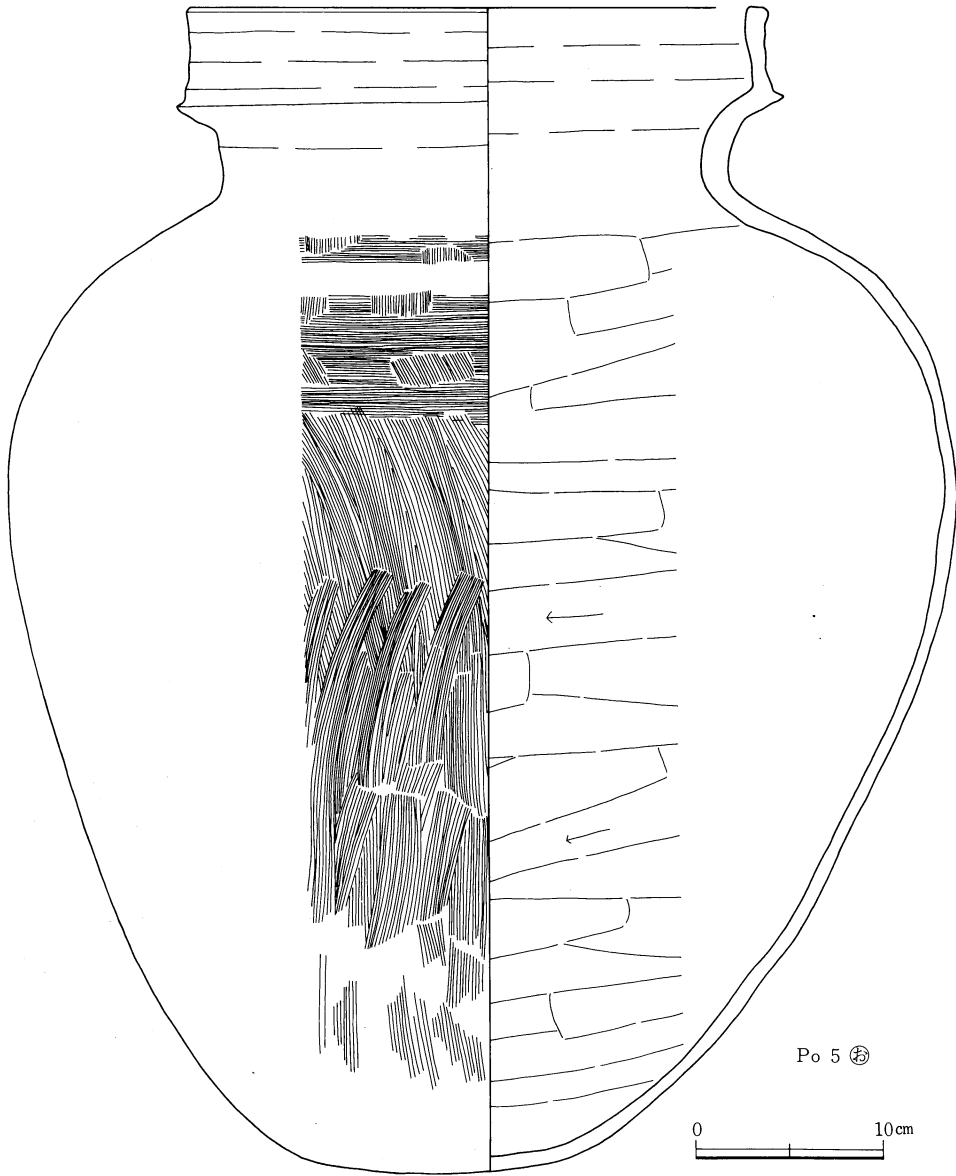


挿図 249 S E 03・13 G S D 01 遺構図

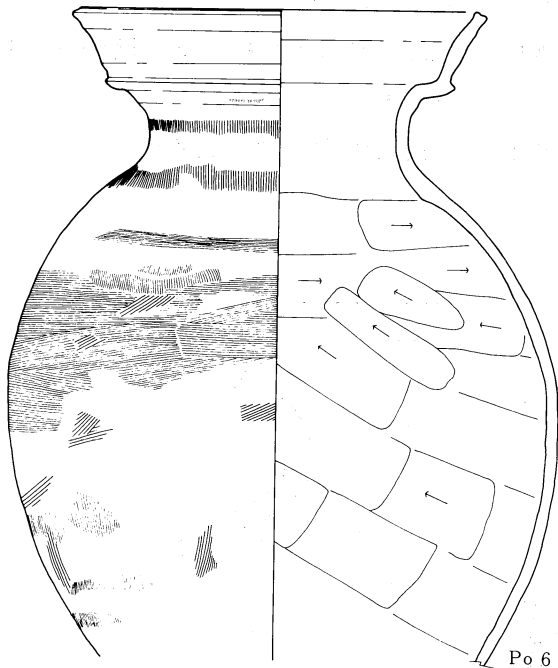
を加えて空け、残りの2個は底部を錐状工具であけたものである。

またこのS E 03は北端で13G S D 01と重複している。この溝は全長4.4m、幅1.6~2.4m、深さ60cmを測る。この溝はS E 03に伴うものと考える。

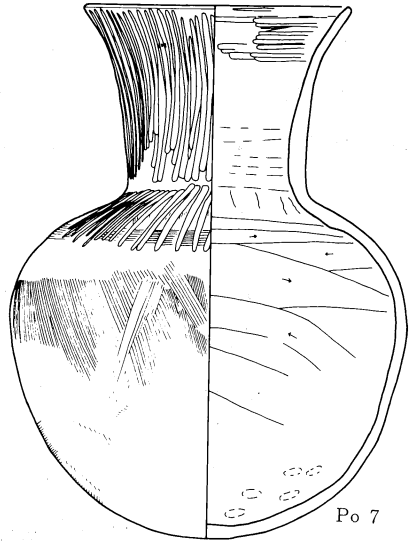
井戸跡の時期は、P 2内から出土した遺物などから長瀬II期のものであろう。



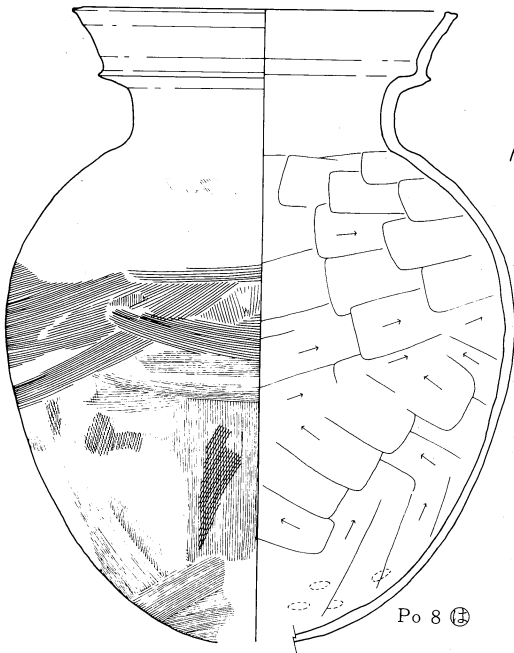
挿図 250 S E 03 遺物図その 2



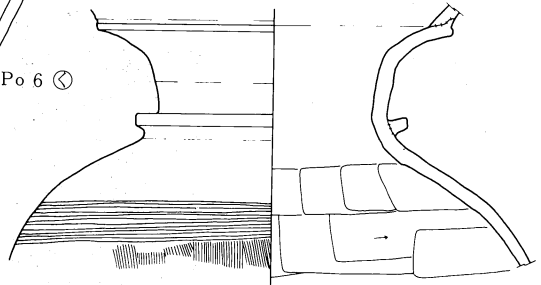
Po 6 ㊦



Po 7

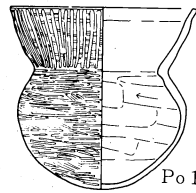


Po 8 ㊦

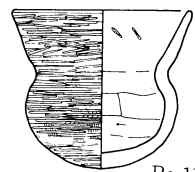


Po 9 ㊦

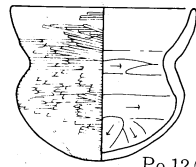
0 10cm



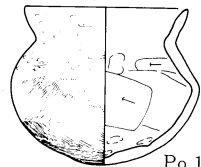
Po 10



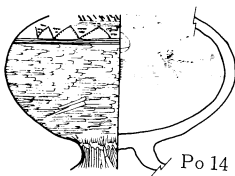
Po 11



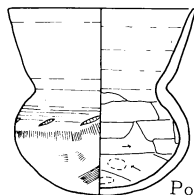
Po 12 ㊦



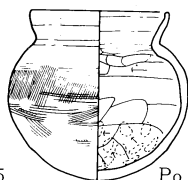
Po 13



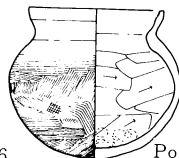
Po 14



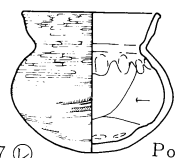
Po 15



Po 16

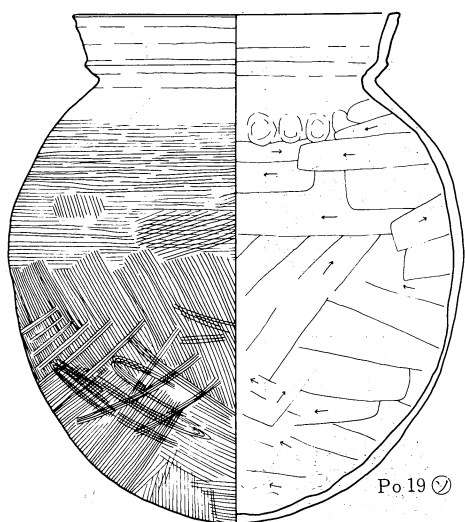


Po 17 ㊦

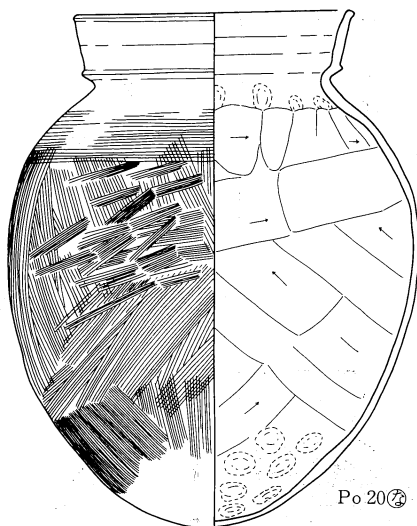


Po 18

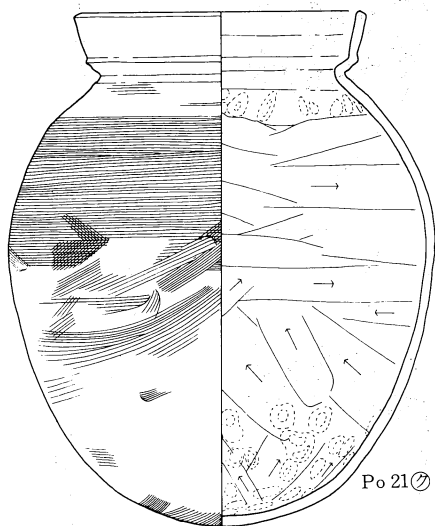
挿図 251 S E 03 遺物図その 3



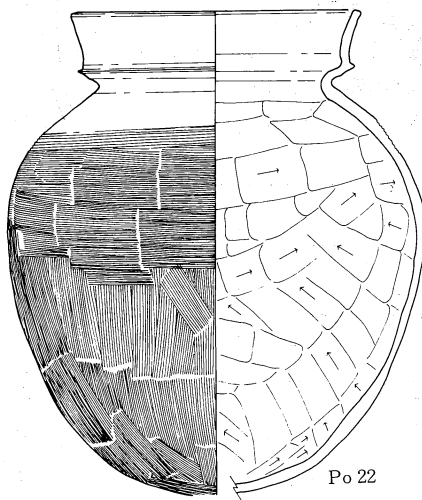
Po 19 ㊦



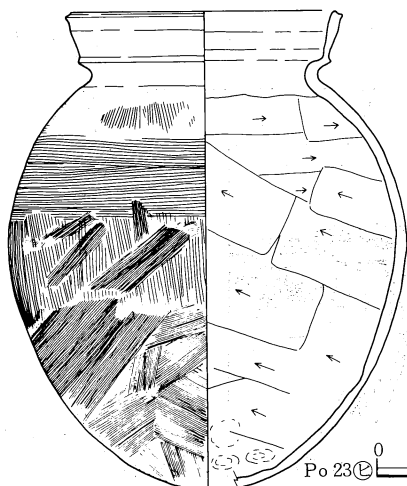
Po 20 ㊦



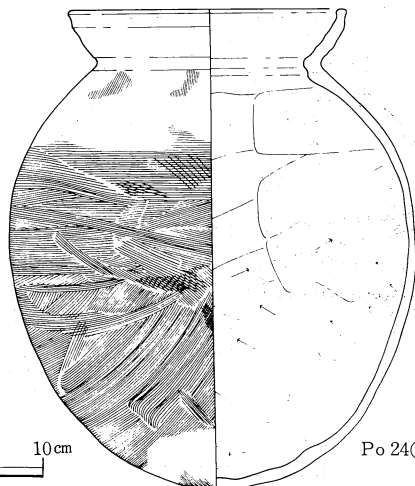
Po 21 ㊦



Po 22



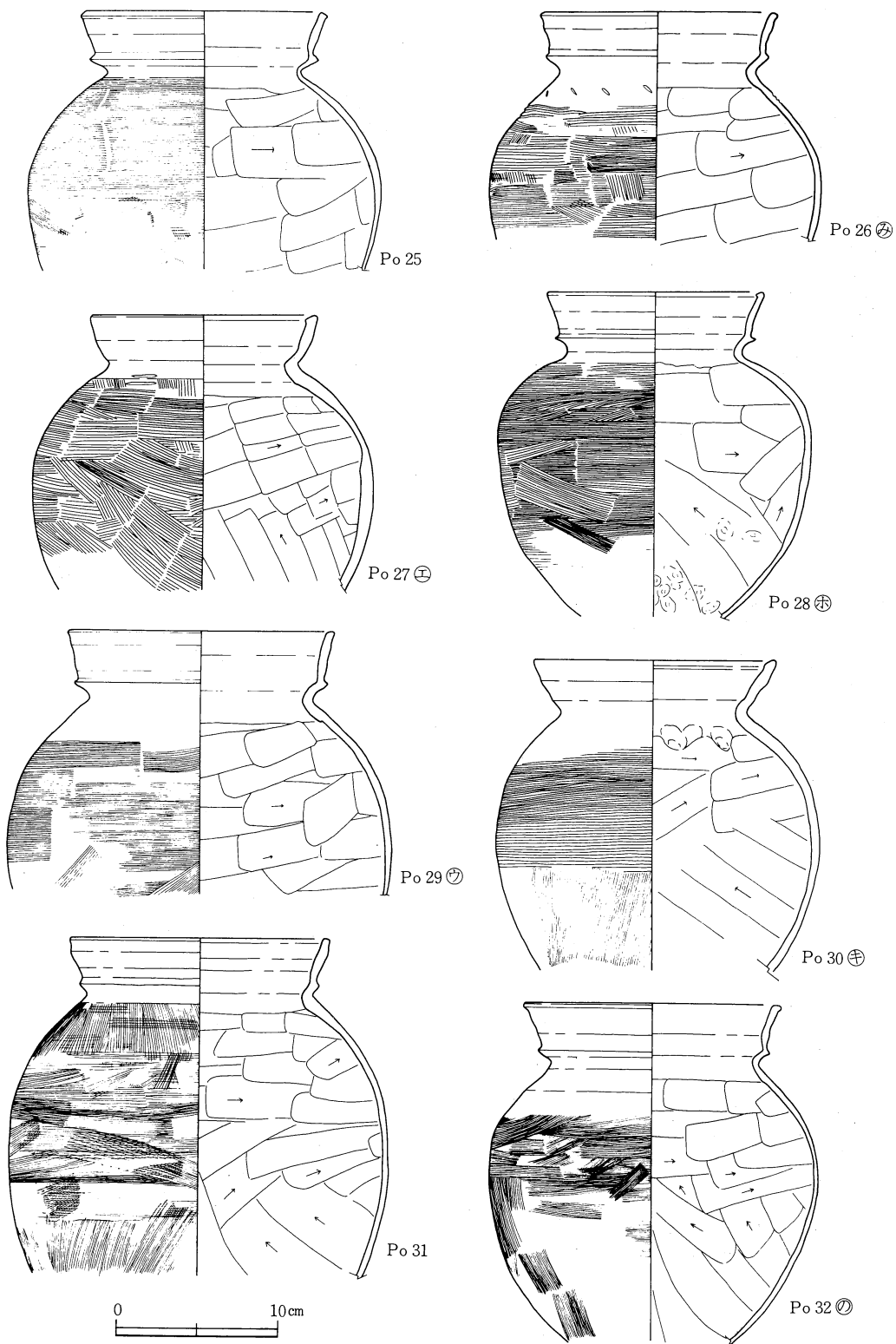
Po 23 ㊦



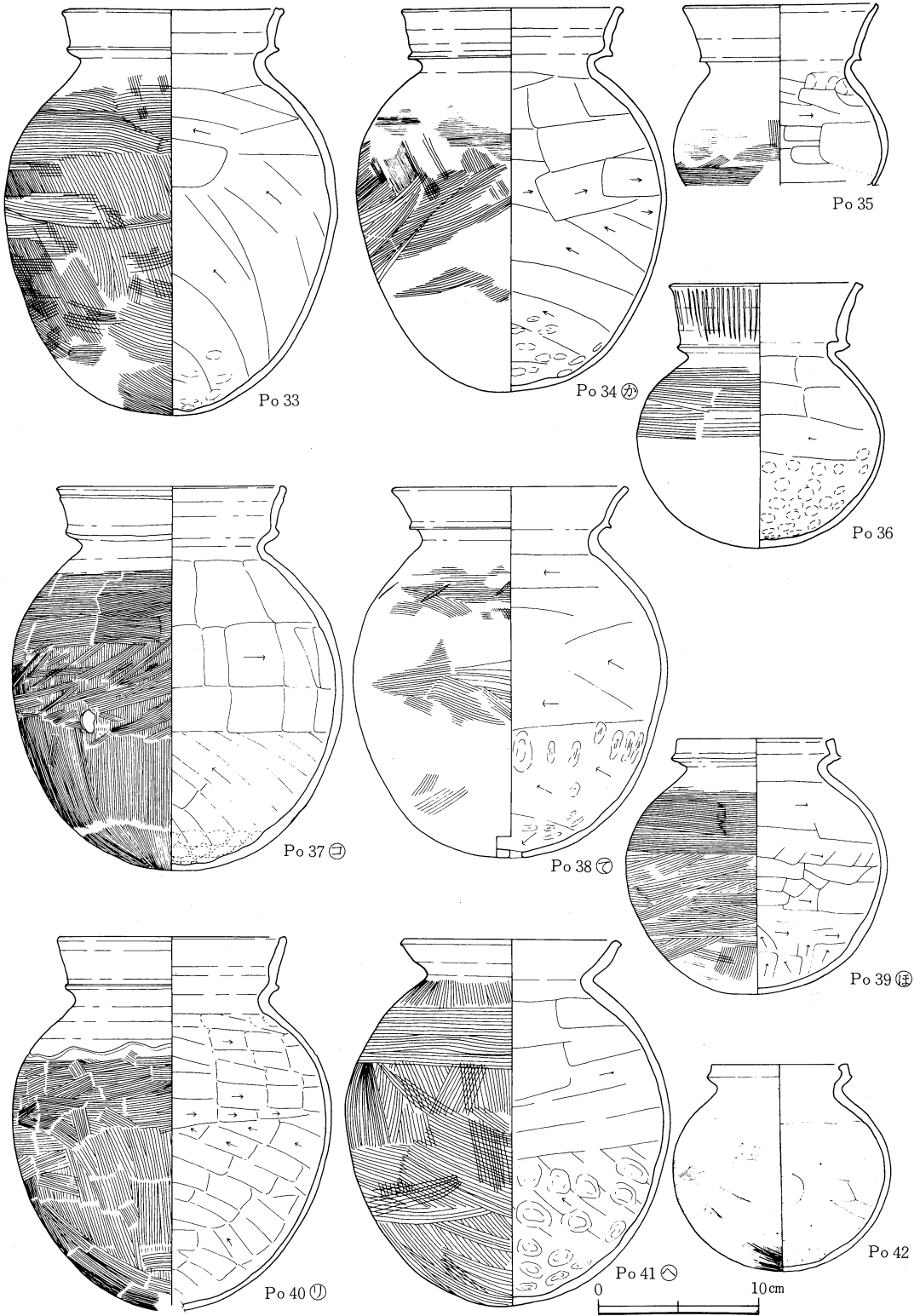
Po 24 ㊦

0 10cm

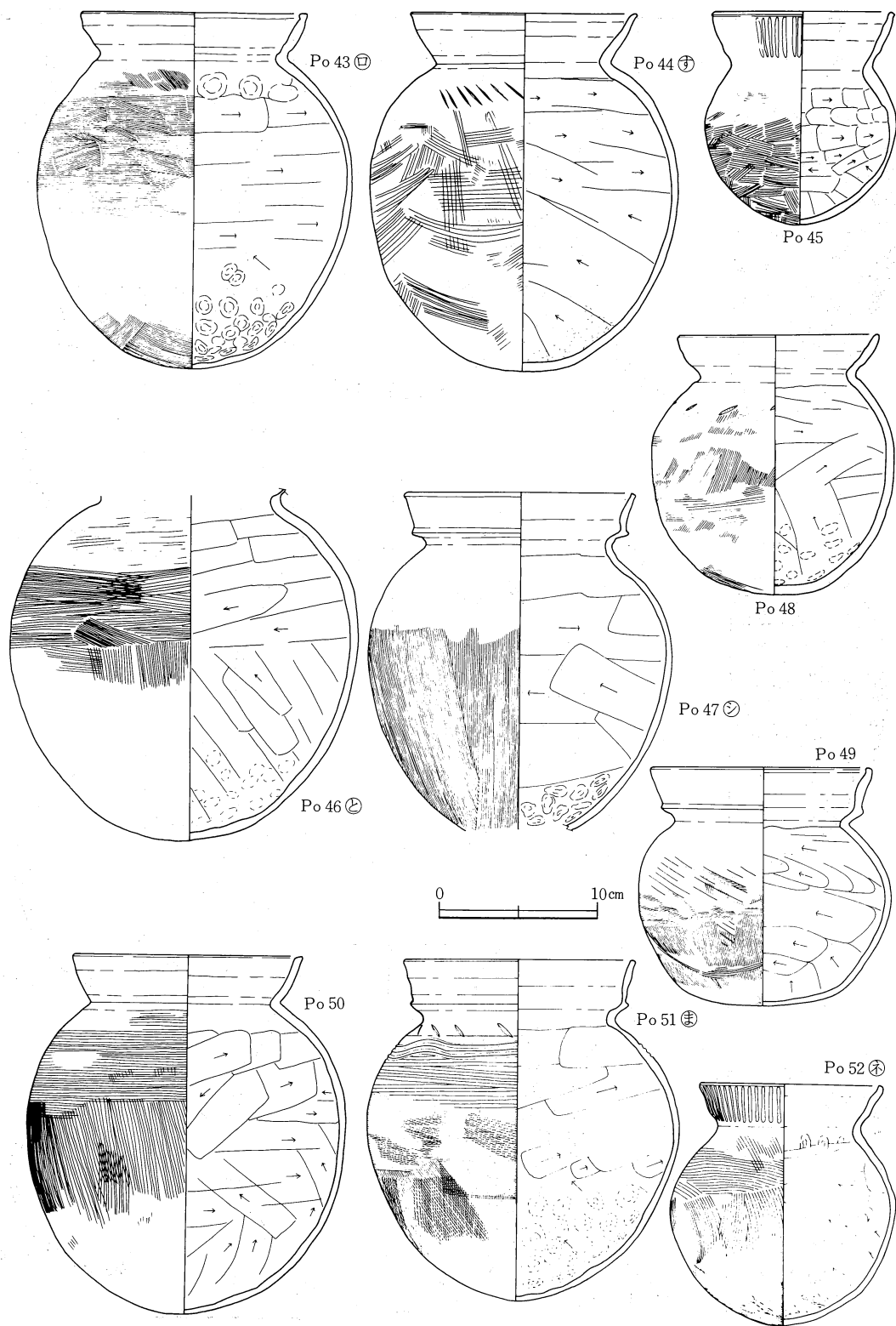
挿図 252 S E 03 遺物図その 4



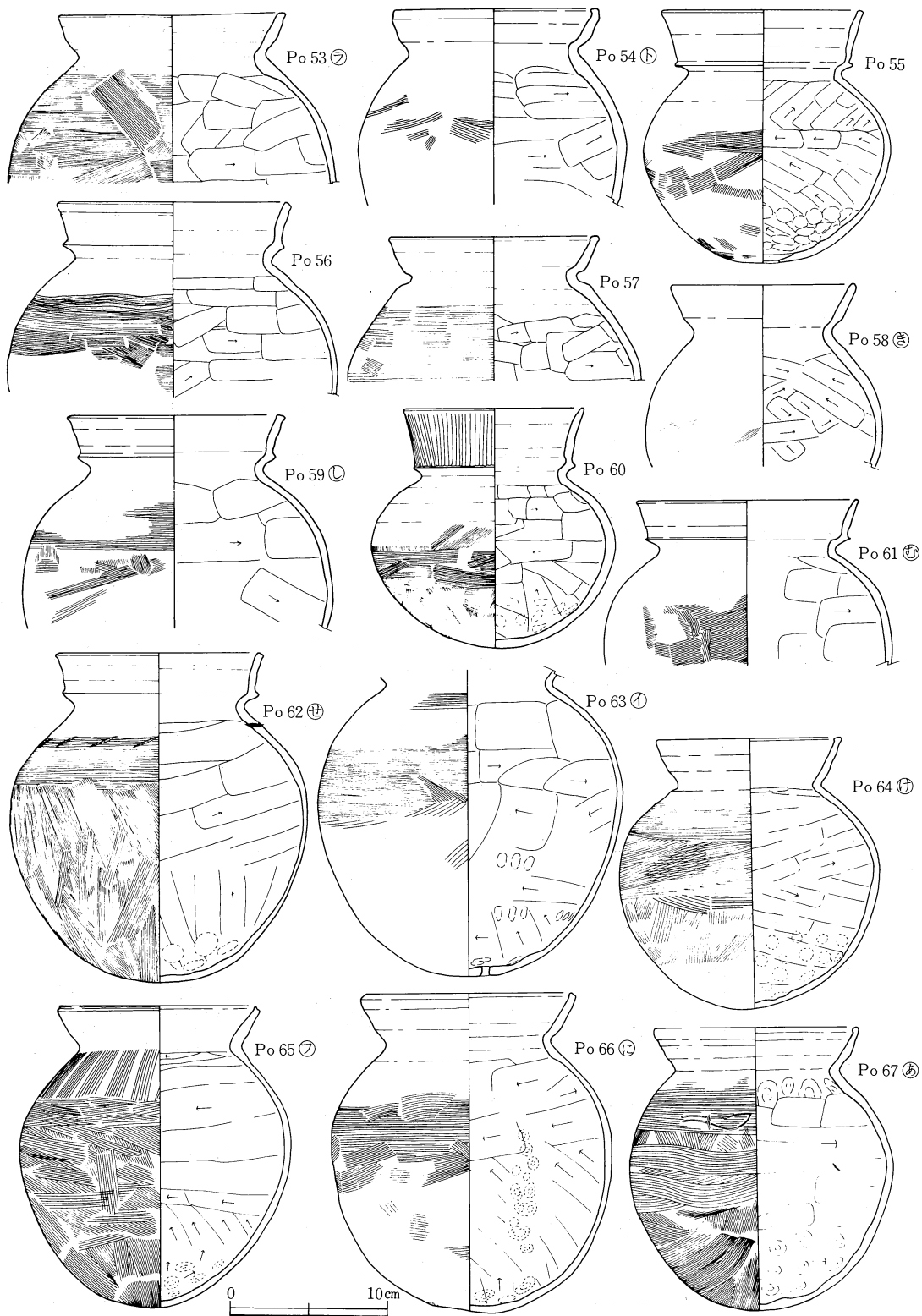
挿図 253 S E 03 遺物図その 5



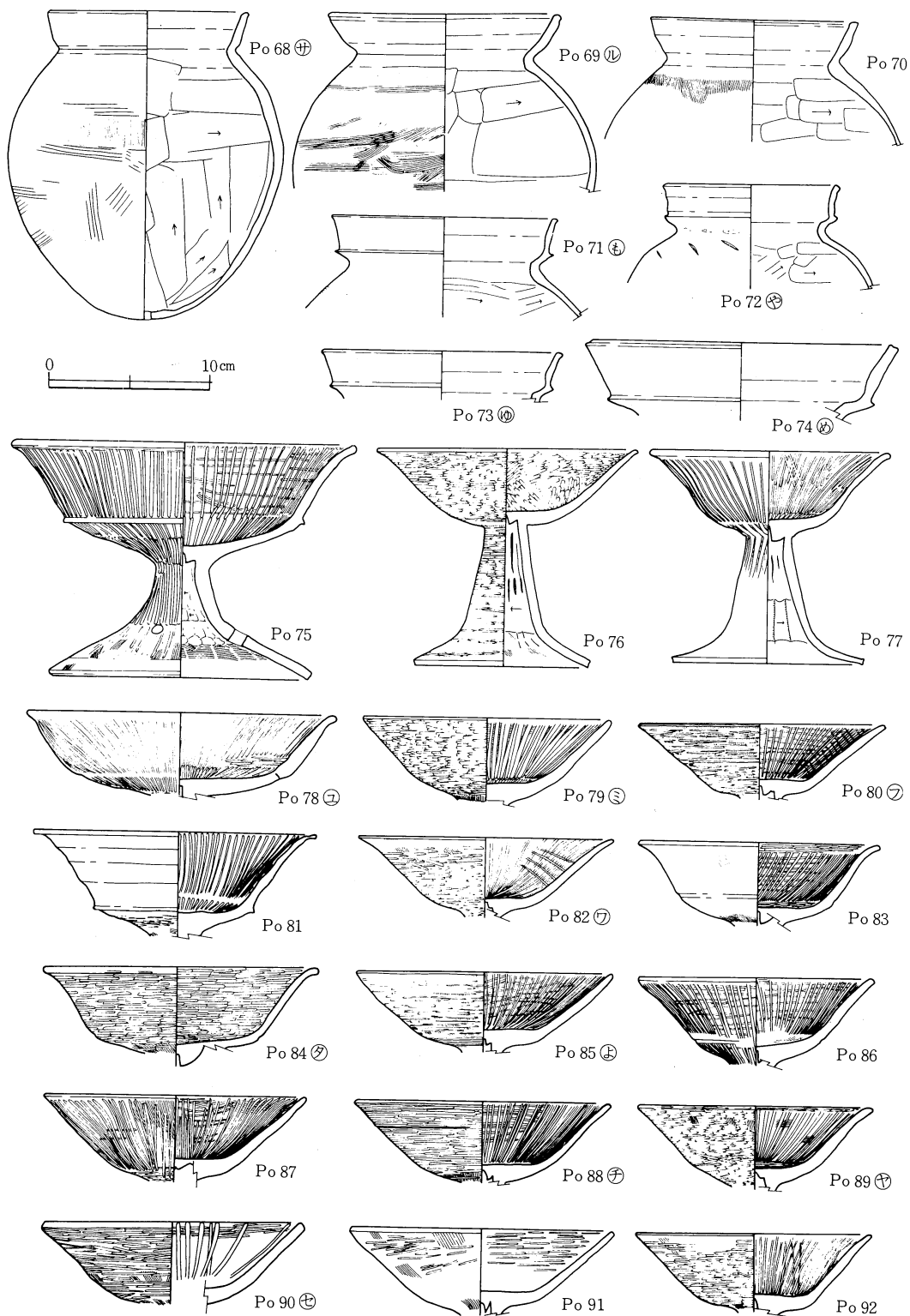
挿図 254 S E 03 遺物図その 6



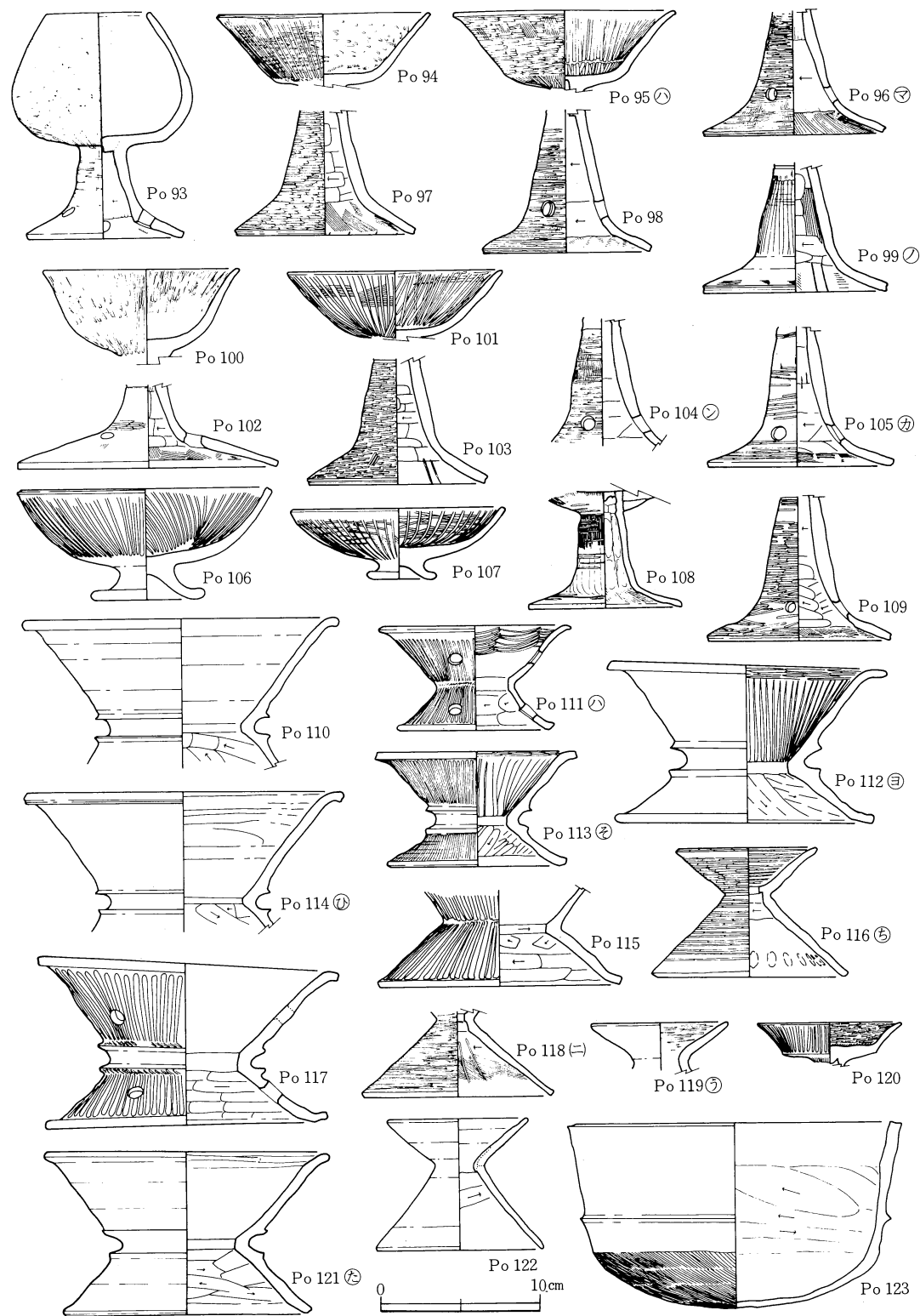
挿図 255 S E 03 遺物図その 7



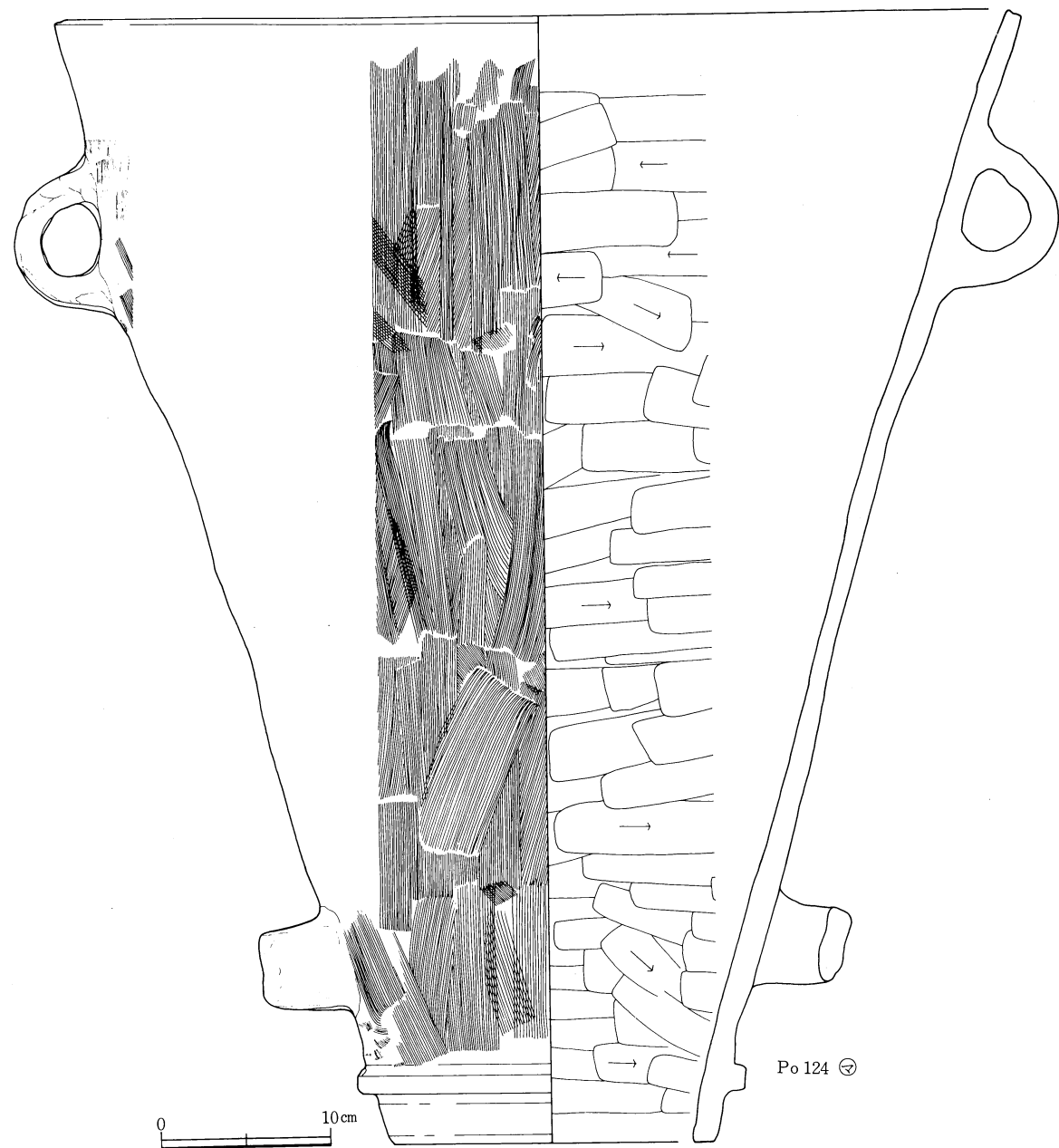
挿図 256 S E 03 遺物図その 8



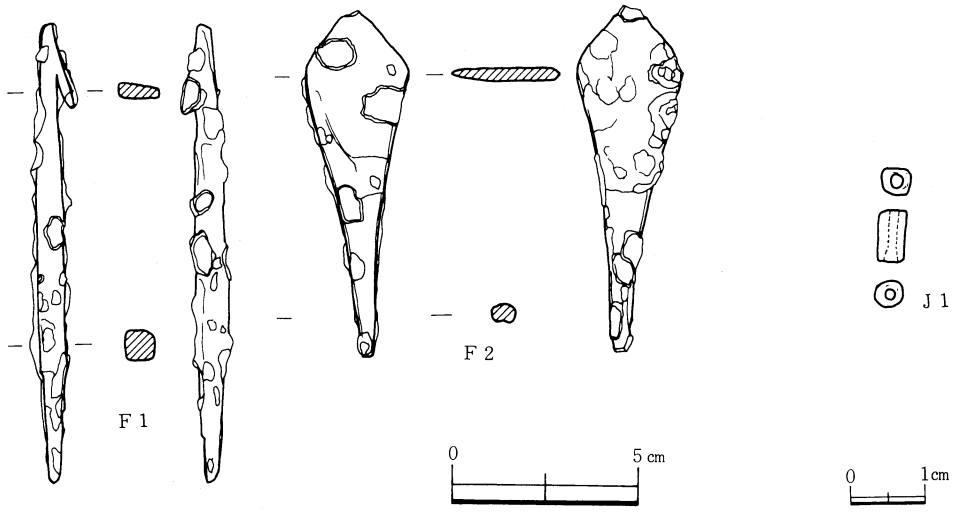
挿図 257 S E 03 遺物図その 9



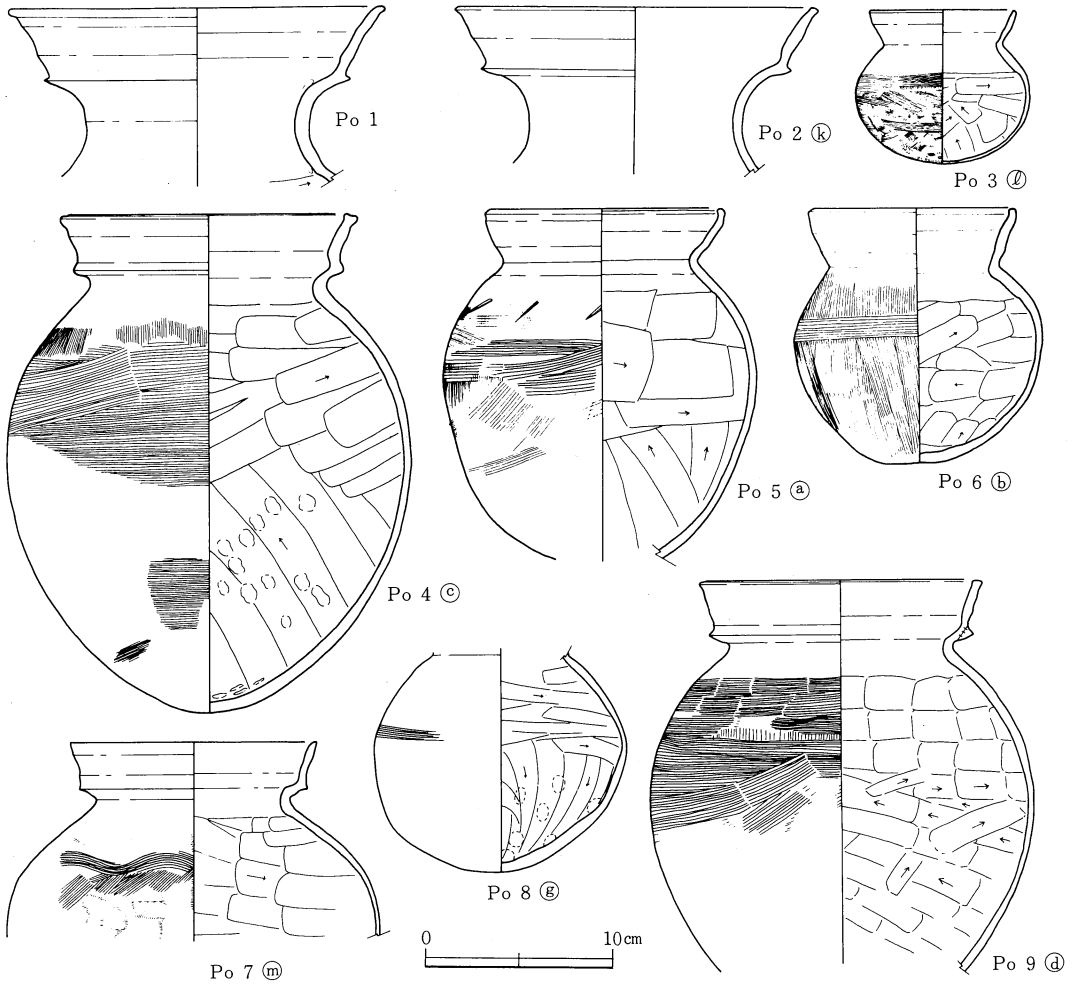
挿図 258 S E 03 遺物図その 10



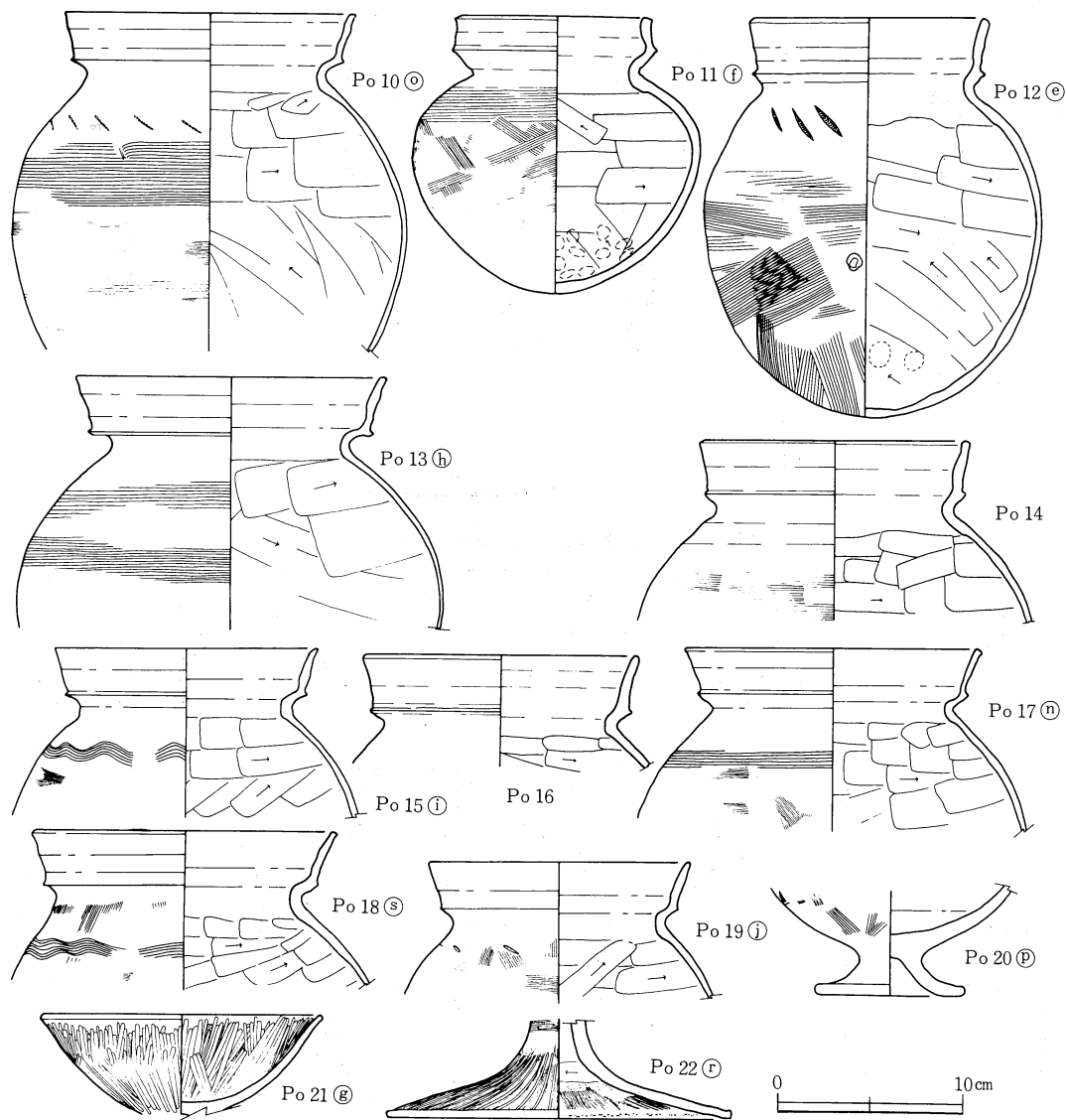
挿図 259 S E 03 遺物図その 11



挿図 260 S E 03 遺物図その 12



挿図 261 13 G S D 01 遺物図その 1

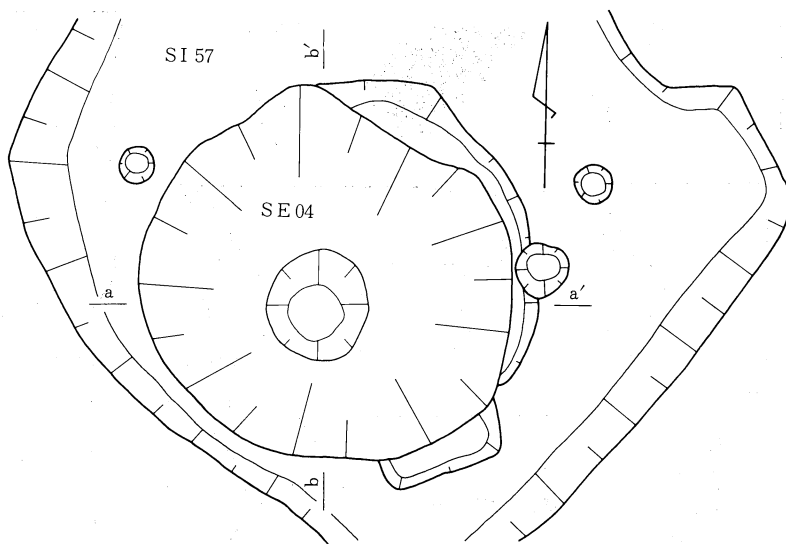


挿図 262 13 G S D 01 遺物図その 2

S E 04 (挿図263・264, 図版73・86)

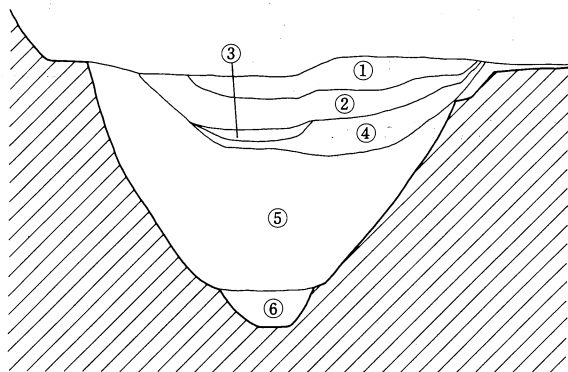
12F地区の南に位置し、S I 57と重複している。平面形は円形をなし、2段の掘り方をもつ。上縁部長軸4.0m, 短軸4.26m, 深さ2.02mを測る。すり鉢状にかなり急に掘りこまれ、北東側に高さ30cmの段を持つ。中央よりやや南西に寄ったところにピット(1.12×1.0×0.5m)を持つ。ピットの底面は土器片がならんでいた。あるいは、土器片を敷いて水をこすようにしたのだろうか。

時期は出土遺物から長瀬 I 期のものとする。



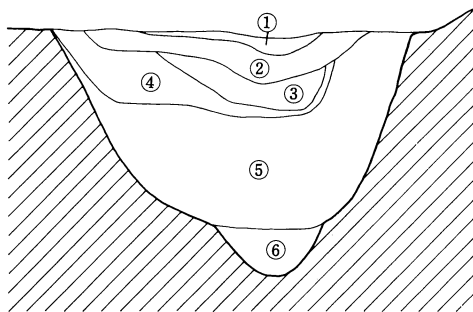
a L=4.50m

a'



b L=4.50m

b'



- ① 黒褐色砂
- ② 暗茶褐色砂
- ③ 茶灰色砂
- ④ 褐灰色砂
- ⑤ 黄灰色砂 (鉄分を含む)
- ⑥ 黒灰色粘質砂

0 2 m

挿図 263 S E 04 遺構図

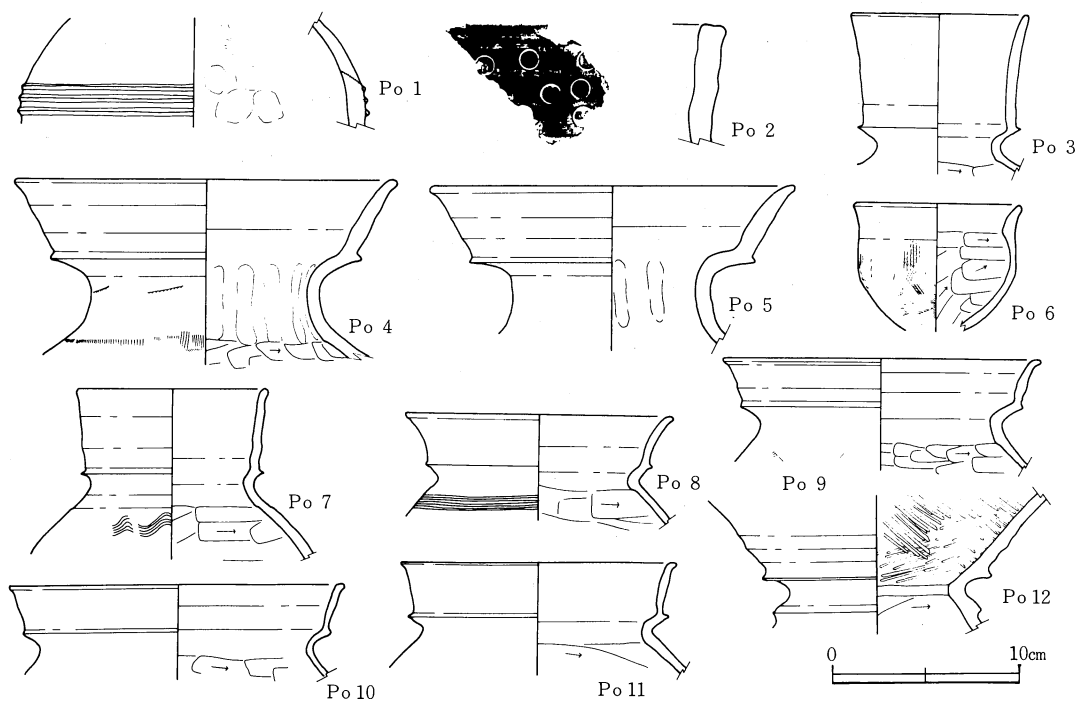


插图 264 S E 04 遺物図

第4節 墳 墓

54年度調査地区で検出された墳墓は、古墳時代のもの14基、飛鳥時代のもの9基の計23基を数える。古墳時代の墳墓の多くは、54年度調査地区の北側につくられ、飛鳥時代の墳墓はE・Dラインに集中する。

1 3号墳 (S X03) (挿図265～279, 図版87～90・101～104)

12H地区全域、一部11H地区に位置し、西側には4号墳が隣接する。円形で径20m、周溝総計26m、周溝幅は最大で4.75m、周溝底面からの高さ1.75mを測る。埋葬施設は墳丘上で3基、周溝内で3基の計6基をもつ。特に周溝の南西側からは須恵器壺(P○24)、須恵器無蓋高杯(P○26)の他、甕(P○6, 7, 8, 9)4個体、土師器高杯(P○10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23)14個体の供献土器の検出があった。特にP○6の甕の中には赤色顔料の付着がみられることから、供献された時には赤色顔料が入っていた可能性も考えられる。

(1) 第1埋葬施設 (挿図271, 図版87・104)

主軸をN-100°-Eにとる石立て木棺墓で、長辺2.5m、短辺0.85mを測り、両側に石を立てたと思われる掘り方を検出した。掘り方内には石が散乱しており、赤色顔料の塗彩がみられるものも多数あった。木棺部と考えられる場所には木質の痕跡は認められなかった。散乱した石の上などから鉄製品(F1～F6)、壮年前半の人骨^{#1}を検出した。この第1埋葬は第2埋葬を切って造られており、第2埋葬施設より新しい時期の築造と考えられる。

(2) 第2埋葬施設 (挿図265・272, 図版88・101)

墳丘中央部に設けられた箱式石棺で、主軸をN-56°-Eにとる。暗茶褐色の黒砂地盤を長辺4.22m、短辺2.24m、深さ0.8mほど掘り込んだ墓壇内に、長辺1.72m、短辺0.54m、床面の深さ0.74mを測る石棺が作られていた。北側の側壁には裏ごめ用の石材が使われ、南側の側壁は2枚の板石を利用してあった。小口石は東側で数枚重ねて使われ、西側では1枚の石が利用してあった。石材の周囲、隙間には粘土で目張りを施し堅牢にしている。棺内では床面に暗灰色砂を敷き、赤色顔料が四面に塗ってあった。棺内には副葬品はなかったが、東側に高杯2個(P○1, 2)を用いて土器枕としていた。この他棺内からは頭骨の一部を検出したが、鑑定の結果、壮年女性とみられる^{#2}。

(3) 第3埋葬施設 (挿図265・273, 図版88・89・101・104)

墳丘中央部からやや北東にはずれて位置し、主軸をN-70°-Eにとる。長辺3.42m、短辺2.24m、深さ0.25mの墓壇内中央に長辺1.42m、短辺0.5m、深さ0.46mの箱式石棺が安置してあった。蓋石は数枚重ね合わせ、その隙間は丁寧な目ばりがしてあった。棺の北側の側壁は1枚の板石、南側の側壁は3枚の板石が利用してあり、東西の小口には2枚の板石が使ってあった。いずれの隙間にも蓋石同様丁寧な粘土の目ばりがみられた。棺内四面

には赤色顔料の塗彩がみられる。棺内副葬品は、水晶製勾玉1個、碧色ガラス玉13個（J2～14）が頸骨付近と思われるところから出土している。第2埋葬施設同様、高杯を3個（P03～5）利用して枕がつくられていた。人骨は3号墳埋葬施設の中でも残りが良く、全身各部分の骨が検出でき、鑑定によれば被葬者は9～10歳と推定されている^{※3}。

(4) 第4埋葬施設（挿図274，図版89）

小型の箱式石棺で、周溝の南側肩部に位置し、主軸をN-20°-Wにとる。石棺の北側の小口石が崩れ、蓋石が周溝内に流れ込んでいたため石棺の大きさははっきりしないが、長辺1.5m、短辺0.8m、深さ0.5mの墓壇内に長辺0.8m（推測）、短辺0.24m、深さ0.2mの石棺をもつ。棺内四面には赤色顔料の塗彩がみられた。棺内副葬品、人骨などの検出はみられなかった。

(5) 第5埋葬施設（挿図275，図版89）

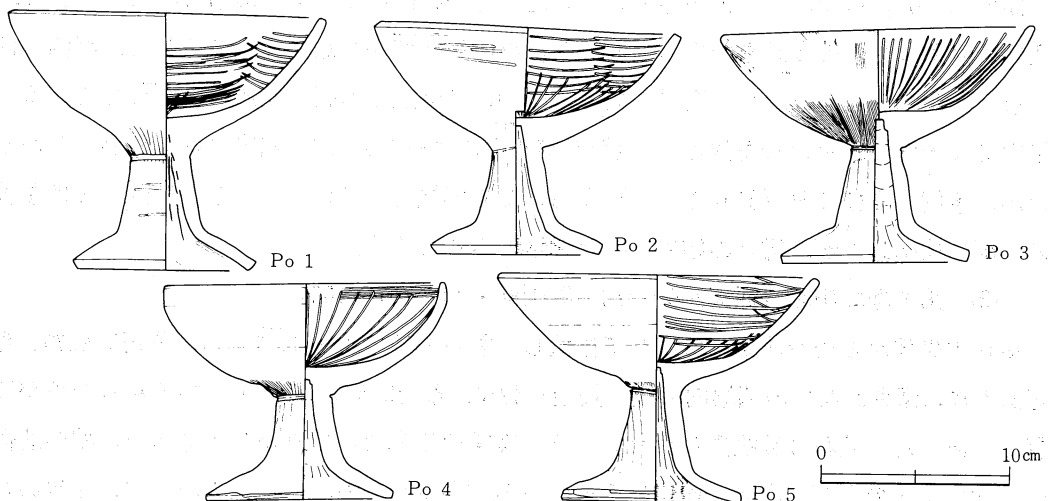
木棺墓で周溝の西側に位置し、主軸をN-64°-Eにとる。長辺1.7m、短辺0.97m、深さ0.5mの褐灰色砂の墓壇内に長辺10.8m、短辺0.35m、深さ0.13mの木棺部をもつ。木棺部からは副葬品、人骨などの検出はなかった。

(6) 第6埋葬施設（挿図276，図版90）

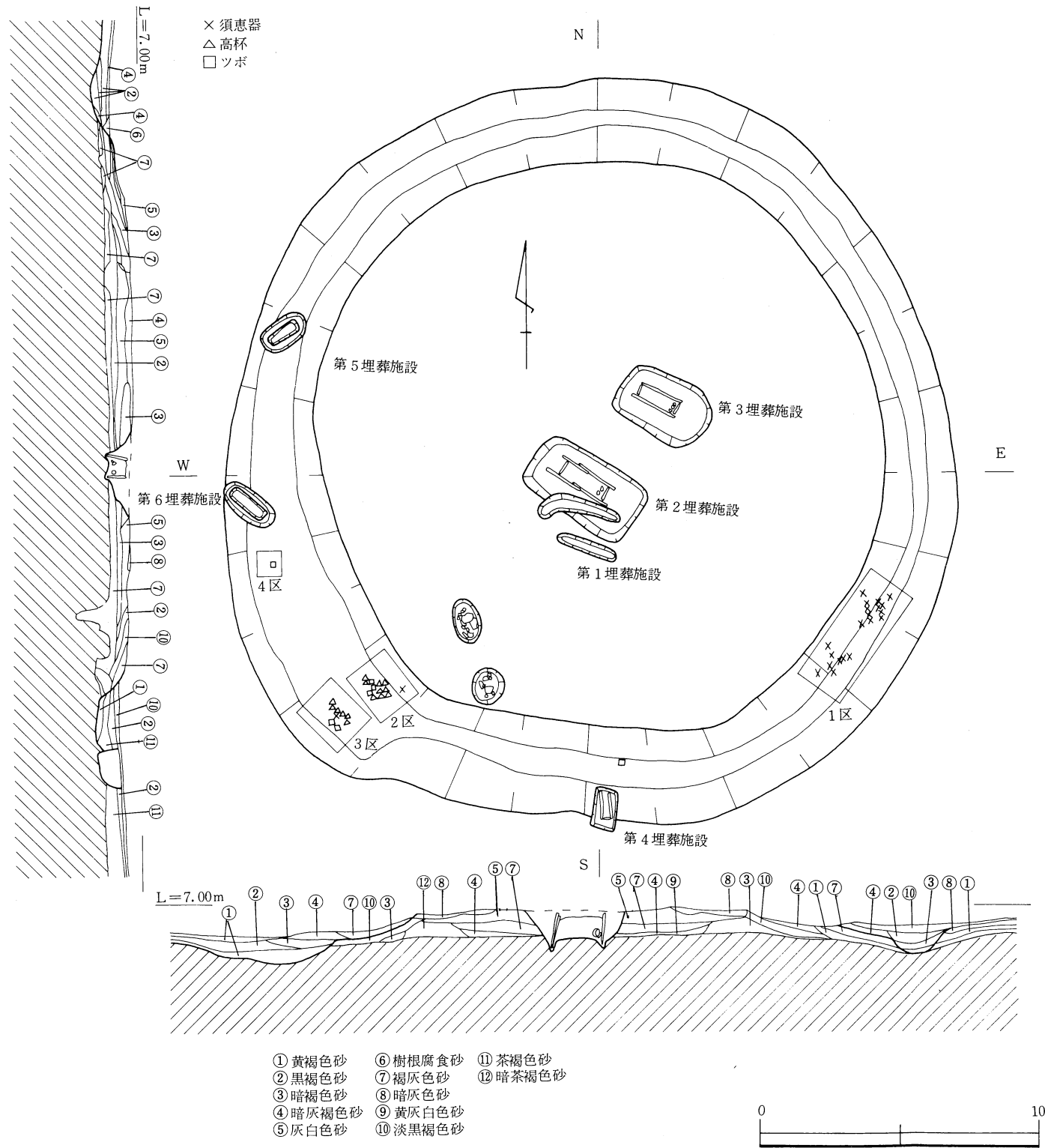
第5埋葬施設の南側にある木棺墓で、4号墳と3号墳の周溝が切り合う場所に位置する。主軸をN-52°-Wにとる長辺2.04m、短辺1.0m、深さ0.5mの墓壇内に長辺1.43m、短辺0.39m、深さ0.22mの棺内には副葬品はなく、東側から歯片がわずかに検出された。

3号墳の埋葬施設は、第1と第2の切り合い関係がわかるだけであるが、他の埋葬施設もそれらと時期を隔てない程度の時期に、次々と作られたと考えられる。

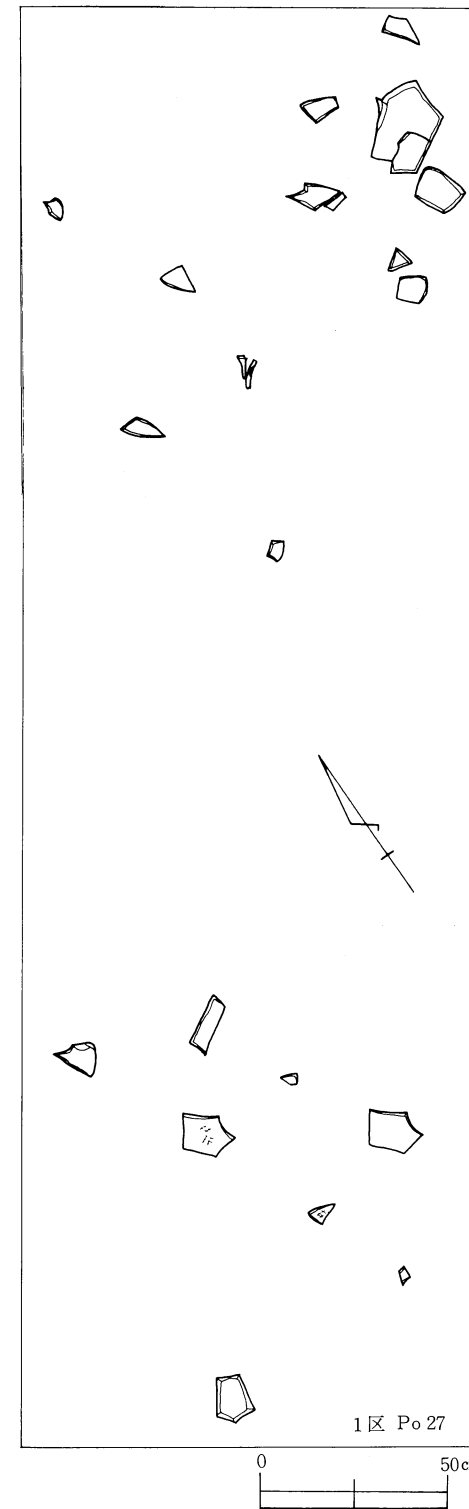
これら出土遺物から、3号墳築造時期は古墳時代中期の中頃と考えられる。



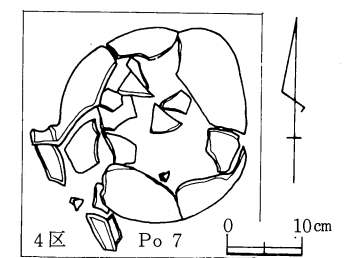
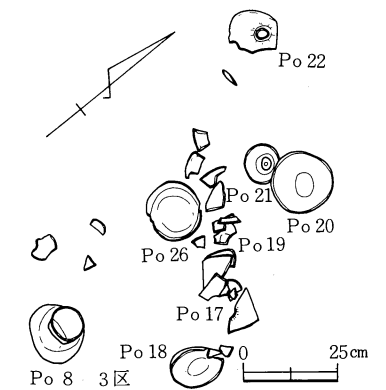
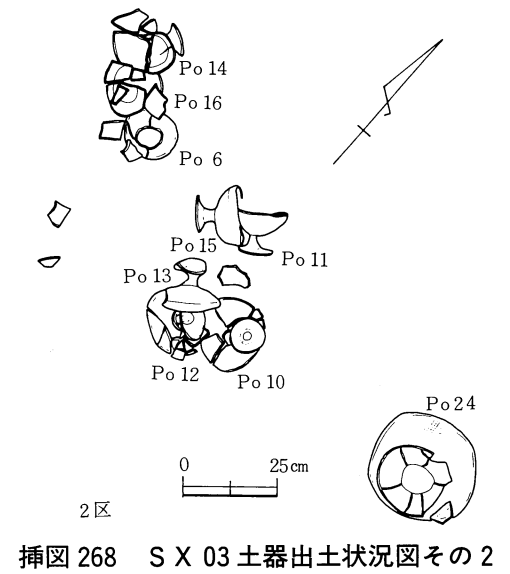
挿図 265 S X 03 遺物図その1

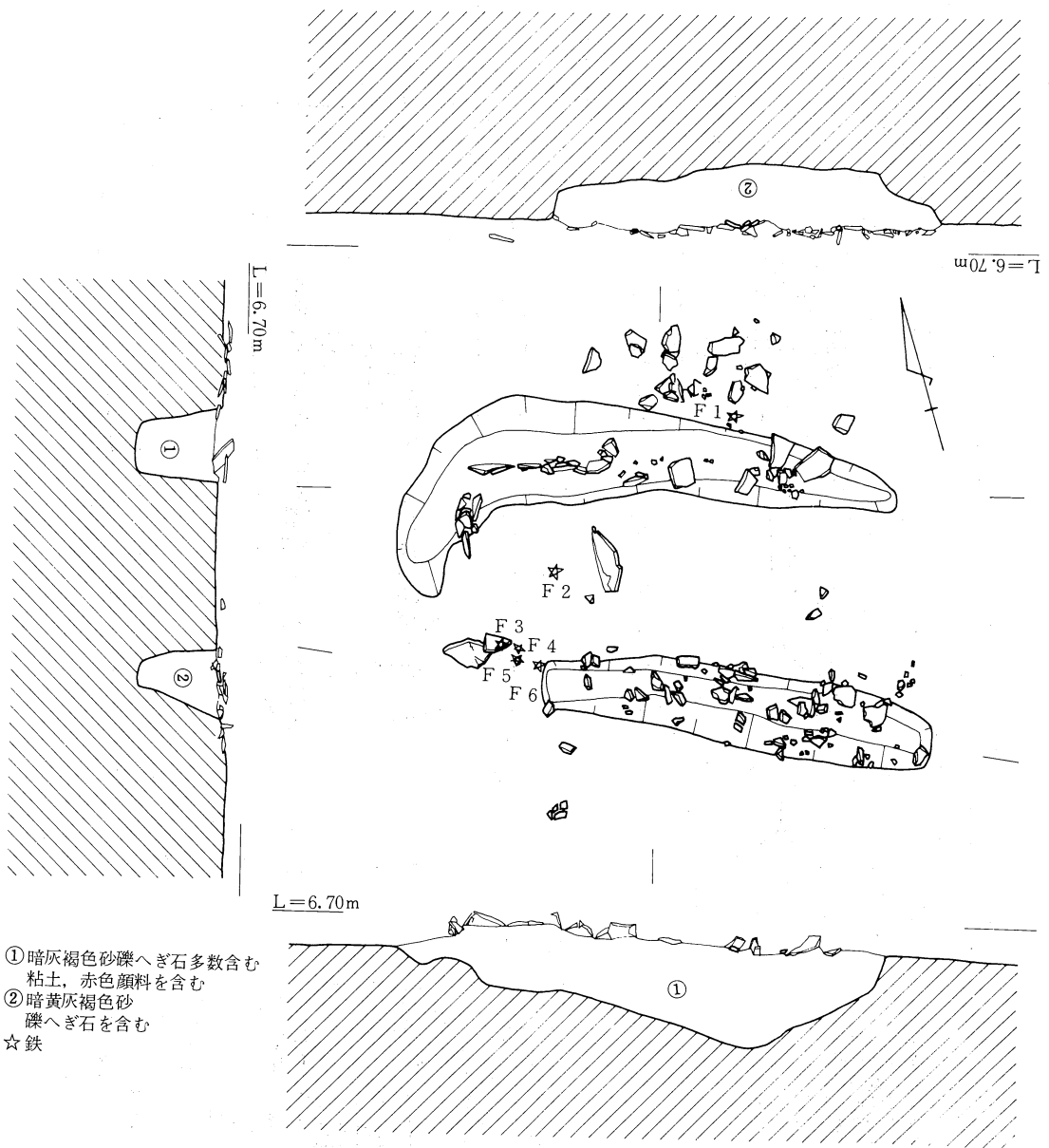


挿図 266 S X 03 遺構図

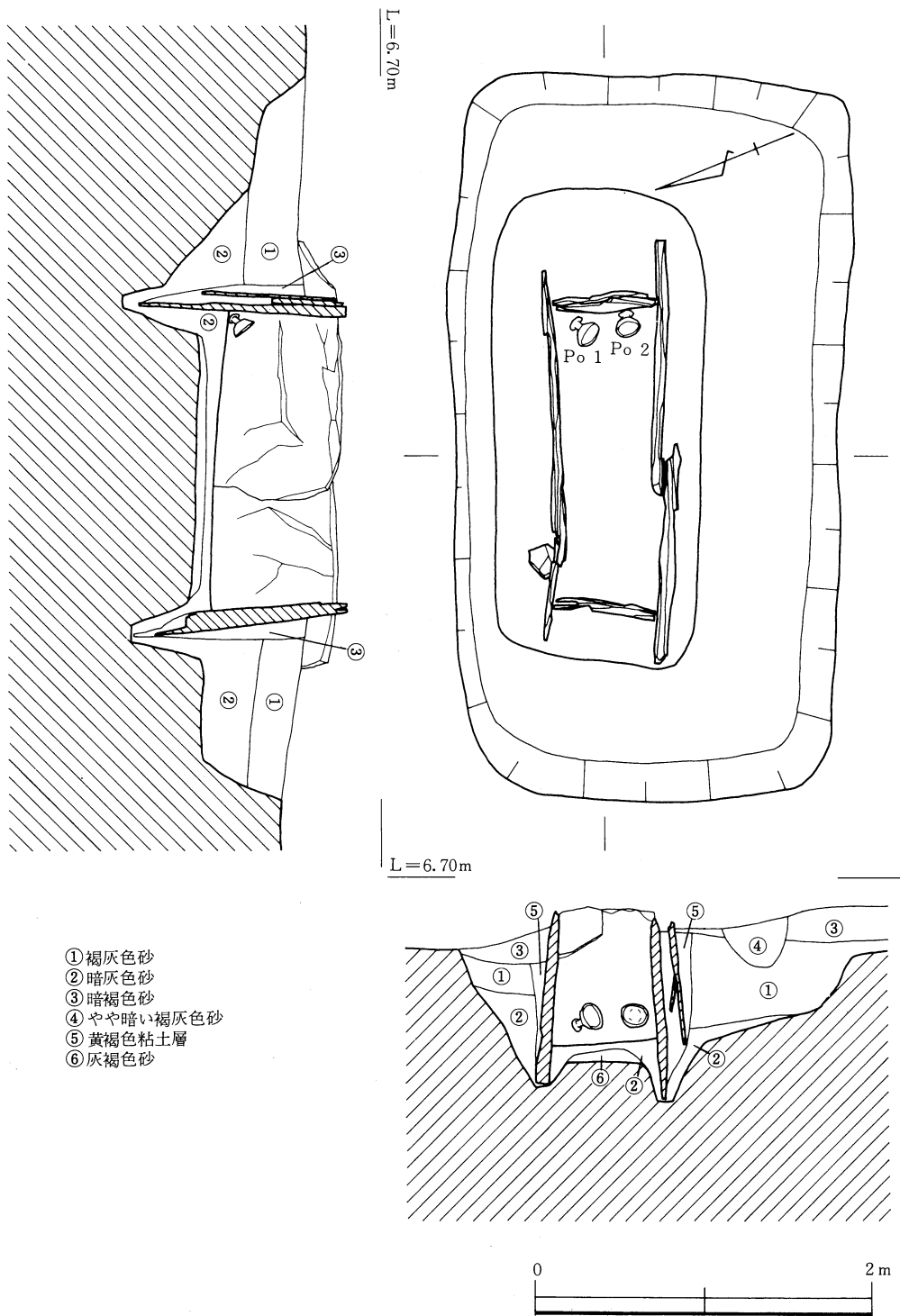


挿図 267 S X 03 土器出土状況図その 1

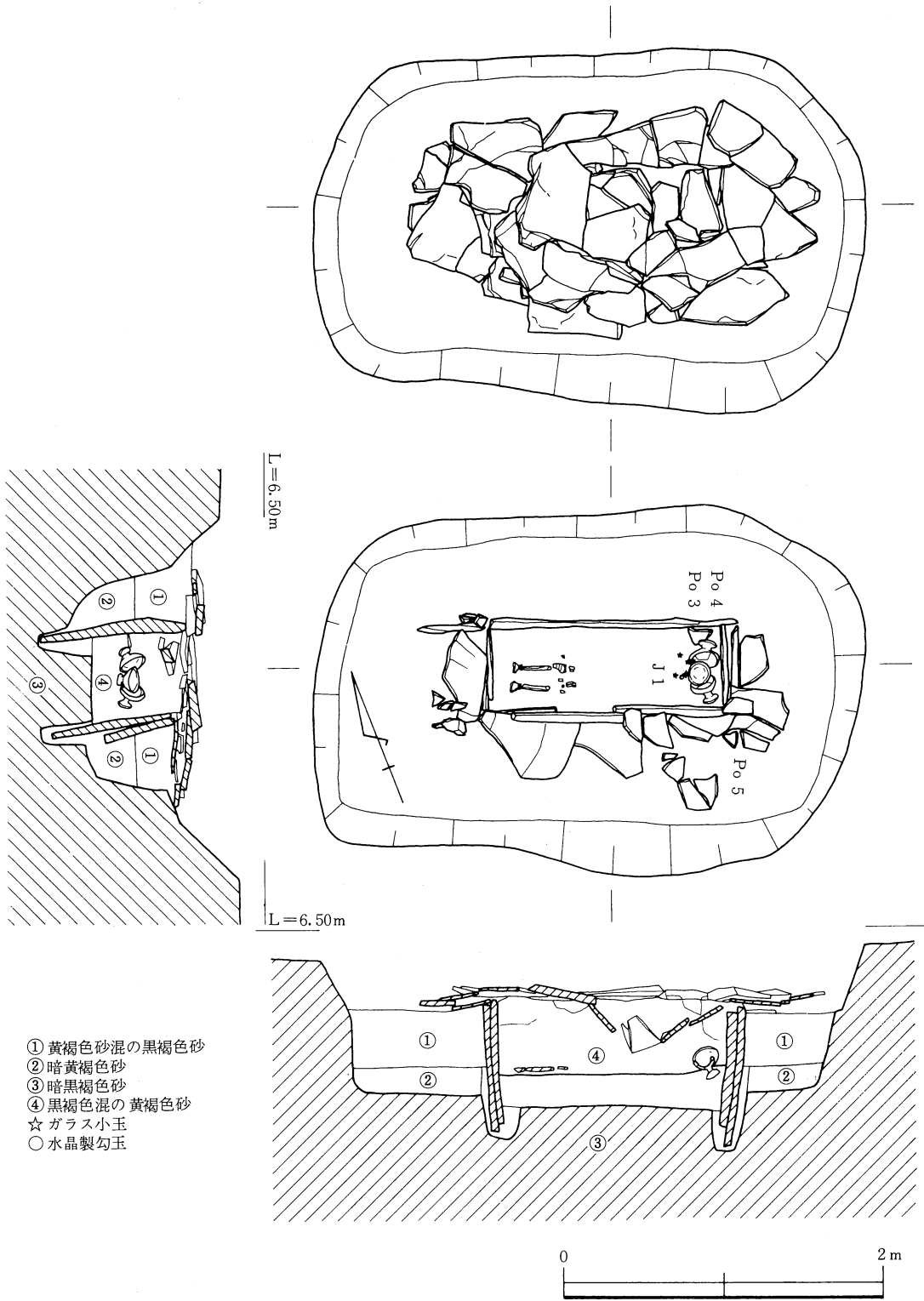




挿図 271 S X 03 第 1 埋葬施設遺構図

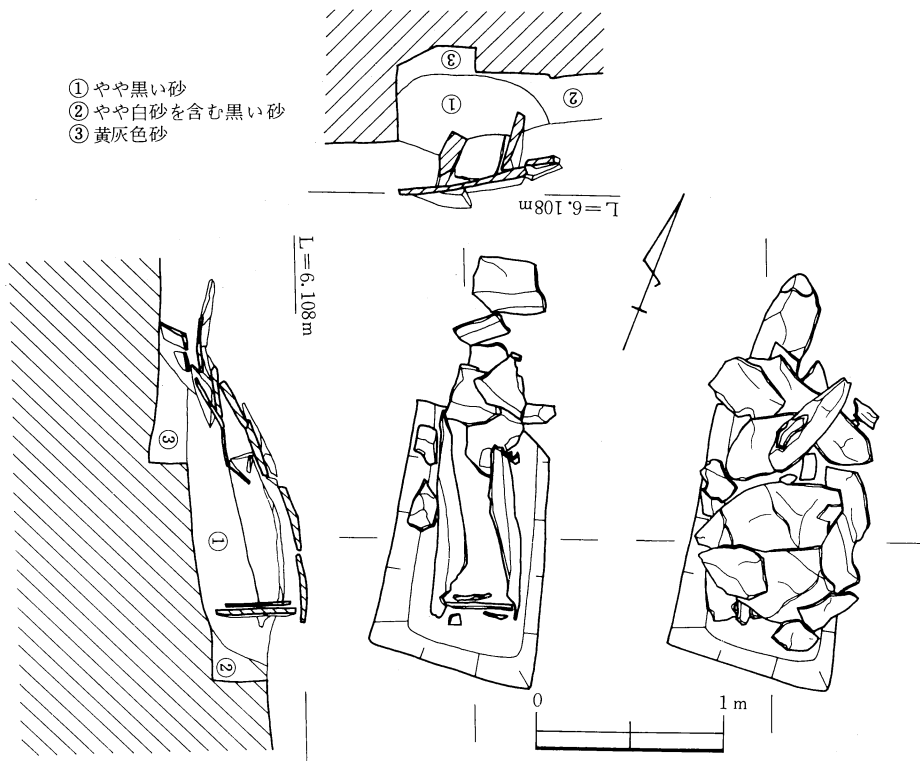


挿図 272 S X 03 第 2 埋葬施設遺構図

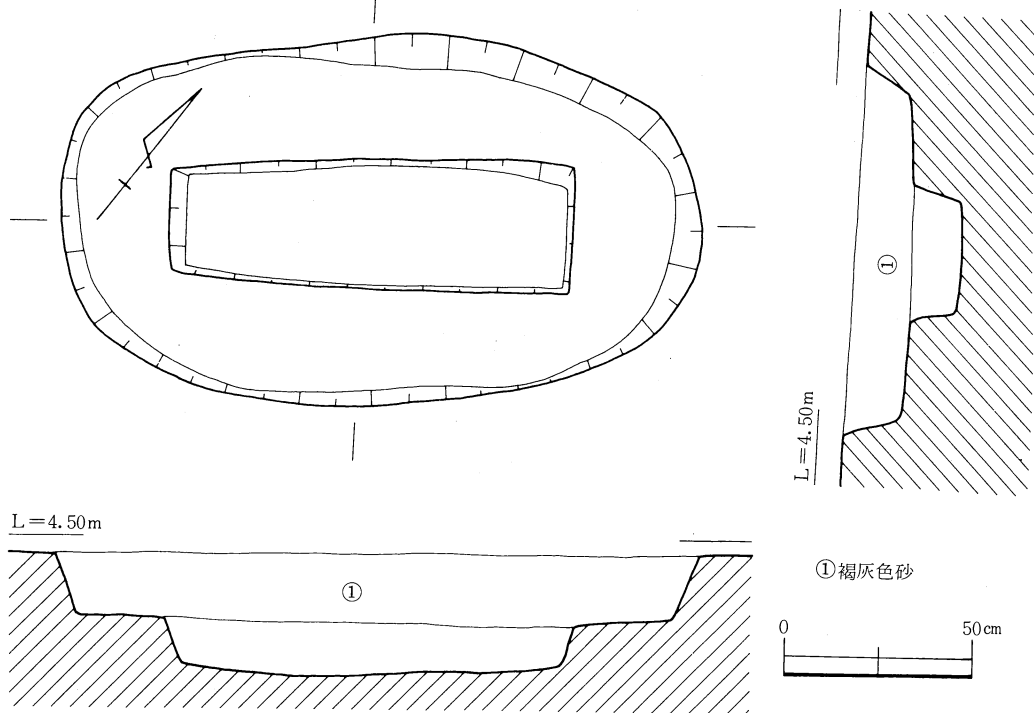


- ① 黄褐色砂混の黒褐色砂
- ② 暗黄褐色砂
- ③ 暗黒褐色砂
- ④ 黒褐色混の黄褐色砂
- ☆ ガラス小玉
- 水晶製勾玉

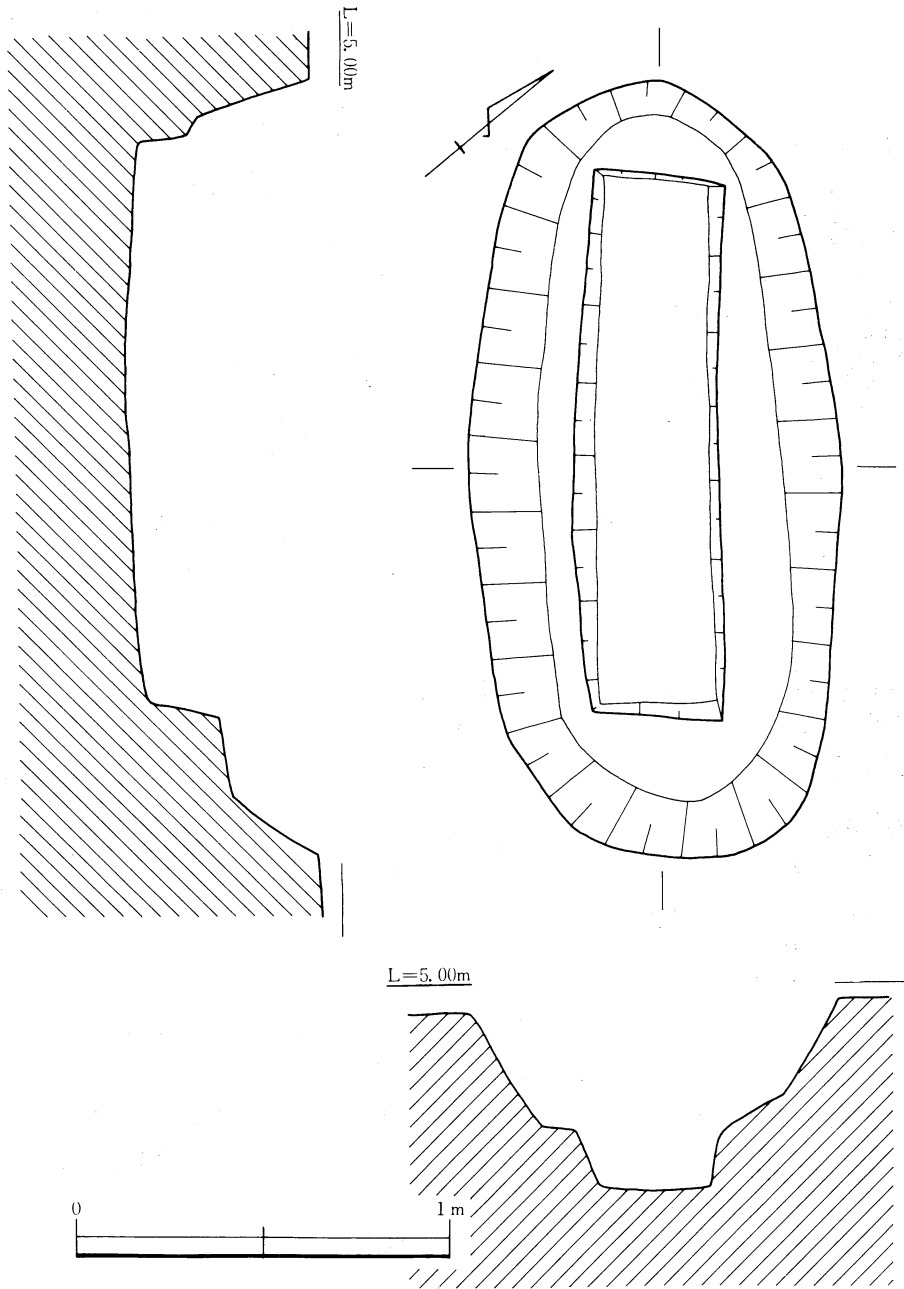
挿図 273 S X 03 第 3 埋葬施設遺構図



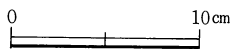
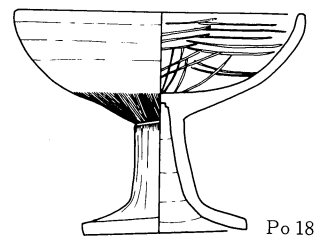
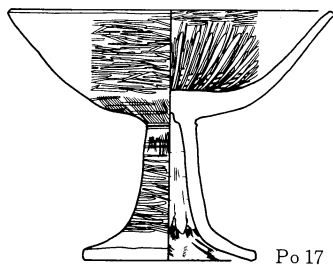
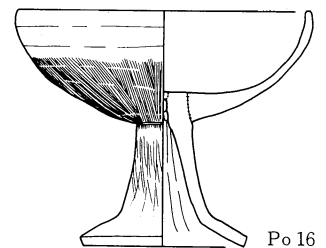
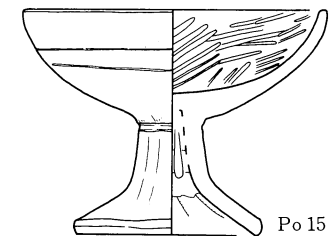
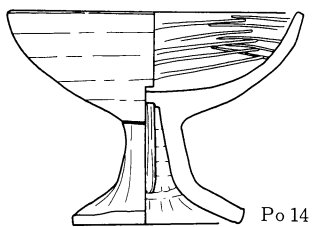
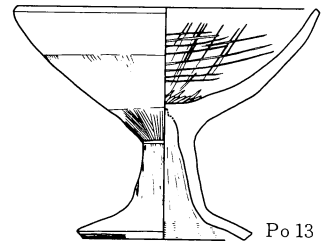
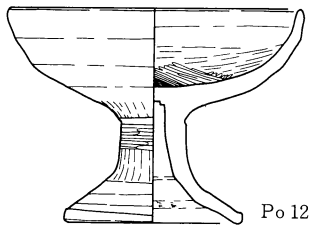
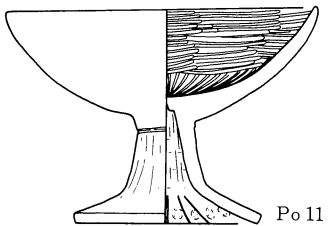
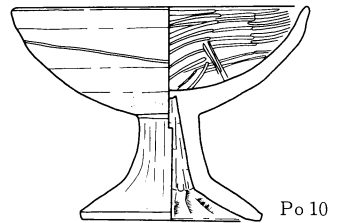
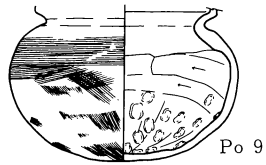
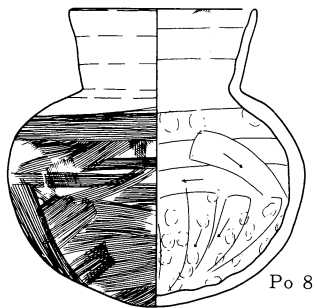
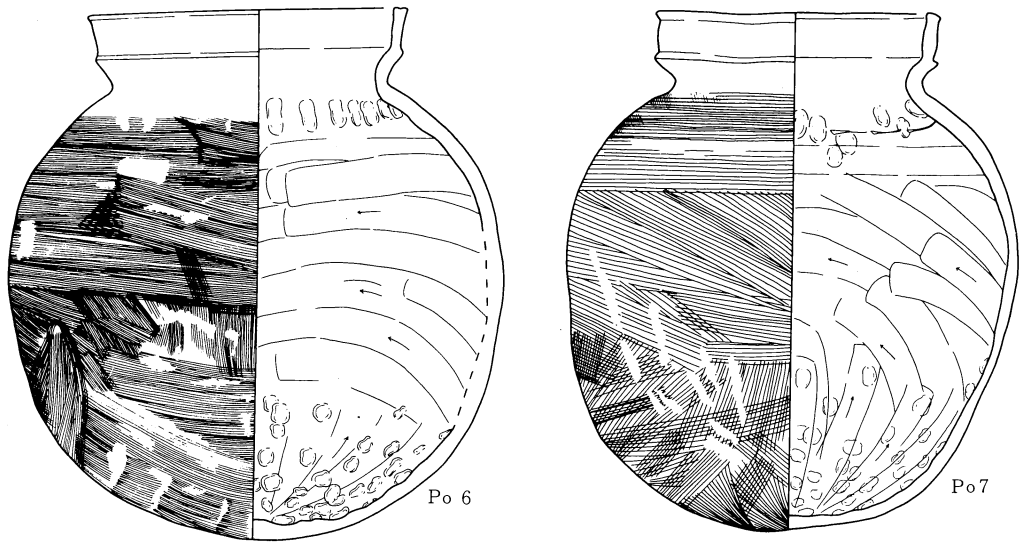
挿図 274 S X 03 第 4 埋葬施設遺構図



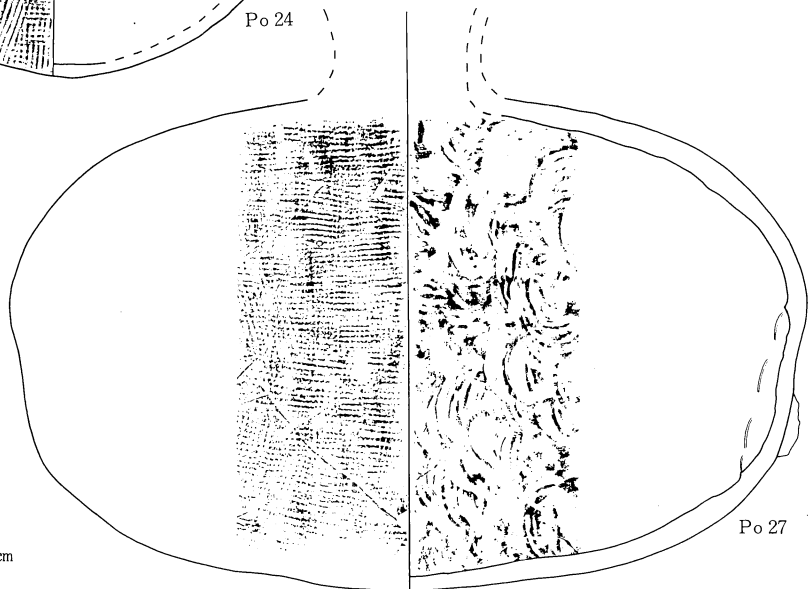
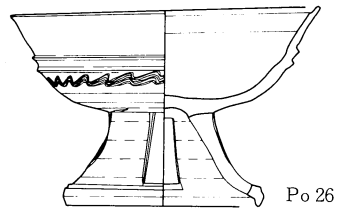
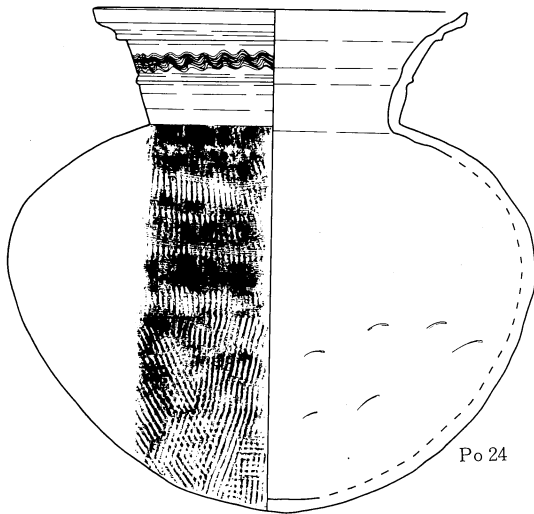
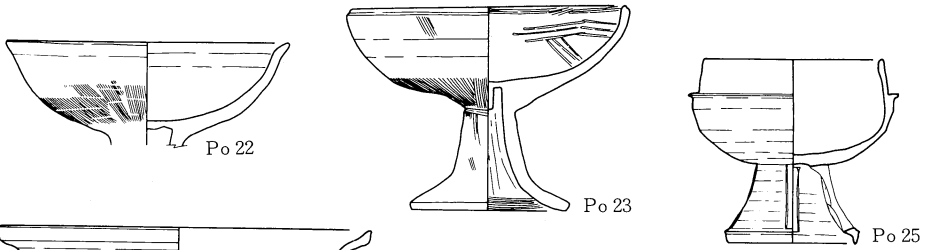
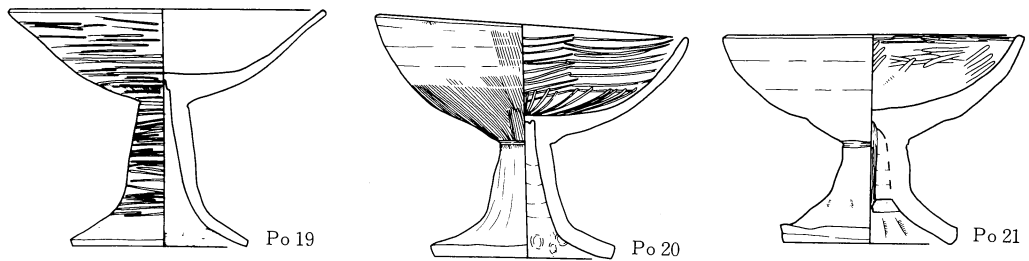
挿図 275 S X 03 第 5 埋葬施設遺構図



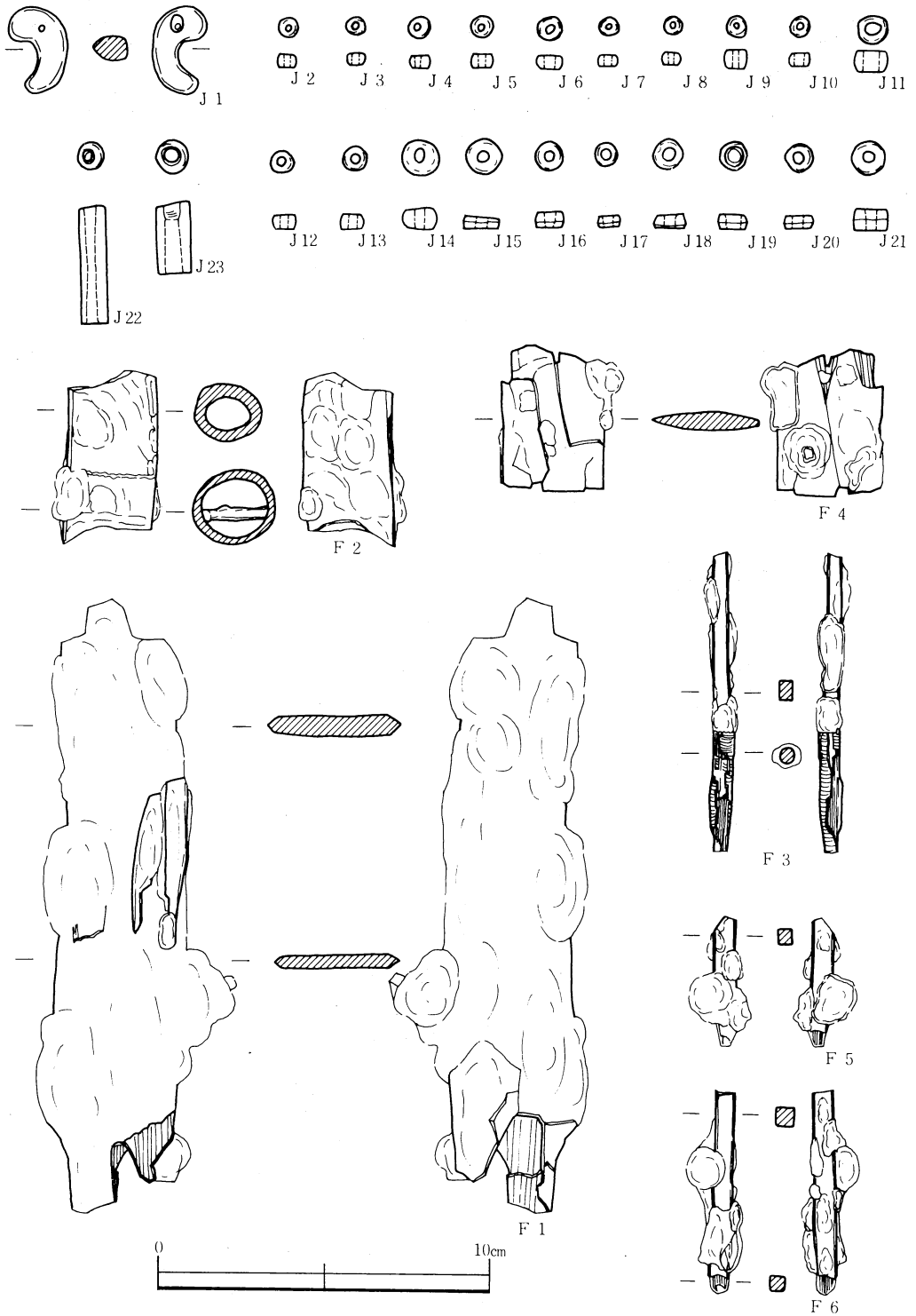
挿図 276 S X 03 第 6 埋葬施設遺構図



挿図 277 S X 03 遺物図その 2



挿図 278 S X 03 遺物図その 3



挿図 279 S X 03 遺物図その 4

2 4号墳(SX04)(挿図280~293, 図版90~92・104~105)

13H地区に位置し、北に10号墳、東に3号墳がある。円形で径15.2m、周溝総計21.4mである。周溝は幅3~4m、深さ0.75mのU字溝で東側で3号墳と切りあっている。埋葬施設は墳丘内に2基、周溝内に3基の計5基をもつ。また馬の歯も検出された。

(1) 第1埋葬施設(挿図281・284・285, 図版90・105)

主軸をN-56°-Wにとり長辺4.48m、短辺1.0m、深さ0.13mの細長い土壇墓である。土壇内は明灰褐色砂で埋められていた。北西、南東の両隅には板石を組み合わせたV字状石枕をもつ。南側の南東枕より鹿角装直刀1振(長さ73cm、幅3.2cm、鹿角部分は長さ3cm、幅5cmを測り、鞘や柄の部分には木質部が残っている。又柄には目釘穴が2カ所みられる)、鉋1本(長さ16.8cm、幅0.9cmの完形品)があった。北西枕付近には、針状鉄器が残っており、釣針の腰の部分かと思われる。人骨は南東枕付近で少量検出できた。

(2) 第2埋葬施設(挿図282, 図版91)

長軸1.75m、短軸1.2mの土壇であるが、埋葬施設ではない可能性も強い。

(3) 第3埋葬施設(挿図283・286, 図版91・104・105)

周溝南東の底面にある木棺墓である。主軸をN-59°-Eにとり、黄褐色砂を長辺3.46m、短辺0.9m、深さ0.12m掘り込んだ土壇に、長辺1.84m、短辺0.54m、深さ0.08mの浅い木棺部をもつ。棺内北側に高杯3個(P05~7)が一行に並ぶ状態で、西側には長頸壺(P010)が、南側には大型高杯(P08)、高杯(P09)が副葬されていた。一行に並ぶ3個の高杯のうち2個は裾部が欠けていた。

(4) 第4埋葬施設(挿図287・288, 図版91・104)

小型の箱式石棺で、周溝の南側の肩に設けられている。主軸はN-16°-Eをはかり長辺1.4m、短辺1.26m、深さ0.5mの墓壇内に、長辺0.66m、北側の東西0.22m、南側の東西0.24m、床面まで0.2mを測る。棺内からは骨・歯の出土もみられた。又2枚の板石で作られたV字状の石枕をもつ。棺内には副葬品はみられなかったが、石棺の掘り方の肩上面から供献土器と思われる甕(P03)1個を検出した。甕の外面肩部には朱らしい赤い斑点状のものが残る。

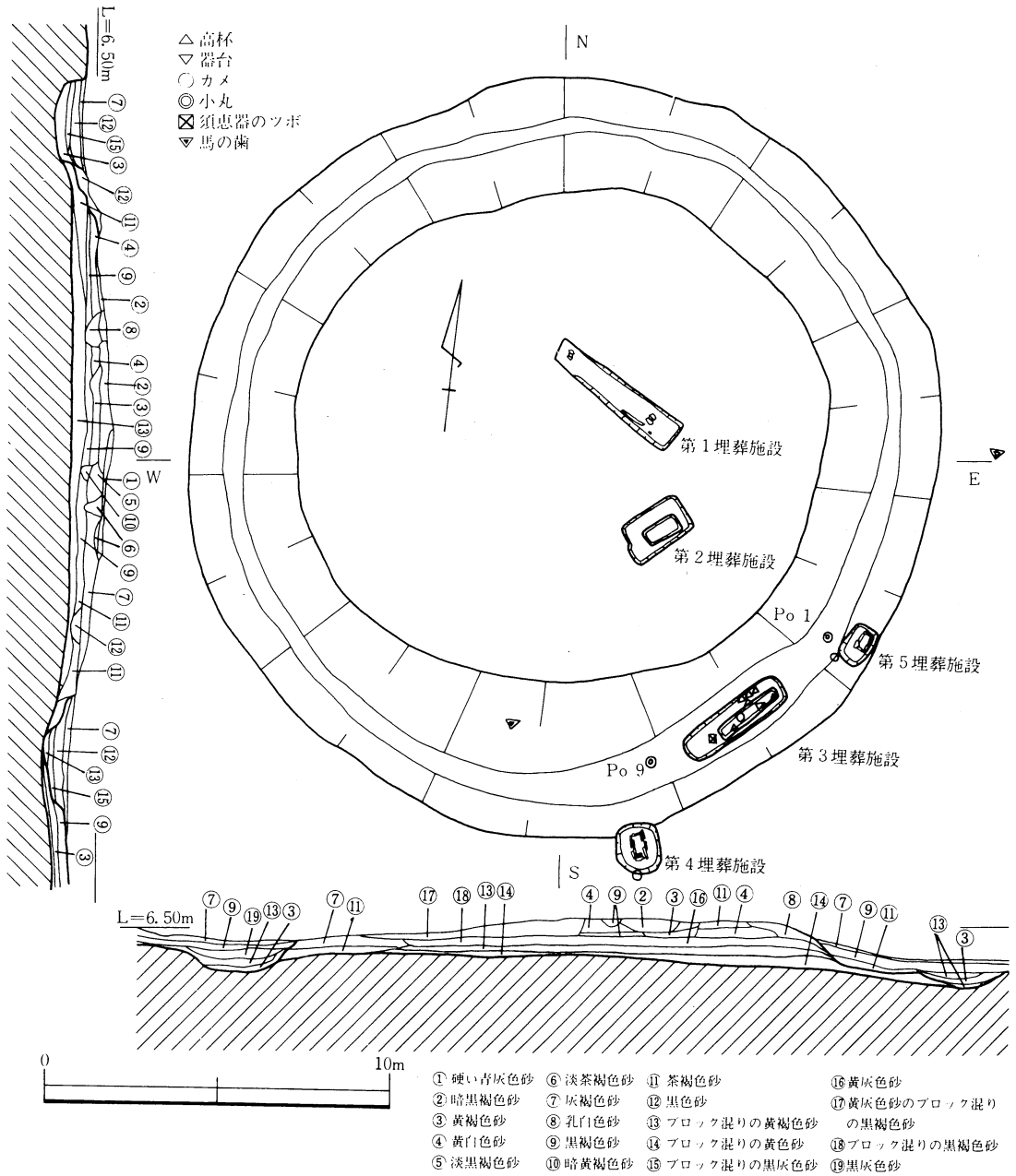
(5) 第5埋葬施設(挿図289・291, 図版91・92・104)

第3埋葬施設の北に在り、小型の箱式石棺で主軸をN-39°-Eにとる。長辺1.3m、短辺0.73m、深さ0.27mの墓壇内に、長辺0.44m、短辺0.2m、床面までの深さ0.18mを測る。棺内からの副葬品はみられなかったが、石棺の掘り方肩部上面から、供献土器と思われる甕(P02)1個を検出した。

この他、周溝内からは銅鏃(B1^{※4})1本、鉄製品11本などの出土があった。又4号墳に設けられた埋葬施設のうち、第1と第3埋葬の築造時期は不明であるが、ほぼ同じような

時期に作られたものと思われる。

これらの出土遺物から、4号墳築造時期は古墳時代中期の中頃と考えられる。



挿図 280 S X 04 遺構図

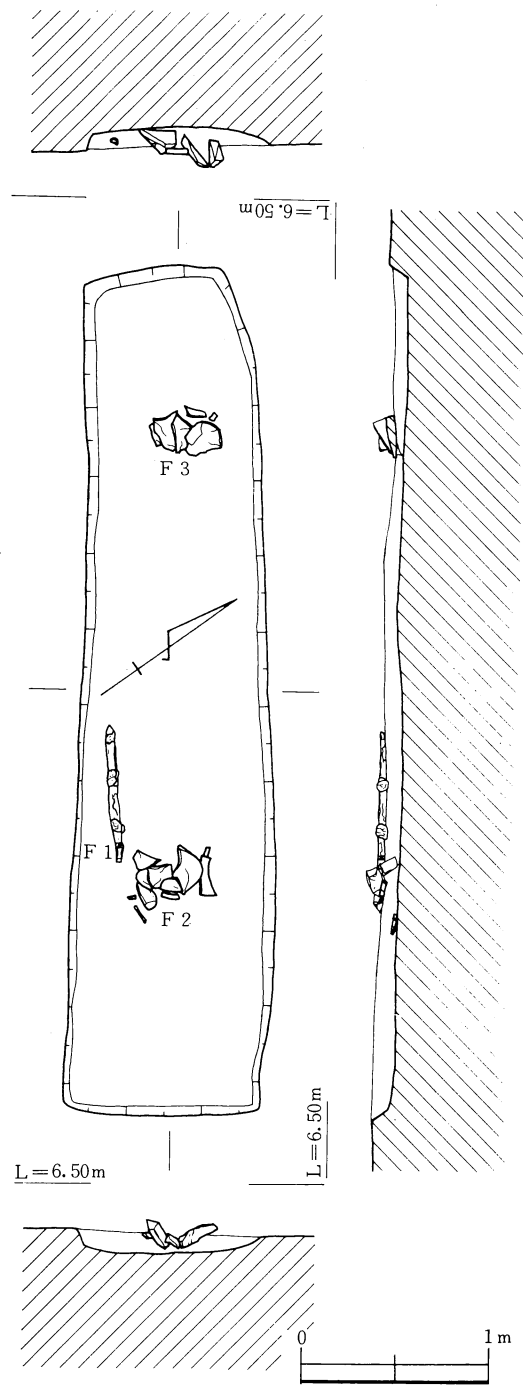


插图 281 S X 04 第 1 埋葬施設遺構図

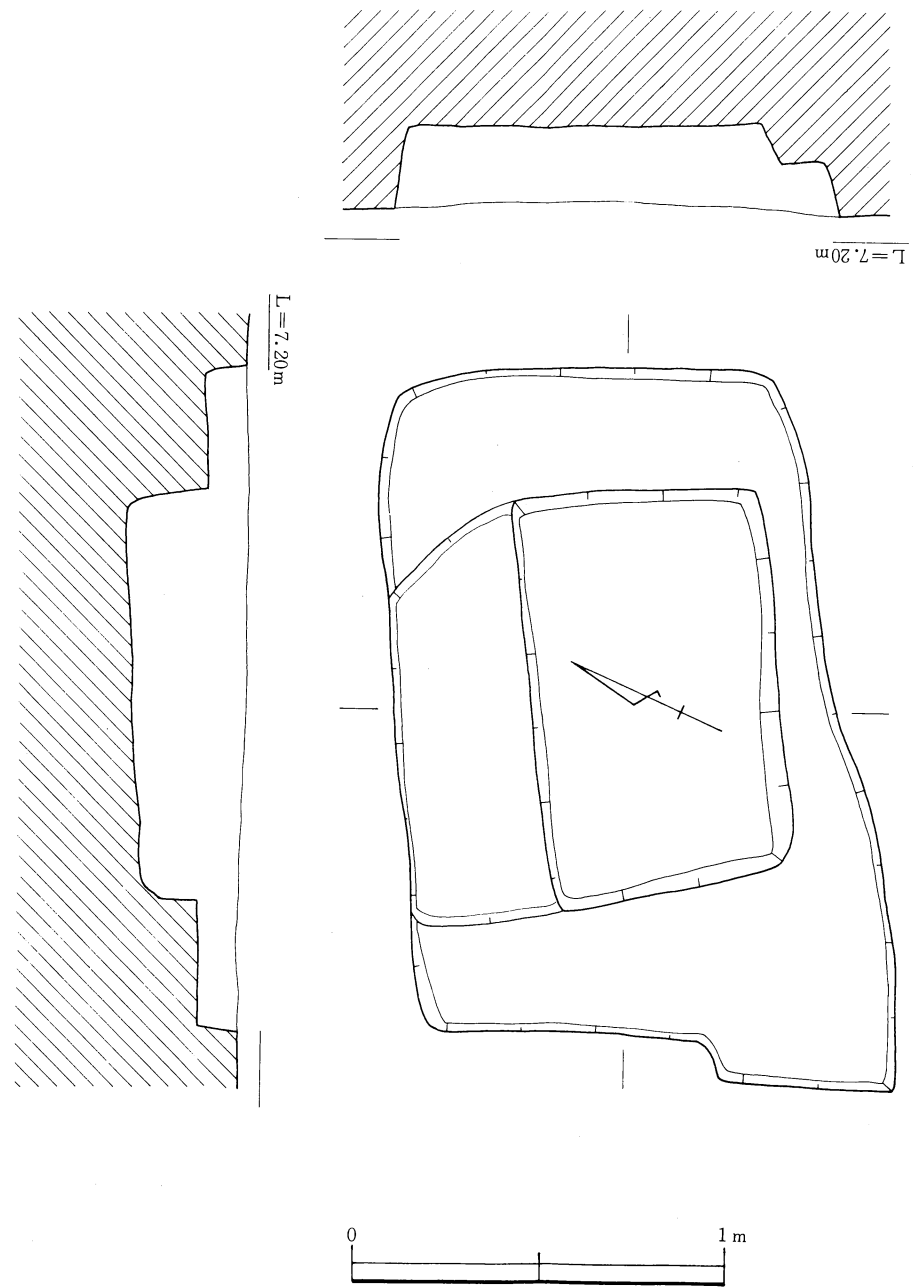


插图 282 S X 04 第 2 埋葬施設遺構図

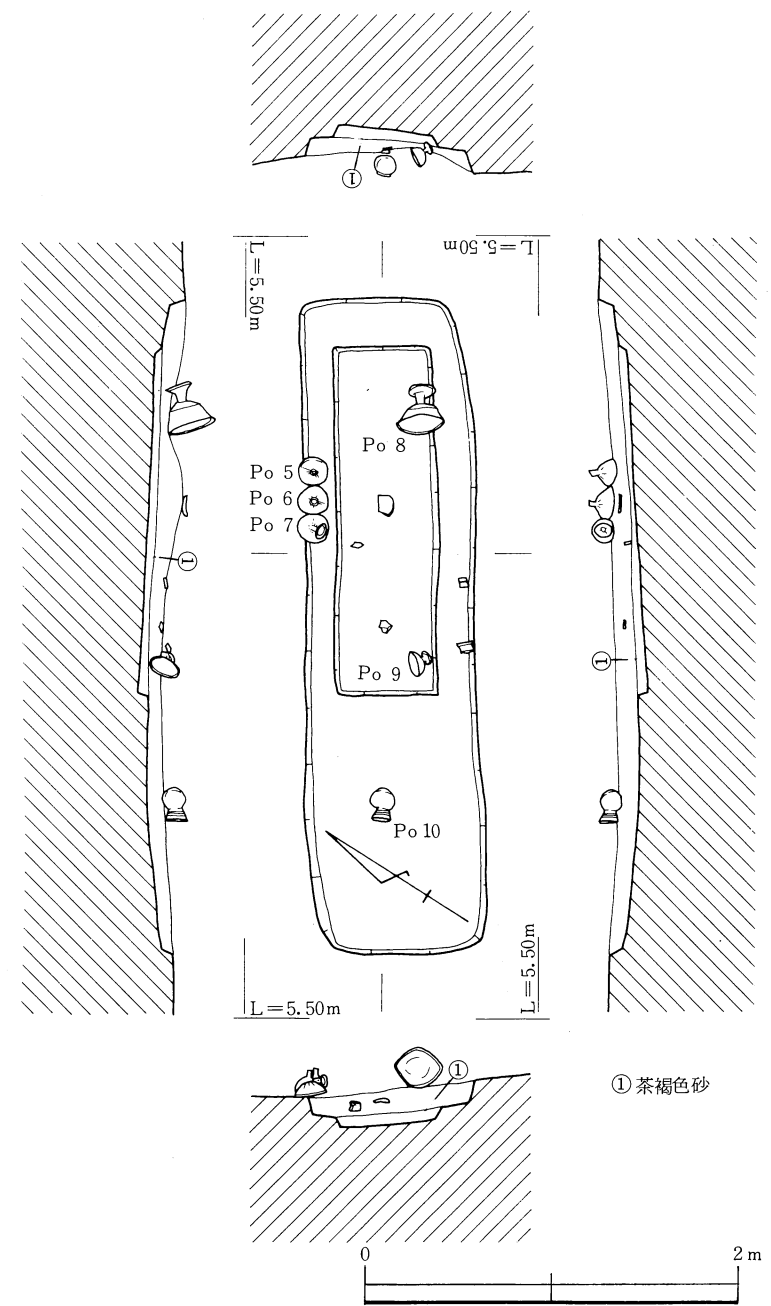
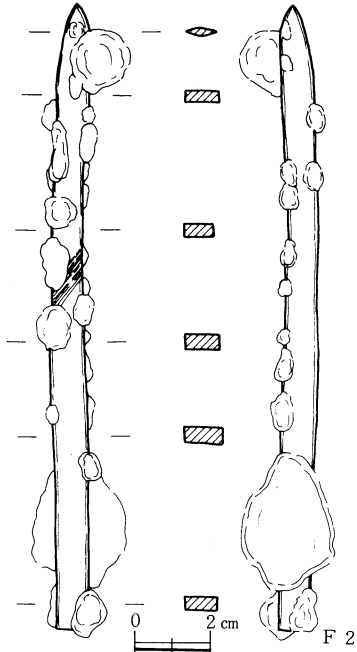
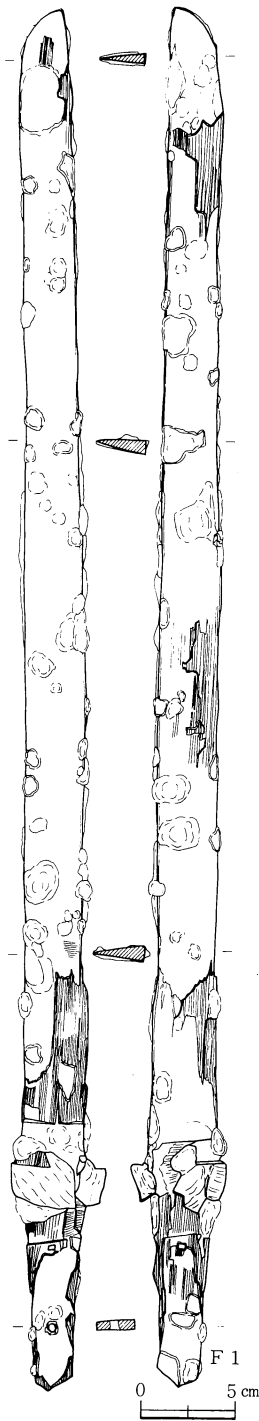
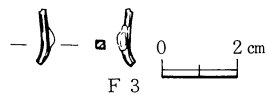
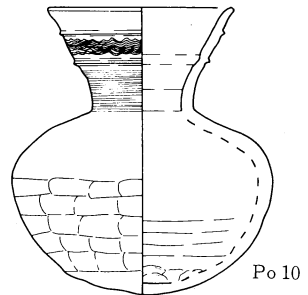
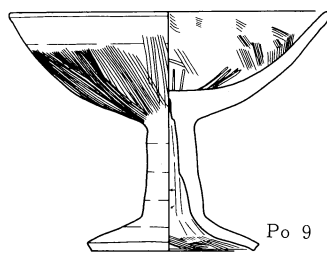
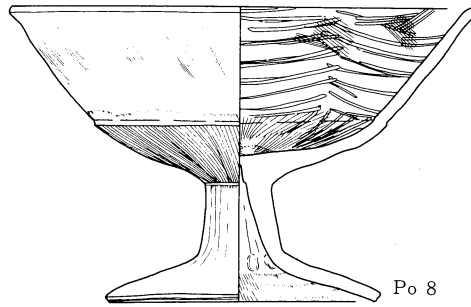
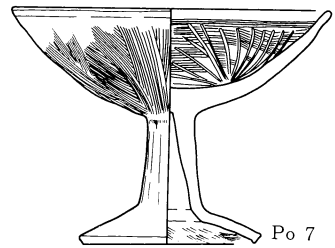
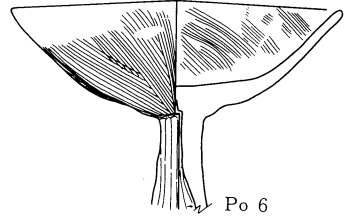
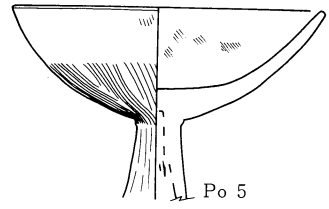


插图 283 S X 04 第 3 埋葬施設遺構図

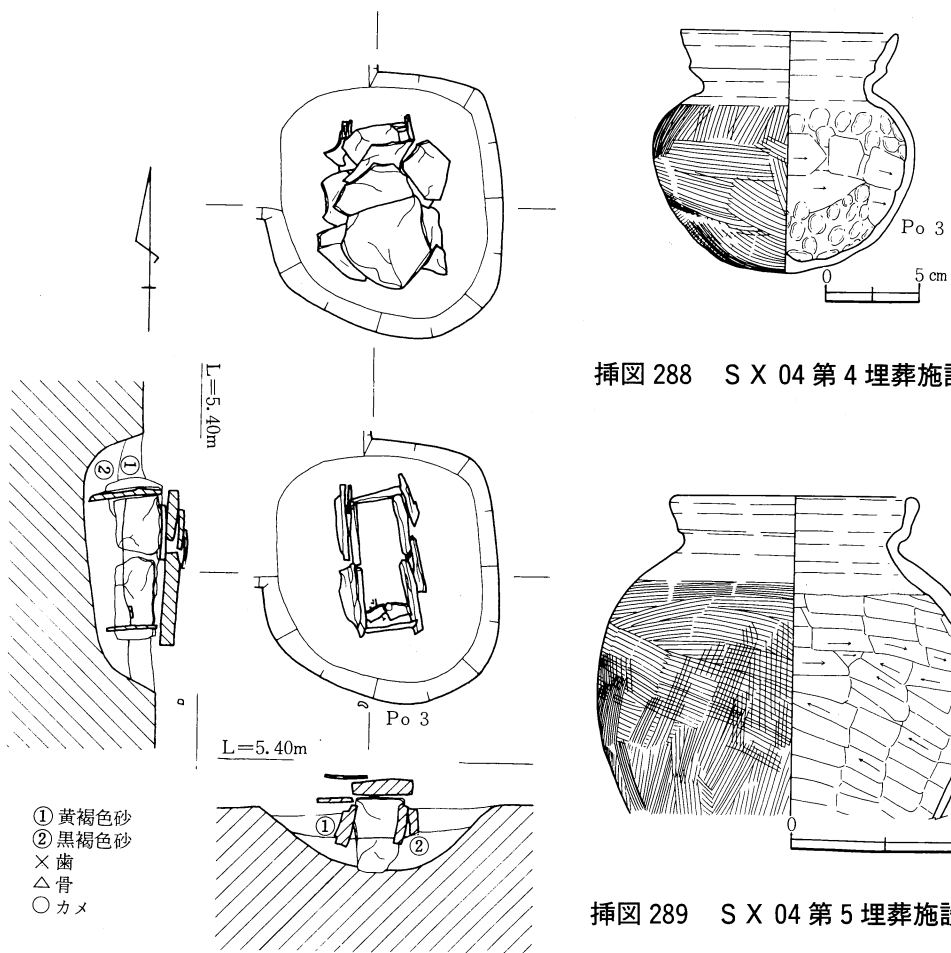


挿図 285 S X 04 第 1 埋葬施設
遺物図その 2



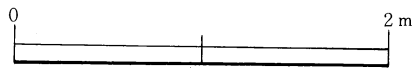
挿図 284 S X 04
第 1 埋葬施設遺物図その 1

挿図 286 S X 04 第 3 埋葬施設遺物図

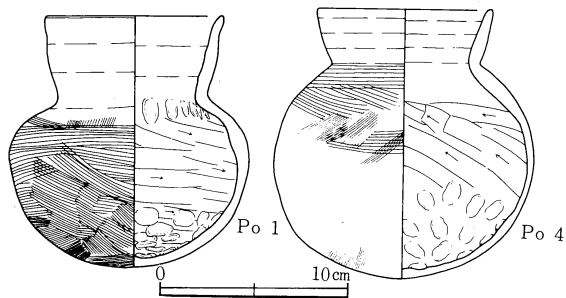


挿図 288 S X 04 第 4 埋葬施設遺物図

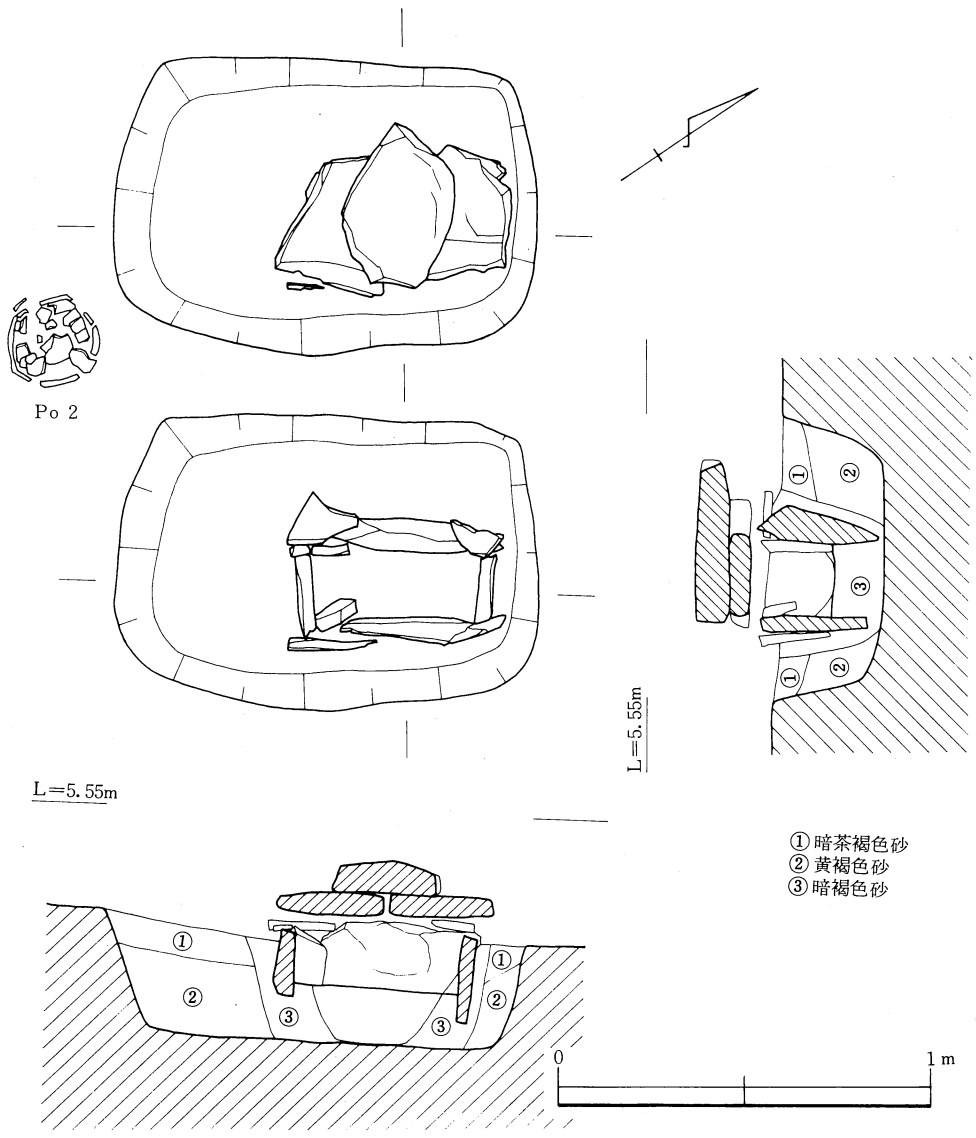
挿図 289 S X 04 第 5 埋葬施設遺物図



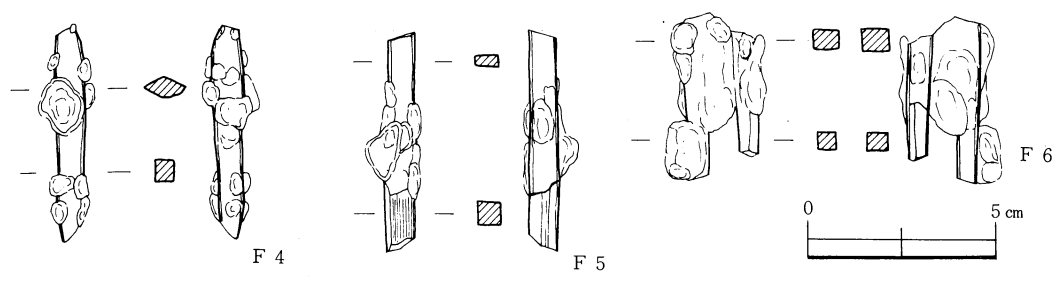
挿図 287 S X 04 第 4 埋葬施設遺構図



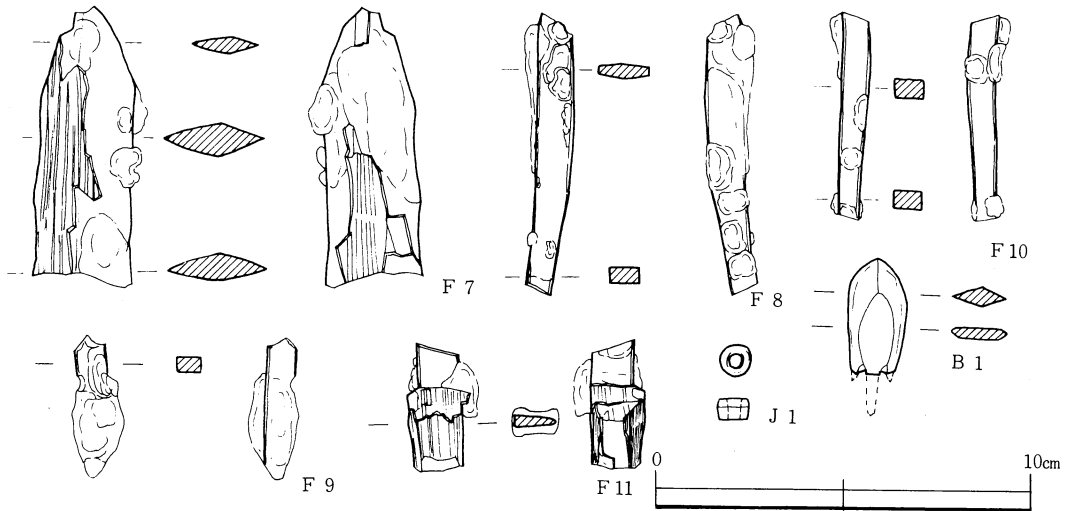
挿図 290 S X 04 遺物図その 1



挿図 291 S X 04 第 5 埋葬施設遺構図



挿図 292 S X 04 遺物図その 2



挿図 293 S X 04 遺物図その 3

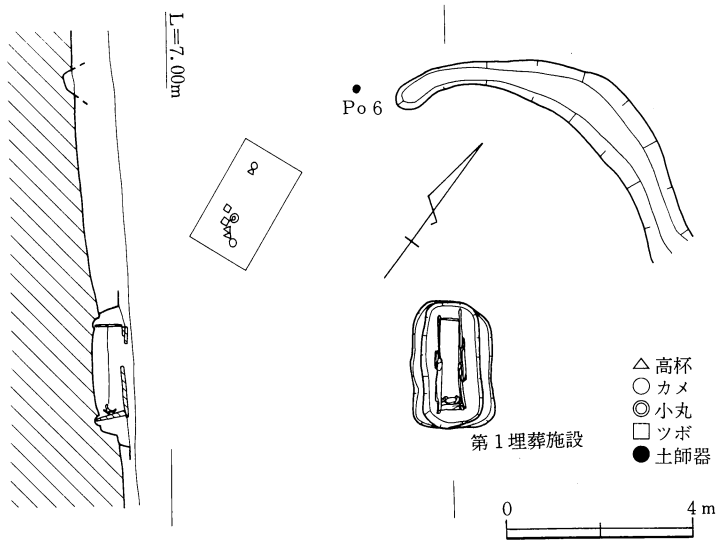
3 9号墳 (S X 09) (挿図294~299, 図版92・106・107)

11E地区に位置し、54年度工事対象地区にかかった3/5程度を調査した。円形で推定径10m、周溝総計12.8mを測る。U字状の周溝が北側で一部だけ検出できただけであるが、周溝の西側延長4.6mほどの所に甕、高杯、鉢の土器群 (P o 4, 5, 7~11) を検出した。これらの土器群は供献土器と考えられる。埋葬施設は墳丘中央付近に箱式石棺1基をもつ。

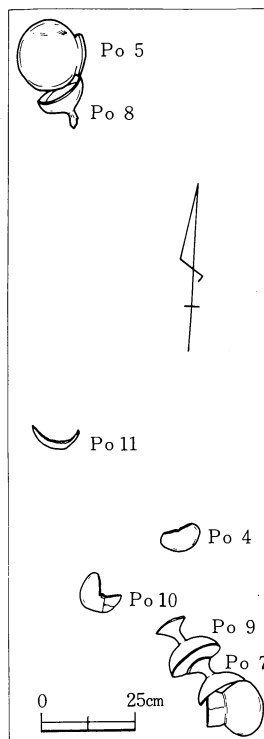
(1) 第1埋葬施設 (挿図296・298, 図版92・106・107)

主軸をN-38°-Wにとる。長辺2.68m、短辺1.64m (東側)、1.26m (西側)、深さ0.62mの2段掘りの墓壇内に、長辺1.78m、南側の東西0.42m、北側の東西0.41m、床面までの深さ0.32mの石棺をもつ。蓋石は検出時点で既に中央部の石がなく、築造時の状態とは異っているものと思われる。棺内は赤色顔料が全面に塗っており、南西部には高杯3個 (P o 1~3) を利用して枕が作られていた。枕の上には頭骨がみられ保存状態も良好であった。この他、棺中央付近にも骨片が認められた。棺内副葬品として、頭骨上部南西に鹿角装刃子 (F 1) が検出され、他の鉄製品も棺内から出土しているが場所は不明である。床面は淡褐色砂であった。

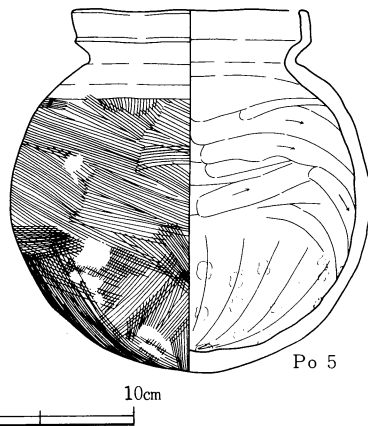
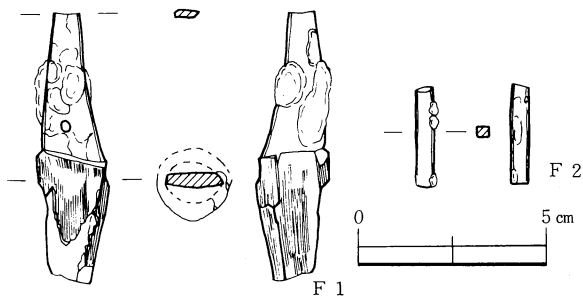
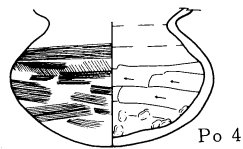
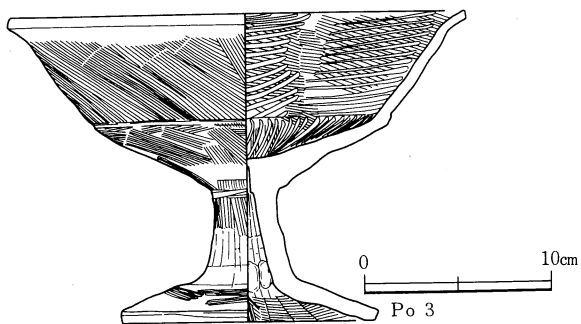
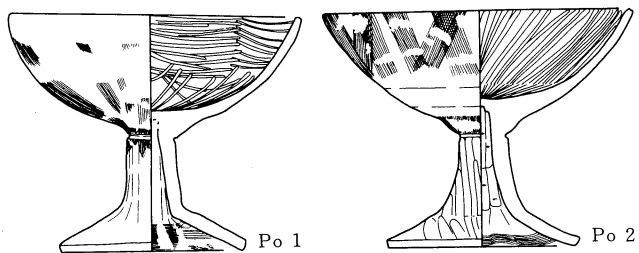
これらの出土遺物から、9号墳築造時期は古墳時代中期の後半と考えられる。



挿図 294 S X 09 遺構図

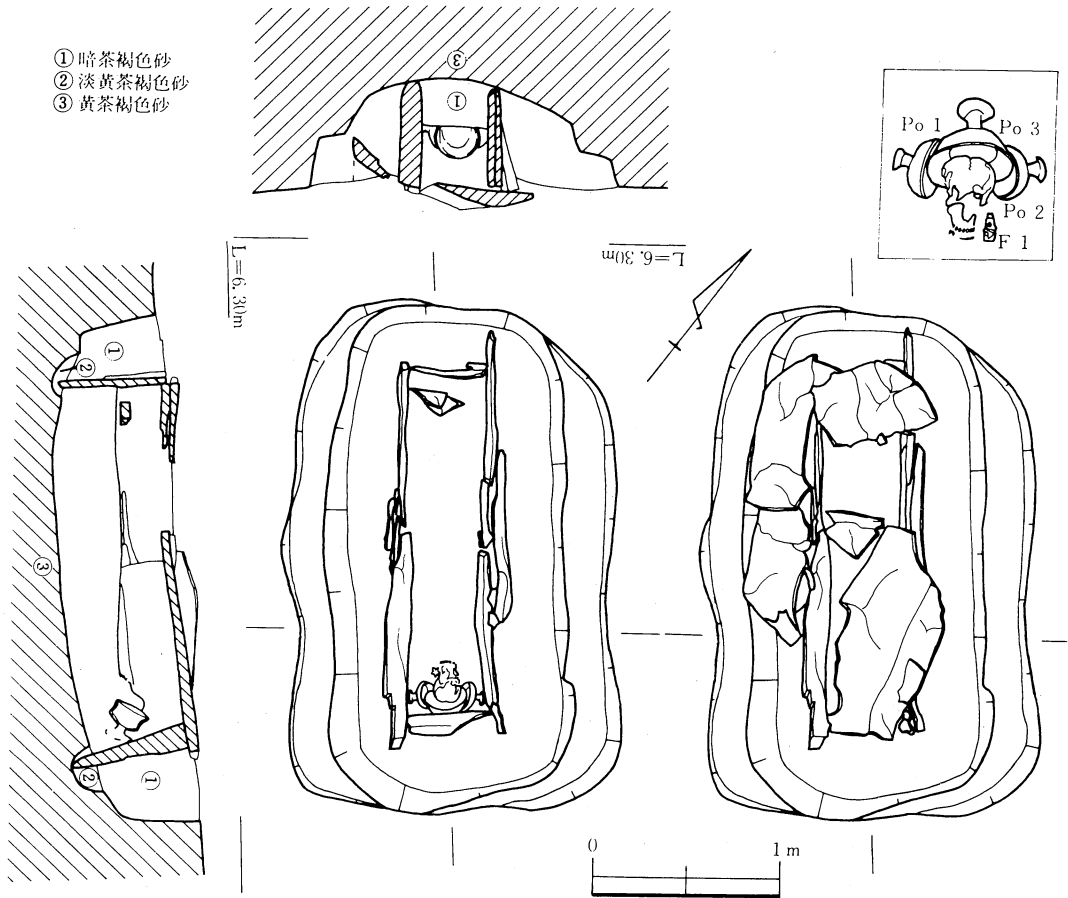


挿図 295 S X 09 土器出土状況図

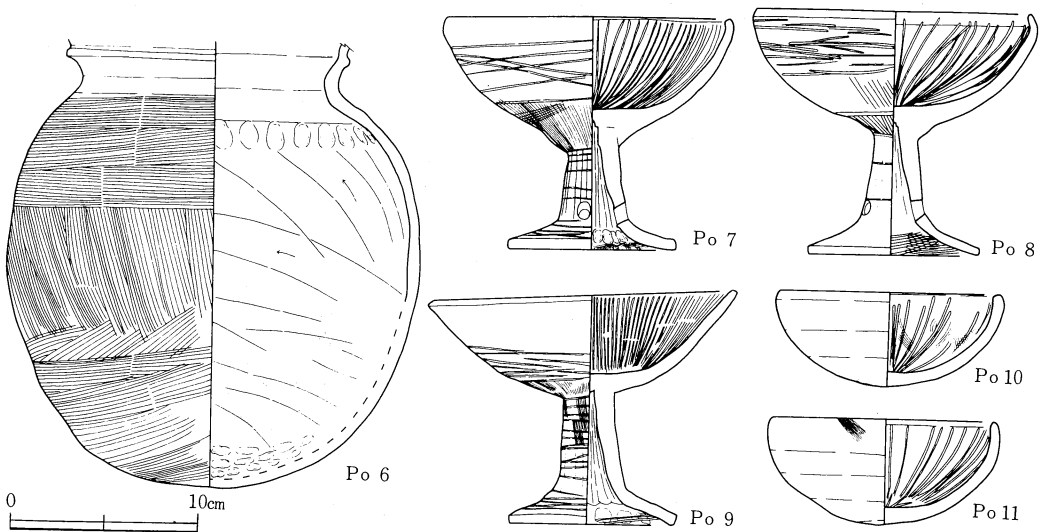


挿図 296 S X 09 第1埋葬施設遺物図

挿図 297 S X 09 遺物図その1



挿図 298 S X 09 第 1 埋葬施設遺構図



挿図 299 S X 09 遺物図その 2

4 10号墳 (S X10) (挿図300~311, 図版93・107~110)

13 I 地区に位置し、4号墳の北にある。円形で径12m、周溝総計17mで、墳丘は墳頂部を削られ台形をなし、周溝底面から1.4mの高さを測る。周溝は幅2.2m、深さ0.7mを測り、周溝の北西側には須恵器蓋杯 (P o 19~21) と土師器甕 (P o 2) が供献されていたと考えられる。埋葬施設は墳丘中央に1基、周溝に2基の円筒埴輪棺の計3基をもつ^{※5}。

(1) 第1埋葬施設 (挿図302, 図版93・110)

主軸をN-56°-Wにとる。長辺2.75m、短辺1.2m、深さ0.8mの土壌内に石を立てた石立て木棺墓で、床面までの深さは0.3mを測る。石立て木棺墓の南と南東側の石は築造当時のままのものと考えられるが、北側の石は崩れていた。棺内からは少量の骨片と鉄鏃類 (F 1~7) を検出した。

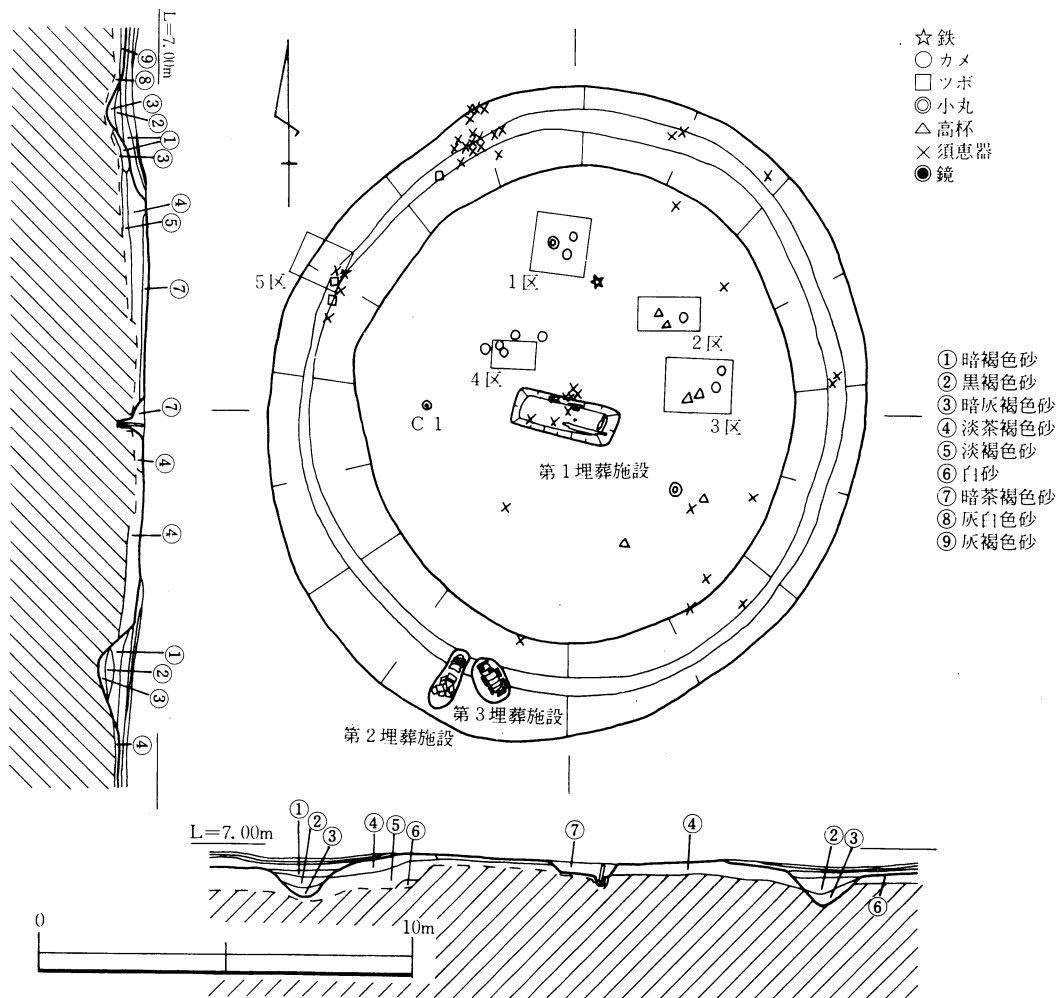
(2) 第2埋葬施設 (挿図307・309・310, 図版93・108・109)

周溝の南側底面のやや外側に位置し、円筒埴輪2本を用いた合口式円筒埴輪棺である。主軸はN-42°-Eで、ほぼ古墳中央から放射状の線上にある。南側で周溝の掘り方内を少し掘り込んだ土壌内に、円筒埴輪を置き棺としたものと思われるが、北側の埴輪H 2は、南側の埴輪H 1のもつ方向よりも口縁がかなり上を向いている。この状況が棺の密閉性から本来の状態とは考えられにくいので、何らかの理由で北側のH 1は原位置から崩れたものと考えたい。H 1, H 2の透孔、合口部は他の同様の円筒埴輪H 3, H 4でおおわれていた。H 3, H 4の破片は当埴輪棺の周辺の周溝内に広く散乱しており、これらを集めるとどちらもほぼ完形になる。このH 3, H 4の検出された時点で蓋として残っていたものと、他の破片との関連は不明である。南隅H 2の直上で、供献土器と考えられる土師器甕 (P o 6) が検出された。

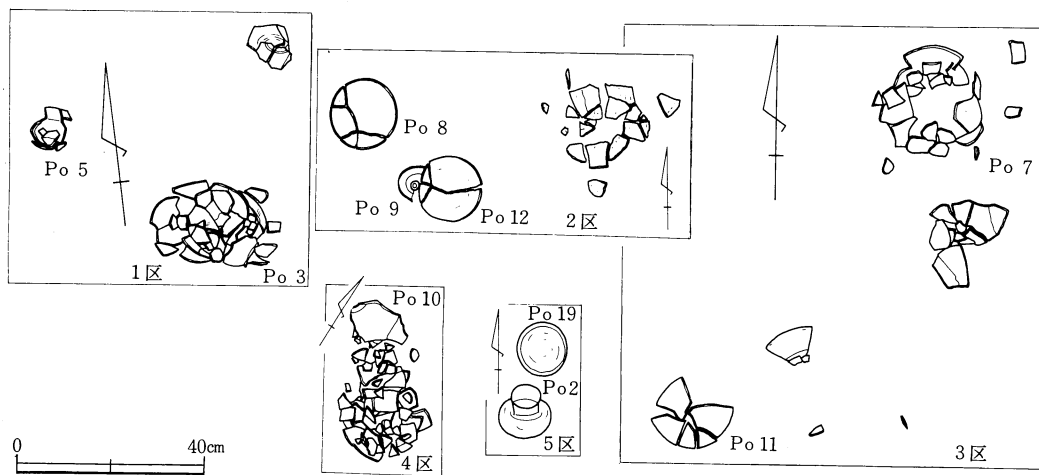
(3) 第3埋葬施設 (挿図308・311, 図版93・110)

同じく合口式円筒埴輪棺で、第2埋葬施設とはほぼ同じ位置にある。主軸はN-1°-Wで墳丘中央からの放射軸からは少しはずれる。第2埋葬施設よりやや深く周溝外肩を掘り込んで造られている。透し孔の蓋はないが、両小口には板石が立てられ、同様の板石が棺側面に2枚ずつ並べられていて、箱式石棺的 (石槨?) な形状を示している。遺物などは検出できなかった。円筒埴輪H 5, H 6を合口にしたものである。

この他、10号墳に関係すると思われる須恵器台付壺 (P o 16) が10号墳の北 (13 J 地区南側) から、10号墳の西 (14 J 地区の東) からは土師器鉢 (P o 15) が、10号墳周溝の南東から甕 (P o 4) が出土している。また墳丘上面からは、壺 (P o 1) 1個体、甕 (P o 3・7) 2個体、高杯 (P o 8~13) 6個体、高杯型器台 (P o 14) 1個体、小型丸底壺 (P o 5) もみられた。墳丘上面から出土している土器の中には、10号墳築造時期のものより古い時期のものもみられることから、何らかの時、混入したものと考えられよう。

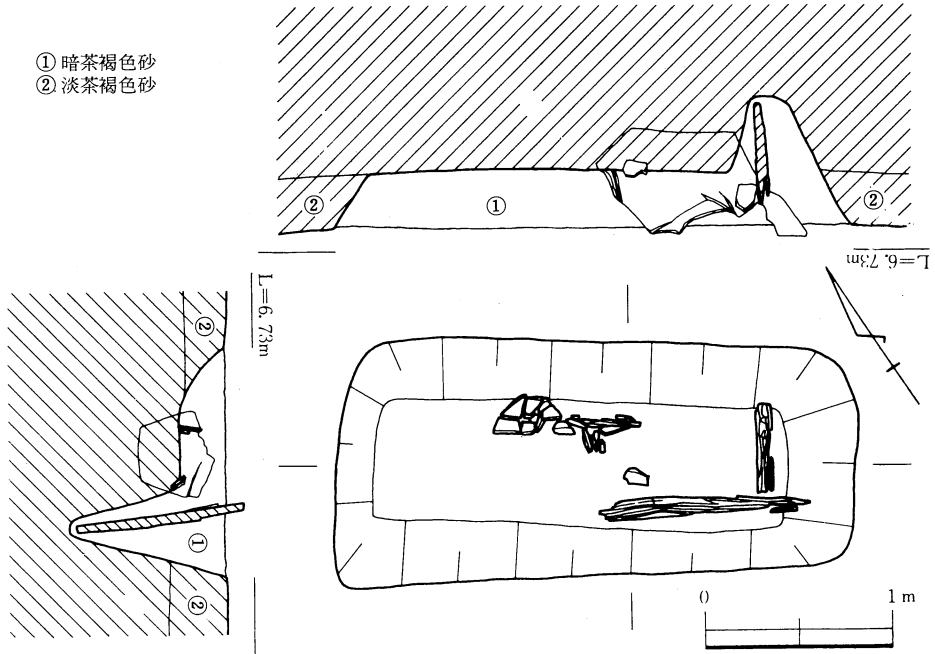


挿図 300 S X 10 遺構図

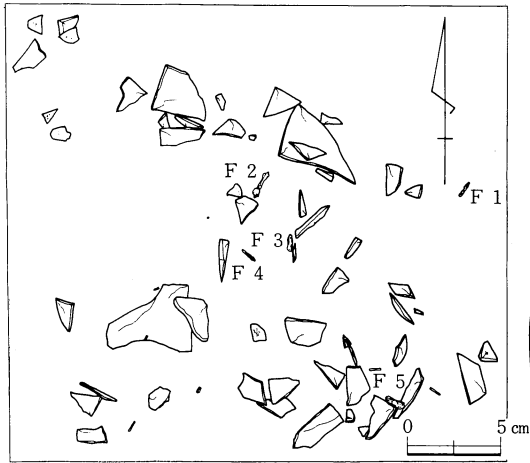


挿図 301 S X 10 土器出土状況図

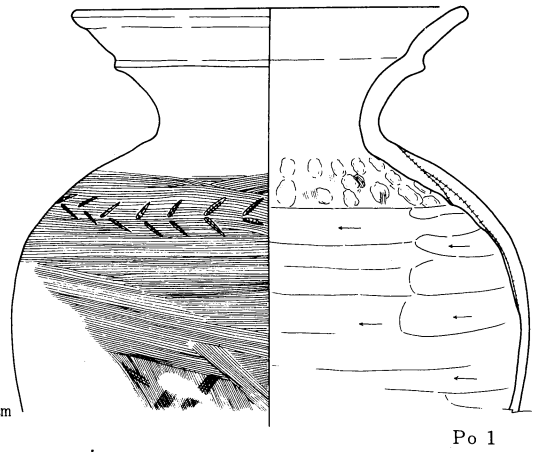
- ① 暗茶褐色砂
- ② 淡茶褐色砂



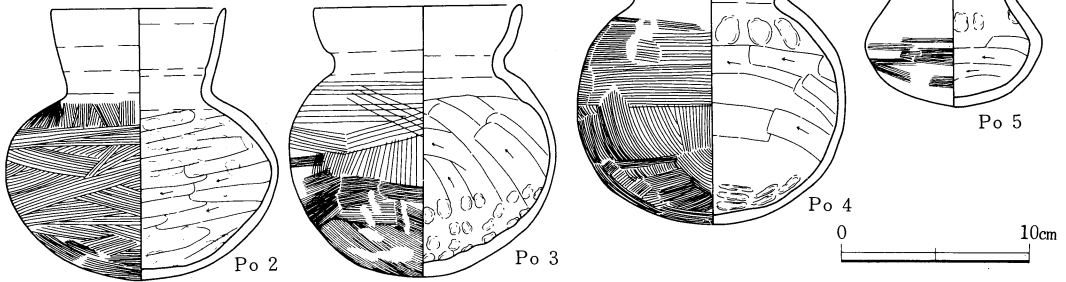
挿図 302 S X 10 第 1 埋葬施設遺構図

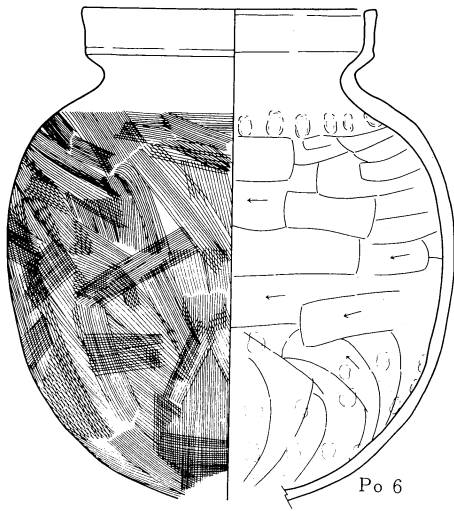


挿図 303 S X 10 鉄器出土状況図

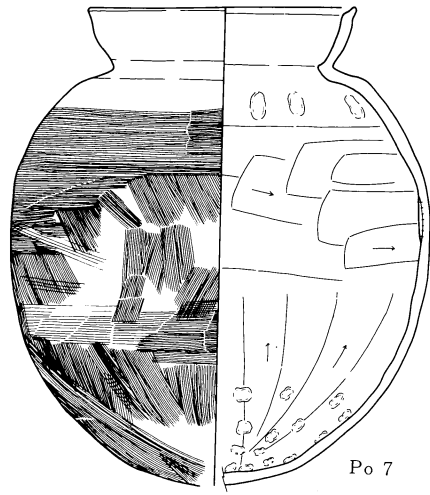


挿図 304 S X 10 遺物図その 1

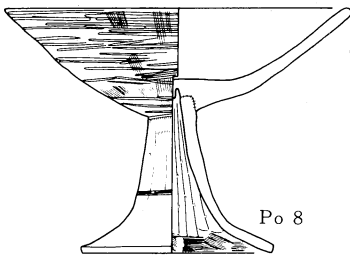




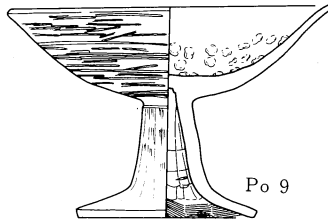
Po 6



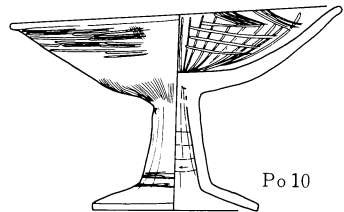
Po 7



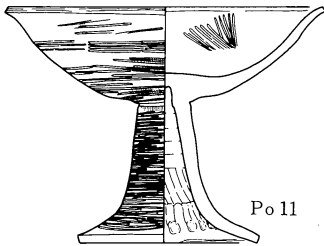
Po 8



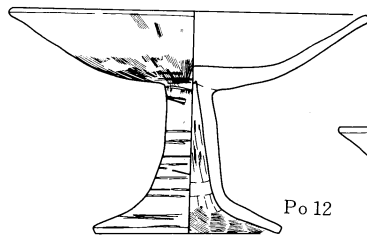
Po 9



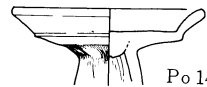
Po 10



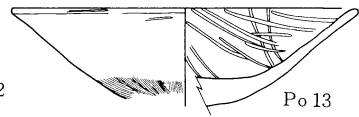
Po 11



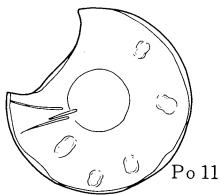
Po 12



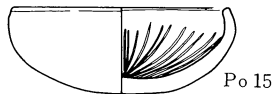
Po 14



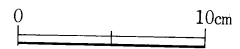
Po 13



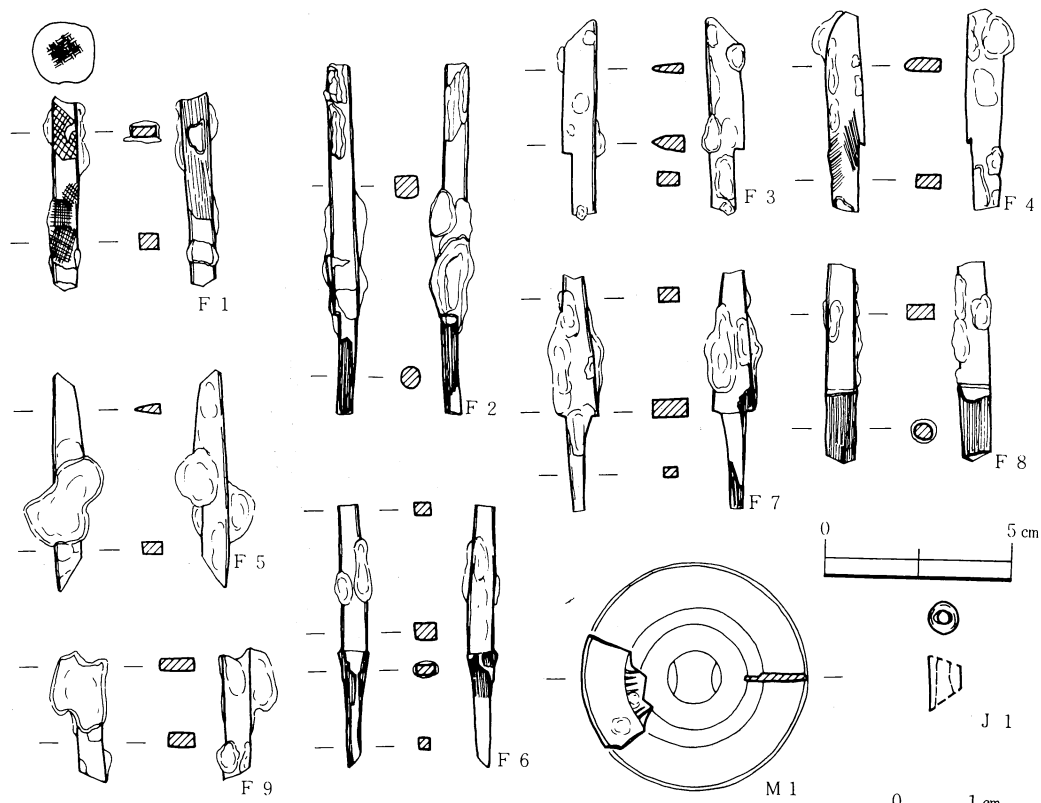
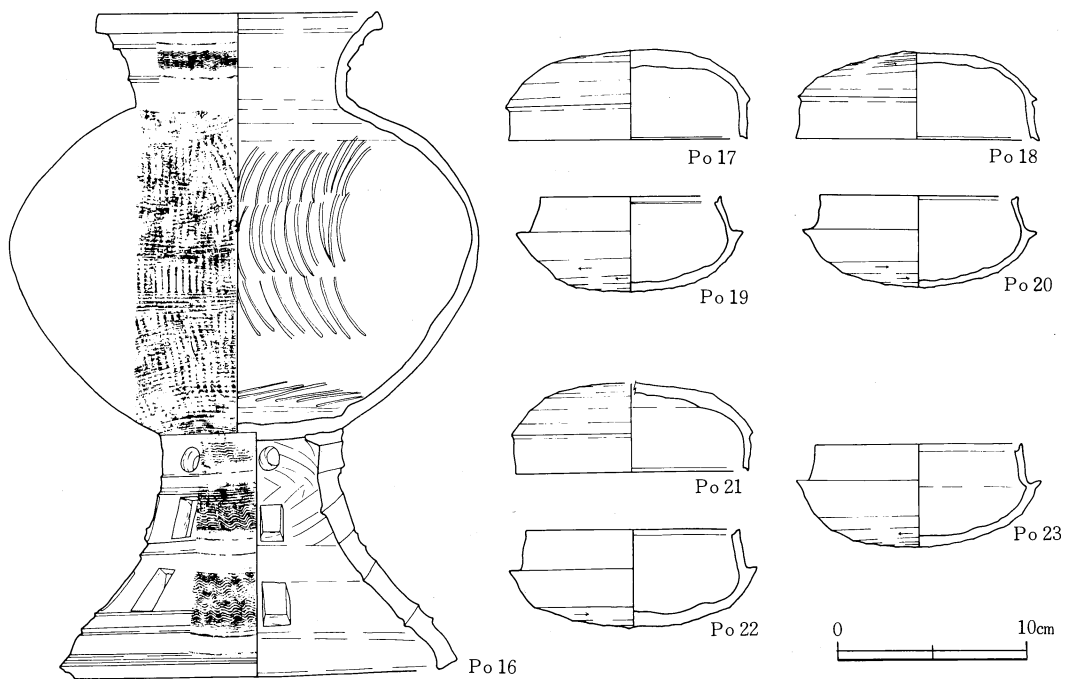
Po 11



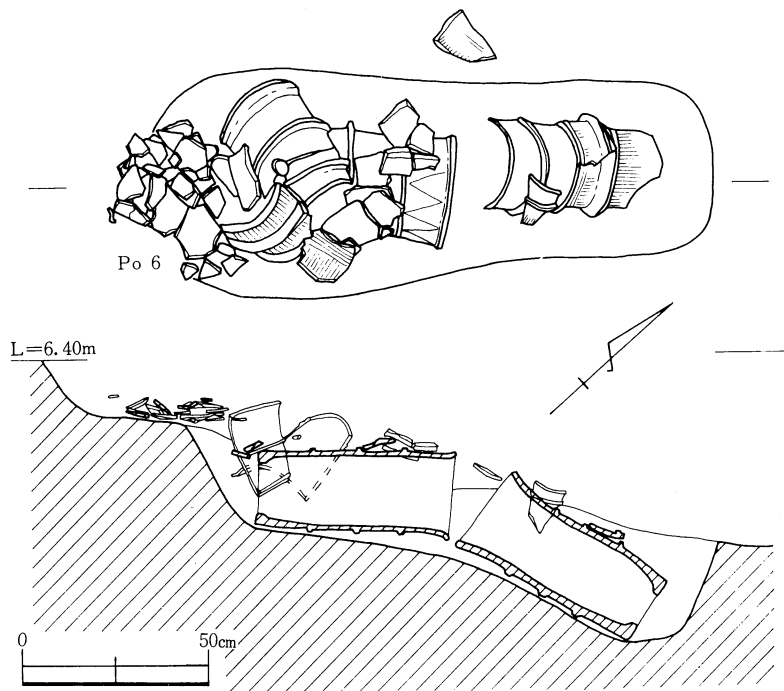
Po 15



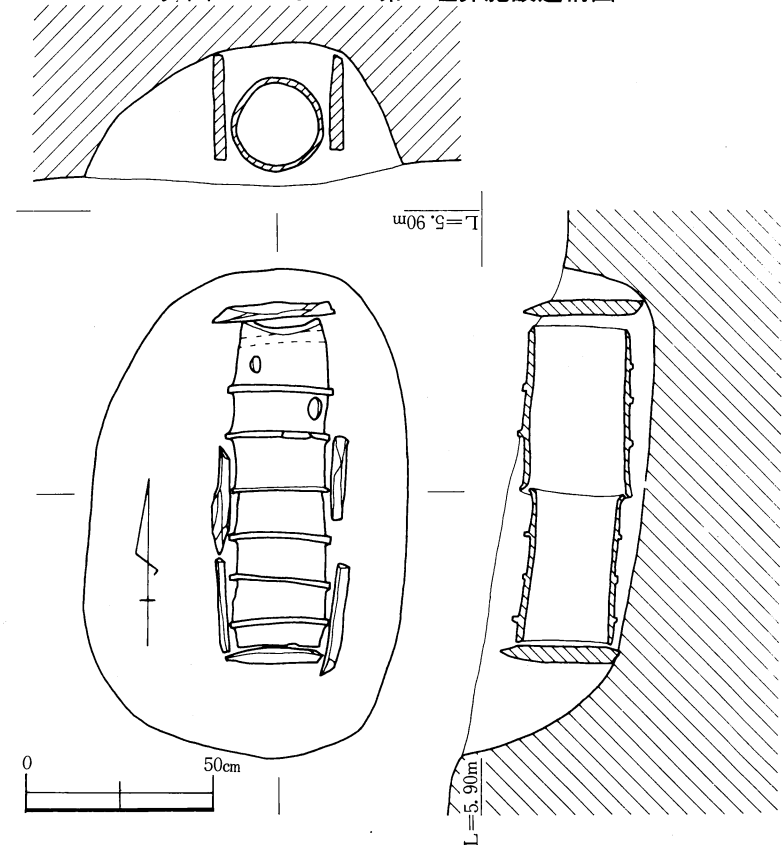
挿図 305 S X 10 遺物図その 2



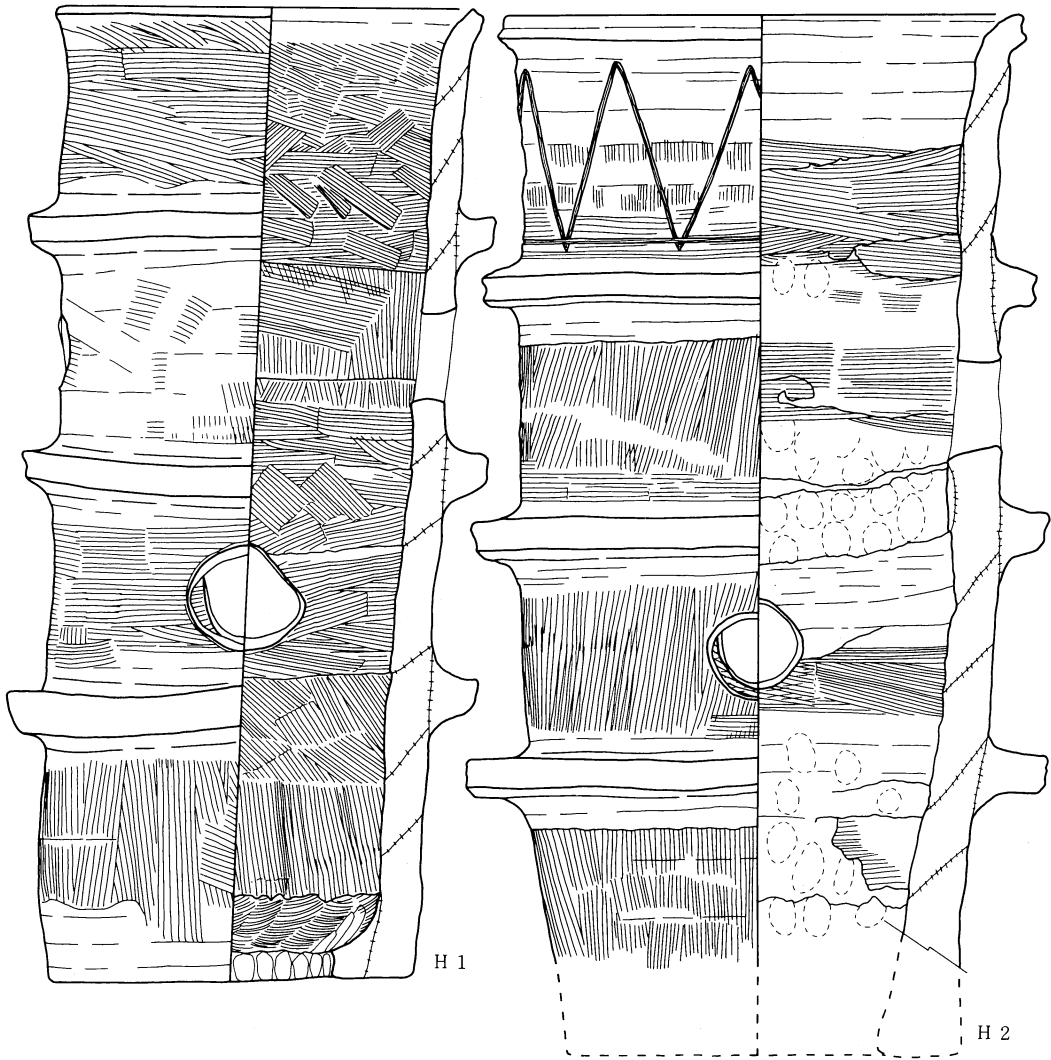
挿図 306 S X 10 遺物図その 3



挿図 307 S X 10 第 2 埋葬施設遺構図



挿図 308 S X 10 第 3 埋葬施設遺構図

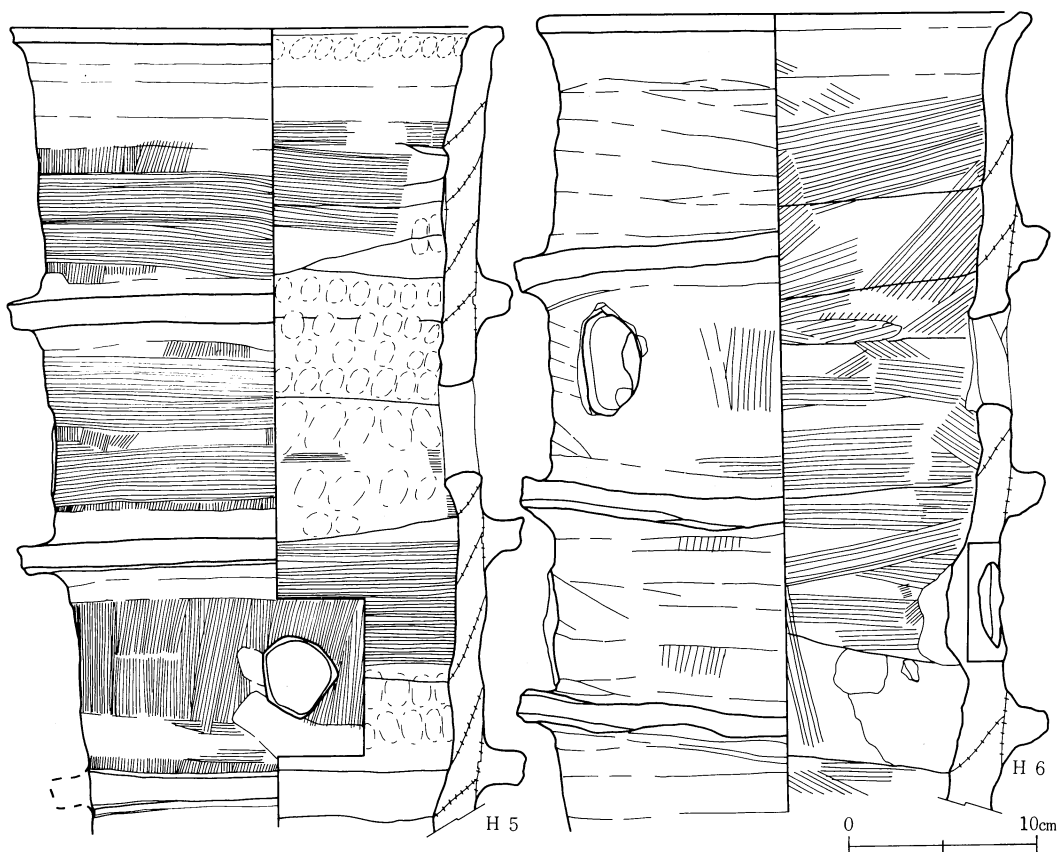


挿図 309 S X 10 第 2 埋葬施設遺物図その 1



0 10cm

挿図 310 S X 10 第 2 埋葬施設遺物図その 2



挿図 311 S X 10 第 3 埋葬施設遺物図

これらの出土遺物から、10号墳築造時期は古墳時代中期末頃と考えられる。

5 22号墳 (S X 22) (挿図312~314, 図版94・110)

12F地区の南西区に位置し、南東方向に9号墳がある。円形で推定径8m、周溝総計は10.4mになると思われる。墳丘は確認できなかったが、灰白色砂面において幅0.8m、深さ0.19mのU字状の周溝を検出することができた。周溝は北側しかなかったが、一周するものと思われる。周溝内部より少量の土師器片が出土した。また側壁の東側付近からは高杯(P01)の出土もあったが、これは後に搬入したものと考えられる。埋葬施設は墳丘ほぼ中央で石立て木棺墓1基を検出した。

(1) 第1埋葬施設 (挿図313・314, 図版94)

主軸はN-88°-Eにとる。西側は削りとられており長軸の長さは不明であるが、短軸はほぼ1mを測るものと思われる。木棺の東小口は47×46×4cmの板石を立てかけて造られており、外側に10~30cmの板石を24枚張り合わせるように重ねている。小口から25cmほど西寄りに、36×14×2cm、32×12×2cmの板石2枚を利用してV字状の枕が作られている。角度は128°をもつ。

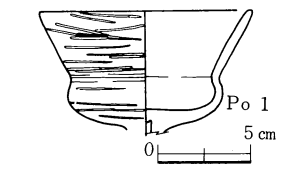
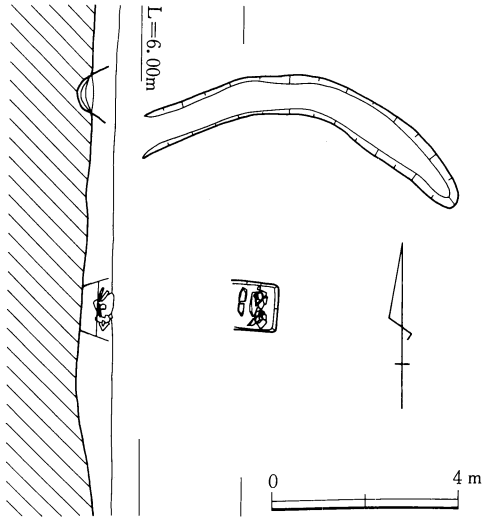


插图 313 S X 22 遺物図

插图 312 S X 22 遺構図

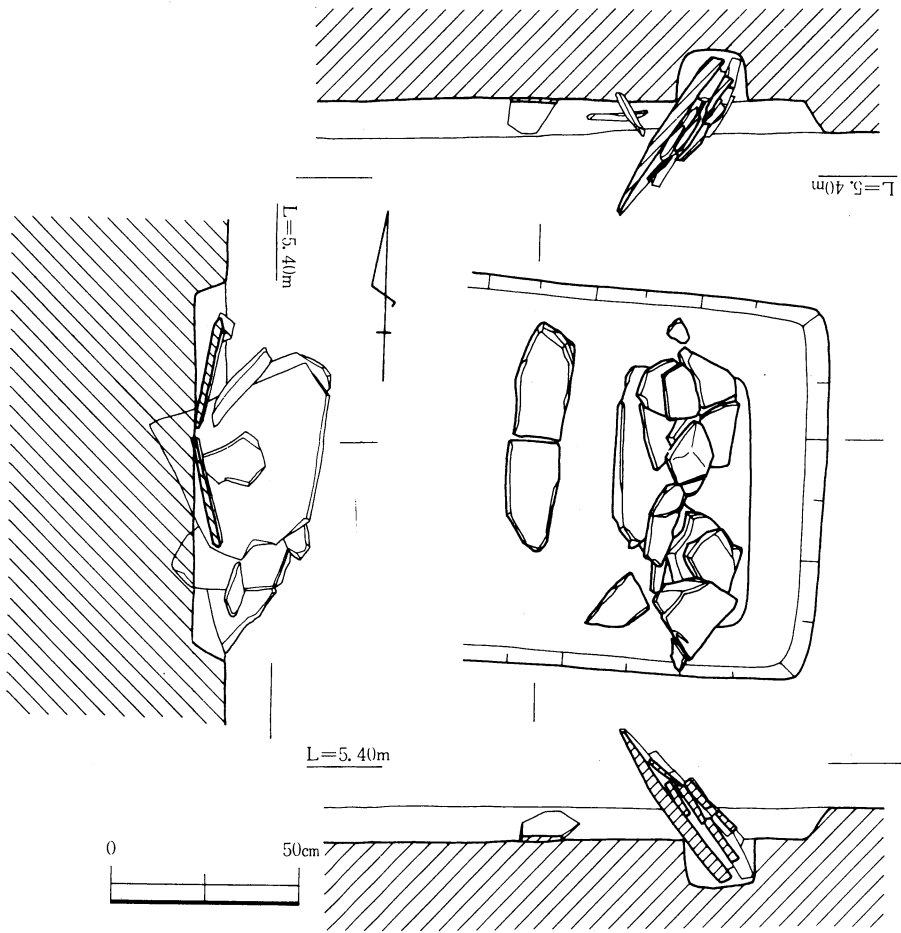


插图 314 S X 22 第 1 埋葬施設遺構図

22号墳の築造時期は、およそ古墳時代中期後半から後期にかけてと考えられる。

6 24号墳 (S X 24)

24号墳は54、56年度の調査区域にまたがるもので、54年度調査範囲は11C地区にかかる西半分であった。このため56年度に調査を終了した時点で正確な報告をするが、54年度調査の概略だけを示しておく。

西半分の調査だけなので古墳の規模は明らかでないが、径約14mの円墳と推定される。周溝確認に入る前段階で火葬墓、屈葬墓、土壙墓、五輪塔などの古墳時代以降の遺構を調査した。墳丘中央部では石立て木棺墓1基、箱式石棺1基の計2基の埋葬施設を調査し、この他周溝の西側肩にある土壙墓1基も調査した。周溝内では供献土器と思われる多数の須恵器を検出した。

7 25号墳 (S X 25) (挿図315～322, 図版94・95・110)

11C地区の南西区に位置し、24号墳の南にある。円形で推定径14.8m、周溝総計17.8mであろうと思われる。西側の周溝は削られて確認できなかった。周溝の北東側で須恵器杯身(P 0 2・5)を、周溝の南側では須恵器蓋杯を検出した。これらの土器は25号墳の供献土器と考えられる。また、25号墳の調査段階で須恵器片(P 0 1・3・4・6)、土師質土器(P 0 7)の出土もみられた。

埋葬施設は墳丘上に石立て木棺墓1基、箱式石棺1基、周溝の南側で円筒埴輪棺1基の計3基を検出した。また、周溝の南側に、須恵器枕をもつ埋葬施設もあったかと思われるが、確認はできなかった。

(1) 第1埋葬施設 (挿図317, 図版94)

木棺の周囲に板石を立てて並べた石立て木棺墓で、主軸はN-76°-Wをとる。木棺部は長辺1.46m、短辺0.54m、床面までの深さ0.2mを測る。木棺部の南北両側に板石を立てるが、南には1.6×0.9×0.05mの大きな板石1枚を、北には小さな板石数枚を立て並べている。木棺部内東側で頭骨を検出したが、他の遺物は確認できなかった。

(2) 第2埋葬施設 (挿図319・320, 図版94・110)

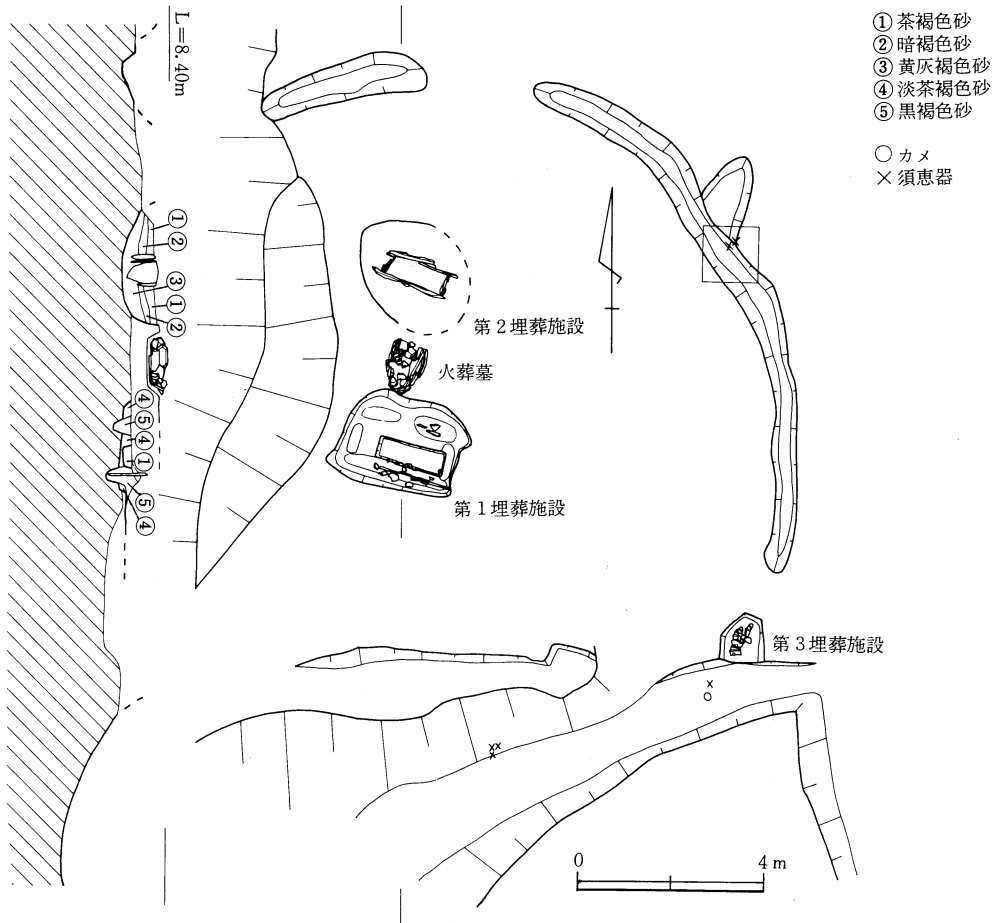
第1埋葬施設のすぐ北に主軸方向をほぼ同じくして並ぶ箱式石棺で、主軸をN-70°-Wにとる。長辺1.2m、短辺0.44m、床面までの深さ0.32mの石棺をもつ。棺内は、西端に頭骨2体分と大腿骨、下腿骨などの骨がよせ集めたような状態で残り、一方東側からは歯が数点検出されたが中央部からは何も検出されなかった。このことから東から中央にかけて被葬者が埋葬されたと考えるが、その時点で既にあった人骨が西側にかたづけられたものか、あらたに西側にまとめて埋納されたものかは不明である。枕はいずれの位置にもなかった。棺内副葬品として刃子(F 1) 1点を北西側で検出した。

第1、第2埋葬施設の築造の前後関係は不明である。

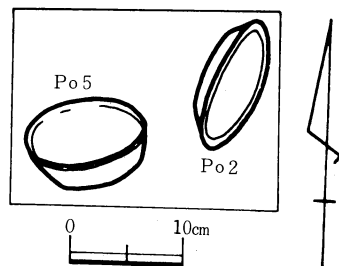
(3) 第3埋葬施設 (挿図321・322, 図版95・110)

2本の円筒埴輪を口縁で合わせた合口式円筒埴棺で、主軸をN-90°-Eにとる。円筒埴輪H1はほぼ完形でH2は上から2段目までのものを用いていた。周囲には板石を立てかけている形状から棺である事はまちがいのなかろうが、原位置からずれている模様である。

25号墳の築造時期は出土遺物から、古墳時代後期と考えられる。



挿図 315 S X 25 遺構図



挿図 316 S X 25 土器出土状況図

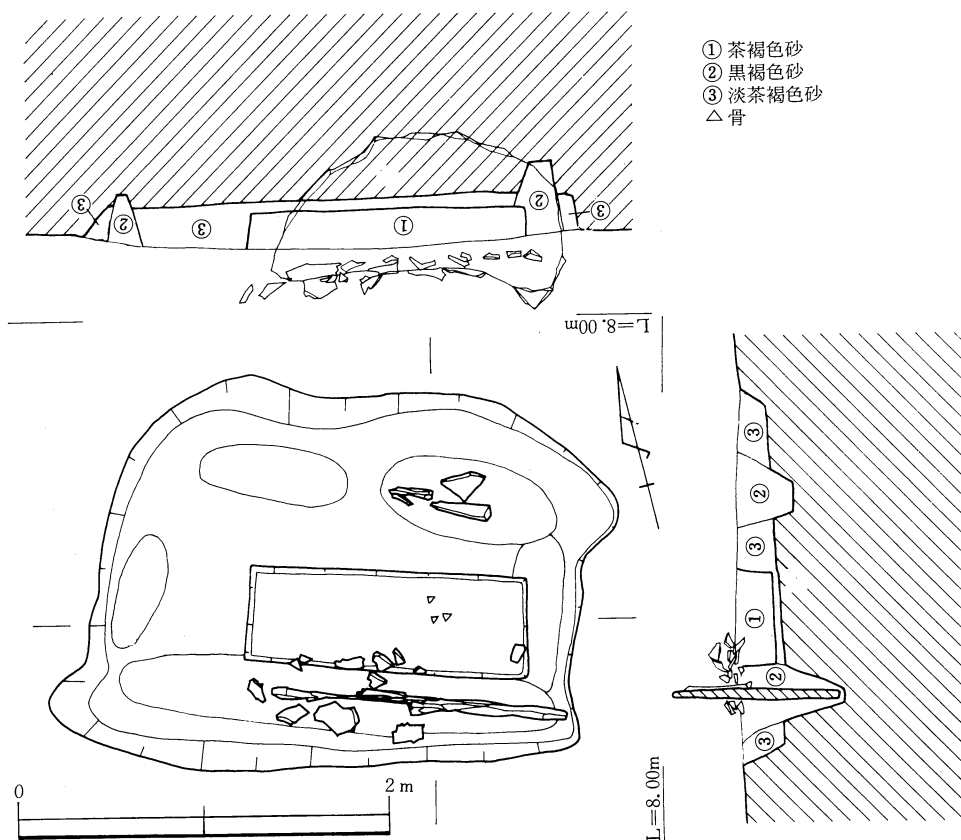


插图 317 S X 25 第 1 埋葬施設遺構図

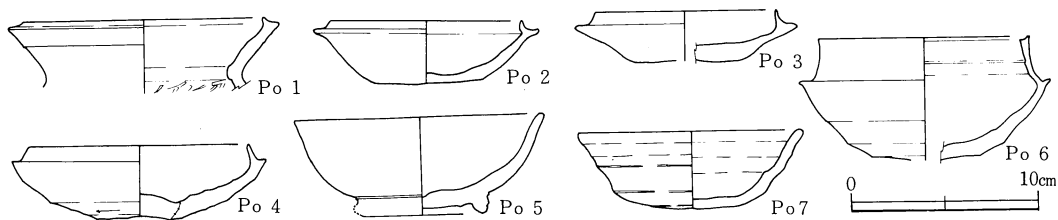


插图 318 S X 25 遺物図

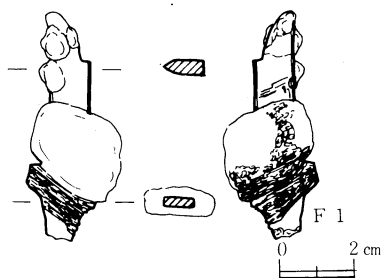
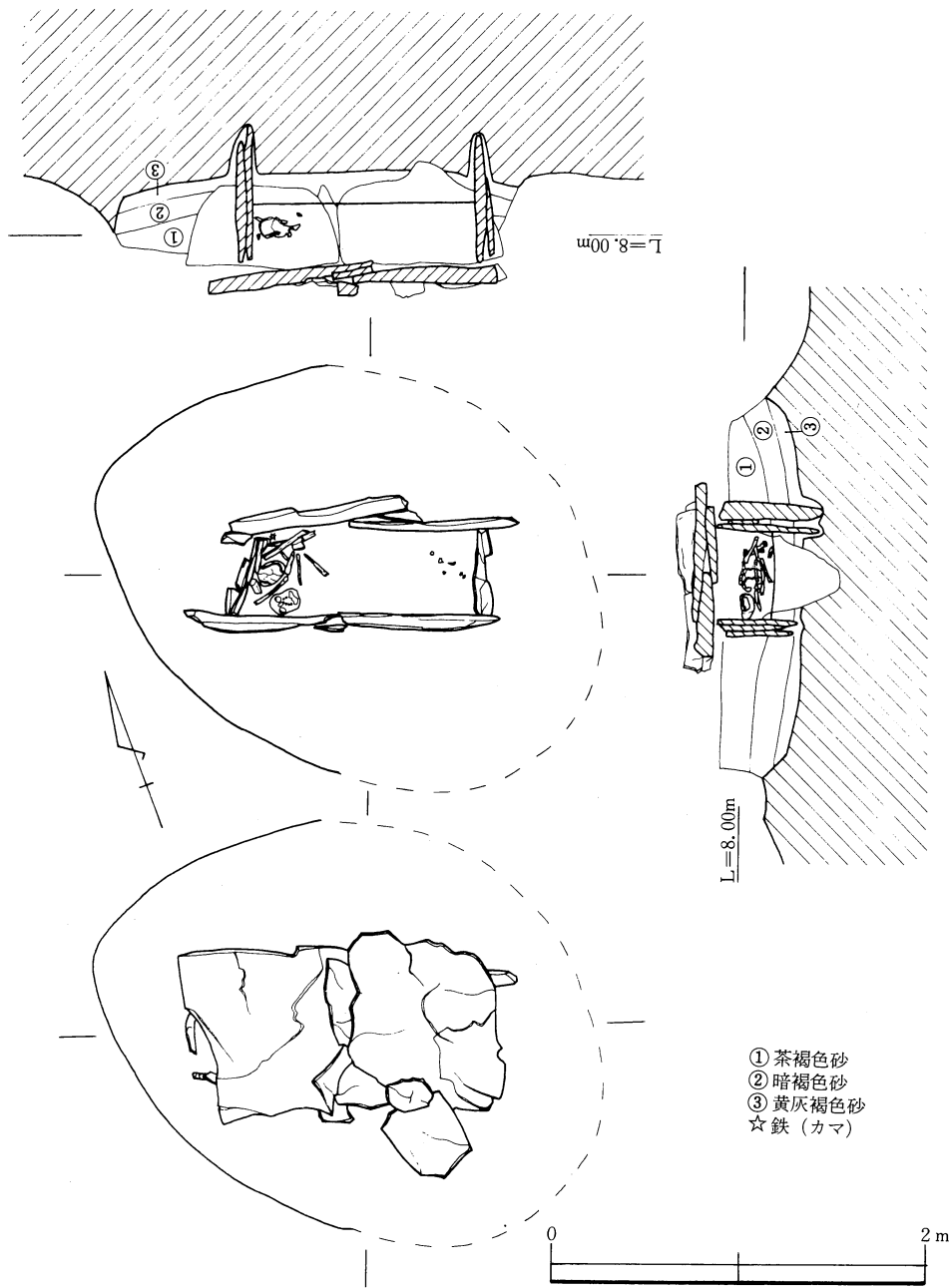


插图 319 S X 25 第 2 埋葬施設遺物図



挿図 320 S X 25 第 2 埋葬施設遺構図

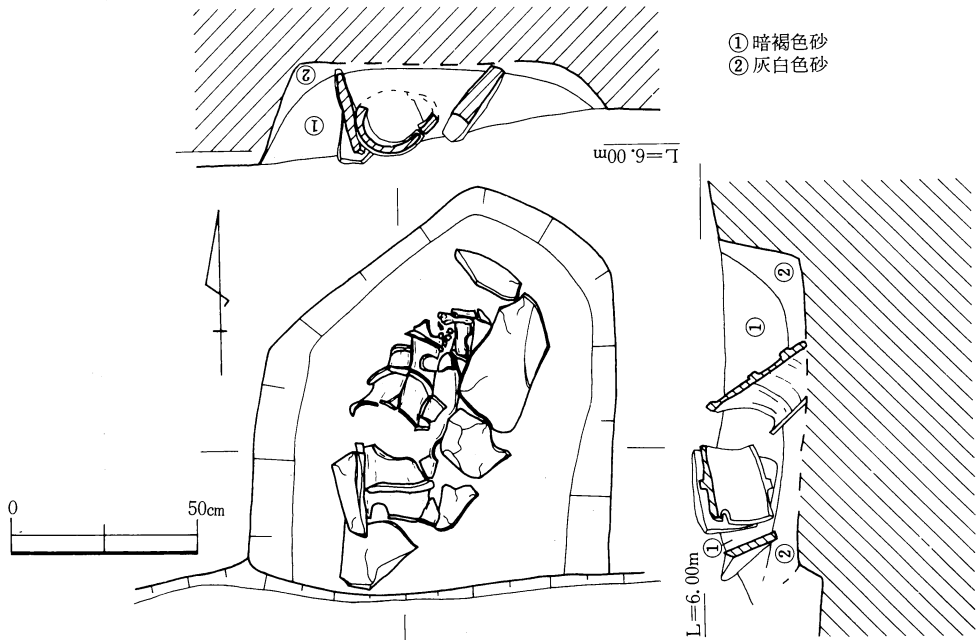


插图 321 S X 25 第 3 埋葬施設遺構図

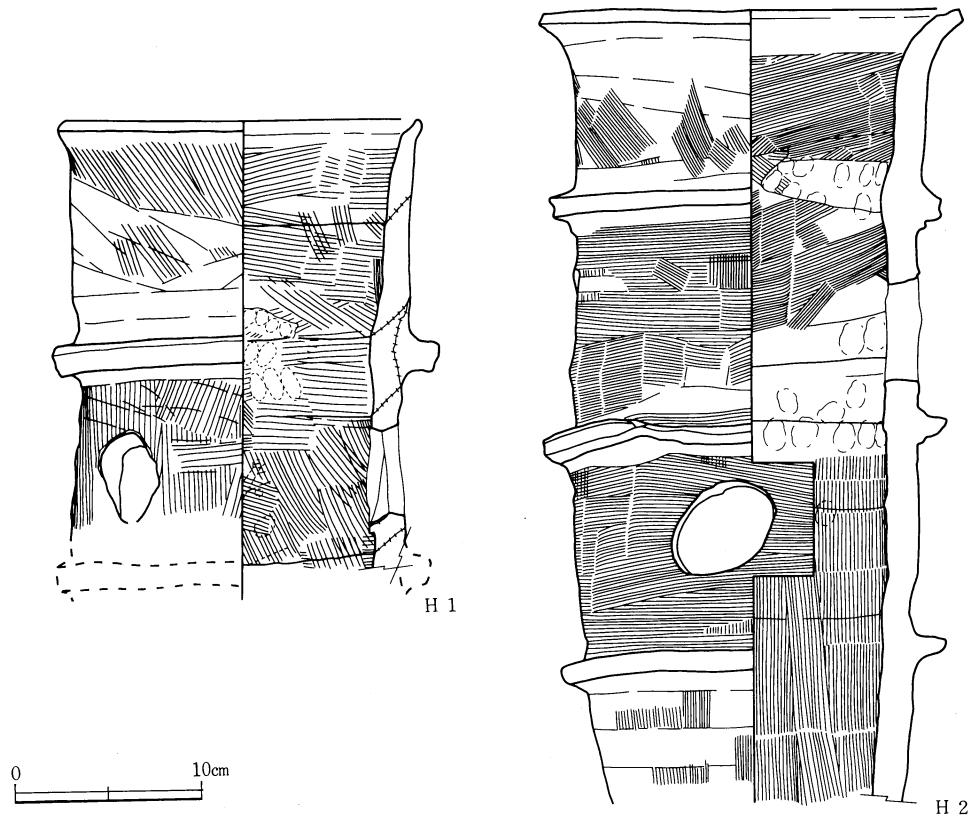


插图 322 S X 25 第 3 埋葬施設遺物図

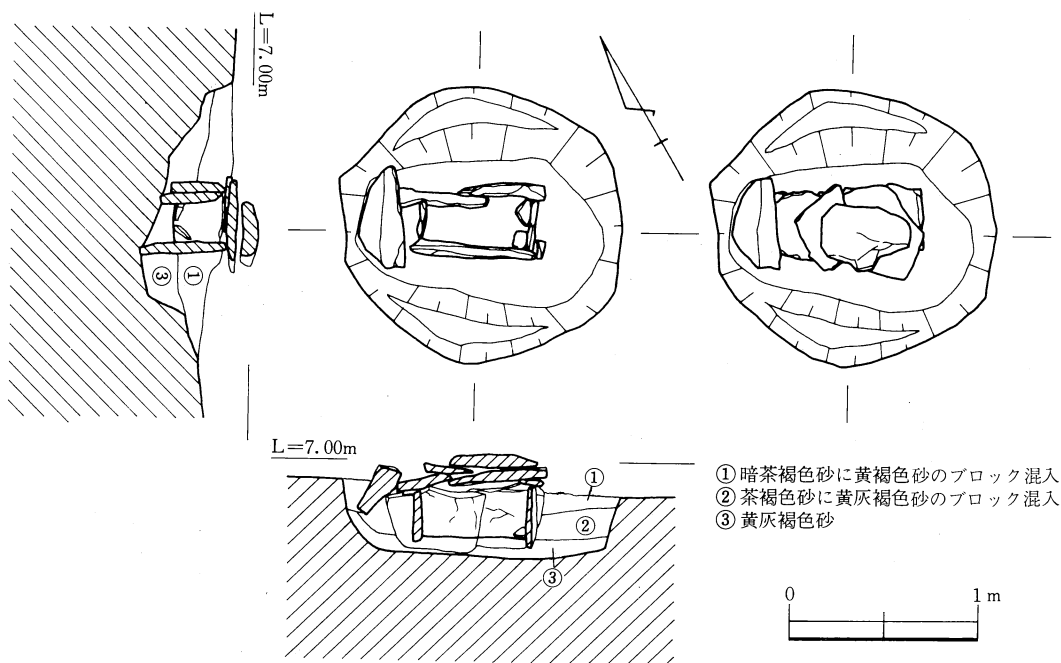
8 古墳時代の墳墓（小型箱式石棺，土壇墓）

(1) 小型箱式石棺

小型箱式石棺は10号墳の西側，14 I 地区の北西隅に2基，3号墳の南側，12G，12F 地区に5基の計7基みられる。ともに墳丘をもたず，いわゆる黒砂層から検出された。棺内副葬品，供献土器などの出土がなく時期ははっきりしないが，古墳時代に作られたものと考えられよう。

a S X 15（挿図323，図版95）

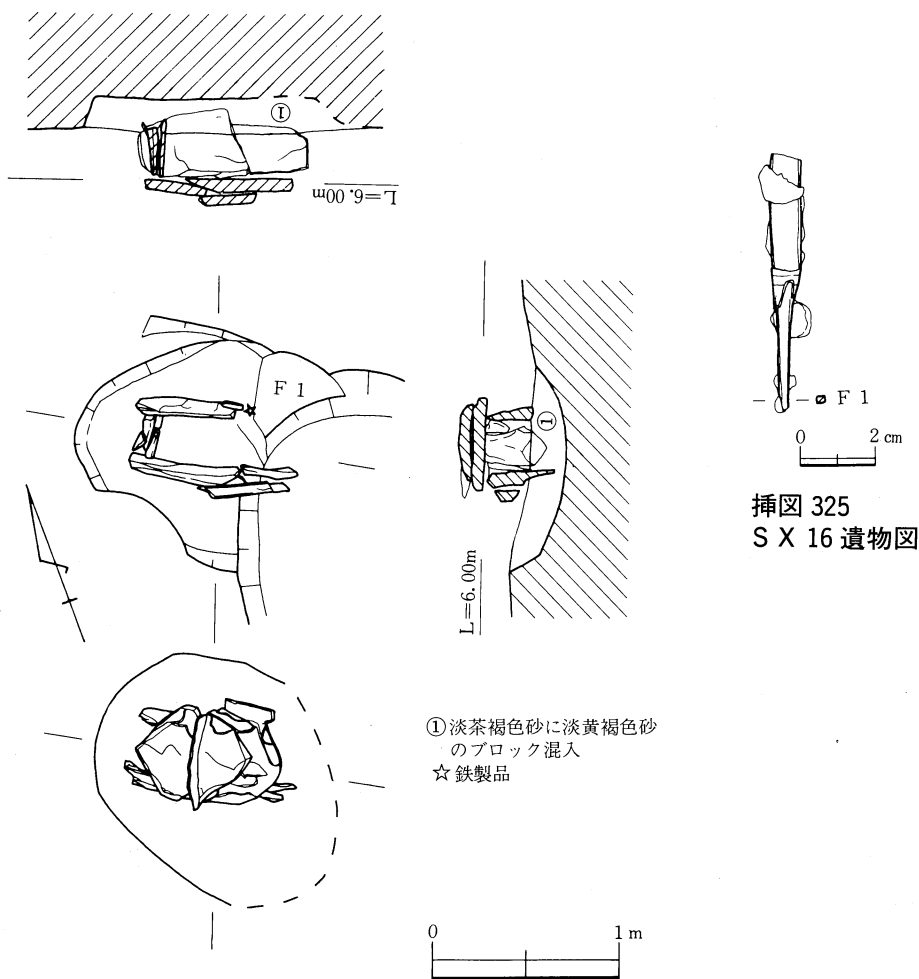
14 I 地区の北西にあり，S X 16の北側に位置する。主軸をN-120°-Eにとる箱式石棺で上段は長辺1.46m，短辺1.46m，1.05mの二段の掘り方をもつ。石棺は長辺0.55m，短辺0.23m，床面までの深さ0.28mを測る。蓋石は6枚からなり，側壁は北が2枚，南が1枚の石で，小口は東西ともに2枚の石でつくられる。西側の側壁の外には，天井石とも小口石ともわからない石材が1枚みられる。棺内南東側には，板石を組み合わせたV字状の石枕がみられる。副葬品，骨，歯などの出土はなかった。^{註6}



挿図 323 S X 15 遺構図

b S X 16 (挿図324・325, 図版95・96)

S X 15同様14 I 地区の北西に位置する。主軸をN-60°-Wにとる箱式石棺であるが、南側は壊されて掘り方、石棺の規模ははっきりしない。掘り方は残存部の長辺1.0m, 短辺1.2mを測り、石棺の残存部は長辺0.56m, 短辺0.26m, 床面までの深さ0.24mを測る。蓋石は3枚の板石を利用してあり、棺内副葬品、骨、歯などはみられなかったが、北側の側壁の抜き取り穴から鉄鏃 (F 1) 1点の検出があった。

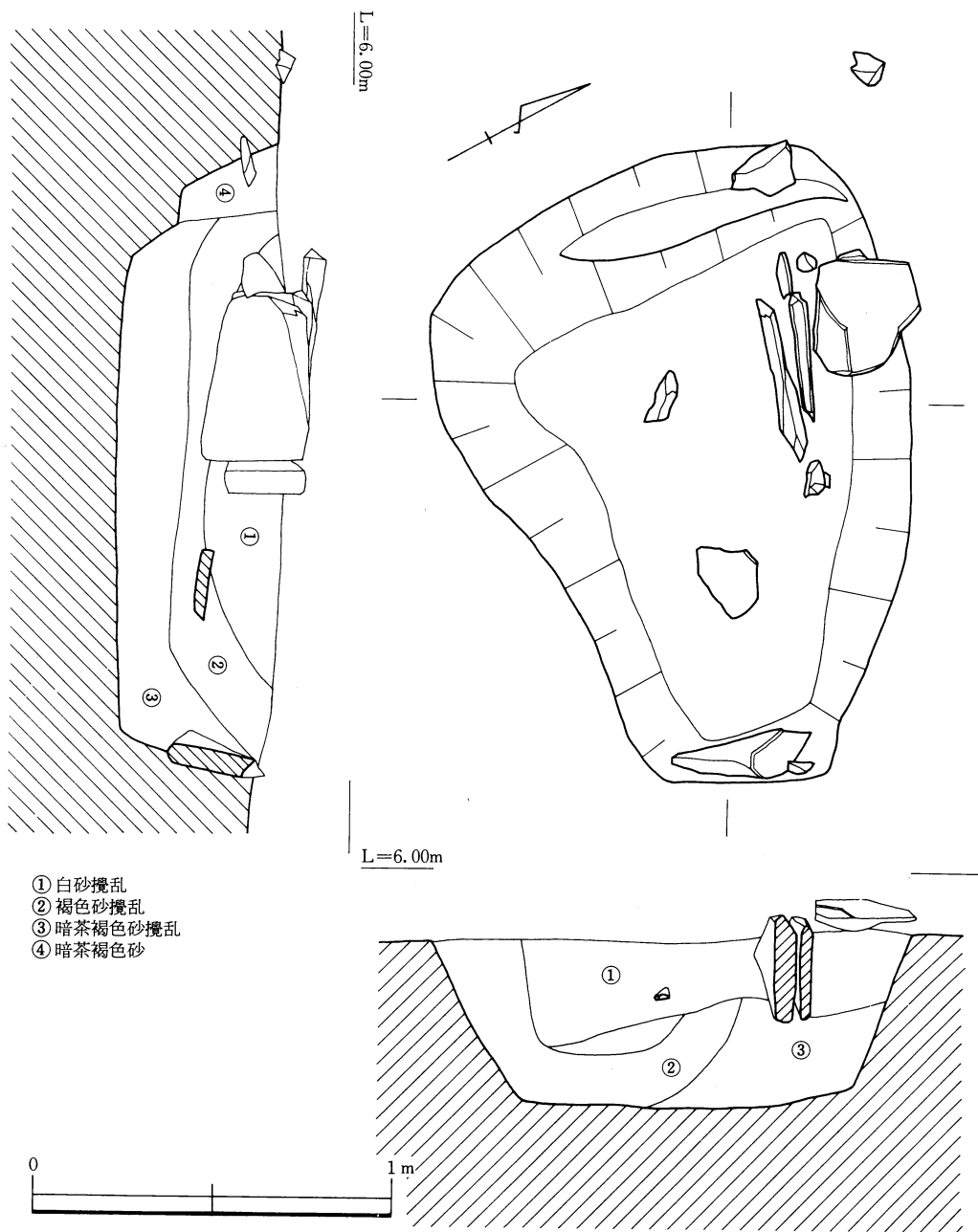


挿図 324 S X 16 遺構図

挿図 325
S X 16 遺物図

c S X 18 (挿図326)

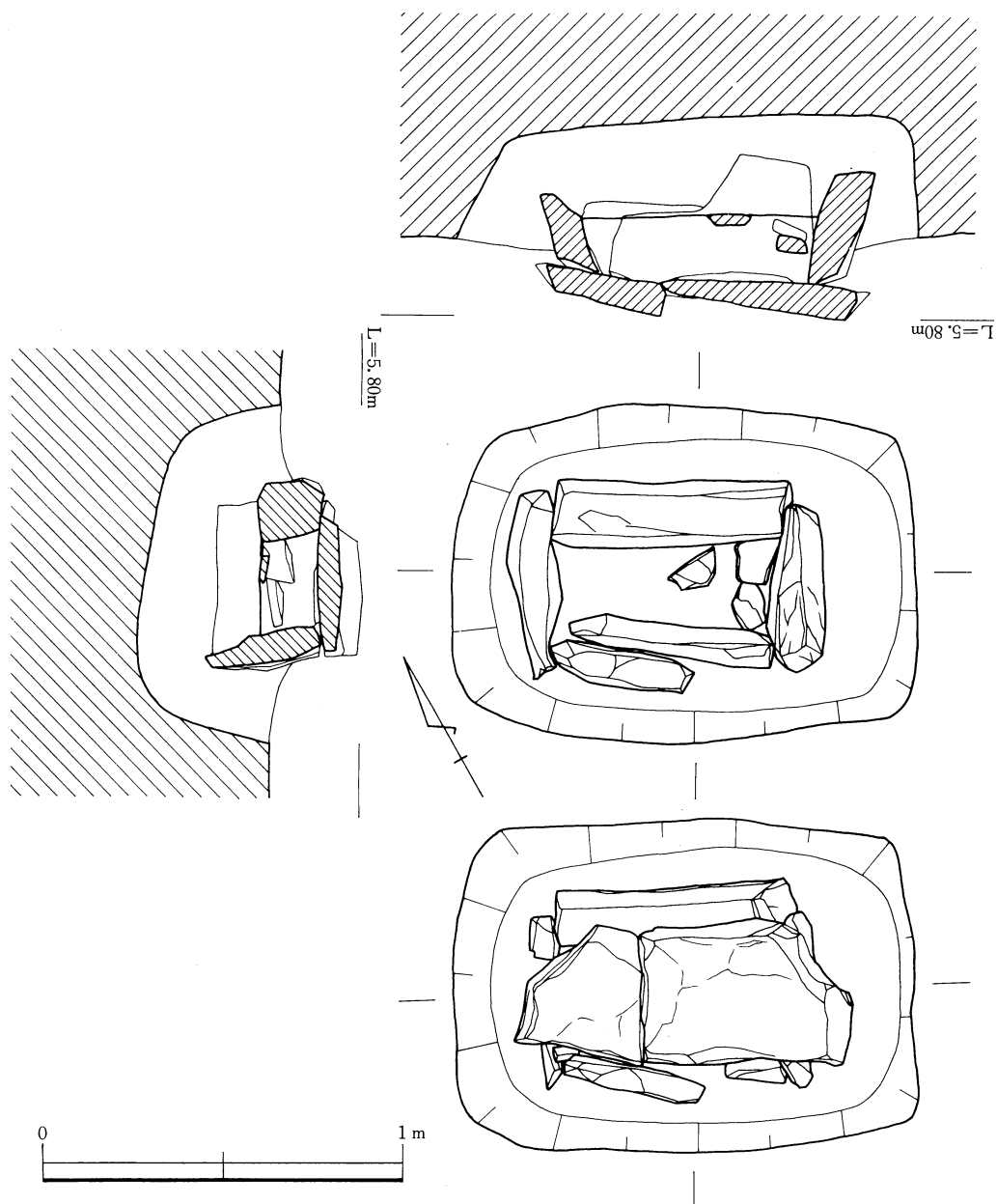
11G地区の南西に位置し、S I 33の上層にある。攪乱をうけているため石棺の形態を
とどめていないが、側壁の一部と思われる石材と数片の石材片を検出した。小型箱式石棺が
つくられていたものと考えられる。主軸はN-29°-Eの方向にとるものと思われるが確か
ではない。



挿図 326 S X 18 遺構図

d SX19 (挿図327, 図版96)

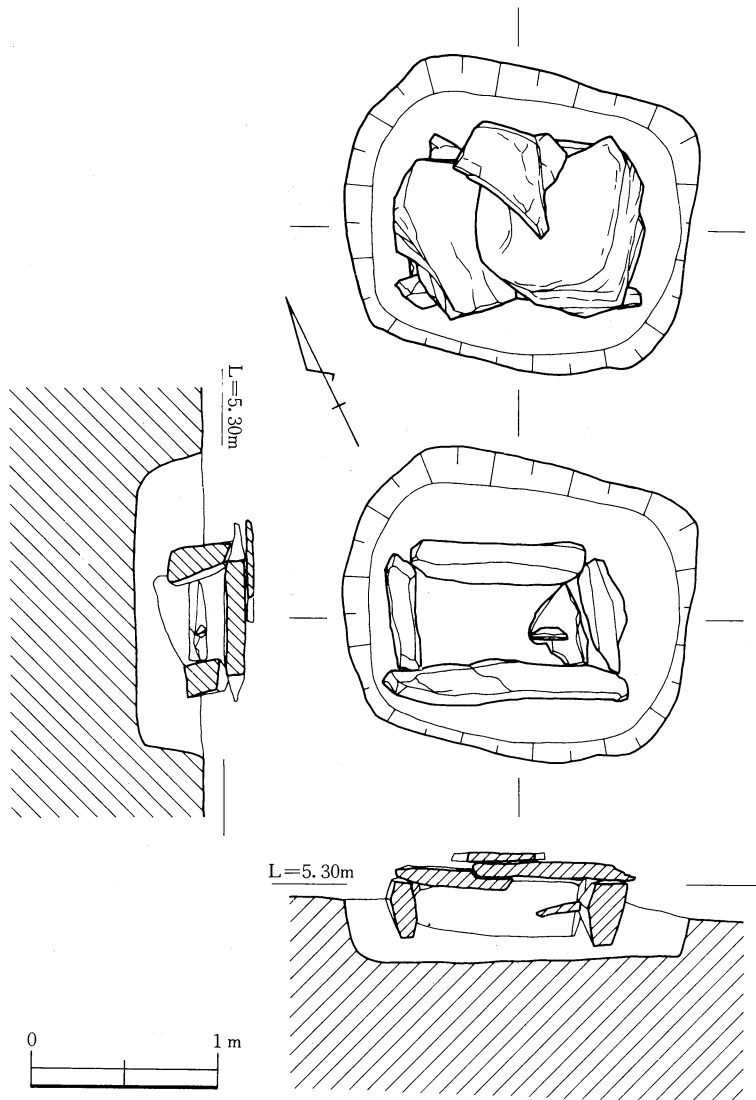
12G地区の南東に位置し, S I 35の上層にある。主軸をN-120°-Eにとる箱式石棺で長辺1.28m, 短辺0.91m, 深さ0.38mの墓壇内に長辺0.58m, 短辺0.22m, 床面までの深さ0.17mを測る石棺をもつ。棺内四面には赤色顔料の塗彩がみられた。また南東側には板石2枚を利用して石枕がつくられていた。蓋石は厚めの板石2枚を利用してつくられ, 側壁, 小口もしっかりしていた。棺内副葬品, 骨, 歯などの検出はなかった。



挿図 327 SX 19 遺構図

e S X 20 (挿図328, 図版96・97)

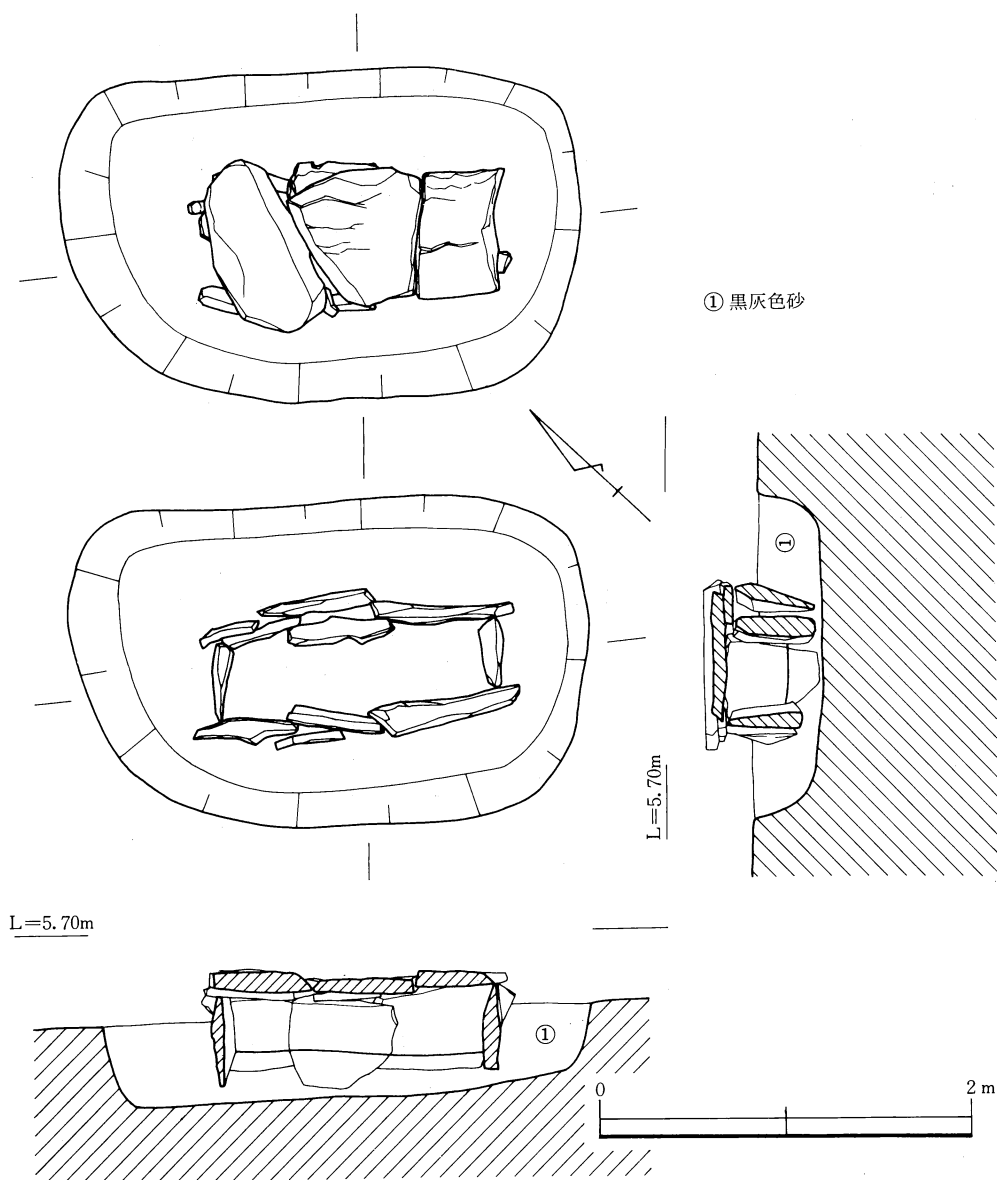
12F地区の北東に位置し, S I 34の上層にある。主軸をN-117°-Eにとる箱式石棺で長辺1.8m, 短辺1.6mの墓壇内に, 長辺0.9m, 東側の南北0.44m, 中央で0.4m, 西側の南北0.46m, 床面までの深さ0.4mを測る石棺をもつ。棺内東側には三角状の板石1枚を利用した石枕が置かれていたが, 骨, 歯などの出土はなかった。蓋石は板石を3枚利用してつくられていた。



挿図 328 S X 20 遺構図

f S X 21 (挿図329, 図版97)

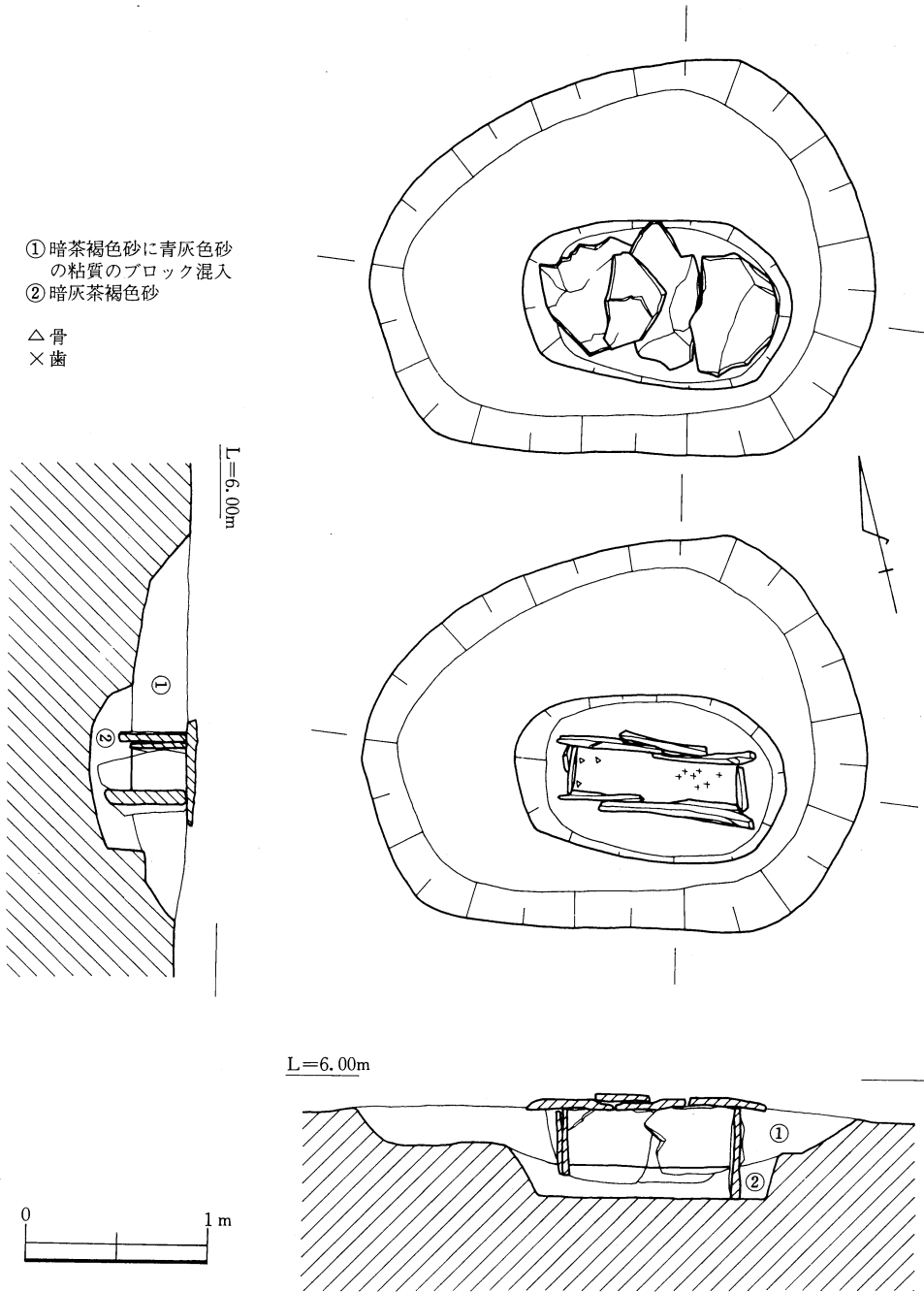
12F地区の北西に位置し、S I 38の西側にある。主軸をN-48°-Wにとる箱式石棺で長辺2.72m、短辺1.72mの小判形の掘り方をもつ。石棺に比較して掘り方が大きすぎるきらいはあるが、埋砂も黒灰色で色別が困難であった。石棺は掘り方中央部にあり、長辺1.36m、短辺0.4m、床面までの深さは0.32mであった。棺内四面には赤色顔料の塗彩が認められる。蓋石は3枚、東西側壁は4枚、南北の小口石は1枚の石でつくられている。棺内から骨、歯などの出土は認められなかった。



挿図 329 S X 21 遺構図

g S X 23 (挿図330, 図版97・98)

12G地区の北西に位置し, 北に3号墳を望み, 主軸をN-110°-Eにとる箱式石棺で長辺2.74m・1.92m, 短辺2.12m・0.92m, 深さ0.48mの二段の掘り方内に, 長辺0.88m, 短辺0.24m, 床面までの深さ0.30mの石棺をもつ。棺内からは骨, 歯がわずかにみられた。



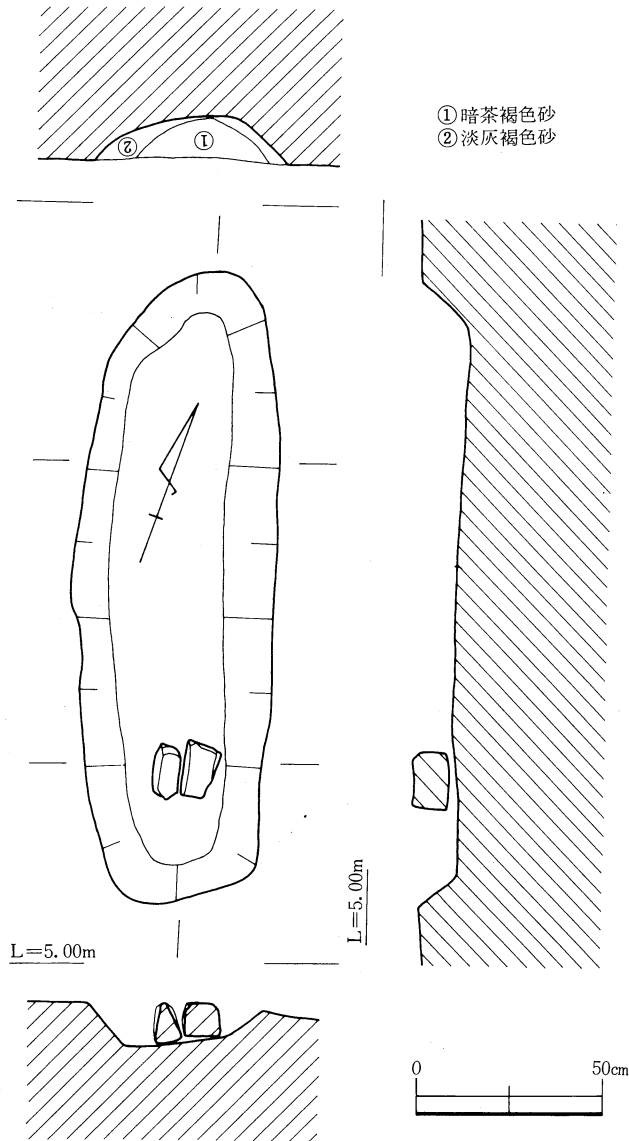
挿図 330 S X 23 遺構図

(2) 土 墳 墓

土墳墓は10号墳の北西14・15J地区に各1基，3号墳の南側11G地区に1基の計3基を検出した。土墳墓も小型箱式石棺同様黒砂層から検出され，作られた時期も小型箱式石棺と変わらず，古墳時代と考えられる。

a S X 13 (挿図331)

14J地区の南西にあり，10号墳の北西に位置する。主軸をN-16°-Wにとる長辺1.67m，短辺0.53m，深さ0.15mの土墳墓である。南側には石を2個利用して，石枕が設けられていた。

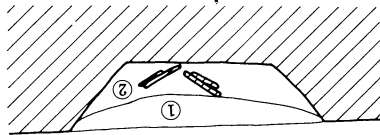


挿図 331 S X 13 遺構図

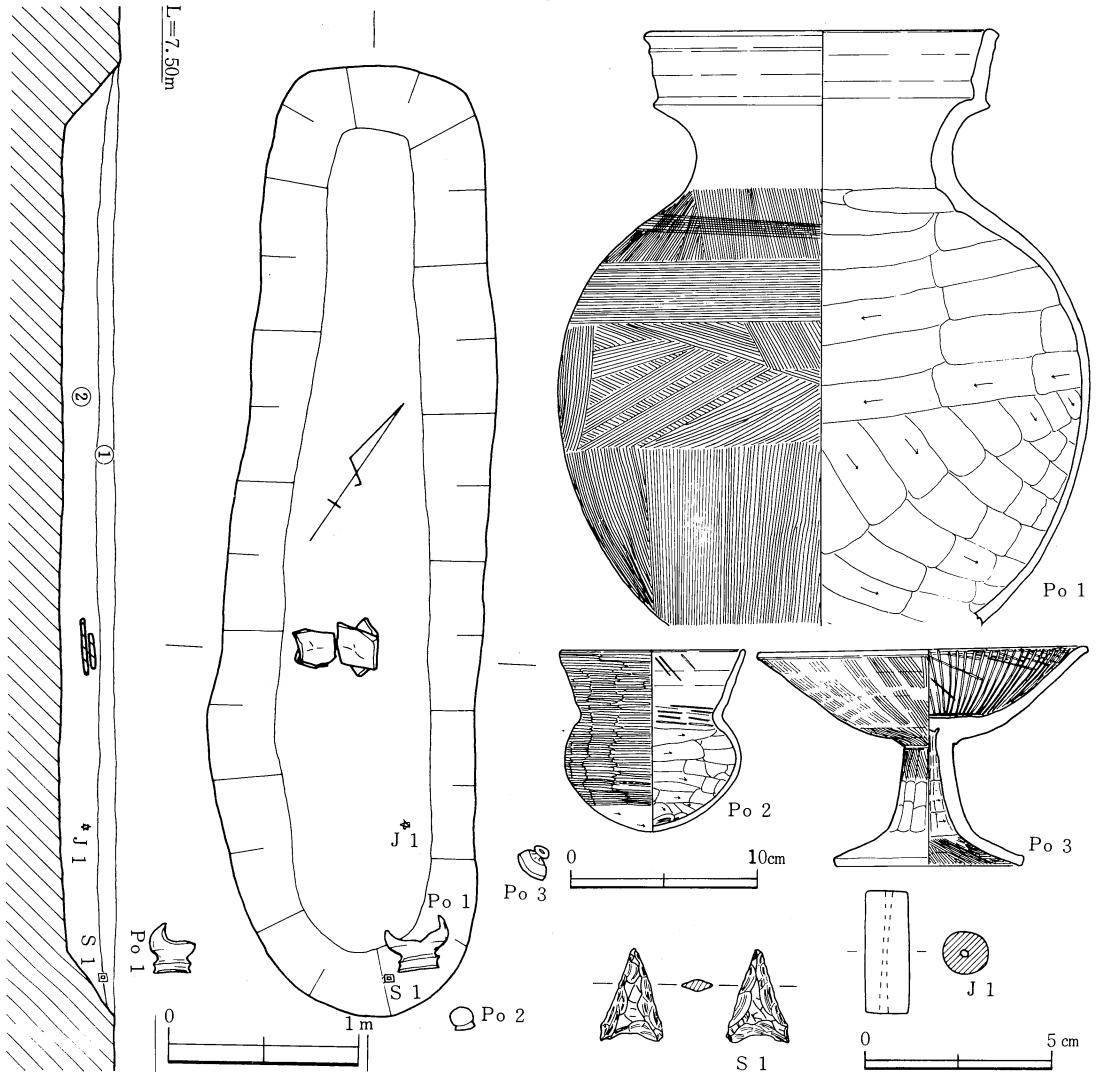
b S X 14 (挿図332・333, 図版98・111)

15 J 地区の南西にあり, S X 13より西へ20mのライン上に位置する。主軸をN-35°-Wにとる長辺5.04m, 短辺1.4m, 深さ0.3mの土壌墓である。墓墳内の中央よりには2枚の板石を利用して石枕がつくられ, 東側からは硬玉製管玉(J 1), 東側の壁面に接して石鏃(S 1)が, 墓墳直上で壺(P o 1), 墓墳肩付近で小型丸底壺(P o 2), 高杯(P o 3)が出土している。これらの遺物よりS X 14の時期は, 古墳時代前期後半と考えられる^{註7}。

- ① 暗茶褐色砂
- ② 褐灰色砂
- 石鏃
- ☆ 玉



L=7.50m

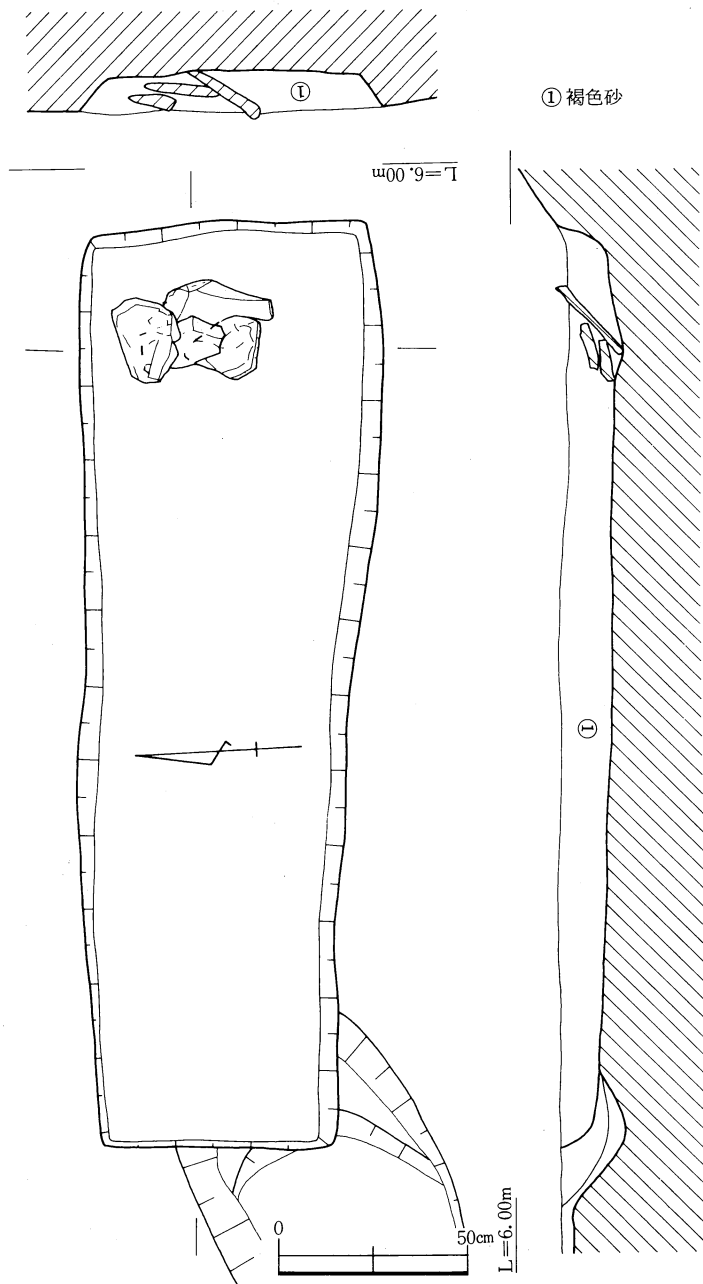


挿図 332 S X 14 遺構図

挿図 333 S X 14 遺物図

c S X 17 (挿図334, 図版98)

11G地区北西区に位置し、3号墳の南側にある。主軸をN-93°-Eにとる長辺2.46m、短辺東側0.8m・西側0.64m、深さ0.12mの土壇墓である。墓壇内の東側には、4枚の板石を組み合わせて石枕がつくられている。墓壇内からは副葬品はみられず、石枕の西側から数点の歯を検出したただけであった。



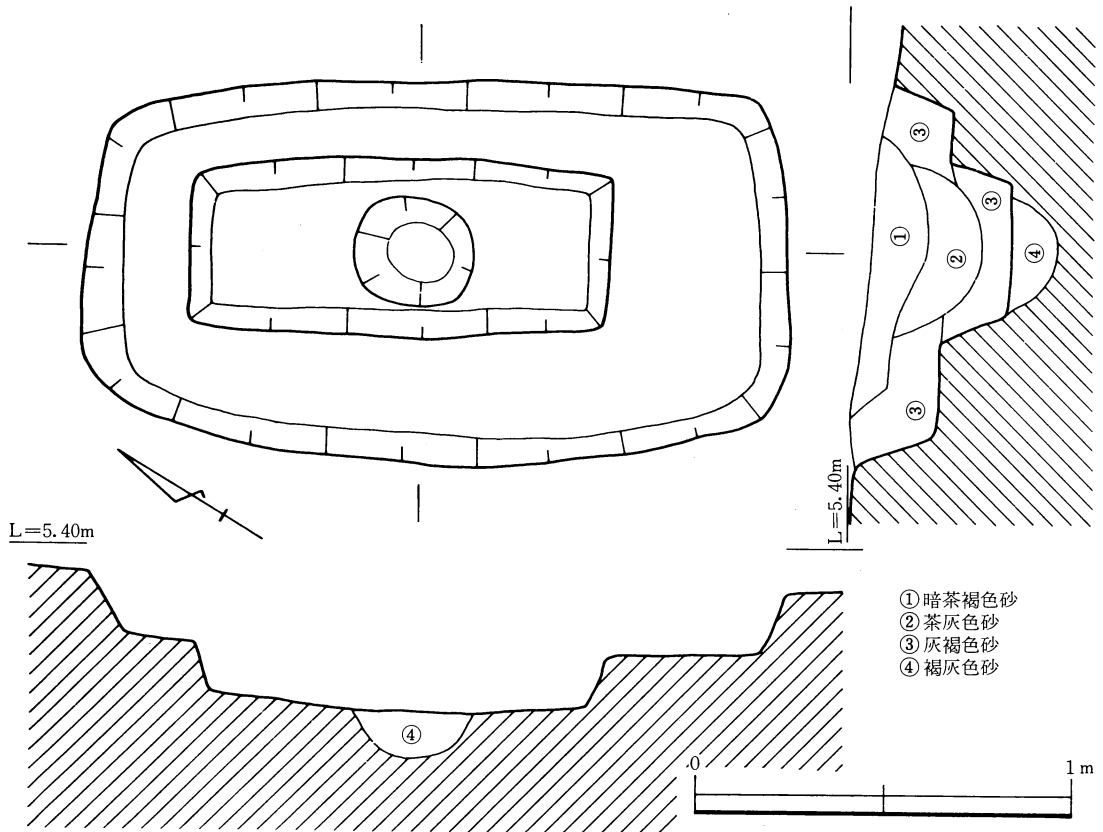
挿図 334 S X 17 遺構図

9 飛鳥時代の墳墓

遺跡は11～17D地区が高く北に向って急傾斜しているが、その高い地区の南側は風で吹き飛ばされている。本来Dラインはもう少し高かったと思われる。このような地形をもったEラインからDラインにかけて、飛鳥時代の墳墓と思われる埋葬施設がみられる。このほかにも中世の遺構が確認されている。13・14E地区には土壙墓1基、木棺墓2基、12・13D地区には土壙墓1基、木棺墓4基の計8基の埋葬施設がみられた。また、Eラインより北14F地区に木棺墓1基も検出されている。

(1) S X A 01 (挿図335, 図版98)

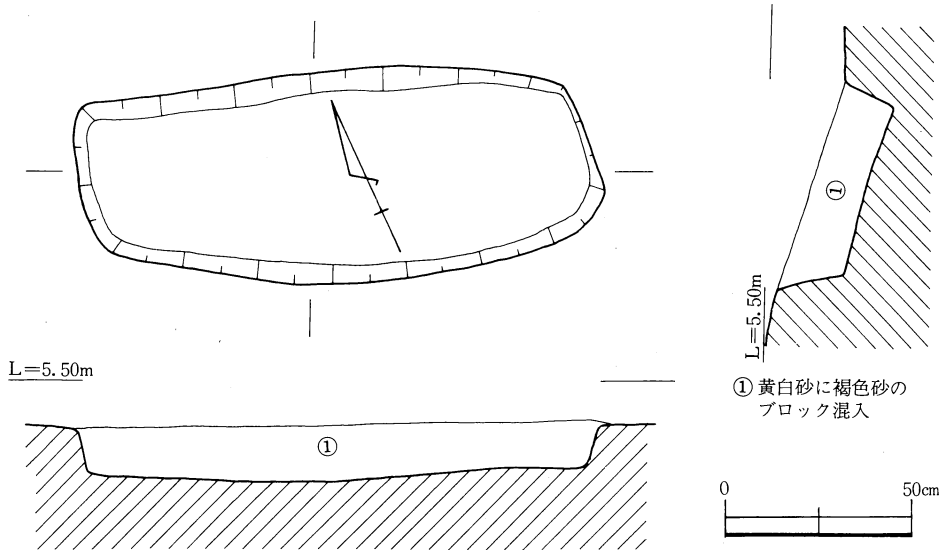
14E地区の北側に位置し、主軸をN-32°-Wにとる。長辺1.84m、短辺1.0m、深さ0.37mの墓壙内に長辺1.1m、短辺0.47mの木棺部を検出した。遺物などは認められなかった。木棺部中央部の下にピットらしい落ち込みがみられるが、S X A 01に関係するものであるかどうかは不明である。



挿図 335 S X A 01 遺構図

(2) S X A 02 (挿図336, 図版99)

13E地区の南側に位置する土墳墓で、南西方向にS X A 03がある。主軸をN-65°-Wにとり、長辺1.37m、短辺0.56m、深さ0.15mを測る。墓墳内に遺物などはみられず、南側にむかって高くなる。



挿図 336 S X A 02 遺構図

(3) S X A 03 (挿図337・338, 図版99・111)

S X A 02と同様13E地区の南西に位置する木棺墓で主軸をN-61°-Wにとる。長辺2.44m、短辺0.86m、深さ0.29mの墓墳内に長辺2.02m、短辺0.53mの棺部を検出した。埋砂は黒褐色砂で、棺部上層で供献土器と思われる須恵器杯身(Po1)を確認した。この供献土器から、S X A 03の作られた時期は飛鳥時代と考えられよう。

(4) S X A 04 (挿図339, 図版99)

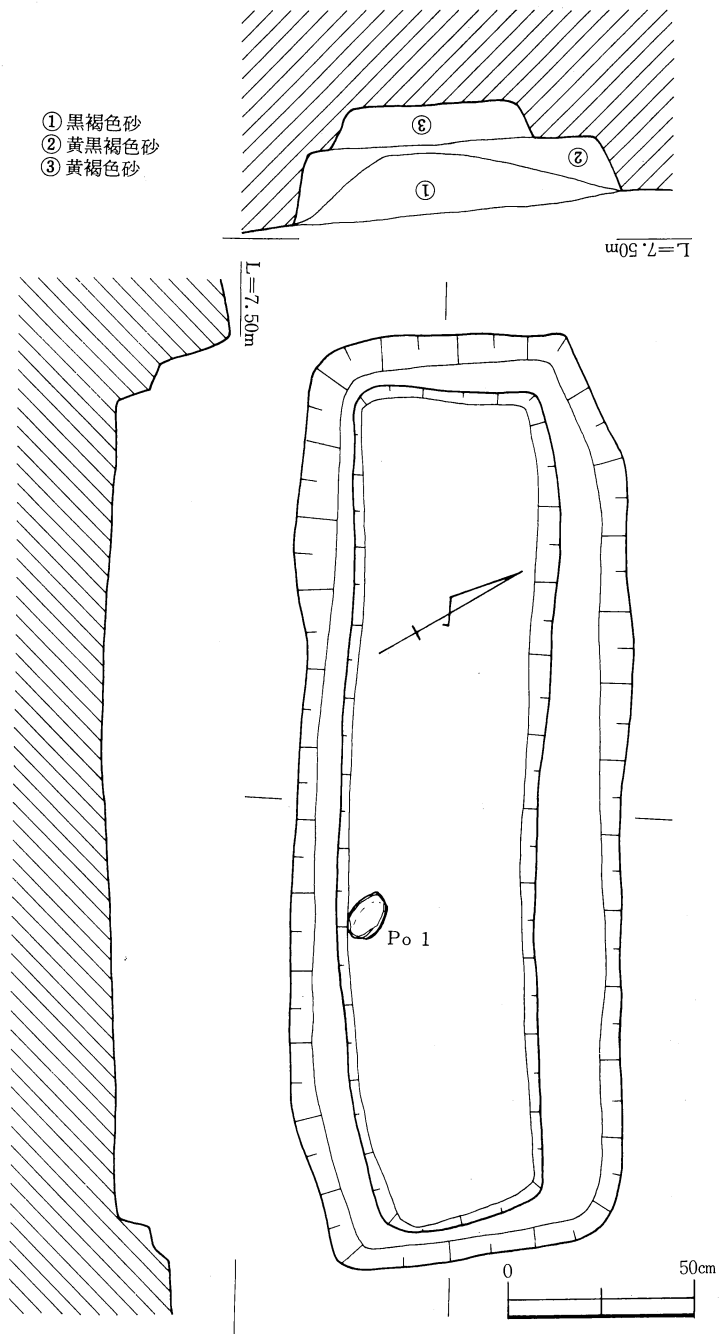
13D地区の北西に位置する木棺墓である。主軸をN-62°-Wにとり長辺2.3m、短辺0.82m、深さ0.25mの墓墳内に長辺2.04m、短辺0.52mの木棺部をもつ。埋葬施設内からは、遺物などの出土はみられなかった。

(5) S X A 05 (挿図340, 図版99)

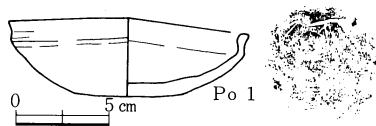
13D地区の北西に位置し、S I 68の北側肩部を少し切ってつくられている土墳墓で、主軸をN-83°-Wにとる。長辺2.2m、短辺0.67m、深さ0.17mを測る。埋葬施設からは遺物などの出土はみられなかった。

(6) S X A 06 (挿図341, 図版100)

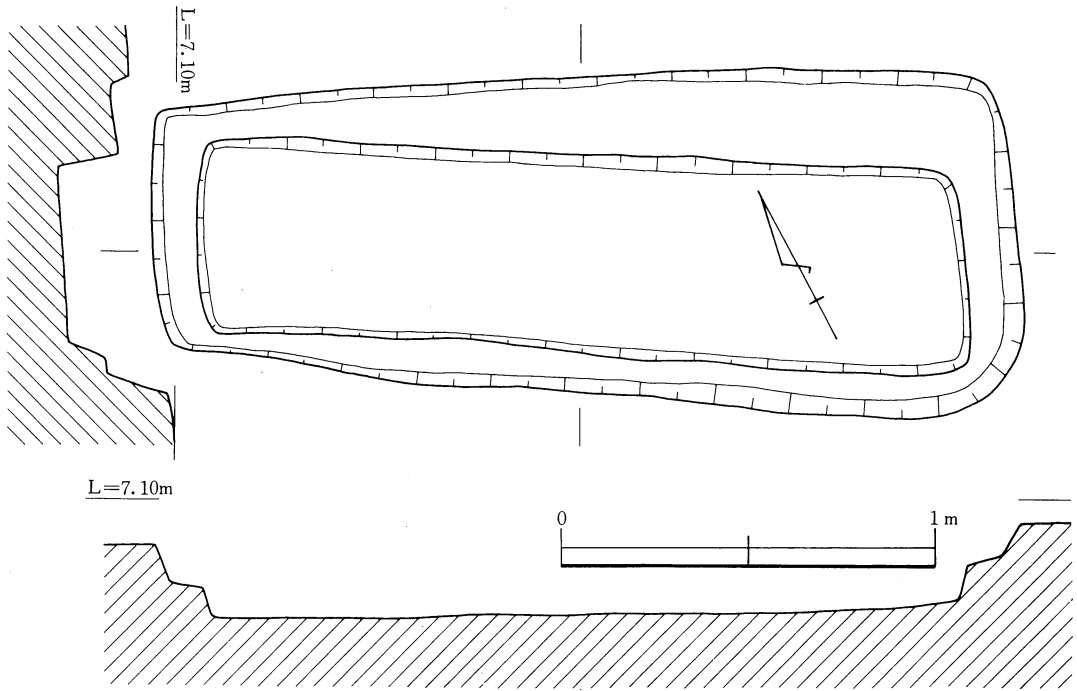
S X A 05の南に位置する木棺墓で、主軸をN-78°-Wにとる。長辺1.9m、短辺1.25m、深さ0.31mの墓墳内に長辺1.3m、短辺0.81mの木棺部をもつ。遺物はみられなかった。



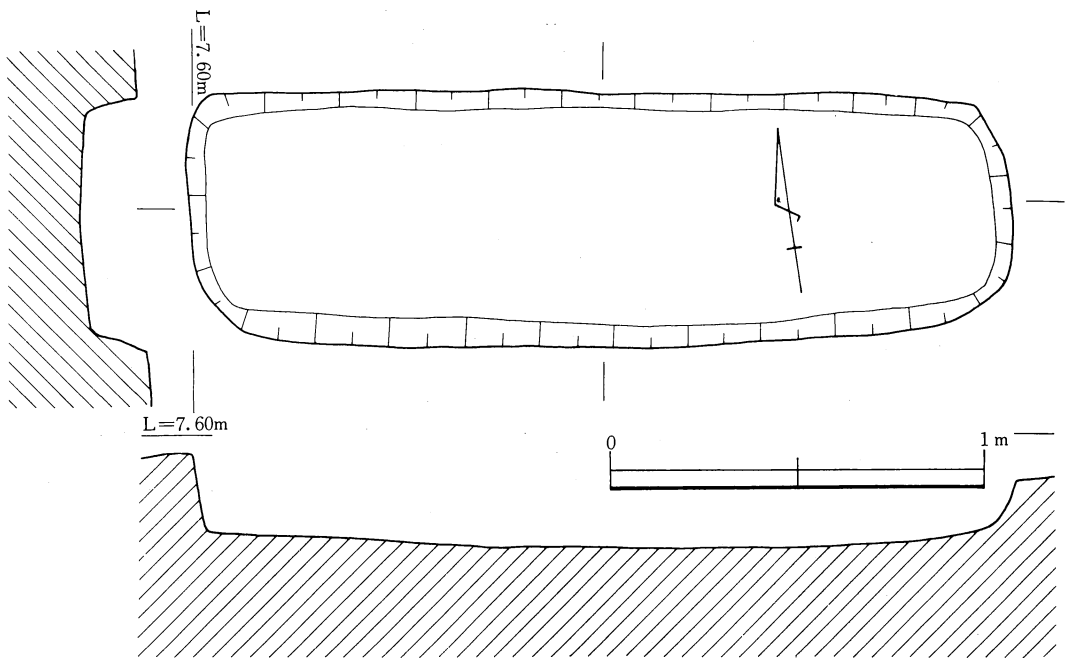
挿図 337 S X A 03 遺構図



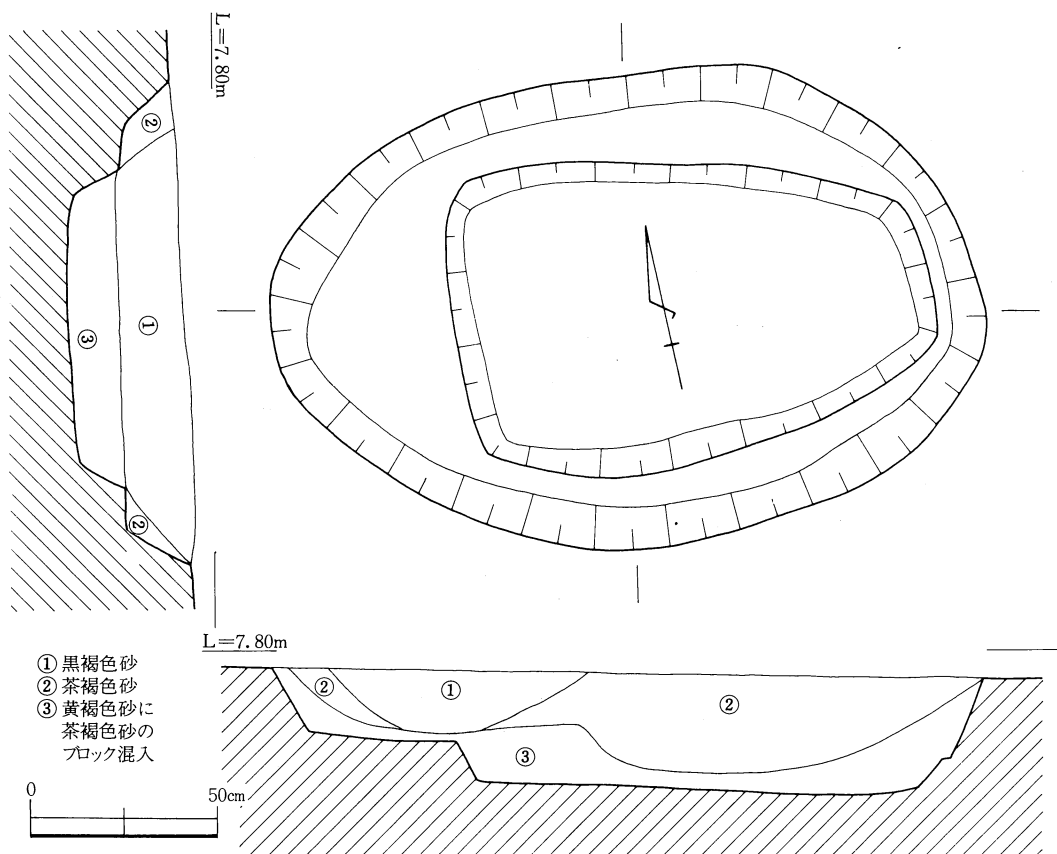
挿図 338 S X A 03 遺物図



挿図 339 S X A 04 遺構図



挿図 340 S X A 05 遺構図

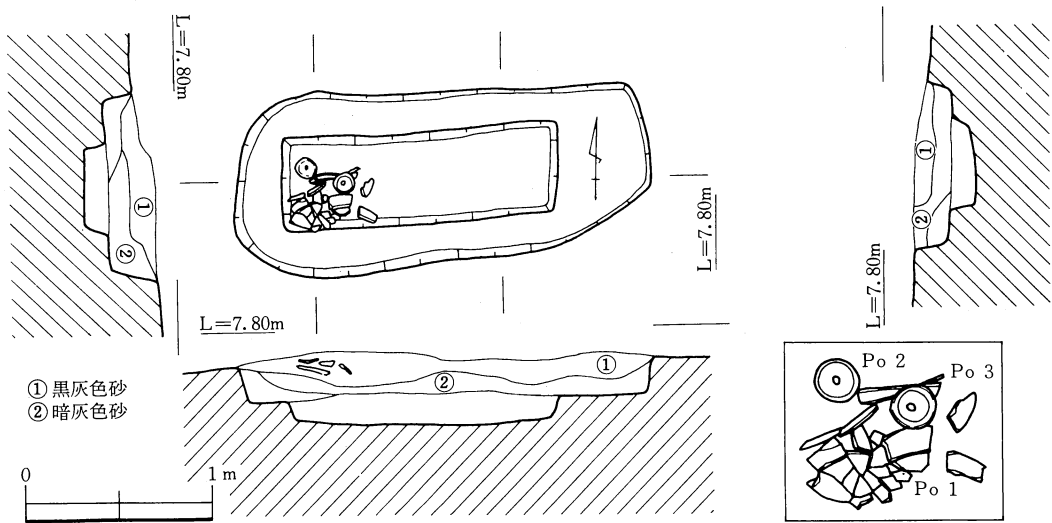


挿図 341 S X A 06 遺構図

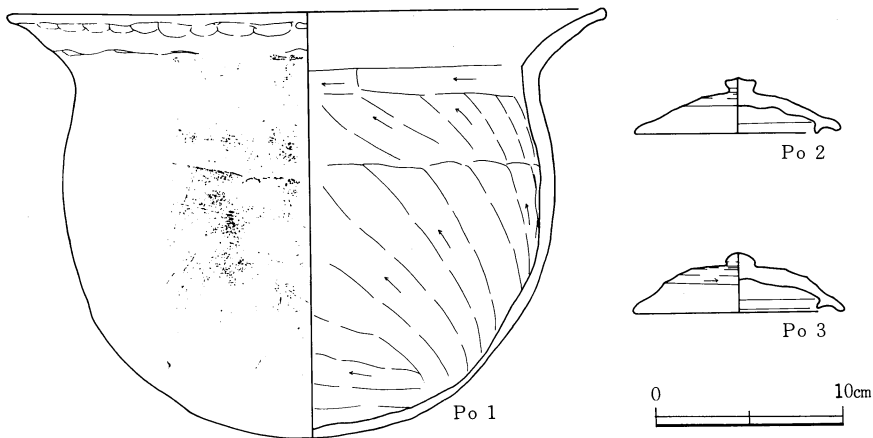
(7) S X A 07 (挿図342・343, 図版100・111)

12D地区の北東に位置し、南西にS X A 08がある。主軸をN-89°-Eにとる。木棺墓で長辺2.2m、短辺1.0mの掘り方の中に、長辺1.48m、短辺0.5m、深さ0.15mの木棺部をもつ。埋砂は黒褐色砂で、その濃淡によりわずかに分層したにすぎない。木棺部西端に供献土器と思われる土師器甕(P o 1)、須恵器蓋(P o 2・3)が置かれていた。遺物は上記の供献土器が3個体あっただけである。甕は割れていたが完全に復元でき、須恵器蓋2個とともに時代を決める良好な資料となった。須恵器蓋はともに小形の宝珠つまみを持ち、内面に返りをもつものである。緊急調査地区出土の須恵器蓋杯群の中にも同じ資料が多く入っており、この時期の遺構がDライン上の高所部には、まだ何基かは存在したものとみられる。甕は大形のもので同じ時期のものである。

これらの出土遺物から、S X A 07は飛鳥時代(7世紀)のものと考えられる。



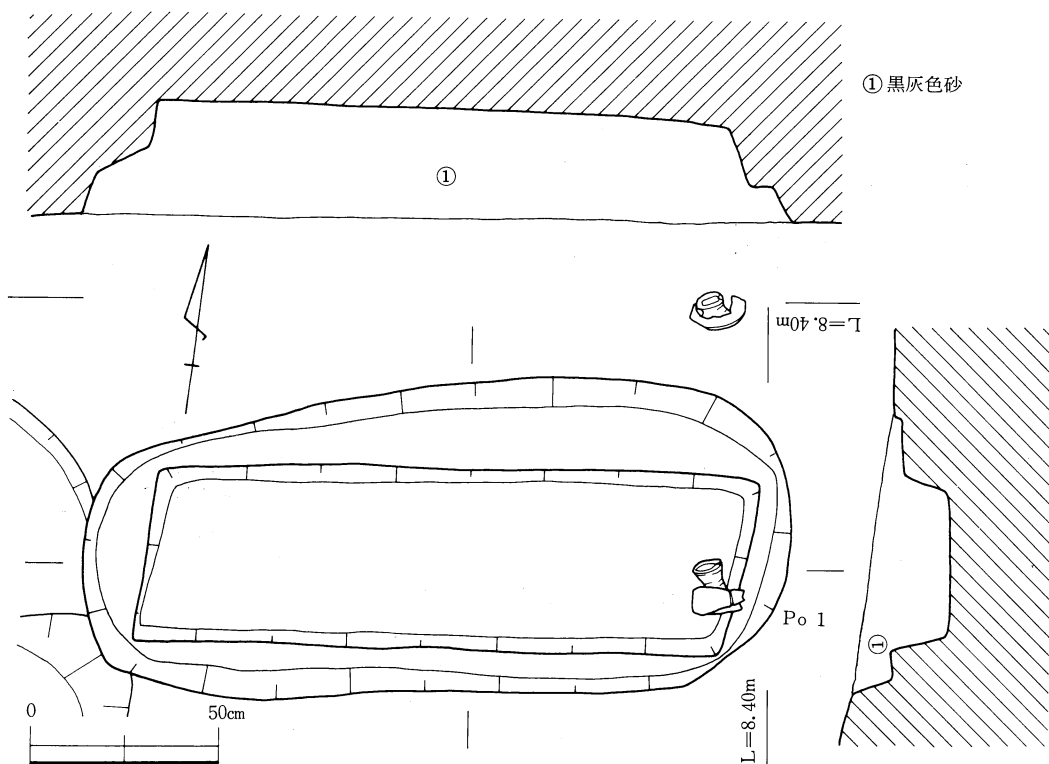
挿図 342 S X A 07 遺構図



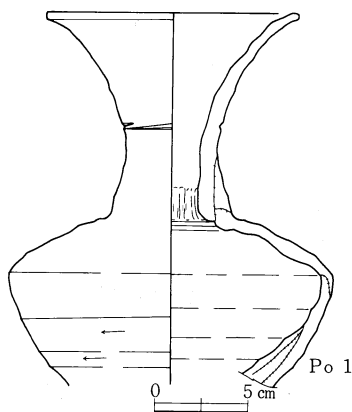
挿図 343 S X A 07 遺物図

(8) S X A 08 (挿図344・345, 図版111)

S X A 07の西に位置し、D地区傾斜面にある木棺墓である。主軸をN-83°-Eにとり、長辺1.87m、短辺0.82mの楕円形の掘り方に長辺1.6m、短辺0.48m、深さ0.15mのやや歪んだ長方形の木棺部をもつ。埋砂は黒灰色砂である。遺物は掘り方の0.5m上層で須恵器長頸壺(Po 1)があった。残念ながら復元しても完形とはならないが、木棺掘り方の上層に置かれていた点、S X A 07と同じありかたであり、長頸壺の時期も一致していることなどから、S X A 08も飛鳥時代の木棺墓と考えられる。



挿図 344 S X A 08 遺構図



挿図 345 S X A 08 遺物図

(9) S X A 09 (挿図346・347, 図版100)

13E地区の北西に位置し、主軸をN-52°-Wにとる土壌墓である。長辺2.65m, 短辺0.6m, 深さ0.2mを測る。南西側は南にむかって高く傾斜している。土壌墓は黄褐色砂を掘り込んでつくられており, 埋砂は黒褐色で明確に分層できた。遺物は鉄鏃が検出された。

10 まとめ

昭和54年度調査地区で調査した墳墓は前述した如く23基(古墳時代14基, 飛鳥時代9基)である。そのうち, 古墳時代の墳墓で周溝をもつ古墳の築造順は3号墳と4号墳の前後関係で, 4号墳築造時期が3号墳にくらべて古いとみられることから, 4号墳, 3号墳, 10号墳, 9号墳, 22号墳, 25号墳となると考えられる。これらの古墳が造られた古墳時代中期中頃から後期にかけて, 小型箱式石棺などの埋葬施設も作られたものと思われる。しかし, SX14のように古墳時代前期後半の土壇墓もみられることから, 長瀬高浜遺跡では竪穴住居が盛んに作られている時期にはすでに墳墓も作り始められていたといえよう。

さて, 長瀬高浜遺跡では埋葬施設内に枕をもつものが少なくないが, これは長瀬高浜遺跡の一つの特徴でもあろう。枕には土器転用の高杯枕^{注8}と平石又は板石を利用した石枕がみられる。高杯枕をもつものは3基, 石枕をもつものは8基であるが, 枕と埋葬施設との関係などは問題点として, 55~57年度の調査を進めてゆく段階で少しでも明らかにしていきたい。また, 県内各地から出土している土器枕, 石枕などの広がりや範囲, 埋葬形態, 築造方法などとの関係も今後の課題である。

注1 京都大学理学部自然人類学教室 池田次郎教授の鑑定をうけた。

注2 注1と同じ

注3 注1と同じ

注4 『長瀬高浜遺跡』概報Ⅲ 鳥取県教育文化財団 1980 P17

注5 注4と同じ P14

注6 注4と同じ P12

注7 注4と同じ P13

注8 「長瀬高浜だより」 25号参照

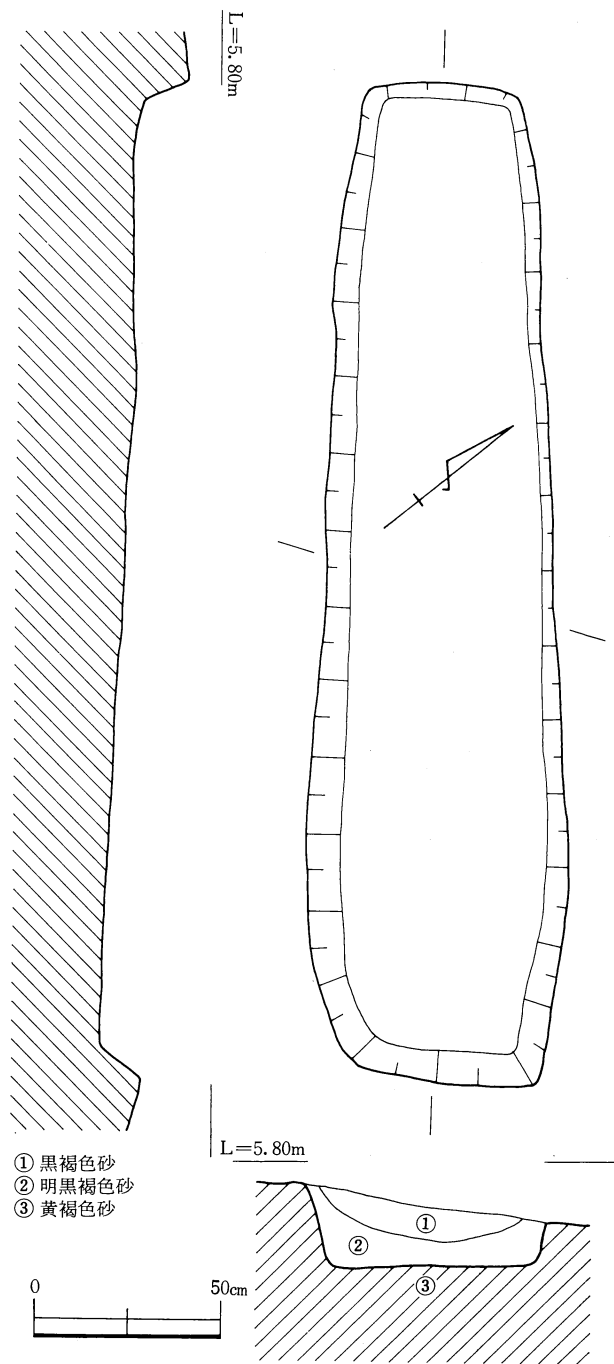


插图 346 S X A 09 遺構図

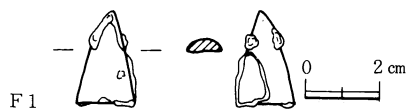
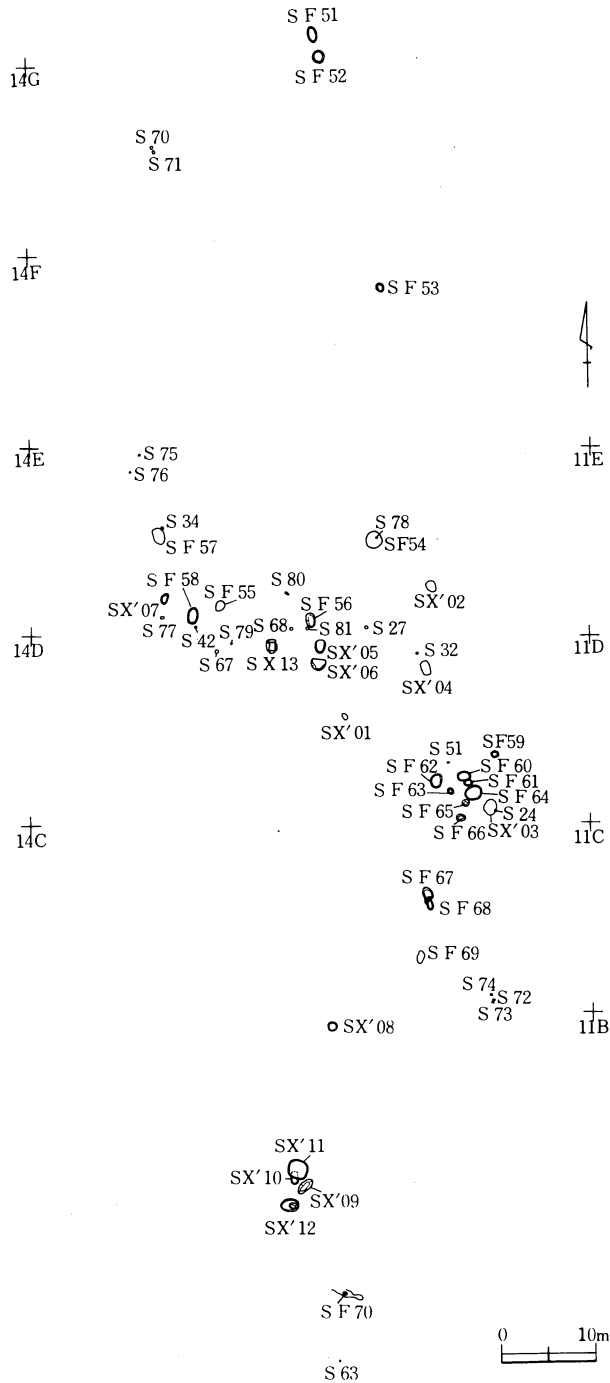


插图 347 S X A 09 遺物図

第5節 中世墓 (S F・S X') (挿図348)

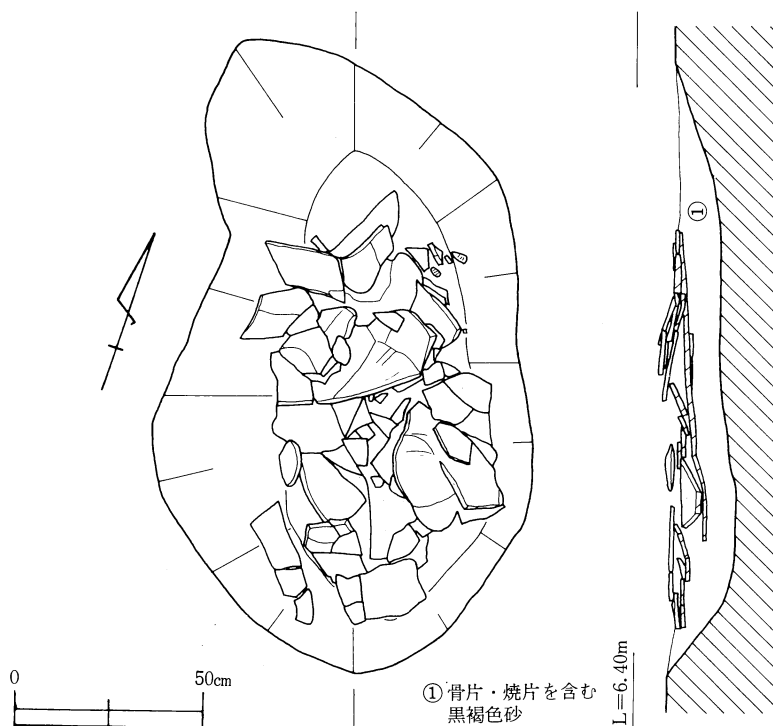
54年度調査地区内に中世墓は33基検出された。内訳は火葬墓20基，土壙・木棺墓10基，石棺墓他2基，土器棺墓1基である。大部分はEラインより南に集中している。



挿図 348 中世墓遺構図

S F 51 (挿図349, 図版112)

3号墳の墳丘の南西側に火葬墓を2基検出した。墳丘に近い方のS F 51は、墓壇の南側がややふくらんだ楕円形を呈し、主軸はN-17°-Wを測る。遺構は長軸1.80m, 短軸0.91mで、深さ14cmほど掘り込み、底に安山岩の剝片を多数敷き並べたものである。火葬骨はその周辺・上部に細片となって、炭化物と共に検出された。底に敷かれた板石もわずかではあるが火を受けた痕跡が認められる。



挿図 349 S F 51 遺構図

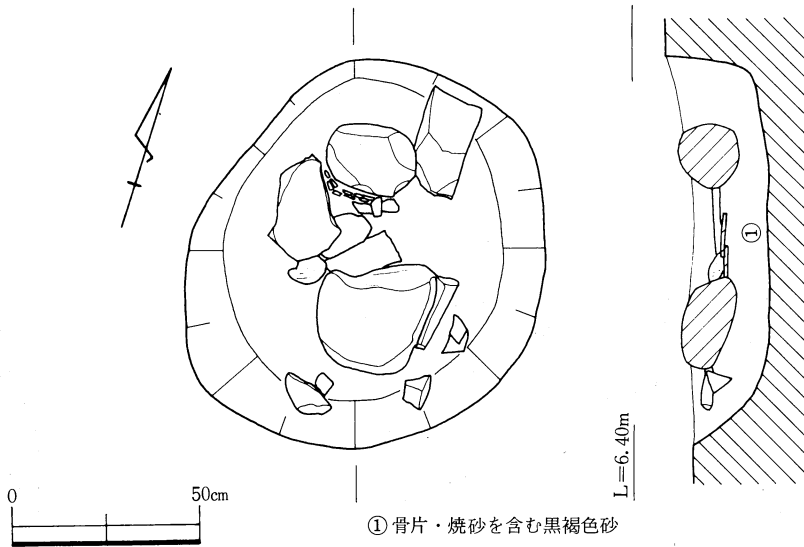
S F 52 (挿図350, 図版112)

周溝に近いS F 52の墓壇は楕円形を呈し、主軸はN-15°-Eを測る。その規模は長軸1.24m, 短軸1.05mを測る。遺構は深さ20cmほど掘り込み、底に安山岩のぐり石を主体として敷き並べている。火葬骨はぐり石周辺に細片が密集した状態で炭片と共に多数検出された。

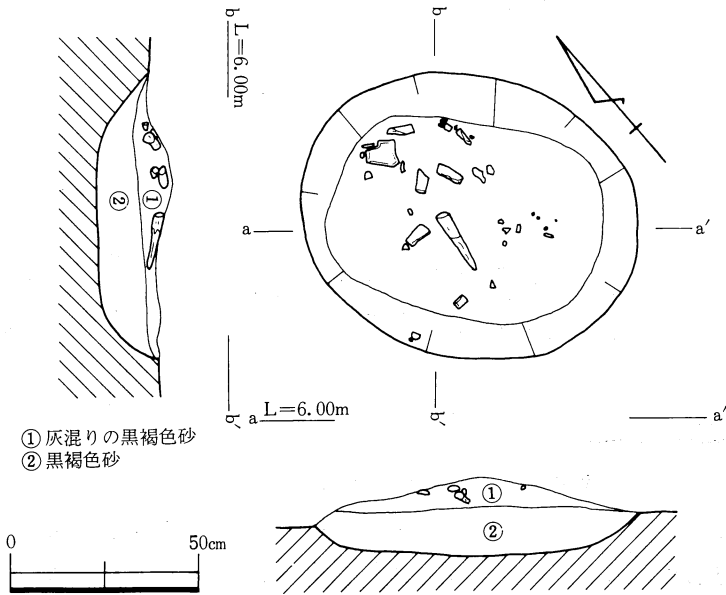
S F 51・52とも出土遺物はないが、中世のものとする。

S F 53 (挿図351, 図版112)

12F地区の北東部, S X 20の南東にあり, S I 34の上面に位置する。平面形は楕円形で長軸93cm, 短軸74cm, 深さ12~18cmを測る土壇墓状を呈し, 主軸はN-30°-Wを測る。土壇内には炭片, 焼灰があり, 炭の厚さは3~8cmを測る。骨片は少量が炭の堆積の中か



挿図 350 S F 52 遺構図



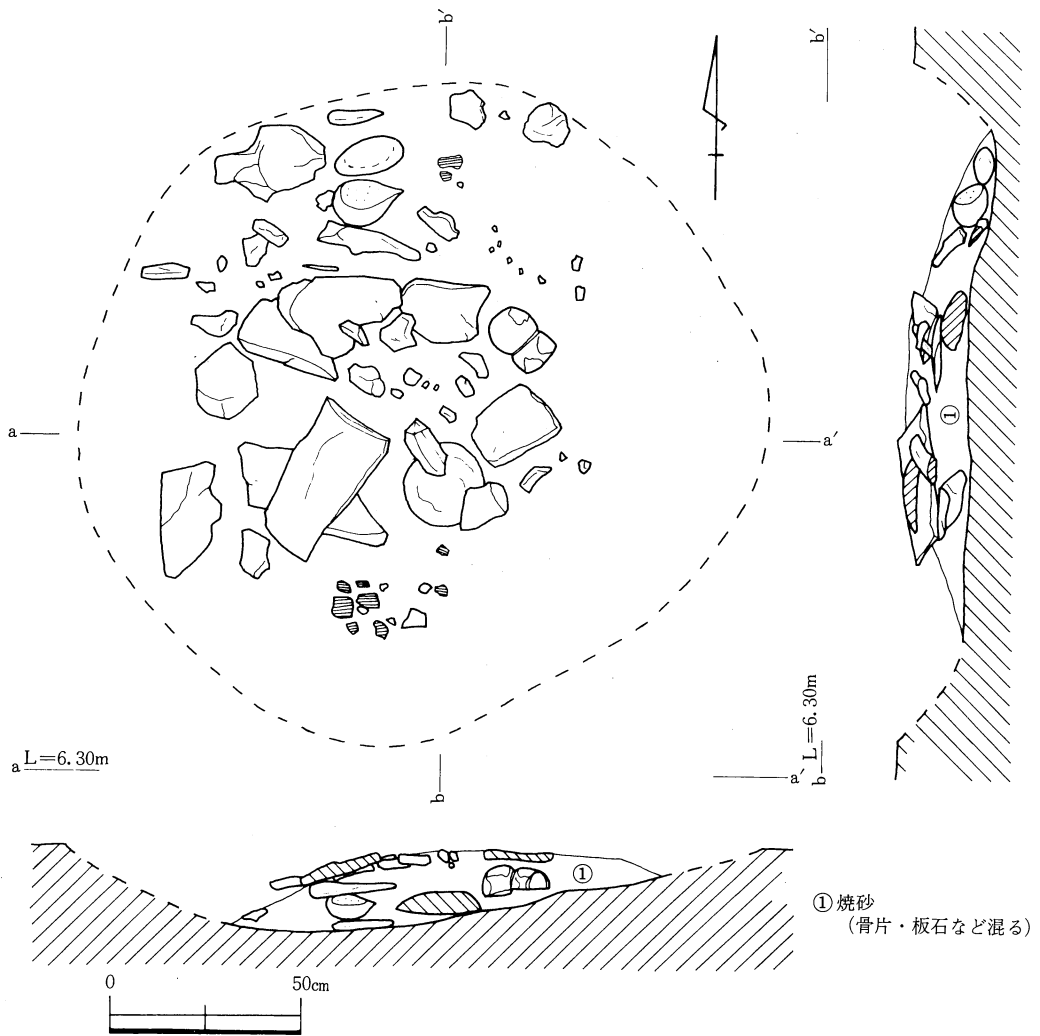
挿図 351 S F 53 遺構図

ら検出されている。底面には平石も検出した。遺物は少量の土師器片が検出されたが図化できなかった。

時期は中世のものであろう。

S F 54 (挿図352, 図版113)

S X 09の西側に位置し、南東にS X'02, 南西にS F 56がある。掘り方は直径1.8mの円形をなし、白砂に約15cm掘り込まれており、そこに不規則に板石を並べて床石としており、Aタイプ^{#1}の火葬墓である。火葬にはかなりの木材が使用されており、炭片が骨片とともに

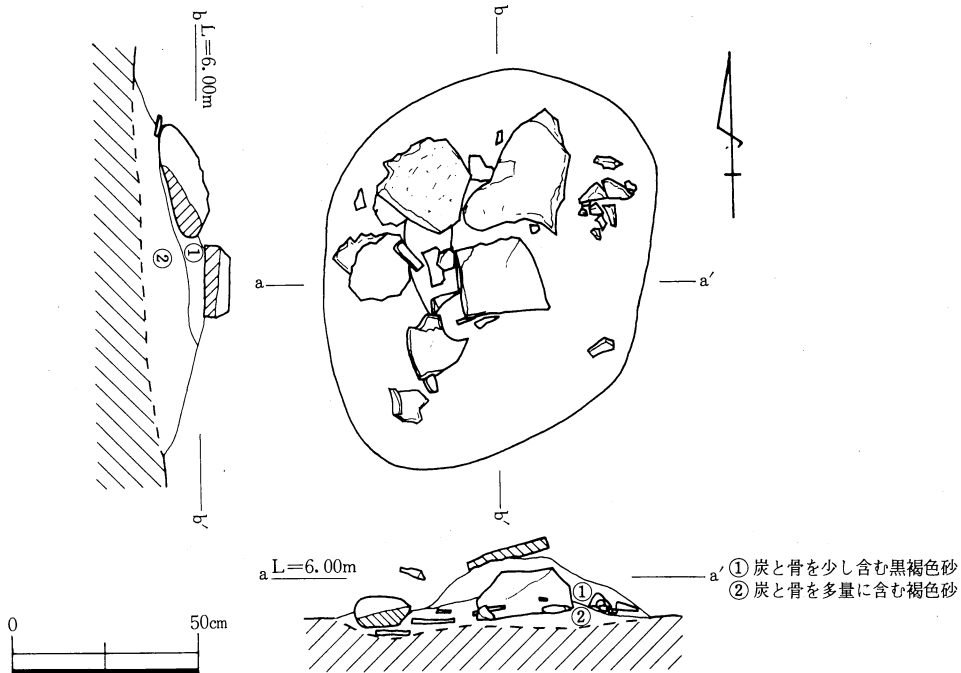


挿図 352 S F 54 遺構図

10cm以上堆積している。この火葬墓内には火を受けた五輪塔の風空輪部（S78）があり、その近くから鉄製の簪^{かんざし}が出土している。南側丘陵部斜面にあった五輪塔を他の石と同様に火中に入れたものとする。風空輪が焼けていること、白砂に掘り込まれていることなどから中世末～近世のものと思われる。

S F 55（挿図353，図版113）

S F 55は12E地区の南西隅にあり，S F 58の東に位置する。この地区は標高6mの平坦な所である。遺構は調査時に上面を掘りすぎたため上縁の大きさは不明であるが，残存部はくずれた楕円形をしており，長軸1.10m，短軸0.85m，深さ約20cmを測る。土壌の下に板石と20～30cmくらいの石を敷いており，その石と石の間に炭と骨が多量に出土した。石は焼けており，所々酸化して赤くなっている。側板状の石はなくやや造りの粗い火葬墓で



挿図 353 S F 55 遺構図

あるが、やや上面に（断面図に見られるように）蓋をしたと思われるような板石が数枚ある。遺物は骨と炭の間に土師器片が少量混入していた。

直接 S F 55 に伴う遺物はないが、中世のものであろう。

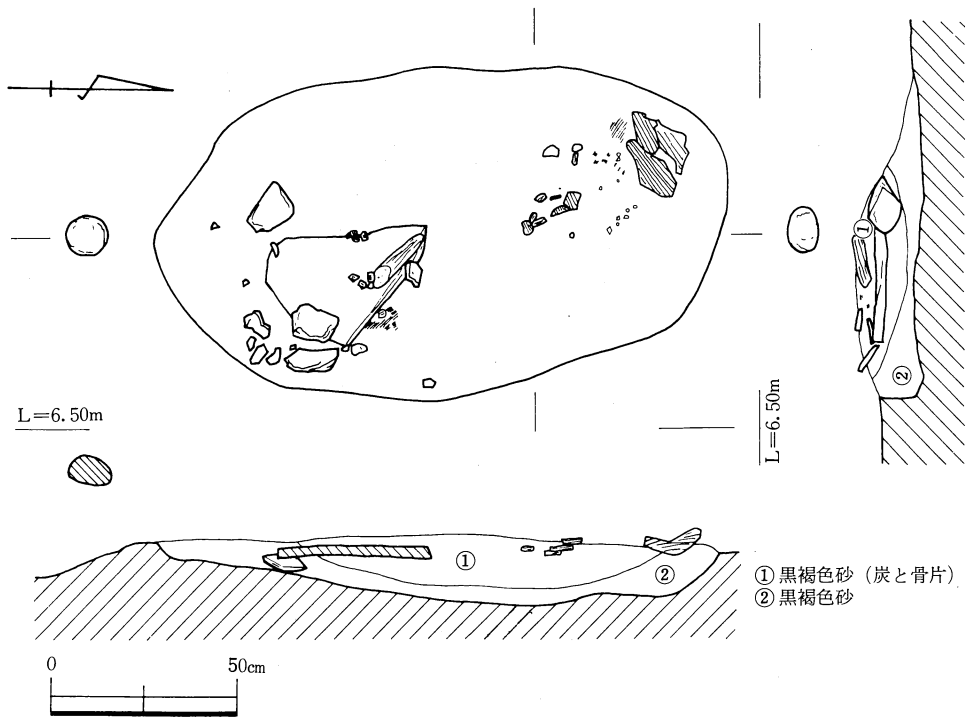
S F 56（挿図 354，図版 113）

12E 地区の南側に位置し、南に屈葬墓 S X'05 がある。この火葬墓は B タイプ²に属するもので石材の使用はみられない。墓壇は長軸 1.0m，短軸 0.89m，深さ 15cm を測り，主軸は N-5°-W を振る。墓壇内には多くの炭片と骨片が含まれているが，北と南の 2ヶ所に炭が集中するとともに，石材が数点みうけられる。土器などの遺物は出土しなかった。この火葬墓の時期は他の火葬墓と同様，中世のものであろう。

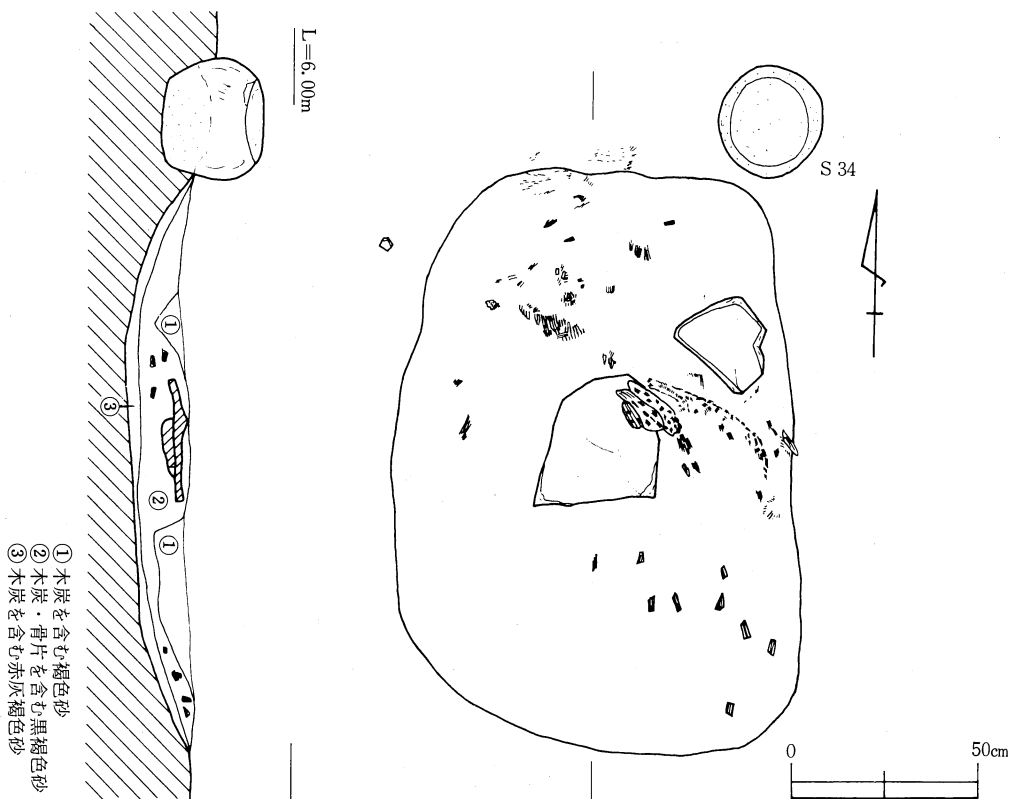
S F 57（挿図 355，図版 113）

S F 57 は南北に長く，隅の丸い方形に広がる状態（長軸 2.14m，短軸 1.20m，主軸 N-5°-W）で木炭の分布が見られた。中央南北に横たわる形で，長さ 90cm，幅 20cm の幹の木炭化したものを確認した。中央部が若干掘り込まれており，木炭が厚い部分は 10cm ほど層をなしていた。この木炭層の中に 3～5mm 程度の骨片を数十片検出し，同層のやや上面に板石を検出した。またこの遺構のすぐ北東に水輪が隣接した状態で出土た。水輪は直接遺構にともなっておらず，層位の識別も困難であったため S F 57 との関係は不明である。

S F 57 に伴う遺物はないが，中世期のものであると考える。



挿図 354 S F 56 遺構図

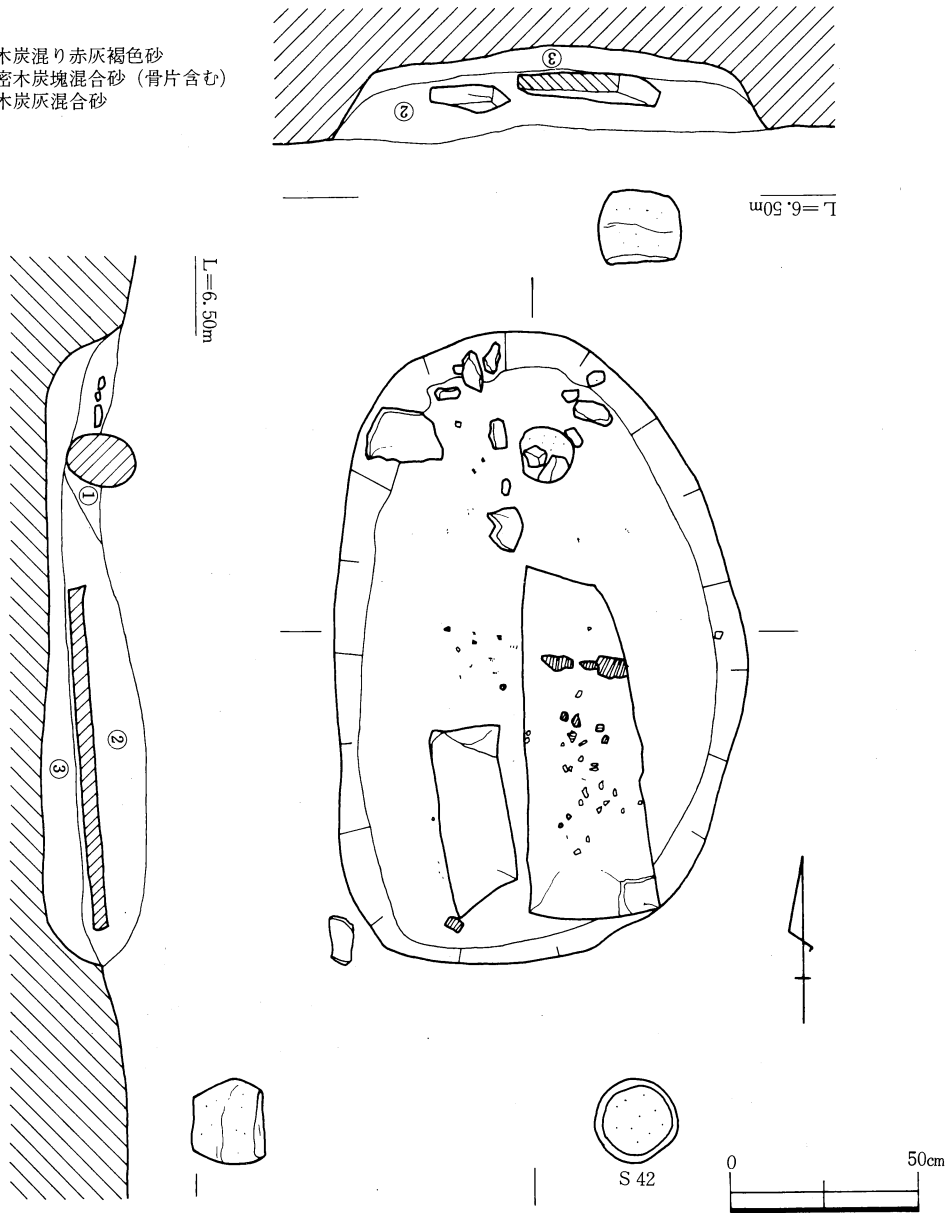


挿図 355 S F 57 遺構図

S F 58 (挿図356, 図版114)

13E地区にあり, SX'07の南東に位置する。楕円形を呈し, 主軸はほぼ南北方向で長軸1.7m, 短軸1.1m, 深さ25cmを測る。土壌内に大小の板石, 礫が検出され特に大型の板石の北側に骨片が密集していた。また炭片が多量に出土し, 板石などは火を受けて赤灰色に変色していた。Cタイプ^{註3}に属する火葬墓で, この場で焼き, そのまま埋葬したものであろう。やや離れたところから水輪(S42)が出土しているが, 直接SF58とは関係なかろう。中世のものであろう。

- ① 木炭混り赤灰褐色砂
- ② 密木炭塊混合砂 (骨片含む)
- ③ 木炭灰混合砂

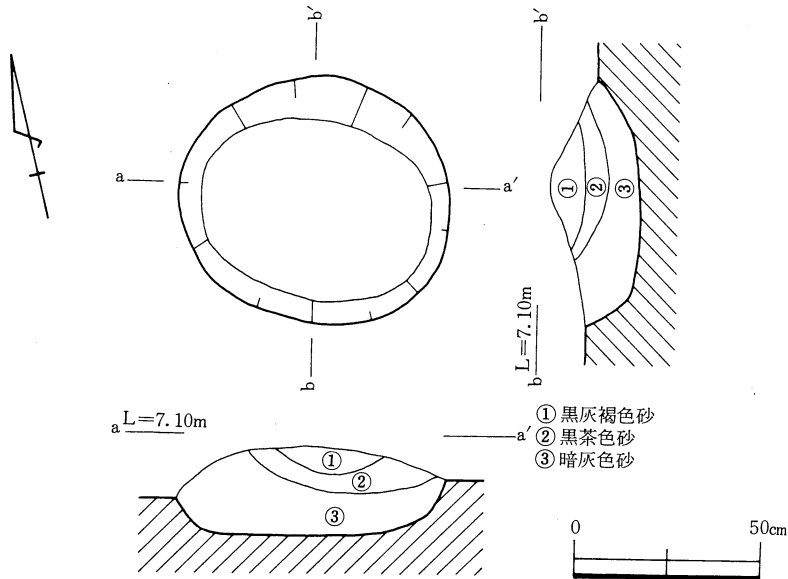


挿図 356 S F 58 遺構図

S F 59 (挿図357, 図版114)

S F 59はS F 60・61の北東にあり, 主軸はN-18°-Eを振り, 長軸0.72m, 短軸0.65m, 深さ約10cmの比較的小型の楕円形の火葬墓である。土壌の壁は約50°の傾斜を持ち, 外方へ広がる。土壌の埋砂は中央部が少し膨んだ形状を呈していた。土壌内上面中央部の埋砂は炭片の密集で黒灰褐色を呈する。この中に人骨の細片が少量混在していた。

時期は中世のものであろう。



挿図 357 S F 59 遺構図

S F 60 (挿図358, 図版114)

S F 61と南で接し, 五輪塔石S 51の約1.5m南東に位置する。主軸はN-90°-Eを振り, 長軸1.37m, 短軸0.99m, 深さ約20cmの楕円形を呈する。土壌内は西側がやや深く, 壁はほぼ40°の傾斜で外へ広がる。人骨や炭は土壌の上部に密集しており, 人骨については比較的大きな破片のことが多い。中世のものであろう。

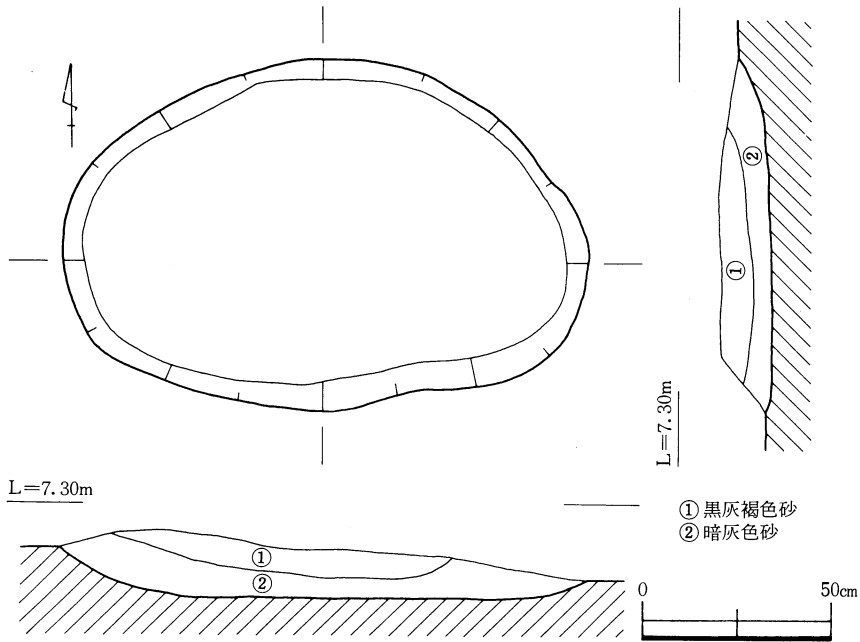
S F 61 (挿図359, 図版114)

S F 60とS F 64の間に位置し, 主軸はN-80°-Eを振り, 長軸0.82m, 短軸0.73m, 深さ約12cmの楕円形を呈する。土壌の壁は四方共約60°の傾斜を持ち, 外方へ広がる。土壌の埋砂は中央部が少し膨んだ形状を呈していた。人骨・炭片は中央部より少し南側に密集しており, そのため砂層断面は上部では黒褐色, 下部では暗灰色となる。

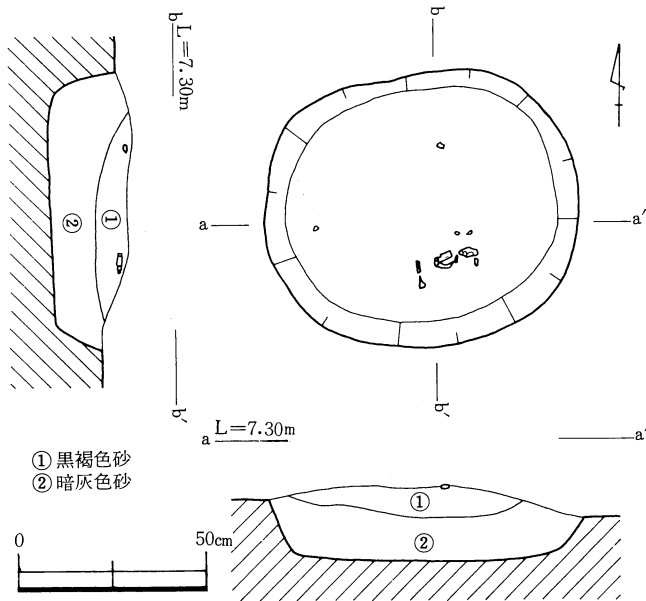
中世のものであろう。

S F 62 (挿図360)

S F 63の北西に位置し, 主軸はN-4°-Eを振り, 長軸1.42m, 短軸1.14m, 深さ約20

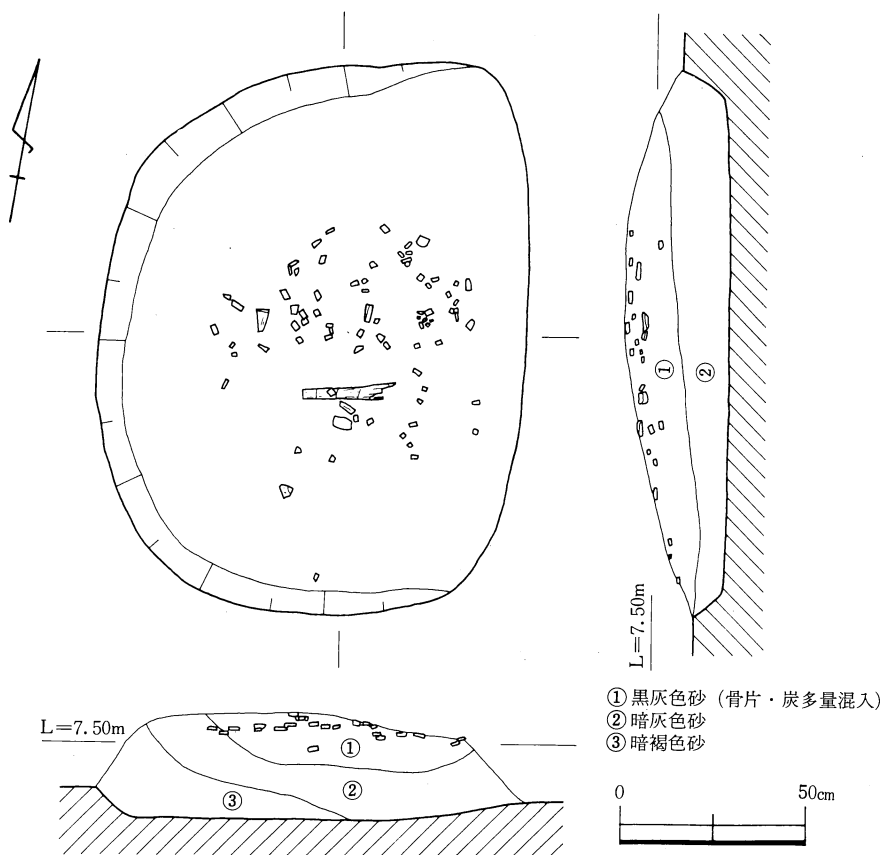


挿図 358 S F 60 遺構図



挿図 359 S F 61 遺構図

cmの隅丸台形を呈する。土壌の壁は東側で約50°の傾斜であるが、掘り方が浅いためその他の壁面は顕著でない。人骨・炭片は中央部がやや膨んだ埋砂の上部にある。特に土壌の中央部は炭塊が著しく密集しており、黒灰色を呈する。人骨の細片は炭塊の中に混在している。なお、歯片が土壌の北東側で検出された。中世のものであろう。



挿図 360 S F 62 遺構図

S F 63 (挿図361, 図版114)

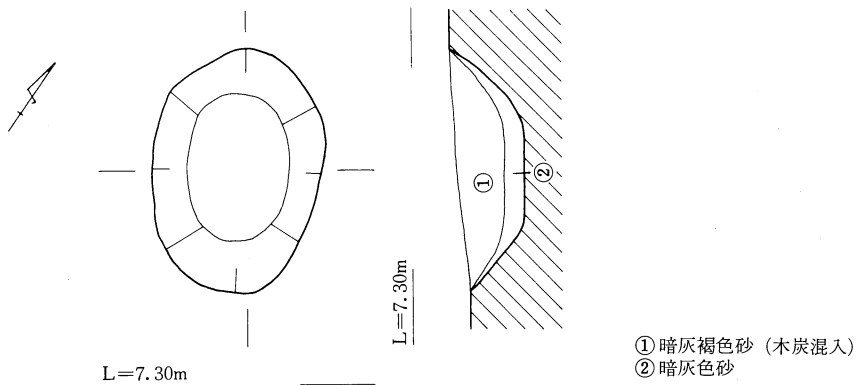
S F 64の西に位置し、主軸はN-35°-Wで楕円形を呈し、長軸0.63m、短軸0.45m、深さ約18cmを測る。土壌の四方の壁は、約45°の傾斜を持ち外方へ広がる。掘り方の下端はやや丸みを持つ。土壌内には木炭の細片混りの暗灰褐色砂が堆積していた。骨片はほとんどなく、Aタイプ^{#4}に属する火葬墓である。

中世のものであろう。

S F 64 (挿図362, 図版115)

S F 61のすぐ南にある火葬墓で、主軸はN-90°-E、長軸1.74m、短軸1.34m、深さ約12cmの楕円形を呈する。土壌の壁は四方とも約60°の傾斜を持ち、外方へ広がる。土壌内の南西側上部には1辺17cmほどの板石が1枚置かれており、あたりは黒灰褐色砂が堆積していた。遺物は骨片、炭片とも量的には少ないが、土壌の北側で土師器皿(Po1)が検出された。皿の底部外面には糸切り痕がある。供献土器であろう。Bタイプ^{#5}に属する。

中世のものであろう。



L=7.30m

L=7.30m

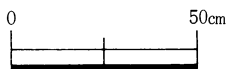
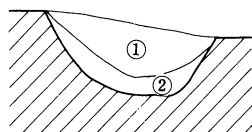
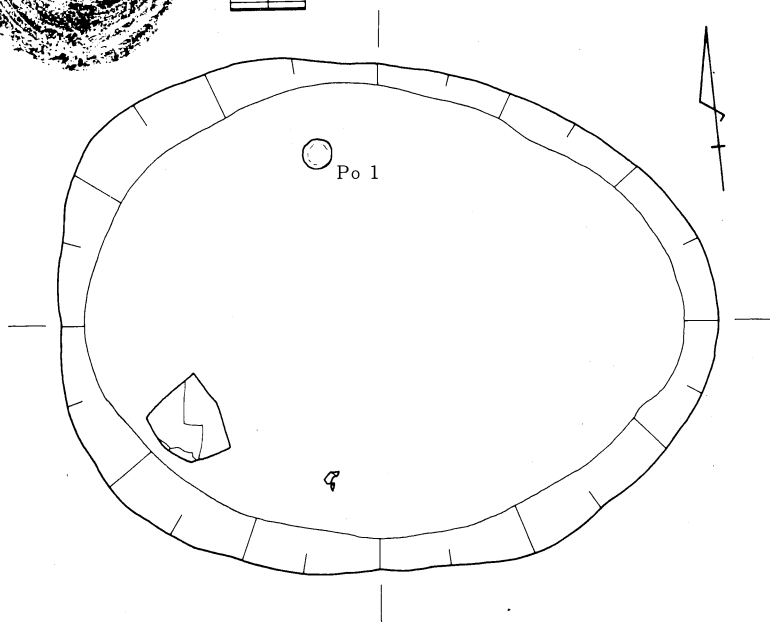
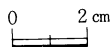
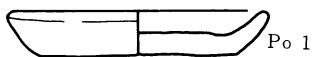
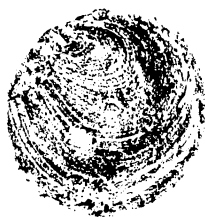
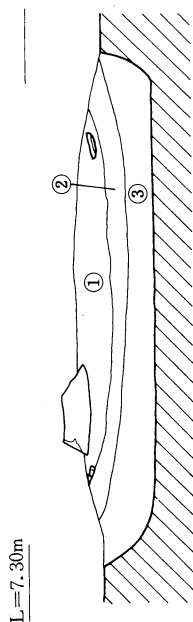


插图 361 S F 63 遺構図



L=7.30m



L=7.30m

- ① 黒灰褐色砂
- ② 黒茶色砂
- ③ 暗灰色砂

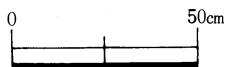
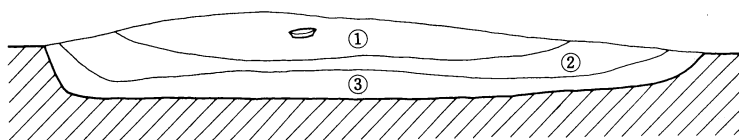
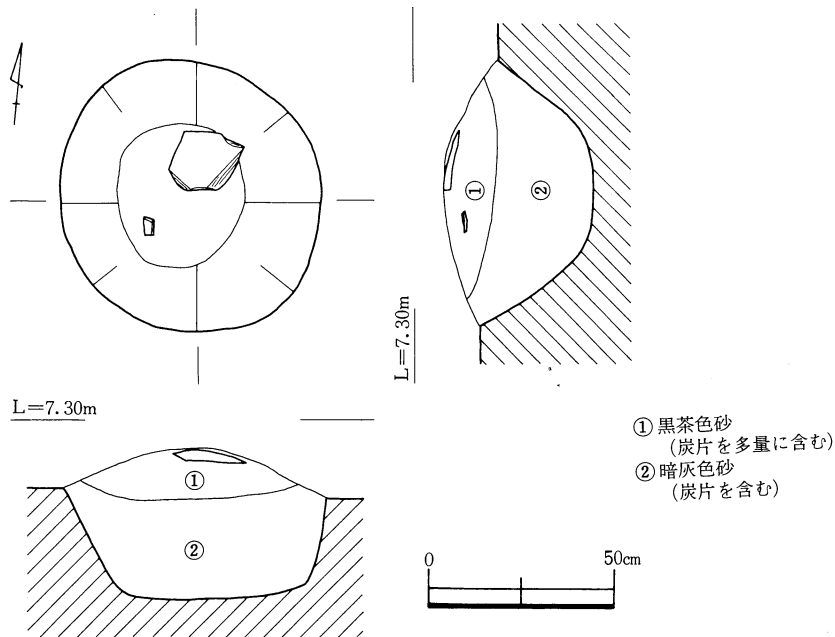


插图 362 S F 64 遺構・遺物図

S F 65 (挿図363, 図版115)

S F 64の南西にあり, 小型のほぼ円形の火葬墓で, 直径0.7m, 底部までの深さ約30cmを測る。土壌の壁は約50°の傾斜で, 掘り方は丸味を帯びている。土壌の上部で一辺16cmほどの安山岩の板石を検出した。土壌内は炭の細片が混入し黒褐色を呈す。

時期は中世のものであろう。



挿図 363 S F 65 遺構図

S F 66 (挿図364, 図版115)

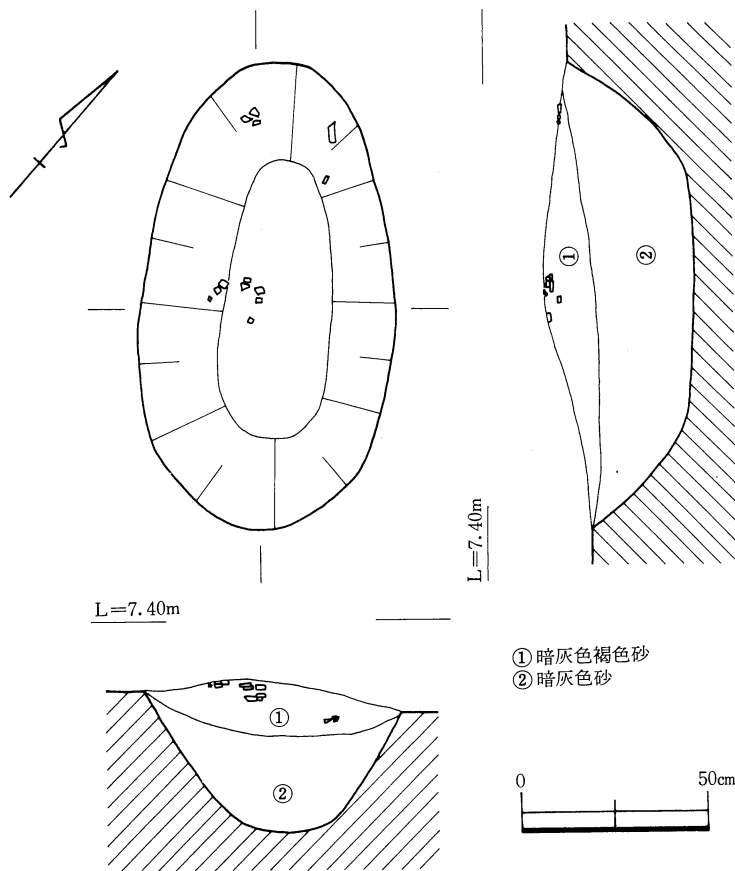
S F 65の南にあり, 小型の楕円形の火葬墓で, 主軸はN-36°-Wを振り, 長軸1.22m, 短軸0.69m, 深さ約30cmの楕円形を呈する。土壌の壁は四方とも約50°の傾斜を持ち外方へ広がる。掘り方下端は丸味を帯び, 遺構の埋砂は中央部で少し膨らむ。土壌内には炭片混りの黄褐灰色砂が堆積し, そのなかに人骨の細片が混入している。なお人骨の細片は掘り方上面部分により密集して混在していた。中世のものであろう。

S F 67 (挿図365, 図版115)

11C地区の南西隅にあり, S F 68の北に位置する。その形状は楕円形の一端が長く伸びた変形を呈する。1.7×0.95m, 深さ15cmのBタイプ^{#6}の火葬墓である。土壌の壁は約50°の傾斜を持ち, 外方へ広がる。遺物は掘り方の上部で骨片, 炭片, 安山岩の板石などが検出された。中世のものであろう。

S F 68 (挿図365, 図版115)

S F 67の南に隣接する楕円形の火葬墓で, 主軸はN-5°-Wを振り, 長軸1.15m, 短軸



挿図 364 S F 66 遺構図

0.55m, 深さ約20cmを測る。土壌の壁は約55°の傾斜を持ち, 外方へ広がる。遺物は掘り方上部で骨片, 炭片などが検出された。Bタイプ^{#7}の火葬墓である。中世のものとする。

S F 69 (挿図366, 図版116)

25号墳の直上, 第1埋葬施設と第2埋葬施設の間に位置する。主軸はN-26°-Eを振り, 長軸1.25m, 短軸0.75mを測る。全体に楕円形を呈するDタイプ^{#8}の火葬墓で, 北側の作りがやや雑である。火葬墓内には骨片, 炭片が多く散乱していた。土壌に貼りつけられた石は火を受けており, 非常にもろく, あとで上に置かれた(?)石も炭が付着したり, 酸化して赤くなっていた。

火葬墓内からの遺物の出土は骨と炭だけで時期を決定しにくい, 他の火葬墓と同じく中世のものと考えられよう。

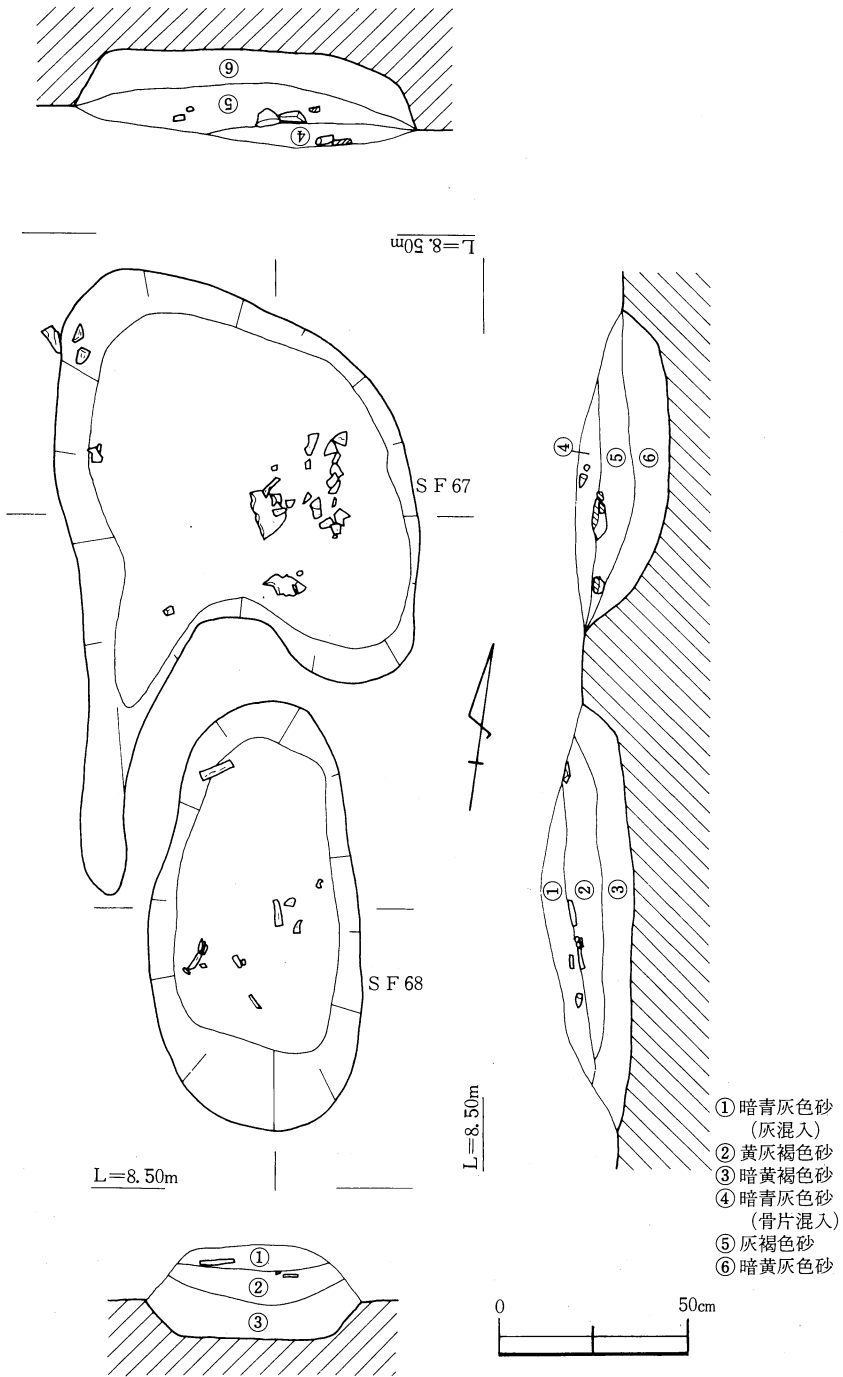
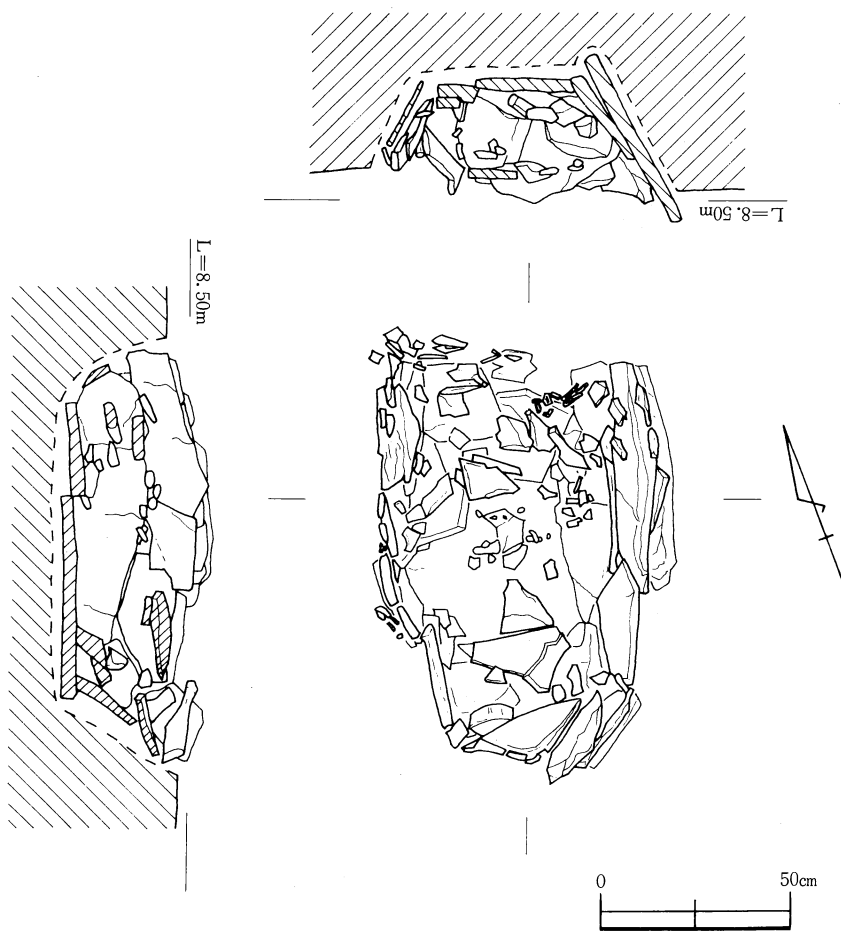


插图 365 S F 67·68 遺構図

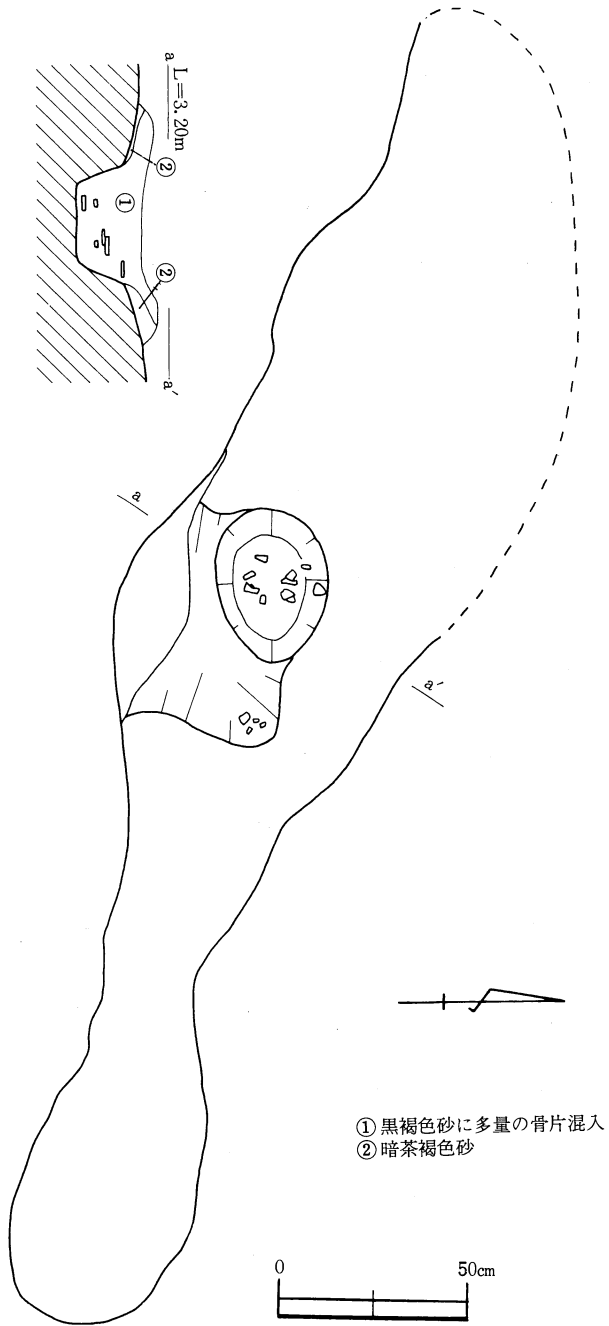


挿図 366 S F 69 遺構図

S F 70 (挿図367, 図版116)

12A地区にあり、最大幅約80cm、現存長3m、厚さ5cmの細骨片と繊維質の物を含む黒褐色の層の広がりである。そのほぼ中央に径30cmの土壇が掘り込まれており、その中からは多数の細骨片が認められた。この事から火葬した後、中央土壇に骨を集めて納め、その上からむしろ状の布(?)をかぶせた一種の火葬墓であろうと考える。北部分は掘り下げすぎて消失させてしまったが、ほぼ現存の広がりで見られるものと思われる。

中世のものであろう。



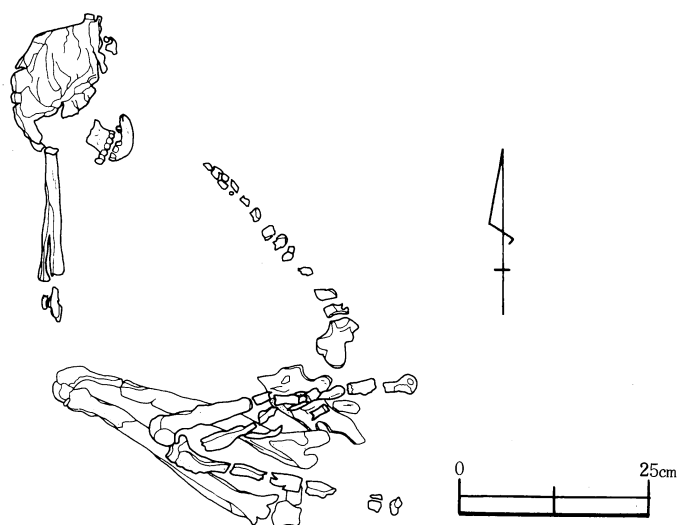
挿図 367 S F 70 遺構図

S X'01 (挿図368, 図版116)

12D地区において白砂を取り除いていく作業中検出された。黒砂が南へ漸次移行して消えてしまうラインから1.5m南側の地点にある。墓墳は確認できなかった。

体の右を下にしたいわゆる横臥屈葬の状態で検出した。頭骨は右頭頂骨, 右後頭骨, 右前頭骨, 蝶形骨右半分を残す。顔面骨はないが上顎, 下顎の歯は遺存する。右上肢を肘で曲げ, 手は顔面近くにあったと思われる。頭は北西方向を向いていた。

この横臥屈葬には伴出遺物・副葬品がみられないが, 他の中世墓と同様の時期(中世)と考える。



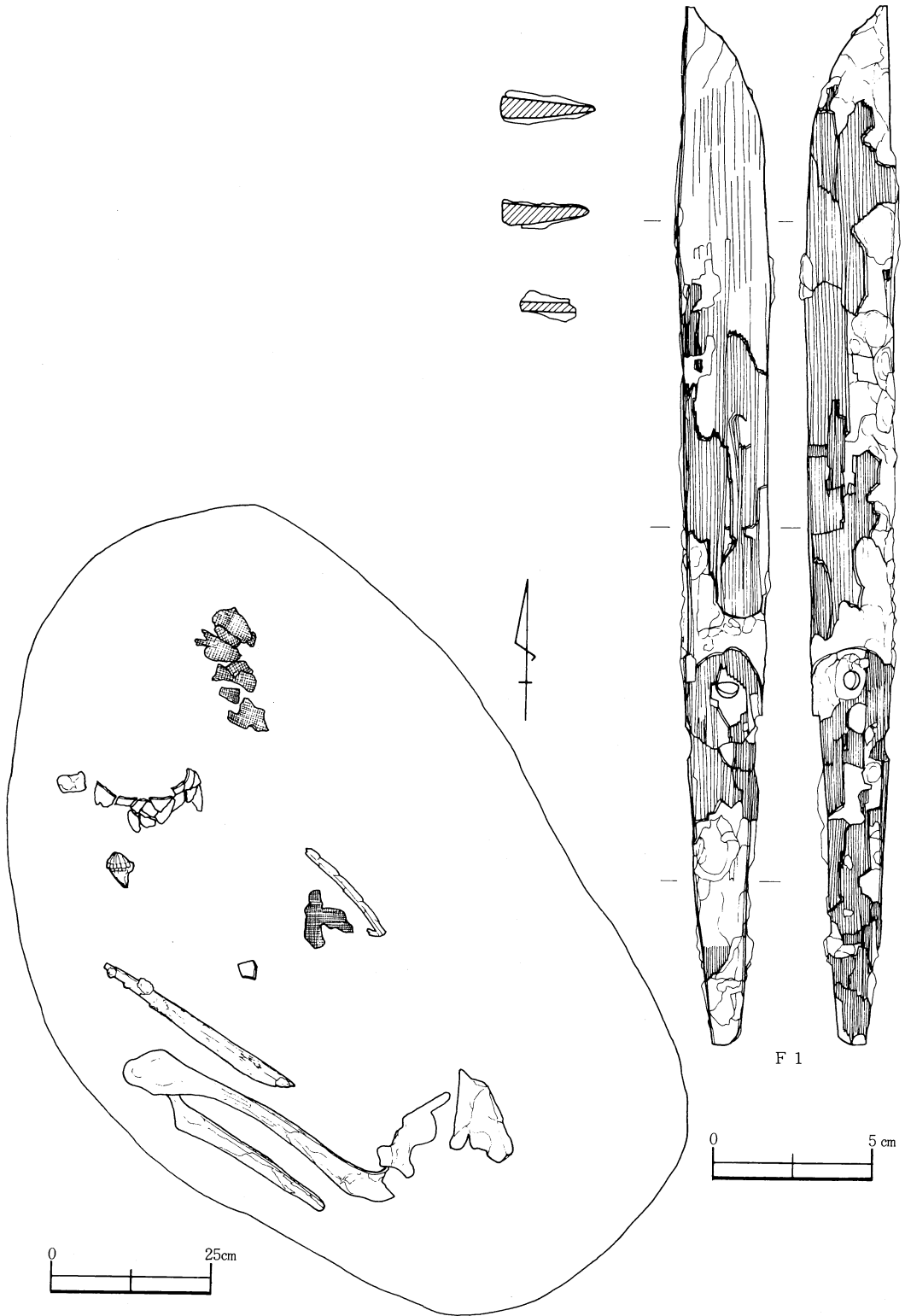
挿図 368 S X'01 遺構図

S X'02 (挿図369, 図版116・120)

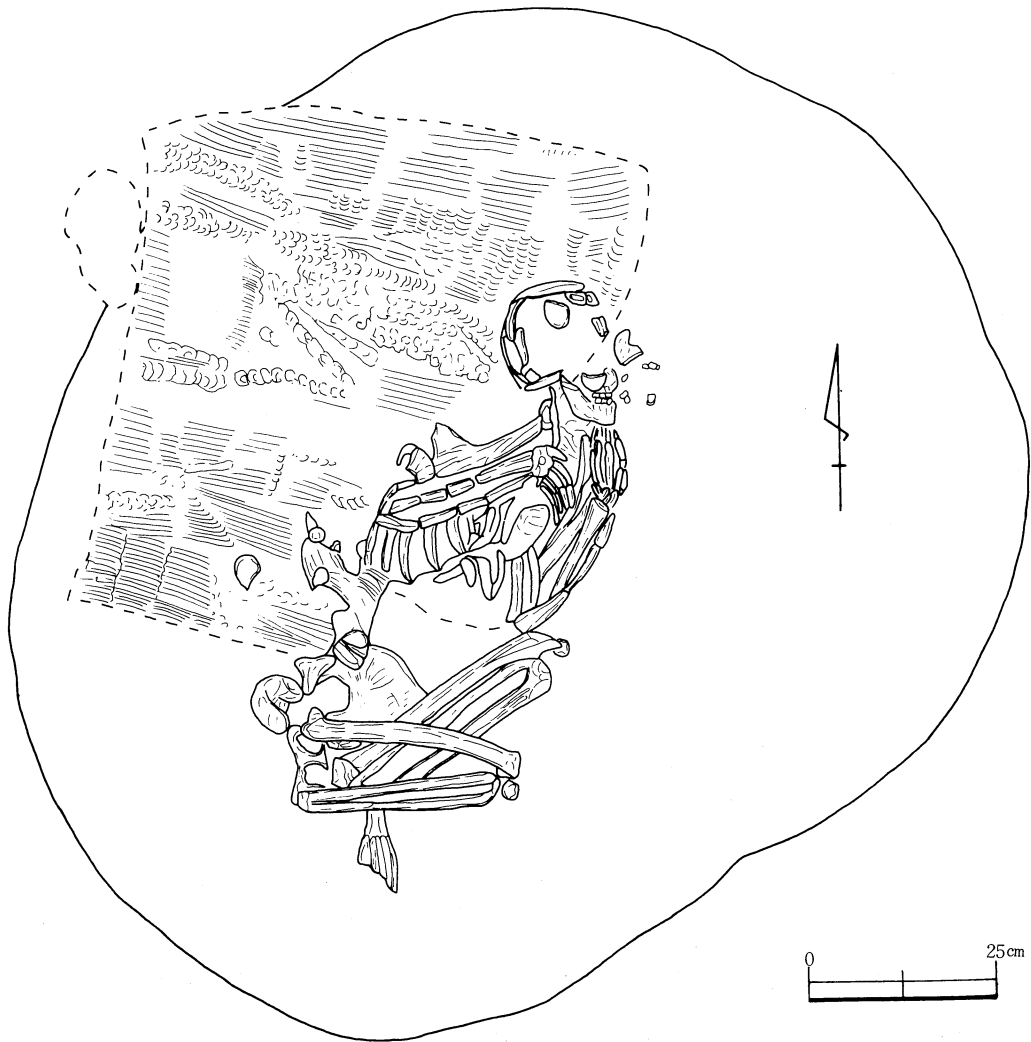
11E地区にありSB10の南東部の直上にあたり, SB10より新しい。右体側を下にしたいわゆる横臥屈葬の状態で検出された。頭骨半分は削り取りれたため下半分を残す。顔面骨はないが, 上下顎の歯はほぼ完全な形で遺存している。背骨・腰骨・大腿骨もほぼ残っている。頭部近くから漆を塗った布片を検出しているので遺体に漆塗の布を覆ったと思われる。副葬品として, 剣先を足の方に向けた鉄刀一振りが胸のあたりに抱くような状態で出土した。時期は中世のものと思われる。

S X'03 (挿図370, 図版117)

11D地区の南側, 11C地区に近い所で灰白色の白砂中に^{むしろ おお}蓆で蔽われた屈葬人骨を発見した。土壌は黒砂上層の白砂中に掘り込まれており, 砂層の識別が困難であった。規模は土壌上面で長軸1.4, 短軸1.2mを測る楕円形で, 深さ約20cmを測り, 主軸はN-35°-Eを振る。



挿図 369 S X'02 遺構図 (左)・遺物図 (右)



挿図 370 S X'03 遺構図

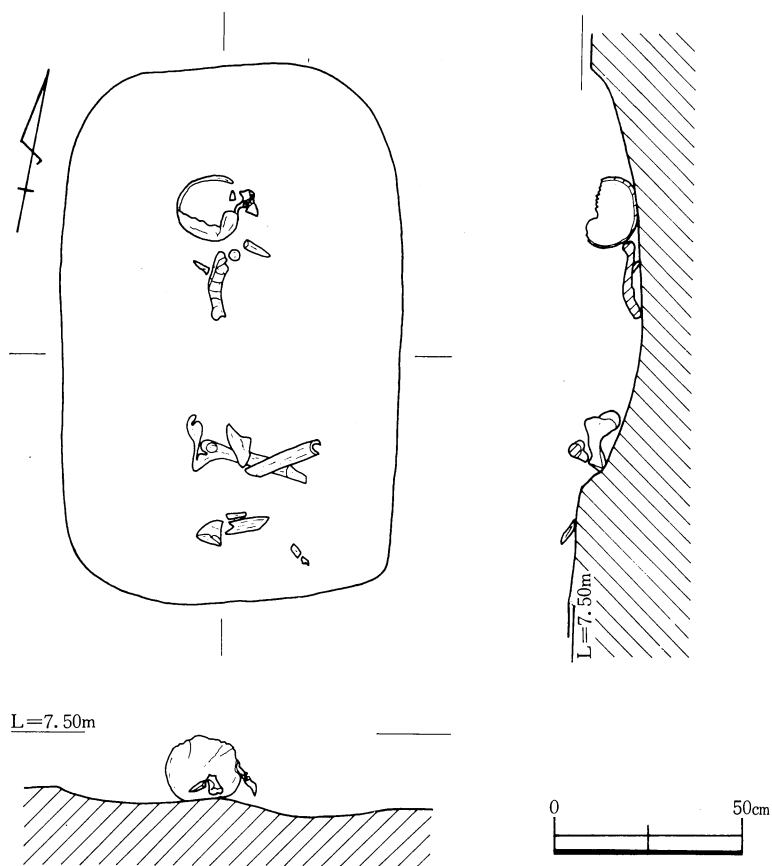
遺骸は頭を北に向け、手を合わせ、左体側を下にした横臥屈葬の状態で見出され、頭骨を含め人体のほぼ全身の骨が遺存していた。蓆は比較的よく残っており、検出したものは65cm×67cmの大きさである。

この横臥屈葬人骨の埋葬された時期は、土壌が黒砂堆積以降の白砂中の遺構であること、周囲の五輪塔のあり方などから中世のものとする。

S X'04 (挿図371, 図版117)

S X'04は11D地区北西区にあり、標高7.50m付近、黒砂が丘陵の上端に至るにつれ漸次消滅する地点に位置する。周囲にはすぐ北側に S X'02, 10m南西に S X'01, また10m北西に S X'05がある。

土壌は白砂中に掘り込まれ、長軸1.42m、短軸0.91mの隅丸方形を呈する。遺骸は頭を



挿図 371 S X'04 遺構図

ほぼ北に向け、左体側を下にして両足を折り曲げた状態で検出された。遺存状態はあまり良くないが、頭骨、頸椎骨、胸椎骨、寛骨、大腿骨、脛骨、距骨などが検出された。

この墓壇の北端から1.3m北西に五輪塔の風空輪があるが、直接この遺構とは関係なからう。中世のものであろう。

S X'05 (挿図372, 図版117)

黒砂面が南側に上っている12D地区の中央北隅に位置し、木棺墓S X A07の北西にあたる。黒砂が深い場所で、掘り方が黒砂上面から掘り込まれていたかどうか不明であるが、他の例から見て上層からの可能性が強い。掘り方はおおよそ小判型をしており、長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.5mで主軸は北をさす。内部には頭を北にし、両足を折り曲げた人骨が一体分出土した。頭骨以外はほとんど残っておらず、身体の大きさ等は不明である。遺骸は、顔が西に向いており、体の右側を下にした横臥屈葬の状態検出された。

副葬品はみられないが、東側に10cm大の割石が1個入っていた。時期は他の屈葬墓(S X'10)などから中世のものであろう。

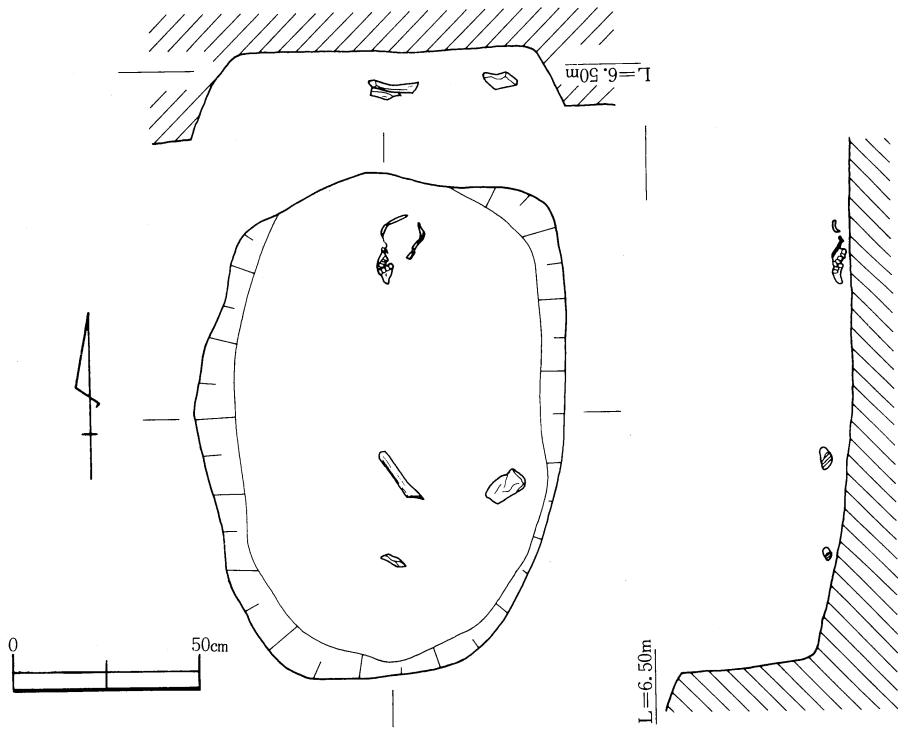


插图 372 S X'05 遺構図

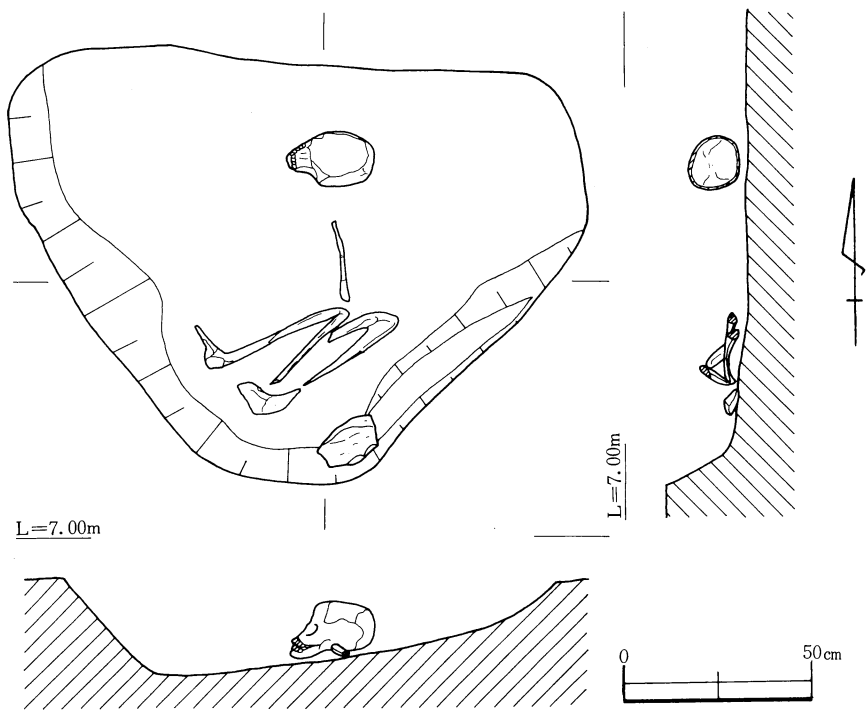


插图 373 S X'06 遺構図

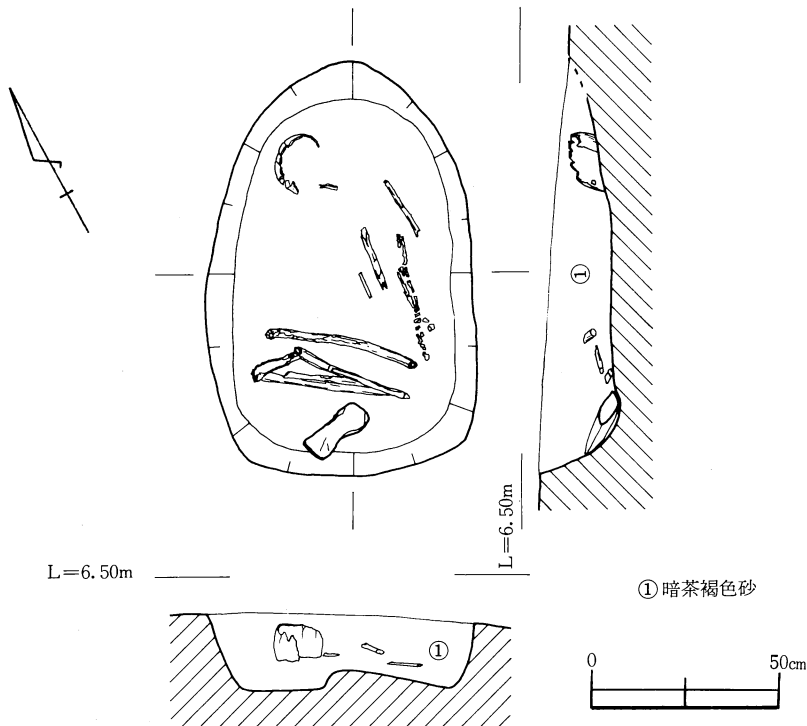
S X'06 (挿図373, 図版117)

黒砂面が南側に上っている12D地区の中央北側に位置し、S X'05の南にあたる。黒砂が深い場所で、掘り方が黒砂上面から掘り込まれていたかどうか不明であるが、他の例からみて上層からの可能性が強い。掘り方は隅丸三角形をしており、南が三角形頂点側になる。本来は小判型であったものが、発掘時東西に掘りすぎた可能性もある。南北1.1m、東西1.5m、深さ0.4mの墓壇である。掘り方内の人骨は頭を西に、折り曲げた脚を東にむけており、本来は東向きに置かれたものが、頭骨だけころがって西に向いた可能性がある。大腿骨が約40cmで身長140cm位いとみられる。頭は北におかれている。

副葬品は何もなかったが、南側で20cm大の割石を1個みつけた。時期は中世のものと考ええる。

S X'07 (挿図374, 図版118)

黒砂層が南側にやや上りかけた13E地区の南東側に位置し、竪穴住居S I 66の西にある。黒砂が深い場所で、掘り方が黒砂上面から掘り込まれていたかどうか不明であるが、他の例からみて上層の可能性が高い。掘り方はおおよそ小判型をしており、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.2mである。土壌の主軸はN-36°-Eである。内部には頭を北にし両足を折り曲げた人骨が1体分出土した。大腿骨が約40cmあるところから、身長は140cm位いとみられ



挿図 374 S X'07 遺構図

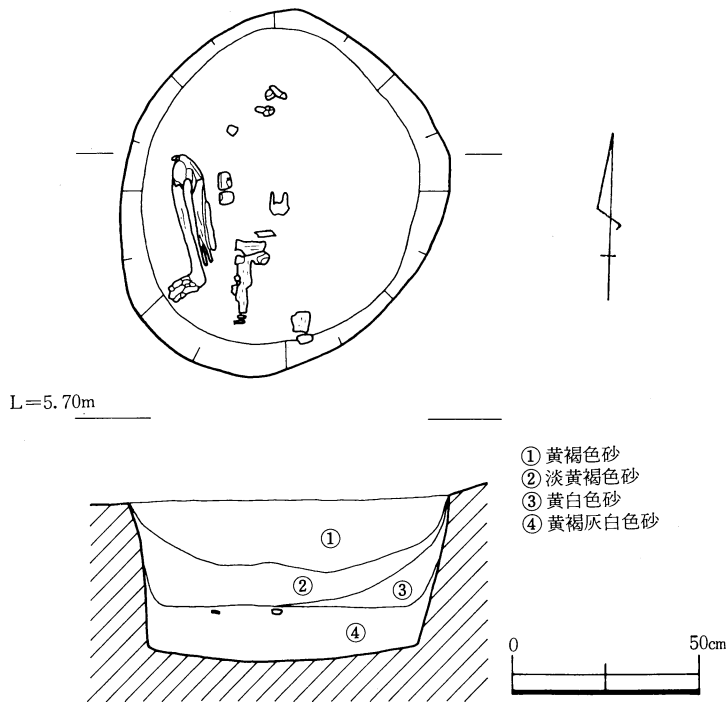
る。遺骸は右体側を下にした横臥屈葬の状態で検出された。

副葬品は何も検出できなかったが、南側で30cmくらいの割石を1個検出した。時期は他の屈葬墓からおおよそ中世のものとする。

S X'08 (挿図375, 図版118)

調査範囲の南側からは、中世墓が4基検出されているが、この中世墓もその1つである。12B地区の北側に位置し、北東にS X 25を望む。黄白色砂を掘り込んで作られた素掘りの土壌墓内に、屈葬されたと思われる人骨が検出された。墓壙は円に近い楕円形で、長軸95cm、短軸85cm、深さ41cmを測り、主軸はN-33°-Eを振る。頭骨は残っていなかったものの歯が2点と大腿骨などが遺存していた。

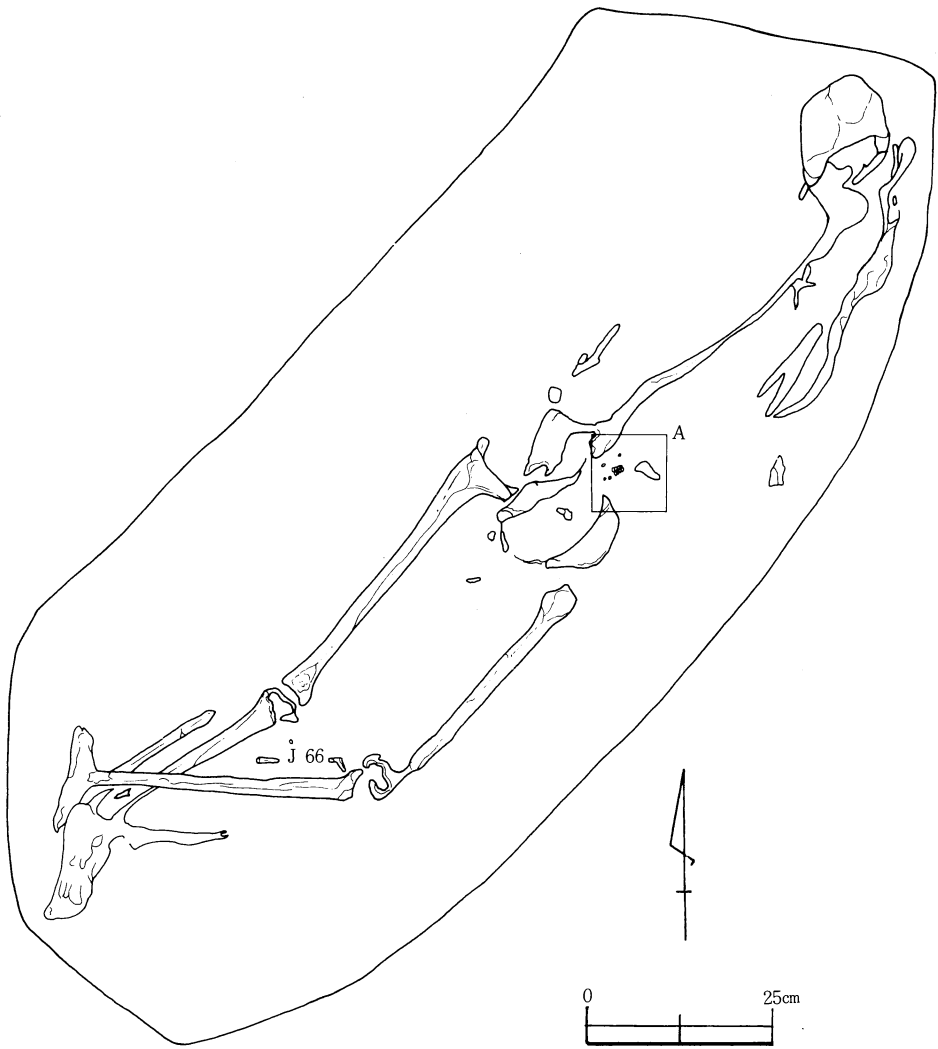
時期は中世のものとする。



挿図 375 S X'08 遺構図

S X'09 (挿図376~378, 図版118・120)

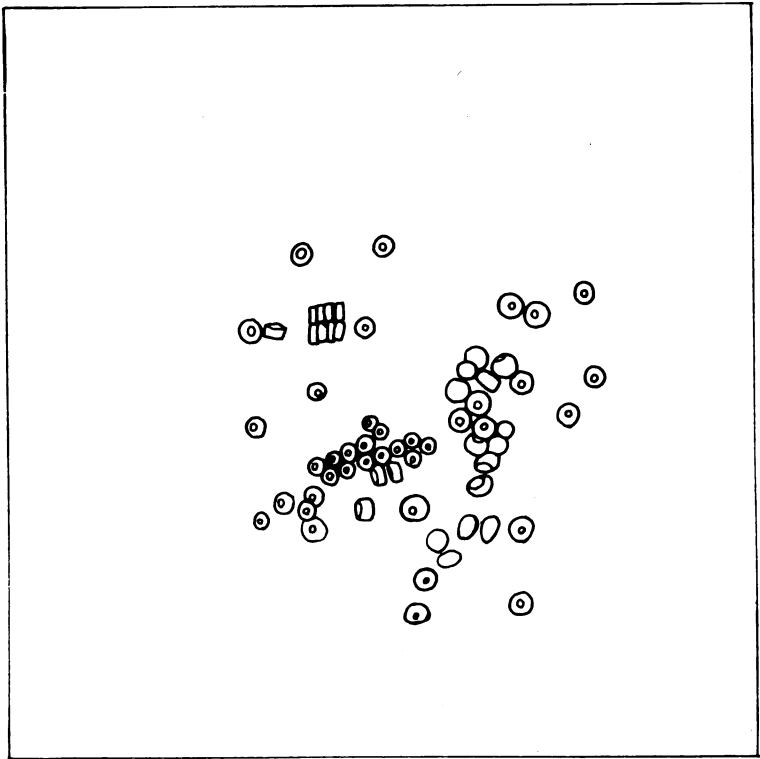
12B地区の南西に位置し、そのすぐ北西には和鏡、小刀、銅銭を副葬したS X'10と石櫃状の遺構S X'11がある。主軸をN-46°-Eに振る伸展葬の土壌墓である。土壌は細長い小判形で、長軸1.7m、短軸0.7m、深さ25cmである。人骨の遺存がよく、ほぼ完全な形で残っていた。うつぶせになった状態であり、足は右足を曲げて、左足の上に乗せている。後頭部の骨は平坦になっており、また黒砂層に掘り込まれているのに埋砂は白砂であることから、人体を入れたあとで板などで蓋をし、後白砂が流入したと思われる。



挿図 376 S X'09 遺構図

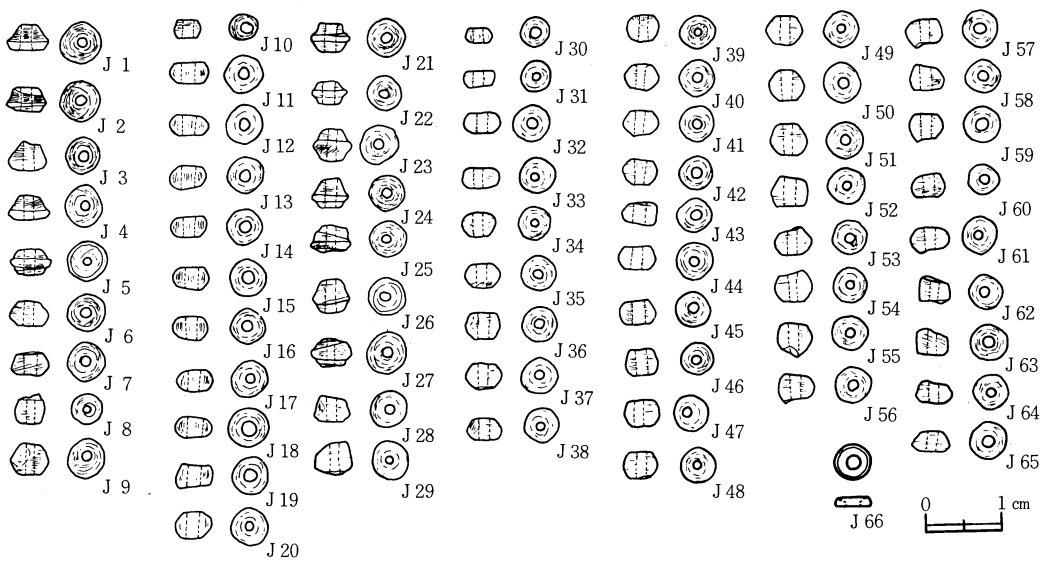
遺物は、右手のあたりからガラス小玉65個が検出された。検出した際一番上の小玉は2列に並んでいたのでおそらく数珠状になっていたと思われる。小玉の色は青・白・黄の3種類あり、表面を白く塗ったものもあった。他に滑石製の白玉が1個出土した。

うつぶせの埋葬形態は当遺跡では他に例がなく、尋常な埋葬形態ではないと思われるが他の事例を待つ。埋砂が白砂であることから、この土壙墓は砂丘の活動が再開した時期(室町時代以降)のものであると思われる。



A

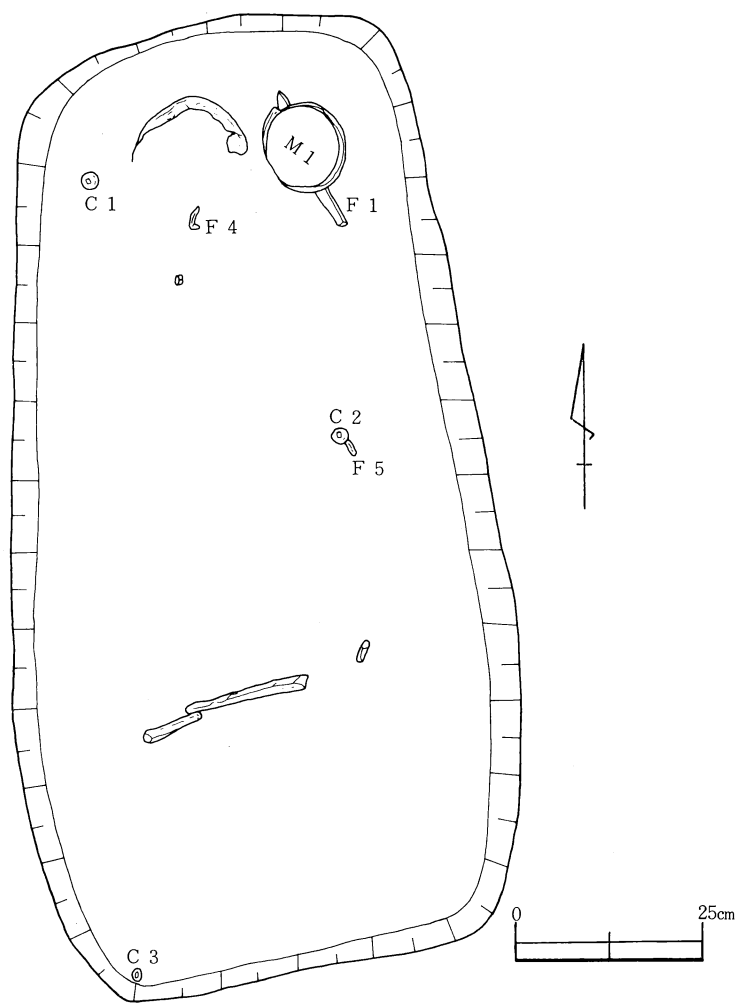
挿図 377 S X'09 じゆず玉出土状況拡大図



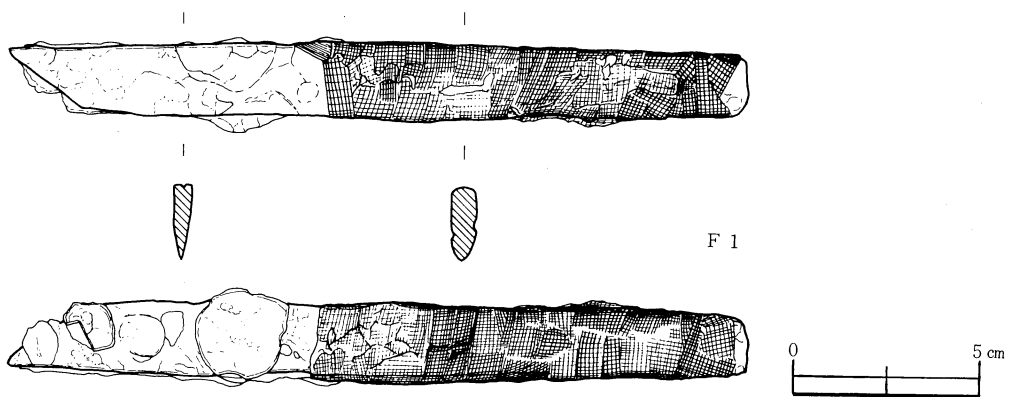
挿図 378 S X'09 遺物図

S X'10 (挿図379~383, 図版118・121)

54年度調査区の南側の斜面部, 12B地区南西部にある木棺直葬の中世墓である。上面に石櫃状遺構 S X'11があり, 南東に S X'09がある。木棺部の掘り方は隅のやや丸い方形で,



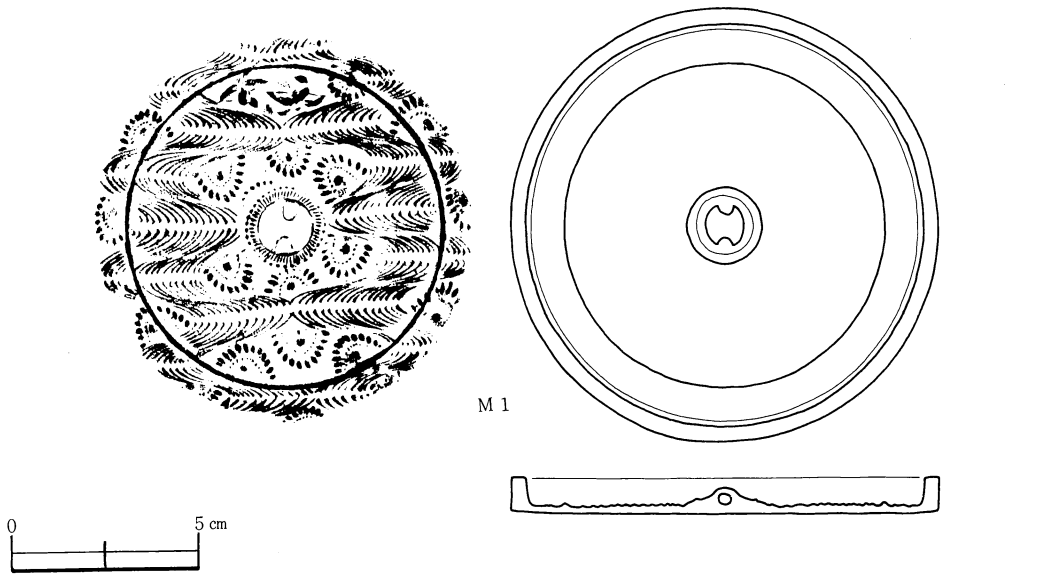
挿図 379 S X'10 遺構図



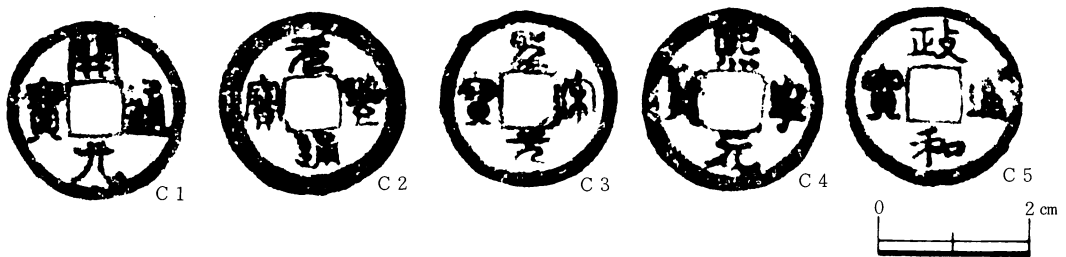
挿図 380 S X'10 遺物図その 1

長辺2.52m, 短辺1.35m, 深さ20cmを測り, 主軸はN-5°-Wを振る。棺は遺存していないが, 鉄釘が6点出土したこと, 掘り方が方形に近いことなどで判断した。頭骨は棺の北側にある。頭骨の東側に曲物に入った径11.4cmの双雀菊花流水文鏡が頭骨に表を向け斜めに立てられており, 曲物の下から刃先を北にし刃を身体にむけた長さ20cmの短刀を検出した。頭骨の下やや西側と棺の中央及び南西隅で銅銭「開元通宝」, 「元豊通宝」, 「聖宋元宝」を1点ずつ検出した。いずれも宋銭である。また, SX'10の上方では「熙寧元宝」が, SX'10近くからは「政和通宝」が出土している。

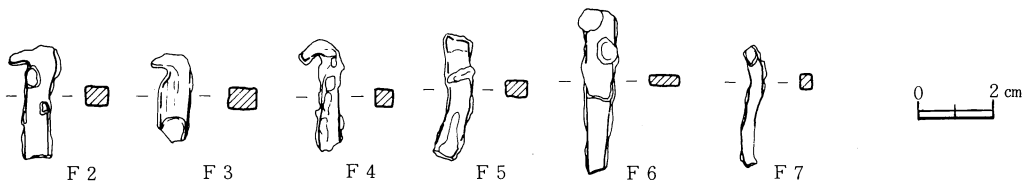
出土遺物などから室町期のもとと思われる。



挿図 381 SX'10 遺物図その 2



挿図 382 SX'10 遺物図その 3



挿図 383 SX'10 遺物図その 4

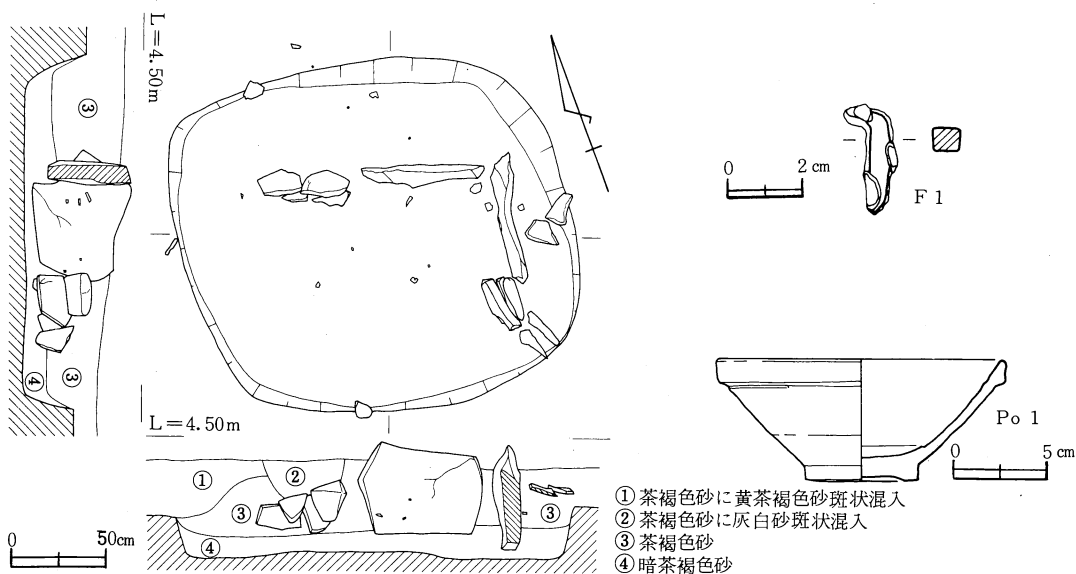
S X'11 (挿図384, 図版119~121)

S X'11は, S X'09の北西に隣接し, S X'10の上方やや南側に位置する。長さ約70cm, 最大幅50cmの板石が鍵形に並び, それぞれに比較的大きな扁平な石が各4個付随して二辺を形成している。垂直な二辺の内側には数十個の小石がやや上方に水平に散在する。全体としてはほぼ1m四方の石櫃状をなす遺構であるが, その性格は明瞭でない。ただ掘り方内の砂の中に炭が混り, 骨の小片が数片検出されたところから, 埋葬施設の種類であることが推察される。

掘り方は長軸2.1m, 短軸1.80m, 深さ20~30cmを測り, 石群は掘り方の南東に片寄る。中央部の100×50cmほどの部分に木棺状のものを置き, 回りに板石を立てて囲んだかと考えられる。鉄製品(挿図384-F1)は木棺の釘かと思われる。

炭・骨片の他床面付近から馬の歯が出土している。また掘り方内外の砂中から白磁片(Po1)が出土しており, 破碎してばらまいた可能性や, 下層のS X'10の遺物の可能性も考えられる遺物である。

遺構の明確な時期を示す遺物はないものの, 下層にあるS X'10が室町期と推定できることやPo1から, 中世末~近世初頭に作られたものと考えたい。



挿図 384 S X'11 遺構・遺物図

S X'12 (挿図385・386, 図版119・121)

12A地区と12B地区の境界に位置し, S X'09・10・11の南側にある。上部はすでに削りとられており, 黒褐色砂面において掘り方を検出した。平面形は長卵形で二段の掘り方を持つ。主軸はN-90°-Eで, 残存部の上線部長軸1.90m, 短軸1.16m, 深さ0.16mを測り, やや斜めに掘り込まれている。下段の掘り方は不整形な楕円形で, 上部掘り方の南西に掘

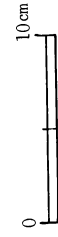
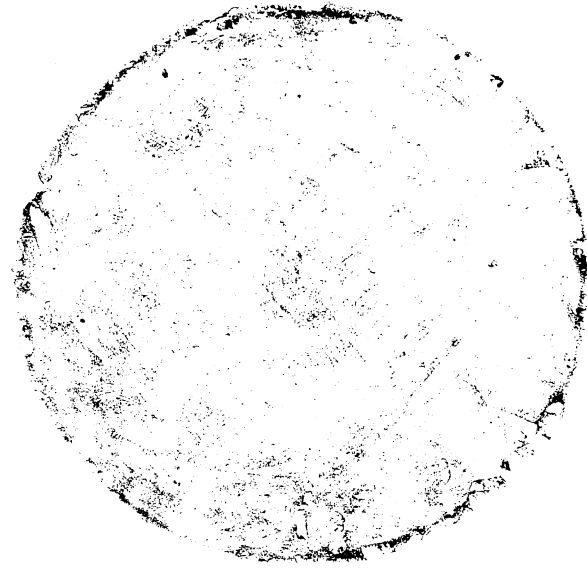
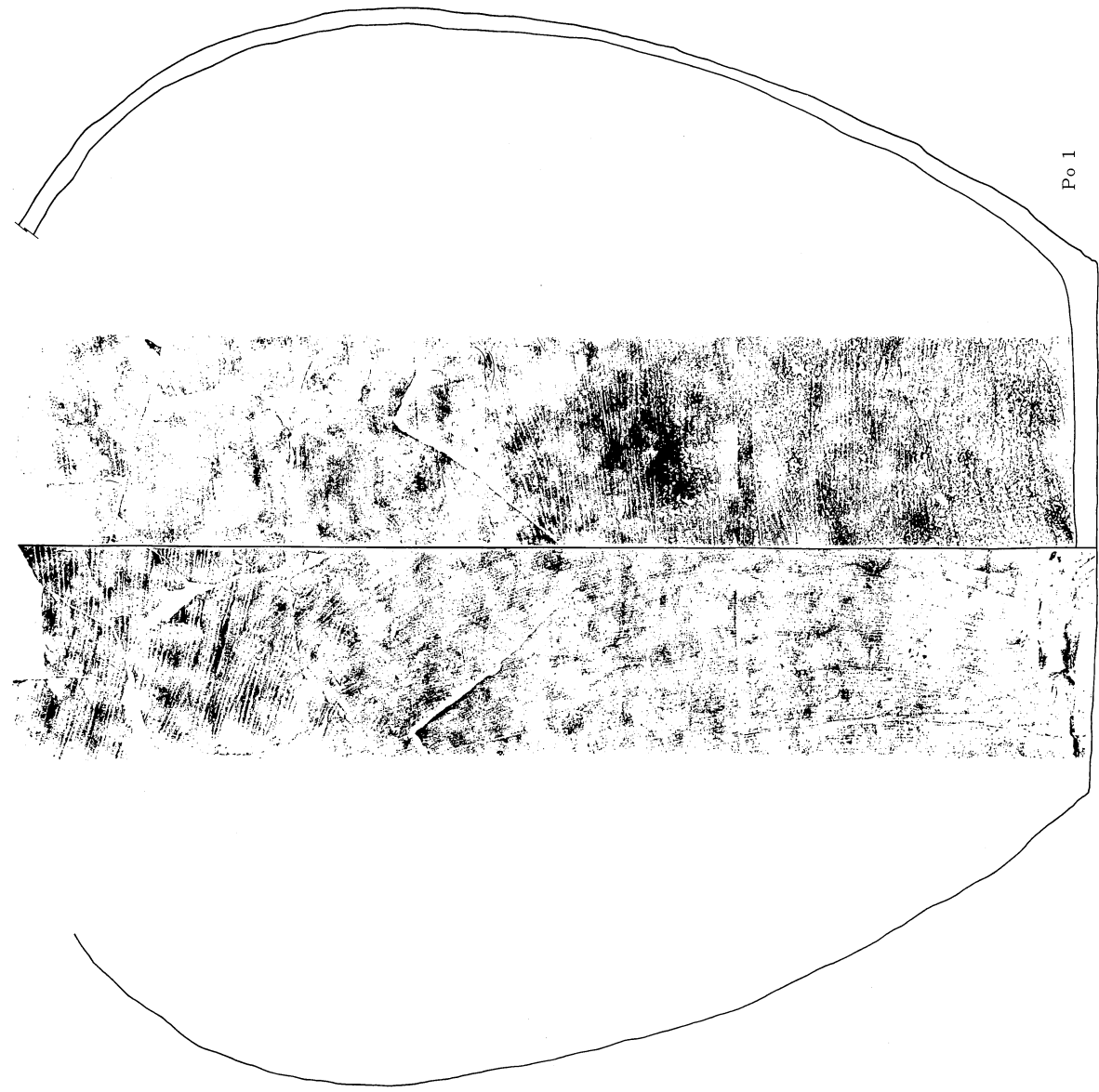
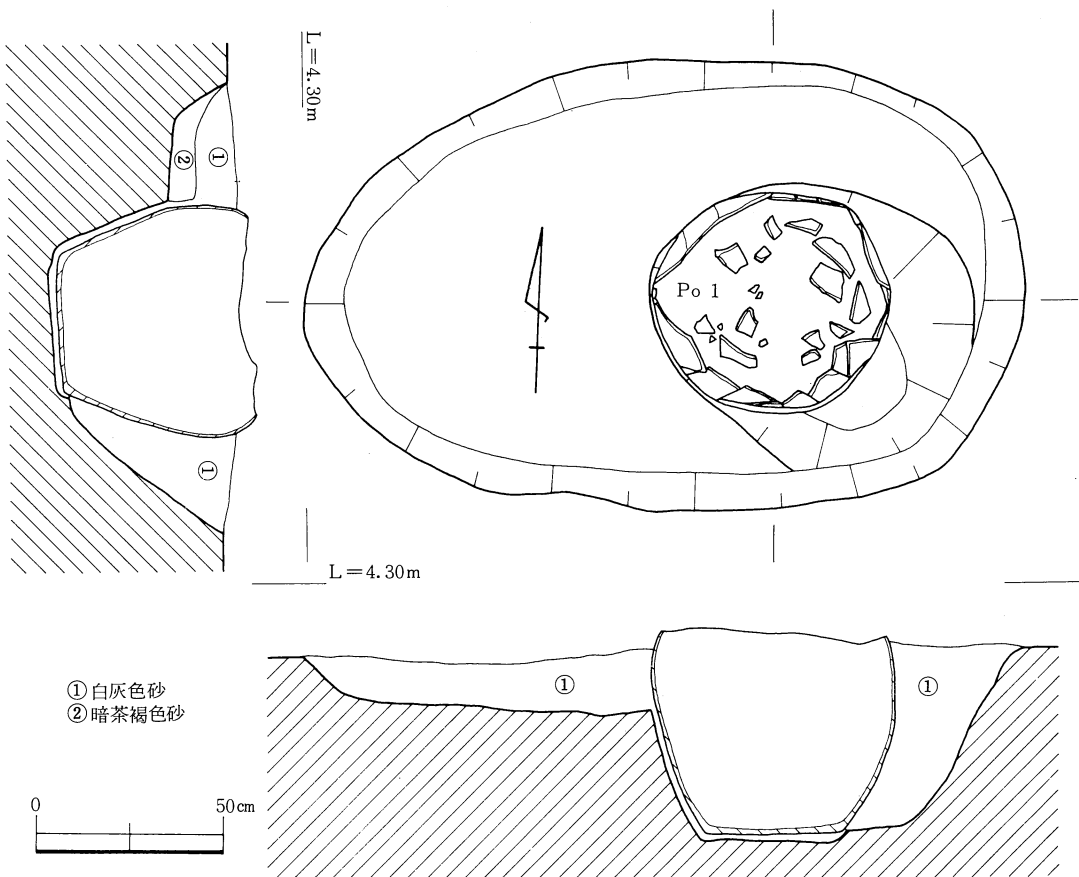


插图 386 S X '12 遗物图

り込まれており、長軸0.86m,短軸0.76m,上部掘り方からの深さは0.34mである。この2段目の掘り方の中に口縁部を欠いた大甕(陶質)を置き土器棺としている。蓋等は検出できなかったが、板状の石が掘り方の中から検出されていることから石と板で蓋をした可能性が高い。土器棺は上半部が割れており、割れ目の内外面には約1cm幅の帯状の布を漆で接着させていた。日常使用した土器を補修して棺に転用したものと思われる。

土器棺内部には、やや黄色がかった白砂が流入していた。土器棺内部では骨・副葬品等は検出されなかった。(土器棺の外側で骨片を1点検出した。)

この遺構は白砂が棺内に流入していた事、S X'09・10・11からの層位、などから室町期と思われる。



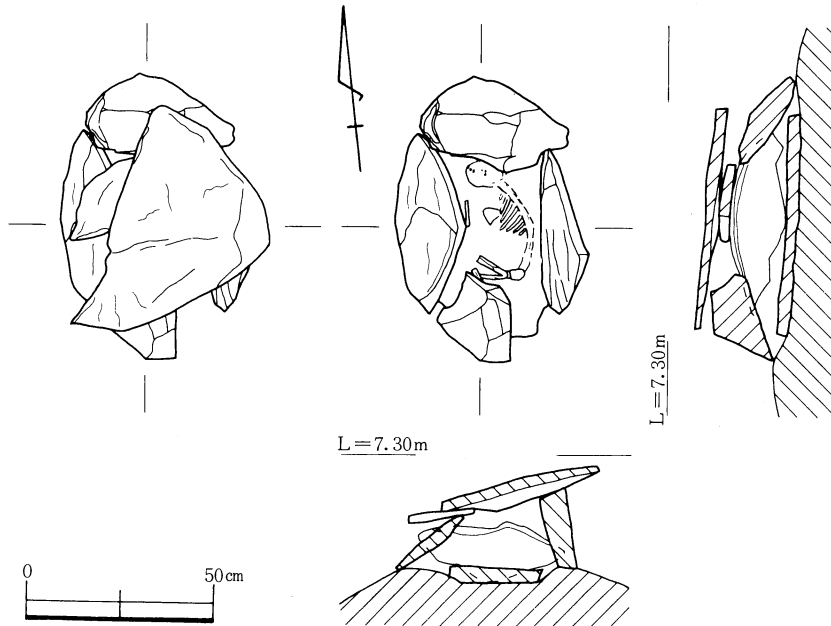
挿図 385 S X'12 遺構図

S X'13 (挿図387, 図版119)

この石棺は、青灰褐色の黒砂の上面、約20cmの高さで、白砂を取りのぞく作業中に検出された。三角形の蓋石をもつ、いわゆる箱式石棺である。内法の長さは30×20cm程度の小さなものである。蓋石を取りのぞくと床石の上に顔面を西方向に向けた横臥屈葬人骨を検

出した。残存していたものは頭骨片、背骨、大腿骨などである。

この石棺の時期については、副葬品などもまったくみられなかったので、明確にできないが、おそらく周辺に散乱する五輪塔の時期かそれ以後のものであろう。



挿図 387 S X'13 遺構図

注 1～8 「長瀬高浜遺跡II」による火葬墓の分類に基づく。

- Aタイプ：土壌内に炭片・焼灰混入
- B 〃 ：土壌内に炭片・骨片・焼灰混入
- C 〃 ：土壌上に平面的配石をしているもの
- D 〃 ：土壌内に石櫃状配石をしているもの
- E 〃 ：骨片のみ確認できるもの

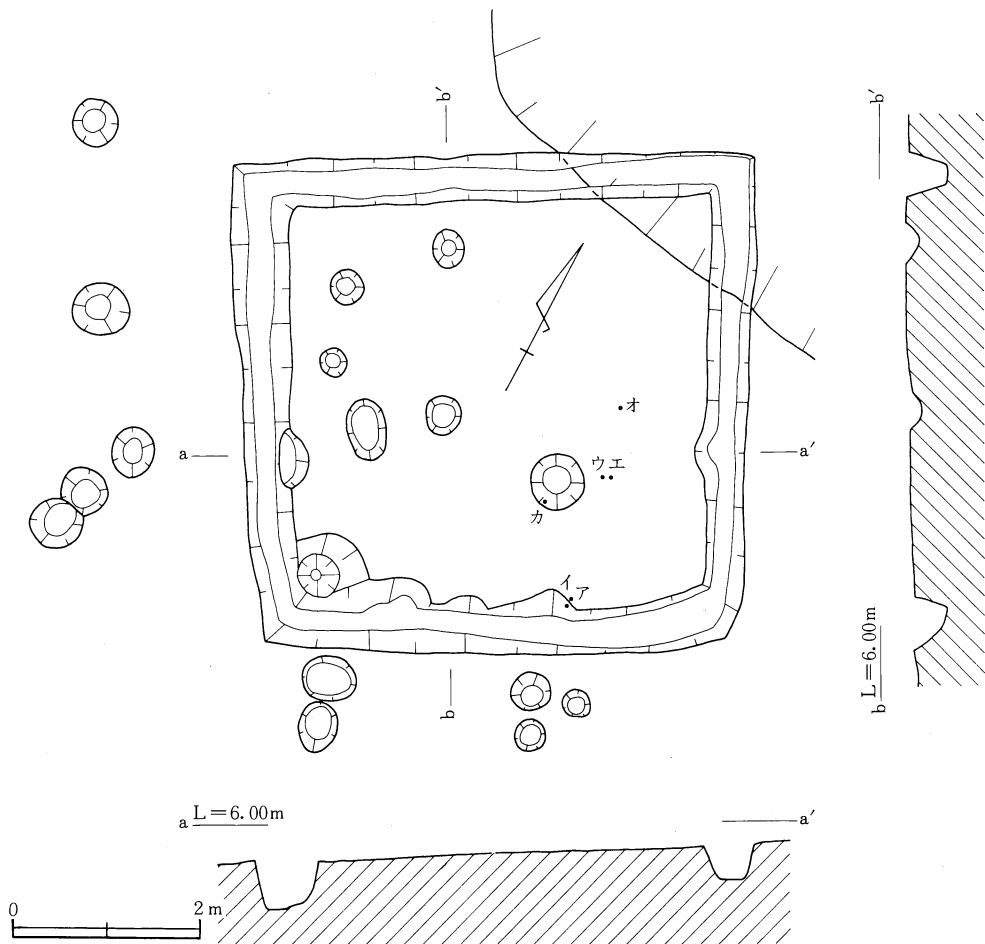
第6節 方形周溝状遺構 (SZ)

12G, 13G地区からそれぞれ一基検出している。2基共溝を方形に巡らせ、埋葬施設・柱穴などは持たない。住居跡と切り合っていないので集落内の1つの遺構と考えられよう。

SZ01 (挿図388・389, 図版122・127)

SZ01は3号墳の南西側, 12G地区の北西に位置する。当遺構の北隅は3号墳の周溝により切られているが, 溝の底は遺存している。

遺構は方形に溝を巡らしたもので, その形状から方形周溝状遺構と呼ぶ。この遺構の規模は周溝部を含めて北東—南西方向5.4m, 北西—南東方向5.3mで, 北西辺が他の辺より40cmほど長い。周溝の幅は上端50cm, 底部25cmである。周溝の深さは最大値46cm, 最小値32cmで南西側が深い。周溝に囲まれた台状の部分は, 1辺4.4mの方形で8個のピットを持つ。方形の周溝が正確に区画されていることから方形周溝墓の要素が強く, 埋葬施設は既



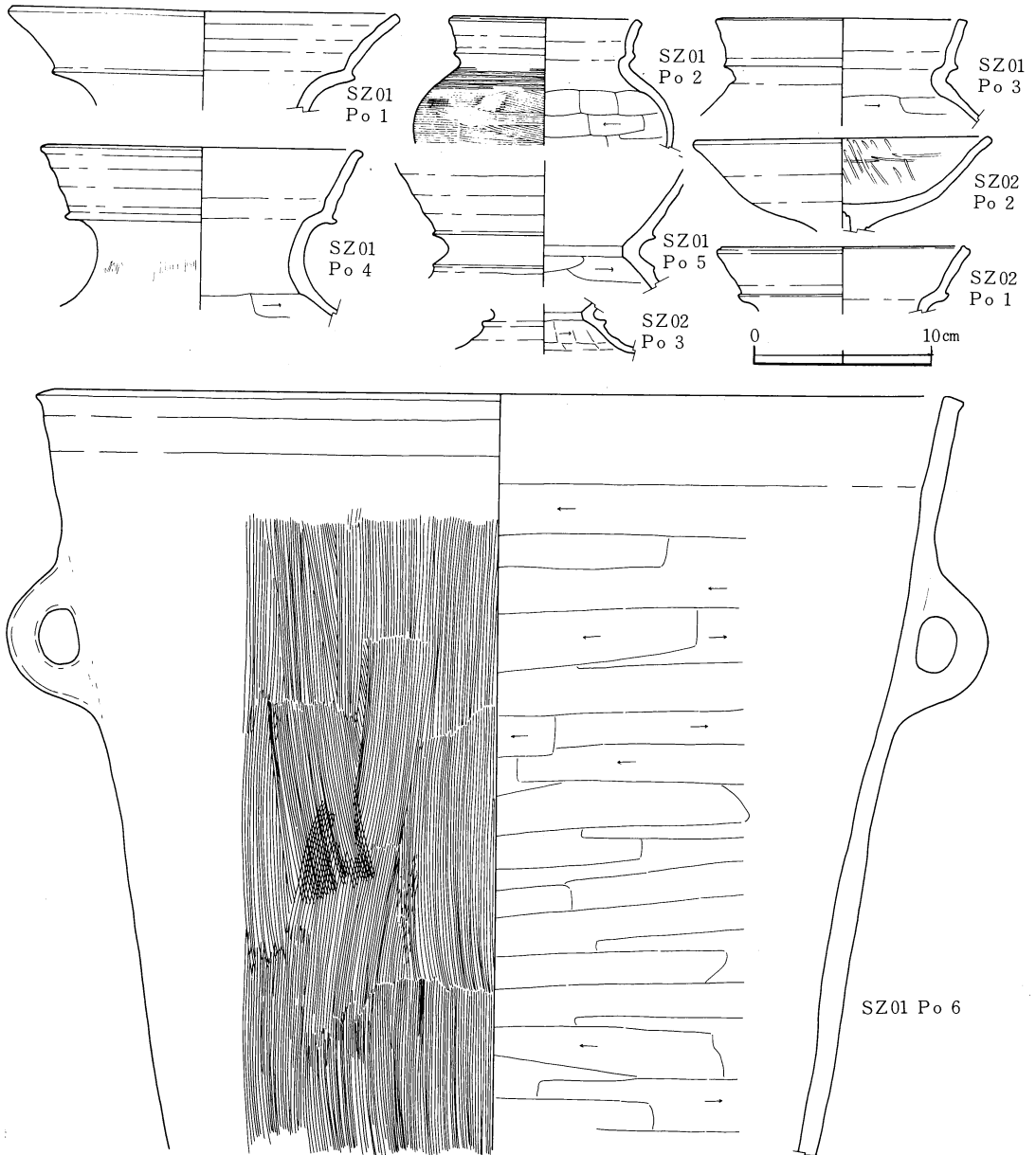
挿図 388 SZ 01 遺構図

に削平されているとも考えられるが、盛砂の痕跡は確認できず、次に述べる S Z 02 も埋葬施設が検出されていないことから、性格は不明である。

出土遺物から長瀬 II 期のものであろう。

S Z 02 (挿図 389・390, 図版 122・127)

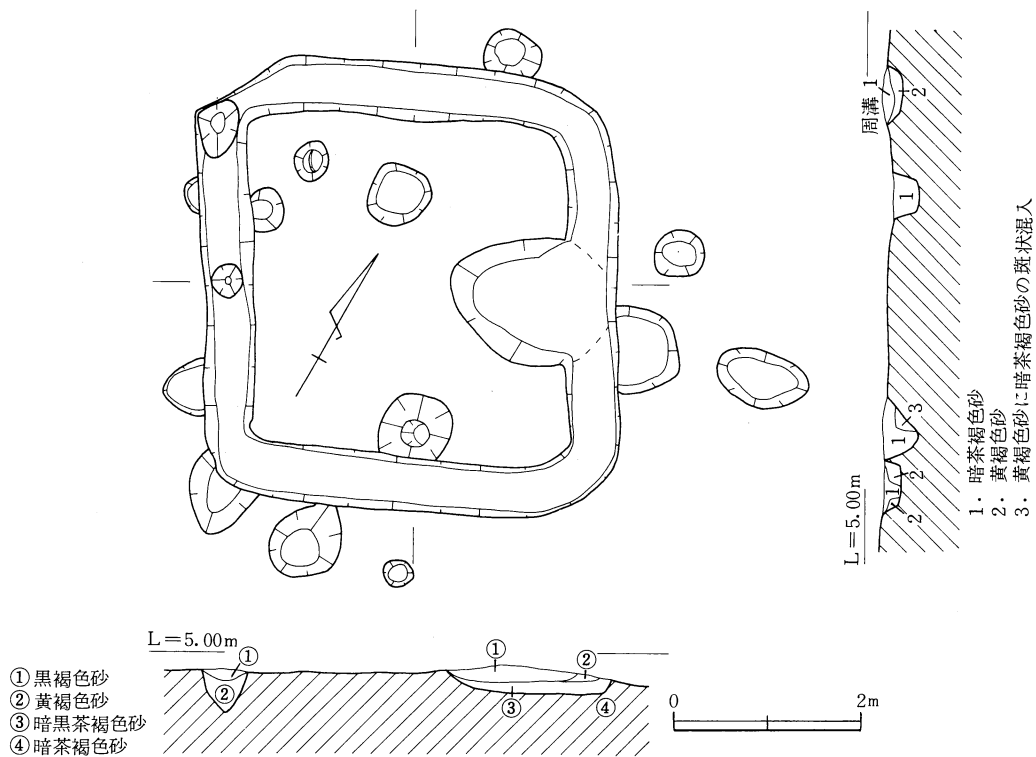
13F 地区の北西に位置し、北に S E 03, 西に S I 42 が在る。隅丸方形に巡る溝は幅約 60cm, 深さ約 35cm, 周溝に囲まれた台状の部分は $3.6 \times 3.3\text{m}$ を測る。中央に砂などを盛り上げた痕跡はなく、遺構内のピットも方形周溝状遺構とは直接関係ないと思われる。周溝



挿図 389 S Z 01・02 遺物図

内外に埋葬施設などなく，S Z 01と同じような形態であり，双方とも墓の可能性はあるもののその性格は不明である。

時期は長瀬II期のものであろう。



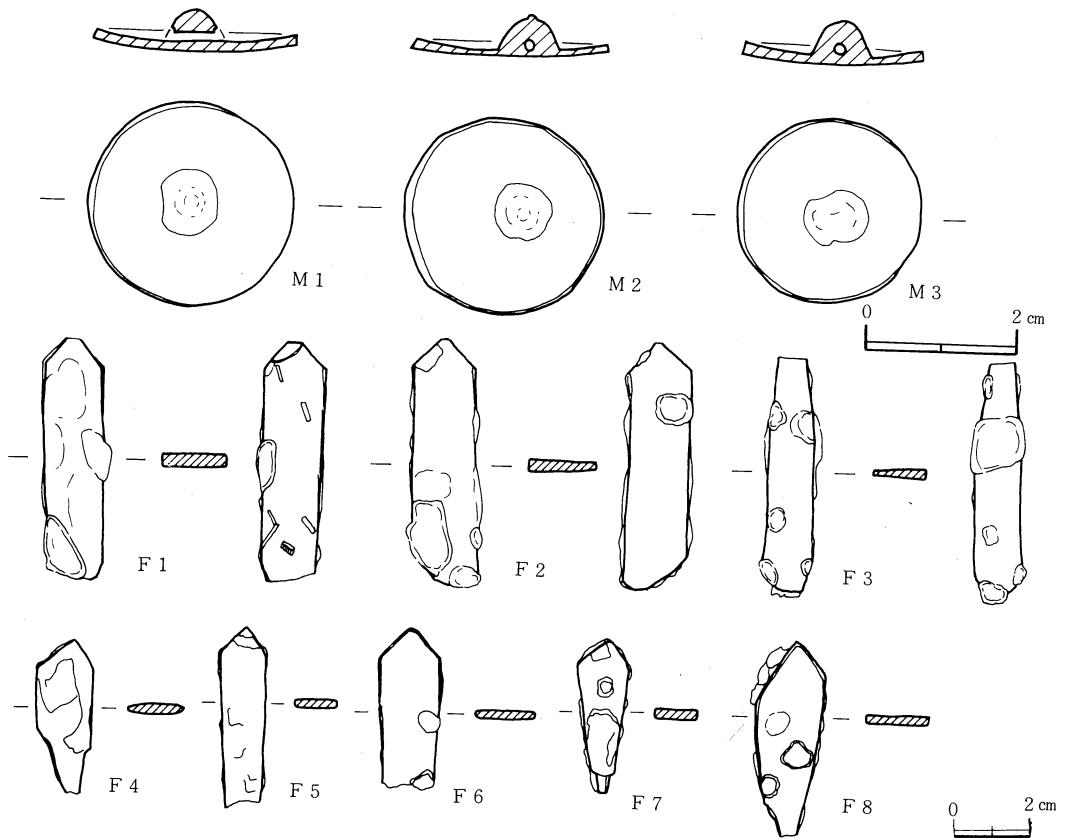
挿図 390 S Z 02 遺構図

第7節 その他の遺構 (SP・SK・SD他)

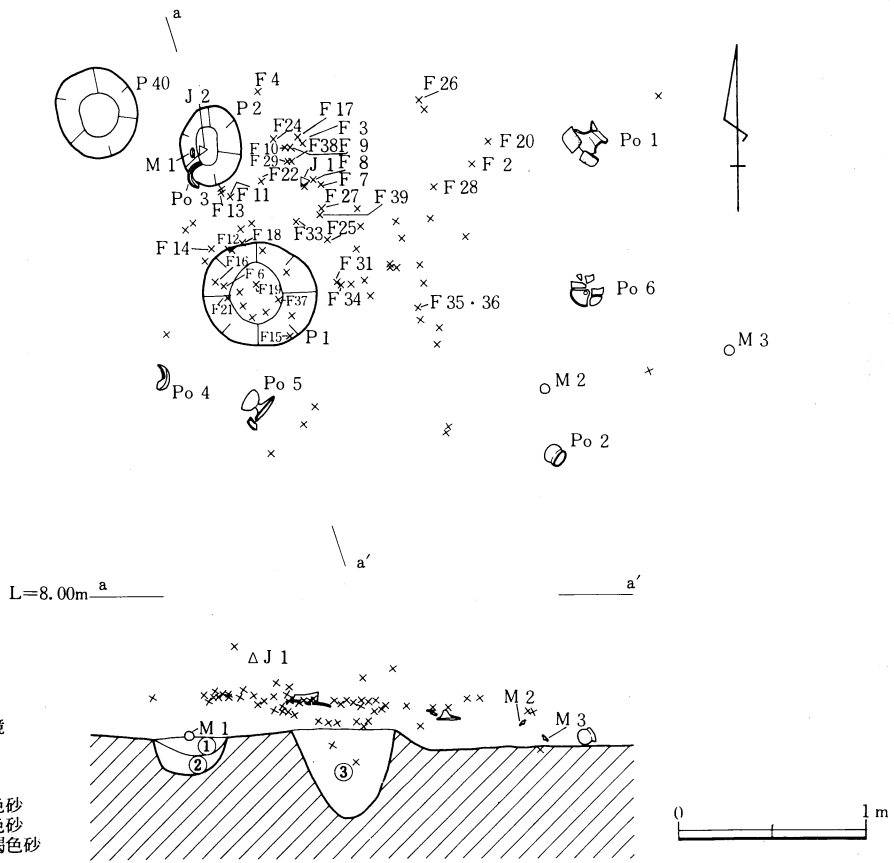
遺構の性格がわからないもの、祭祀に関係するものなどの遺構を取り中げている。また南側斜面部の厚い砂の堆積層出土遺物も「南側斜面」の中に入れた。

15 I S P 01 (挿図391~394, 図版122・127~129)

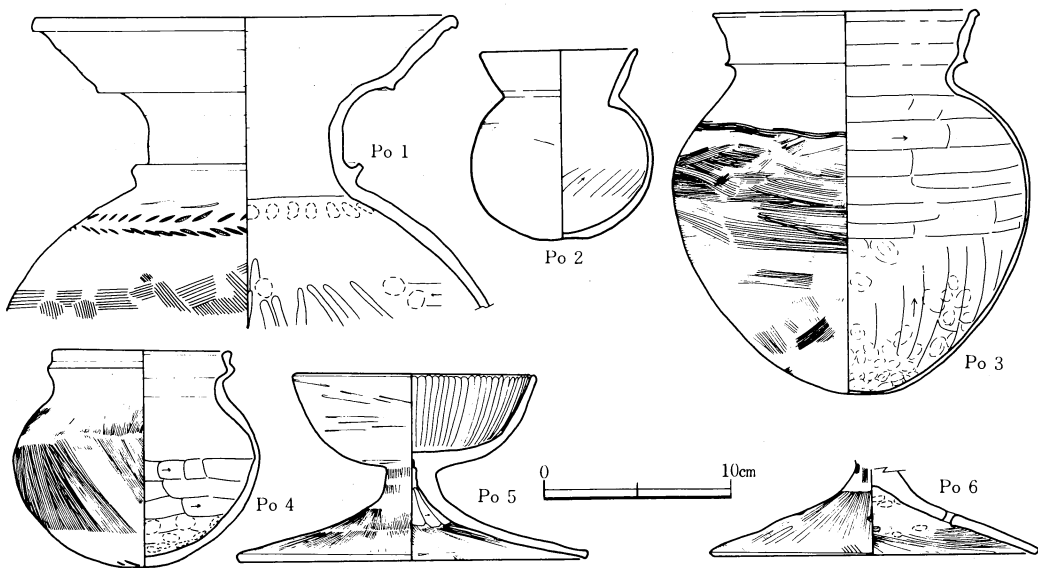
15 I 地区の北東にあり, S I 23とS X 14の間に位置する。この地区の東は平坦な黒砂が続き, 西は高くなっている。この遺構の周辺からは特異な遺物が出土した。素文鏡が3枚, ガラス小玉2個の他に, 剣先型鉄製品と呼べるような, 先端がハの字形になった長さ10cm前後, 幅2cm, 厚み0.2~0.5cmの鉄器を図化できるもので約40個検出した。M 1の素文鏡はP 2直上から出土している。大半の鉄器や小玉2個は平面的, 断面的にも集中して群をなしており, 他の2面の素文鏡 (M 2・M 3) もこの鉄器群からやや離れるものの同一の層内にあることから一連の遺物と考える。以上の遺物出土状況から土壌状の遺構があったものと考えて, これをS P 01としたい。他の遺跡の出土例では素文鏡は古墳の副葬品として多く出土しており, その他祭祀遺跡から出土がみられる。当遺跡では55年度調査地区での古墳時代住居跡からの出土が2例ある。また剣先型鉄製品は短冊形鉄製品などとも



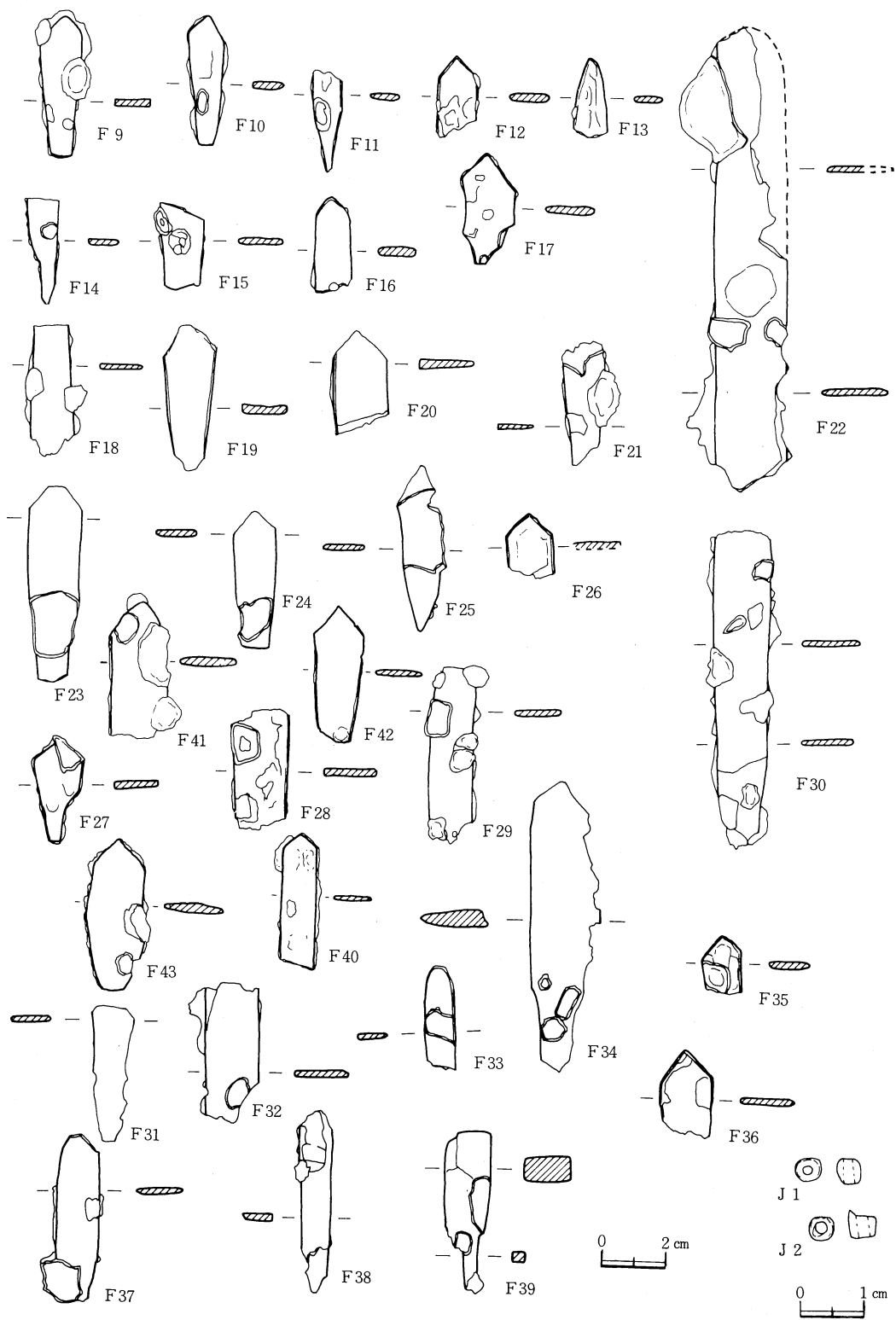
挿図 391 15 I S P 01 遺物図その 1



挿図 392 15 | S P 01 遺構図



挿図 393 15 | S P 01 遺物図その 2



挿図 394 15 | S P 01 遺物図その 3

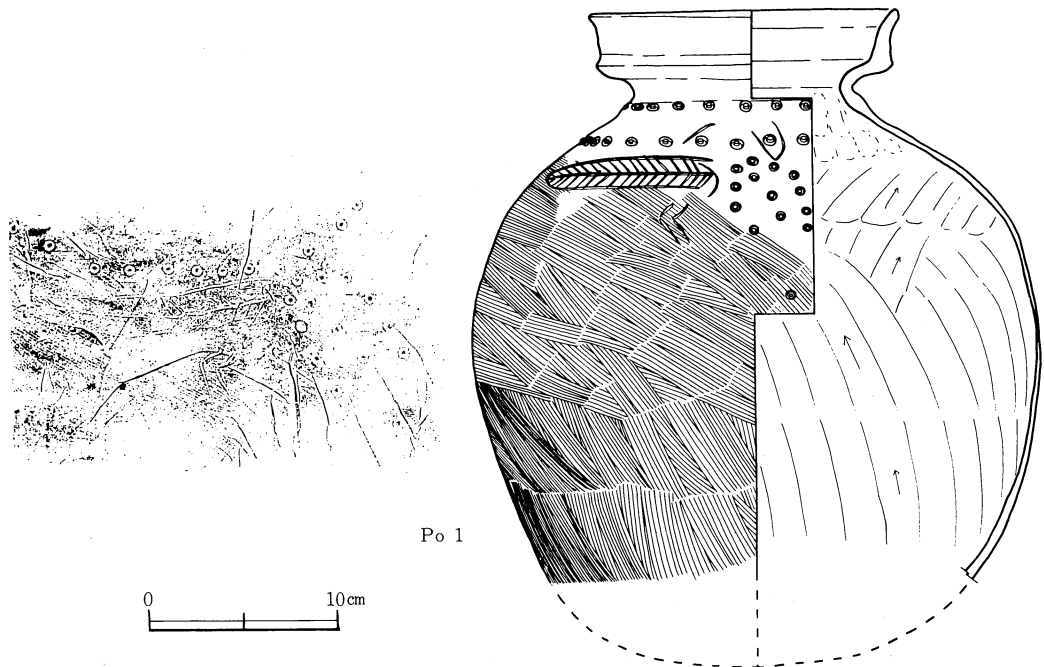
に祭祀遺跡でよく出土するもので、素文鏡などと合わせて住居の近くで何らかの（海に係すると思われる）祭祀を行なったものとする。ここではピットが2つしかなく、祭祀の場所なのか祭祀用具の棄て場なのかは不明である。

素文鏡M1は径2.7cm・厚さ1.2mm・重さ5.1gで表は磨いてあり、縁は丁寧な面取りがある。M2は径2.6cm・厚さ1.2mm・重さ3.85gで縁の面取りがやや直線的で裏からみると多角形を呈す。M3は径2.4cm・厚さ1.3mm・重さ3.85gで面取りも丁寧である。3面とも鈕はしっかりしており、形態もよく似ている。鏡面はいずれも凸面をなし、錆は出ているもののよく磨かれていた事がわかる。

このSPO1は、鉄器などと同じ層で出土している土器（P01～P06）などから長瀬I期のものであろう。

14J地区出土の壺（挿図395，図版129）

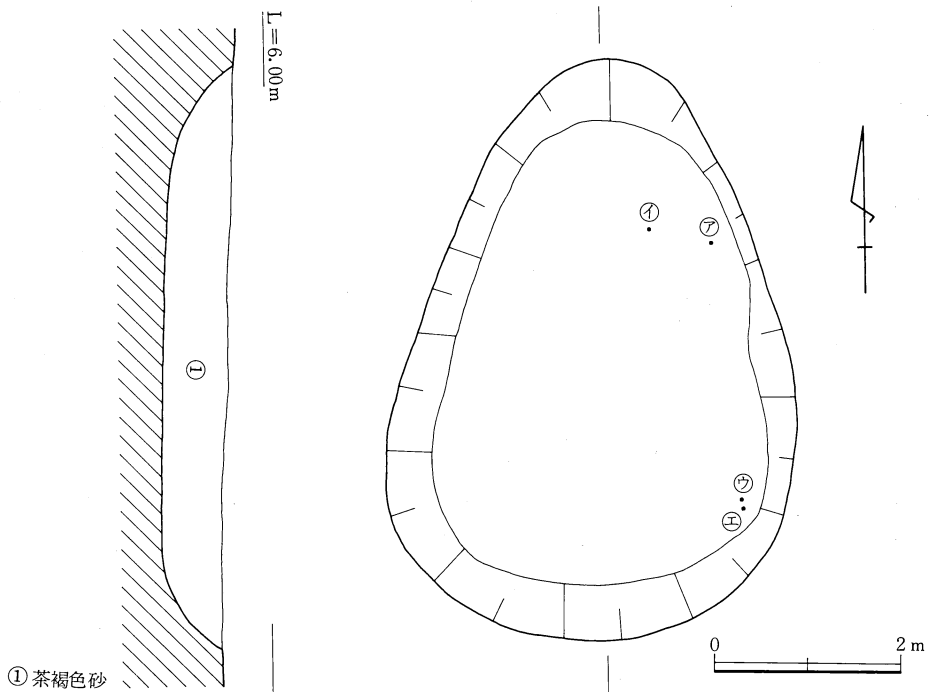
14J地区の中央南側の黒砂層から土器群に混じり、肩部に装飾した土師器（壺）が出土した。この壺は直接黒砂層下の遺構に伴うものではなかった。肩部に竹管文を多数施し、その間にヘラによる木の葉状（？）の文様が描かれている。長瀬II期でかろうか？



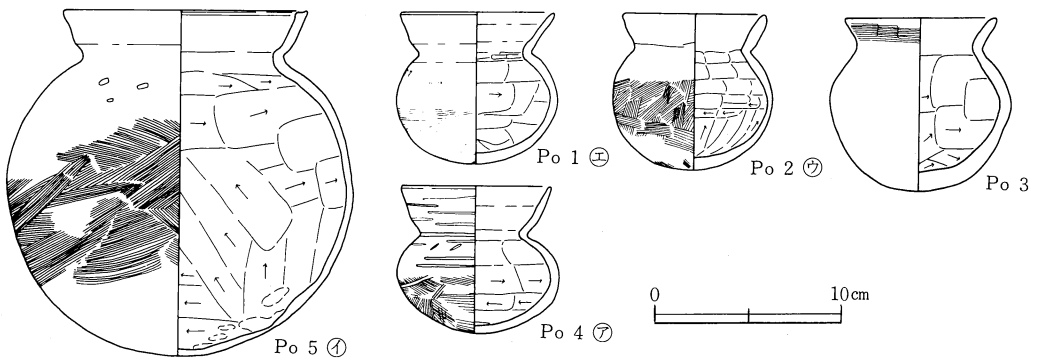
挿図 395 14 J 地区出土の壺遺物図

14H S K01（挿図396・397，図版122・129）

14H地区と13H地区にかかる土壌で、S I 125とS I 127の東にあり、S X03北西に位置する。遺構は卵形で北側が狭く、南側が広い。大きさは3.07×2.16—0.35mで、床面は平らである。遺構の性格は、はっきりしないが隣接の住居跡と関係が深いと思われる。



挿図 396 14 H S K 01 遺構図

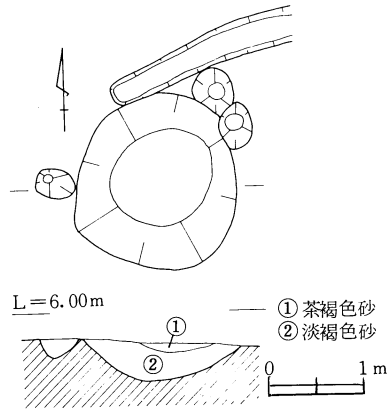
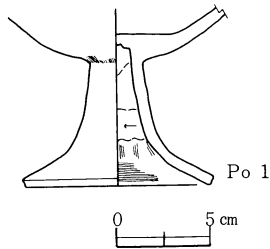
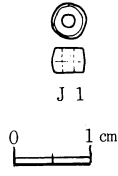
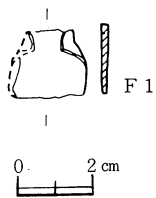


挿図 397 14 H S K 01 遺物図

遺物は床面近くで小型丸底壺，甕などが出土した。甕は体部が球形をなし「く」の字口縁，小型丸底壺は口径と胴径がほぼ同じ大きさのもので，外面はハケ目が主である。時期は出土遺物などから長瀬Ⅲ期のものであろう。

13H S K 05 (挿図398・399, 図版123・129・130)

4号墳の墳丘下であり，S I 18の北約3mに位置する。平面形はほぼ円形で，上縁部長軸1.9m，短軸1.7m，深さ0.3mを測る。底面は楕円形で，長軸1.1m，短軸1.0mを測る。遺物は少量の土師器片（高杯他）に伴い炭化米数十個と桃か梅の実と思われるものを数個



挿図 398 13 H S K 05

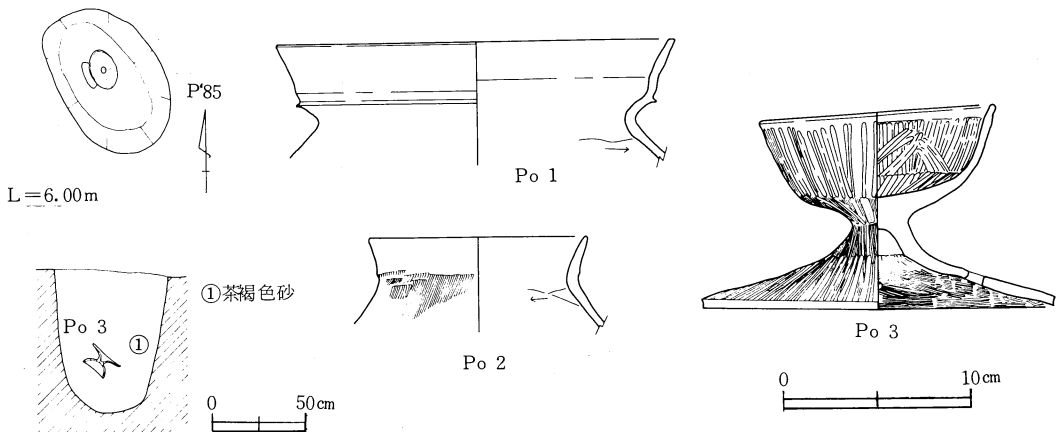
遺物図その 1

挿図 399 13 H S K 05 遺構・遺物図その 2

検出した。位置などから、S I 18に供う遺構と考える。時期は長瀬III期か？

13HP85 (挿図400, 図版123・130)

P85は4号墳中央部の下層にあり、S I 18の北西にある。楕円形で、主軸はN—37°—W、ピットの大きさは(82×55—80)cmである。遺物は底から約20cmの所に脚を斜め上方に向けた高杯と、カメの破片が2点出土した。高杯はベンガラが塗られていた。祭祀用か、もしくはそれに類似する遺構であろう。時期は長瀬I期のものとする。



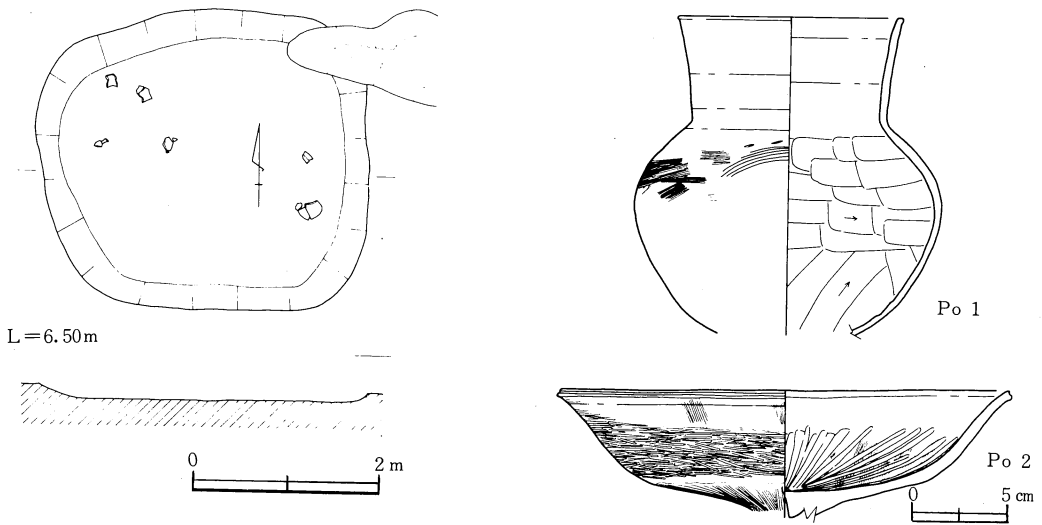
挿図 400 13 H P 85 遺構・遺物図

13 I S K 03 (挿図401, 図版123・130)

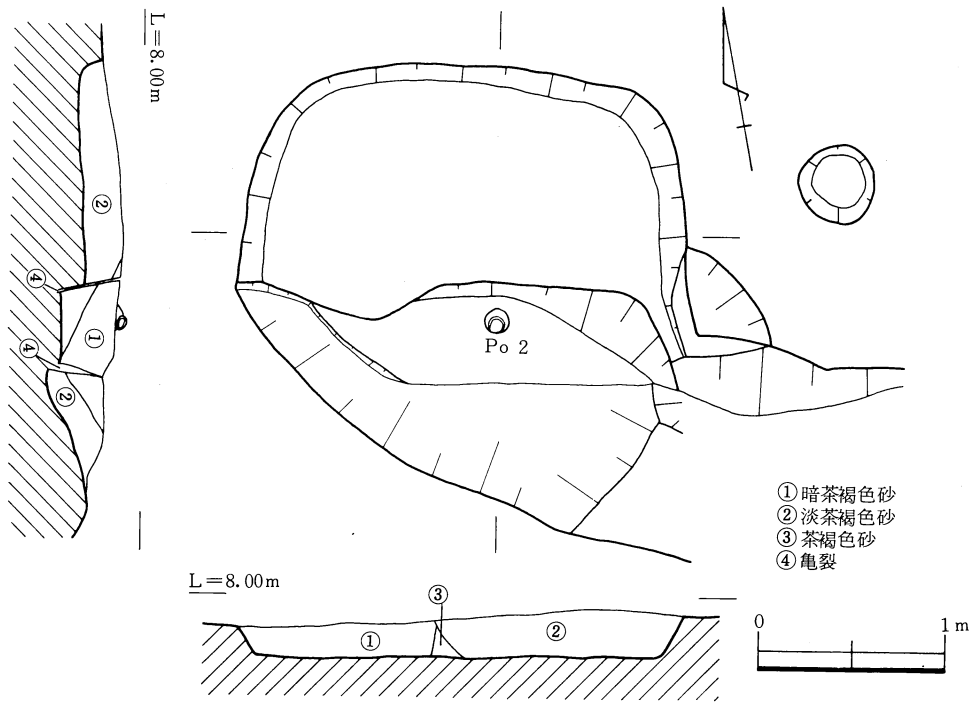
S I 13のすぐ南東にある土壌で一辺3mのややくずれた隅丸方形をなし、床面は平坦で壁高は約20cmある。出土遺物は壺・高杯などである。柱穴はなく、他にピットなどもない事などから住居跡でなく住居に付随する何かの跡ではないかと考える。時期はI期か？

13D S K 01 (挿図402・403, 図版123・130)

13D地区の北西部、白砂との境界線上に位置し、S I 68の東にある。平面形は南側の大

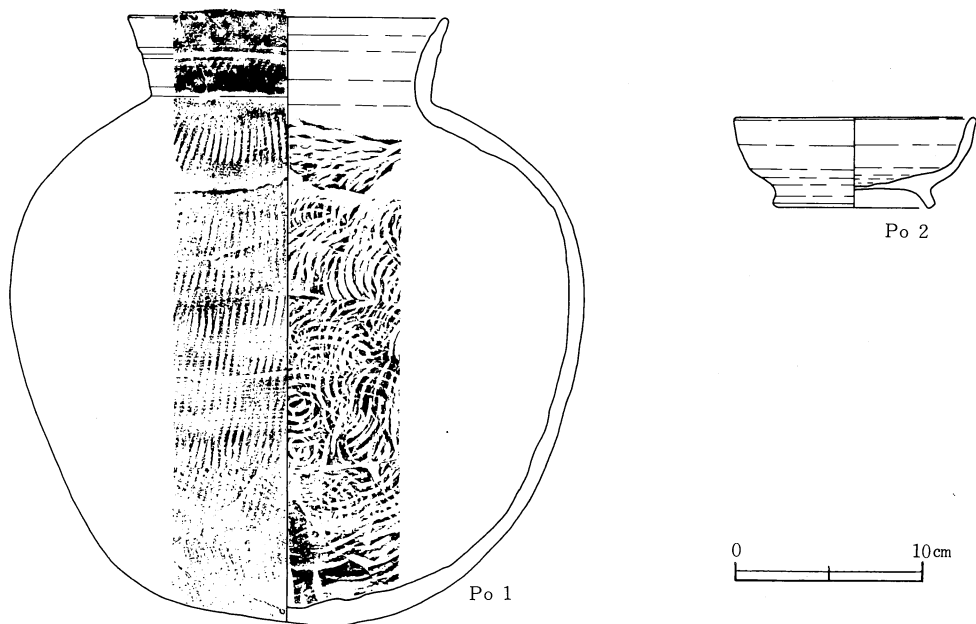


挿図 401 13 I S K 03 遺構・遺物図



挿図 402 13 D S K 01 遺構図

半が崩れ落ちている為に明らかでないが、隅丸方形を呈すと考えられる。東西軸2.11mを測りやや北に傾斜する。深さ約33cmである。ピットは確認することができなかったが、住居跡とも考えられる。埋砂内より、須恵器の高台付椀（P o 2）が出土している。内外面



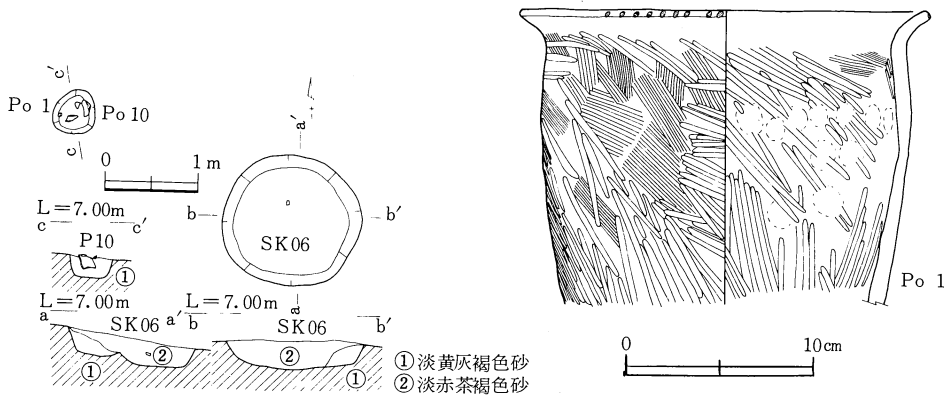
挿図 403 13 D S K 01 遺物図

横ナデで、特に底部から口縁部への境いが丸味をおびていることを考えるなら陶邑IV期*とも考えられる。この土壌は、飛鳥時代のものであろう。また、この土壌の南側より須恵器の甕 (P o 1) が出土している。*『陶邑』I~IV (大阪府教育委員会 1976~1979) に基づいた。以下同様。

13D S K 06・P 10 (挿図404, 図版124・130)

13D地区の北側中央部に位置し、13E地区の南西側で確認された焼砂 (淡赤褐色砂) の広がりに含まれ、その東端にある。この淡赤褐色砂上からは弥生土器片が検出されている。土壌は、この赤褐色砂が白砂に落ち込んでいるものであり、平面形は円形を呈している。上縁部東西1.47m, 南北1.37m, 深さ27cmを測る。床面は北側に傾斜しており比高差14cmである。ピットは存在しなかった。遺物は甕の口縁が淡赤茶褐色砂内より、1点検出されただけである。

13D地区P 10は13D地区の北にあり、S K 06の北西に位置する。北側には13D S K 06から続く淡赤褐色砂が北西から南東にかけて斜面に平行して帯状に広がっている。この淡赤褐色砂内にはわずかに弥生土器片を包含していた。P 10はその層の下にあり埋砂は淡黄灰褐色砂で、平面形は楕円形を呈し、長軸47cm, 短軸45cm, 深さ25cmを測る。P 10内から弥生土器 (P o 1) が出土した。これは先に述べたS K 01内出土の甕の破片と接合した。P o 1は口縁部が「く」の字に外反し、口端部に木口状のもので刻目を施している。胴部外面は粗い刷毛目を施した後、ヘラ磨きを施す。弥生時代前期の中段階の土器と考え、S K 06, P 10は弥生時代前期のものであろう。

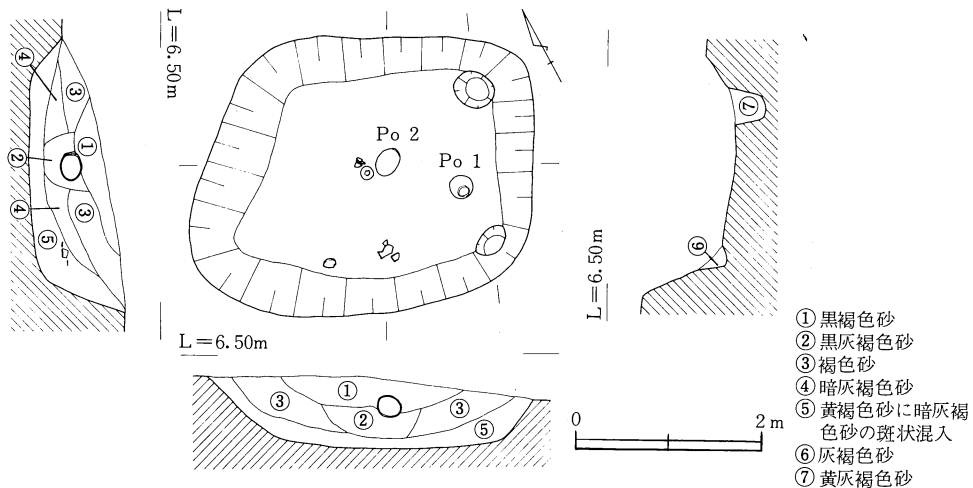


挿図 404 13 D S K 06・P 10 遺構・遺物図

13E S K 02 (挿図405・410, 図版124・130)

13E地区の西側に位置し、S I 63の南西にある。平面形は隅丸方形を呈し、南北辺2.92m、東西辺3.50mを測る。床面は北東から南西に傾き、壁高は北で最大値84cm、南で最小値35cmを測る。床面積は5.3m²。ピットは2個あり、北東、南東隅にみられる。

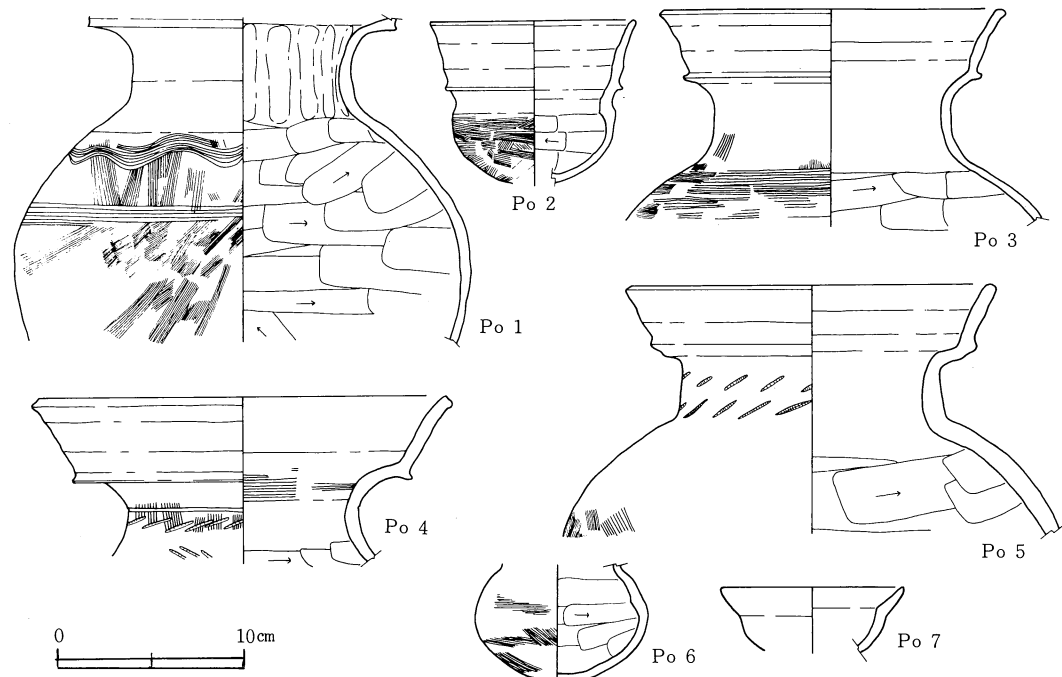
遺物は床面上にほぼ完形の甕が2個、赤色顔料付着の石1個、がみられた。この遺構は近くの住居跡に関係すると思われるが性格は不明である。長瀬III期のものであろう。



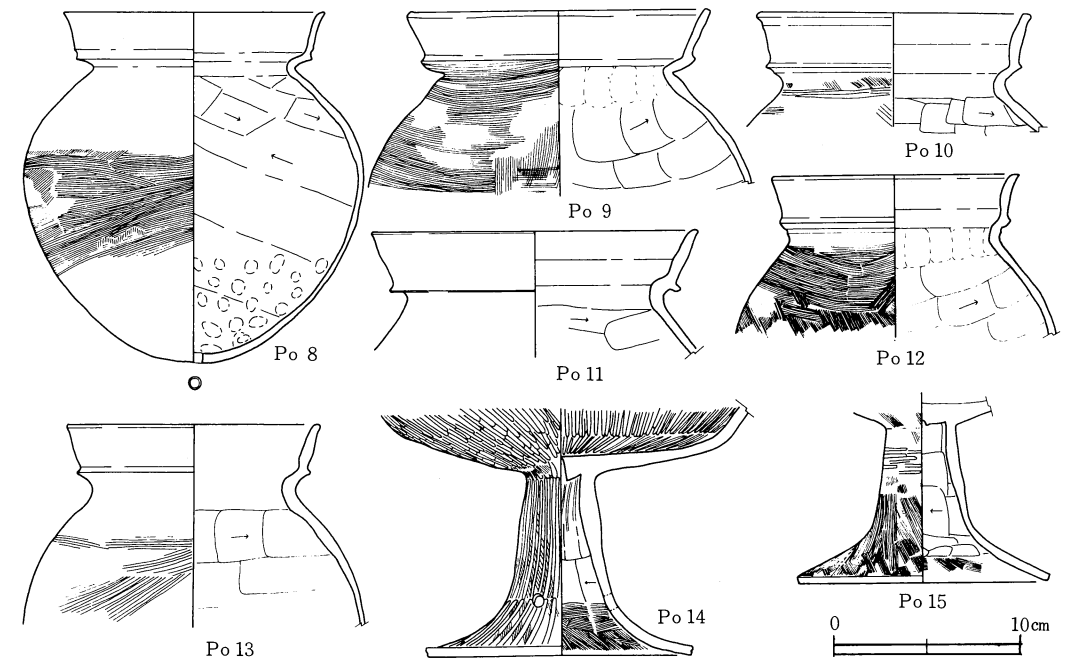
挿図 405 13 E S K 02 遺構図

12 I・13 I S D 02 (挿図406~409・411, 図版124・131・132)

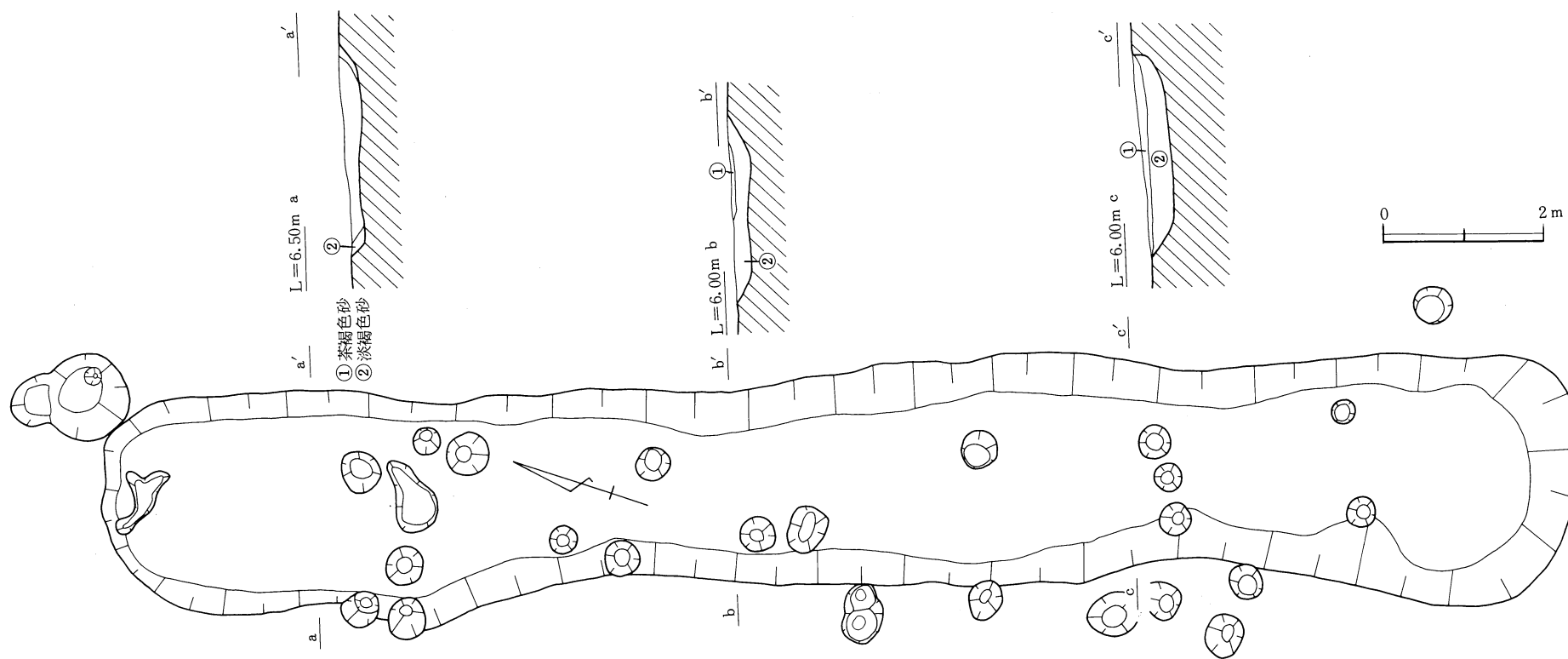
S D 02は10号墳の東側から4号墳の東側に続く溝で、S I 11・12とS I 14の間に位置する。ほぼ直つすぐ伸びる溝で大きさは長さ約18m、幅約2.8m、深さ40cmを測り床面はほぼ平坦である。遺物は土器群が溝の南側に床面から少し浮いた所で出土している。溝の内外にピットが数十個あるが、溝との関係は不明である。溝の主軸はN-20°-WでS I 11・12・



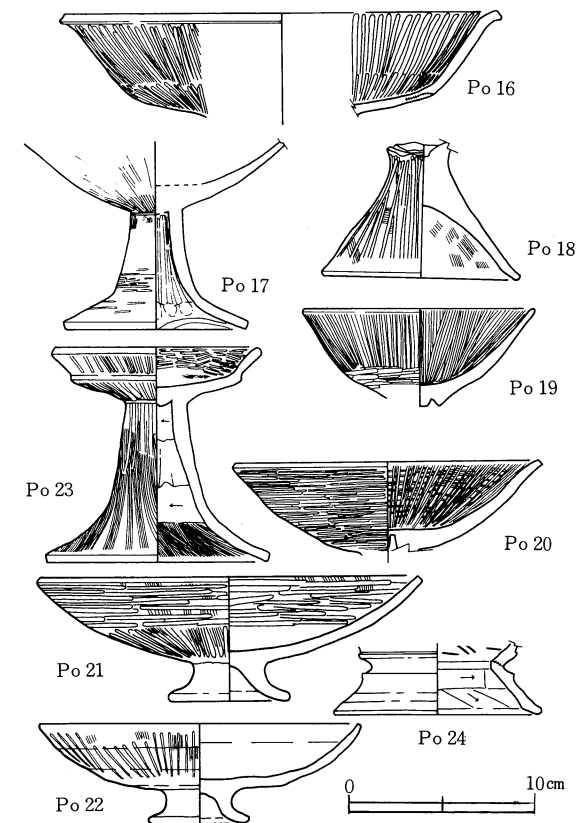
挿図 406 12 I・13 I S D 02 遺物図その 1



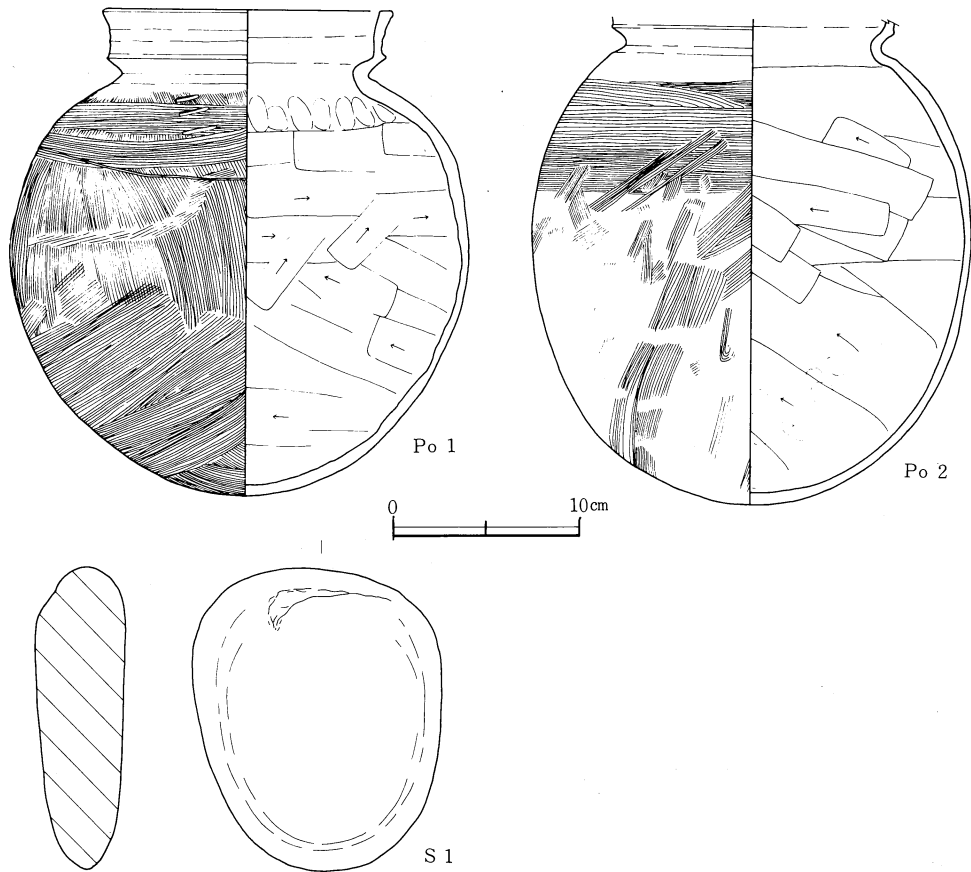
挿図 407 12 I・13 I S D 02 遺物図その 2



挿図 408 12 I・13 I S D 02 遺構図



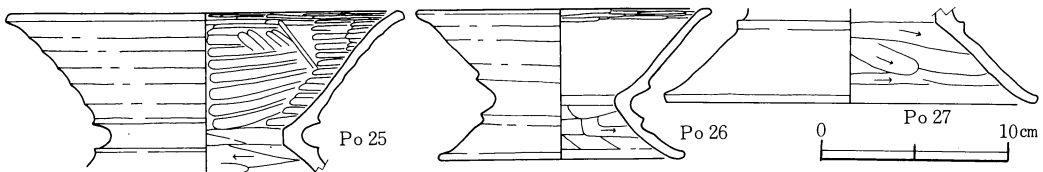
挿図 409 12 I・13 I S D 02 遺物図その 3



挿図 410 13 E S K 02 遺物図

14などこの地区の多くの住居跡の軸方向と一致する。壺・甕・高杯・器台など多くの器種が出土している。P o 8 は、非常に丁寧な底部穿孔の甕である。甕外面には肩部以下媒が多く付着していることから甑^{こしき}として使用した可能性がある。(S E 03でも同様な底部穿孔の甕が検出されている。)

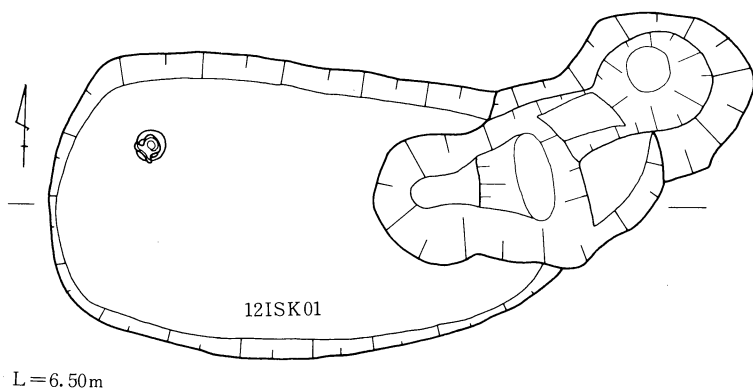
この溝状遺構はこれらの遺物などから長瀬Ⅲ期のものとする。



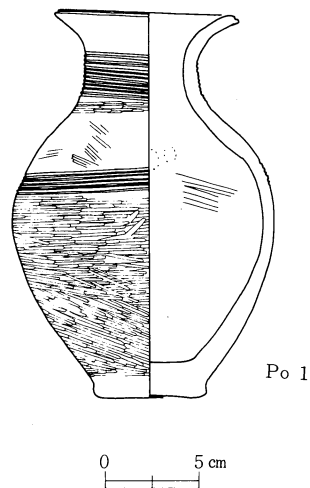
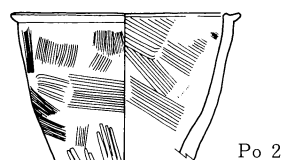
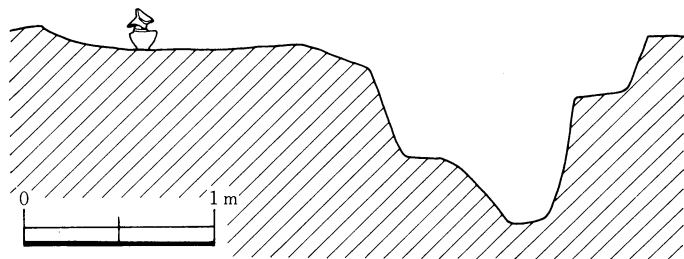
挿図 411 12 I ・ 13 I S D 02 遺物図その 4

12 I S K 01 (挿図412・413, 図版124・132)

S I 12の西, S D 02の東にあたる。土壌は東西に長軸をもつ楕円形で、東側は古墳時代の土壌、ピットで切られている。長軸は約2.6m, 短軸1.4m, 深さ0.2mを測る。床面は平



L=6.50m



挿図 412 12 I S K 01 遺構図

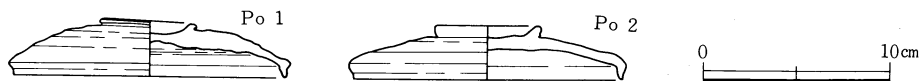
挿図 413 12 I S K 01 遺物図

垣である。

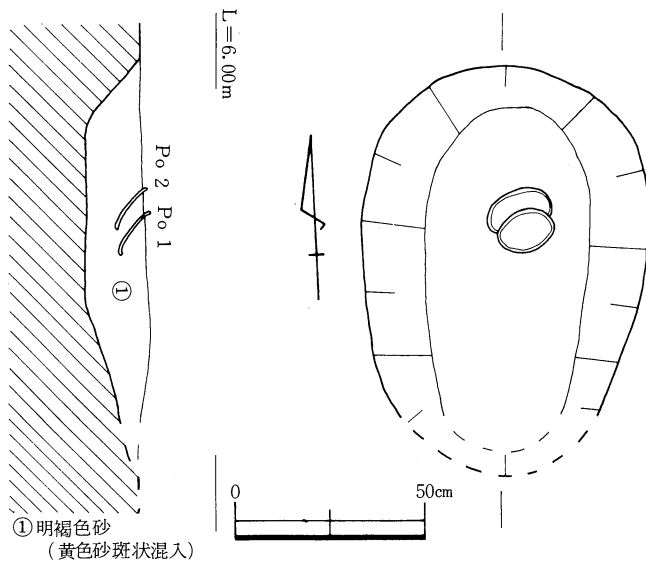
遺物は土壌西端から50cmのところ、壺が1個、胴部分で2つに割れた状況で出土した。底部は床面に密着していた。また壺の胴内部には甕の破片が入っており、同時期の壺・甕のセットを知り得た。壺は口縁部、頸部、胴部にヘラ描沈線を1, 11, 6本入れてあり、胴部沈線の下には $\sim\sim\sim$ 状の押型が部分的になされている。口縁部の開きがまだ大きくないので古い観もするが、ヘラ描沈線が新しくなるにつれて多くなるという傾向からすれば、やや新しい時期になるとみられる。いずれにしても弥生時代前期の土器と考える。

12 I S K 02 (挿図414・415, 図版125・132)

12 I 地区の南西部に位置し、S I 12の南西に存在する。土壌は南北に長軸をもつ楕円形で、長軸約1m、短軸約0.3m、深さは約14cmを測る。この土壌より須恵器杯蓋2個がかさね合わせた状態で出土した。どちらも天井中央に輪状のつまみを有する。P o 1は、蓋内面がナデ、外面肩部2/3前後が回転ヘラ削り、端面横ナデ。P o 2は内面ナデ、外面1/2前後が回転ヘラ削り後横ナデ、端面全体に灰釉がかかる。これらの土器(陶器IVのII・III)



挿図 414 12 I S K 02 遺物図

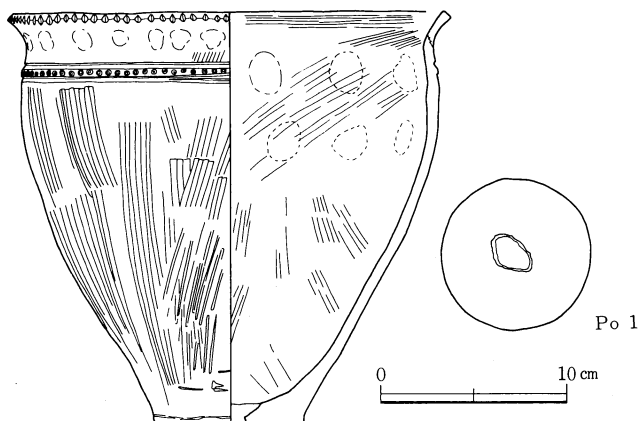


挿図 415 12 I S K 02 遺構図

からこの S K 01 は奈良時代の終り頃と考えられる。

12 F 地区出土弥生甕 (挿図 416, 図版 132)

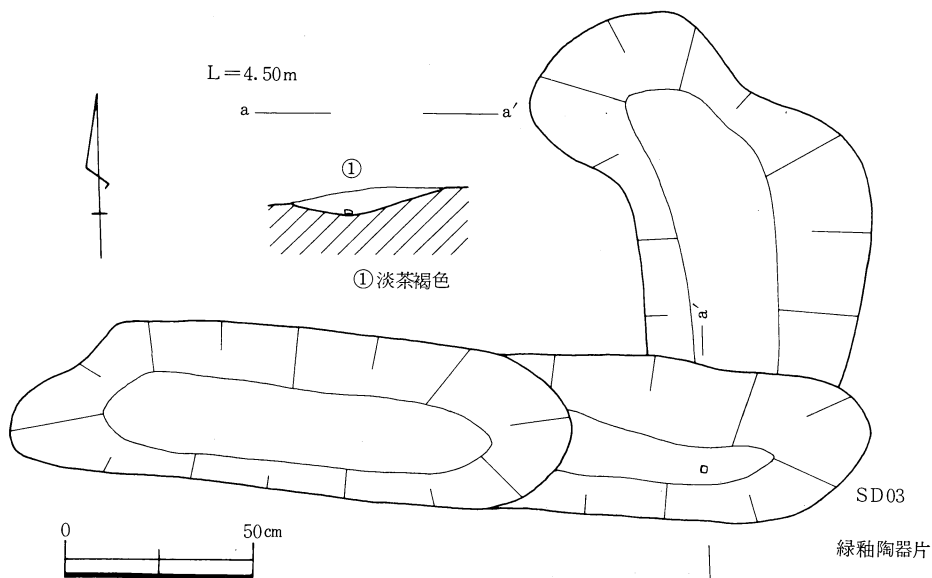
12 F 地区の北西側に出土した。この甕に伴う遺構は検出できなかった。底部に焼成後の穿孔があるが、甕として使用したのか不明である。媒はほとんど付着していない。口端部にはヘラによる刻み目を施し、肩部に 2 条のヘラ描き沈線をめぐらし、沈線間に竹管文がめぐっている。弥生前期中段階のものであろう。



挿図 416 12 F 弥生甕遺物図

12 B S D 03 (挿図 417, 図版 125・132)

12 B 地区の南へむかってかなり急に傾斜している斜面上で、東西に走る溝状遺構の最底部を検出した。大きさは、 $2.29 \times 0.44 - 0.35$ m である。周辺には何本かの溝が不定方向に

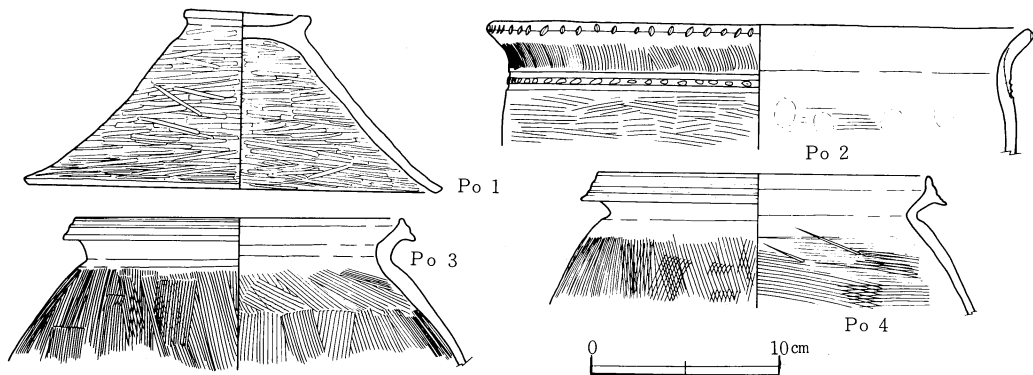


挿図 417 12 B S D 03 遺構図

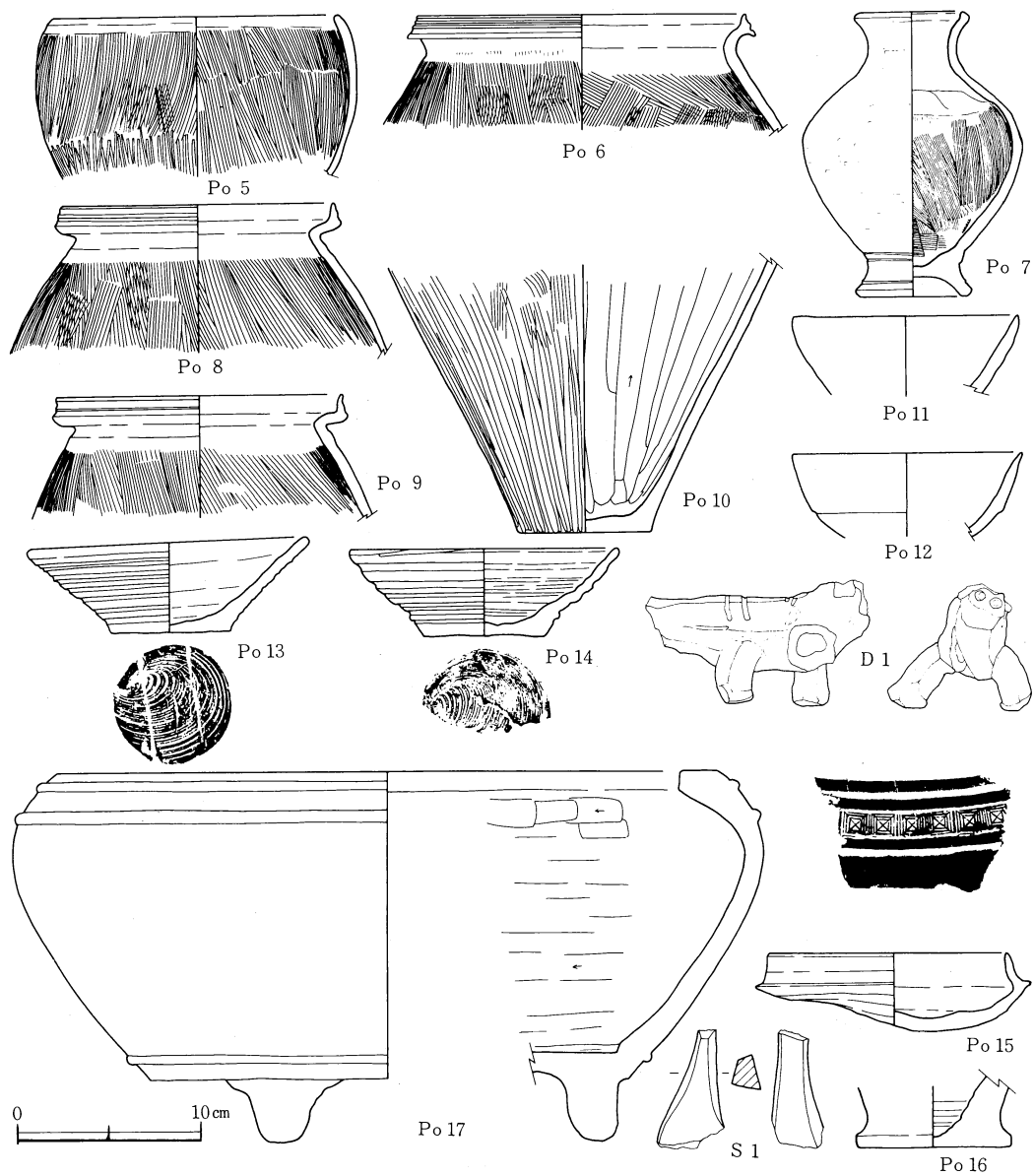
あるが、切り合い関係・性格はよく判らない。この溝の東隅で緑釉陶器片を検出した他、奈良期の土師器数点を確認した。細片のため実測できなかった。

南側斜面（グライ土壌とその上面）（挿図418～424，図版125・132～135）

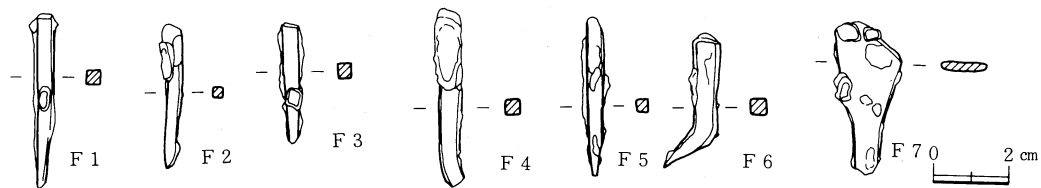
25号墳の南側は、黒砂（黒褐色砂）が落ち込み、地山（黄灰色砂）の上に5mもの堆積のある独特の地形になる。（挿図422）（砂丘地の山側にありがちな低湿地に砂が堆積したと思われる。）11A，12A地区は海拔1.5～2.8mのところ、青灰色の粘土層（数層に分かれる）が広がっている。この層はグライ土壌と呼ばれるもので、わずかに土師器，弥生土器（P o 1～10）を包含している。弥生時代から古墳時代に低湿地を形成していたと考えられ、粘土層の質から水田の存在をうかがえる。グライ土壌の上層は古墳時代から室町時代までの遺構（溝，墳墓），遺物（土師器，天目，土馬，火鉢，鉄器類）が出土する何枚もの褐色



挿図 418 南側斜面遺物図その1

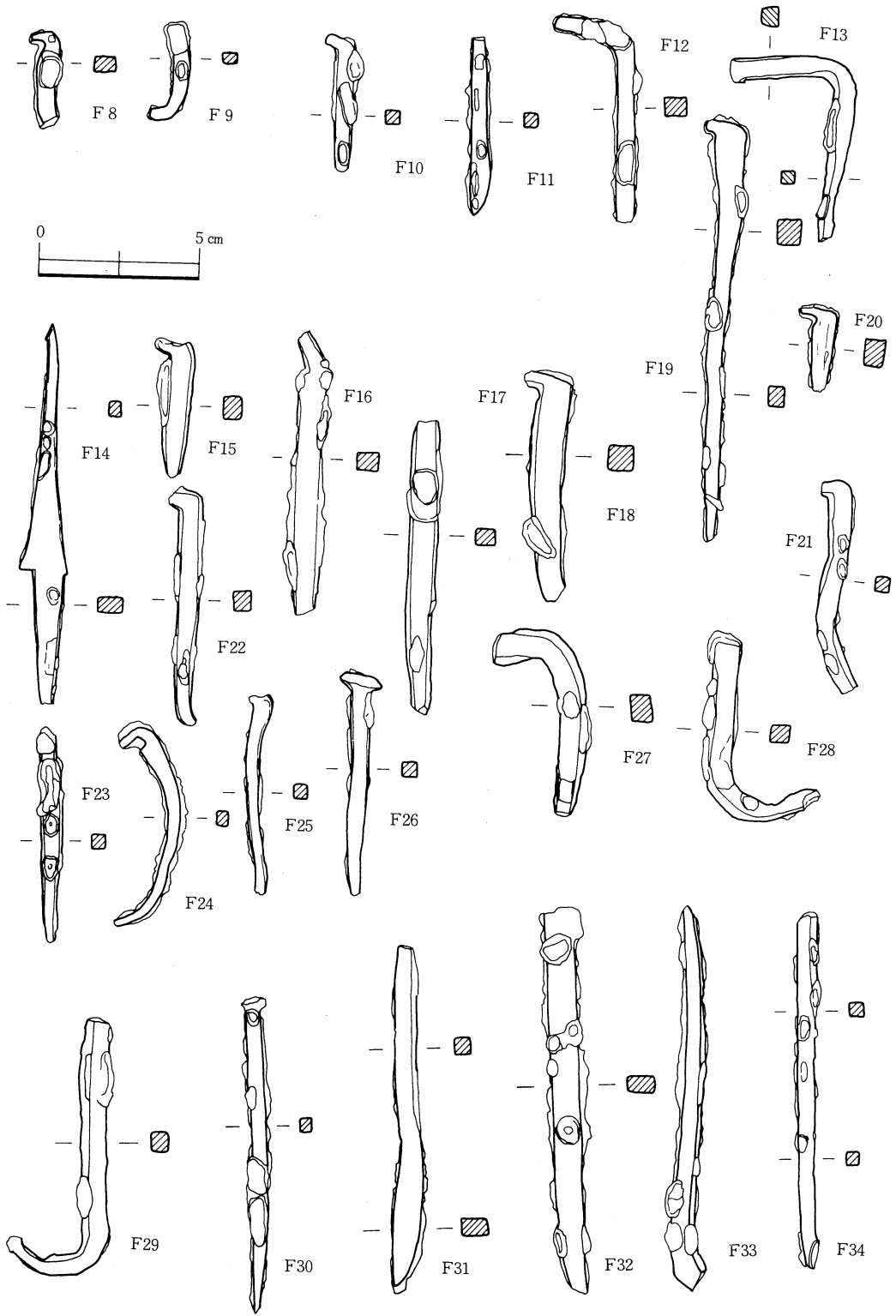


挿図 419 南側斜面遺物図その 2



挿図 420 南側斜面遺物図その 3

砂の堆積がある。鉄器の釘，鎌，^{かすがい}鋸，^{もりさき}刀子，鋸先（F 1～F 49）などは古墳時代～室町期，土馬は奈良時代，天目，すり鉢などは室町時代のものと考えられる。

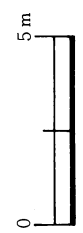


挿図 421 南側斜面遺物図その 4

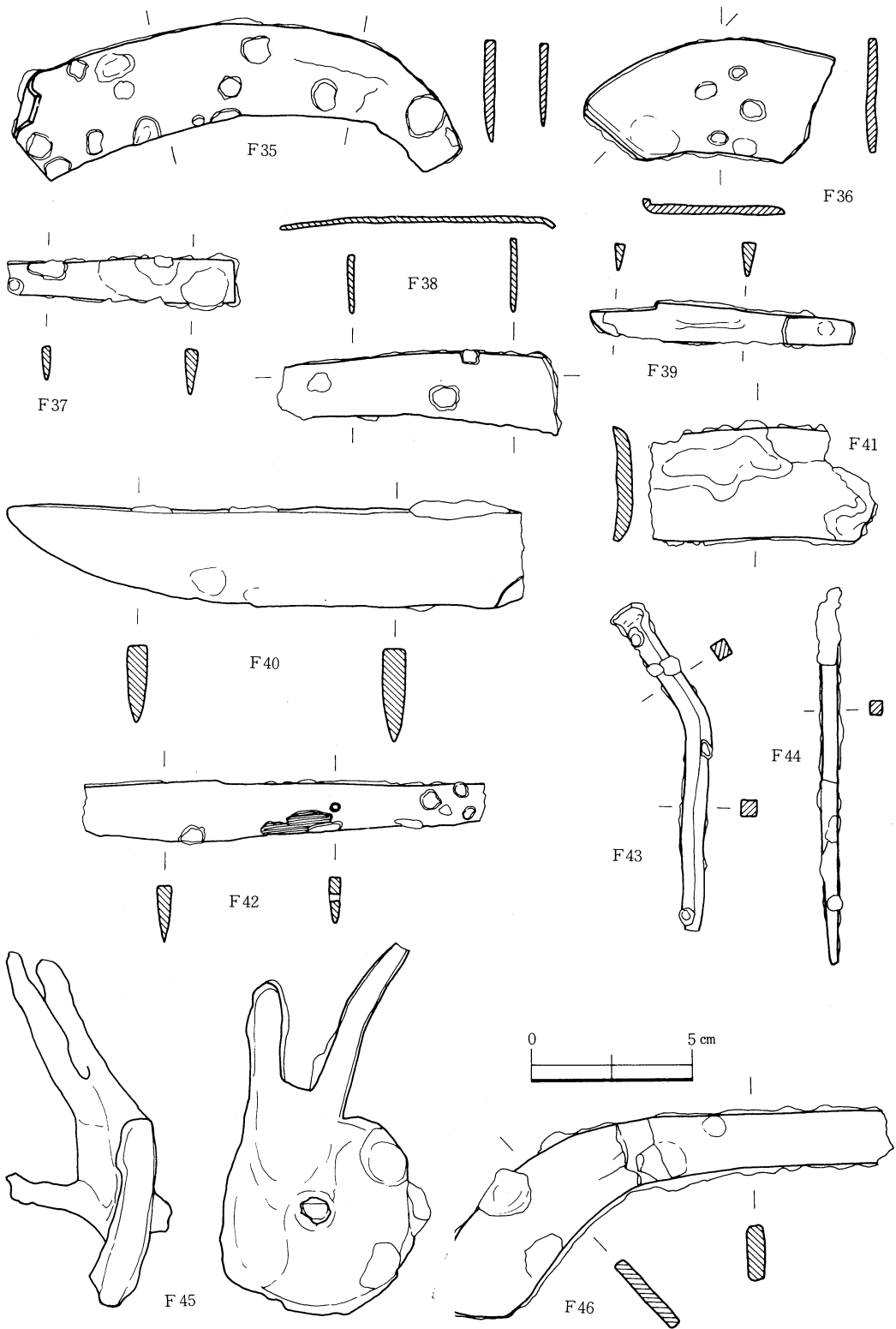


1 = 700

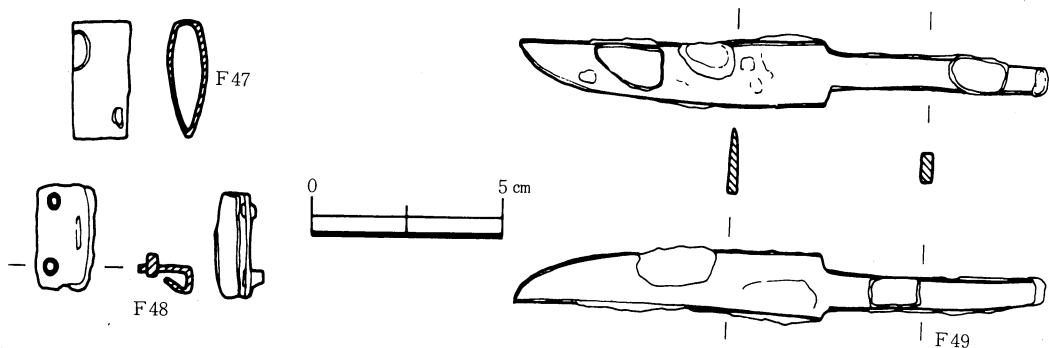
- ① 淡灰褐色砂層
- ② 黒褐色砂層
- ③ 黄灰色砂鉄層に黒褐
色砂混入
- ④ 茶褐色砂層
- ⑤ 淡茶褐色砂層
- ⑥ 明褐色砂層
- ⑦ 青灰色粘土層
(青黒い)
- ⑧ 褐色砂層
- ⑨ 黄灰色砂層
- ⑩ 青灰色粘土層
(青味が強い)
- ⑪ 粘土質の灰褐色砂層
- ⑫ 暗黄褐色砂層
- ⑬ 暗褐色粘土層
- ⑭ 青灰色粘土層
- ⑮ 灰褐色粘土層
- ⑯ 青灰色粘土層
- ⑰ 暗灰色粘土層



挿図 422 南側斜面 (グライ土壌他) 遺構図



挿図 423 南側斜面遺物図その5

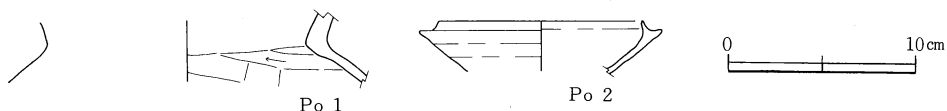


挿図 424 南側斜面遺物図その 6

11A・12A地区にあるような低湿地は、すぐ西の53年度調査区（緊急調査区）に続き、1号墳の西側まで確認されている。

12B S D 01（挿図422・425，図版125・135）

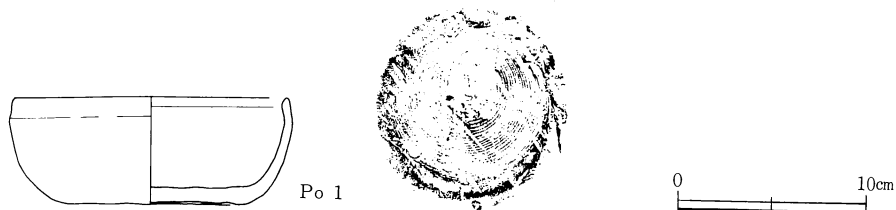
11B地区から13B地区に伸びる溝で一部は昭和53年度に報告している。溝は幅80～40cm，長さ（確認できているだけで）15mを測る。底面は西側がわずかに高く（20cm程度）東側は明確に検出できなかった。遺物は須恵器片，土師器片がわずかに出土している。飛鳥時代のものであろう。



挿図 425 12 B S D 01 遺物図

11 I 地区出土の須恵器（挿図426・427，図版135）

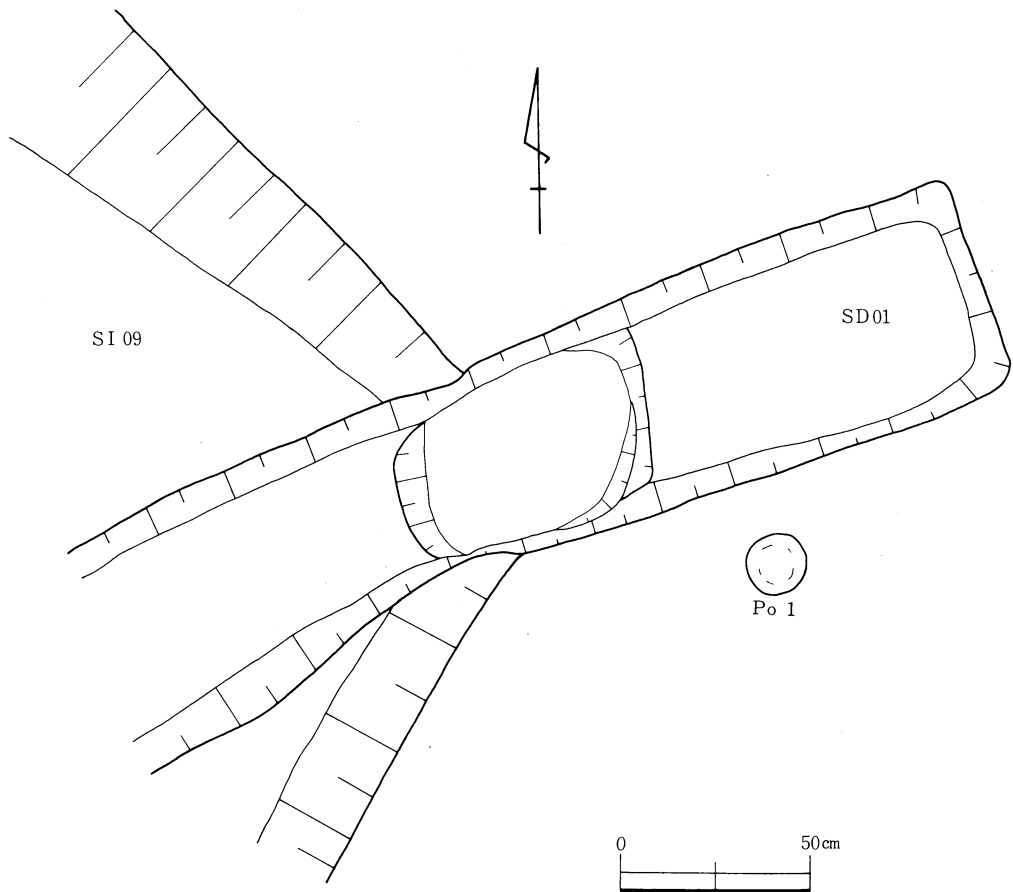
11 I 地区 S D 01の南20cmの所に須恵器碗が出土した。S D 01から約50cmも高い位置にある点，出土した層が黒褐色の遺物包含層で色々な時期の遺物を含んでいる点などからこの須恵器に供う遺構はなく，単独のものとする。やや凹む杯底部，内湾気味の口縁部，杯部と底部の境いにある削り，底部糸切りなどから陶器IV～V期のものと思われる。



挿図 426 11 I 出土須恵器遺物図

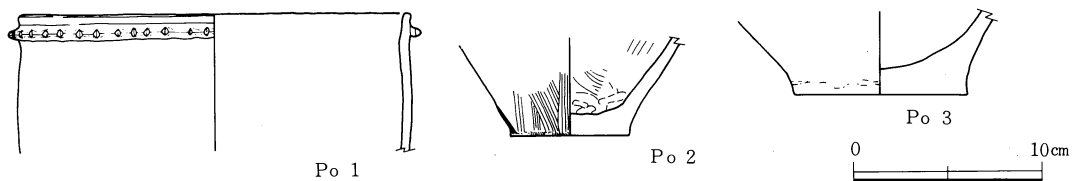
11 F S K 01（挿図428～430，図版135）

11F地区南東隅に位置する S K 01の上面より，縄文土器片，弥生土器片，土師器片等の



挿図 427 11 F 出土須恵器遺構図

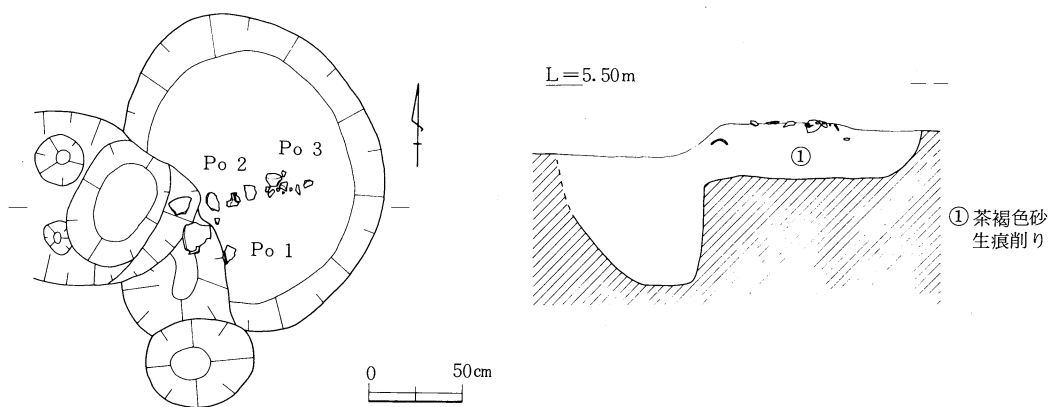
土器群が出土した。弥生前期の甕の口縁部，底部（P o 2～6）が，いわゆる刻目突帯を有する縄文土器片（P o 1）出土している。土師器片が出土しているが断面から流入と考えられる。これらの遺物の下より検出された土壌の大きさは1.65×1.50-0.25mを測る。



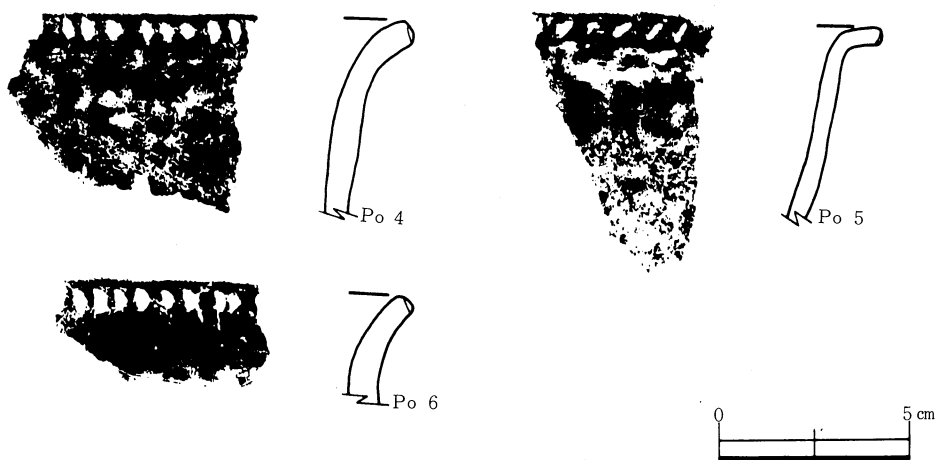
挿図 428 11 F S K 01 遺物図その 1

11 F P 23（挿図431・433，図版126・135）

11 F 地区の南西に位置する。ピットは39×35-18cmを測る。周囲には同じような大きさ

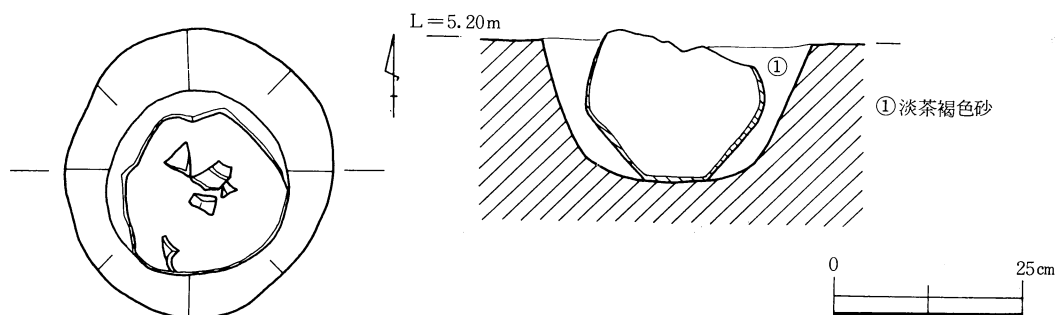


挿図 429 11 F S K 01 遺構図



挿図 430 11 F S K 01 遺物図その 2

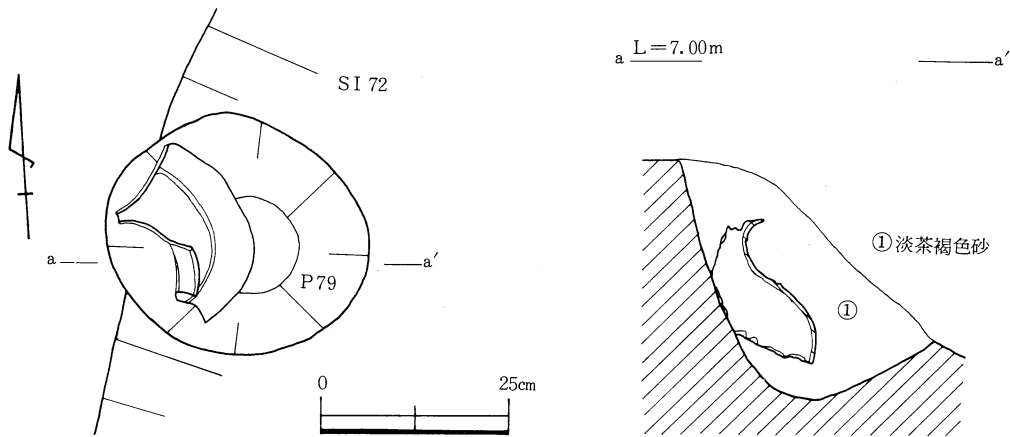
のピットが点在しており、それらには、弥生土器や土師器の破片が含まれていた。中でも P23には、肩部より上を欠いた弥生の壺がすっぽりと収まっていた。遺物より弥生前期の遺構であるが、性格は不明である。



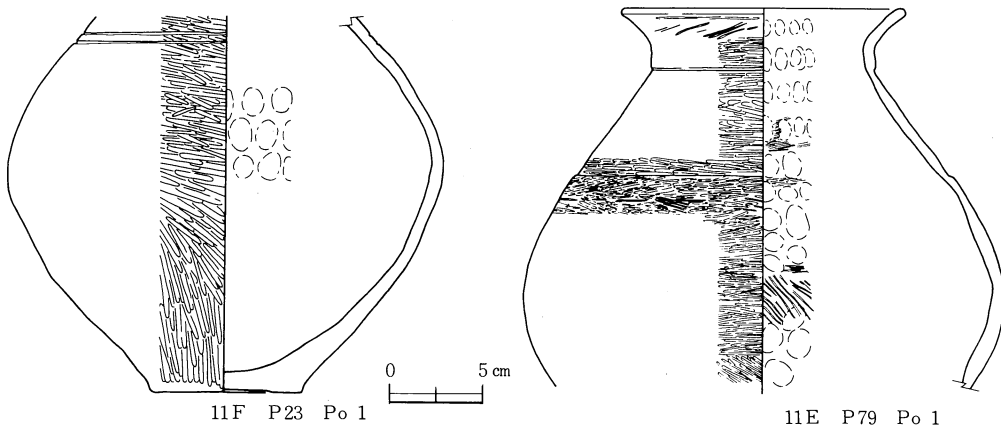
挿図 431 11 F P 23 遺構図

11E P 79 (挿図432・433, 図版126・135)

S I 72の西側にあり, S I 72の肩によって斜めに切られている。ピットは35×31-35cm位の大きさである。ピットの中より弥生前期の壺が底部を欠くものの比較的良好な状態で検出された。最大胴径は25.6cm, 口縁部は丸みを持ち頸部と肩部には段が認められる。外面には細かいへラ磨きが, 内面は段をなす指圧痕が施され, 接合部がみられる。時期は弥生時代前期と考えられるが, この壺は他の遺構から出土した弥生土器と比べて, 古い形態を有していると思われる。遺構の性格は不明である。



挿図 432 11 E P 79 遺構図



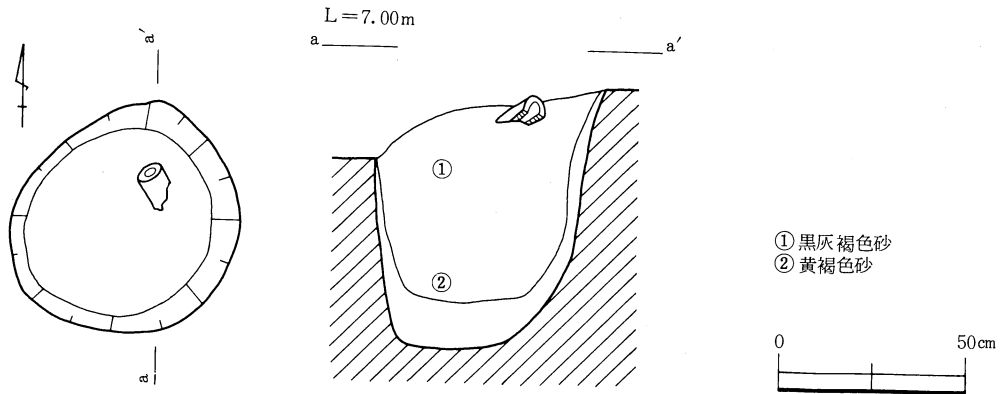
挿図 433 11 F P 23・11 E P 79 遺物図

11C P 17 (挿図434・435, 図版135)

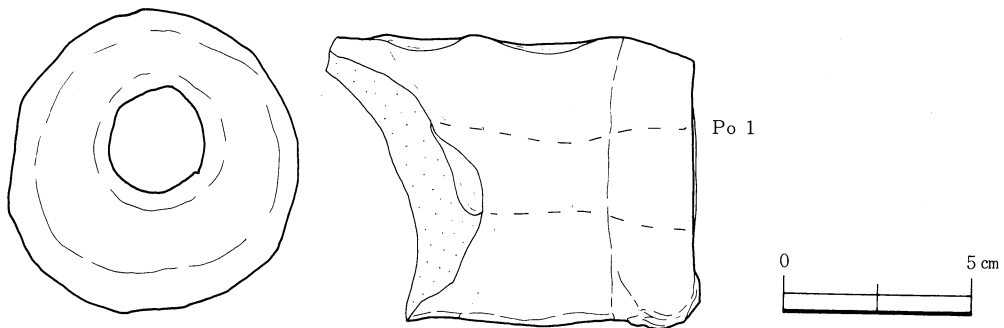
11C地区南西部に位置する25号墳の第1埋葬施設の南側の墳丘を掘り込んだピット(63×61-66.7cm)の上面より韃口^{ぐち}を検出した。

出土したのは円筒状の韃の先端部で, 端口には火を受けた痕があり自然釉が付着してい

る。胎土は1~2mmの石英・長石粒を含み全体に粗い。器表には靱痕と思われるくぼみがある。管内からも炭化米が1粒出土している。色は外面先端部で灰褐色、胴部淡赤褐色、内面淡赤褐色である。中世のものであろう。



挿図 434 11 C P 17 遺構図

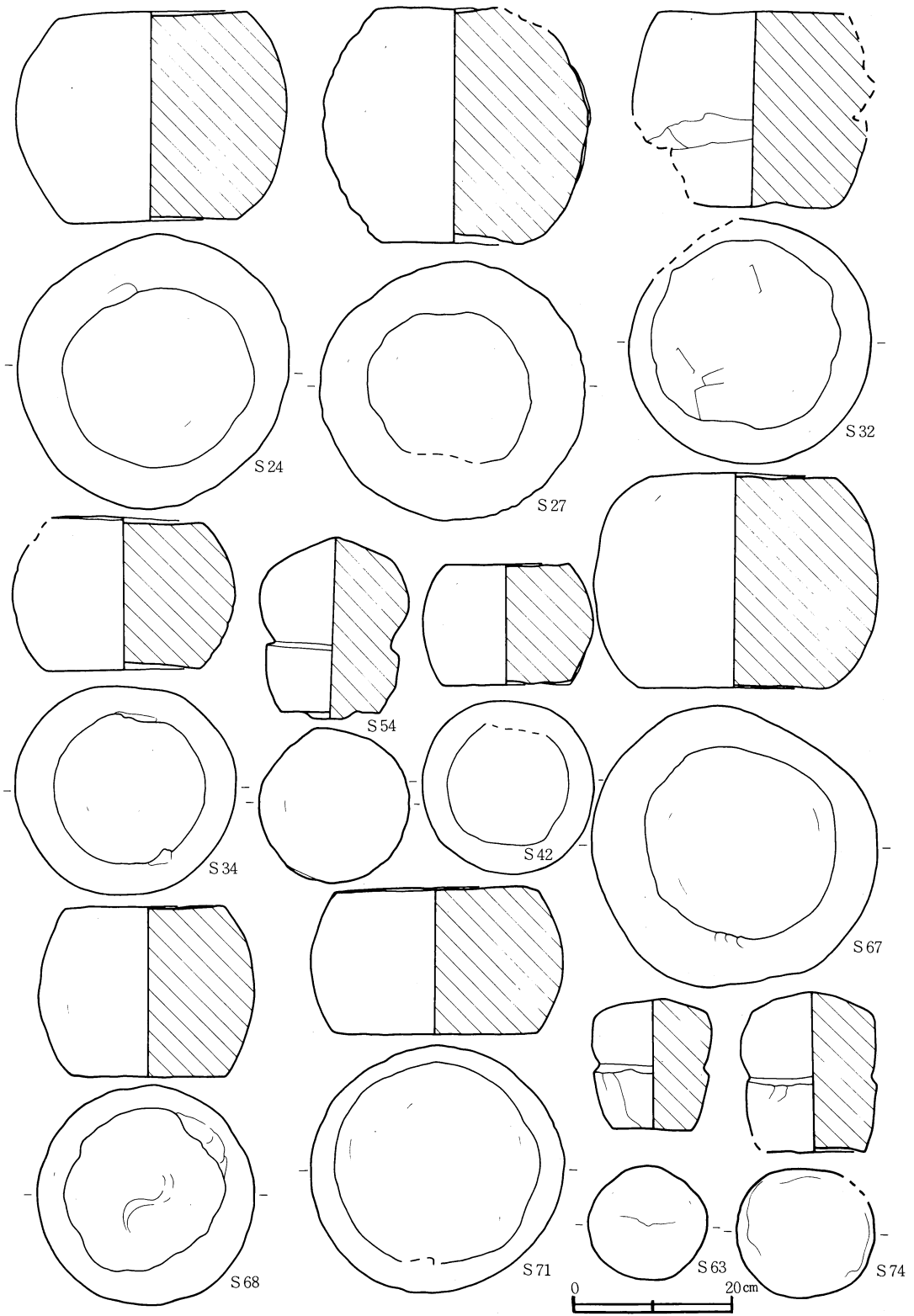


挿図 435 11 C P 17 遺物図

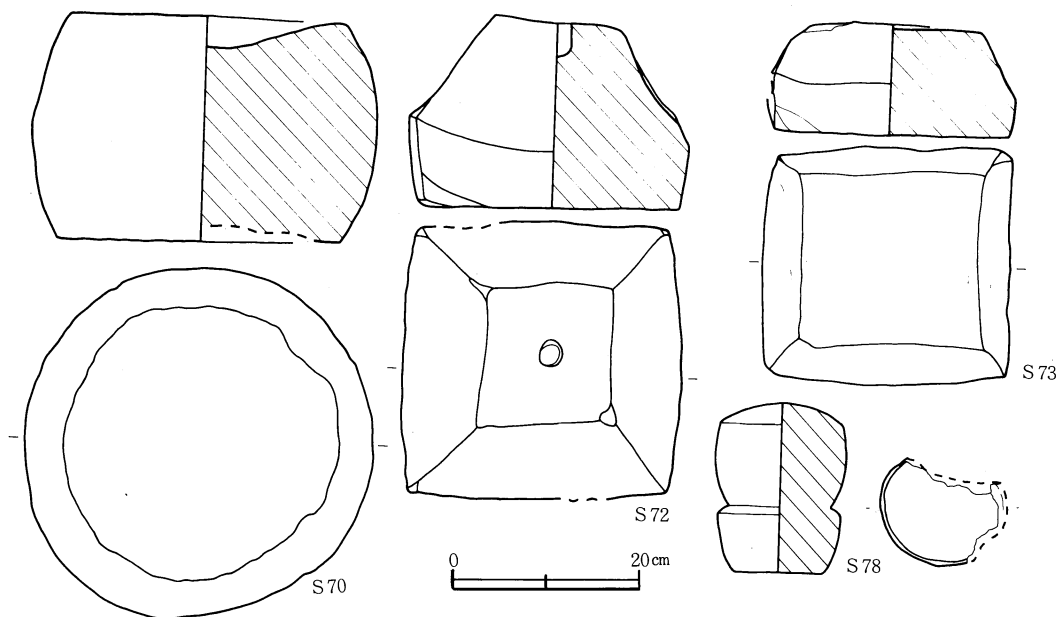
五輪塔石 (挿図436・437, 図版126・136・137)

長瀬高浜遺跡では五輪塔石の出土があるが、その多くは緊急調査地区^{#1}からのものである。しかし、54年度調査地区からも22点の五輪塔石の出土が確認されている。内訳は13G地区2点、12E地区5点、13E地区7点、11D地区3点、12・13D地区各1点、11C地区3点、12A地区1点である。そのうち13G・11C地区の五輪塔石は黒砂に半没した状態で出土している。また12E地区出土のS78は、火葬墓の中から出ており火を受けた痕が明瞭にみられる。S78は半分欠けており、完全な姿ではないが、S78の上面には炭や骨片などの層がみられることから偶然まぎれ込んだのではなく、人為的に置かれた可能性がある。五輪塔石は本来供養塔として、また時期が降ると墓塔として広まってゆくが、S78はこのような用途からは離れたものであろう。火葬墓から出土した五輪塔石は、S78以外みられないが、S34, 42, 81の五輪塔石は火葬墓の近く、あるいは上層面から出ている。

上記した五輪塔石のうちS78を除けば、いずれの五輪塔石も遺構にとまって出土しないのが特徴といえよう。時期は室町~安土桃山時代と考えられる。



挿図 436 五輪塔石その 1



挿図 437 五輪塔石その 2

石番号	塔形	最大幅 A (cm)	最大幅 B (cm)	最大高 C (cm)	断面最大幅 D (cm)	材 質	備 考
S24	水 輪	34.6	34.6		25.5	安山岩質凝灰岩	11D SWG
S27	〃	33.9	32.5		29.0	石英安山岩	12E SEG のみの跡が残る
S32	〃	31.0	30.8		24.1	凝灰岩質安山岩	※11DNWG
S34	〃	28.1	26.2	19.4	18.5	石英安山岩	13E NEG
S42	〃	21.6	21.7		15.2	安山岩質凝灰岩	13E SEG
S67	〃	35.9	35.4		26.5	?	13D NEG
S68	〃	27.8	27.0		21.5	石英安山岩	12E SWG
S70	〃	37.2	36.9		23.1	石英安山岩	13G NEG
S71	〃	32.5	31.1	18.3	18.1	石英安山岩	13G NEG
S72	火 輪	31.5	29.3		19.5	石英安山岩	11C SWG
S73	〃	26.5	25.4	11.7	10.2	?	11C SWG
S51	風空輪	19.1	19.0	23.0	23.1	安山岩質凝灰岩	11D SWG
S63	〃	15.0	14.3	16.2	16.4	石英安山岩	12A SEG
S74	〃	17.4	16.2	20.1	19.8	安山岩	11C SWG
S78	〃			17.8	17.8	凝灰岩	12E NEG S F54内出土

表 1 五輪塔石計測表

注 1 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』II鳥取県教育文化財団1981
 注 2 ※は県立博物館山名巖先生の助言を得た。

第三章 長瀬高浜遺跡出土の土師器編年について

鳥取県下での古式土師器は、県下三大河川である千代川・天神川・日野川流域の三地区でそれぞれの編年作業が行われている。長瀬高浜遺跡は位置的には天神川流域に入るため、ここでは従来の天神川流域の土師器編年を検討してみよう。

天神川流域での土師器を出す遺跡は非常に多いが、その中でも竪穴住居・土壇・古墳等で出土した古式土師器に制限してみれば、約30ヶ所くらいとなろう。その中でも大規模、かつ報告が出ているのは、服部^{註1}・中峯^{註2}・遠藤谷峯^{註3}・擲塚^{註4}・宮ノ下^{註5}・猫山^{註6}・平ル林^{註7}遺跡、曲148号墳^{註8}・佐美13号墳^{註9}と長瀬高浜遺跡程度である。この地域の古式土師器について論を起した最初は、服部遺跡を担当された置田雅昭氏である。宮ノ下遺跡では萩本勝氏が、猫山遺跡では真田広幸氏が、それぞれの出土土器の位置付けをされているが、通しての編年を完成したのは野島珠美氏^{註10}である。氏の編年案は、弥生時代後期後半から須恵器出現期までを5期に別けている。I期は服部遺跡4号竪穴住居、II期は擲塚遺跡1・2号貯蔵穴、III期は宮ノ下遺跡6号住居・曲148号墳1号土壇、IV期は宮ノ下遺跡方形周溝墓、V期は服部遺跡1号竪穴住居出土の土器をその代表的土器群としている。この編年案の問題点を2～3あげてみる。一点は平ル林遺跡出土のタタキ目をもつ土師器の取り扱いである。伴出した土器のすべてが公表されていないため判断の根拠を欠くが、平ル林遺跡C区の10号住居東側土壇出土のタタキ目をもつ甕と同伴の山陰型の甕からすれば、すでに布留式土器に併行する時期と考えられる。とすると、同じ平ル林遺跡C区土壇C出土のタタキ目を持つ甕も、一段階古いとしてもせいぜい氏のIII期を上るものでないと考えられる。とすると、氏のIII期とIV期の間には一時期存在すると考えられ、仮りにそれをIII'期とでもしておこう。もう一点はIV期とV期の連続性の問題である。IV期が古墳時代前期後半に位置付けられ、V期が古式須恵器併行期とすると須恵器出現以前の時期が欠落する。その間も仮りにIV'期とでもしておこう。これらの点を除けば、野島案は大きな流れとして肯首できるだろう。

ここでは、野島案に基いて長瀬高浜遺跡出土の土師器編年をしてみよう。野島案I期は遺構から出土していない。II期の擲塚遺跡1・2号貯蔵穴出土土器の時期も欠ける。III期の宮ノ下遺跡6号住居、曲148号墳第1土壇出土の土器は畿内での庄内式土器の新しい時期と考えられ、この時期も長瀬高浜遺跡では遺構がみられない。次の平ル林遺跡C区10号住居東側土壇出土の土器の時代、つまり野島案のIII期とIV期の間(仮III'期)が畿内布留式土器の最古の時期と考えられ、長瀬高浜遺跡69号竪穴住居を代表とする土器群として把握される。次に野島編年案IV期に対応するのが40号竪穴住居を代表とする土器群であろう。その次に51号竪穴住居を代表とする土器群があるが、これは須恵器を伴出する野島編年V期

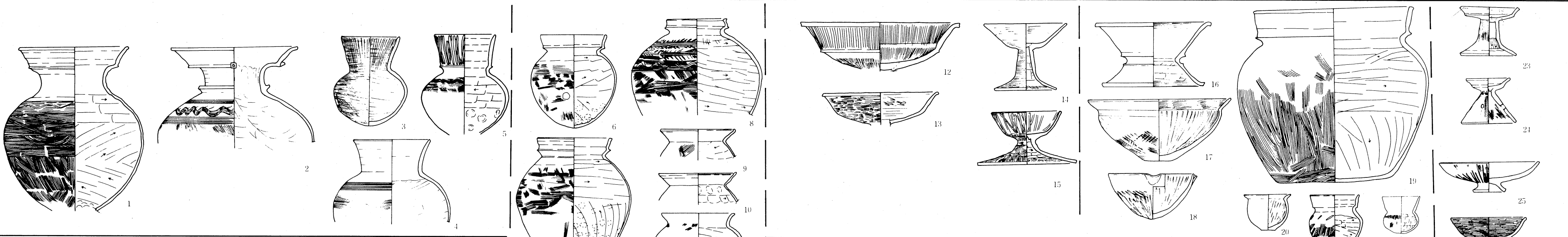
と比べると必ずしも連続せず、もう一時期間に土器型式が入ると思われる。この順番を仮りに長瀬高浜Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期と考えたい。この編年案は千代川^{#11}・日野川流域^{#12}の古式土師器編年と比較しても大差のない時間配分とみられる。これは第3表を参考にしてほしい。

各時期の特徴は、それぞれの編年案の特徴と大きな差はない。長瀬高浜Ⅰ期としたSⅠ69出土土器の一群は、壺・甕についてみればまだそれ以前の突出気味の丸底のプロポーションをとり、全体的な作りがシャープで、削り込まれているため器壁が薄い。高杯・器台でもシャープさはかわらず、器壁が薄いものが多い。しかし、この一つ前の時期が山陰の土師器としては最も完成したプロポーションをもつのに対し、この時期からは畿内の影響をうけながら土器群が変化しはじめ、すでに退化現象をはじめたことは否定できないところである。土器焼成・胎土からみれば畿内型の土器はやや軟質で赤色を帯びるに対し、山陰型は淡褐色で硬いというちがいがみられる。Ⅱ期に入ると壺・甕については器壁が肉厚気味で、全体のプロポーションは丸味をもち始める。特殊なものについての装飾はまだ残るが、全体的には装飾性を欠く。高杯・器台については鼓形器台の頸部長を最大限に小さくし、高杯類も暗文状のヘラミガキ等が少くなる。かわりに小型器台や高杯が増加し、小型丸底壺の増加とあわせて日常土器からみて生活様式が大きく変化してゆくさまが認められる。Ⅲ期は数量ともに少ないが、壺・甕類についてみれば全体的に器形が球形化してゆくさまが認められる。器台も鼓形器台の段がとれてしまい、また数もぐっと少くなるとともに、かわりに小型の椀類の前身ともみられる小型鉢形土器が出現する。個々の技法については、次回の報告にゆずりたい。最後にこれらの土器の時代は、古墳時代前期後半～中期初頭期とみられ、おおよその見当としてはⅠ期—4世紀後半、Ⅱ期—4世紀末、Ⅲ期—5世紀初頭と推定される。

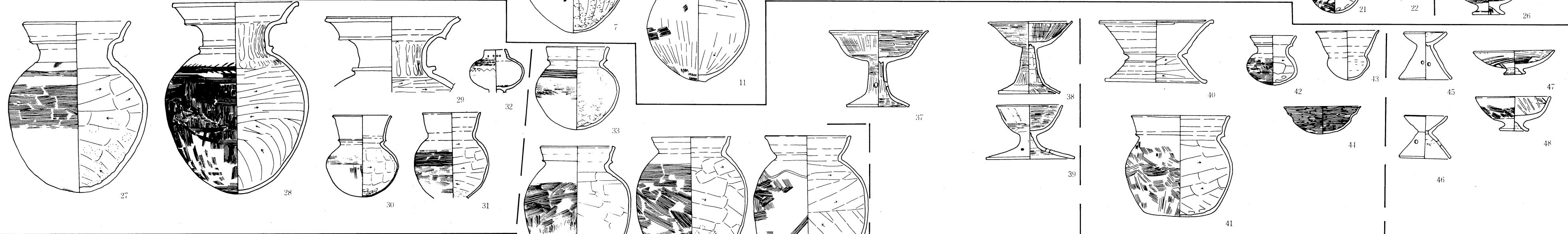
- 注1. 倉吉市教育委員会 『倉吉市服部遺跡発掘調査報告』 遺構編, 遺物編 1973~74
2. " 『中峯遺跡発掘調査概報』 1974
3. " 『倉吉市大谷字遠藤谷峯遺跡』 1971
4. " 『擲塚遺跡発掘調査報告』 1981
5. " 『宮ノ下遺跡発掘調査報告』 1976
6. " 『上神猫山遺跡発掘調査報告』 1979
7. 倉吉博物館 『発掘された古代の伯耆と因幡』 1981
8. 北条町教育委員会 『曲古墳群発掘調査報告書』 1981
9. 東郷町教育委員会 『佐美4号・13号発掘調査報告書』 1979
10. 野島珠美 「倉吉郷土文化研究会発表資料」 1981・4月発表
11. 平川 誠 「日本海文化を考える会発表資料」 1981・4月発表
12. 青木遺跡発掘調査団 『青木遺跡発掘調査報告書』 I・II・III 1976~78

長瀨高浜遺跡出土古式土師器編年表

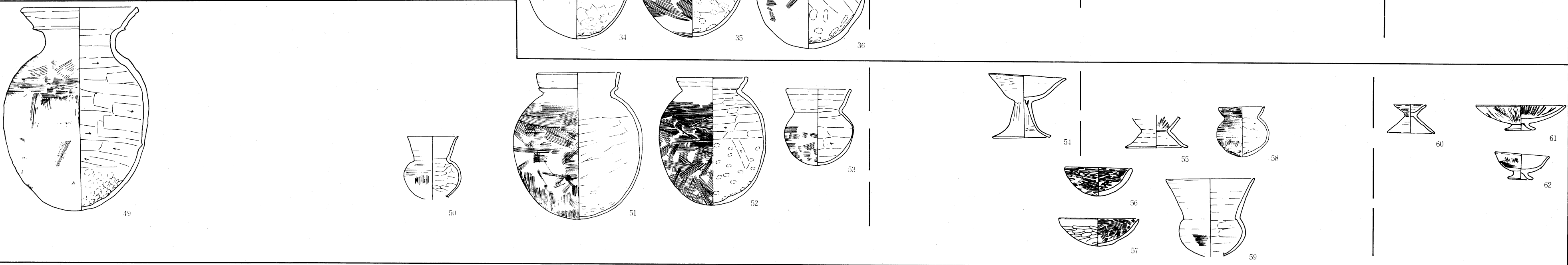
長瀨高浜Ⅰ期



長瀨高浜Ⅱ期



長瀨高浜Ⅲ期



畿内編年	野島案	千代川	日野川	長瀬高浜	出雲
唐古V様式	I 期		青木III期 古 III期 新		九重 的場
庄内式(古)	II 期		IV期		} 鍵尾
〃(新)	III 期	秋里 I	V・VI期		
布留式(初)	(III 期)	II	VII期 古	長瀬高浜 I 期	} 小谷(?)
〃	IV 期	II'	VII期 新	II期	
〃	(IV 期)	III	VIII期 古	III期	} 大東(?)
〃		III'	VIII期 新		
古式須恵期	V 期	IV	IX期		

表3 鳥取県古式土師器編年案表

1	S I 61, P o 1	17	S I 69, P o 146	33	S I 40, P o 7	49	S I 08, P o 1
2	S I 69, P o 5	18	〃, P o 145	34	S I 05, P o 23	50	S I 06, P o 2
3	〃, P o 15	19	S I 33, P o 18	35	S I 37, P o 6	51	S I 10, P o 5
4	〃, P o 14	20	S I 69, 出土	36	S I 70, P o 4	52	S I 51, P o 2
5	S I 66, P o 1	21	S I 33, P o 11	37	S I 37, P o 9	53	S I 10, P o 1
6	S I 61, P o 2	22	S I 43, P o 5	38	S I 05, P o 27	54	S I 08, 附近出土
7	S I 69, P o 16	23	S I 69, P o 123	39	S I 34, P o 14	55	S I 21, P o 27
8	〃, P o 83	24	〃, P o 125	40	S I 05, P o 36	56	S I 41, P o 15
9	〃, P o 89	25	〃, P o 122	41	S I 34, P o 12	57	S I 51, P o 6
10	〃, P o 88	26	〃, P o 119	42	S I 11, P o 4	58	S I 41, P o 3
11	〃, P o 87	27	S I 40, P o 1	43	S I 37, P o 1	59	S I 06, P o 1
12	〃, P o 94	28	S I 12, P o 1	44	S I 32, P o 19	60	S I 25, P o 40
13	〃, P o 93	29	S I 05, P o 2	45	S I 32, P o 15	61	S I 51, P o 5
14	〃, P o 96	30	S I 32, P o 2	46	S I 12, P o 19	62	S I 41, P o 12
15	S I 58, P o 9	31	S I 48, P o 2	47	S I 05, P o 31		
16	S I 69, P o 133	32	S I 42, P o 3	48	S I 37, P o 10		

表4 長瀬高浜遺跡出土古式土師器編年表使用土器出土遺構名

第IV章 ま と め

昭和54年度は夏の暑さが厳しい年で、からからに乾いた黒砂は剣先スコップでは歯が立たず、ツルハシを持ち出す始末であった。また工事の進行が急なため、3ヶ月区切りで終了地区を明け渡さざるを得ない事が続き、予定の1万平方メートルが終了した年度末には調査員・作業員ともに「我ながらよくやったなァ」と思ったことである。振り返ってみれば、昭和52年から続いているこの発掘調査の期間で、昭和54年度は一番厳しい年であったと同時に、調査の節目となる年でもあった。

砂丘の下から古墳が見つかった、大石棺があったといってさわがれた昭和53年ですら、まさかその下から古代の大村落があらわれるなどと夢にも思わなかった。だが実際には竪穴住居跡75棟、掘立柱建物跡10棟、井戸状遺構4棟などの建物遺構、古墳8基、石棺墓7基、木棺墓12基などの墳墓、明確化はできなかったが南側の厚い青色粘土層から推定される水田等の生産遺構が次から次へと出現し、一年間があつという間にすんでしまった感がする。

その間にも、遺跡の内では小・中学生の体験発掘を実施したり、種々の団体の見学があったり、春・夏・秋の現地説明会を開いたり、アサヒグラフの昭和54年度総まとめにカラー写真入りで掲載されたり、また地元の人々を対象とした勉強会を開催したり（現在も継続中）、月刊の「長瀬高浜だより」を発行してみたり、遺跡調査の取り組み方を模索した一年間でもあった。考古学界でも、砂丘下の遺跡が大規模なものであり、かつ重要なものであることを認識しはじめた年でもあったといえるだろう。石川県羽咋市・寺家遺跡、福井県敦賀市・松原館推定地等の調査が始まったのもこの前後であった。

長瀬高浜遺跡の昭和54年度の調査結果は、それまで空白地帯だった日本海沿岸部の砂丘地帯に、新たなスポットライトを浴びせる一契機となったことは明白である。しかし、その調査結果の内容については、いろいろな事情や制約があったにせよこのようなおそまつなものになってしまった。発掘した遺構の説明に終ってしまったが、この報告書を作る段階で考えたことは、今後の報告書の中で必ずや生かせるようがんばってゆきたいと思う。

本書をお読み下さった方々からの、御注文や御批判・御指導をいただくことを、わたしたちは切に要望しているところである。

長瀬高浜遺跡調査員一同

調 査 関 係 者 名 簿

財団法人鳥取県教育文化財団

常務理事 木村 耕造（昭和55年12月1日退職）

平木 安市

事務局長 古町 政春（昭和54年1月1日退職）

春田 明

中部埋蔵文化財調査事務所

所 長 米原 幸正

調 査 員 清水 真一・田中 精夫・影山 和雅・西村 彰滋・中村 徹

近藤 滋・門脇 豊文・笹尾 千恵子・津川 ひとみ・大賀 靖浩

（以上昭和54年度調査員）

西村 彰滋・大賀 靖浩・笹尾 千恵子・景山 俊邦・福嶋 慶純

高口 勝人・賀須井 智・野島 珠美・国田 修二郎・村川 裕紀

園 俊朗（昭和56年9月まで、西部埋文事務所へ転勤）

（以上昭和56年度調査員）

調査指導 国田 一夫（羽合町文化財保護委員長） 安達 幸範（中央公民館）

亀井 熙人・森田 純一・野田 久男・田中 秀明（県文化課）

協 力 鳥取県教育委員会・羽合町教育委員会・羽合町中央公民館・鳥取県土木
部下水道課・倉吉土木出張所下水道課・日本下水道事業団天神川出張所
熊谷組・大成建設・西松建設・浅野建設

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ
(本文編)

発行日 1981 (昭和56年) 12. 1
発行者 財団法人鳥取県教育文化財団
〒680 鳥取市扇町21
鳥取県社会教育福祉会館内
TEL (0857) 27-5252(代表)
印刷 勝美印刷株式会社鳥取支店
鳥取県東伯郡羽合町長瀬